レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

①

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

レーニン生誕100年記念

レーニン10巻選集

第 1 巻

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会 編

大月書店

はしがき

このヴェ・イ・レーニン10巻選集は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一九世紀の四〇年代、マルクスとエンゲルスによってつくりあげられた科学的社会主義の学説のもつ不滅の真理性と豊かな創造性は、一世紀余にわたる世界史の発展と国際労働者階級が示したすべての闘争によって、あますところなく実証されている。

レーニンは、マルクスとエンゲルスの学説を正しく継承し、一九世紀末から二〇世紀の初めにかけて、帝国主義とプロレタリア革命の時代の新しい歴史的条件のもとで、哲学、経済学、社会主義というマルクス主義の三つの構成部分全体にわたって、マルクス主義を創造的に発展させた。レーニンは、社会主義革命とプロレタリアートの執権（ディクタトゥーラ）の理論と戦術を仕上げ、労働者階級の前衛部隊としての党の建設、ブルジョア民主主義革命におけるプロレタリアートのヘゲモニーの思想、ブルジョア民主主義革命の社会主義革命への成長転化、労働者階級と農民の同盟、帝国主義の理論的分析、一国における社会主義革命の勝利の可能性、社会主義革命と民族解放運動の結合、社会主義建設の道と方法等々の問題について、マルクス主義を新しい段階に発展させた。

マルクスによって創始され、レーニンによって発展させられたマルクス・レーニン主義は、現代の国際プロレタリアートのまえに提起されたすべての根本問題について原則的な解答をあたえている。マルクス・レーニン主義は、今日、全世界のほとんどすべての国で労働者階級の前衛党の行動の指針となり、社会主義世界体制、資本主義諸国の革命運動、民族解放運動を三つの原動力とする現代の巨大な人民運動を指導する偉大な物質的力となっている。

日本の労働者階級と人民の闘争を勝利にみちびく最も重要な保障は、マルクス・レーニン主義の基本的諸命題を、

現代の複雑な諸条件や、わが国の特殊性に応じて具体的に適用し、発展させる創造性と、マルクス・レーニン主義の原則を厳密に擁護する原則性とを正しく統一することである。

この選集の発刊の目的、編集の基本的観点も、この要求にこたえることにある。

編集にあたっては、(1)レーニンの全労作をつらぬく思想と基本命題を全体として理解できるようにすること、(2)わが国の歴史的条件、特殊性を考慮し、日本の労働者階級と人民の実践的課題にこたえること、(3)今日、国際共産主義運動とマルクス・レーニン主義の直面している重要な試練を正しくのりこえ、マルクス・レーニン主義と国際共産主義運動の歴史的発展をかちとる課題にこたえることに主眼をおいた。これらの点は、この選集のすぐれた特徴となっていると確信している。

このような選集は、日本の民主運動や革命運動の発展に貢献し、わが国におけるマルクス・レーニン主義の発展を願う多くの人々から久しく求められていたものである。

この選集は、日本の独立、民主、平和、中立、生活向上をめざしてたたかっているすべての人々に、喜びむかえられるものと確信する。

この選集が、祖国を愛し、平和と民主主義を求めるすべての人々、さらに社会主義、共産主義日本の実現を願う人人にひろく読まれ、民主運動と革命運動の実践のなかで生きいきと活用されることを心から期待してやまない。

* * *

選集の刊行にあたって、より正確で、より立派な翻訳に仕上げるために努力してくださった方がた、発行、発売にあたって全面的な協力をいただいた大月書店の方がたにたいして、あらためて謝意を表するものである。

一九六九年一一月

日本共産党中央委員会
レーニン選集編集委員会

凡　例

一　本巻は、レーニン生誕百年記念出版として日本共産党中央委員会レーニン選集編集委員会の責任で編集し刊行するものである。

一　編集にあたっては、邦訳『レーニン全集』（第四版）および『レーニン選集』、国民文庫などの訳文を原則として使用し、全集第五版にもとづいて手をくわえた。

一　原文のゴシック体の箇所は訳文でもゴシック体にし、イタリック体の箇所には傍点を付し、イタリック体で隔字体の箇所には白丸を付した。ただし見出しのところなど、この方針によらなかった場合もある。

一　レーニンの原注は＊をもって示し、本文の段落末にかかげた。

一　事項注は、本文中の該当箇所に通し番号（一）（二）……をつけて巻末に一括してかかげた。この注は全集第四版および第五版の注を参考にして多少簡略にした。そのなかに出てくるレーニンの著作のページ数は邦訳『レーニン全集』のものであり、マルクス、エンゲルスの著作のページ数は邦訳『マルクス＝エンゲルス全集』、同『選集』（全八冊）のものである。また、訳文については、若干手をくわえた。なお簡単な注は〔　〕に入れて本文中に示した。

一　人名注は、全集第五版の注を参考にしてごく簡略にして作成し、アイウエオ順に配列して巻末に一括してかかげた。

一　人名、地名は現地読みに近く表記することを原則にしたが、慣用に従ったものもある。

目次

いわゆる市場問題について（一）

一

人民大衆が貧困であり、またますます貧困になっているのに、わがロシアで資本主義が発展すること、完全に発展することが可能だろうか？　資本主義の発展のためには広い国内市場が必要だが、農民の零落はこの市場を掘りくずしており、市場を完全に閉ざして、資本主義制度の組織化を不可能にする恐れがある。なるほど、人がいうように、資本主義は、わが国の直接的生産者の現物経済を商品経済に転化させ、まさにそのことによってみずからに市場をつくりだしはする。しかし、なかば乞食のような農民のもとに残っている現物経済のみすぼらしい遺物をなくしていったところで、西欧に見られるような強力な資本主義的生産がわが国で発展しうると考えることができるだろうか？　すでに大衆の貧困化という一事だけからしても、わが国の資本主義はなにか無力で基盤のないものであり、国の生産全体をとらえてわが国の社会経済の基礎となる能力がないことは、明らかではないだろうか？

これが、ロシアのマルクス主義者に反対するわが国の文献がたえずもちだしている疑問である。市場の欠如という考えは、マルクスの理論をロシアに適用することに反対する最も主要な論拠の一つである。「市場問題」という報告（二）は、なによりも、この論拠を反駁することにあてられているのだが、われわれはこの報告の検討をこれからしようとするのである。

二

報告者（三）にとって基本的前提となっているのは、「資本主義的生産の全般的で排他的な支配」という仮定である。この前提を出発点として、報告者は『資本論』第二巻（第三篇「社会的総資本の再生産と流通」）第二一章の内容を記述している。

マルクスがここで自分に課している課題は、社会的生産はどのようにして、生産物のうち、労働者と資本家の個人

的必要の充足に役だつ部分と、生産的資本の諸要素の形成に役だつ部分を補塡するか、ということを研究することである。だから、第一巻で、個別的資本の生産と再生産を研究するさいには、価値の点での資本と生産物との構成部分の分析に限定することができたとしても――《生産物の価値は、『資本論』第一巻で示されているように、c（不変資本）＋v（可変資本）＋m（剰余価値）から成っている》――ここではもはや、その物材的構成による生産物の区分を考慮に入れなければならない。なぜなら、生産物のうち資本の諸要素から成る部分は個人的消費に役だつことができないし、逆の場合は逆だからである。このためマルクスは全社会的生産を――したがってまた全社会的生産物を――次の二つの部門に分けている。（一）生産手段の生産、すなわち、生産的資本の諸要素――生産的消費にのみあてられうる諸商品――の生産、（二）消費手段の生産、すなわち、労働者階級と資本家階級の個人的消費にあてられる諸商品の生産。

研究の基礎として、次の図式がとられている《アラビア数字は価値の単位――たとえば百万ルーブリ――を意味し、ローマ数字は上記の社会的生産部門を意味する。剰余価値率は一〇〇%とされる》。

Ⅰ　4000c＋1000v＋1000m＝6000 ⎧資　本＝7500
Ⅱ　2000c＋500v＋500m＝3000 ⎩生産物＝9000

まずはじめに、単純再生産がおこなわれると仮定しよう。すなわち、生産は拡大されず、つねに従来の規模のままだと想定しよう。これは、全剰余価値が資本家によって不生産的に消費され、蓄積のためにではなく、個人的必要のために支出されることを意味する。この条件のもとでは、第一に、Ⅱ500vとⅡ500mは同じ第二部門の資本家と労働者によって消費されなければならないことは、明白である。なぜなら、この生産物は、個人的必要の充足に予定された消費手段の形で存在するからである。さらに、Ⅰ4000cは、その現物形態からして、同じ第一部門の資本家によって消費されなければならない。というのは、生産規模が不変だという条件は、次年度までに生産手段の生産のために同じだけの資本が保持されることを要求するからである。したがって、資本のこの部分の補塡もまたなんら困難を示さない。生産物のうち石炭、鉄、機械、等々の現物形態で存在する当該部分は、生産手段の生産に従事する資本家たちのあいだで交換され、彼らにとって従来どおり不変資本として役だつであろう。こうしてⅠ（v＋m）とⅡcとが残る。Ⅰ1000v＋Ⅰ1000mは生産手段の形態で存在する生産物であり、Ⅱ2000cは消費手段の形態で存在する生

産物である。第一部門の労働者と資本家は（単純再生産の条件、すなわち剰余価値が消費されるという条件のもとでは）、2000〈1000(v)+1000(m)〉だけの価値の消費手段を消費しなければならない。第二部門の資本家は、従来の規模で生産をつづける可能性をもつためには、自分たちの不変資本（2000IIc）を補塡するために2000の生産手段を入手しなければならない。このことから、Iv+ImとIIcが交換されなければならないことが明らかである。なぜなら、そうでなければ従来の規模での生産は不可能だからである。単純再生産の条件は、第一部門の可変資本と剰余価値の合計が第二部門の不変資本と等しいこと、すなわち$\mathrm{I}(v+m)=\mathrm{II}c$である。いいかえれば、この法則は次のように定式化することができる。一年間に（両部門で）新しく生産された全価値は、消費手段の形態で存在する生産物の総価値に等しくなければならない。すなわち、$\mathrm{I}(v+m)+\mathrm{II}(v+m)=\mathrm{II}(c+v+m)$である。

実際には、いうまでもなく、単純再生産はありえない。なぜなら、全社会の生産が毎年従来の規模のままであることはできないし、また蓄積は資本主義制度の法則であるからでもある。だから次に、拡大された規模での社会的生産あるいは蓄積がどのようにしておこなわれるかを、検討しよう。蓄積のさいには、剰余価値の一部分だけが資本家によって個人的必要のために消費され、他の部分は生産的に消費される、——すなわち、生産の拡大のための生産的資本の諸要素に変えられる。だから、蓄積のさいには$\mathrm{I}(v+m)$と$\mathrm{II}c$とのあいだのイコールは不可能である。第一部門の剰余価値（Im）の一部分が消費手段と交換されずに生産の拡大に役だつためには、$\mathrm{I}(v+m)$は$\mathrm{II}c$よりも大きくなければならない。こうして次のようになる。

A.　単純再生産の表式

$$\mathrm{I}\quad 4000c+1000v+1000m=6000$$
$$\mathrm{II}\quad 2000c+500v+500m=3000$$
$$\mathrm{I}(v+m)=\mathrm{II}c$$

B.　蓄積のための初年度の表式

$$\mathrm{I}\quad 4000c+1000v+1000m=6000$$
$$\mathrm{II}\quad 1500c+750v+750m=3000$$
$$\mathrm{I}(v+m)>\mathrm{II}c$$

さて、蓄積の条件のもとで社会的生産がどのように進行するかを見よう。

第1年度

$$\mathrm{I}\quad 4000c+1000v+1000m=6000$$
$$\mathrm{II}\quad 1500c+750v+750m=3000$$

資　本=7250
生産物=9000

Ⅰ(1000v＋500m）は（単純再生産の場合と同様に）Ⅱ1500と交換される。

Ⅰ500mは蓄積される。すなわち、生産の拡大にあてられ、資本に転化する。もし不変資本と可変資本とへの分割を従来どおりとすると、次のようになる。

Ⅰ500m＝400c＋100v

追加の不変資本（400c）は第一部門の生産物（その現物形態は生産手段である）そのもののうちにある。だが追加の可変資本（100v）は第二部門の資本家から入手しなければならない。したがって、第二部門の資本家もまた蓄積しなければならない。彼らは自分の剰余価値の一部分（Ⅱ100m）を生産手段（Ⅰ100v）と交換し、こうしてこれらの生産手段を追加の不変資本に転化させる。したがって、彼らの不変資本は1500cから1600cに増大する。これを運用するには追加の労働力——*50v*——が必要であるが、これもまた第二部門の資本家の剰余価値から得られる。

第一部門と第二部門の追加資本を原資本につけくわえると、生産物の配分は次のようになる。

Ⅰ　4400c＋1100v＋(500m)＝6000

Ⅱ　1600c＋ 800v＋(600m)＝3000

括弧に入れた剰余価値は資本家の消費フォンドを、すなわち、剰余価値のうち蓄積に向けられずに資本家の個人的必要にあてられる部分を、意味する。

もし生産が従来どおりに進行するとすれば、年度末には次のようになるであろう。

Ⅰ　4400c＋1100v＋1100m＝6600 ⎫資　本＝7900
Ⅱ　1600c＋ 800v＋ 800m＝3200 ⎭生産物＝9800

Ⅰ(1100v＋550m）はⅡ1650cと交換される。そのさい、追加の50cは800Ⅱmから得られる《なお、50だけのcの増加は、25だけのvの増加を引きおこす》。

つぎに、550Ⅰmは従来どおりに蓄積される。

550Ⅰm＝440c＋110v

165Ⅱm＝110c＋ 55v

さて、原資本に追加資本をつけくわえると《Ⅰ4400cに440cを、Ⅰ1100vに110vを、またⅡ1600cには50cと110cを、Ⅱ800vには25vと55vをつけくわえると》、次のようになる。

Ⅰ　4840c＋1210v＋(550m)＝6600

Ⅱ　1760c＋ 880v＋(560m)＝3200

生産のその後の運動においては、次のようになるであろう。

Ⅰ　4840c＋1210v＋1210m＝7260 ⎫資　本＝ 8690
Ⅱ　1760c＋ 880v＋ 880m＝3520 ⎭生産物＝10780

等々。

以上が、社会的総資本の再生産の問題にかんするマルクスの研究の成果——最も本質的な点での——である。この研究は（ことわっておかなければならないが）ここでは最も圧縮された形で伝えられているのであって、マルクスが詳細に分析した非常に多くのこと——たとえば、貨幣流通、しだいに消耗される固定資本の補填、等々——が、はぶかれている。なぜなら、すべてこれらのことは、いま考究している問題に直接の関係がないからである。

三

報告者はマルクスの以上の研究からいったいどのような結論をくだしているだろうか？　残念ながら、彼は自分の結論を十分に正確かつ明確には定式化していない。そのため、たがいに十分には調和しないいくつかの指摘から、われわれ自身で結論を引きださなければならない。たとえば、われわれは次のようなことを読むのである。

報告者は言っている。「われわれはここで、第一部門で、生産手段のための生産手段の生産において、どのように蓄積がおこなわれるかを見た。……この蓄積は、消費資料の生産の動きからも、また、それがだれの消費であろうと、個人的消費そのものからも、独立しておこなわれるのである」（一五枚目第三行）。

もちろん、蓄積が消費資料の生産から「独立」しているなどとは、すでに、生産の拡大のためには新しい可変資本、したがってまた消費資料が必要であるという理由からしても、言うことができない。著者は、おそらく、この表現によって、表式のなかの次の特殊事情、すなわち、Ⅰc——第一部門の不変資本——の再生産は第二部門との交換なしにおこなわれること、すなわち、社会では毎年たとえば石炭の一定部分は石炭そのものの採掘のために生産されるということを、強調したかっただけなのだろう。いうまでもなく、この生産（石炭採掘のための石炭の生産）は、それにつづく一定の交換によって、消費資料の生産と結びつくようになる。そうでないと、石炭業者も彼らの労働者も生存しえないであろう。

他の箇所では、報告者はもはやいちじるしく弱く表現している。彼は言う。「資本主義的蓄積の主要な動きは、（ごく初期のころを除けば）いかなる直接的生産者からも独立し、いかなる住民層の個人的消費からも独立して、おこなわれているし、またおこなわれてきた」（八枚目）。ここで指摘されているのはもはや、資本主義の歴史的発展において消費資料の生産にたいして生産手段の生産が優越するこ

どだけである。このような指摘はもう一度繰りかえされている。「もし資本主義社会にとって、一方では、蓄積のための蓄積が、個人的消費ではなく生産的消費が典型的であるとすれば、他方では、資本主義社会にとっては、生産手段のための生産手段の生産こそが典型的である」（二一枚目第二行）。もし著者がこういう指摘によって、資本主義社会は、機械と、それのために必要な諸対象（石炭、鉄、等々）との発展という点で、それに先行する他の経済諸組織と違う特徴をもつ、ということを言おうとしたのだとすれば、それは完全に正しい。技術の高さの点で、資本主義社会は他のすべての社会より上位にあり、そして技術の進歩はまさに、人間労働が機械の労働のまえにしだいにますます後景に退いていく、ということのうちにあらわされるのである。

　こういうわけだから、報告者の十分に明白でない言明の批判をするかわりに、直接マルクスにあたって、彼の理論から第二部門にたいする第一部門の「優越」という結論をくだすことができるかどうか、またこの優越をどのような意味に理解すべきかを、見るほうがいいであろう。

　さきにかかげたマルクスの表式からは、第二部門にたいする第一部門の優越という結論は、いささかもくだすことができない。そこでは、両部門は並行して発展している。だが、この表式はほかならぬ技術的進歩を考慮に入れていない。マルクスが『資本論』第一巻で証明したように、技術的進歩は、不変資本にたいする可変資本の比率（v/c）がしだいに減少することのうちに現われるのだが、表式のなかではこの比率は不変とされているのである。

　もし表式にこういう変化を取り入れると、消費資料と比較して生産手段の生産がより急速に成長することになるのは、すでに自明である。それにもかかわらず、第一に、一目瞭然とするために、そして第二には、この前提から生じかねないまちがった結論を未然にふせぐために、この計算をすることも余計なことではないだろうと、私には思われる。

《次にかかげる表では、蓄積率は不変とされる。すなわち、剰余価値の半分が蓄積され、半分が個人的に消費される。》

《次にかかげる表式をとばして、次のページ(注)にある、表式からの結論にすぐうつってもよい。(a)の字は、生産の拡大のためにあてられる追加資本、すなわち、剰余価値のうち蓄積される部分を意味する。》

第1年度

I　4000c＋1000v＋1000m＝6000　…v：(c＋v)＝20.0%

II　1500c＋750v＋750m＝3000　…〃　〃　〃　33.3%

Ⅰ(1000v＋500m)＝Ⅱ1500c

д. Ⅰ　500m＝450c＋50v…v：(c＋v)＝$\frac{1}{10}$

д. Ⅱ　60m＝50c＋10v…〃　〃　〃　$\frac{1}{6}$

Ⅰ　4450c＋1050v＋(500m)＝6000

Ⅱ　1550c＋760v＋(690m)＝3000

第2年度

Ⅰ　4450c＋1050v＋1050m＝6550…〃　〃　〃19.2%

Ⅱ　1550c＋760v＋760m＝3070…〃　〃　〃32.9%

Ⅰ(1050v＋525m)＝Ⅱ1575c

Ⅱ(1550c＋25m)

д. Ⅱ　28m＝25c＋3v…〃　〃　〃　約$\frac{1}{9}$

д. Ⅰ　525m＝500c＋25v…〃　〃　〃　約$\frac{1}{21}$

д. Ⅱ　28m＝25c＋3v…〃　〃　〃　約$\frac{1}{9}$

Ⅰ　4950c＋1075v＋(525m)＝6550

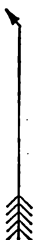
Ⅱ　1602c＋766v＋(702m)＝3070

第3年度

Ⅰ　4950c＋1075v＋1075m＝7100…〃　〃　〃17.8%

Ⅱ　1602c＋766v＋766m＝3134…〃　〃　〃32.3%

Ⅰ(1075v＋$537\frac{1}{2}$m)＝Ⅱ$1612\frac{1}{2}$c

Ⅱ(1602c＋$10\frac{1}{2}$m)

д. Ⅱ　$11\frac{1}{2}$m＝$10\frac{1}{2}$c＋1v…〃　〃　〃　約$\frac{1}{12}$

д. Ⅰ　$537\frac{1}{2}$m＝$517\frac{1}{2}$c＋20v…〃　〃　〃　約$\frac{1}{26}$

д. Ⅱ　22m＝20c＋2v…〃　〃　〃　$\frac{1}{11}$

Ⅰ　$5467\frac{1}{2}$c＋1095v＋($537\frac{1}{2}$m)＝7100

Ⅱ　$1634\frac{1}{2}$c＋769v＋($730\frac{1}{2}$m)＝3134

第4年度

Ⅰ　$5467\frac{1}{2}$c＋1095v＋1095m＝$7657\frac{1}{2}$…〃　〃　〃16.7%

Ⅱ　$1634\frac{1}{2}$c＋769v＋769m＝$3172\frac{1}{2}$…〃　〃　〃32.0%

等々。(16)

さて、社会的生産物の種々の部分の増大についてこの表式からひきだされる諸結論を対照してみよう。(17)

われわれはこのように、生産手段のための生産手段の生産が最も急速に増大し、消費手段のための生産手段の生産がそれにつづき、消費手段の生産が最も緩慢に増大するこ

	生産手段のための生産手段		消費手段のための生産手段		消費手段		社会的総生産物	
		%		%		%		%
第1年度	4,000	100	2,000	100	3,000	100	9,000	100
第2年度	4,450	111.25	2,100	105	3,070	102	9,620	107
第3年度	4,950	123.75	2,150	107.5	3,134	104	10,234	114
第4年度	5,467 1/2	136.7	2,190	109.5	3,172	106	10,828 1/2	120

とを見る。しかしこの結論は、『資本論』第二巻におけるマルクスの研究がなくても、不変資本は可変資本よりも急速に増大する傾向をもつという法則にもとづいて、到達することができるであろう。生産手段が最も急速に増大するという命題は、この法則を社会的総資本にあてはめて言いかえただけのものにすぎない。

しかし、あるいはもう一歩先にすすむべきではなかろうか？　もし $c+v$ にたいする v の比率がたえず減少するとみなすなら、なぜ v がゼロに等しくなるとみなしてはならないのか？　なぜ、より多量の生産手段のためにいままでと同数の労働者で十分だとみなしてはならないのか？　その場合には、剰余価値のうち蓄積される部分は第一部門の不変資本にそのまま付加されるであろう。そして社会的生産の成長はもっぱら生産手段のための生産手段の生産によって進行し、第二部門はまったく停滞するということになるであろう。*

* 私は、個々の場合としてならそのような現象が絶対にありえないと言うつもりはない。しかしここで問題にしているのは特殊事例ではなく、資本主義社会の一般的発展法則である。説明のために、問題はどうなのかを表式で示そう。

Ⅰ 4000c+1000v+1000m=6000
Ⅱ 1500c+ 750v+ 750m=3000
　Ⅰ (1000v+500m)=Ⅱ 1500c
　Ⅰ 500mが蓄積され、Ⅰ 4000cに付加される。
Ⅰ 4500c+1000v+(500m)=6000
Ⅱ 1500c+750v+750m=3000
Ⅰ 4500c+1000v+1000m=6500
Ⅱ 1500c+ 750v+ 750m=3000
　Ⅰ (1000v+500m)=Ⅱ 1500c
　Ⅰ 500mが従来どおり蓄積される、等々。

もちろん、これはもはや表式の濫用であろう。なぜなら、このような結論は、ありそうもない仮定にもとづいており、それゆえ正しくないからである。c にたいする v の比率を減少させる技術の進歩が第一部門だけで現われ、第二部門はまったく停滞したままだということが、考えられるだろうか？　第二部門では蓄積が全然おこなわれないというよ

うなことが、破滅の脅威のもとに各資本家に企業の拡張を要求する資本主義社会の諸法則と合致しうるだろうか？

そこで、さきに述べたマルクスの研究からくだすことのできる唯一の正しい結論は、資本主義社会では生産手段の生産は消費手段の生産よりも急速に増大する、ということであろう。すでに示したように、この結論は、資本主義的生産は以前の時代とくらべて測りしれないほど高度に発展した技術をつくりだすという、広く知られている命題の直接の帰結である。* マルクスは――この問題について特別には――ただ一ヵ所で完全な明確さをもって意見を述べているだけであるが、この箇所は、さきにおこなった定式化の正しさを完全に確証している。

* だから、右に述べた結論は、なおすこし別様に次のように定式化することができる。すなわち、資本主義社会では、生産の増大は（したがってまた「市場」の増大は）、消費資料の増加によっても、また――そしてこれが主たるものであるが――技術の進歩によっても、すなわち、機械労働による手労働の駆逐によっても――というのは、cにたいするvの比率の変化は、まさに手労働の役割の減少をあらわすものだからである――、進行しうるのである。

「〔……〕資本主義社会を未開人から区別するものは、シーニアの考えるように、収入すなわち消費手段に分解することのできる〔……〕ような成果をなにも自分にもたらさない労働をある時間支出することが、未開人の特権であり特性であるということではなくて、区別は次の点にある。

（a）資本主義社会は、その処分可能な年間労働のより多く《これに注意》を生産手段（つまり不変資本）の生産に使用するが、これは、賃金の形態でも剰余価値の形態でも収入に分解されえないのであって、資本としてのみ機能することができるものである」（『資本論』、第二巻、四三六ページ）。[8]

四

さて、それでは、右に述べた理論は「有名な市場問題」とどういう関係があるだろうか？　この理論は「資本主義的生産様式の全般的で排他的な支配」という仮定を出発点としており、そして「問題」はまさに、ロシアで資本主義の完全な発展が「可能かどうか」ということにある。たしかに、この理論は、資本主義の発展にかんするありきたりの考えに訂正をくわえてはいる。しかし、資本主義が一般にどのように発展するかということの説明が、ロシアにおける資本主義の発展の「可能性」（および必然性）という問題を、まだいささかも前進させるものではないことは、明白である。

しかし報告者は、資本主義的に組織されている社会的生産全体の進行にかんするマルクスの理論を叙述するだけにとどまっているわけではない。彼は、「資本の蓄積における二つの本質的に異なる契機」を区別する必要を指摘している。すなわち、「(一) 資本主義的生産の横への発展。この場合、それは、現物経済を駆逐しながら、すでに準備のできた労働分野をとらえ、現物経済の犠牲でひろがってゆく。(二) 資本主義的生産の、いってみれば、奥への発展。この場合には、その拡大は現物経済とはかかわりなく、すなわち、資本主義的生産様式の全般的で排他的な支配のもとで生じる。」だがさしあたりはこの区分の批判にかかわりあわないで、報告者が資本主義の横への発展ということでなにを考えているかを、まずさきに検討しよう。資本主義経済が現物経済にとって代わることのうちにあるこの過程の解明は、われわれに、ロシアの資本主義はどのようにして「国全体をとらえる」かということを、示すにちがいない。

A—資本家たち，W—直接的生産者たち．a，a_I，a_{II}—資本主義企業．
矢印は交換される商品の動きを示す．
c，v，m—商品価値の構成部分．
I.，II—商品の現物形態：I—生産手段；II—消費手段．

報告者は資本主義の横への発展を、上掲の図式で例解している。

報告者は次のように言っている。「AとWの両地域の本質的な相違は次の点にある。すなわち、Aには生産者——資本家——がいて、自分の剰余価値を生産的に消費するのにたいして、Wには直接的生産者がいて、自分の剰余価値(私はここでは、生産手段と必要な生活手段との価値を超える、生産物価値の剰余のことをいうのであるが）を不生産的に消費する。

図式によって矢印のあとを追うと、Aにおける資本主義的生産が、Wにおける消費を犠牲にして、それをしだいにとらえながら発展してゆくことが、容易にわかるであろう」。資本主義企業aの生産物は、消費資料の形態で「直接的生産者たち」に送られる。それとひきかえに「直接的生産者たち」は、生産手段の形態で不変資本（c）を、消費手段の形態で可変資本（v）を、また追加の生産的資本の諸要素の形態で、すなわちc_1+v_1として、剰余価値（m）

を送りかえす。この資本は、新しい資本主義企業a_1の創設に役だち、この企業はまったく同じように自分の生産物を消費資料の形態で「直接的生産者たち」に送る、等々。「資本主義の横への発展の前掲の図式から、次の結論が出てくる。すなわち、総生産は『外部の』市場における消費に、大衆の（しかも一般的見地からすれば、これらの大衆がどこにいようが――資本家の真近にいようが、海外のどこかにいようが、まったく同じことである）消費に、すなわち、緊密に依存している。Aにおける生産の拡大、すなわち、この方向での資本主義の発展が、Wにおけるすべての直接的生産者が商品生産者に変わってしまうやいなや終りを告げることは、明らかである。なぜなら、すでにさきに見たように、おのおのの新企業は（あるいは旧企業の拡張は）、Wの新しい消費者群をあてにしているからである。資本主義的蓄積にかんする、すなわち拡大された規模での資本主義的再生産にかんする通例の考え方は――報告者は最後にこう言っている――事物にたいするこのような見解にとどまっていて、直接的生産者のいるどんな国にも依存しない、すなわち、いわゆる外部の市場に依存しない、資本主義的生産の奥への発展については、思ってみないのである。」

右に述べられているすべてのことから同意できるただ一つのことは、資本主義の横への発展にかんするこの考え、およびそれを例解する図式が、この題目にたいする通例の、ナロードニキ[六]的見解とまったく完全に一致している、ということだけである。

実際に、通例の見解の不合理さと無内容さとを、前掲の図式でなされているよりももっとくっきりと、また明瞭に描きだすことは困難である。

「通例の考え」はいつも、わが国の資本主義を、なにか「人民的制度」から切りはなされたもの、その圏外にあるもののように見てきた。これは、図式で描写されているのとまさに同じである。図式のなかでは、資本主義的および人民的という二つの「地域」のつながりがどこにあるかは、まったく不明である。なぜ、Aから送られる商品がWで販路を見いだせるのか？　Wにおける現物経済の商品経済への転化はなにによって引きおこされるのか？　通例の見解は、交換をなにか偶然なものと見て、一定の経済制度とは見ないので、これらの問題にけっして解答をあたえなかったのである。

さらに、通例の見解は、わが国の資本主義がどこからどのようにして発生したかということの説明を、いまだかつてあたえたことがない。これは、図式がこのことを説明していないのとまさに同様である。あたかも資本家たちは、あの「直接的生産者たち」のあいだからやってきたのではは

なく、どこか外部からやってきたかのように、事態が描かれている。資本家たちが、企業a、a_1 等々にとって必要な「自由な労働者」をどこから手に入れるのかは、わからないままである。だれでも知っているように、実際にはこれらの労働者は、ほかならぬ「直接的生産者たち」から得られるのである。だが図式からは、「地域」Wをとらえる商品生産がそこに自由な労働者の一隊をつくりだしたことは、すこしもわからないのである。

ひとことでいえば、この図式は——まさに同様に通例の見解も——わが国の資本主義制度の諸現象をまさになにひとつ明らかにしないのであって、だからなんの役にも立たない。図式を作成した目的——それは、資本主義がどのようにして現物経済を犠牲にして発展し、国全体をとらえてゆくか、ということを説明することであるが——は、図式によってはまったく達成されていない。なぜなら、報告者自身さとっているように、「もしいま検討している見解を一貫して固執してゆくと、資本主義的生産様式の普遍的な発展にまで事態が到達することはけっしてありえない、と結論する必要があるからである」。

これでもなお著者が、部分的にではあれ、自身この見解に組して次のようにいっているのには、ただ驚くほかはない。「資本主義はその幼年期には、実際に（?）きわめて容易な（原文のまま!?）方法で発展した（きわめて容易なというのは、この場合準備のできた労働部門をつかんでゆくからである）。資本主義は、部分的には、地球上になお現物経済の残存物があり、また人口が増加しているかぎりで、今日でも（??）この方向で発展している」。

実際には、これは資本主義発展の「きわめて容易な」方法ではなく、まったくもって、過程の「最も容易な理解方法」であり、より正しくは完全な無理解とよんでいいほど「最も容易な」ものである。あらゆる色合いのロシアのナロードニキたちは、いまでもなおこの「最も容易な」やり方で満足していて、わが国の資本主義がどのようにして発生したか、それはどのように機能しているかを説明しようとは、けっして思いもしないのである。彼らは、わが国の制度の「患部」である資本主義を、その「健全な」部分——直接的生産者、「人民」——と対比するにとどまり、前者は左手に、後者は右手におかれる。そして全洞察は、「人間の共同生活」にとってなにが「有害」で、なにが「有益」かということについての感傷的な空文句で終わってしまうのである。

五

前掲の図式を改訂するためには、問題となっている諸概念の内容を明らかにすることから始めなければならない。商品生産とは、生産物が個々の孤立した生産者によって生産され、しかも各人はなんらかの一生産物の製造に専門化し、こうして、社会的必要を満たすためには市場での生産物の売買（このためそれらは商品となる）が必要であるというような、社会経済組織のことである。資本主義とは、もはや人間労働の生産物だけでなく、人間の労働力そのものまで商品となるような、商品生産のそういう発展段階のことである。このように、資本主義の歴史的発展においては、次の二つの契機が重要である。（一）直接的生産者の現物経済の商品経済への転化、（二）商品経済の資本主義経済への転化。第一の転化は、社会的分業——孤立した《これが商品経済の必須の条件であることに注意》個々の生産者が、一つの生産部門の仕事だけ専門化すること——の出現によって、おこなわれる。第二の転化は、個々の生産者が、おのおの単独に市場めあてに商品を生産しつつ、競争関係にはいることによっておこなわれる。各人はより高く売りより安く買おうとつとめる。その必然的な結果は、強者の強大化と弱者の没落、少数者の富裕化と多数者の零落であって、これが、自立した生産者の賃金労働者への転化と、多数の小経営の少数の大経営への転化とをもたらすのである。であるから、図式は、資本主義の発展におけるこれら二つの契機と、この発展が市場の大きさに、すなわち、商品に転化する生産物の量に生じさせる変化を示すように、作成されなければならない。

次にかかげる表式は、この計画に沿って作成されたものである。ただ資本主義発展の上記の諸契機だけがおよぼす市場への影響を分析するために、外的な事情はすべて捨象され、不変（たとえば、人口数、労働生産性、その他多くのことが）とされている。

さて、六人の生産者から成る共同体の経済制度における逐次的変化を示すこの表式を分析しよう。表式では、現物経済の資本主義経済への転化の諸段階をあらわす六つの時期があげられている。

第一期。六人の生産者がいて、どの生産者も自分の労働を三つの産業部門のすべてに（a、b、cに）支出している。得られた生産物（各生産者に6ずつ、$a+b+c=9$）は自分の経営のなかで自身のために消費される。だからここに得られるのは純粋な姿の現物経済である。生産物は市場にまったく出まわらない。

第二期。第一の生産者は自分の労働生産性を変化させる。彼はb産業を放棄して、以前この産業部門に用いられていた時間を、c産業に費やす。一生産者のこのような専門化

場	生産者	生	産			現物消費	市	場	
購買		産業部門			合計		販売	購買	
		a	*b*	*c*					
—	I	a	—	2c	9	6	3	3	*2.*
—	II	a	$\frac{6}{5}$b	$\frac{4}{5}$c	9	8$\frac{2}{5}$	$\frac{3}{5}$	$\frac{3}{5}$	
—	III	a	$\frac{6}{5}$b	$\frac{4}{5}$c	9	8$\frac{2}{5}$	$\frac{3}{5}$	$\frac{3}{5}$	
—	IV	a	$\frac{6}{5}$b	$\frac{4}{5}$c	9	8$\frac{2}{5}$	$\frac{3}{5}$	$\frac{3}{5}$	
—	V	a	$\frac{6}{5}$b	$\frac{4}{5}$c	9	8$\frac{2}{5}$	$\frac{3}{5}$	$\frac{3}{5}$	
—	VI	a	$\frac{6}{5}$b	$\frac{4}{5}$c	9	8$\frac{2}{5}$	$\frac{3}{5}$	$\frac{3}{5}$	
—	総計	6a	6b	6c	54	48	6	6	
3	I	a		6c	21	10	11	3 (+8労働力)	*4.*
3	II	a	—	—	3	3	(4労働力)	4	
3	III	a	—	—	3	3	(4労働力)	4	
3	IV	a	6b	—	21	10	11	3 (+8労働力)	
3	V	a	—	—	3	3	(4労働力)	4	
3	VI	a	—	—	3	3	(4労働力)	4	
18	総計	6a	6b	6c	54	32	22 (+16労働力)	22 (+16労働力)	
3 (+10労働力)	I	6a	—	—	18	6	12	6 (+6労働力)	*6.*
5	II		—	—	—	—	(6労働力)	6	
5	III	—	6b	—	18	6	12	6 (+6労働力)	
3 (+10労働力)	IV	—	—	—	—	—	(6労働力)	6	
5	V	—	—	6c	18	6	12	6 (+6労働力)	
5	VI	—	—	—	—	—	(6労働力)	6	
26 (+20労働力)	総計	6a	6b	6c	54	18	36 (+18労働力)	36 (+18労働力)	

表式の説明

Ⅰ－Ⅱ…－Ⅵ――生産者．

a，b，c――産業部門(たとえば，農業，採取産業，加工工業)．

$a=b=c=3$．生産物価値の大きさ$a=b=c$は3（3価値単位）に等しく，そのうち*1*は剰余価値にあたる*．

表中の「市場」は，販売（および購買）される生産物の価値の大きさを意味する．括弧に入れてあるのは，販売（および購買）される労働力の価値の大きさである．

ある生産者から他の生産者へはしっている矢印は，第一のものが第二のものの賃金労働者であることを意味する．

単純再生産が想定される．すなわち，剰余価値は全部資本家によって不生産的に消費される．

* 不変資本に転化する価値部分は不変とされ，それゆえ度外視される．

	生産者	生産				現物消費	市
		産業部門			合計		販売
		a	*b*	*c*			
1.	Ⅰ	a	b	c	9	9	—
	Ⅱ	a	b	c	9	9	—
	Ⅲ	a	b	c	9	9	—
	Ⅳ	a	b	c	9	9	—
	Ⅴ	a	b	c	9	9	—
	Ⅵ	a	b	c	9	9	—
	総計	6a	6b	6c	54	54	—
3.	Ⅰ	a	—	2c	9	6	3
	Ⅱ	a	2b	—	9	6	3
	Ⅲ	a	—	2c	9	6	3
	Ⅳ	a	2b	—	9	6	3
	Ⅴ	a	—	2c	9	6	3
	Ⅵ	a	2b	—	9	6	3
	総計	6a	6b	6c	54	36	18
5.	Ⅰ	2a	—	6c	24	11	13
	Ⅱ	½a	—	—	1½	1½	(5労働力)
	Ⅲ	½a	—	—	1½	1½	(5労働力)
	Ⅳ	2a	6b	—	24	11	13
	Ⅴ	½a	—	—	1½	1½	(5労働力)
	Ⅵ	½a	—	—	1½	1½	(5労働力)
	総計	6a	6b	6c	54	28	26 (＋20労働力)

のため、他の生産者は*c*の生産を削減する。なぜなら、第一の経営主によって自分自身の消費を超える余剰が生産されるからであり、そして他の人々は、第一の生産者のための生産物を生産するために、*b*の生産を強化する。出現した分業は不可避的に商品生産にみちびく。第一の生産者は1*c*を売り、1*b*を買う。他の生産者たちは1*b*（五人の各人は$\frac{1}{5}b$ずつ）を売り、1*c*（各人は$\frac{1}{5}c$ずつ）を買う。市場には6の価値の生産物量が出まわる。市場の大きさは社会的労働の専門化の程度に正確に照応する。専門化されたのは、一つの*c*（1c＝3）と一つの*b*（1b＝3）の生産、すなわち、全社会的生産《18c（＝a＝b）》の九分の一であり、市場に出まわったのは全社会的生産物の九分の一である。

第三期。分業はさらにすすみ、産業部門*b*と*c*を完全にとらえる。三人の生産者は*b*産業にだけ従事し、三人は*c*産業にだけ従事する。各人は1*c*（あるいは1*b*）を、すなわち3価値単位を売り、おなじく3価値単位——1*b*（あるいは1c）——を買う。分業のこのような変化は市場の成長をもたらし、市場にはいまではもはや18価値単位が出まわる。市場の大きさはまたもや、社会的労働の専門化（分割）の程度に正確に照応する。3*b*と3*c*の生産、すなわち社会的生産の三分の一が専門化され、市場には社会的生産物の三分の一が出まわる。

第四期はもはや資本主義的生産をあらわしている。ところで、商品生産者の資本主義的生産者への改造の過程は表式にはいらなかったので、別個に記述されなければならない。

まえの時期に、各生産者はすでに商品生産者になっていた（ただしいま問題にしている*b*と*c*の産業部門で）。各生産者は他の生産者とは独立に、別個に、単独で生産し、市場めあてに生産していたのだが、その市場の大きさは、もちろん、彼らのだれにもわからなかった。共通の市場めあてに働いている孤立した生産者たちのこの関係は、競争とよばれる。こういう条件のもとでは、生産と消費（供給と需要）との均衡が、一連の変動によってのみ達成されることは、自明である。より巧みで、企業心に富み、強力な生産者は、これらの変動の結果いっそう強大になり、弱くて不器用な生産者は前者によっておしつぶされてゆくであろう。少数の人々の富裕化と大衆の貧困化——これが競争の法則の避けられない帰結である。そして事態は、零落した生産者たちが経営の自立性を失って、自分の幸運な競争相手の拡大された経営に賃金労働者としてはいってゆくことによって、終結する。ほかならぬこの状態が、表式で描かれているのである。以前は全部で六人の生産者たちのあ

いだに配分されていた産業部門bとcが、いまでは二人の生産者（第一と第四）の手に集中されている。残りの生産者たちはこの二人のところで雇われて働き、受けとるものはもはや自分の労働の全生産物ではなく、経営主が自分のものとする剰余価値をさしひいたものである《仮定によれば、剰余価値は生産物の三分の一に等しいことを想起しよう。だから$2b$（=6）を生産したものは経営主からその三分の二――すなわち4を受けとるのである》。その結果、分業が強化され、市場が成長するようになる。この市場には、「大衆」が「貧困になった」にもかかわらず、もはや22が出まわる。（部分的に）賃金労働者になった生産者たちは、もはや9ずつの全生産物ではなく、7ずつしか受けとらない。そのうち3を各人は自立した経営（農業経営――産業a）から受けとり、4は賃労働から（$2b$あるいは$2c$の生産から）受けとる。自立した経営主であるよりは、もはやより多く賃金労働者であるこれらの生産者たちは、どんなものであれ自分の労働生産物を市場に持ちこむ可能性を失ってしまった。なぜなら、零落したため、彼らは生産物の製造に必要な生産手段を奪われたからである。彼らは「賃仕事」にたよらなければならなくなった。すなわち、自分の労働力を市場に持ちこみ、この新しい商品を売って得た貨幣で、自分にとって必要な生産物を買わなければならなくなったのである。

表式からわかるように、生産者IIとIII、VとVIは、それぞれ労働力を4価値単位だけ売り、同じ額の消費資料を買う。第一と第四の生産者――資本家――についていえば、彼らのおのおのは21だけの生産物を生産し、このなかから各人は自身で10《3（=a）+3（=cあるいはb）+4（2cあるいは2bからの剰余価値）》を消費し、11を販売する。同時に彼は3（cあるいはb）+8（労働力）だけの商品を購入する。

この場合、社会的労働の専門化の程度（$5b$と$5c$、すなわち30の額の生産が専門化されている）と、市場の大きさ（22）とのあいだに、絶対的な照応はないことに、注意する必要がある。だが表式のこの変則さは、単純再生産をとっているためである。* すなわち、ここでは蓄積が欠如しているのであって、そのため、労働者から取り上げられた剰余価値（各資本家によって4ずつ）は、全部現物で消費されることになっているのである。ところで、蓄積の欠如ということは資本主義社会ではありえないから、あとで適当な修正をほどこそう。

* これは第五期と第六期についても同様である。

第五期。商品生産者の分解は農耕産業（a）にもひろがった。賃金労働者は経営を続行できなくなり、主として他

人の産業施設で働くようになって、零落した。彼らのもとに残ったのは、農業経営の微々たる残存物だけとなった。これは以前の分量（これは、われわれの仮定によれば、家族の必要を満たすのにちょうどたりうるものであった）の二分の一であって、わが国の農民――「農耕者」の大多数のものの今日の作付が農業経営のあわれな残片にすぎないのとまったく同様である。産業aもまさに同様に、ごく少数の大経営に集中されはじめた。賃金労働者はいまではもはや自分の穀物でやってゆくことができないので、労働者が自立した農業経営をしていたために低かった賃金は、引き上げられ、労働者に穀物購入のための貨幣をあたえるようになる（もっともその穀物の量は、彼が自身経営主であったときに消費していたよりも少ないのだが）。いまや労働者は自身で$1\frac{1}{2}(=\frac{1}{2}a)$を生産し、1を購入し、こうして以前の3（=a）のかわりに全部で$2\frac{1}{2}$を手に入れる。経営主――自分の産業施設に拡大された農業経営を結合した資本家――は、いまや$2a$ずつ（=6）を生産するのであって、そのうちの2は賃金の形で労働者の手に渡るが、1（$\frac{1}{3}a$）――剰余価値――は彼らのものになる。この表式によって描かれている資本主義の発展は、「人民」の「貧困化」（労働者たちは、第四期には7ずつを消費していたが、いまではもはや全部でわずか$6\frac{1}{2}$ずつしか消費しない）と、市場の成長をともなっており、もはや26のものが市場に出まわってくる。大多数の生産者における「農業経営の衰退」は、農業生産物の市場の縮小ではなく、増大を引きおこしたのである。

第六期。職業の専門化の、すなわち社会的分業の完了。あらゆる産業部門が分離して、個々の生産者の専業となった。賃金労働者は自立した経営をすっかり失い、もはやもっぱら賃労働によって生活する。結果はまたもや同様である。すなわち、資本主義の発展《自分のための自立した経営は最終的に駆逐された》と、「大衆の貧困化」《賃金は増加したが、労働者たちの消費は$6\frac{1}{2}$から6に減少した。彼らは9（3a, 3b, 3c）ずつを生産し、その三分の一を剰余価値として経営主にあたえる》と、市場のいっそうの成長であって、市場にはいまやすでに社会的生産物の三分の二（36）が出まわるのである。

六

さて、前掲の表式から出てくる結論をくだそう。

第一の結論は、「市場」の概念は社会的分業――マルクスが言っているように、「あらゆる商品生産の《したがって――私としてつけくわえれば――また資本主義的生産

の》一般的基礎」であるもの——の概念と、まったく不可分である、ということにある。「市場」は、社会的分業と商品生産が出現するところで、またそのかぎりで、現われる。そして市場の大きさは社会的労働の専門化の程度と不可分に結びついている。

「商品[三]が一般的な社会的に認められた等価形態を受けとるのは貨幣形態においてにほかならず、しかもその貨幣は他人のポケットにある。それを引きだすためには、商品はなによりもまず貨幣所有者にとっての使用価値でなければならず、したがって商品に支出された労働は、社会的に有用な形態で支出されていなければならず、すなわち、社会的分業の一環として実証されなければならない。しかし分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その繊維は商品生産者たちの背後で織られたものであり、またたえず織られてゆくのである。ひょっとすると、商品は新たに生まれた欲望を満足させようとするか、またはある欲望をこれから独力で呼びおこそうとする、ある新しい労働様式の生産物であるかもしれない。昨日まではまだ同じ一人の商品生産者の多くの機能のうちの一機能だったある一つの特殊な作業が、あるいは今日はこの関連から切りはなされ、独立化して、まさにそのゆえにその部分生産物を独立の商品として市場に送ることになるかもしれない」(『資本論』、第一巻、八五ページ、傍点は私のもの)[四]。

このように、資本主義社会が存在するもとでは、市場の発展の限界は社会的労働の専門化の限界によってもうけられる。ところでこの専門化は、それ自身の本質そのものからして——技術の発展とまさに同様に——際限がない。たとえば生産物全体のなんらかの部分の製造に向けられる人間労働の生産性が向上するためには、この部分の生産が専門化し、大量生産物をとりあつかい、それゆえ機械その他の使用をゆるす(そして引きおこす)、特殊な生産とならなければならない。これが一面である。そして他面では、資本主義社会における技術の進歩は労働の社会化にあるが、この社会化は必然的に生産過程の種々の機能の専門化を要求し、また、それらの機能が、この生産に従事する各施設で別々に繰りかえされている、細分された、ばらばらなものから、社会化されて、一つの新しい施設に集中され、全社会の欲望の充足をあてにするものに、転化することを要求する。例をあげよう。

「近年北アメリカ合衆国では、木材加工工場はますます専門化している。『たとえば、もっぱら斧の柄、あるいは箒の柄、あるいは繰出しテーブルを製造するための工場が発生している……。機械製作業はたえまなく前進しており、生産のある側面を簡単化し低廉化する新しい機械がたえず

発明されている……。たとえば家具製造業の各部門は一つの専門となり、特別の機械と特別の労働者を要求している……。馬車製造業では、外輪は特殊の工場で生産され（ミズーリ、アーカンサス、テネシー）、車輪の輻はインディアナとオハイオで生産され、こしきはこれまたケンタッキーとイリノイの専門工場で生産されている。すべてこれらの個々の部分は、車輪全体の製作を専門とする特別の工場によって購入される。このように、なんらかの低廉な馬車を製造するのに、一〇もの工場が参加しているのである』」（トヴェルスコイ氏著『アメリカ滞在一〇年』。『ヴェーストニク・エヴロープイ（九）』、一八九三年第一号、ニコライーオン、九一ページ、注一から引用）。

社会的労働の専門化が引きおこす、資本主義社会における市場の成長は、すべての現物生産者が商品生産者に転化するやいなや終了するにちがいないという主張が、どれほどまちがっているかは、このことから明白である。ロシアの馬車生産は、すでにずっと以前に商品生産に転化したが、外輪はいまだにそれぞれの馬車（あるいは車輪）製作所で個別に生産されている。技術は低く、生産は多数の生産者たちのあいだに細分されている。技術の進歩は、生産の個個の部分の専門化を、その社会化を、したがってまた市場の拡張をともなわずにはおかないのである。

ここで一言ことわっておかなければならない。前述したいっさいのことは、資本主義的国民は外国市場なしには存在しえないという命題を、いささかも否定するものではない。資本主義的生産のもとでは、生産と消費との均衡は一連の動揺によってのみ達成される。そして生産が大規模になればなるほど、また生産が目あてにする消費者の層が広くなればなるほど、動揺はそれだけひどくなる。だから当然、ブルジョア的生産が高い発展程度に達したときには、それはもはや民族国家の枠内にとどまっていることは不可能である。競争は資本家たちに、もっと生産を拡大し、生産物の大量販売のための外国市場を見つけることを強制する。もちろん、資本主義的国民にとって外国市場が必要であることは、商品経済のもとでは市場は社会的分業のたんなる表現であり、したがって、それは分業と同様に際限なく成長することができるという法則を、すこしも侵害するものではない。それは、恐慌が価値法則をすこしも侵害するものでないのと同様である。市場についての心痛がロシアの文献ではじめて現われたのは、わが国の資本主義的生産がその一定の諸部門で（たとえば、綿工業）完全な発展をとげ、ほとんどすべての国内市場をとらえ、少数の巨大企業の手に集められたときのことである。市場にかんする空談義や市場の「諸問題」の物質的基礎は、ほかならぬわ

が国の資本主義的大規模産業の利益である。このことの最良の証拠として役だつのは、クスターリ[10]産業が一〇億ルーブリ以上の価額を生産しており、同じ貧困化した「人民」のために働いているとはいえ、わが国のクスターリ諸産業が「市場」の消滅の結果破滅することを、わが国の文献でだれひとり予言したものがない、という事実である。市場の不足によってわが国の産業が破滅するという泣き言は、わが国の資本家たちの見えすいた駆引にほかならない。彼らはこうして政治に圧力をかけ、(自分の「無力」を控えめに告白して)自分のポケットの利益を「国」の利益と同一視しており、また彼らは、このような「国家的」利益を守るために、政府を侵略的な植民政策に駆りたて、さらには政府を戦争にひきつれることができるまでになっている。市場にかんする泣き言——完全に強固になって、すでに思いあがったブルジョアジーのこの鰐の涙——を、わが国の資本主義の「無力」の証拠と思いまちがえるためには、まさに底なしのナロードニキ的空想主義とナロードニキ的おめでたさが必要である!

第二の結論は、「人民大衆の貧困化」(市場にかんするあらゆるナロードニキ的議論のこの必須成分)は、資本主義の発展を阻止するものでないばかりか、逆に、まさにその発展を表現するものであり、資本主義の条件であり、資本主義を強化するものである、ということである。資本主義にとっては「自由な労働者」が必要であるが、貧困化とは小生産者たちが賃金労働者に転化することにこそある。大衆のこの貧困化は少数の搾取者の富裕化をともない、小経営の衰退はより大きな経営の強大化と発展をともなう。両過程とも市場の成長を促進する。かつては自分の経営によって生活していた「貧困化した」農民は、いまや「賃仕事」によって、すなわち自分の労働力の販売によって生きてゆく。そして彼はいまや必要な消費資料を購入しなければならない(より少ない量で、より質の悪いものをであるが)。他方では、この農民がそれから解放された生産手段は、少数者の手に集中され、資本に転化し、そして生産された生産物はもはや市場にはいってゆくのである。農民改革以前の時代におけるわが国の農民の大量収奪が、国の総生産能力*の減少ではなく、その増大と国内市場の成長をともなったという現象は、このことによってはじめて説明される。大工場の生産が大きく増大したこと、クスターリ工業がいちじるしく普及したこと——そのどちらも、主として国内市場めあてに仕事をしているのだが——、また同様に国内市場で流通する穀物の量も増大したこと(国内の穀物商業の発展)、これらの事実はひろく知られるところである。

* このことは、農耕産業についてだけは議論の余地があるよ

うに見えるかもしれない。「穀物生産は絶対的に停滞している」――たとえばニコライ―オン氏はこう言っている。彼はこの結論を、たった八年間（一八七一―一八七八年）の資料にもとづいてあたえている。もっと長い期間にかんする資料を調べてみよう。もちろん、八年では短かすぎる。六〇年代の資料《『軍事統計集』、一八七一年》と、七〇年代の資料《ニコライ―オン氏の資料》と、八〇年代の資料《『ロシア情報集』》とをくらべてみよう。資料はヨーロッパ・ロシアの五〇県にかんするもので、ジャガイモをふくめ、全穀物を包含している。

年平均／年次	作付		収穫額		収穫率	人口（千人）	
	千チェトヴェルチ（種子を除く）						
1864—1866（3年）	71,696	100	151,840	100	3.12	61,421（1867年）	100
1871—1878（8年）	71,378	99.5	195,024	128.4	3.73	76,594（1876年）	124.7
1883—1887（5年）	80,293	111.9	254,914	167.8	4.17	85,395（1886年）	139.0

第三の結論――生産手段生産の意義にかんするもの――は、表式に修正をほどこすことを要求する。すでに注意しておいたように、この表式は、けっして資本主義発展の全過程を描きだそうというようなものではなく、ただ、現物経済に代わって商品経済が、商品経済に代わって資本主義経済が現われることが、市場にどう反映するかを描きだそうとするものにすぎない。だからあそこでは蓄積が捨象されていた。ところが実際には、資本主義社会は蓄積なしには存在しえない。なぜなら、競争は各資本家に、没落の脅威のもとに、生産を拡大することを強要するからである。このような生産拡大は表式のなかでも描きだされていた。たとえば、第一の生産者は、第三期と第四期のあいだに、自分の生産 c を三倍に、すなわち $2c$ から $6c$ に拡大した。以前には彼は経営内で一人で働いていたが、いまでは二人の賃金労働者を使っている。この生産拡大が蓄積なしには起こりえなかったことは、明らかである。数人の人が働く特別の仕事場を建て、より大規模な生産要具を入手し、原料をより大量に購入すること、その他多くのことが必要であった。同じことが、b の生産を拡大した第四の生産者にもあてはまる。個々の経営のこのような拡大、生産の集積は、必然的に、資本家のための生産手段、すなわち機械、鉄、石炭、等々の生産を引きおこさずには（あるいは、同じことだが、強化させずには）おかなかった。そして生産の集積は労働生産性を高め、手労働を機械労働によっておきかえ、ある数の労働者を放りだした。他方では、資本家が不変資本に変えるこれらの機械やその他の生産手段の生産も発展したが、この不変資本はいまや可変資本よりも急速に増大しはじめるのである。たとえば、第四期と第六期を比較すると、生産手段の生産が一倍半に増大したことが

わかるであろう（というのは、第一の場合には不変資本の増大を必要とする資本主義企業は二つであるが、のちの場合には三つだからである）。そしてこの増大を消費資料の生産の成長と比較すると、さきに述べたような、生産手段の生産の最も急速な増大が得られるであろう。

生産手段生産の最も急速な増大というこの法則の意味と意義全体は、機械労働による手労働の代置が——一般的には、機械制工業のもとでの技術の進歩が——、石炭と鉄、これら真の「生産手段のための生産手段」の採掘の面での強力な生産発展を要求する、ということにのみある。報告者がこの法則の意味を理解せず、過程を描いている表式の背後にある過程の現実の内容を見のがしたことは、次のような彼の言明から明白にわかる。「傍目から見れば、生産手段のための生産手段のこのような生産は、まったく不合理なものに見える。だが、貨幣のための貨幣のプリュシキン的な《原文のまま》収集も、同じく（?!）まったく不合理な過程だったのだ。どちらも、自分がなにをしているかがわからないのである。」ナロードニキはほかならぬこのこと——ロシアの資本主義の不合理さ——を証明するために、一生懸命になっている。ロシアの資本主義は人民を零落させるのであって、より高度の生産組織をあたえはしない、というのである。もちろん、これはおとぎ話である。機械労働による手労働の代置のなかには、なにも「不合理なこと」はない。それどころか、人間の技術の進歩的な働き全体は、このことにこそある。技術がより高度に発展すればするほど、人間の手労働はそれだけ駆逐され、ますます複雑になってゆく一連の機械によって代置される。国の総生産のなかで、機械と、その製作に必要な物資とが、ますます重要な地位を占めてくるのである。*

* だから、資本主義の発展を、横への発展と奥への発展とに区別することが正しくないということが、わかる。全発展は一様に分業によって進行するのであって、これらの契機のあいだには「本質的な」差異はない。実際には、それらのあいだにある相違は、技術発展の異なる段階に帰着する。資本主義的技術のより低い発展諸段階——単純協業とマニュファクチュア——は、まだ生産手段のための生産手段の生産を知らない。それは、より高い段階——機械制大工業——のもとではじめて生じ、巨大な発展をとげるのである。

これらの三つの結論を、なお二つの注釈で補足する必要がある。

第一に、上述のことは、マルクスが次のようなことばでかたっている、あの「資本主義的生産様式における諸矛盾」を、いささかも否定するものではない。「労働者は商品の買い手として市場にとって重要である。しかし、彼らの商品——労働力——の売り手としては、資本主義社会は、

その価格を最低限に制限する傾向がある」(『資本論』、第二巻、三〇三ページ、注三二)。さきにすでに指摘したように、資本主義社会では、社会的生産のうち消費資料を生産する部分も増大しないではすまされない。生産手段の生産の発展は、上記の矛盾を先へ押しやるだけであって、それを廃棄しはしない。それは、資本主義的生産様式そのものを除去することによってのみ、除去されうるのである。しかし、この矛盾をロシアにおける資本主義の完全な発展への障害と見ることが(ナロードニキはこのんでそう見ようとするのだが)、もはやまったくばかげていることは、いうまでもない。もっとも、このことはすでに表式によって十分に解明されている。

第二に、資本主義の成長と「市場」の成長との相互関係を論ずるにあたっては、資本主義の発展は住民全体と労働者プロレタリアートの欲望水準の上昇を不可避的にともなうという、疑いのない真理を見おとしてはならない。この上昇は一般に生産物の交換が頻繁になることによってつくりだされるのであるが、このことは都市と農村、相異なる地理的諸地方、等々の住民のあいだのより頻繁な接触をもたらす。労働プロレタリアートが結集し密集していること――これは彼らの自覚と人間としての自尊心を高め、資本主義制度の略奪的な傾向にたいする闘争で勝利する可能性を彼らにあたえるものであるが――も、同じことをもたらす。欲望の向上というこの法則は、ヨーロッパの歴史において完全な力をもって現われた。たとえば、一八世紀末と一九世紀末のフランスのプロレタリアを、あるいは一八四〇年代*と現代のイギリス労働者をくらべるといい。この同じ法則は、ロシアでもその作用をあらわしている。農民改革以後の時代の商品経済と資本主義との急速な発展は、「農民」の欲望水準の上昇をも引きおこした。農民は「より清潔に」(衣服、住居、その他の点で)暮らしはじめた。疑いもなく進歩的なこの現象は、他のなにものでもなく、ほかならぬロシア資本主義の功績にかぞえられるべきものである。このことは、次の周知の事実(わが国のクスターリ工業と農民経済一般の研究者のすべてによって指摘されているもの)によってだけでも、立証される。その事実とは、工業的諸地方の農民は、農業だけに従事していてほとんど資本主義にふれることのない農民よりも、はるかに「清潔に」暮らしているということである。もちろん、この現象は、「文明」の純粋に外面的な、虚飾的な側面の模倣のうちに、なによりも先に、またなによりも容易に、現われる。しかし、この現象を歎き悲しみ、この現象のうちに「衰退」以外のなにものも見ないでいられるのは、ヴェ・ヴェ氏のような隠れなき反動家だけである。

* フリードリヒ・エンゲルス『一八四四年におけるイギリスにおける労働者階級の状態』を参照。これは、最も恐るべき、また汚ない貧窮（文字どおりの）と、人間としての自尊心の完全な衰退の状態である。

七

「市場問題」とはそもそもなんであるかを理解するためには、第一の図式（A地域の資本家とW地域の直接的生産者とのあいだの交換にかんする）と第二の表式（六人の生産者の現物経済の資本主義経済への転化にかんする）とによって例示される過程についての、ナロードニキ的考えとマルクス主義的考えとを比較するのが最善である。

第一の図式をとってみよう。――われわれはなにひとつ説明できないであろう。資本主義はなぜ発展するのか？　それはどこからやってくるのか？　それはなにか「偶然なもの」である。それの発生は、「われわれがあの道をすすまなかった」……せいか、あるいは当局による「扶植」のせいにされてしまう。なぜ「大衆は貧困になるのか」？　このことにたいしても、図式はやはり解答をあたえない。そしてナロードニキは、解答のかわりに、「由緒ある制度」だとか、正しい道からの逸脱だとかいう感傷的な空文句や、かの有名な「社会学における主観的方法」があれほども創意工夫に富んで考えだす同種のくだらないことをならべて、言いのがれするのである。

資本主義を説明できず、現実の研究と解明よりも空想をえらぶため、資本主義の意義と力が否定されることになる。これでは、発展のための力をどこからも汲みとれない絶望状態の病人とまさに同じである。われわれはこの病人の容態に、些細な、ほとんど気づかれないほどの改善を、たとえば資本主義社会は「生産手段のための生産手段」の生産によって発展しうるという改善を、くわえてみよう。ところでそのためには資本主義の技術の発展*が必要である。だがほかならぬこの発展がないことを、「われわれは見る」のである。またそのためには、資本主義が全国をとらえることが必要であるが、「事態が、資本主義の普遍的な発展にまで行きつくことはけっしてありえない」ことを、われわれは見る、というわけである。

* これすなわち、小さな産業単位の大きな産業単位による交替、機械労働による手労働の駆逐である。

これに反して、もし第二の表式をとりあげると、資本主義の発展も、人民の貧困化も、われわれにはもはやなんら偶然なものとは見えない。これは、社会的分業に基礎をおく商品経済の成長の不可避的な同伴者である。市場の問題

は完全に除かれている。なぜなら市場は、この分業と商品生産の表現にほかならないからである。資本主義の発展は、もはや可能であるばかりでなく《うまくゆけば報告者*も立証できたはずのことなのだが》、不可避ですらある。なぜなら、もはや社会経済が分業と生産物の商品形態とに基礎をおいている以上、技術の進歩は資本主義の強化と深化にみちびかずにはおかないからである。

* すなわち、もし彼が生産手段の生産の意義を正しく評価し、正当に理解した場合は、である。

そこで問題が起こる。いったいなぜ第二の見解をこそ取りいれるべきなのか？　それの正しさの基準はどこにあるのか？

それは、現代のロシアの経済的現実の諸事実のうちにある。

第二の表式における重心は、商品経済から資本主義経済への移行、資本家とプロレタリアートへの商品生産者の分解にある。そしてもしわれわれがロシアの現代の社会経済の諸現象に目を向けると、主要な地位を占めているのが、ほかならぬわが国の小生産者たちの分解であることを見るのである。農耕農民をとってみよう。そうすると、一方では、農民が大量に土地を放棄し、経営上の自立性を失い、プロレタリアに転化しつつあるが、他方では、農民がたえず作付面積を拡張し、改善された耕作に移っていることがわかる。一方では、農民は農業用具（役畜と農機具）を失いつつあるが、他方では、農民は改良された用具を備えつけ、機械、等々を入手しはじめている《ヴェ・ヴェ『農民経営における進歩的傾向』を参照》。一方では、農民は土地を手放し、分与地を売却したり賃貸したりしているが、他方では、やはり農民が分与地を賃借し、むさぼって私有地を買いこんでいる。すべてこれらのことは、よほど以前から確認されていた周知の事実*であって、それらの事実にたいする唯一の説明は、わが国の「共同体的」農民をもブルジョアジーとプロレタリアートに分解させている商品経済の諸法則のうちにあるのである。クスターリをとってみよう。そうすると、農民改革後の時代には新しい営業が発生して、旧来のものよりも急速に発展したことがわかる《この現象は、いま述べたばかりの農耕農民の分解の結果であり、また社会的分業の進展の結果である**》。いや、そればかりでなく、クスターリの大衆はますます貧しくなり、窮乏におちいり、経営上の自立性を失っていった反面、他方では、わずかな少数者がこの大衆の犠牲で富裕になり、巨額の資本をたくわえ、買占人に転化していった。そしてこの買占人は販路をその手に集め、とどのつまり、わが国のクスターリ工業の大多数のなかに、もはや完全に資本主

義的な、大規模生産の家内制度を組織したのである。

＊　農民自身はきわめて適切にも、この過程を「非農民化」と名づけた。《『一八九二年度ニジェゴロド県農業概観』、ニージニー・ノヴゴロド、一八九三年、第三分冊、一八六―一八七ページを参照。》

＊＊　この現象を無視するところに、ニコライ―オン氏の最大の理論的誤りの一つがある。

わが国の小生産者のあいだにこの二つの正反対の流れが現存することは、資本主義と大衆の貧困化とがたがいに排除しあうものではないばかりか、逆に、たがいに制約しあうものであることを、明瞭に示しているし、また、資本主義がすでに現在ロシアの経済生活の基本的な背景になっていることを、反論の余地なく立証している。

「市場問題」の解決は農民層の分解という事実のうちにこそある、といっても逆説とならないのは、まさにこのためである。

また、すでにかの有名な「市場問題」という（通例の）問題提起そのもののうちに一連の不合理がひそんでいることを、指摘しないわけにはいかない。普通の定式化（第一節を参照）がすでに、どう見てもありそうもない仮定のうえに直接に構築されている。――社会の経済制度はあたかも人々のなんらかの集団――「インテリゲンツィア」とか「政府」とか――の意思によって、創設されたり廃棄されたりしうるかのように考えられている（というのは、そうでなければ、資本主義は発展し「うる」か？とか、ロシアは資本主義をとおっていか「なければならない」か？とか、共同体を保存「すべき」か？とかいうふうに、問題を出すことはできないだろうから）。また、あたかも資本主義は人民の貧困化とは切りはなされ、それとはかかわりないものであり、資本主義発展のなにか特別の条件であるかのように、考えられている。

これらの不合理を正さなくては、問題を解くことはできない。

じっさい、「大衆が貧困であり、またますます貧困になっているのに、ロシアで資本主義が発展することが可能だろうか？」という質問にたいして、だれかが、「しかり、可能である、なぜなら、資本主義は消費資料の生産にたよってではなく、生産手段の生産にたよって発展するであろうから」と答えた、としてみよう。この答えの基礎には、資本主義的国民の総生産の成長は主として生産手段にたよって（すなわち、消費資料よりも生産手段にたよって）すすむという、完全に正しい考えがあることは、明らかである。しかし、小前提が正しくても大前提が背理であれば三

ゼンスク郡			カムイシン郡				
作付面積（デシャチーナ）	%	一戸あたり作付面積（デシャチーナ）	戸数	%	作付面積（デシャチーナ）	%	一戸あたり作付面積（デシャチーナ）
36,007	8	3.4 } 7.75	9,313	54	29,194	20	3.1 } 5.7
128,986	29	12	4,980	29	52,735	35	10.6
284,069	63	40.5	2,881	17	67,844	45	23.5
449,062	100	15.9	17,174	100	149,773.25	100	8.7

段論法から正しい結論が得られないように、このような答えが問題の解決をいささかも前進させないことは、なおいっそう明らかである。質問がまさに、資本主義の発展の可能性と、大規模な生産形態による小規模な生産形態の代置の可能性の否定のうえにうちたてられているのに、この答えは（もう一度くりかえすが）すでに、資本主義が発展し、全土をおおい、より高度の技術段階（機械制大工業）に移行していることを、前提しているのである。

「市場問題」は、「可能である」とか「すべきである」とかいう不毛な思弁の分野から、現実の基盤に、すなわち、ロシアの経済制度はどのように組みたてられているか、それはなぜまさにそのように組みたてられており、別様にはならなかったのか、ということの研究と説明の基盤に、うつすことが必要である。

私は、いったいどんな種類の資料がさきにあたえた叙述の基礎に横たわっているかを具体的に示すために、手もとにある材料のうちからあれこれの例を引くにとどめよう。

小生産者たちが分解していること、および彼らのあいだで貧困化の過程ばかりでなく（比較的に）大規模なブルジョア的経営の創成の過程が現存することを示すために、ヨーロッパ・ロシアの、それぞれ異なる県に属する三つの純粋に農業的な郡、すなわち、タヴリーダ県ドネープル郡、

資産状態による農民のグループ別	ドネープル郡					ノヴォウ	
	戸数	%	作付面積（デシャチーナ）	%	一戸あたり作付面積（デシャチーナ）	戸数	%
貧農グループ	7,880	40	38,439	11	4.8 } 10.9	10,504	37
中農グループ	8,234	42	137,344	43	16.6 }	10,757	38
富農グループ	3,643	18	150,614	46	41.3	7,014.24	25
総計	19,757	100	326,397	100	17.8	28,276	100

サマラ県ノヴォウゼンスク郡、サラトフ県カムィシン郡にかんする資料をあげよう。資料はゼムストヴォ統計集から(三)とった。えらばれた郡が典型的でないという指摘もありうるだろうから（農奴制度をほとんど知らず、改革後の「自由な」制度のもとですでにいちじるしく入植がおこなわれたわが国の辺境地方では、分解は実際に中央におけるよりももっと急速にすすんだ）、それに先んじて次のことを言っておこう。

（一）タヴリーダ県の本土側の三郡のなかからドネープル郡をえらんだのは、この郡が全面的にロシア的であり、《入植者戸数は〇・六％》、共同体農民が居住しているからである。

（二）ノヴォウゼンスク郡については、ロシア人の（共同体）住民だけにかんする資料をとってある《『ノヴォウゼンスク郡統計情報集』、四三二—四三九ページを参照。*a* 欄》。そのさい、いわゆる「フートル農民」(三)は、すなわち、共同体農民のうち共同体から去って購入地あるいは賃借地に分かれて住みついたものは、ふくまれていない。農場経営のこれらの直接の代表者たちを算入すると、*分解はいちじるしく強まることになろう。

* 実際に、二、二九四人のフートル農民のもとに一二三、二五(三)二デシャチーナ（すなわち、一経営主あたり平均五三デシャ

チーナずつ）の作付地がある。彼らは二、六六二人の男子賃金労働者（と二三四人の婦人労働者）を雇っている。彼らのもつ馬と牡牛は四〇、〇〇〇頭以上である。改良された用具も非常に多い。『ノヴォウゼンスク郡統計情報集』、四五三ページを参照。

（三） カムィシン郡については、大ロシア人の（共同体）住民だけにかんする資料をとってある。

〔三六―三七ページの表を参照〕

統計集では、分類は、ドネープル郡については一農家あたりの作付面積の大きさによって、他の郡では役畜の数によって、なされている。

貧農グループに入れたのは、ドネープル郡では、作付をしないか一戸あたり一〇デシャチーナ未満を作付する農家、ノヴォウゼンスク郡とカムィシン郡では、役畜をもたないか役畜一頭をもつ農家である。中農グループに入れたのは、ドネープル郡では、一戸あたり一〇―二五デシャチーナを作付する農家、ノヴォウゼンスク郡では役畜二―四頭をもつ農家、カムィシン郡では役畜二―三頭をもつ農家である。また富農グループには、二五デシャチーナ以上を作付する農家（ドネープル郡）、あるいは一戸あたり五頭以上（ノヴォウゼンスク郡）および四頭以上（カムィシン郡）の役畜をもつ農家を入れてある。

これらの資料からはっきりわかるとおり、わが国の農耕的で共同体的な農民層のなかですすんでいるのは、貧困化と零落一般の過程ではなく、ブルジョアジーとプロレタリアートへの分解の過程である。大量の農民（貧農グループ）――平均すれば農民の約二分の一――が経営上の自立性を失いつつある。このグループの手にあるのは、もはやその地方の農民の農業経営全体のわずかばかりの部分――作付面積のほぼ一三％（平均して）――にすぎない。一戸あたりの作付面積は三―四デシャチーナである。このような作付がなにを意味するかを判断するために、タヴリーダ県では、いわゆる「賃仕事」にたよらずにもっぱら自立した農業経営として存在するためには、農家にとって一七―一八デシャチーナが必要である、*ということを述べておこう。最低のグループの人々が、もはや自分の経営によってではなく、それよりもはるかに多く賃仕事によって、すなわち自分の労働力の販売によって生活していることは、明白である。そしてもしわれわれが、このグループの農民の状態を特徴づけるもっと詳細な資料に目を向けるならば、このグループこそ、経営を放棄し、分与地を賃貸し、労働用具を失い、賃仕事に去ってゆく人々の最大の補給源であることを見るであろう。このグループの農民はわが国の農業プロレタリアートに属する人々である。

＊　サマラ県とサラトフ県では、この地方の住民の富裕度が低いことを考慮すれば、この基準は約三分の二であろう。

しかし他方では、同じ共同体農民のなかから、正反対の性格をもつまったく別のグループが分離しつつある。上級グループの農民は、下級グループの作付の七倍から一〇倍の大きさの作付をもっている。もしこういう作付（一戸あたり二三—四〇デシャチーナ）を、それだけあれば家族が自分の農業経営だけで不自由なく暮らしてゆける「標準的な」作付面積と比較すると、前者は後者の二—三倍の大きさであることがわかる。この農民層がもはや収入を得るため、穀物をあきなうために農耕に従事するものであることは、明白である。彼らはかなりの貯蓄をもち、それを経営の改善と文化の向上のために使用し、たとえば農業機械や改良農具を備えつけている。たとえば、ノヴォウゼンスク郡では一般に世帯主の一四％が改良された農機具をもっているが、上級グループの農民にあっては、世帯主の四二％が改良農具をもっており（こうして上級グループの農民には、改良された農機具をもつ農家の全県戸数の七五％が帰属している）、彼らの手中には、「農民」のもっているあらゆる改良農具の八二％が集中されている。＊上級グループの農民は、自分自身の労働力ではもはや自分の作付をやってゆくことができず、そのため賃金労働者にたよっている。たとえば、ノヴォウゼンスク郡では上級グループの世帯主の三五％が常雇いの賃金労働者をかかえている（たとえば刈入れ、その他のために雇われるものを入れないで）。ドネープル郡でも同様である。ひとことでいえば、上級グループの農民は、もはや疑いもなくブルジョアジーである。彼らの力の基礎はもはや、他の生産者たちを略奪することにはなく、独立の生産組織にある。＊＊農民層のわずか五分の一を構成するこのグループの手に、作付面積の二分の一以上が集中されている《私がとっているのは、三県全体にかんする一般的な平均値である》。これらの農民のもとでは、土地をほじくっている下級グループのプロレタリアにおけるよりも労働生産性（すなわち収穫）が高いことを考慮に入れると、穀物生産の主動力をなすのは農村ブルジョアジーである、という結論をくださないわけにはいかない。

＊　郡全体では、農民は五、七二四の改良農具をもっている。

＊＊もちろん、やはり略奪を基礎としてはいるが、それはもはや自立した生産者のではなく、労働者の略奪である。

では、ブルジョアジーとプロレタリアートへの農民層の分解《ナロードニキはこの過程のうちに、「大衆の貧困化」以外にはなにも見ないのだが》は、「市場」の大きさに、すなわち、穀物のうち商品に転化する部分の大きさに、どのような影響をおよぼさずにはおかなかっただろうか？

この部分がいちじるしく増大せずにおかなかったことは、明らかである。なぜなら、上級グループの農民の手にある大量の穀物は、彼ら自身の必要をはるかに超えていて、市場に出ていったし、他方では、下級グループの人々は、彼らが賃仕事で受けとった貨幣で穀物を購入しなければならなかったからである。

この問題で正確な資料をあげるためには、もはやゼムストヴォ統計集ではなく、ヴェ・イェ・ポストニコフの著述『南ロシアの農民経済』にたよらなければならない。ポストニコフは、ゼムストヴォ統計資料によって、タヴリーダ県の本土側の三つの県（ベルヂャンスク、メリトーポリ、ドネープル）の農民経済のことを記述し、この経済を農民の種々のグループ別に分析している《農民は、作付面積の大きさによって次の六つの部類に分けられている。(1) 作付しないもの、(2) 作付面積五デシャチーナ未満のもの、(3) 五—一〇デシャチーナのもの、(4) 一〇—二五デシャチーナのもの、(5) 二五—五〇デシャチーナのもの、(6) 五〇デシャチーナ以上のもの》。著者は、各種グループの市場にたいする関係を研究して、各農業経営の作付地を次の四つの部分に分けている。(一) 経営用地——作付地のうち、作付のために必要な種子をあたえる部分を、ポストニコフはこう名づけている、(二) 食糧用地——働き手とその家族の生活維持のための穀物をあたえる、(三) 飼料用地——役畜に飼料をあたえる、そして最後に、(四) 商業用地あるいは市場用地は、商品に転化して市場で売却される生産物をあたえる。もちろん、最後の用地だけが貨幣収入をあたえるのであって、残りの用地は現物収入を、すなわち、経営そのものの内部で消費される生産物をあたえるのである。

農民のさまざまな作付面積別グループにおけるこれらの用地のおのおのの大きさの計算をして、ポストニコフは次の表をあたえている。〔四一ページの表を参照〕

この資料からわかるとおり、経営が大きくなればなるほど、それはより多く商品生産的性格をおび、穀物のより多くの部分を販売のために生産している《各グループ別に、一二—三六—五二—六一％》。最大の作付をしている二つの上級グループの農民（彼らのもとには全作付地の二分の一以上がある）は、自分たちの農耕生産物の半分以上《五二％と七一％》を売却している。

もしブルジョアジーとプロレタリアートへの農民層の分解がないなら、いいかえれば、もし作付地がすべての「農民」のあいだに「均等に」配分されているなら、すべての農民が中位のグループ（作付面積一〇—二五デシャチーナのもの）に属することになり、市場に出まわるのは穀物全

作付面積別	作付面積100デシャチーナにつき				貨幣収入（ルーブリ）		タヴリーダ県の三郡で		各グループにおける平均作付面積（デシャチーナ）
	経営用地	食糧用地	飼料用地	商業用地	作付地一デシャチーナあたり	一戸あたり	作付面積（デシャチーナ）	用地（デシャチーナ）そのうち、商業	
5デシャチーナ未満	6	90.7	42.3	−39	—	—	34,070	—	3.5
5デシャチーナ以上 10デシャチーナ未満	6	44.7	37.5	+11.8	3.77	30	140,426	16,851	8
15デシャチーナ以上 20デシャチーナ未満	6	27.5	30	36.5	11.68	191	540,093	194,433	16.4
25デシャチーナ以上 50デシャチーナ未満	6	17.0	25	52	16.64	574	494,095	256,929	34.5
50デシャチーナ以上	6	12.0	21	61	19.52	1,500	230,583	140,656	75
合計あるいは平均	6			42			1,439,267	608,869	17—18

表への注

1) ポストニコフは終りから二番めの欄をあたえていない．その欄は私の計算による．

2) ポストニコフは，全商業用地に小麦が作付されると仮定し，穀物の平均収穫率と平均価格を算出して，貨幣収入の大きさを算定している．

体の三六%、すなわち五一八、一三六デシャチーナの作付地（1,439,267の36%=518,136）の生産物にすぎないことになるであろう。ところが表からわかるように、市場にはいるのは穀物全体の四二%、六〇八、八六九デシャチーナの作付地の生産物である。このように、「大衆の貧困化」、四〇%の農民（貧農グループ、すなわち、作付面積一〇デシャチーナ未満のもの）の経営の完全な衰微、農業プロレタリアートの形成は、九万デシャチーナ*の作付地の生産物が市場に投げいれられるという事態にみちびいたのである。

＊ 90,733デシャチーナ＝全作付面積の6.3%.

私は、農民層の分解の結果としての「市場」の増大がこれに限られる、と言うつもりはまったくない。それどころでない。たとえば、われわれが見たように、農民は改良農具を備えつけている。すなわち、彼らは自分たちの貯蓄を「生産手段の生産」に向けている。またわれわれが見たように、市場には、穀物のほかに、なおもう一つ別の商品――人間の労働力――が出まわるようになった。私がこれらすべてのことに言及しないのは、私が右の例をあげたのが狭くて特殊な目的――わがロシアで大衆の貧困化が実際に商品経済と資本主義経済との強化にみちびくことを示すという――をもってのことだったからである。私は、穀物のように、いつどこでも、最もおくれて、最もゆっくり、

ヴォロノフ郷

数		世帯主のもつ馬匹数				分与地をもつ世帯主の数			
						総数	分与地を耕作するもの		穀物栽培をしないもの
馬三頭をもつもの	馬四頭以上をもつもの	馬一頭をもつもの	馬二頭をもつもの	馬三頭をもつもの	馬四頭以上をもつもの		自分で	人をやとって	
70	22	567	596	210	100	1,067	900	92	75
6%	2%	39%	40%	14%	7%		84%	9%	7%
95	52	465	626	285	231	1,166	965	5	196
8%	4%	29%	39%	18%	14%		82.5%	0.5%	17%

商品流通に引きいれられる生産物を、わざわざえらんだ。だからこそまた、とりあげられた地域はもっぱら農耕的な地域だったのである。

　こんどは別の純工業的な地方、モスクワ県にかんする例をとろう。農民経済については、ゼムストヴォ統計集は『モスクワ県統計報告集』の第六巻と第七巻で記述しているが、これらの巻はクスターリ工業にかんする一定のすぐれた概説をふくんでいる。私は「レース工業」*の概説から一ヵ所を引用するにとどめるが、この箇所は、農民的経営がどのようにして、またなぜ、農民改革後の時代にとくに急速に発展したかを明らかにしている。

* 『モスクワ県統計報告集』、経済統計篇、第六巻、第二分冊、モスクワ県の営業、第二冊、モスクワ、一八八〇年。

　「レース工業は今世紀の二〇年代に、ポドリスク県ヴォロノヴォ郷の隣りあった二つの村で起こった。一八四〇年代には、それは徐々に他の近隣の村にひろがりはじめているが、まだ大きな地域をおおうにはいたっていない。ところが六〇年代からは、とくにこの三—四年間は、急速に近傍にひろがりつつある。」

　現在この工業が存在している三二ヵ村のうち、それが発生した年代は次のとおりである。

二ヵ村で——一八二〇年に

ポドリスク郡

ヴォロノヴォ郷	世帯数	実数		男女100人あたり			世帯		
		馬	牝牛	馬	牝牛	小家畜	馬をもたないもの	馬一頭をもつもの	馬二頭をもつもの
1869年	1,233	1,473	1,472	22	22	30	276 22%	567 46%	298 24%
1877年	1,244	1,607	1,726	25	27	38	319 26%	465 37%	313 25%

四　〃　——一八四〇年に
五　〃　——一八六〇年代に
七　〃　——一八七〇—一八七五年に
一四ヵ村で——一八七六—一八七九年に。

概説の筆者はこう言っている。「もしこのような現象、すなわち、まさに近年にこの工業がきわめて急速にひろまったという現象を生みだした原因を探究するならば、われわれは、一方では、この時期に農民生活の諸条件がいちじるしく悪化したが、他方では、住民の——ただし、より有利な条件にある部分の——欲望がいちじるしく増大したことを見るであろう」。

このことを確証するために、筆者はモスクワのゼムストヴォ統計から資料を借りているが、私はそれを次に表の形にして引用しよう。*〔四二—四三ページの表を参照〕

* 私は牝牛の配分にかんする資料を削除し（結論は同じ）、百分率の計算をつけくわえた。

筆者はつづけて言っている。「これらの数字は、この郷における馬、牝牛および小家畜の総数は増大したが、しかし、富裕さのこのような増大は個々の人々の、ほかならぬ、馬二—三頭あるいはそれ以上をもつ部類の世帯主のものであったということを、雄弁にものがたっている……。……したがってわれわれは、牝牛も馬ももたない農民数

の増大とならんで、土地の耕作をやめる人々の数も増大していることを見るのである。家畜もなければ、十分な量の肥料もない。土地は疲弊してゆき、作付するに値しない。自分が、家族が食べてゆくためには、飢えで死なないためには、成年男子だけが営業に従事するのではたりない——彼らはいままでも、農閑期にはそれに従事していたのだ。——家族の他の成員も副業をさがす必要がある……。

……われわれが表としてあげた数字資料は、われわれに他の現象をも示した。すなわち、これらの村では、牛馬二—三頭をもつ人の数もまた増大したのである。したがって、これらの農民の富裕が増大したのである。ところがこれと同時に、われわれは、『これこれの村のすべての婦人、子供は、一人のこらず営業に従事している』と言明した。このような現象はどう説明すべきか?…… この現象を解明するためには、われわれは、これらの村がどのような生活を営んでいるかを見、それらの村の家庭的事情をもっと近よってよく知らなければならない。そうすれば、おそらく、販売のための商品の生産にたいするこの強い欲求がなにによって引きおこされたかを、会得することができよう。

もちろん、われわれはここで、どのような恵まれた事情のもとで、農民人口のあいだからより強力な人々、家族が徐々に分離してくるか、どのような条件の結果として彼らの富裕さがつくりだされるか、またどのような社会的条件の結果として、この富裕さが、ひとたび現われると、急速に増加しうるし、また、村の住民の一部分を他の部分からいちじるしくぬきんでさせるほどに増加するかということについて、くわしく研究しはしない。この過程をあとづければ十分である。村内でこれこれの農民が、健康で、力が強く、まじめで、よく働く人間として、同じ村民のあいだで評判が高いとする。彼のところは大家族で、子供がますます多くなるのだが、この子供たちもやはり強健な体格と善良な性質できわだっている。彼らはいっしょに住み、分家しないで、四—五人分の分与地をもらっている。いうまでもなく、それの耕作のためには、さりとて、現存する全部の人手が必要なわけではない。そこで二—三人の息子が、ふだんは出稼ぎやその地方の営業に従事する。そして乾草刈りのときだけ短期間、営業を放棄して、畑仕事で家族の手助けをするのである。個々の家族成員の稼ぎは分割されず、共同財産を構成する。ほかにも恵まれた条件があると、稼ぎは、家族の欲望を充足するための支出をいちじるしく超過する。貯蓄ができ、その結果、家族はもっと良い条件で営業に従事することができるようになる。原料を生産者の手からじかに現金で買い、生産した商品を値の良いときに

売ることができ、さまざまな『卸』商や男女商人やその他の仲介なしにやってゆくことができるのである。

一人か二人の労働者を雇ったり、あるいは、なんらかの事業を完全に自立してはやってゆけなくなった貧農に家内仕事を分けてやったりする可能性が現われる。これらやこれに類した別の事情のため、われわれがあげた強力な家族は、自分自身の労働以外からも収益をあげることが可能になる。もちろん、ここではわれわれは、これらの家族のなかから、クラーク〔富農〕とかミロイェード〔貪食者〕とかいう名称で知られる個々人が発展してくる場合については ふれない。われわれが考察しようとするのは、農民住民のあいだで最もありふれた現象だけである。統計集の第二巻と第六巻第一分冊にのっている表は、農民層の一部分の状態が悪化するにつれて、多くの場合、他の小さな部分あるいは個々の人の富裕さが増大することを、明白に示している。

営業に従事することがひろまってゆくにつれて、外界との、都市との、この場合にはモスクワとの往来がより頻繁になり、若干のモスクワ的方式がすこしずつ村に浸透してゆき、まずほかならぬこれらのより裕福な家庭にそれが現われるようになる。サモワールや、ガラス製や陶製の日常の食器が使われだし、服装も『小ぎれい』になる。この服装のきれいさは、男子の場合ははじめ、わらじのかわりに長靴をはくことに現われるが、婦人の場合は、短靴や長靴をはくようになると、よりきれいな服装がいわば最後の仕上げとなる。婦人たちは、まずはじめは、きらきらしたまだらなさらさ、プラトーク、模様のある毛のショール、その他等々の華麗なものにひきつけられるのである……。

……農民の家庭では、『太古から』のならわしである……。自分で亜麻を栽培しているうちは、衣服のために必要な材料や品物を買うのにより少額の貨幣を支出すればすみ、そしてこの貨幣は、鶏、卵、きのこ、漿果類、使いのこしの糸、あるいはリンネルの余り切れを売って手に入れていた。その他のものはすべて家でつくられていた。ヴォロノヴォ郷の村々におけるレース工業の極度にゆっくりした発展は、ほかならぬこれらの事情のためである。すなわち、それは、農婦に要求された製品はすべて家内生産し、彼女らは農閑期をすべてこのためにあててきたためである。レースは、もっぱら、より豊かな家庭の娘か、子供が多いため亜麻を紡いだりリンネルを織ったりするのに家庭内のすべての婦人の手を必要とはしなかったような家庭の娘たちが、編んでいた。しかし安いプリント木綿やキャラコが少しずつリンネルを駆逐しはじめた。これに別の事情がつけくわわっ

た。ときには亜麻が不作のこともあったし、また、夫には赤ファスチャン織のルバーシカを織ってやり、自分には『小シューバ』(サラファン)をもう少しスマートに織りたいと思ったりする。こうして、農民の衣服のためのさまざまなリンネルやプラトークを家で織る習慣が、少しずつ駆逐され、あるいは非常に強く制限されてきた。そして部分的には、家内生産の織物が駆逐されたことや、それに、工場で生産される織物がとって代わったこととの影響を受けて、衣服そのものが変化しつつあるのである……。

……多数の住民にとって販売めあての商品の生産に努力する必要があり、子供の手までこういう生産に引きいれられてゆくのは、このためである」。

注意ぶかい観察者のこの飾り気のない話は、わが国の農民大衆のなかで社会的分業の過程がどのように進行しているか、それがどのように商品生産の《したがってまた市場の》強化をもたらしているか、また、この商品生産が、自分自身で、すなわち、商品生産が生産者を市場に向かわせる諸関係そのものの力によって、どのようにして、人間労働力の売買が「最もありふれた現象」になるという状態にみちびくかということを、明瞭に示している。

八

最後に、この論争問題——どうやらこれを、あまりにも多くの抽象や表式や定式でわずらわしたように思われるが——を、「通例の見解」の最も新しくて著名な代表者の一人の議論を検討することによって説明することも、おそらくよけいなことではないであろう。

私がいうのはニコライ—オン氏*のことである。

* もちろん、ここでは彼の著述全体を検討することは、問題になりえない——そのためには特別の著作が必要である。ここでは、彼の愛好する議論の一つを検討するだけである。

ロシアにおける資本主義の発展にたいする最大の「障害」を、彼は国内市場の「縮小」、農民の購買能力の「減少」のうちに見ている。彼は次のように言っている。——「資本主義化は工業製品の家内生産を駆逐した。農民は衣服を買わなければならなくなった。それに必要な貨幣を得るために、農民は土地耕作をひろげるのに努力した。そして分与地では足りないため、農民は、合理的経営と考えられる限界をはるかに超えて、この耕作面積を拡張した。彼は借入地にたいする支払をむやみに引き上げ——こうして結局は零落した。資本主義そのものが自分のために墓を

堀った。資本主義は「国民経済」を一八九一年の恐るべき恐慌にみちびき、そして……自分の基盤をもたず、「同じ道を歩み」つづけることができないで、立ちどまってしまった。「われわれは由緒ある国民的体制から逸脱した」ことを自覚しないで、ロシアはいま……「共同体に大規模生産を接ぎ木する」ことについて、上司の指示をまっている。

この「永遠に新しい」（ロシアのナロードニキにとって）理論の不合理さは、どこにあるだろうか？

それは、この理論の案出者が「生産手段のための生産手段の生産」の意義を理解していないことに、あるのだろうか？　もちろん、そうではない。ニコライ―オン氏はこの法則をよく知っているし、それがわが国でも現われたことに、言及さえしている（一八六、二〇三―二〇四ページを参照）。たしかに、矛盾したことで自分で自分を傷つけるという彼の能力のおかげで、彼はときには（一二三ページを参照）この法則のことを忘れはする。だが、この種の矛盾を訂正したところで、著者の基本的（さきにあげた）議論をただすことにはけっしてならないことは、明白である。

彼の理論の不合理さは、彼がわが国の資本主義を説明することができず、それにかんする自己の議論をまったく純然とした虚構のうえに打ちたてていることにある。

家内生産物が工場生産物によって駆逐されたために零落した「農民層」を、ニコライ―オン氏はなにか均質のもの、内的に結合力のあるもの、生活上のあらゆる現象に一人の人間のように反応するものと見ている。

実際にはとてもそんなものではない。もし生産単位（農家）の孤立性が存在しなかったなら、商品生産はロシアで発生しえなかったであろう。そしてだれでも知っているように、わが国の農民は実際には個々別々に、他人から独立して経営しており、彼の私有財産となる生産物の生産を、彼個人の危険負担と責任においておこなっており、個々別別に「市場」との関係にはいっている。

「農民層」において事情がどうなっているかを見よう。

「貨幣の必要に駆られて、農民は法外に作付を拡張し、そして零落してゆく」。

しかし作付を拡張することができるのは、作付用の種子や十分な量の役畜と農具をもつ、自立した農民だけである。そのような農民（周知のように、彼らは少数者である）は、実際に作付を拡大し、自分の経営を、労働者の援助なしにはやってゆけないほどの限度まで拡張する。ところが農民の大多数は、なんの貯えも、十分な生産手段ももたないので、経営の拡大によって貨幣の必要を満たすことはまったくできない。そのような農民は、すなわち、貨幣を手に入れるために自分のは「賃仕事」に出かける。

生産物ではなく、自分の労働力をもってゆくのである。賃仕事に出かけることは、当然、農業経営のいっそうの衰退をともなう。そしてこの農民は、自分の分与地を富んだ共同体仲間に明けわたすことで終りを告げるのであるが、この後者は、自分の経営をひとまわり大きくし、そして、もちろん、借り入れた分与地からの生産物を自分では消費せず、市場に送るのである。こうして、「人民の貧困化」と、資本主義の成長と、市場の拡大となる。だがそれだけではない。自分の拡張された農業経営にかかりきりになるわが富んだ農民は、もはや以前のように自分で自分のためにたとえば靴を生産することはできない。彼にとってはそれを買うほうが有利である。貧困化した農民についていえば、彼もまた購入した靴にたよらなければならない。彼は、もはや自分の経営をもっていないという単純な理由からしても、自分の経営内で靴を生産することはできない。靴にたいする需要と穀物の供給とが生じるが、この穀物は、その経営の進歩的風潮によってヴェ・ヴェ氏を感動させている経営上手な百姓が、余分に生産したものである。隣人、すなわち、靴を生産するクスターリは、いま農耕者がおかれているのと同じ状態にある。没落しつつある経営のあたえる穀物はあまりにも少ないので、穀物を購入するためには生産を拡張しなければならない。そしてまたもや、いうまでもなく、経営を拡張するのは、貯えをもつクスターリ、すなわち少数者に属する人々だけである。彼は、労働者を雇いいれるか、あるいは貧農に家内仕事を出す可能性を手に入れる。だがクスターリの大多数の人々にとっては、経営を拡張するなどは思いもおよばない。もし金をもうけた買占人が彼らに「仕事をあたえ」てくれるなら、すなわち、彼らが自分たちの唯一の商品――労働力――の購買者を見つけることができるなら、彼らはうれしいのである。こうしてまたもや、人民の貧困化と、資本主義の成長と、市場の拡大となる。社会的分業のいっそうの発展と深化にたいする新しい刺激があたえられる。この運動はどこで終わるか？ それについては、それがどこで始まったかをいえないと同様に、だれもいうことができない。だがそんなことは重要でない。重要なのは、われわれの眼前に一つの生きた有機体的な過程、商品生産の発展と資本主義の成長の過程があるということである。農村における「非農民化」はわれわれのこの過程の始まり、その発生、その初期の諸段階を示している。そして都市における大規模資本主義はわれわれにこの過程の終り、その傾向を示すのである。もしこれらの現象を寸断して、それらを個々に、他とは無関係に考察してみたりすると、つじつまをあわせることができなくなるし、どちらの現象をも、すなわち人民の貧困化も

資本主義の成長も、説明することができなくなるだろう。

それなのに、たいていの場合、始めも終りもないこの種の所説を述べる人々は、過程を説明することができずに、彼らがそのどちらをも理解できない二つの現象のうちの一つ《そしてこれは、もちろん、「批判的に思考する人間の道義的に発展した感情」に矛盾するほうのものなのであるが》を、「不合理で」、「偶然的で」、「宙に浮いている」と言明して、それで研究をうちきってしまうのである。

だが実際には、いうまでもなく、「宙に浮いている」のは、ひとり彼ら自身の所説だけなのである。

一八九三年秋に執筆
一九三七年に雑誌『ポリシェヴィク』第二一号にはじめて発表
全集、第五版、第一巻、六七―一二二ページ所収
邦訳全集、第一巻、七一―一二二ページ所収

「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか？

（『ルースコエ・ボガートストヴォ』所載のマルクス主義者に反対する諸論文への回答）[一六]

第一分冊

『ルースコエ・ボガートストヴォ』[一七]は社会民主主義者にたいする戦役を開始した。すでに昨年の第一〇号で、この雑誌の首脳のひとりであるエヌ・ミハイロフスキー氏は、「わが国のいわゆるマルクス主義者あるいは社会民主主義者」にたいして近く「論戦」をひらくと言明した。ついで、エス・クリヴェンコ氏の論文『文化的独行者について』（第一二号）と、エヌ・ミハイロフスキー氏の論文『文学と生活』（『ルースコエ・ボガートストヴォ』一八九四年第一、第二号）が、現われた。わが国の経済的現実にたいするこの雑誌自身の見解についていえば、それは、エス・ユジャコフ氏の論文『ロシアの経済的発展の諸問題』（第一一、第一二号）のなかで、最も完全に叙述されている。これらの諸氏は、彼らの雑誌のなかで真の「人民の友」の思想と戦術とを呈示すると一般に誇称しながら、社会民主主義の公然の敵として現われている。それでわれわれは、これらの「人民の友」、彼らのマルクス主義批判、彼らの思想、彼らの戦術を調べてみよう。

エヌ・ミハイロフスキー氏は、なによりもマルクス主義の理論的基礎に注意をむけており、それゆえ唯物史観の検討に特別に立ちいっている。ミハイロフスキー氏は、この学説を説明している広範なマルクス主義文献の内容を概括的に叙述したあとで、次のような長談議で彼の批判を始めている。

彼はこう言っている。「なによりもまず、マルクスはどういう著作のなかで彼の唯物史観を叙述したかという問題が、おのずから出てくる。彼は『資本論』のなかで、論理

の力と博識との、またあらゆる経済的文献ならびに関係諸事実の綿密な研究との、結合の手本をわれわれにあたえた。彼は、経済科学の理論家でとうの昔に忘れられたり、あるいは、いまではだれにも知られていないような人々を明るみに出し、また、工場監督官のなにかの報告や種々の専門委員会での専門家の証言のなかにある最小の細目をも、見のがすことがなかった。一言でいえば、彼は、膨大な量の事実資料を、一面では自分の経済理論を基礎づけるために、一面ではそれを例解するために、掘りかえしたのである。だから、もし彼が歴史的過程にたいする『まったく新しい』見解をつくりだし、人類の過去全体を新しい観点から説明し、いままでに存在したもろもろの歴史哲学的理論に総決算をあたえたのだとすれば、もちろん、同様な周到さでそうしたはずである。実際、歴史的過程にかんする、世に知られたあらゆる理論を再検討し、それに批判的分析をくわえ、世界史の大量の事実を研究したはずである。ダーウィンとの比較はマルクス主義文献のなかでよくおこなわれているが、この比較は、右の考えをいっそうよく確認してくれる。ダーウィンの全労作とはどういうものか？　それは、モン・ブランの高さほどもある多量の事実資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な観念である。それに相応するようなマルクスの労作はいったいどこにあるだろうか？　そういうものは存在しない。しかも、マルクスにそのような労作がないばかりでなく、全マルクス主義文献――それは量的にきわめて多く、また広く普及しているにもかかわらず――のなかにもない。」

　この長談義全体は、『資本論』とマルクスとが世間でいかにわずかしか理解されていないかを知るうえで、きわめて特徴的である。彼らは、叙述の巨大な論証力に圧倒されて、マルクスのまえに腰をかがめ、彼を賞賛する。それと同時に、彼らは、学説の基本的内容をまったく見おとし、なにごともなかったかのように「主観主義社会学」の古い歌をうたいつづけるのである。この点について、われわれ[一]は、カウツキーがマルクスの経済学説にかんする著書のなかでえらんだ、非常に適切な題詞を思いださずにはいられない。

　Wer wird nicht einen Klopstock loben?
　Doch wird ihn jeder lesen? Nein.
　Wir wollen weniger erhoben
　Und fleissiger gelesen sein!
　〔だれかクロプシュトックをほめたたえないものがあろう？
　だが、だれでもそれを読むだろうか？　いな。

われわれは、賞賛されることはよりすくなくとも、
より精出して読まれることを望む![19]」

まさにそのとおり! ミハイロフスキー氏は、マルクスをほめたたえることはもっと少なくして、マルクスをもっと精だして読むか、あるいは、こうすればもっとよいのだが、読んだことをもっと真剣に考えてみるべきであったろう。

「マルクスは、『資本論』のなかで論理の力と博識との結合の手本をわれわれにあたえた」――とミハイロフスキー氏は言う。ミハイロフスキー氏はこの文章のなかで、りっぱなことばと空虚な内容との結合の手本をわれわれにあたえた――あるマルクス主義者はこう述べた。そして、この発言はまったく正しい。実際に、マルクスのこの論理の力はどこに現われただろうか? その論理の力はどのような結果をあたえただろうか? さきに引用したミハイロフスキー氏の長談義を読むと、この力全体は最も狭い意味での「経済理論」にむけられており――そして、それだけにすぎないと、考えうるかもしれない。そして、マルクスがその論理の力を発揮した範囲が狭いことをより強く際だたせるために、ミハイロフスキー氏は、「最小の細目」とか、「綿密さ」とか、「だれにも知られていない理論家」とかいうことを強調する。これだとまるで、マルクスはこれらの理論の構成方法のなかに、本質的に新しい、注目に値いするものはなにも持ちこまなかったかのようになるし、また、経済科学の範囲をひろげもせず、この科学そのものに「まったく新しい」見解を持ちこみもせずに、経済科学の範囲をいままでの経済科学者におけるとまったく同じままにしておいたかのようになる。ところが、『資本論』を読んだ人ならだれでも、これはまったくのまちがいであることを知っている。この点について、ミハイロフスキー氏が一六年まえに卑俗ブルジョア的なユ・ジュコフスキー氏と論戦したときにマルクスについて書いたことを、思いださないではいられない。当時はいまとはおそらく時代も違っただろうし、感情ももっと新鮮だったであろう。だが、とにかく、ミハイロフスキー氏の論文の調子と内容だけはいまとまったく異なっていた。

「『近代社会の発展法則(原文では Das ökonomische Bewegungsgesetz――経済的運動法則[20])を明らかにすることがこの著作の最終の目的である』――K・マルクスは彼の『資本論』についてこう述べて、彼の計画を厳格にたもっている」、――ミハイロフスキー氏は一八七七年にはこう批評している。それで、この厳格に――この批評家の認めるところによれば――たもたれた計画を、もっと近よって検討してみよう。その計画は、「近代社会の経済的発

展法則を明らかにすること」にある。

こういう定式化そのものがすでにわれわれを、解明を要するいくつかの問題に直面させる。マルクス以前のすべての経済学者が社会一般について論じていたのに、なぜマルクスは「近代（modern）」社会について語るのか？　彼は「近代的」ということばをどういう意味でつかい、どういう標識によってこの近代社会を特別に区別するのか？　さらに、社会の経済的運動法則とはなんのことか？　われわれは経済学者からいつも次のように聞かされてきた――それして、ついでながらいえば、これは『ルースコエ・ボガートストヴォ』もそのなかにはいる一派の政論家や経済学者のお気に入りの思想の一つであるが――、経済法則にのみしたがうのは価値の生産だけであって、これにたいして分配は政治に、すなわち社会にたいする政府やインテリゲンツィア等々の働きかけのいかんに依存する、と。マルクスはどういう意味で社会の経済的運動法則ということを言い、さらにこの法則を Naturgesetz――自然法則――とよんでいるのか？　社会現象の分野は自然史的現象の分野から特別に区別されるものであり、だから、前者の研究にはまったく特別の、「社会学における主観的方法」を用いなければならないということについて、わが祖国のあれほども多数の社会学者が山なす紙を書きちらしていたのに、これはどう理解したらよいのか？

すべてこれらの当惑が、自然に、また必然的に生じてくる。そして、もちろん、『資本論』について語りながら、これらの当惑を感じずにすましうるのは、まったくの無学者だけである。これらの問題を解明するために、あらかじめ『資本論』の同じ序文からもう一ヵ所引用しておこう。すぐ数行あとにこう書いてある。

「私の立場は、経済的社会構成体の発展を自然史的過程と考えるという点にある。」(三)

われわれが聞かされたように、厳格にたもたれてまれに見る論理の力で展開されている『資本論』の基本思想が、まさにこの点にあることを知るためには、序文から引用したたった二つの箇所を対照してみるだけで十分である。以上のすべてについて、なによりも二つの事情を注意しておこう。マルクスは一つの「経済的社会構成体」、すなわち資本主義的構成体についてだけ述べている。すなわち、彼はこの構成体だけの発展法則を研究したのであって、他のどんな構成体の発展法則を研究したのでもない、と言っているのである。これが第一。第二に、マルクスが彼の結論をつくりあげた方法を注意しておこう。この方法は、いまミハイロフスキー氏から聞いたように、「関係諸事実にたいする綿密な研究」ということにあったのである。

さて、『資本論』のこの基本思想の検討にうつろう。この思想は、わが主観主義哲学者があれほども巧妙に避けてとおろうと試みたものである。そもそも、経済的社会構成体という概念はどういうことなのか？　こういう構成体の発展は、どういう点で自然史的過程とみなすことができ、また、みなさなければならないのか？——これが、いまわれわれの当面する問題である。私がすでに指摘したように、旧来の（ロシアにとって、というわけではないが）経済学者や社会学者の見地からすれば、経済的社会構成体という概念はまったく無用のものである。彼らは社会一般について論じ、社会一般とはなにか、社会一般の目的および本質はなにか、等々について、スペンサー一派と論争している。こういう議論のなかで、これらの主観主義社会学者たちは、次のような論証にたよっている。すなわち、社会の目的は社会の全成員の利益ということであり、だから正義はこれこれの組織を必要とするのであり、そしてこの理想的な組織（「社会学はなんらかのユートピアから始めなければならない」——主観的方法をとる著者のひとりミハイロフスキー氏のこのことばは、彼らの方法の本質をみごとに特徴づけている）に合致しない制度は変則的であり、排除されるべきである、というのである。たとえば、ミハイロフスキー氏はこう論じている。「社会学の本質的任務は、人間の本性のあれこれの欲求が充足される社会的条件を明らかにすることにある」。見られるように、この社会学者の関心をひくのは、人間の本性を満足させるような社会だけであって、そうでない社会構成体、しかも少数者による多数者の隷属化というような、「人間の本性」に合致しない現象に立脚しうるような社会構成体は、けっして関心をひかないのである。また見られるように、この社会学者の見地からすれば、社会の発展を自然史的過程として見るなどということは、問題になりえない。（「社会学者は、なにかあるものを、望ましい、あるいは望ましくないと認めたならば、この望ましいものを実現し、あるいは望ましくないものを排除する条件」、「これこれしかじかの理想を実現するための条件を」、「見いださなければならない」——同じミハイロフスキー氏はこう論じている。）それればかりではなく、発展ということさえ問題になりえないのである。問題になりうるのは、ただ、「望ましいもの」からのさまざまな逸脱、すなわちもろもろの「欠陥」だけであって、これらは、人間が賢明でなく、人間の本性がなにを要求しているかをうまく理解できず、こういう道理にかなった制度を実現する条件を発見できなかった結果……その結果として、歴史上に偶然に起こったものなのである。経済的社会構成体の発展の自然史的過程というマルクスの基本思想が、社

会学という名称を誇称するこの子供じみた道徳訓を根こそぎ掘りくずすものであることは、明白である。では、マルクスはどのようにしてこの基本思想をつくりあげたのだろうか？　彼は、社会生活のさまざまな分野のなかから経済の分野を取りだすことによって、また、あらゆる社会関係のなかから生産関係を、それ以外のすべての関係を規定する基本的な、本源的なものとして取りだすことによって、それをおこなったのである。マルクス自身、この問題についての彼の考察の道すじを、次のように描いている。

「私を悩ました疑問の解決のために企てた最初の仕事は、ヘーゲルの法哲学の批判的検討であった。〔……〕私の研究は次のような結果に到達した。すなわち、法的諸関係ならびに国家諸形態というものは、それ自体からも、またいわゆる人間精神の一般的発展からも理解されうるものではなく、むしろ物質的な生活諸関係――それらの総体を、ヘーゲルは一八世紀のイギリス人とフランス人の先例にならって『市民社会』という名称のもとに総括しているが――に根ざしているということ、だが、この市民社会の解剖学は経済学のうちに求められなければならないということであった。〔……〕私が経済学の研究によって到達した〔……〕一般的結論は、簡単に次のように定式化することができる。人間は彼らの生命の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産力の一定の発展段階に照応する生産関係にはいる。これらの生産関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であって、そのうえに一つの法律的および政治的上部構造がそびえ立ち、そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に、彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産力は、その発展のある段階で、それらがそれまでその内部で運動してきた現存の生産関係と、あるいは、それの法律的表現にすぎないが、所有関係と矛盾するようになる。これらの関係は、生産力の発展形態から、その桎梏に一変する。このとき社会革命の時代が始まる。経済的基礎の変化とともに、巨大な上部構造全体が、あるいは徐々に、あるいは急速に変革される。このような変革の考察にあたっては、自然科学的に正確に確認できる、経済的生産条件における物質的な変革と、人間がこの衝突を意識してこれに決着をつける、法律的、政治的、宗教的、芸術的または哲学的な諸形態、簡単にいえばイデオロギー的諸形態とを、つねに区別しなければならない。ある個人がなんであるかを、その個人が自分自身をなんと考えてい

るかによって判断しないのと同様に、このような変革の時代をその時代の意識から判断することはできないのであって、むしろこの意識を物質的生活の諸矛盾から、社会的生産力と生産関係とのあいだに現存する衝突から、説明しなければならない。〔……〕大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的、近代ブルジョア的の諸生産様式をあげることができる。(三)」

社会学における唯物論のこの思想は、すでにそれ自体で天才的な思想であった。もちろん、さしあたっては、これはまだ仮説にすぎなかったが、しかし、仮説にしても、それは、歴史上および社会上の諸問題に厳密に科学的に接近する可能性を、はじめてつくりだしたものであった。いままでは、社会学者たちは最も単純な関係、生産関係というような本源的な関係にまで掘りさげてゆくことができないで、じかに政治的=法律的諸形態の調査と研究にとりかかり、これらの形態がその時代における人間のあれこれの観念から発生したという事実にぶつかり、——そして、そこにとどまっていた。そこで社会関係は、人間が意識的につくりあげるものであるかのようになっていた。しかし、Contrat Social〔社会契約説〕(三)の思想に完全に表現されたこの結論は(この思想の痕跡は、空想的社会主義のあらゆる体系のなかにきわめて顕著である)、あらゆる歴史上の観察にまったく矛盾するものであった。社会の成員が、そのなかで自分が生活している社会関係の総体を、なんらかの原理によってつらぬかれた、なにか確定的な、全一的なものと考えたことは、かつて一度もなかったし、いまでもない。反対に、大衆はこの社会関係に無意識に順応するのであって、それが特殊の歴史的社会関係だという考えはほとんどもたず、そこで、たとえば、幾世紀ものあいだ人間がそのなかで生活してきた交換関係の説明が、ごく最近になってやっとあたえられたほどである。唯物論は、分析をより深めて、人間のこれらの社会的観念そのものの起原にまでさかのぼることによって、この矛盾を除去した。そして、観念の動向は事物の動向に依存するという唯物論の結論だけが、科学的心理学と両立しうるのである。さらにこの仮説は、べつの方面からも、社会学をはじめて科学の水準に高めた。いままでは、社会学者たちは、社会現象の複雑な網のなかで、重要な現象と重要でない現象とを区別することに困りはて(これが社会学における主観主義の根源である)、そういう分界のための客観的な基準を見いだすことができないでいた。唯物論は、生産関係を社会の構造として取りだし、生産関係に反復性という一般科学的な基準を適用できるようにしたことで、完全に客観的な基準をあたえた。この反復性の基準が社会学に適用できるという

ことは、主観主義者たちが否定してきたところなのである。彼らがイデオロギー的社会関係（すなわち、形成されるまえに人間の意識*を通過する関係）にとどまっていたあいだは、彼らはさまざまな国の社会現象における反復性と規則性を認めることができず、彼らの科学はせいぜい、これらの現象の記述と素材の収集にすぎなかった。物質的社会関係（すなわち、人間の意識を通過しないで形成される関係——人々は生産物を交換することによって生産関係にはいりこむが、ここに社会的生産関係があることを意識さえしないで、そうするのである）を分析することによって、反復性と規則性を認めて、さまざまの国の制度を社会構成体という一つの基本概念に概括することが、一挙に可能になった。このような概括だけが、社会現象の記述（および理想の見地からする評価）から、これらの現象の厳密に科学的な分析に移ることを可能にしたのである。この科学的分析は、一例をあげれば、一つの資本主義国を他の資本主義国から区別するところのものを取りさって、それらすべてに共通するものを研究するのである。

＊といっても、もちろん、問題にされるのはつねに、社会関係の意識であって、その他の関係の意識ではない。

最後に、すでに第三に、この仮説がはじめて科学的社会学の可能性をつくりだしたのだが、それは、社会関係を生産関係に還元し、この生産関係を生産力の水準に還元することだけが、社会構成体の発展を自然史的過程として考えるための強固な基礎をあたえたからである。このような見解なしには社会科学もまたありえないことは、自明である。（たとえば、主観主義者は、歴史現象の法則性を認めながらも、しかし歴史現象の進化を自然史的過程として見ることはできなかった、——その理由は、まさに、彼らが社会的観念や人類の目的にとどまっていて、これらの観念や目的を物質的社会関係に還元することができなかったからである。）

ところでマルクスは、一八四〇年代にこの仮説を述べてから、材料の事実的（このことに注意せよ）研究にとりかかっている。彼は一つの経済的社会構成体——商品経済制度——をとりあげ、膨大な資料にもとづいて（この資料を彼は二五年以上も研究した）、この構成体の機能と発展との諸法則のきわめて詳細な分析をあたえている。この分析は、社会成員のあいだの生産関係だけに限定されている。マルクスは問題を説明するのに、この生産関係の外部にあるなんらかの要因に一度もたよることなしに、社会経済の商品的組織がどのようにして発展するか、その組織がどのようにして資本主義的組織に転化し、ブルジョアジーとプロレタリアートという敵対的な（すでに生産関係の範囲内

で）階級をつくりだすか、その組織はどのようにして社会的労働の生産性を発展させ、そしてまさにそのことによって、この資本主義的組織そのものの基礎と和解しえないまでに矛盾するようになる一要素をもちこむか、ということを知る可能性をあたえている。

これが『資本論』の骨組みである。だが、重要な点は、マルクスがこの骨組みだけでは満足しなかったこと、彼が普通の意味での「経済理論」だけにとどまらなかったこと、彼が――ある社会構成体の構造と発展とをもっぱら生産関係によって説明しながらも――それにもかかわらず、この生産関係に照応する上部構造を、つねに、またいたるところで追求し、この骨組みに肉と血をあたえたことにある。このゆえにこそ『資本論』はあれほども巨大な成功をおさめ、こうして「ドイツの経済学者」のこの著書は、資本主義的社会構成体の全体を、生きた構成体として――すなわち、日常生活の諸側面や、この生産関係に固有な階級敵対の実際上の社会的現われや、資本家階級の支配を保護するブルジョア的な政治的上部構造や、自由、平等、等々のブルジョア的観念や、ブルジョア的家族関係やをともなったた構成体として――読者に示すことになったのである。ダーウィンとの比較がまったく当を得ていることは、いまや明白である。『資本論』――これはまさに、「モン・ブランの高さほどもある多量の事実資料に仕上げをあたえる、いくつかの、相互にきわめて密接に関連した、概括的な観念」にほかならない。そして、もしだれかが『資本論』を読んで、これらの概括的な観念に気づきえなかったとしても、それはもはやマルクスの罪ではない。彼は、さきに見たように、序文のなかでさえ、これらの観念について指摘しているのである。それればかりでない。ダーウィンとの比較は、たんに外面的に見て正しいばかりでなく（なぜこの面がミハイロフスキー氏の特別の関心をひいたかは不明であるが）、内面的に見ても正しい。ダーウィンは動植物の種を、なんら関連のない、偶然的な、「神によって創造された」、不変のものと見る見解に終止符を打ち、そして種の可変性と種のあいだの継承性を確定して、生物学をはじめて完全に科学的な基礎のうえにすえたが、これと同じように、マルクスは社会を、当局者の意志によって（あるいは、同じことだが、社会や政府の意志によって）どうにでも変わりうる、偶然に生起して変化する、個々人の機械的な集合体と見る見解に終止符を打ち、そして経済的社会構成体という概念を所与の生産関係の総体として確定し、このような構成体の発展が自然史的過程であることを確定して、社会学をはじめて科学的な基盤のうえにすえたのである。

いまや――『資本論』が出現してからは――唯物史観は

もはや仮説ではなく、科学的に証明ずみの命題である。そして、なんらかの社会構成体の機能と発展——まさに社会構成体のであって、なんらかの国あるいは国民の生活様式のではないし、あるいは階級、等々の生活様式のですらない、——を科学的に説明する、他の試みがなされないあいだは——すなわち、唯物論がなしとげたのとまったく同じように「関係諸事実」を秩序だてることができ、それとまったく同じように、一定の構成体を厳密に科学的に説明しながら、それの生きた描写をあたえることができるような、他の試みがなされないあいだは——そのあいだは、唯物史観は社会科学と同義語である。唯物論は、ミハイロフスキー氏が考えているように「主要な科学的歴史観」ではなくて、唯一の科学的歴史観なのである。

そしていま、『資本論』を読みおわって、そこに唯物論を見いださないですました人間がいた、ということ以上にこっけいで奇妙なことを、想像できるだろうか！ 唯物論はどこにあるのか？ ——ミハイロフスキー氏は心の底から当惑して、こう質問する。

彼は『共産党宣言』を読んだ。しかし彼は、そこに現代の制度——法律的のも、政治的のも、家族的のも、宗教的のも、哲学的のも——の説明が唯物論的にあたえられていることに気づかなかったし、また種々の社会主義および共産主義理論にたいする批判でさえもが、それらの理論の根源をあれこれの生産関係のうちに求め、また見いだしていることに、気づかなかった。

彼は『哲学の貧困』を読んだ。しかし彼は、そこにプルードンの社会学の検討が唯物論的見地からおこなわれていることに気づかなかったし、種々さまざまな歴史上の問題についてプルードンの提案した解決策にたいする批判が、唯物論の諸原理から出発していることにも、また、これらの問題の解決のための材料をどこに求めるべきかについて著者自身のあたえた指示が、すべて生産関係を参照することに帰着することにも、気づかなかったのである。

彼は『資本論』を読んだ。しかし彼は、自分のまえにあるのが唯物論的方法による一つの——そして、最も複雑な——社会構成体の科学的分析の手本、万人によって承認され、だれもこれを凌駕（りょうが）したもののない手本であることに、気づかなかった。そこで彼は腰をおろして、次の深遠な問題について、その力づよい頭脳を働かせて考えこむのである。「マルクスはどういう著作のなかで彼の唯物史観を叙述したか？」

マルクスを知っているものならだれでも、これにたいして別の質問で同氏に答えるであろう、——いったいマルクスはどういう著作のなかで彼の唯物史観を叙述しなかった

だろうか？　しかし、ミハイロフスキー氏がマルクスに唯物論研究があることを知るのは、おそらくカレーエフ某のなんらかの歴史詭弁論的労作のなかで、『経済的唯物論』という項目のもとに適当な番号を付してその研究が表示されるときだけであろう。

しかしなによりも奇妙なのは、ミハイロフスキー氏が、マルクスは「歴史的過程にかんするあらゆる世に知られた理論を再検討（原文のまま！）」しなかったと言って、マルクスを非難していることである。これはまったくこっけいの至りである。いったい、これらの理論は、十分の九まで、なにから成りたっていただろうか？　それは、社会とはなにか、進歩とはなにか、等々についての、純粋に先天的な、独断的な、抽象的な構成から成りたっていた（私はわざと、ミハイロフスキー氏の頭脳と心情に縁の近い例をとっている。）このような理論は、それが存在していることからしてすでに無用ではないか。それの基本的方法からして、また、それのまったくの蒙昧な形而上学的性質からして、無用ではないか。社会とはなにか、進歩とはなにか、という問題から始めることは、終りから始めることではないか。まだ一つの社会構成体をも特別に研究せず、社会構成体という概念を確定することさえできず、まじめな事実的研究に近づくこと、どのような社会関係であれそれの客観的分析に近づくことさえできないのに、社会および進歩一般という概念をどこからとってくるのか？　これこそ、あらゆる科学の出発点となっていた形而上学の、最も明瞭な標識である。事実の研究にとりかかることができないあいだは、つねに a priori〔先天的〕に一般理論が編みだされたのであるが、そういう一般理論はつねに不毛だったのである。形而上学的化学者は、化学的過程をまだ実際に研究できないのに、化学的親和力とはなにかということについて理論を編みだした。形而上学的生物学者は、生命および生命力とはなにかについて説いた。形而上学的心理学者は、精神とはなにかについて論じた。このばあい、すでに方法からして不合理であった。心理的過程を特別に説明しないでいては、精神について論じることはできない。この場合は、精神とはなにかについての一般理論や哲学的構成を捨てて、あれこれの心理的過程を特徴づける諸事実の研究を科学的基盤のうえにおくことこそが、進歩でなければならない。だからミハイロフスキー氏の非難は、一生涯、精神とはなにかという問題について「諸研究」を書いてきた（ただ一つの心理的現象、その最も単純なものをさえ正確に説明できないのに）形而上学的心理学者が、科学的心理学者を、精神にかんするあらゆる世に知られた理論を再検討しなかったと言って、非難しにかかるのと、まったく

同じことである。この科学的心理学者は、精神にかんする哲学的理論を投げすて、直接に心理的現象の物質的基体——神経過程——の研究にとりかかって、たとえば、あれこれの心理的過程の分析と説明をあたえたのだ。ところでわが形而上学的心理学者はこの労作を読み、そして賞賛する——諸過程はよく描かれており、事実もよく研究されている、と。しかし彼は満足しない。この学者による心理学のまったく新しい解釈のことや、科学的心理学の特殊の方法について、周囲で人々が話をするのを聞くと、失礼だが、と彼はいらだって言う。失礼だが、とこの哲学者は怒って叫ぶ——いったいどういう著作のなかで、この方法が叙述されているのか？　この労作のなかにあるのは「ただ事実だけ」ではないか？　そのなかには「精神にかんするあらゆる世に知られた哲学的理論」の再検討の影さえないではないか？　これはまったくふさわしくない労作だ！

これとちょうど同じように、『資本論』も、形而上学的社会学者にとっては、もちろんふさわしくない労作である。彼は、社会とはなにか、というような先天的な議論の無益なことに気づかず、そのような方法は研究と説明をあたえず、社会という概念に、イギリスの小商人のブルジョア的観念か、ロシアの民主主義者の小市民的な社会主義的理想かを、あたえるにすぎないこと——そしてそれ以上のなにものでもないことを、理解していないのである。それだからこそ、こういう歴史哲学的理論はすべて、発生してはしゃぼん玉のように破裂してしまったのであって、それらはせいぜいその当時の社会観念や社会関係の徴候にすぎず、たとえ一つの社会関係にしても、なにか現実的な（「人間の本性に合致する」ようなものでなく）社会関係にたいする人間の理解を、髪の毛一筋ほども前進させなかったのである。この点でマルクスのなしとげた巨大な前進は、まさに、彼が社会および進歩一般にかんするこういう議論をすべてすてて、そのかわりに一つの社会と一つの進歩の——資本主義社会と資本主義的進歩の——科学的な分析をあたえたことにあった。そして、ミハイロフスキー氏は、マルクスが終りからでなく初めから始め、終局の結論からではなく事実の分析から始め、また、これらの社会関係一般がなにから成りたっているかについての一般理論からではなく、歴史的に特定の、特殊の社会関係の研究から始めたといって、マルクスを非難しているのである！　そして同氏はたずねる——「これに相応する労作はいったいどこにあるのか？」と。おお、賢明な主観主義社会学者よ!!

わが主観主義哲学者が、唯物論はどういう著作のなかで基礎づけられているか、という問題について当惑を感じた

だけであったなら、それはまだ大したことではない。だが彼は、唯物史観の基礎づけばかりでなく、その叙述さえどこにも見いださなかったにもかかわらず（おそらくは、見いださなかったからこそなのだが）、この学説がかつて一度も言明したことのない主張を、この学説になすりつけはじめるのである。彼は、マルクスはまったく新しい歴史観を宣言したという箇所をブロスから引用して、まったくむぞうさに議論をすすめ、あたかもこの理論が、「人類にその過去を説明し」、「人類の過去の全体（原文のまま!?）」を説明する、等々と主張しているかのように論じている。しかし、これはまったくの大うそである！　この理論は、資本主義的社会組織だけを説明すると主張しているだけであって、他の社会組織の説明をするとは主張していない。もし一つの社会構成体の分析と説明に唯物論を適用したことがあれほどもすばらしい成果を生んだとすれば、歴史における唯物論は、もはや仮説ではなく、科学的に検証ずみの理論となっているのは、まったく当然である。また、このような方法がその他の社会構成体にもおよぼされなければならないことも——たとえ、その他の社会構成体には、まだ特別の事実的研究と精密な分析がくわえられていないにしても——、まったく当然である。それは、ちょうど、十分な量の事実について証明された種の遷変説の思想が、たとえ動植物の個々の種についてはまだその遷変の事実を精密には確定できていないでも、生物学の全分野におよぼされるのと、まったく同様である。そして遷変説は、けっして種の形成の「全」歴史を説明すると主張しているのではなく、ただ、この説明の方法を科学的な水準に高めるものであると主張しているだけであるが、まさにそれと同じように、歴史における唯物論も、あらゆることを説明すると主張したことはかつてなく、ただ、歴史を説明するための——マルクス（『資本論』）の表現によれば——「唯一の科学的な」方法を示すと主張したにすぎない[三]。これによってわれわれは、ミハイロフスキー氏が次のように行動したとき、彼がいかに才気あり、まじめで、礼節にかなった論戦方法を用いているかを、判断することができる。すなわち、彼は、まずはじめに、歴史における唯物論に、「あらゆることを説明し」、「歴史のあらゆる錠前をあける鍵」を見いだすというばかげた主張（もちろん[三]、この主張は、ミハイロフスキーの論文にかんする『手紙』のなかで、マルクスが即座に、ひどく辛辣にしりぞけたものであるが）をなすりつけて、マルクスを曲げて伝える。つぎに、自分自身で創作したこの主張にたいして顔をしかめる。そして最後に、唯物論者が理解しているような経済学は「これからはじめてつくりだされなければならず」、「われわれが経済学とし

てもっているものは、すべて」資本主義社会の歴史に「限られている」というエンゲルスの意見を正確に――正確にというのは、こんどは言いかえではなくて、引用がなされているからである――引用して、次のように結論する。「このことばによって経済的唯物論の作用範囲はいちじるしくせばめられている」！　このような手品が気づかれずにすむと期待するには、人はいかに際限のないおめでたさとうぬぼれを持たなければならないことか！　まずはじめにマルクスを曲げて伝え、ついで自分のつくったうそにむかって顔をしかめ、そのあとで正確な思想を引用する、――そして、いまやあつかましくも公言する。この思想によって経済的唯物論の作用範囲はせばめられている！

ミハイロフスキー氏のこの渋面がどんな種類でどんな性質のものであるかは、次の例から明らかである。「マルクスはどこでもそれらを」、すなわち経済的唯物理論の根拠を、「基礎づけていない」、とミハイロフスキー氏は言う。「なるほど、マルクスはエンゲルスといっしょに、歴史哲学的および哲学史的性格の著作を書こうと思いたち、そして実際に（一八四五―一八四六年）書きさえした。だがそれはついに出版されなかった[三]。エンゲルスはこう言っている。この著作の『できあがった部分は唯物史観の説明から成っているが、この説明は、経済史についてのわれわれのそのころの知識がなおいかに不完全なものであったかを、証明するだけである』[三]。このように――とミハイロフスキー氏は結論する。――『科学的社会主義』と経済的唯物理論との基本的諸点は、著者のひとりが自分で認めているところによっても、そういう仕事のために必要な知識が著者たちに不十分であったところに発見され、つづいてすぐあとで『宣言』のなかで叙述されたのである。」

これはまたなんと愛すべき批判ではないか！　エンゲルスが言っているのは、自分たちは経済「史」にかんする知識に乏しかったから、自分たちは「一般的な」歴史哲学的性格の著作を出版しなかった、ということである。ミハイロフスキー氏はこれを曲解して、彼らは、「科学的社会主義の基本的諸点」の完成、すなわち、すでに『宣言』のなかであたえられているブルジョア制度の科学的批判のような、「そういう仕事のための」知識に乏しかったのだ、としている。二つに一つである。すなわち、ミハイロフスキー氏は、全歴史哲学を包摂しようという試みと、ブルジョア制度を科学的に説明しようという試みとのあいだの違いを理解することができないのか、それとも、同氏は、経済学の批判のための知識がマルクスとエンゲルスには不十分であったと考えているのか。後者だとすれば、同氏はまそで無情であって、この不十分ということについての彼自身

の判断や、彼自身の修正や補足について、われわれに知らせてくれない。マルクスとエンゲルスが歴史哲学上の労作を出版しないで、一つの社会組織の科学的分析に全力を集中するように決意したことは、学問的良心が非常に高いことを示すだけである。ミハイロフスキー氏が、マルクスとエンゲルスは自分たちの見解をつくりあげるための知識が不十分なことを自覚していながら、その見解を叙述したのだという、ちょっとした補足をして、それにむかって顔をしかめようと決意したことは、才気をも礼節感をも証明しない論戦方法を示すだけである。

もう一つ見本をあげよう。ミハイロフスキー氏は言っている。「歴史理論としての経済的唯物論を基礎づけるためには、マルクスの alter ego 〔分身〕――エンゲルス――のほうが、より多くのことをした。彼には歴史にかんする特別の労作『家族、私有財産および国家の起原。モルガンの研究に関連して(im Anschluss)』がある。この《Anschluss》〔関連〕ということばはきわめて注目に値いする。アメリカ人モルガンの著書は、マルクスとエンゲルスが経済的唯物論の基礎を宣言してから多年たってから、経済的唯物論とはまったく無関係に世に現われた。」そこで、「経済的唯物論者たち」はこの著書に「付帯し」、そのさい、有史以前には階級闘争がなかったので、彼らは唯物史観の公式に次のような「訂正」をくわえた。すなわち、物質的価値の生産とならんで決定的な要因であるのは、人間そのものの生産、すなわち子供の生産であり、これは、労働がその生産性の点でまだあまりにも未発達であった原始時代には主要な役割を演じる、というのである。

エンゲルスはこう言っている。「非常に重要でありながらこれまで解きえなかった、ギリシア、ローマ、ドイツの最古代の歴史の謎をわれわれに解きあかしてくれる鍵を、北アメリカのインディアンの血縁団体のなかに発見したことは、モルガンの偉大な功績である。（二九）」

この点についてミハイロフスキー氏は次のように言っている。「四〇年代の終りに、まったく新しい、唯物論的な、真に科学的な歴史観、ダーウィンの理論が近代自然科学にたいしておこなったと同じことを歴史科学にたいしておこなった歴史観は、このようにして発見され宣言された。」しかしこの歴史観は――とミハイロフスキー氏はつづいてもう一度くりかえして言う――、科学的に基礎づけられたことはかつてなかった。「それは、事実資料の広大で多様な分野で検証されなかったばかりでなく（『資本論』は「ふさわしくない」労作である。そこにあるのは、事実と綿密な研究だけである！）、せめて他の歴史哲学的体系の批判と放逐ということによって十分に理由づけられることさえ

なかった。」エンゲルスの著書『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』〔『反デューリング論』〕は、「ことのついでに述べられた才気ある試みにすぎない。」だからミハイロフスキー氏は、この「才気ある試み」が、「ユートピアからはじめる」社会学の空虚さをきわめて才気ふかく示しているにもかかわらず、また、『ルースコエ・ボガートストヴォ』の政論家諸氏があのように熱心にもちだしている、政治＝法律制度が経済制度を規定するとなす「暴力論」にたいして、詳細な批判がこの著作のなかであたえられているにもかかわらず、この著作のなかでふれられている数多くの本質的な問題をまったく回避してもさしつかえない、と考えるのである。実際、この著作について意味をなさないことばをいくつか投げかけることは、この著作のなかで唯物論的に解決されている問題のせめて一つでもを真剣に検討するよりは、はるかに容易である。そのうえ、これには危険がない。なぜなら、検閲当局は、おそらく、本書の翻訳をけっして通過させないだろうし、そしてミハイロフスキー氏は、彼の主観主義哲学に危険をおよぼすことなしに、本書を才気ある書とよぶことができるからである。

　もっと特徴的でもっと教訓的なのは（人間は、自分の思想を隠蔽するか、あるいは空虚なものに思想の形態を付与するために言葉をあたえられている、ということの例証として）、マルクスの『資本論』にかんする批評である。「『資本論』のなかには歴史的内容の輝かしいページがある。しかし」（これは注目すべき「しかし」である！　これは、むしろ「しかし」でさえなく、ロシア語に翻訳すると「耳は額よりうえには伸びない」という意味になるあの有名な《mais》である）[38]「これらのページは、すでに本書の任務そのものからして、一つの特定の歴史的時代にあてられており、かならずしも経済的唯物論の基本的諸命題を確証しているというものではなく、むしろ、たんに一定群の歴史現象の経済的側面にふれているにすぎない」。言いかえればこうなる。『資本論』は——まさに資本主義社会の研究にのみささげられているものであるが——、資本主義社会とその上部構造の唯物論的分析をあたえている。「しかし」、ミハイロフスキー氏はこの分析を回避することを選ぶのである。ごらんのとおり、『資本論』ではただ「一つの」時代しか問題になっていない。ところが、彼ミハイロフスキー氏は、あらゆる時代を包含したいと思い、しかもそのさい、どの一時代についても特別に述べないようなやり方で、そうしたく思うのである。もちろん、こういう目的を達成するためには、——すなわち、実質上どの一時代にもふれないであらゆる時代を包含するためには、一つの方法しか

ない。すなわち、ありふれた文句や、「輝かしい」が空虚な文句を吐くという方法である。そして、空文句で言いのがれる技術では、ミハイロフスキー氏におよぶものはない。彼マルクスは「かならずしも経済的唯物論の基本的諸命題を確証しているというものではなく、むしろ、たんに一定群の歴史現象の経済的側面にふれているにすぎない」ということを根拠に、マルクスの研究の本質について(別個に)ふれる価値はない、ということになるのである。なんという深遠さだろう!——「確証しているのではなく」て「たんに触れているにすぎない」!—— まったく、なんと簡単にすべての問題を空文句でぬりつぶすことができることだろう! たとえば、マルクスが、市民の同権や自由な契約、等々の、法治国家の諸原則の根底に、どのように商品生産者たちの関係が横たわっているかということを、何度も示しているとしても、それがいったいなんであろうか? 彼はこれによって唯物論を確証しているのか、それとも「たんに」ふれているのにすぎないのか? わが哲学者は、そのもちまえの謙譲さから、本質にふれた回答をさしひかえ、そして、はなやかにしゃべりたてながらなにごともかたらないという自分の「才気ある試み」から直接に結論を引きだすのである。

この結論は次のとおりである。「世界史を解明すると主張した理論が宣言されてから四〇年たったのちにも、この理論にとって、古代ギリシア、ローマおよびゲルマンの歴史が依然として未解決の謎であったことは、ふしぎではない。この謎を解く鍵は、第一に、経済的唯物論のまったくの局外者で、この理論についてなにも知らなかった人によって、第二に、経済的でない要因の助けによって、あたえられた。経済的唯物論の基本的公式との関連をことばのうえだけでも保たせるためにエンゲルスがかじりついている『人間そのものの生産』、すなわち子供の生産という術語は、いくぶんこっけいな印象をおこさせる。しかし彼は、人類の生活が幾世紀ものあいだこの公式によらずに形成されてきたことを、認めざるをえないのである」。実際、ミハイロフスキー氏よ、貴下ははなはだ「やすやすと」論争しておられる! この理論は、歴史を「解明」するためには、その基礎を、イデオロギー的社会関係のなかにではなく、物質的社会関係のなかに求めなければならない、ということにあった。事実的資料が不十分なために、ヨーロッパの最古代史のいくつかの最も重要な現象、たとえば氏族組織の分析にこの方法を適用することができず、そのため氏族組織は謎のままに残されていた。* ところがアメリカでは、モルガンの収集した豊富な資料が、氏族組織の本質を分析する可能性を彼にあたえている。そして彼は、氏族組織の

説明はイデオロギー的関係（たとえば、法的関係とか宗教的関係）のなかにではなく、物質的関係のなかに求められなければならない、という結論をくだしたのである。この事実が唯物論的方法の輝かしい確証をあたえるものであり、――そしてそれ以外のなにものでもないことは、明白である。またミハイロフスキー氏が、第一に、最もむずかしい歴史上の謎を解く鍵を見いだしたのが、経済的唯物理論の「まったくの局外者」であったとしてこの学説を非難するとき、人間というものが、自分にとってつごうのよい事柄と自分をひどくやっつける事柄とを、どこまで区別しえなくなるものかに、ただただ驚かされるばかりである。第二に、子供の生産は経済的要因ではないと、わが哲学者は論じる。しかしマルクスとエンゲルスはいつもかならず経済的唯物論について語っていたということを、貴下はマルクスあるいはエンゲルスのどこで読まれたのか？　彼らは自分たちの世界観を特徴づけるにあたって、それをたんに唯物論とよんだ。彼らの基本思想（これは、さきに引用したマルクスのことばのなかにでもまったく明確に表現されているが）は、社会関係は物質的関係とイデオロギー的関係とに分けられる、ということにあった。この後者は前者の上部構造にすぎず、そして前者は、自己の生存の維持をめざす人間の活動の（結果）形態として、人間の意志や意識とは別個に形成されるのである。マルクスは前掲の引用文のなかで言っている、――政治的＝法律的諸形態の説明は、「物質的な生活関係」のなかに求められなければならない、と。なんと、ミハイロフスキー氏は、子供の生産での関係がイデオロギー的関係に属するとでも考えているのではないだろうか？　この点についてのミハイロフスキー氏の説明はきわめて特徴的だから、それについてはすこし詳しく論じる価値がある。彼はこう言っている。「われわれが『子供の生産』と経済的唯物論とのあいだに、せめてことばのうえの関連だけでもつけようと努力して、子供の生産にどんなにくふうをこらしてみても、また、子供の生産が社会生活の諸現象の複雑な網のなかで、経済現象をもふくむ他の諸現象とどんなに交錯しているにしても、それはそれに特有な生理的および心理的根源をもっている。」（子供の生産が生理的根源をもっているとは、ミハイロフスキー氏よ、貴下は乳呑児にでもむかって話しているのか!?　貴下はなにをごまかそうというのか？）「そして、このことは、経済的唯物論の理論家たちが、歴史ばかりでなく、心理にも決着をつけることができなかったことを、われわれに思いおこさせる。血族的結合が文明諸国の歴史のなかではその意義を失ったことは、なんら疑いがない。だが直接の性的ならびに家族的結合については、そのような確信を

もってそう言うことはとてもできない。もちろん、これらの結合は、複雑化してゆく生活一般の圧迫のもとに大きな変化をこうむったが、しかし、法律関係ばかりでなく経済関係そのものでさえ、性的および家族的関係の『上部構造』をなすということは、ある程度の弁証法的巧妙さがあれば証明できるであろう。われわれはこういう仕事に従事することはないが、それでもやはり、相続制度のことだけでも指摘しておこう。」

＊ ミハイロフスキー氏はここでも顔をしかめる機会を見のがさない、――これはどうしたことだ、科学的歴史観だというのに、古代史が謎だと！　ミハイロフスキー氏よ、貴下はどんな教科書からでも、氏族組織の問題が、その説明に数多くの理論を生じさせた、きわめて困難な問題の一つであることを知りうるのである。

とうとうわが哲学者は、空虚な文句*の分野から、検証することができ、事の核心をそうたやすく「ごまかす」ことをゆるさない、確定的な事実にまで、うまく到達することができた。では、相続制度が性的および家族的関係の上部構造であることを、わがマルクス批判家がどのように証明するかを見よう。ミハイロフスキー氏はこう論じる。「相続されるのは経済的生産の生産物である（『経済的生産の生産物』!!　これはなんと学問のある！　なんと響きのよい！　そしてなんと優美な用語だろう！）。そして相続制度そのものは、ある程度まで経済的競争という事実によって制約される。だが、第一に、物質的でない財も相続されるのうちに現われる」。こうして、子供の養育が相続制度のなかにはいってくる！　たとえば、ロシアの民法のなかには次のような条項がある。「両親は家庭での養育によって彼ら（子供たち）の品性を陶冶し、政府の意向を助成することに努めなければならない」。わが哲学者が相続制度と名づけているのはこれではないだろうか？――「第二に、――もっぱら経済の分野にとどまってさえ――相続制度は、相続によって譲渡されうる生産の生産物なしには考えられないとしても、同様にそれは『子供の生産』の生産物なしにも――この生産物、ならびに直接それに付帯する複雑で緊張した心理なしにも――考えられない。」（いや、用語に注意されたい。複雑な心理が子供の生産の生産物に「付帯する」！　これはまったくすばらしい！）このように、相続制度が家族的および性的関係の上部構造であるのは、相続が子供の生産なしには考えられないからだ！　そうだ、これこそほんとうのアメリカ発見だ！　いままでは、食物をとる必要によって所有制度を説明できないのと同様に、子供の生産によって相続制度を説明することはできないと、

すべての人が考えていた。いままではだれかが、もしたとえばロシアの知行制度の繁栄期には土地は相続によって移転できなかったとすれば（土地は条件付所有とみなされていたので）、その理由は当時の社会組織の特殊性のなかに求められなければならないと、すべての人が考えていた。きっとミハイロフスキー氏は、当時の領主の子供の生産の生産物に付帯する心理が、複雑さが足りないという特色をもっていたということで、問題は簡単に説明される、と考えているのであろう。

* 唯物論者を、彼らは歴史に決着をつけなかったと言って非難しながら、しかし自分では、種々の歴史上の問題にたいして唯物論者があたえた数多くの唯物論的説明のうちの文字どおりただの一つも検討しようと試みなかったというようなやり方、あるいは、証明することはできるのだがその仕事には従事しないであろう、と語るやり方、——このようなやり方を、実際にこれ以外になんと名づけるべきだろう？[三]

われわれは有名な格言を言いかえて、次のように言うことができる。——「人民の友」を一皮むけば、ブルジョアが出てくる、と。実際、相続制度は子供の養育や子供の生産の心理等々と関連がある、というミハイロフスキー氏の以上の議論は、相続制度が子供の養育と同様に永久のものであり、必然的であり、神聖であるということ以外に、どのような意味を持ちうるだろうか！　なるほど、ミハイロフスキー氏は逃げ道を残そうとして、「相続制度はある程度まで経済的競争という事実によって制約される」、と言明している。しかしこのことは、問題にたいして確答を避けようとするたくらみ、しかも、無益な手段によるたくらみ以外のなにものでもない。「ある程度」といっても、まさにどの程度まで相続は競争に依存するかについて一言も述べていないのに、また、競争と相続制度とのあいだのこの関連はそもそもなにによって説明されるかについて全然明らかにされていないのに、われわれはどうしてこの意見を参考にすることができようか？　実際には、相続制度はすでに私的所有を前提しており、そしてこの後者は交換の出現とともにはじめて発生する。その基礎には、すでに発生しつつある社会的労働の専門化と市場における生産物の譲渡とがある。たとえば、インディアンの原始共同体の全成員が、彼らに必要なあらゆる生産物を共同でつくっていたあいだは、私的所有もまたありえなかった。ところが、共同体のなかに分業が侵入し、その成員が各個になんらかの一生産物の生産に従事するようになり、それを市場で売るようになったとき、そのときに商品生産者のこの物質的孤立性の表現として、私的所有の制度が現われたのである。私的所有も相続も、個別化した小さな家族（単婚家族）がすでに形成されて、交換が発展しはじめたような社会制度

は、彼が証明しようと欲したのとまさに逆のことを証明している。のカテゴリーである。ミハイロフスキー氏のあげている例

ミハイロフスキー氏にはなおもう一つの事実的な指摘がある。そしてこれがまた一種の逸品なのである！　彼はひきつづき唯物論を訂正して言う。「血族的結合についていえば、それは、文明諸国民の歴史では、生産形態の影響の光のもとで、一部分は実際に色あせたが（またもや逃げ口上だ。ただこんどはもっと見えすいている。いったいどんな生産形態なのか？　空虚な文句だ！）、しかし一部分は、それ自身の継続であり普遍化である民族的結合のうちに解消していった」。だから、民族的結合は血族的結合の継続であり、普遍化である！　ミハイロフスキー氏は明らかに、社会史にかんする彼の観念を、中学生に教えるおとぎ話から借りてきている。この教科書ふうの教義は言う、――社会組織の歴史は、まずはじめにあらゆる社会の細胞たる家族があり、*ついで家族は種族に成長し、種族は国家に成長したということにある、と。ミハイロフスキー氏がこの子供じみたばかげたことをもったいぶって繰りかえしているのは、――ほかのことはすべてさておくとしても――彼がロシア史の歩みについてさえほとんどなにも知らないことを示すものにすぎない。古代ルーシにおける氏族的生活について はかたることができるにしても、すでに中世には、すなわちモスクワ・ツァーリ国家の時代には、疑いもなく、これらの血族的結合はもはや存在しなかった。すなわち、国家はけっして血縁団体を基礎としてではなく、地縁団体を基礎として建てられていたのである。領主と修道院はさまざまな地方から農民を受けいれていた。こうして成立した共同体は、純粋に地域的な団体であった。しかし本来の意味での民族的結合は、当時は存在するとはとても言えなかった。国家は個々の「領地」に、一部は公国にさえ分解しており、これらの公国は従来の自治の生きいきとした痕跡や行政上の特殊性を保存し、ときには自国の特別の軍隊や（地方の大貴族は自分の軍勢をひきつれて出陣した）、特別の関税境界などを保存していた。ロシア史の新しい時代（ほぼ一七世紀以降）だけが、実際に、そういう地方や領地や公国がすべて一つの全体に事実上融合したことを、特色としている。この融合を引きおこしたのは――いとも尊敬すべきミハイロフスキー氏よ――血族的結合でもなければ、さらにその継続と普遍化でさえない。それを引きおこしたのは、諸地方のあいだの交換の発展であり、商品流通の漸次の増大であり、小さな諸地方市場の一つの全ロシア的市場への集中である。この過程の指導者であり主人公であったのは商業資本家だったから、これらの民族的結合

の創出はブルジョア的結合の創出にほかならなかったのである。ミハイロフスキー氏は彼の二つの事実的指摘によってわれとわが身を打っただけで、ブルジョア的低俗さの見本以外のなにものをもわれわれにあたえなかった。――低俗さというのは、なぜなら、相続制度を子供の生産とその心理とによって説明し、民族を血族的結合によって説明しているからである。「ブルジョア的」というのは、なぜなら、一つの歴史的に特定の社会構成体（交換に基礎をおく）のカテゴリーと上部構造を、子供の養育や「直接に」性的な結合と同じような、一般的で永遠のカテゴリーと思いちがえているからである。

＊　これは純粋にブルジョア的な観念である。細分された小家族が支配的となったのは、やっとブルジョア制度のもとにおいてである。そのような家族は有史以前の時代にはまったく存在しなかった。現代の制度の特徴をあらゆる時代とあらゆる国民のうえにひきうつすことほど、ブルジョアの特徴をよく示すものはない。

ここでいちじるしく特徴的なことは、わが主観主義哲学者が空語から事実にかんする具体的指摘へうつろうとこころみたとたんに、水たまりにはまってしまったことである。そして彼はどうやら、自分がこのあまりきれいではない立場にいることをよく感づいている。彼は腰をおろして、身をととのえ、そして、あたりに泥をはねかける。たとえば、彼は、歴史は階級闘争のエピソードの系列であるという命題を反論しようと欲する。そこで、これは「極端論」であると、深遠ぶった様子で声明したのち、彼はこう述べる。「マルクスの創設した国際労働者協会[三]は、階級闘争を目的として組織されたものであったが、フランスとドイツの労働者が相互に殺しあい滅ぼしあうことを阻止しえなかった。」そしてこのことによって、唯物論は「民族的利己心や民族的憎悪心の悪霊」に決着をつけることができなかったことが証明される、と。このような主張は、商工業ブルジョアジーのきわめて現実的な利益がこの憎悪心の主要な根拠をなすこと、および、民族感情を自立的な要因として説くことは問題の本質をぬりつぶすものにすぎないということについて、この批評家がまるでなにもわかっていないことを示している。とはいえ、わが哲学者が民族についてどんな深遠な観念をもっているかは、すでにわれわれが見たとおりである。ミハイロフスキー氏は、インタナショナルにたいしては純然たるブレーニン流の皮肉をもってのぞむよりほかに道を知らない。「マルクスは、なるほど崩壊はしたが、なお復活するはずの国際労働者協会の首領である」。もちろん、もし『ルースコエ・ボガートストヴォ』第二号に国内生活記録の筆者が小市民的な低俗さでぬたく

っているように、「公正な」交換制度をもって国際連帯の公正なものも不公正なものも、つねにブルジョアジーの支配を予想し内包するものであり、交換に基礎をおく経済組織を廃絶しないかぎり国際的衝突の停止は不可能であることを理解しないのなら、インタナショナルにたいして冷笑的態度しかとれないのも当然である。またそれならば、民族的憎悪心にたいする闘争手段としては、おのおのの国で抑圧者の階級との闘争のために被抑圧者の階級を組織し結束させ、国際資本との闘争のためにこのような国民的な労働者組織を一つの国際的労働者軍に結合すること以外には他の手段はないという単純な真理を、ミハイロフスキー氏がけっして理解できないのも、当然である。労働者が相互に殺しあうことをインタナショナルが阻止しえなかったことについていえば、ミハイロフスキー氏はコミューン〔三〕の事件を思いだせば十分である。この事件は、戦争をおこなった支配階級にたいする、組織されたプロレタリアートの真実の態度を示したものである。

nec plus ultra〔極限〕と考えるなら、またもし交換は、

ミハイロフスキー氏のこの論戦全体のなかでとくにけしからないのは、ほかならぬ彼のやり方である。もし彼がインタナショナルの戦術に不満なら、またもし彼がヨーロッパの労働者を組織している諸思想に賛成でないなら、すくなくともこれらの思想を率直に公然と批判して、より適切な戦術や、より正しい見解についで自分の考えを述べるべきであろう。ところが、はっきりした明白な反論はなにもなされていないではないか。そして空文句の大洪水のただなかに、あちこちに無意味な冷笑がばらまかれているだけである。これを汚泥と名づけないで、なんと名づけようか？　とくに、インタナショナルの思想と戦術を擁護することがロシアで合法的には許されていないという事情を考慮に入れるなら、なおさらそうではないか？　だがこれが、ロシアのマルクス主義者と論戦するさいのミハイロフスキー氏のやり方なのである。彼は、ロシアのマルクス主義者のあれこれの命題に直接の明確な批判をくわえるのに、これらの命題を誠実に正確に定式化する労をとることなく、自身の聞きつたえたマルクス主義的論証の断片にかじりついて、それを曲げて伝えるほうをえらぶのである。諸君は自身で次のことを判断してみたまえ。「マルクスは、自分こそが社会現象の歴史的必然性と合法則性という思想を発見したのだと考えるには、あまりに賢明であり、あまりに学識があった……。（マルクス主義の階段の）*低い段にいる人々は、このこと」（すなわち、「歴史的必然性という考えは、マルクスが発明あるいは発見した新説ではなくて、とうの昔から確定されていた真理である」こと）「を知っ

ていないか、あるいは、すくなくとも、この真理を確定するために数世紀にわたって費やされた知力とエネルギーについて、漠然とした概念しかもっていない。」

＊この無意味な術語については、次の点を注意しておく必要がある。すなわちミハイロフスキー氏は、まず第一に、マルクス（あまりに賢明であり、あまりに学識があるので、わが批判家は彼のあれこれの命題を率直かつ公然とは批判できない）を特別にとりだし、次にエンゲルス（「それほど独創的な頭脳の持ち主ではない」）をおき、その次に、カウツキーのような、多少とも一人立ちの人物およびその他のマルクス主義者をおくのである。いったい、このような分類がどんな重大な意義をもちうるのか？　もしこの批評家がマルクスの通俗解説者たちに満足しないのなら、彼がマルクスによってこれらの人々を訂正するのを、だれが妨げようか？　この批評家はそういうことはなにもやっていない。明らかに、彼はしゃれたことをしようと思ったのだが、月なみにおちいってしまったのだ。

もちろん、このような言明は、マルクス主義についてははじめて聞くような人々には、実際に感銘をあたえることができる。そして、このような人々にたいしては、この批判家の目的、すなわち、ゆがめ、顔をしかめ、そして「征服する」（『ルースコエ・ボガートストヴォ』の同人たちは、ミハイロフスキー氏の諸論文についてこのような評判をたてているという話だが）という目的は、たやすく達成することができる。しかし、たとえすこしでもマルクスについて知っている人ならだれでも、このような方法がまったくのいつわりであり、ごまかしであることに、すぐ気がつくであろう。人はマルクスに賛成しないでもかまわない。しかし、マルクスがこれまでの社会主義者とくらべて新しいものである自身の見解を最も完全な明確さで定式化したことは、否定できない。この新しいものとは、これまでの社会主義者が、自己の見解を基礎づけるために、現制度のもとでの大衆の抑圧を示し、各人が自分でつくったものを受けとるような体制の優越性を示し、この理想的体制が「人間の本性」とか理性的＝道徳的生活の概念、等々に適合していることを示せば十分である、と考えていたのにたいして、マルクスは、このような社会主義で満足することはできない、と考えたことにあった。彼は、現代の体制を特徴づけ、それを評価し、非難するだけにとどまらないで、この体制を科学的に説明し、ヨーロッパおよびヨーロッパ以外のさまざまな国家でいろいろに異なっているこの近代的体制を、資本主義的社会構成体という共通の基礎に還元し、この社会構成体の機能と発展との諸法則に客観的分析をくわえたのである（彼はこの体制のもとでの搾取の必然性を示した）。まったく同じように、彼は、社会主義体制だけ

が人間の本性に合致するという主張――偉大な空想的社会主義者と、そのあわれむべき亜流たる主観主義社会学者たちはこう言ったのだが――に満足できるとは考えなかった。彼は、資本主義体制の同じく客観的な分析によって、それの社会主義体制への転化の必然性を証明したのである。(彼がこのことをまさにどのようにして証明したか、また、なおあとで立ちかえることにしよう。) われわれは問題は、ミハイロフスキー氏がこれにどう反論したかという問題にルクス主義者が必然性ということを引合いに出すのをしばしば見うけるが、その根源はまさにここにある。ミハイロフスキー氏が問題のなかにもちこんだ歪曲は、明白である。彼は、理論の全事実的内容、その全核心をはぶいてしまって、まるでこの理論全体が「必然性」の一語につきるかのように、(「複雑な実際問題では、必然性だけを拠りどころにすることはできない」)、また、この理論の証明は歴史的必然性がこう要求するのだという点だけにあるかのように、問題を見せかけている。言いかえれば、彼は学説の内容については口をつぐんで、その名目だけにしがみつき、そしていまやふたたび、「たんなる平板な一小圏」――マルクスの学説をこういうものに変形させようと骨をおったのは氏自身なのだが――にむかって、顔をしかめはじめるのである。もちろん、われわれはこのような渋面つくりのあとを追うことはしないであろう。というのは、このことについてはわれわれはすでに十分に承知しているからである。氏はブレーニン氏(『ノーヴォエ・ヴレーミャ』[23]紙上で、ブレーニン氏がミハイロフスキー氏の頭をなでたのは、理由のないことではない)を楽しませ満足させるために、とんぼがえりでもするがよい。マルクスにおじぎをしたあとで、こっそりと彼に遠吠えするがよい。いわく、「空想的社会主義者や観念論者とのマルクスの論戦は、それでなくてさえ」、つまり、マルクス主義者がこの論戦の論拠をくりかえすことがなくても、「一面的である」。このような攻撃は、どうしても犬の遠吠えというほかはない。なぜなら、この論戦にたいする事実的な、明確な、検証できるような反論を、彼は文字どおりなにひとつあげていないからである。だから――われわれが、ロシアの社会主義の諸問題を解決するのにこの論戦がきわめて重要であると考えて、この題目についてどれほどすすんで論議したく思っても――とても犬の遠吠えに答えるわけにはいかず、ただ肩をすくめてこう言いうるだけである。

おお狆よ! 象に吠えつくとは、たいした力だ!

これにつづく歴史的必然性にかんするミハイロフスキー氏の考察は、興味ないものではない。なぜなら、これは、「われらの著名な社会学者」(これは、わが「文化的社会」

の自由主義的代表者たちのあいだで、ミハイロフスキー氏がヴェ・ヴェ・氏とならんで享有している肩書であるが）の思想の本当の中味を、部分的にでもわれわれに示してくれるからである。彼は、「歴史的必然性の思想と個人的行動の意義とのあいだの衝突」について語っている。社会活動家たちが、実は自分が「行動させられているもの」、「神秘な地下から歴史的必然性の内在的法則によってひっぱられているあやつり人形」であるのに、自分を行為者（活動家）であると考えるのはまちがっている。この歴史的必然性の思想からは、このような結論が出てくる。だからこそこの思想は「不毛」で「散漫」なものとよばれるのである。ミハイロフスキー氏がこのようなばか話――あやつり人形、等々――のいっさいをどこから持ってきたか、おそらくどの読者にもわかるとまではゆかないであろう。実をいえば、これは、この主観主義哲学者のお気に入りの十八番の一つ――すなわち、決定論と道徳とのあいだの、また歴史的必然性と個人の意義とのあいだの、衝突という思想なのである。彼は、この衝突を道徳と個人の役割とに有利なように解決しようとして、このことについて山なす紙を書きちらし、感傷的で小市民的なばか話を際限なくしゃべりたてたのだ。だが実際には、ここにはなんの衝突もない。この衝突は、彼があれほども愛好する小市民的道徳の土台を決定論が取り去ってしまうのを恐れた（これには理由がなくもないのだが）、ミハイロフスキー氏が考えだしたものである。人間の行為の必然性を確定し、意志の自由にかんするくだらない作り話を排斥する決定論の思想は、理性をも、人間の良心をも、人間の活動の評価をも、いささかも抹殺するものではない。まさにその反対である。決定論的見解のもとではじめて厳密な正しい評価が可能となり、なんでもかんでも自由意志のせいに帰着させることがなくなる。同様に、歴史的必然性の概念も、歴史における個人の役割をいささかもそこなうものではない。全歴史は、疑いもなく行為者であるところの諸個人の活動から成りたっている。個人の社会的活動を評価するさいに生じる現実的問題は、どのような条件のもとでこの活動に成功が保障されるか、また、この活動が相対立する諸行為の大海のうちに沈んで見えなくなる孤立的な行為にとどまらないための保障はどこにあるか、ということである。社会民主主義者やその他のロシアの社会主義者がいろいろに解決している問題、すなわち、社会主義体制の実現を目ざす活動が重大な成果をおさめるには、それはどのようにして大衆をひきつけなければならないかという問題も、まさにこれなのである。明らかに、この問題の解決は、ロシアにおける社会勢力の配置や、ロシアの現実を形成している階級闘争やにか

んする考え方に、じかに、直接に依存している。ところが、ミハイロフスキー氏はまたもや問題のまわりをまわるだけで、問題を正確に提起してそれになんらかの解決をあたえようという試みすらしていない。周知のように、この問題の社会民主主義的解決は、ロシアの経済制度はブルジョア社会であり、このブルジョア社会からの活路としては、ブルジョア体制の本質そのものから必然的に生じるただ一つの活路、すなわち、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争しかありえない、という見解に基礎をおいている。まじめな批判なら、明らかに、わが国の制度はブルジョア制度であるという見解か、そうでなければ、この制度とその発展法則との本質にかんする考えかの、どちらかにたいして向けられるべきであろう。ところが、ミハイロフスキー氏は、これらの重要な問題にふれようとは思いもしない。彼は、必然性とはあまりにも一般的な括弧である、等々という無内容な空文句で言いのがれることを選ぶのである。さよう、ミハイロフスキー氏よ、もし貴下が、干しヴォーブラのように、まずはじめに中味をぬきとって、そのあとで残った皮をいじくりまわそうとするなら、いっさいの思想はあまりにも一般的な括弧となるだろう！　現代の真に重大な、焦眉の問題をおおっているこの皮の部分が、ミハイロフスキー氏のお好みの分野なのである。たとえば、彼は、とくに誇らしげに強調してこう言っている。「経済的唯物論は、英雄と群衆の問題を無視するか、あるいは、まちがって解明している」。ごらんのように、現代のロシアの現実は、まさにどのような諸階級の闘争から、またどのような基盤のうえに形成されているかという問題は、ミハイロフスキー氏にとっては、どうやらあまりにも一般的な問題なので、彼はそれを回避する。そのかわりに、英雄と群集のあいだに——この群集が、労働者であろうと、農民であろうと、工場主であろうと、地主であろうと、おかまいなく——どのような関係が存在するかという問題——このような問題が、彼にとってきわめて興味のある問題なのである。あるいは、これは実際に「興味ある」問題かもしれない。しかし、唯物論者が勤労階級の解放に直接関係のある諸問題の解決に全力をかたむけているといって彼らを非難するのは、俗物的科学の愛好者たることを意味する以外のなにものでもない。その唯物論「批判」（？）を終えるにあたって、ミハイロフスキー氏は、事実をまちがって呈示するもう一つの試みと、もう一つのすりかえをやっている。ミハイロフスキー氏は、『資本論』がギルド的(32)経済学者たちによって黙殺されたという、エンゲルスの意見の正しさに疑惑を表明して（この場合根拠としてあげられているのは、ドイツには大学はたくさんある、という奇妙

な理由なのだ！）、次のように言っている。「マルクスは、まさにこの読者層（労働者）をけっして眼中におかず、学者連中からなにかを期待していた」。まったくのまちがいである。マルクスは、科学のブルジョア的代表者たちからは公平と科学的批判とをどれほどわずかしか期待できないかということをはっきり理解しており、『資本論』第二版へのあとがきのなかで、このことについてまったく明確に言明している。彼はそこで次のように言っている。『資本論』が「ドイツの労働者階級の広い層のなかで急速に理解されたことは、私の仕事への最上の報酬である。経済的にブルジョア的立場にある人、ウィーンの工場主マイヤー氏は、独仏戦争中に公刊した小冊子のなかで、ドイツ人の世襲財産とみなされていたあの偉大な理論的感覚（der große theoretische Sinn）が、ドイツのいわゆる教養ある階級からはすっかり失われ、反対にドイツの労働者階級のうちに新たによみがえりつつあることを、適切に説明した」。[36]

すりかえというのは、またもや唯物論にかんするものであって、まったく第一回のひな型どおりに組みたてられている。「（唯物論の）理論は、かつて一度も科学的に基礎づけられ検証されたことがなかった」。これが提題である。証明――「エンゲルス、カウツキー、さらにその他若干の人々の著作の、歴史的内容の個々のすぐれたページ（ブロスの尊敬すべき労作におけるように）は、経済的唯物論というレッテルなしでもすむ。なぜなら（「なぜなら」に注意！）、この和音では経済の調べが優勢であるとはいえ、実際には（原文のまま！）それらのページのなかでは社会生活の総体が考慮に入れられているからである」。結論……「科学において、経済的唯物論は自己の正しさを証明しなかった。」

おなじみの手だ！　理論に根拠のないことを証明するために、ミハイロフスキー氏はまずはじめにその理論をゆがめて、社会生活の総体を考慮に入れていないというばかげた意図をこの理論になすりつけ――ところが、正反対で、唯物論者（マルクス主義者）は、社会生活の経済的側面だけでなく、そのあらゆる側面を分析しなければならないという問題を提起した最初の社会主義者なのだが、*――ついで、「実際には」唯物論者が社会生活の総体を経済によって「りっぱに」説明したことを（これは、明らかに、この筆者をうちやぶる事実である）確認する。そして最後に、唯物論は「自己の正しさを証明しなかった」という結論をくだすのである。だがそのかわりに、ミハイロフスキー氏よ、貴下のすりかえはみごとに自己の正しさを証明した！

＊　このことは、『資本論』や、従来の社会主義者とくらべて

の社会民主主義者の戦術のなかで、まったく明白に表明されている。マルクスは、経済的側面だけにとどまってはならないという要求を、率直に言明した。一八四三年に、マルクスは計画中の雑誌(三七)の綱領の要点を描いて、ルーゲにあてて次のように書いた。「ところで社会主義原理全体が……やはり一つの側面でしかない。われわれはもう一つの側面、すなわち人間の理論的存在にも、同様に考慮をはらわなければならない。つまり、宗教、科学等々をわれわれの批判の対象としなければならない。……宗教が人類の理論的闘争の目次であるのと同様に、政治的国家は人間の実践的闘争の目次である。政治的国家は、このようにして、自己の形態のわく内で、sub specie rei publicae〔国家の種の一つとして〕」(政治的視角から)「いっさいの社会的な闘争、欲求、真理を表現するのである。だから、最も特殊な政治問題――身分代表制度と代議制度との違いというような――を批判の対象としたところで、けっして hauteur des principes〔原理の水準〕をおとしめることにはならない。なぜなら、この問題は、人間の支配と私的所有の支配との違いをただ政治的な仕方で表現しているにすぎないからである。だから批評家は、これらの政治問題(頑迷な社会主義者たちの意見によればとるに足りないものであるが)に立ちいってよいばかりでなく、立ちいらなければならないのである。(三八)」

以上が、唯物論を「論破」するためにミハイロフスキー氏が持ちだしていることのすべてである。くりかえして言うが、そこにはどんな批判もなく、あるのはただ空虚な思いあがったおしゃべりだけである。生産関係がその他の諸関係の基礎にあるという見解にたいして、ミハイロフスキー氏はどんな反論をしたか? マルクスが唯物論的方法によって仕上げた社会構成体という概念、この構成体の自然史的発展過程という概念の正しさを、同氏はなにによって論破したか? せめて氏の名ざした著作家たちのあたえた、さまざまな歴史上の問題の唯物論的説明のまちがいなりとも、氏はどのようにして証明したか?――だれにでもいいから、このような質問をしてみるなら、だれでも、同氏はどのようにも反論せず、なにによっても論破せず、なんのまちがいも指摘しなかった、と答えざるをえないであろう。氏は、空文句で問題の核心をぬりかくそうとつとめて、問題のまわりをうろついたにすぎず、そしてことのついでにさまざまなくだらない逃げ口上を編みだしただけである。

このような批評家が、『ルースコエ・ボガートストヴォ』の第二号でもひきつづきマルクス主義を反論しても、彼からなにかしらまじめなことは期待しがたい。異なるところは、すりかえをする彼の発明心がすでに涸れつきて、他人のものを利用しはじめていることだけである。

ミハイロフスキー氏は手はじめに、社会生活の「複雑性」について空談義する。ガルヴァーニの実験はヘーゲルにも「感銘をあたえた」から、ガルヴァーニズムでさえやは

り経済的唯物論と関連がある、と。驚くべき英知だ！　ミハイロフスキー氏を中国の皇帝と関連させることも、これと同じようにうまくできるだろう！　ここから結論されることは、世のなかにはばかげたことをしゃべって満足する人間もいる、ということ以外になにがあろう?!

ミハイロフスキー氏はつづける。「事物の歴史的歩みの本質は、一般にとらええないものである。経済的唯物論の学説は、見たところ二つの基柱に、すなわち、生産および交換の諸形態の規定的な意義の発見と、弁証法的過程の不可論駁性とに立脚しているけれども、この学説をもってしても、右の歩みの本質はなおとらえられない。」

このように、唯物論者は弁証法的過程の「不可論駁性」に立脚しているというのだ！　つまり、唯物論者は、その社会学理論をヘーゲルの三段階法(トリアード)のうえに基礎づけているわけだ。われわれは、ヘーゲルの弁証法のことでマルクス主義を非難する型どおりの非難に当面しているわけである。こういう非難は、すでにブルジョア的マルクス批判家によって、すっかり使い古されたように思われたのだが。これらの諸氏は、学説にたいして本質にふれたことはなにも反論できないので、マルクスの表現様式にしがみつき、この理論の起原を攻撃し、それによって理論の本質を掘りくずそうと考えたのである。ミハイロフスキー氏もむぞうさにこの種の方法に訴えている。彼にとって手がかりとなったのは、デューリングに反対したエンゲルスの著作のうちの一章(三〇)である。エンゲルスは、マルクスの弁証法を攻撃したデューリングを反論して、こう言っている。——マルクスは、ヘーゲルの三段階法によってなんでもかでも「証明」しようなどとは、かつて考えたことがなかった。マルクスは現実の過程を研究し考究したにすぎないのであって、彼は、理論が現実に一致することをもって理論の唯一の基準と認めたのである。また、もしこの場合に、なんらかの社会現象の発展がしばしばヘーゲルの図式、すなわち、措定——否定——否定の否定という図式にあてはまるとしても、そこにはなんの不思議もない。なぜなら、自然においてはこれはけっしてまれなことではないからである、と。そしてエンゲルスはさらに、自然史（穀粒の発展）および社会の分野——はじめに原始共産制があり、つぎに私的所有があり、そのあとに労働の資本主義的社会化がある、あるいは、はじめに素朴唯物論があり、つぎに観念論があり、そして、最後に科学的唯物論がある、等々というような——から実例をとってくる。エンゲルスの論証の重点が、唯物論者の任務は現実の歴史過程を正しく、かつ精密に描きだすことであって、弁証法を固執したり、三段階法の正しさを証明するような実例をえらびだしたりすることは、科学

的社会主義が成長してきた母胎であるヘーゲル主義の残存物、ヘーゲル主義の表現様式の残存物にほかならない、ということにあることは、だれにも明らかである。実際に、三段階法によってなにかを「証明しよう」とすることはばかげていること、また、だれもそういうことは考えもしなかったということが、ひとたび断定的に宣言されている以上、「弁証法的」過程の実例はどんな意義をもちうるだろうか？ それが学説の起原を指示したものであって、それ以上のものでないことは、明白ではないか？ ミハイロフスキー氏自身もこのことに感づいて、理論の起原のために理論が非難されることはない、と言っている。ところで、エンゲルスの議論のうちに理論の起原以上のなにかを見いだすためには、明らかに、たとえただ一つの問題にせよ、唯物論者が関係諸事実にもとづいてではなく三段階法によって歴史上の問題を解決していることを、証明しなければならないであろう。ミハイロフスキー氏は、このことを証明する試みをしたであろうか？ なにひとつしていない。それどころか、「マルクスは空虚な弁証法的図式を多くの事実的内容でみたしたので、ちょうど茶椀から蓋を取りさるように、なにひとつ変更せずにこの内容から図式を取りさることができる」ことを、同氏みずから承認することを余儀なくされている（ここでミハイロフスキー氏がもうけている除外例――未来にかんする――については、われわれはなおあとで述べる）。もしそうだとすれば、ミハイロフスキー氏はなにものも変更することのないこの蓋のことで、なんのためにこんなに熱心に骨をおっているのだろうか？ なんのために、唯物論者は弁証法的過程の不可論駁性に「立脚している」などと説くのだろうか？ この蓋とたたかっていながら、なぜ彼は、実はまったくそうでないのに、科学的社会主義の「基柱」の一つに反対してたたかっているなどと言明するのか？

もちろん私は、ミハイロフスキー氏が三段階法の実例をどのように検討しているかをあとづけようとは思わない。なぜなら、くりかえして言うが、このことは、科学的唯物論にも、ロシアのマルクス主義にも、なんら関係がないからである。しかしそれにしても、弁証法にたいするマルクス主義者の態度をこのようにゆがめるどんな根拠がミハイロフスキー氏にあったのかという問題は、興味がある。こういう根拠は二つあった。第一に、ミハイロフスキー氏は鐘の音を聞いたが、それがどこから来たのかわからなかった。第二に、ミハイロフスキー氏は、なおもう一つのすりかえをやった（あるいは、より正確には、デューリングから盗作した）。

第一点について。ミハイロフスキー氏はマルクス主義文

献を読んで、社会科学における「弁証法的方法」や、やはり社会問題の領域（ここで問題にしているのはこれだけである）における「弁証法的思惟」、等々に、たえずぶつかった。彼は、天真爛漫な心から（天真爛漫さのためだけだったら、まだしもなのだが）、この方法は、すべての社会学的問題をヘーゲルの三段階法の法則によって解決することにある、と考えた。すこしでも注意ぶかく問題に立ちむかったなら、彼はこういう考えのばからしさを納得しないではいられなかったであろう。マルクスとエンゲルスが――形而上学的方法に対置して――弁証法的方法と名づけたものは、社会学における科学的方法にほかならないのであって、その方法は、社会を、不断の発展のうちにある生きた有機体として（なにか機械的につなぎあわされ、したがって、個々の社会的要素のあらゆる恣意的な組合せを許容するものとしてではなく）観察することにあり、この生きた有機体を研究するには、所与の社会構成体を形成する生産関係を客観的に分析し、その社会構成体の機能と発展との諸法則を考究しなければならないのである。形而上学的方法（社会学における主観的方法も、疑いもなく、この概念のうちにふくまれる）にたいする弁証法的方法の関係については、われわれはあとで、ミハイロフスキー氏自身の議論の実例で例証するように努めるであろう。ここでは次のことだけを注意しておこう。すなわち、エンゲルス（デューリングにたいする論戦で、ロシア語では『空想から科学への社会主義の発展』）なり、マルクス（『資本論』のなかの種々の評註や第二版への『あとがき』、『哲学の貧困』）なりがあたえた弁証法的方法の規定や記述を読んだものならだれでも、ヘーゲルの三段階法は問題にもされていないこと、そして全問題は、社会の進化を経済的社会構成体の発展の自然史的過程として観察することに帰着することを、見るであろう。この証明として私は『ヴェーストニク・エヴローピィ』の一八七二年第五号のなかでなされている弁証法的方法の記述[20]（『カール・マルクスの経済学批判の見地』という論評）を in extenso〔全文〕かかげよう。これをマルクスは『資本論』第二版への『あとがき』に引用している。マルクスはそのなかで、彼が『資本論』でもちいた方法はよく理解されなかった、と言っている。「ドイツの批評[21]家たちは、もちろん、ヘーゲル流の詭弁だとわめきたてた。」そこでマルクスは、自分の方法をより明確にするために、前記の論評のなかにあるこの方法の記述を引用している。そこでは次のように述べられている。「マルクスにとって重要なのは、ただ一つ、彼がその研究にたずさわっている諸現象の法則を発見することである。〔……〕さらに、彼にとってとくに重要なのは、諸現象の

変化や発展の法則、すなわち、一つの形態から他の形態への、関連の一つの秩序から他の秩序への移行の法則である。〔……〕したがって、マルクスが苦心するのはただ一つ、社会関係の一定の秩序の必然性を精密な科学的研究によって立証し、彼にとって出発点および支点として役だつ諸事実を、できるだけ非の打ちどころのないように確認することである。この目的のためには、彼にとっては、現在の制度の必然性を論証すると同時に、この制度から不可避的に移行してゆかなければならない——人間がこれを信じるか信じないか、意識するか意識しないかにかかわりなく——他の制度の必然性を立証すれば、それでまったく十分なのである。マルクスは社会の運動を、人間の意志や意識や意図に依存しないばかりか、むしろ逆に、人間の意志や意識や意図を規定する諸法則にしたがう、一つの自然史的な過程として観察する。(人間はみずから意識的な『目的』を立て、一定の理想によってみちびかれるというまさにその理由で、社会の進化を自然史的進化から区別している主観主義者諸氏のご参考までに。)〔……〕もし意識的な要素が文化史においてこうも従属的な役割を演じるものとすれば、この文化そのものを対象とする批判が、他のなにものにもまして、意識のなんらかの形態もしくはなんらかの結果を基礎とすることができないことは、自明である。すなわち、批判の出発点として役だちうるのは、観念ではなく、ただ外部の客観的な現象だけである。批判は、ある事実を、観念とではなく、他の事実と比較対照することに限定されるであろう。批判にとっては、ただ、双方の事実をできるだけ精密に研究すること、また、それらが現実にたがいに異なる発展契機をなしていることだけが重要なのであるが、とりわけ必要なことは、一定の状態の系列、それらの順序、種々の発展段階の関連を、これにおとらず精密に研究することである。経済生活の〔……〕諸法則は、それを現在に適用しようが過去に適用しようが、同一であるという考えこそ、マルクスの否定するところである。〔……〕反対に、どの歴史的時期もそれ自身の固有の法則を有する……。〔……〕経済生活は、生物学の他の諸分野における発展史に類似した現象を示している。……いままでの経済学者たちが、経済法則を物理学や化学の法則と比較したのは、経済法則の本性を誤解したものであった。……諸現象をもっと深く分析すると、もろもろの社会的有機体は、もろもろの植物有機体や動物有機体と同じように、相互に根本的に相違していることがわかる。〔……〕マルクスは、資本主義的経済制度をこの見地から研究し説明することを自分の目標として設定し、そのことによって、およそ経済生活の精密な研究がかならず持たなければならない目標を、厳密

に科学的に定式化しているにすぎない。……このような考究の科学的価値は、一定の社会的有機体の発生、存立、発展、死滅、および他のより高度の社会有機体との交替を規制する特殊的な(歴史的)法則を解明することにある。」(三二)

これが、『資本論』にかんする新聞雑誌の無数の論評のなかからマルクスがひろいあげてドイツ語に翻訳した、弁証法的方法の記述であって、彼がそうしたのも、方法のこの特徴づけが、彼自身言っているとおり、まったく正確だからである。そこでたずねるが、ミハイロフスキー氏があれほど騎士然と立ちむかってたたかっている三段階法、三分法、弁証法的過程の不可論駁性について、ここでただのひとことでも述べられているだろうか? マルクスはこの記述のすぐあとで、彼の方法はヘーゲルの方法と「正反対のもの」であると、はっきり述べている。ヘーゲルによれば、理念の発展は、三段階法の弁証法的法則にしたがって現実の発展を規定する。いうまでもなく、このような場合にだけ、三段階法の重要性や弁証法的過程の不可論駁性をうんぬんすることができるのである。だが、マルクスは言っている。私にとっては、反対に、「観念的なものは〔……〕物質的なものの反映にすぎない」(三三)このようにして、全問題は、「現状の、およびそれの必然的発展の肯定的理解」に帰着する。すなわち、三段階法には、俗物どもの関心を引きうる蓋と皮(「私は……ヘーゲル独得の表現様式に媚を呈し……た」と、この同じあとがきのなかでマルクスは言っている)の役割以外の地位は残されていない。そこでまたたずねるが、科学的唯物論の「基柱」の一つ、すなわち弁証法を批判しようとおもって、蛙であろうとナポレオンであろうと、手当りしだいに、あらゆるものについて語りだしながら、この弁証法とはなにか、社会の発展は実際に自然史的過程であるかどうか、経済的社会構成体を特殊の社会的有機体と見る唯物論的見解は正しいかどうか、これらの構成体の客観的分析の方法は正しいかどうか、実際に社会的観念は社会の発展を規定せず、逆に、それ自身が社会的発展によって規定されるのかどうか、等々について だけはなにも述べない人について、われわれはどう判断すべきか? このような場合に、たんなる無理解とだけ見ることができようか?

第二点について。ミハイロフスキー氏は、弁証法をこのように「批判」したのち、ヘーゲルの三段階法「による」この証明方法をマルクスになすりつけ、そして、もちろん、この方法とたたかって勝利する。同氏は言う。「未来にかんしては、社会の内在的法則は、もっぱら弁証法的に設定されている。」(さきに述べた除外例とはこれである。)資本主義の発展法則によって収奪者が不可避的に収奪される

というマルクスの議論は、「もっぱら弁証法的性格」をおびている。土地と資本の共有というマルクスの「理想」は、その「不可避性および確実性という意味では、もっぱらヘーゲルの三項式連鎖の最終項のうえにたもたれている。」この論拠はデューリングからそのまま取ってきたものである。デューリングはこの論拠を、その著『国民経済および社会主義の批判的歴史』（第三版、一八七九年、四八六—四八七ページ）のなかで述べている。しかしミハイロフスキー氏は、ここでデューリングのことは一言もふれていない。あるいは、彼は、マルクスをこのようにねじまげることを独自に思いついたのでもあろうか。

デューリングにたいしては、すでにエンゲルスがみごとな回答をあたえている。そしてエンゲルスはデューリングの批判をも引用しているので、われわれはエンゲルスのこの回答をあげるだけにとどめよう。読者は、この回答がそっくりミハイロフスキー氏にもあてはまることを見るであろう。

「デューリングはこう言っている。『この歴史的概観（イギリスにおけるいわゆる資本の本源的蓄積の発生についての）[註]は、マルクスのこの著書のなかでは、比較的にまだしも最良の部分であって、もしそれが、物知りという松葉杖のほかに、さらに弁証法という松葉杖にすがって歩いているのでなかったなら、もっとよかったであろう。というのは、ここでは、もっと良くてもっと明瞭な手段がないために、ヘーゲルの否定の否定が、過去の胎内から未来を分娩させる助産婦の役目を果たさせられているからである。右に略述したような仕方で一六世紀以来おこなわれてきた個人的所有の揚棄が、第一の否定である。これには第二の否定がつづくのだが、それは否定の否定として、したがって、〈個人的所有〉の再興、ただし土地と労働手段との共同所有を基礎とするより高い形態での再興として、特徴づけられている。この新しい〈個人的所有〉は、マルクス氏にあっては、同時にまた〈社会的所有〉ともよばれているが、それは、むろん、ヘーゲルの言う、そこにおいて矛盾が揚棄されている（aufgehoben——これはヘーゲル独特の術語である）という、つまり、言葉の遊戯によれば、克服されると同時に保存されるという高次の統一が、ここに現われている、というわけである。

……これによると、収奪者の収奪は、歴史的現実がその物質的な外的諸関係のうちにいわば自動的に生みだす産物であることになる。……分別ある人間なら、否定の否定というような、ヘーゲルのぺてんを信用して土地と資本の共有制の必然性を納得するようなことは、おそらくないであろう。……それはともかく、ヘーゲルの弁証法などを科学

的基礎として、どんなつじつまのあったものをつれるか、というよりむしろ、どんなつじつまのあわないものが生まれずにはおかないかを知っている人なら、マルクスの諸観念のもうろうとした雑種形態を見ても、不思議に思わないであろう。こういう手管を知らない人のためにはっきり注意しておかなければならないが、ヘーゲルにおける第一の否定とは堕罪という教理問答書の概念であり、第二の否定とは贖罪にみちびく高次の統一という教理問答書の概念なのである。ところで、このような、宗教の領域から借りてきたばかげた類推のうえに諸事実の論理を築くことは、おそらくできないであろう。……マルクス氏は、彼の言う個人的であると同時に社会的でもある所有というもうろう世界に安んじてとどまっていて、深遠な弁証法の謎を解くことは、彼の高弟たちが自分でやるのにまかせている』。以上がデューリング氏のことばである。

したがって——とエンゲルスは結論する——マルクスは、社会革命の必然性、土地と、労働によって生産された生産手段との共同所有〔にもとづく社会制度〕が打ちたてられる必然性を、ヘーゲルの否定の否定を拠りどころにしないでは証明できないのである。そしてマルクスは、宗教から借りてきたこのばかげた類推のうえに彼の社会主義理論を築くことによって、未来の社会では、ヘーゲルの言う揚棄された矛盾の高次の統一としての、個人的であると同時に社会的でもある所有がおこなわれるであろう、という結論に到達するのである。*

われわれは、否定の否定はひとまずそのままにしておいて、『個人的であると同時に社会的でもある所有』というものを調べてみよう。これは、デューリング氏が『もうろう世界』とよんでいるものであるが、この点では彼は、珍しくもほんとうに正しい。だが、このもうろう世界に住んでいるのは、残念ながらマルクスではなくて、またもやデューリング氏自身である。……彼は、マルクスがひとことも言ったことのない、所有の高次の統一というものをマルクスになすりつけることによって……ヘーゲルによってマルクスを訂正する……。

マルクスにあっては、こうなっている。『それは否定の否定である。この否定は個人的所有を再興するが、しかし、資本主義時代の成果を基礎として、すなわち、自由な労働者の協業および、土地と、労働そのものによって生産された生産手段とにたいする彼らの共同所有を基礎として、再興するのである。自己労働にもとづく諸個人の分散的な私的所有から資本主義的な私的所有への転化は、もちろん、事実上すでに社会的な生産経営にもとづいている資本主義的私的所有から社会的所有への転化よりも、比較にならな

いほど長く、苦しく、困難な過程である。』[32] これで全部である。だから、収奪者の収奪によってつくりだされる状態は、個人的所有の再興であるが、しかし土地と、労働そのものによって生産された生産手段との社会的所有を基礎としての再興と、言われているのである。だれでもドイツ語のわかる人にとっては（そして、ミハイロフスキー氏よ、ロシア語のわかる人にとってもだ。なぜならこの翻訳はまったく正確なのだから）、この文章は、この社会的所有は土地とその他の生産手段にかんするものであり、個人的所有は生産物すなわち消費対象にかんするものである、ということを意味する。そして、事柄を六歳の童児にもわかるようにするために、マルクスは五六ページで（ロシア語版、三〇ページ）[33]『共同の生産手段で労働し、自分たちの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の結合体』、すなわち社会主義的に組織された結合体を想定して、こう言っている。『この結合体の総生産物は社会的な生産物である。この生産物の一部分はふたたび生産手段として役だつ。この部分はひきつづき社会的なものとしてとどまる。しかし別の一部分は、結合体成員たちによって生活手段として消費される。したがって、この部分は、彼らのあいだに分配されなければならない』。そしてこれは、とにかく、デューリング氏のヘーゲル化した頭にさえ十分に明白であると思う。

個人的であると同時に社会的でもある所有とか、この混乱した雑種形態とか、このヘーゲル弁証法から生まれざるをえないつじつまのあわないものとか、このもうろう世界とか、マルクスが彼の高弟たちに解くことをまかせているこの深遠な弁証法の謎とか――これらのものは、またしてもデューリング氏のかってな創造物であり空想である。

……

では――とエンゲルスはつづけて言う――マルクスにあっては、否定の否定はどういう役割を演じているか？　七九一ページ[34]（ロシア語版では六四八ページ以下）に、彼は、それに先だつ五〇ページ（ロシア語版では三五ページ）でおこなってきた、いわゆる資本の本源的蓄積にかんする経済学的および歴史的研究の結論を総括している。資本主義時代以前には、すくなくともイギリスでは、労働者による自己の生産手段の私的所有に基礎をおく小経営がおこなわれていた。いわゆる資本の本源的蓄積は、この国では、これらの直接的生産者を収奪すること、すなわち、自己労働にもとづく私的所有を解消することであった。こういうことが可能になったのは、前記の小経営が、生産と社会との狭い、自然生的な枠としか両立しえないものであって、したがって、ある高度に到達すると、それ自身を滅亡させる

物質的手段を生みだすからである。この滅亡、すなわち、個人的な、分散した生産手段から社会的に集積された生産手段への転化は、資本の前史をなす。労働者がプロレタリアに転化され、彼らの労働条件が資本に転化されるやいなや、資本主義的生産様式が自分の足で立つようになるやいなや、労働のそれ以上の社会化と、土地その他の生産手段のそれ以上の（資本への）転化、したがって、私的所有者のそれ以上の収奪は、新しい形態をとるようになる。『いまや収奪されるべきものは、もはや自家経営をする労働者ではなくて、多くの労働者を搾取する資本家である。この収奪は、資本主義的生産そのものの内在的諸法則の作用によって、諸資本の集積[三〇]によって、おこなわれる。どの一人の資本家も、多くの資本家をうちほろぼす。この集積、すなわち少数の資本家による多数の資本家の収奪と手をたずさえて、たえず大きくなる規模での労働過程の協業的形態が、科学の意識的な技術的応用が、土地の計画的な共同利用が、労働手段の、共同的にでなければ使用できない労働手段への転化が、生産手段を結合的・社会的労働の共同の生産手段として使用することによるすべての生産手段の節約が、発展する。この転化過程のいっさいの利益を横領し独占する大資本家の数がたえず減少してゆくのにつれて、貧困、抑圧、隷属化、堕落、搾取の量が増大する。しかしまた、たえず膨張し、資本主義的生産過程そのものの機構によって訓練され結合され組織される労働者階級の反抗も増大する。資本は、それといっしょに、そしてそれのもとで開花してきた当の生産様式にたいする桎梏となる。生産手段の集積と労働の社会化とは、それらの資本主義的外被と両立しえなくなる一点に到達する。この外被は破砕される。資本主義的私的所有の弔鐘が鳴る。収奪者が収奪される[三一]。』

そこで、読者におたずねしよう。弁証法的にごたごたした錯綜とか、観念の唐草模様とかはどこにあるのか？ それによれば、けっきょくすべてが一つになってしまうという、ごたまぜのまちがった観念はどこにあるのか？ 信者のための弁証法的奇蹟はどこにあるのか？ デューリング氏に言わせると、それなしにはマルクスは彼の展開を仕あげることができないという、弁証法の秘法沙汰やヘーゲルのロゴス説に準拠した錯綜はどこにあるのか？ マルクスは、かつて小経営がそれ自身の発展によってみずからの滅亡〔……〕の諸条件を〔……〕生みだしたのとまったく同じように、いまや資本主義的生産様式もやはり、自己の没落をもたらすべき物質的諸条件をみずから生みだしたということを、歴史的に証明して、ここで簡単に総括しているまでのことである。この過程は一つの歴史的過程であって、

それが同時にまた弁証法的な過程であるにしても、そのことは、デューリング氏にとってどれほど不快であろうとも、マルクスの罪ではない。

マルクスは、彼の歴史的＝経済的証明を終えてから、いまやはじめてそれにつづけて次のように述べる。『資本主義的生産様式および取得様式は、したがって資本主義的私的所有は、自己労働にもとづく個人的な私的所有の第一の否定である。資本主義的生産の否定は、資本主義的生産そのものによって、自然過程の必然性をもって生みだされる。これは否定の否定である』うんぬん（以下はさきに引用したとおり）。

だから、マルクスがこの過程を否定の否定とよんでいるとしても、彼は、この過程が歴史的に必然的なものであることを、それによって証明しようと思っているわけではない。逆である。彼は、この過程が実際に一部はすでに起こっており、一部はこれから起こらざるをえないということを、歴史的に証明したあとで、それにつけくわえて、この過程を、一定の弁証法的法則にしたがっておこなわれる過程とよんでいるのである。それだけである。だから、デューリング氏が、ここでは否定の否定が過去の胎内から未来を分娩させる助産婦の役目を果たさせなければならないとか、あるいはマルクスは、否定の否定を信用して土地と資本との共有制〔……〕の必然性を納得すべきことを要求している、とか主張しているのは、これまたデューリング氏[四]のまったくのなすりつけである。」（一一五ページ）

＊　デューリングの見解のこのような定式化はそのままミハイロフスキー氏にもあてはまるということについては、さらに同氏の論文『ユ・ジュコフスキー氏の審判のまえに立つK・マルクス』のなかの次の箇所が、その証明として役だつ。マルクスは私的所有の擁護者だと主張したジュコフスキー氏に反論して、ミハイロフスキー氏はマルクスのこの図式を示し、それを次のように説明している。「マルクスは、彼の図式のなかに、ヘーゲル弁証法の周知の三つの手品を挿入している。第一に、この図式はヘーゲルの三段階法の法則にしたがって構成されている。第二に、総合は、対立物の同一性のうえに、すなわち個人的であると同時に社会的でもある所有のうえに基礎づけられている。つまり、ここでは、『個人的』という言葉は、弁証法的過程の一項という特殊の、純粋に条件的な意味をもつのであって、それのうえにはまったくなにごとをも基礎づけることはできない」。こう述べた人は、ロシアの公衆のまえでブルジョアのジュコフスキー氏から「熱血漢」マルクスを擁護しようという、きわめて善良な意図の持ち主なのである。そしてこのような善良な意図をもって、彼はマルクスを、過程についての自分の考えを「手品の」うえに基礎づける人のように説明しているのだ！　ミハイロフスキー氏はここから、氏にとっては無益でない次の教訓を引きだすことができる、――なんの仕事にせよ、善良な意図だけでは

いささか不足である。

読者の見られるとおり、デューリングにたいするエンゲルスのこのみごとな反論全体は、そのままミハイロフスキー氏にもあてはまる。同氏も、デューリングとまったく同じように、マルクスにあっては、未来はもっぱらヘーゲルの連鎖の最終項のうえにたもたれており、未来の不可避性にたいする確信はただ信念のうえにのみ基礎づけられえている、と主張している。*

* この点について、次のことを指摘しておくのは無用でないように思われる。すなわち、エンゲルスのこの説明全体は、彼が穀粒や、ルソーの学説や、その他の弁証法的過程の実例を論じているのと同じ章のなかにあるものである。三段階法によってなにものかを証明したり、あるいは、この三段階法の「条件的諸項」を現実の過程の描写のなかにそっと入れるようなことは、とうてい問題になりえない、というエンゲルス（および、この著作の草稿をまえもって読みきかされていたマルクス）の非常に明瞭で断定的な言明に、これらの実例を対照してみるだけで、マルクス主義をヘーゲル弁証法の点で非難することのばからしさを理解するのに、どうやらまったく十分であろう。

デューリングとミハイロフスキー氏とのあいだのすべての差異は、次の二つの小さな点に帰着する。第一に、デューリングは、マルクスについては口に泡をとばしてでなければ語りえなかったにもかかわらず、マルクスがその「あとがき」のなかでヘーゲル主義という非難をきっぱりとはねつけたことを、その『歴史』のつづく段落で述べる必要があると、考えた。ところがミハイロフスキー氏は、マルクスが弁証法的方法ということばでどういうことを意味しているかにかんする、マルクスのこの（前掲の）まったく明確で明瞭な叙述について、口をつぐんだのである。

第二に、ミハイロフスキー氏の第二の独創的な点は、動詞の時称の使い方にすべての注意を集中したことにある。未来について論じているのに、マルクスはなぜ現在形をつかうのか？――わが哲学者は勝ちほこった様子でこう質問する。わが尊敬すべき批判家よ、このことについてなら、貴下はどんな文法書を参照してもいい。貴下は告げられるだろう。未来が必然的で疑いないと考えられる場合には、未来形のかわりに現在形がつかわれる、と。しかし、なぜそうなのか、なぜ疑いないのか？――ミハイロフスキー氏は、ごまかしをさえ正当化しうるほどの非常な興奮の状態をあらわそうと願って、気づかわしげに言う。――しかしこの点についていては、マルクスがまったく明確な回答をあたえている。この回答を不十分なもの、または正しくないものとみなすのはかまわないが、それならば、まさにどの点

で、そしてまさになぜ、それが正しくないのかを示すべきであって、ヘーゲル主義うんぬんのたわごとを語るべきではない。

かつてミハイロフスキー氏が、この回答はどういうものであるかを自分で知っていたばかりでなく、他人にも教えた時代があった。彼は一八七七年にこう書いた、——ジュコフスキー氏が、未来にかんするマルクスの構成を臆測的とみなすのは十分理由のあることだが、しかし彼には「マルクスが巨大な意義を付与している」労働の社会化の問題を回避する「道徳的権利はなかった」と。さよう、もちろんである！ 一八七七年のジュコフスキーには、問題を回避する道徳的権利がなかった。ところが一八九四年のミハイロフスキー氏には、このような道徳的権利がある！ おそらく、quod licet Jovi, non licet bovi〔ジュピターには許されることでも、牡牛には許されない〕からだろうか?!

ここで私は、かつて『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』[三]が、この労働の社会化ということについて表明した見解にかんする一つの珍妙事を、思いださないではいられない。同誌の一八八三年第七号に、ポストロンニー某氏[三]の『編集部あての手紙』が掲載された。この人は、ミハイロフスキー氏と寸分たがわず、未来にかんするマルクスの「構成」を臆測とみなしていた。この紳士はこう論じている。「本質において、資本主義の支配のもとでの労働の社会的形態とは、数百あるいは数千の労働者が、一つの場所で研磨し、たたき、回転させ、積みあげ、積みおろし、ひっぱり、その他多くの操作をおこなうことに帰着する。この制度の一般的性格は、『各人は自分のために、神は万人のために』ということわざによって、みごとに表現されている。この場合、どこに労働の社会的形態があるのか？」

この人間がどこに問題があるかを理解していたことは、即座にわかる！「労働の社会的形態」は「一つの場所での労働」に「帰着する」というのだ!! そして、ロシアとしてはまずまず最良の雑誌の一つでこのような途方もない考えを説いたあとに、『資本論』の理論的部分は科学によって公認されていると、われわれに請けあおうとしているのだ。いかにも、「公認の科学」は、『資本論』にたいしてすこしでもまじめな反論はなにひとつくわえる力がなくて、『資本論』のまえに腰をかがめはじめたが、それと同時に、あいかわらず最も初歩的な無知をさらけだし、学校風経済学の古くさい月なみなことばを繰りかえしている。ミハイロフスキー氏がいつもの習慣によってまったく回避した問題の本質がどこにあるかを同氏に示すために、この問題を

すこしくわしく論じなければならない。

資本主義的生産による労働の社会化は、けっして、人々が一つの場所で労働することにあるのではなく（これは過程の一小部分にすぎない）、資本の集積にともなって社会的労働が専門化し、各産業部門における資本家の数が減少し、個別的な産業部門の数が増大すること、――すなわち、多数の分散した生産過程が一つの社会的生産過程に融合すること、にある。たとえば、手工業的機織の時代には、小生産者たちが自分で糸を紡ぎ、その糸で織物をつくっていたが、そのときには産業部門の数は少なかった（紡績と機織とが一つに融合していた）。だが生産が資本主義によって社会化されると、個別的な産業部門の数が増大する。綿紡績も綿機織も別々におこなわれる。生産のこの個別化と集積そのものが、新しい部門――機械製作、石炭採掘、等々――を生みだす。いまやより専門化された各産業部門では、資本家の数はしだいに減少する。このことは、生産者たちのあいだの社会的関連がしだいしだいに強まり、彼らが一つの全体に結集されてゆくことを意味する。分散した小生産者たちはそれぞれいくつかの作業を一時におこない、そのため各人は他人から相対的に独立していた。たとえば、手工業者が自分で亜麻を栽培し、自分で紡ぎ織っていたときには、彼は他人からほとんど独立していた。このような分散した小商品生産者の制度のもとでは（そしてそこでだけ）、「各人は自分のために、神は万人のために」ということわざが、すなわち市場の変動の無政府性が妥当した。資本主義のおかげで達成された労働の社会化のもとでは、事情はまったく異なる。織物を生産する工場主は綿紡績工場主に依存し、後者は、綿花を栽培する資本家的栽植農場主、機械製作工場の所有者、炭坑所有者、その他、等等に依存している。その結果、どの資本家も他の資本家なしにはやってゆけないこととなる。「各人は自分のために」ということわざがこのような制度にはもはやまったくあてはまらないことは、明らかである。ここではすでに各人は万人のために働き、万人は各人のために働いている。（そして神には、雲のうえの幻想としてでも、地上界の「金牛」〔イスラエル人の偶像〕としてでも、なんの場所ものこされていない）。制度の性格はまったく一変する。分散した小企業が存在する制度のころには、これらの小企業のうちのどれか一つで作業が停止しても、それは社会の少数の成員に影響したにすぎず、全般的な混乱を引きおこすことはなく、そのため、一般の注意をひかず、事件にたいする社会の干渉に動機をあたえなかった。しかしこのような停止が大企業に起こり、しかもその企業がすでにいちじるしく専門化された産業部門に属しており、したがってほと

んど社会全体のために作業しており、逆にまたこの企業自身が社会全体に依存しているというようになると（私は、簡単化のために、社会化がその頂点にたっした場合をとっている）、その場合には、社会の他のあらゆる企業でも仕事が停止されなければならない。なぜなら、他の企業は右の大企業からしか必要な生産物を入手できないからであり、そしてこの大企業の商品が存在してはじめて、自分たちの全商品を実現できるからである。このように、全生産は一つの社会的生産過程に融合しているが、他方、おのおのの生産は個々の資本家によっていとなまれ、彼の恣意に依存し、社会的生産物は彼の私的所有となっている。生産の形態が取得の形態と和解しえない矛盾におちいっていることは、明瞭ではないか？　取得の形態が生産の形態に適応せざるをえず、それ自身もやはり社会的な、すなわち社会主義的なものとならざるをえないことは、一目瞭然ではないか？　ところが『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』のこの才ばしった俗物は、すべてを一つの場所での作業に帰着させている。まったくの見当ちがいである！（私はただ物質的過程を、ただ生産関係の変化を記述しただけで、過程の社会的側面、すなわち労働者の結合や結集や組織化にはふれなかったが、それは、これらが派生的な、第二義的な現象だからである。）

ロシアの「民主主義者」にこのような初歩的なことを説明しなければならないとすれば、その原因は、彼らがあまりにも小市民的な考えにはまりこんでいるため、小市民的な制度以外の制度を考える力がまったくないというところにある。

だが、ミハイロフスキー氏にたちかえろう。マルクスが、資本主義の発展法則そのものによって社会主義体制は不可避だという結論の基礎としたもろもろの事実と考察とにたいして、同氏はなんといって反論しただろうか？　現実には――社会経済の商品的組織のもとでは――、社会的労働過程の専門化の成長が生ぜず、資本の集積と企業の集積、全労働過程の社会化の成長が生じないことを、同氏は示したであろうか？　いな、同氏はこれらの事実を論駁するために、なにひとつ指示するところがなかった。同氏は、資本主義社会には労働の社会化とは和解しえない無政府性が固有である、という命題を動揺させたであろうか？　このことについては同氏はなにも述べていない。同氏は、すべての資本家の労働過程が一つの社会的労働過程に結合されることは私的所有と両立しうる、ということを証明しただろうか？　マルクスが指摘した活路のほかに、この矛盾からの活路がありうるし、考えうるということを、証明しただろうか？　いな、同氏はこの点においてひとことも述べ

ていない。
　同氏の批判はいったいなににささえられているのだろうか？　ごまかしに、すりかえに、そして、おもちゃのガラガラ以外のなにものでもない空文句の洪水に、である。
　この批評家が——歴史の三段階的進行についてあらかじめたくさんのばか話をしゃべりまくったのち——「それから先はどうなるのか？」という質問、すなわち、マルクスの描いた過程の最後の段階以後には歴史はどのように進行するかという質問を、大まじめな顔つきをしてマルクスに出すとき、実際、このようなやり方を、これ以外にどう言えようか。マルクスは、その文筆活動と革命活動のそもそもの初めから、社会学の理論にたいする彼の要請を、きわめて明確に表明していたことに、どうか注意されたい。社会学の理論は現実の過程を正確に描きださなければならず、また、それ以上であってはならない、というのである（たとえば、『共産党宣言』が共産主義者の理論の基準について述べていることを参照されたい[32]）。マルクスはその著『資本論』のなかで、この要請をきわめて厳格に守った。彼は、資本主義的社会構成体を科学的に分析することを自分の任務として設定し、そして、われわれの目のまえで現実に生じているこの組織の発展が、この組織の不可避的な滅亡と、他のより高度の組織への転化をもたらす傾向をもっていることを立証したとき、そこで終りとしたのである。ところがミハイロフスキー氏は、マルクスの学説の全本質を回避して、自身の愚劣きわまる質問を出す。「それから先はどうなるのか？」。そして深遠にもつけくわえて言う。「私は、エンゲルスがどう答えるかをかならずしも明瞭に心に描けないことを、率直に告白しなければならない」と。しかしミハイロフスキー氏よ、そのかわりわれわれは、貴下のこのような「批判」の精神と方法とをまったく明瞭に心に描けることを、告白しなければならない！
　あるいは、さらに次のような議論がある。「中世には、マルクスの言う自己労働にもとづく個人的所有は、経済関係の分野でさえ、唯一の要因でもなければ支配的な要因でもなかった。個人的所有とならんで、その他多くのものが存在したが、マルクスの解釈する弁証法的方法（ミハイロフスキー氏の曲げて伝える弁証法的方法ではないのか？）は、これらのものに立ちかえることをしない。……明らかに、これらの図式はすべて、歴史的現実の姿、あるいはたんにその各部分の割合をさえ示すものではなく、あらゆる対象を過去、現在および未来の状態において考察しようという、人間頭脳の傾向を満足させるものにすぎない」。ミハイロフスキー氏よ、貴下のすりかえの仕方さえもが、すでに吐き気をもよおすほど一律だ！　まず最初に、資本主

義の現実の発展過程を――しかもそれだけを――定式化する[*]と自任するマルクスの図式に、ありとあらゆるものを三段階法によって証明するという意図をこっそりおしつけ、ついでマルクスの図式は、ミハイロフスキー氏がこの図式におしつけたこの計画(第三の段階は、他のすべての面をすてて、第一の段階のただ一つの面だけを復活させるという)に照応しないことを、確認する。そして、非常に気楽にこう結論する。「明らかに、この図式は歴史的現実の姿を示していない」と!

* 中世の経済制度のその他の諸特徴はここでは無視されているが、それは、マルクスは資本主義的社会構成体だけを研究しているのに、それらは封建的社会構成体に属する、というまさにその理由からである。資本主義の発展過程は、その純粋な形では(たとえばイギリスでは)、現実に、分散した小商品生産者の制度および彼らの労働にもとづく個人的所有から始まったのである。

例外的にでも正確に引用することができない人間(デューリングについてのエンゲルスの表現を使えば)と本気で論戦するなどということが、考えられるだろうか? 図式のまちがいがどこにあるかを示そうという試みすらしないで、図式は「明らかに」現実に合致しないなどと世間にむかって断言するのを、いったい反論できるだろうか?

ミハイロフスキー氏は、マルクス主義の見解の真の内容を批判するかわりに、過去、現在および未来というカテゴリーについて、その才気をはたらかせる。たとえば、エンゲルスはデューリング氏の「永遠の真理」を反論して言っている。「今日われわれは」三様の道徳、すなわち、キリスト教的=封建的道徳、ブルジョア道徳およびプロレタリア道徳を「説法されている」。だから、過去、現在、未来はそれぞれの道徳理論をもつのである[23]、と。この点についてミハイロフスキー氏は判断する、「私が考えるには、歴史のすべての三時代区分の基礎には、過去、現在、未来というカテゴリーがおかれている」と。なんと深遠な考えだろう! どんな社会現象でも、その発展過程において観察すれば、そのなかにはつねに過去の残存物と現在の基礎と未来の萌芽とがあるということを、だれか知らないものがあろうか? しかしエンゲルスは、たとえば、道徳の歴史が(彼は「現在」について語っているにすぎないのだが)右の三つの契機に局限されると主張する考えだったのだろうか? たとえば封建的道徳のまえに奴隷制的道徳がなく、奴隷制的道徳のまえに原始共産制的共同体の道徳がなかったと、主張する考えだったのだろうか? ミハイロフスキー氏は、唯物論的説明によって道徳思想の現代の諸潮流を解明しようというエンゲルスの試みをまじめに批判するかわりに、まったくからっぽな美辞麗句をわれわれにごちそ

うするのだ！

どういう著作のなかで唯物史観が叙述されているかを知らないという言明で始められた、ミハイロフスキー氏のこのような「批判」の方法に関連して、かつてはこの著者がこのような著作の一つを知っていて、それを正当に評価することのできた時代があったことを思いおこすのも、おそらく無益ではないだろう。一八七七年にはミハイロフスキー氏は『資本論』について次のように批評していた。「もし『資本論』から重苦しい、不器用な、無用なヘーゲル弁証法という蓋を取りさるなら（これはなんという奇妙なことだ？　いったいどうして、一八七七年には『ヘーゲル弁証法』は『無用』であったが、一八九四年には、唯物論は『弁証法的過程の不可論駁性』に立脚しているということになったのか？）、この著作のその他の長所はさておき、われわれはこの著作のなかに、形態とそれの物質的存在の条件との関係についての一般的問題を解決するための、みごとに処理された資料を見いだし、また、一定の分野にたいしてこの問題がみごとに提起されていることを見いだすであろう。」――「形態とそれの物質的存在条件との関係」――これこそ、社会生活の種々の側面の相互関係の問題であり、物質的関係のうえに立つイデオロギー的社会関係という上部構造の問題であって、この問題にある解決をあたえているのが唯物論の学説なのである。先にすすもう。

「本来からいえば、『資本論』全体（傍点は私のもの）は、ひとたび発生した社会形態が、どのようにしてますます発展してゆくか、発見、発明、生産方法の改善、新しい市場、科学そのものを自己に従属させて同化し、それらを自己のために活動させることによって、自己の典型的な諸特徴をどのように強化していくか、そして、ついに、どのようにして所与の形態が物質的諸条件のそれ以上の変化に耐ええなくなるか、を研究することにささげられている。」

驚くべき出来事だ！　一八七七年には、「資本論全体」は、ある社会形態の唯物論的研究にささげられていた。（唯物論は物質的諸条件によって社会形態を説明することでないとしたら、いったいなんだろうか？）ところが一八九四年には、どこに、どういう著作のなかにこの唯物論の叙述を探しもとめるべきかさえわからない、ということになってしまったのだ！

一八七七年には、『資本論』のなかでは、どのようにして「所与の形態（すなわち資本主義的形態？　ではないのか？）が物質的諸条件のそれ以上の変化に耐ええなくなるか」（これに注意）ということについての研究があった。――ところが一八九四年には、なんの研究もまったくなく、

資本主義的形態は生産力のそれ以上の発展に耐ええないという信念は「もっぱらヘーゲルの三段階法の最終項」のうえにたもたれている、ということになったのだ！　一八七七年には、ミハイロフスキー氏はこう書いた。「ある社会形態と、それの物質的存在条件との関係の分析は、永久に(傍点は私のもの)著者の論理の力と偉大な博識との記念物として残るであろう」。——ところが一八九四年には、彼は公言する。唯物論の学説は、かつて、どこででも、科学的に検証され、基礎づけられたことはなかった！

驚くべき出来事だ！　これはいったいなにを意味するか？　いったいなにが起こったのか？

二つの事情が起こったのである。第一に、七〇年代のロシアの農民社会主義、すなわち、自由にたいしてはそれのブルジョア性のゆえに「鼻先であざわらい」、ロシアの生活の敵対性を懸命にぬりかくしていた「はれやかな額の自由主義者」と闘争し、農民革命を夢想していた、あの農民社会主義が、完全に分解して、卑俗な小市民的な自由主義を生みだしたのである。この小市民的自由主義たるや、農民経営の進歩的諸傾向のうちに「人を元気づける感銘」を見いだし、このような傾向が農民の大衆的収奪をともなっていること(および、それの条件となっていること)を忘れているものなのである。第二に、一八七七年にはミハイロフスキー氏は、「熱血漢」(すなわち革命的社会主義者)マルクスを自由主義的批評家から擁護するという任務に非常に熱中していたので、マルクスの方法と彼自身の方法との不一致に気づかなかった。だがエンゲルスの論文や著書が、またロシアの社会民主主義者たち(プレハーノフにはミハイロフスキー氏にかんするきわめて適切な論評がしばしば見うけられる)が、弁証法的唯物論と主観主義社会学とのあいだのこの和解しえない矛盾を、同氏に解明した。そして、ミハイロフスキー氏は問題の再検討にまじめに取りかかるかわりに、ごく単純にいきりたってしまった。マルクスにたいする歓迎のことば(一八七二年と一八七七年に彼が述べた)(三三)に代わって、同氏は、いまやいかがわしい賞賛のことばのすきまからマルクスに吠えかかり、ロシアのマルクス主義者たちに反対してさわぎたて、いきまいている。このマルクス主義者たちは、「経済的に最も弱い者の保護」、農村における商品倉庫や種々の改善、クスターリのための陳列館やアルテリ(三四)、その他の小市民的な善意の進歩に満足することを望まず、どこまでも「熱血漢」として、社会革命の味方としてとどまり、真に革命的な社会的分子を訓練し、指導し、組織することを欲しているのである。

このようにずっと昔のことにすこしばかり寄り道をしたあとでは、マルクスの理論にたいするミハイロフスキー氏

の「批判」の検討を終わってもよいであろう。そこで総括をして、この批判家の「論拠」を要約してみよう。

同氏が粉砕しようとくわだてた学説は、第一には唯物史観に、第二には弁証法的方法に立脚している。

第一のものについて言えば、この批判家はまず初めに、どういう著作のなかで唯物論が叙述されているかを知らないと言明した。彼はこの叙述をどこにも見いださなかったので、唯物論とはなにかということを自分で創作しにかかった。この唯物論は途方もない主張をしているということをわからせるために、彼は、唯物論者が人類の過去、現在、未来の全体を説明すると主張しているかのように、創作した。ところが、ついでマルクス主義者たちの本物の言明と照合してみて、彼らが説明したと考えているのはただ一つの社会構成体だけであることがわかると、この批判家は、唯物論者は唯物論の作用範囲を狭め、それによって自分で自分を打ち破っている、と決めてしまった。この唯物論をつくりあげる方法をわからせるために、彼は、科学的社会主義の仕上げというような仕事のためには知識が不十分であることを唯物論者たちが自分で認めていたかのように、創作した。そのじつ、マルクスとエンゲルスが知識の不十分さを自覚していたのは（一八四五―一八四六年に）経済史一般についてであって、彼らの知識の不十分さを立証していたこの著作を、彼らはけっして出版しなかったのである。このような前奏曲ののちに、われわれはさらに次の批判の贈り物を受ける。――批判はあらゆる時代にふれていい必要であるのに、『資本論』はただ一つの時代にふれているにすぎず、また『資本論』は経済的唯物論を確証せずに、たんにそれにふれているにすぎないから、そのことによって『資本論』は破棄されてしまった、と。この論証は、明らかに、いかにも有力で重大だったので、唯物論はかつて一度も科学的に基礎づけられたことはなかったと認定しなければならなくなった。次に唯物論に反対してもちだされたのは、唯物論的結論に到達したのが、この学説のまったくの局外者で、まったく別の国で先史時代を研究していた人であった、という事実である。さらに、子供の生産が唯物論に関連させられているのはまったく不当であること、これが一つのことばの魔術であることを示すために、この批判家は、経済関係が性的および家族的関係の上部構造であることを証明しはじめた。この場合、唯物論者に教えるために、この大まじめな批判家があたえた数々の教示は、相続は子供の生産なしには不可能であり、この子供の生産の生産物には複雑な心理が「付帯」し、子供は父の精神で養育されるという深遠な真理で、われわれを富ませた。ついでにまたわれわれは、民族的結合が血族的結合の継続で

あり普遍化であることを知った。この批判家は、唯物論についてのその理論的探求をさらにつづけて、マルクス主義者の数多くの論証の内容は、大衆の抑圧と搾取がブルジョア制度のもとでは「必然的」であり、この制度は「必然的」に社会主義制度に転化しなければならないという点にあることを、指摘した。そこで彼は、必然性とは(人々がまさになにを必然的とみなすかについて述べないかぎり)あまりに一般的な括弧であり、だからマルクス主義者は神秘主義者であり、形而上学者である、と明言するのをためらわなかった。この批判家はまた、観念論者にたいするマルクスの論議は「一面的」であると言明したが、それらの観念論者の見解が主観的方法とどういう関係にあるのか、またマルクスの弁証法的唯物論はそれらの見解とどういう関係にあるのかについては、ひとことも述べなかった。

マルクス主義の第二の基柱——弁証法的方法——について言えば、この基柱をくつがえすには、この勇敢な批判家のただの一押しで十分だった。しかもこの一押しはきわめて的確であった。批判家は、三段階法によってなにかを証明できるということを論駁しようとして、信じられないほどの努力で騒ぎたて、苦心した。——しかも、弁証法的方法はけっして三段階法にあるのではなく、それはまさに社会学上の観念論と主観主義の方法の否定にある、ということについては口をつぐんでいる。他の一押しは、特別にマルクスにたいして向けられた。すなわち、勇敢なデューリング氏の援助のもとに、この批判家は、マルクスが三段階法によって資本主義の没落の必然性を証明したかのような、ありようのないばかげた考えをマルクスになすりつけ、そして、このばかげた考えにたいしてたたかって勝利したのである!

これが、「われらの高名な社会学者」のもろもろの輝かしい「勝利」の叙事詩である! これらの勝利を観察することは、なんと「教えられることが多い」(ブレーニン)ではないか?

ここでなおもう一つの事情にふれないわけにはいかない。これは、マルクスの学説の批判には直接の関係はないが、この批判家による理想の解明と現実の理解とをきわめてよく特徴づけるものである。それは、西欧の労働運動にたいするこの批判家の態度である。

唯物論は「科学」において(おそらく、ドイツの「人民の友」の科学において?)自己の正しさを証明しなかった、というミハイロフスキー氏の言明は、まえに引用しておいた。しかしこの唯物論は——とミハイロフスキー氏は論じる——「労働者階級のあいだに、実際にきわめて急速に普及している。」ミハイロフスキー氏は、この事実をどう説

明するか？　彼は言う。「経済的唯物論が、いわば幅の広さでかちえている成功、すなわち、それが批判的に検証されない形で普及していることについて言えば、この成功の重心は、科学のうちにはなく、『未来』にむかっての見通しによって設定される日常生活の実践のうちにある」。未来にむかっての見通しによって「設定」される実践という この不細工な文句には、唯物論が普及しているのは、それが現実を正しく説明したからではなく、この現実を回避して見通しのほうへ眼をむけたためであるということ以外に、どんな意味がありうるだろうか？　さらに、こう言われる。「これらの見通しは、それを消化するドイツの労働者階級、およびこの階級の運命に熱烈な関心をもつ人々にたいして、知識も批判的思考の骨おりも要求しない。それは信念だけを要求する」。言いかえれば、唯物論と科学的社会主義が幅広く普及しているのは、この学説が労働者によりよい未来を約束しているからである！　実際、このような説明のまったくのばからしさと虚偽とを知るには、西欧の社会主義と労働運動との歴史についてごく初歩的な知識がありさえすれば、十分である。だれでも知っているように、科学的社会主義はかつて一度も、本来の意味での未来の見通しというようなものを描いたことはない。科学的社会主義は、近代ブルジョア制度を分析し、資本主義的社会組織の発展の傾向を研究することにとどめ、──そして、それだけしかしなかった。「われわれは世界にむかって言いはしない」、──とマルクスはすでに一八四三年に書き、そして彼はこの計画を正確に実行した──われわれは世界にむかって言いはしない、「君の闘争をやめよ、それはつまらないものだ、われわれは世界に戦いの真の合言葉を呼びかけよう」とは。われわれは世界にたいして、そもそも世界はなぜ戦うかを示すだけである。そして意識とは、世界がたとえそうしようと思わなくても、獲得しないではいられないものなのである。(至) だれでも知っているとおり、たとえば『資本論』は、科学的社会主義を叙述した主要な、基本的な著作であるが、それは、未来についてはごく一般的な示唆をするにとどめており、そのなかから未来の体制が成長してくる諸要素のうちすでに今日現存しているものをしか、考究していない。また、だれでも知っているように、未来の見通しについては、旧来の社会主義者たちのほうがはるかに多くを提供しており、そして彼らは、人間が闘争なしにすませるような制度、人間の社会関係が搾取に立脚せず、人間の本性の諸条件に合致した真正の進歩の諸原則に立脚するような制度の絵図で、人類を魅了しようと欲して、未来の社会をこまごました点まで描きだしたのである。しかし──これらの思想を説いたきわめて才能ある人々や、き

わめて信念の堅い社会主義者が密集部隊をなすほどいたにもかかわらず――機械制大工業が労働プロレタリアートの大衆を政治生活の渦のなかに巻きこむまでは、またプロレタリアートの真の闘争スローガンが発見されるまでは、彼らの理論は生活から遊離しており、彼らの綱領は人民の政治運動から遊離していた。この闘争スローガンはマルクスによって、すなわち、ミハイロフスキー氏がずっと昔に――一八七二年に――批評しているところによれば、「空想家によってではなく、厳格な、時おり冷やかでさえある学者によって」、発見されたのである。――まったくなんらかの見通しを媒介としてではなく、近代ブルジョア制度の科学的分析を媒介とし、この制度の存在するもとでの搾取の必然性の解明を媒介とし、また、この制度の発展諸法則の研究を媒介として、発見されたのである。もちろん、ミハイロフスキー氏は、『ルースコエ・ボガートストヴォ』の読者にむかって、このような分析を会得するには知識も思考の骨おりもいらないと請けあうこともできようが、すでにわれわれは、この分析によって確立された初歩的な真理についてさえ粗雑な無理解が彼自身にあることを見たのであって（また彼の協力者である一経済学者の場合にはそれ以上であることを、われわれはやがて見るであろう）[三六]、したがって、このような言明は、いうまでもなく、ただ微笑をさそいうるだけである。労働運動の普及と発展は、資本主義的機械制大工業が発展しているまさにその場所で、またまさにそのかぎりで、争いえない事実となっており、社会主義学説の成功は、それが人間の本性に合致した社会的諸条件について論議することをやめて、現代の社会関係の唯物論的分析と、今日の搾取制度の必然性の解明とにとりかかる場合にこそ、争いえない事実となっているのである。

　ミハイロフスキー氏は、「見通し」にたいするこの学説の関係について、真実にまったく反する特徴づけをすることによって、労働者のあいだでの唯物論の成功の真の原因を見るのを回避しようと試みたのち、いまやきわめて月なみな、小市民的な態度で、西欧の労働運動の思想と戦術とをあざけりはじめる。われわれがすでに見たように、彼は、労働の社会化の結果として資本主義体制は不可避的に社会主義体制に転化するというマルクスの論証にたいして、文字どおり一つの反対論拠ももちだしえなかった。――それにもかかわらず彼は、「プロレタリア軍」は資本家の収奪を準備し、「それにつづいて、あらゆる階級闘争は終止し、地には安らぎが、人には恵みが到来するであろう」とかいうことにたいして、はなはだ厚かましい態度でひやかしている。彼ミハイロフスキー氏は、これよりもはるかに単純

で確実な社会主義実現の道を知っている。「人民の友」が、「待望の経済的進化」の「明瞭で変ることのない道」をできるだけ詳細に指示しさえすればよいのである。――そうすれば、これらの「人民の友」は、きっと「実際的な経済問題」の解決のために「招かれる」であろう。(『ルースコエ・ボガートストヴォ』第一一号のユジャコフ氏の論文『ロシアの経済発展の諸問題』を見よ)。さしあたり……さしあたりは、労働者は時を待ち、「人民の友」に頼るべきであって、「根拠のない自己過信」をもって搾取者にたいする自主的な闘争を開始すべきではない。わが著書は、この「根拠のない自己過信」に致命傷をあたえようと欲して、「ほとんどポケット辞典におさまってしまうようなこの科学」にたいして、激情を発して憤慨する。実際、なんと恐ろしいことだ。科学、――そして数グロシェンの値段で、ポケットにおさまってしまう社会民主主義パンフレット類!! 科学が被搾取者に自己解放のための自主闘争を教えるかぎりで、また、階級敵対をぬりかくし全事業を自分の手に引きうけようと望んでいるあらゆる「人民の友」から避けることを教えるかぎりで、そのかぎりでのみ科学を尊重している人々、それゆえにまた、俗物どもをこんなにもびっくりさせる廉価版でこの科学を説明している人々、こういう人々がどれほどまでに根拠のない自己過信をもっているかは、明らかではないか。もし労働者が自己の運命を「人民の友」に託するなら、事情はどんなに変わることだろう! もしただ……労働者が時をまつことに同意して、このような根拠のない自己過信をもって自分で闘争を開始するようなことさえなければ、「人民の友」は労働者にほんものの、何巻もあるような、大学風の、そして俗物的な科学を示し、人間の本性に合致した社会組織を詳細に知らせてやるであろう!

ミハイロフスキー氏の「批判」の第二の部分は、もはやマルクスの理論一般にむけられたものではなく、とくにロシアの社会民主主義者にむけられているが、われわれはこの部分にうつるまえに、いくらか脇道にそれなければならない。事情はこうである。ミハイロフスキー氏は――マルクスを批判するさいに、マルクスの理論を正確に叙述しようと試みなかったばかりでなく、直接にそれを歪曲したのとまさに同じように――ロシアの社会民主主義者の思想をも、やはり、まったく無法なやり方で曲げて伝えるのである。そこで、真実を復活させる必要がある。そうするには、以前のロシアの社会主義者の思想と社会民主主義者の思想とを比較してみるのが、いちばんよい。私は前者の叙述を、

『ルースカヤ・ムィスリ』(六)の一八九二年第六号所載のミハイロフスキー氏の論文から借りよう。そのなかで、彼はマルクス主義についても述べており(しかも――これはいまの彼を非難することになっているのだが――礼儀にかなった調子で述べており、検閲制度のもとにある定期刊行物ではブレーニン流にしか論じえないような問題にはふれず、マルクス主義者をあらゆる汚物と混同することもしていないのであるが)、そして、マルクス主義に対立させて、あるいは対立させてでないとしても、すくなくとも平行させて、自分の見解を叙述している。もちろん、私は、ミハイロフスキー氏を侮辱する考え、すなわち彼を社会主義者のうちに入れる考えはすこしもないし、また、ロシアの社会主義者とミハイロフスキー氏とを同列において社会主義者を侮辱する考えも、すこしもない。私はただ、この両者の論証の道すじが本質上同一であり、違いは信念の強さ、率直さ、および一貫性の度合いにある、と考えているだけである。

ミハイロフスキー氏は、『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』の思想を叙述して、こう書いている。「われわれは、土地が耕作者に属し、労働用具が生産者に属することを、道徳的=政治的理想の構成要素に入れた」。ごらんのように、出発点はきわめて善意あるもので、きわめて善良な願望でみたされている。……「わが国になお存在している中世的な労働形態*は大いにぐらついているが、しかしわれわれは、自由主義的なものであろうが自由主義的でないものであろうが、なんらかの主義のためにこれらの形態をまったく葬りさる理由を見いださなかった。」

* この著者は他の箇所で次のように説明している。「中世的な労働形態を、たんに共同体的土地所有、手工業およびアルテリ組織とだけ理解してはならない。疑いもなく、これらはすべて中世的な形態ではあるが、この形態には、土地あるいは生産用具が働くものに属しているいっさいの形態を入れなければならない。」

奇妙な議論だ! どのような「労働形態」であれ、それは、他のなんらかの形態にとって代わられる結果として、はじめてぐらつくようになるのではないのか。ところがわが著者にあっては、そういう新しい形態を分析し説明する試みすら見いだされないし、また、これらの新しい形態が古い形態を駆逐する原因を明らかにしようとする試みも見いだされない(また彼と思想を同じくする人々のだれのなかにも見いだされないであろう。)もっと奇妙なのは、この長談義の第二の部分である。「われわれは主義のためにこれらの形態を葬りさる理由を見いださなかった。」「われわれ」(すなわち社会主義者――まえに述べた保留条件を見

よ）は、もろもろの労働形態を「葬りさる」ために、すなわち社会成員のあいだの現存の生産関係を建てなおすために、どういう手段をもっているか？　主義にしたがってこれらの関係を改造するという考えは、ばかげたものではないだろうか？　なお先を聞こう。「われわれの任務は、自国民の胎内からぜひとも『独自な』文明をそだてあげることにもなければ、また西欧文明を、それを引き裂いている、すべての矛盾もろとも、そっくり自国にもちこむことにもない。どこからであろうと、あらゆるところから、より良いものを取ってこなければならない。それが自国のものであるか外国のものであるかは、もはや原則の問題ではなくて、実際上の便宜の問題である。明らかに、これは、論じるにおよばないほど簡単で、明瞭で、当然なことである」。実際、これはなんと簡単だろう！　あらゆるところから、より良いものを「取ってくる」――それで万事できあがりだ！　中世的形態からは、働くものへの生産手段の所属を「取ってくる」。新しい（すなわち資本主義的）形態からは自由、平等、開化、文化を「取ってくる」。それでもうなにも言うことはない！　社会学における主観的方法が、ここでは手にとるように明らかである。この社会学は、ユートピアから――働くものへの土地の所属から――出発し、そして望ましいものを実現するための条件を指示する。すなわち、そこここからより良いものを「取ってくる」のだ。この哲学者は、社会関係を、あれこれの制度のたんなる機械的な集合体として、あれこれの現象のたんなる機械的な連鎖として、純粋に形而上学的に観察している。彼は、こういう現象のなかから一つの現象――中世的形態における耕作者への土地の所属――を引きぬいてきて、そして考える。一つの現象は、一つの建物から他の建物へ煉瓦をうつすのとまったく同じように、あらゆる他の形態へ移植することができる、と。しかしこれは、社会関係を研究せずに、研究されるべき材料を台なしにすることではないか。現実には、耕作者への土地の所属が、諸君がとりあげたように、個別的に、独立に存在するわけではない。それは、土地が大土地所有者、地主のあいだに分配されていて、地主は農民を搾取するためにこの土地を農民に分与し、したがって土地がいわば現物賃金であったという、当時の生産関係の一つの環にすぎない。土地は、農民が地主のために剰余生産物を生産することができるように、農民に必要生産物をあたえた。土地は、農民が地主のために義務を履行するための元本であった。この筆者は、なぜ生産関係のこの制度を考究しないで、一つの現象をぬきだし、それをこのようにまったく誤った見地で見るだけにとどめたのか？　それは、この筆者には社会問題を取りあつかう力がないからで

ある。彼は（くりかえして言うが、私はミハイロフスキー氏の議論を、ロシア社会主義全体にたいする批判の一例としてのみ利用しているのだ）、当時の「労働諸形態」を説明し、それらを生産関係の一定の制度として、一定の社会構成体として示すという目的を、けっして設定していない。社会を、機能し発展しつつある生きた有機体として観察することを義務づける弁証法的方法は、同氏には、マルクスの用語を借りれば、無縁なのである。

同氏は、新しい労働形態による古い形態の駆逐の原因の問題をまったく設定しないことによって、これらの新しい形態について論じる場合にも、まったく同じ誤りを繰りかえしている。彼にとっては、これらの形態が耕作者への土地の所属を「ぐらつかせている」こと、すなわち、一般的に言えば、生産手段からの生産者の分離ということのうちに表現されることを確認し、そしてこのことを理想に合致しないものとして非難すれば、それで十分なのである。またもや、彼の所論はまったくばかげている。彼は一つの現象（土地の喪失）をぬきだすが、それを、商品生産者のあいだの競争や、不平等や、ある人々の零落と他の人々の致富やを必然的に生みだす、商品経済に立脚するもはや別の生産関係体制の一要素として、あらわそうとは試みない。彼は、一つの現象——大衆の零落——には注目したが、他の現象——少数者の致富——はかえりみなかった。そしてそのことによって、彼は、そのどちらをも理解しえないこととなったのである。

しかも同氏は、右のような方法を称して、「生活の諸問題にたいする回答を、それらが血と肉とでつつまれた形態のうちに探求するもの」（『ルースコエ・ボガートストヴォ』一八九四年第一号）と言っている。ところが、じつはまさにその反対であって、彼は、現実を説明し直視することができず、またそうすることを欲しないで、無産者にたいする有産者の闘争をともなうこの生活の問題から、不面目にも、たわいないユートピアの世界に逃避したのである。彼はこれを称して、「生活の諸問題にたいする回答を、緊急で複雑な実際の現実の理想的な問題提起のうちに探求するもの」（『ルースコエ・ボガートストヴォ』第一号）と言っている。ところが実際には、彼は、この実際の現実を分析し説明する試みすらしなかったのである。

そうするかわりに、氏は、中世の構成体からはこれこれを取り、「新しい」構成体からはこれこれを取るというぐあいに、さまざまな社会構成体から個々の要素をまったく無意味にぬきだして創作したユートピアを、われわれにあたえた。もちろん、このようなことに基礎をおく理論は、次の単純な理由によって、現実の社会進化からとりのこさ

れざるをえなかった。というのは、わが空想主義者たちは、そこここから取ってきた諸要素から構成された社会関係のもとでではなく、クラーク（経営じょうずな百姓）にたいする農民、買占人にたいする手工業者、工場主にたいする労働者の関係を規定していて、空想主義者たちにはまったく理解されなかったような社会関係のもとで、生活し活動じなければならなかったからである。この理解されていない社会関係を、自己の理想にしたがって改造しようとした彼らの企図と努力は、失敗に終わらざるをえなかった。

これが、「ロシアのマルクス主義者たちが生まれた」ころのロシアにおける社会主義の問題の状態の、ごく大まかな輪郭——概要——である。

彼らは、まさに以前の社会主義者の主観的方法を批判することから始めた。彼らは、搾取の存在を確認して、それを非難することに満足せずに、搾取を説明しようと望んだ。彼らは、ロシアの農民改革後の全歴史が大衆の零落と少数者の致富とから成っていることを認め、普遍的な技術的進歩と平行して小生産者の大規模な収奪があることを観察し、そして、こういう対極的な流れは、商品経済が発展し強化しているところで、またそのかぎりで、発生し強化しつつあることを認めて、彼らの当面しているのが、必然的に大衆の収奪と抑圧を生みだすブルジョア的（資本主義的）社会経済組織であることを、結論せざるをえなかった。彼らの実践綱領はこれらの確信によってすでに直接に規定されていた。それは、辺鄙な寒村から最新の完備した工場にいたるまでの、ロシアの経済的現実の主要な内容をなす、ブルジョアジーとのプロレタリアートのこの闘争、有産者階級にたいする無産者階級の闘争にくわわることに帰着した。どのようにしてくわわるのか？——これにたいする回答を彼らに暗示したのは、またもや現実そのものであった。資本主義は産業の主要部門を機械制大工業の段階にまでみちびいた。こうして生産を社会化することによって、資本主義は新しい制度の物質的諸条件をつくりだし、それと同時に、新しい社会勢力、すなわち工場労働者の階級、都市プロレタリアートの階級をつくりだした。ブルジョア的搾取は、その経済的本質からしてロシアの全勤労住民にたいする搾取であるが、プロレタリア階級はこの同じブルジョア的搾取をこうむりながら、しかも自己の解放にとってとくに好都合な条件下におかれている。この階級は、まったく搾取のうえに構築されている古い社会とは、すでになんのつながりももたない。彼らの労働の諸条件そのものと生活環境そのものが彼らを組織化し、彼らに物事を考えさせ、そして政治闘争の舞台に登場する可能性をあたえる。そこで当然、社会民主主義者はその全注意と全希望をこの階級

にそそぎ、その綱領をこの階級の階級的自覚の発達に帰着させ、そして、この階級を助けて現代の制度にたいする直接の政治闘争に立ちあがらせること、この闘争にロシアの全プロレタリアートを引きいれることに、その全活動を集中したのである。

こんどは、ミハイロフスキー氏が社会民主主義者に反対してどのようにたたかっているかを見よう。彼は、社会民主主義者の理論的見解にたいする反論として、彼らの社会主義的政治活動にたいする反論として、なにをもちだしているだろうか？

マルクス主義者の理論的見解は、この批判家によって次のように叙述されている。

「真理は——彼の言うマルクス主義者のことばによれば——次の点にある。すなわち、ロシアは、歴史的必然性の内在的法則にしたがって、それ自身の資本主義的生産を、それのいっさいの内的矛盾もろとも、大資本による小資本の併呑もろともに、発展させるであろう。他方、土地から切りはなされた百姓はプロレタリアに転化し、結合され、『社会化』されるであろう。それで万事できあがる。あとに残ることは、幸福になった人類がこのできあがったものを頭にかぶることだけである。」

おわかりだろう——つまり、マルクス主義者たちは、現実の解釈において「人民の友」となんら異なるところがない。異なるのは、未来の考えにおいてだけである。彼らはきっと、現在をまったく問題にせずに、ただ「見通し」だけを問題とするのにちがいない。これがまさにミハイロフスキー氏の考えであることは、疑う余地がない。彼はいう——マルクス主義者は、「未来にたいする自分たちの予見にはなんら空想的なものがなく、すべては厳密な科学の指定するところにしたがって秤量され測定されていると、まったく確信している」。そして、最後に、もっと明白に言う。マルクス主義者は「抽象的な歴史的図式の不変性を信じ、その信仰を告白している。」

ひとことでいえば、われわれはここに、マルクス主義者にたいする最も陳腐な、最も月なみな非難に当面しているのであって、この非難は、マルクス主義者の見解になにか本質的にふれた反論ができないすべての人が、ずっとまえから利用しているものである。「マルクス主義者は抽象的な歴史的図式の不変性の信仰を告白している」!!

だがまたこれはまったくの虚言であり、虚構である！

マルクス主義者のだれひとりとして、西欧に資本主義があった「から」ロシアにも「なければならない」、などと

いうふうに論証したものは、かつてどこにもいなかった。マルクス主義者のだれひとりとして、マルクスの理論をなんらかの普遍拘束的な歴史哲学的図式と見たり、ある経済的社会構成体の説明以上のなにかと見たりしたものは、かつてなかった。ひとり主観主義哲学者ミハイロフスキー氏だけが、マルクスのうちに普遍的な哲学理論を見てとるという、マルクスにたいする無理解をさらけだすようなことをやってのけ、これにたいする答えとして、同氏は見当ちがいをしているという、マルクスのまったく明確な釈明をうけとったのである。かつてただひとりのマルクス主義者も、理論が、所与の、すなわち、この場合ロシアの社会＝経済関係の現実および歴史に合致するということ以外のなにかに、自分の社会民主主義的見解を基礎づけたものはなかったし、またそのように基礎づけうるものでもなかった。なぜなら、理論にたいするこのような要請は、「マルクス主義」の創始者マルクスその人によって完全に明白かつ明確に言明され、全学説の礎石にすえられているからである。

もちろん、ミハイロフスキー氏は、抽象的な歴史的図式の信仰告白を「自分の耳で」聞いたと言って、右のような主張をいくらでも好きなだけ反論できよう。しかしミハイロフスキー氏がその話相手からあらゆる不条理なばか話を聞くことがあったとしても、それがわれわれ社会民主主義者に、あるいはどんな人にであれ、いったいどういう関係があるだろうか？　それは、彼が話相手をうまく選べたということを証明するだけであって、それ以上のなにものでもないではないか？　もちろん、この才気ある哲学者のこれらの才気ある話相手が、自分でマルクス主義者、社会民主主義者、等々を名のっていたということは、大いにありうることである。――しかし今日では（すでにずっとまえから指摘されていることだが）、卑劣漢はみなこのんで「赤い」衣服をまとうということを、だれか知らないものがあるだろうか？*　そしてミハイロフスキー氏が、このような「仮面かぶり」とマルクス主義者とを区別できないほど明敏であるか、あるいは、マルクスが力をこめて強調して提出している彼の全学説のこの基準（「われわれの目の前でおこなわれているもの」を定式化すること）に気づかないほど深くマルクスを理解しているか、そのどちらであるにしても、これは、またもやミハイロフスキー氏が賢明でないことを証明するだけであって、それ以上のなにものでもないのである。

＊　すべて以上のことは、ミハイロフスキー氏が抽象的な歴史的図式の信仰告白を実際に耳にしたのであって、なにも曲げて伝えていない、という前提で書かれている。しかし私は、この点については真疑は保障のかぎりでない、という保留条

件をつけておくことを、絶対に必要と考える。

いずれにせよ、出版物で社会民主主義者にたいする論戦に着手するからには、彼は、すでにずっとまえからこの名を名のっており、しかも、ただひとりこの名を名のっているため他のものと混同されえない社会主義者の一グループ、それ自身の文筆上の代表者をもっている一グループ——プレハーノフとそのサークルを、念頭におくべきであった。[20]もし彼がそうしたなら——すこしでも礼儀をわきまえた人なら、だれでもそう行動しなければならないことは明らかだが——、そして、せめて最初の社会民主主義的著作であるプレハーノフの著書『われわれの意見の相違』にでも目を向けてみたなら、同氏は同書の最初の数ページに、全サークル員を代表しての著者の断定的な言明を見いだしたことであろう。

「われわれはどんな場合にも、われわれの綱領を偉大な名まえの権威によって」(すなわちマルクスの権威によって)援護しようとは思わない」。ミハイロフスキー氏よ！貴下はロシア語がおわかりだろうか？　貴下は、抽象的図式にかんする信仰告白と、ロシアの問題を判断するさいにマルクスの権威をいっさい拒否することとのあいだの違いが、おわかりだろうか？

貴下は、たまたま話相手から聞くことができた手あたりしだいの判断をマルクス主義的な判断だと称し、社会民主主義者のなかの最も傑出したひとりが全グループを代表しておこなった印刷された声明を注意しないで放置したのだが、これは、不誠実な行動だったということが、おわかりだろうか？

さてそのさきでは、もっと明確な言明がなされている。

プレハーノフは言っている。「くりかえして言うが、最も一貫したマルクス主義者のあいだでも、現代のロシアの現実の評価の問題で意見の相違がありうる」。われわれの学説は、「この科学的理論をきわめて複雑で錯綜した社会関係の分析に適用する最初の試みである」。

これ以上明瞭に述べることは困難に思われる。マルクス主義者はマルクスの理論から、社会関係の究明に欠くことのできない貴重な方法だけを無条件に借りてくるのであって、したがって、抽象的図式やその他のばかげたことではなく、これらの関係にたいする自分の評価が現実に忠実で合致しているかどうかということをもって、その評価の基準と考えるのである。

あるいは、貴下は、右の筆者がこのような言明をしたとしても、彼は実際には別のことを考えていた、と思うかもしれない。しかし、それはまちがいである。彼がたずさわった問題は、「ロシアは資本主義的発展段階を通過しなけ

ればならないかどうか」、ということであった。したがってこの問題は、けっしてマルクス主義的に定式化されたものではなく、わが祖国のさまざまな哲学者たちの主観的方法によって定式化されたものである。これらの人々は、あるいは当局の政策をもって、あるいは「社会」の活動をもって、あるいは「人間の本性」とかそれに類似のたわごとに「合致した」社会の理想をもって、この当為の基準と考えているのである。そこで質問がおきる。抽象的図式の信仰告白をするような人は、この種の問題にたいしてかならずやどう答えるであろうか？　明らかに、そのような人は、弁証法的過程は論駁できないとかマルクスの理論は普遍哲学的な意義をもつとか、それぞれの国は不可避的にこれこれの段階を通過しなければならないとか……その他等々のことを語りだすであろう。

そしてプレハーノフはどう答えたか？

マルクス主義者が答えうる唯一の仕方で答えたのである。

彼は当為の問題を、主観主義者しか関心をもちえない無用の問題としてまったくうちすて、つねに現実の社会＝経済関係と、これらの関係の現実の進化についてのみ語った。だから彼は、まちがった仕方で提起されているこのような問題には直接の回答をあたえず、そのかわりに次のように答えた。「ロシアは資本主義の道にはいった」。

だがミハイロフスキー氏は、抽象的な歴史的図式の信仰告白とか、必然性の内在的法則とか、これに類似の信じがたいほどのナンセンスを、博識者ぶって語るのである！　しかもこれを称して、「社会民主主義者にたいする論戦」と言っているのだ!!

私には断じて理解できない、――もしこれが論戦家というなら、いったいだれを空論家とよべようか?!

なお、右に引用したミハイロフスキー氏の所論についていうと、「ロシアはそれ自身の資本主義的生産を発展させる」というのが社会民主主義者の見解であるかのように同氏が述べている点を、指摘しないわけにはいかない。この哲学者の意見によれば、明らかに、ロシアには「それ自身の」資本主義的生産は現存しない。この筆者は、ロシアの資本主義は一五〇〇万人の労働者に限定されるという意見に、賛成なのに相違ない。――われわれは、自由な労働のその他の搾取をすべてどこかわからないところに属させているわが「人民の友」諸君の、こういう子供じみた考えに、なおあとでお目にかかるであろう。「ロシアは、それ自身の資本主義的生産を、それのいっさいの内的矛盾もろとも発展させるし、他方、土地から切りはなされた百姓はプロレタリアに転化してゆく」。森に深くはいればはいるほど、木

はますます繁くなる！　では、ロシアには「内的矛盾」はないのか？　つまり、はっきり言えば、ひとにぎりの資本家による人民大衆の搾取はないのか？　住民の大多数の零落とひとにぎりの人間の致富はないのか？　百姓はやっとこれから土地から切りはなされることになるのか？　では農民改革後のロシアの全歴史は、どこにもかつて見られなかったほど強烈な、大衆的な農民収奪から成りたっていないで、いったいなにから成りたっているのか？　このようなことをだれにも聞こえるように言明するには、大きな勇気をもちあわせる必要がある。そしてミハイロフスキー氏はこのような勇気をもっているのだ。「マルクスは既成のプロレタリアートと既成の資本主義とを取りあつかったが、われわれはこれからそれらをつくりださなければならない」。ロシアは、これからプロレタリアートをつくりださなければならない?!　ロシア、その貧困者層の状態の点でイギリスと（しかも正当に）対比されたほどの、大衆の救いようのない窮乏、勤労者にたいする厚かましい搾取を見いだすことのできるこの唯一の国、幾千万人の人民の飢餓が、たとえば穀物輸出の不断の増加とならんで恒常的な現象となっている国、――このロシアにプロレタリアートがいないというのだ!!

私はあのような古典的なことばにたいして、ミハイロフスキー氏に生前に記念碑を建ててやってしかるべきだと考える！＊

＊　しかし、おそらく、ミハイロフスキー氏は、ここでもごまかそうとするのではなかろうか？　私はけっして、ロシアにはまったくプロレタリアートがいないと言おうとしたのではなく、ただ、ロシアには資本主義的プロレタリアートがいないと言おうとしたまでだ、と。そうだろうか？　それならなぜ、貴下はそのときそう言わなかったのか？　全問題は、ロシアのプロレタリアートはブルジョア的社会経済組織に固有なプロレタリアートであるのか、それともなにかほかの組織に固有のものであるのか、というところにあるのではないのか？　貴下が、まるまる二つの論文で、この唯一の重大で重要な問題についてはひとことも言わないで、むしろ、ありとあらゆるばか話をしゃべりたて、おまけにまるでとりとめもないことまでしゃべりまくったことについて、罪があるのはいったいだれだろうか？

しかし、ロシアにおける勤労者の耐えがたい状態に偽善的に目をつぶり、これをたんに「ぐらついた」状態として描き、したがって、万事を正しい道にむけるためには「教養ある社会」と政府の努力で足りるとすること、――これが「人民の友」のいつもながらの、もっとも首尾一貫した戦術であることを、われわれはなおあとで見るであろう。勤労大衆の状態が劣悪なのは、それが「ぐらついた」から

ではなく、彼らがひとにぎりの搾取者によってきわめて厚かましく略奪されているからなのだが、これらの騎士たちの考えるには、もし彼らがこういう事実に目をふさぐなら、もしこれらの搾取者を見ないために駝鳥のように頭を隠すなら、そのときには、これらの搾取者は消えてなくなるのである。そして、社会民主主義者が彼らにむかって、現実を直視することを恐れるのは恥ずべき卑怯であると語るとき、また社会民主主義者が、この搾取の事実を自己の出発点としてとりあげ、この事実の唯一の可能な説明は、人民大衆をプロレタリアートとブルジョアジーとに分裂させているロシア社会のブルジョア的組織のうちに、また、このブルジョアジーの支配の機関にほかならないロシア国家の階級的性格のうちにあり、したがって、唯一の活路はブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争にある、と語るとき、これらの「人民の友」は絶叫して言う。社会民主主義者は人民から土地を取り上げようとしている!!　彼らはわが国の人民的経済組織を破壊しようとしている!!

いまやわれわれは、この、すくなくとも不作法な「論戦」の全体のなかでもっともいとうべき箇所、すなわち、まさに社会民主主義者の政治活動にたいするミハイロフスキー氏の「批判」(?)までやってきた。だれでもわかるように、社会主義者や扇動家たちの労働者のあいだでの活動は、わが国の合法的出版物のなかで誠実に討議することはできないのであって、検閲制度のもとにある出版物でいちおうのものがこの点でやれるただ一つのことは、「如才なく口をつぐむ」ことである。ミハイロフスキー氏は、このまったく初歩的な規則を忘れてしまい、社会主義者にどろをあびせかけるために、読者界に呼びかける点での自己の独占権を利用することを恥としなかった。

しかし、この無作法な批判家にたいする闘争手段は、合法的ジャーナリズムの圏外に見いだされるであろう。

ミハイロフスキー氏は無邪気さをよそおってこう言っている。「私の理解するかぎりでは、ロシアのマルクス主義者は三つの部類に分けることができる。すなわち、傍観的マルクス主義者(過程の無関心な観察者)、消極的マルクス主義者(彼らは『陣痛を緩和する』だけであり、『大地に腰をすえている人民には関心をもたず、すでに生産手段から切りはなされている人民に自分の注意と希望をむけている』)および積極的マルクス主義者(彼らは農村のより以上の零落をあからさまに主張する)、である。」

これはなんということだ?!　わが批判家氏は、ロシアのマルクス主義者とは、ロシアの現実は資本主義社会であり、この社会からの活路はただ一つ、ブルジョアジーにたいす

るプロレタリアートの階級闘争である、という現実観から出発している社会主義者であることを、はたして知りえないのか？ 彼は、どんな方法で、またどんな理由で、マルクス主義者と、なにか無意味な月なみなものとを、いっしょくたにするのか？ 彼はどんな権利（もちろん道徳的な）があって、明らかにマルクス主義の最も初歩的な基本的命題さえ受けいれていないような人々や、かつて、どこででも、別個の集団として立ちあらわれたことがなく、かつて、どこででも、なんらかのそれ自身の綱領を公表したことのないような人々にまで、マルクス主義者という用語を拡大するのか？

ミハイロフスキー氏は、このような無法なやり方を正当化するために、数多くの抜け道を自分に残しておいた。

彼は、社交界の伊達者の気軽さで駄じゃれを言う。「おそらく、これはほんもののマルクス主義者ではないのだろうが、しかし彼らはマルクス主義者と自任し、そう公言している」。いつ、どこで公言したのか？ ペテルブルグの自由主義者や急進主義者のサロンでか？ 私信のなかでか？ そうならそうでよろしい。それなら貴下もやはり、自分のサロンや自分の通信のなかで、彼らと会話したまえ！ しかし貴下は、かつてどこででも（マルクス主義の旗のもとに）公衆のまえに現われたことのない人々にたいして、出版物で、公衆のまえで立ちむかっているではないか。そのうえ貴下は、革命的社会主義者の一つのグループだけがこの社会民主主義者という名称をかかげていること、またこのグループを他のどのようなグループとも混同してならないことを承知していながら、「社会民主主義者」にたいして論戦しているかのように、あえて公言しているのだ！*

* ミハイロフスキー氏のもとにたまたまあった一つの事実的な指摘に立ちいっておこう。彼の論文を読んだものはだれでも、同氏がスクヴォルツォフ氏（『飢饉の経済的原因』の著者）をも「マルクス主義者」のうちに入れているということに、同意しなければならないであろう。ところがこの紳士自身は、自分をそうは名のっていない。そして、社会民主主義者の著作についてごく初歩的な知識さえあれば、彼が社会民主主義者の見地から見てきわめて凡俗なブルジョアであり、それ以上のなにものでもないことを知るのに十分である。彼がそれのために自分の進歩計画を立てている当の社会的環境がブルジョア的環境であること、それゆえ農民経営のなかにさえ現実に認められる「文化的改善」はすべて、少数者の状態を改善して大衆をプロレタリア化するブルジョア的進歩を意味すること、これらのことを理解しないとは、いったいどんなマルクス主義者なのか！ 自分が計画を提出する当の国家が、ブルジョアジーを支持し、プロレタリアートを圧迫することしかできない階級国家であることを理解しないとは、

・いったいどんなマルクス主義者なのか！

ミハイロフスキー氏は、いたずらを見つけられた中学生のように、ことばをまぎらし、もじもじする。彼は読者にむかって証明しようと努める。私はこれにはまったくあずかり知らない、私は「自分の耳で聞き、自分の目で見たのだ」。いや、けっこうだ！　われわれは、卑俗な人間や悪党のほかにはだれも貴下の目にはいらなかったということを、喜んで信じよう。しかし、それがわれわれ社会民主主義者となんの関係があるのか？　社会主義的活動ばかりでなく、ほんのすこしでも自主的で誠実な社会的活動がすべて政治的迫害をまねいている「今日では」(六二)、あれこれの旗のもとに――すなわち、「人民の意志」派、マルクス主義、あるいはたとえば立憲主義でさえの――実際に活動している活動家一人にたいして、これらの名まえで自分の自由主義的臆病さをおおいかくしている空語家が数十人、さらに、おそらくは、自分自身の商売をやっているまったくの卑劣漢が何人かいることを、だれが知らないであろうか？　右にあげた諸流派のどれにむかってであろうと、さまざまならずものどもが（しかも非公然に、ひそかに）それの旗をけがしているという事実をつきつけて非難しうるようなものは、最も低劣な凡俗漢だけだということは、明らかではないか？　ミハイロフスキー氏の全叙述は、歪曲と曲解とすりかえのたえまない連鎖である。以上に見たとおり、彼は、社会民主主義者がそこから出発している「真理」をまったく曲げて伝え、マルクス主義者のだれひとりとして、かつて、どこででも、この「真理」を述べたことがなかったし、また述べえなかったかのように説いている。ところで、もし彼が、ロシアの現実についての社会民主主義者の実際の見解を叙述したならば、彼は、これらの見解との「合致」は、ただ一つの仕方でのみ――すなわち、プロレタリアートの階級的自覚の発達を助け、現代の制度にたいする政治闘争のためにプロレタリアートを組織し、結集することによってのみ――可能であることを、理解せざるをえなかったであろう。しかし、彼にはなお一つの術策が残されていた。彼は、罪なくして侮辱されたもののふりをして、偽善的に目を空のほうにむけ、甘ったるい声で言う。「私はそれを聞いてたいへんうれしいが、しかし私は、諸君がなにに抗議しているのかわからない。」（彼は『ルースコエ・ボガートストヴォ』第二号で、こう言っている）。「消極的マルクス主義者について私が批評していることを、注意して読んでもらいたい。そうすれば、諸君は、倫理的見地からはなにも異議をとなえるところはない、と私が言っていることを見るであろう。」

もちろん、これも、さきのみじめな逃げ口上の蒸しかえ

し以外のなにものでもない。

社会革命的ナロードニキ主義(これ以外のナロードニキ主義はまだ登場していなかった——私はそういう時期をとりあげている)を批判すると公言して、たとえば、次のようなことを述べはじめる人があるとすれば、その人のふるまいをいったいなんと名づけたらよいか、どうか教えてほしいものだ。

「私の理解するかぎりでは、ナロードニキは、三つの部類に分けられる。首尾一貫したナロードニキ、——彼らは、百姓の考えをそっくり受けいれ、百姓の願望にまったく合致して、笞打ち、妻の打擲を一般化し、また一般に、人民的政策とよばれてきた、政府の最もいとうべき鞭と杖の政策を支持している。次は臆病なナロードニキ、——彼らは、百姓の意見に関心をもたず、ロシアに無縁な革命運動を、組合、等々を媒介としてロシアに移植しようと試みるだけである。——しかし、臆病なナロードニキをたやすく首尾一貫したナロードニキあるいは勇敢なナロードニキに変えうるほど、道が滑りやすいのでないなら、この革命運動にたいしては倫理的見地からはなにも異議をとなえるところはない。最後に、勇敢なナロードニキ、——彼らは、経営じょうずな百姓の人民的な理想をまったく完全に実現しており、それゆえ、本気で富農としてやってゆくために大地に腰をすえている。」——たしなみある人間ならだれでも、もちろん、これを卑劣で卑俗な嘲笑と名づけるだろう。ところで、もしそのうえ、このようなことを述べた人が、その同じ出版物紙上でナロードニキから反論されることがありえないとすれば、またそのうえ、これらのナロードニキの思想が今日まで非合法にしか述べられておらず、したがって、ナロードニキについて正確な概念をもたず、しそれゆえ多くの人がそれについてどんなことが言われようと、なんでもやすやすと信じうる状態にあるとすれば、——そうとすれば、すべての人が次のことに同意するであろう。このような人間は、……

とはいえ、おそらく、ミハイロフスキー氏自身も、ここに入れるべきことばをまだまったく忘れてはいないであろう。

だがもうたくさんだ! ミハイロフスキー氏にはこの種のあてこすりがまだたくさんあるが、しかし、この汚物のなかで骨をおり、あちこちにまきちらされている暗示をかきあつめ、それらを比較対照し、せめて一つでもなにかまじめな反論を探しもとめること以上に、あきあきする、骨おりがいのないいやな仕事を、私は知らない。

もうたくさんだ！

一八九四年四月

一八九四年春に執筆
一八九四年にこんにゃく版で出版
全集、第五版、第一巻、一二五―二〇三ページ所収
邦訳全集、第一巻、一二四―二〇二ページ所収

フリードリヒ・エンゲルス

なんという理性の燈火が消えたことだろう、
なんという心臓が鼓動をやめたことだろう！(21)

一八九五年新暦八月五日（七月二四日）、フリードリヒ・エンゲルスがロンドンで亡くなった。彼の友カール・マルクス（一八八三年死去）が亡くなってからは、エンゲルスは、全文明世界における現代プロレタリアートの最もひいでた学者であり教師であった。運命がカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスを出会わせたときから、二人の友の生涯の仕事は彼らの共通の事業になった。そこで、フリードリヒ・エンゲルスがプロレタリアートのためになにをしたかを理解するためには、マルクスの学説と活動とが現代の労働運動の発展にとってもっている意義を、はっきりつかむことが必要である。マルクスとエンゲルスは、労働者階級とその諸要求とが近代経済制度の必然的な所産であり、この制度がブルジョアジーとともに不可避的にプロレタリアートをつくりだし、組織するということを示した最初の人であった。彼らは、今日人類を抑圧している災厄から人類を救いだすものは、個々の高貴な個人の善意の企てではなくて、組織されたプロレタリアートの階級闘争であることを、示した。マルクスとエンゲルスは、社会主義とは夢想家の思いつきではなくて、近代社会の生産力の発展の終局の目標であり必然的な結果であることを、その科学的労作において明らかにした最初の人であった。今日までの文書に書かれた歴史の全体は、階級闘争の歴史であり、ある社会階級の他の社会階級にたいする支配と勝利の交替の歴史であった。そしてこれは、階級闘争と階級支配との基礎であるもの——すなわち私的所有と無秩序な社会的生産——が消えさるまでは、今後もつづくであろう。プロレタリアートの利益は、これらの基礎を廃棄することを要求する。だから、組織された労働者の意識的な階級闘争は、これらのものにたいして向けられなければならない。そして、いっさいの階級闘争は政治闘争である。

マルクスとエンゲルスのこれらの見解は、今日では、自己の解放のためにたたかっている全プロレタリアートによってわがものとされている。しかし、一八四〇年代に二人

の友が当時の社会主義的文筆界と社会運動に参加したときには、このような見解はまったく新奇なものであった。その当時は、才能のある者もない者も、誠実な者も不誠実な者も、多くの人が政治的自由のための闘争、帝王や警察や坊主どもの専制にたいする闘争に熱中していたが、しかしブルジョアジーとプロレタリアートの利害の対立には気がつかなかった。この人々は、労働者が独自の社会勢力として行動するなどという考えさえ受けいれなかった。他方では、多くの夢想家たち、ときには天才でさえある夢想家たちが、現代の社会制度の不正なことを支配者や支配階級に納得させさえすれば、地上に平和と全般的福祉をもたらすことは容易なことだ、と考えていた。彼らは闘争をぬきにした社会主義を夢想していたのである。最後に、当時の社会主義者や一般に労働者階級の味方であった人々は、ほとんどみなプロレタリアートを災いとしか見ず、工業の成長にともなってこの災いもまた成長してゆくありさまを、恐怖の念をもって眺めていた。だから、彼らはみな、どうすれば工業とプロレタリアートとの発達を阻止できるか、「歴史の車輪」をとどめられるか、と考えめぐらしたのであった。マルクスとエンゲルスは、プロレタリアートの発達にたいするこの一般の恐怖とは反対に、プロレタリアートの不断の成長にいっさいの望みをかけた。プロレタリアの数が多くなればなるほど、革命的階級としての彼らの力もますます大きくなり、社会主義はますます近づき、ますます可能なものとなる。マルクスとエンゲルスの労働者階級にたいする貢献は、数言でつくせば、次のように言いあらわすことができる。彼らは、労働者階級に自分自身を認識し自覚することを教え、夢想に科学を代置した、と。

これが、エンゲルスの名まえと生涯をどの労働者も知っていなければならない理由である。これが、われわれのあらゆる出版物がそうであるように、ロシアの労働者の心に階級的自覚を呼びさますことを目的としているこの論集で、われわれが、近代プロレタリアートの二大教師のひとりであるフリードリヒ・エンゲルスの生涯と活動の概要を示さなければならない理由である。

エンゲルスは一八二〇年にプロシア王国ライン州のバルメンで生まれた。彼の父は工場主であった。一八三八年にエンゲルスは、家庭の事情のため、中学校を卒業しないうちにブレーメンの一商館の店員とならなければならなかった。エンゲルスは商人としての仕事に従事しながらも、自分の学問上、政治上の教養をつむための勉強をやめなかった。まだ中学生のころに、彼は専制と役人の専横とを憎むようになった。哲学の研究によって彼はさらに前進した。そのころドイツ哲学ではヘーゲルの学説が支配しており、

エンゲルスはヘーゲルのあとにつづく者となった。ヘーゲル自身は専制的プロシア国家の崇拝者であって、ベルリン大学教授としてこの国家に奉職していたのだが、それにもかかわらずヘーゲルの学説は革命的なものであった。人間理性とこの理性の権利とにたいするヘーゲルの信仰と、また世界では変化と発展の不断の過程がおこなわれているというヘーゲル哲学の根本命題とに従って、このベルリンの哲学者の弟子たちのうちで現実との和解を欲しない分子は、現実と闘争すること、現存する不正やあまねくおこなわれている害悪と闘争することも、永遠の発展という世界的法則に根底をもつ事柄である、という考えに達した。もしあらゆる事物が発展するのなら、もし諸制度が次から次へと交替するのなら、どうしてプロシア国王あるいはロシアのツァーリの専制が、膨大な大多数者の負担によるわずかばかりの少数者の致富が、人民にたいするブルジョアジーの支配が、永遠につづくことがあろうか？　ヘーゲルの哲学は精神や理念の発展を論じていた。それは観念論的であった。それは、精神の発展から、自然の発展や人間および人的・社会的関係の発展を結論していた。マルクスとエンゲルスは、永遠の発展過程というヘーゲルの思想を保存しながらも、*観念論的な先入観を放棄した。彼らは、実生活に目をむけることによって、精神の発展が自然の発展を説明するのでなく、その反対に、精神を自然から、物質から説明しなければならないことを知った。……ヘーゲルやその他のヘーゲル主義者とは反対に、マルクスとエンゲルスは唯物論者であった。世界と人間を唯物論的に観察した結果、彼らは、いっさいの自然現象の基礎には物質的な原因があるのと同じように、人間社会の発展も、物質的な生産力によって条件づけられていることを知った。人間の欲求を充足するのに必要な物資の生産にあたって人間がたがいに結ぶ関係は、生産力の発展によって決まる。そしてこれらの関係によって、社会生活のいっさいの現象、人間の志向、観念、法律が説明されるのである。生産力の発展は、私的所有に立脚する社会関係をつくりだす。しかし今日では、生産力のこの同じ発展が大多数者から財産を奪い、それをわずかばかりの少数者の手に集中していることが見られる。この発展は、現代社会制度の基礎となっている所有を廃棄する。この発展そのものが、社会主義者が自分の目標としているのと同じ目標に向かってすすんでいるのである。社会主義者がしなければならないことは、どういう社会勢力が、現代社会にそれが占める地位からして社会主義の実現に利益をもっているかを理解し、この勢力に、自分自身の利益と歴史的任務とについての意識を伝えることだけである。そういう勢力がプロレタリアートである。エンゲルス

は、このプロレタリアートをイギリスで、イギリス工業の中心地であるマンチェスターで知った。彼は一八四二年にそこへ移って、彼の父が出資者のひとりであった一商館に勤めたのである。この地でエンゲルスは、ただ工場の事務所にすわっていたのではなかった。――彼は、労働者が住んでいた貧民窟を歩きまわって、わが目で彼らの貧窮と困苦を見た。しかし彼は、自分でした観察だけに満足しないで、イギリスの労働者階級の状態について彼以前に明らかにされた事柄をみな読み、手にはいるかぎりのあらゆる公文書を綿密に研究した。こういう研究と観察の成果が、一八四五年に刊行された書物『イギリスにおける労働者階級の状態』であった。『イギリスにおける労働者階級の状態』の著者としてのエンゲルスのおもな貢献がどこにあるかということは、すでにさきほど述べておいた。エンゲルス以前にも、非常に多くの人がプロレタリアートの苦難を描き、彼らを助ける必要を指摘していた。エンゲルスは、プロレタリアートが苦難する階級であるだけにとどまらないこと、プロレタリアートがおかれている恥ずべき経済的地位そのものが、抗しがたい力で彼らを前へおしすすめ、自己の終極的解放のためにたたかわせるということを、最初に語った人である。そして、たたかうプロレタリアートは自力で自分を救うであろう。労働者階級の政治運動は、かならずや労働者に、社会主義以外には自分たちに活路がないことを自覚させるようになるであろう。他方では、社会主義は、労働者階級の政治闘争の目標となってはじめて、一個の力となるであろう。これが、イギリスの労働者階級の状態についてのエンゲルスの著書の根本思想である。これは今日では、思考し闘争するプロレタリアートの全体がわがものにしている思想であるが、当時にあっては、まったく新しいものであった。こういう思想が、人の心をひきつける筆致で書かれ、イギリスのプロレタリアートの困苦についての最も信頼できる、戦慄すべき描写にみちた本のなかで述べられたのである。この本は、資本主義とブルジョアジーとにたいする恐るべき告発状であった。それが呼びおこした印象はじつに巨大であった。エンゲルスの著書は、現代プロレタリアートの状態の最良の描写として、いたるところで引用されるようになった。そして実際に、一八四五年以前とそれ以後とを問わず、労働者階級の困苦をこれほどまでまざまざと真実に描いたものは、ただの一つも現われなかった。

* マルクスとエンゲルスは、自分らの知的発展において、ドイツの大哲学者たち、ことにヘーゲルに、多くのものを負っていることを、いくたびとなく指摘した。エンゲルスは言っている。「ドイツ哲学がなかったなら、科学的社会主義もな

かったであろう[六四]」。

エンゲルスは、イギリスに来てからはじめて社会主義者になった。マンチェスターで彼は、当時のイギリスの労働運動の活動家たちと連絡をつけ、イギリスの社会主義的出版物への寄稿を始めた。一八四四年に彼は、ドイツへ帰国する途中、パリで、すでにそのまえから文通を始めていたマルクスと知合いになった。マルクスはパリで、フランスの社会主義者とフランスの生活との影響をうけて、これまた社会主義者になっていた。ここで、二人の友は協同して、『聖家族。別名、批判的批判の批判』という本を書いた。この本は、『イギリスにおける労働者階級の状態』の一年まえに刊行され、大部分マルクスによって書かれたのであるが、この本のなかで、われわれがさきほどその主要な思想を述べたあの革命的＝唯物論的社会主義の基礎がすえられたのである。「聖家族」というのは、哲学者バウアー兄弟とその追随者たちをからかった呼び名である。この先生がたは批判を説教していたが、それはあらゆる現実を超越し、諸党派と政治を超越し、あらゆる実践活動を否認し、周囲の世界とそこに起こっている諸事件をただ「批判的に」観照するだけのものであった。バウアー一派の先生がたは、高みからプロレタリアートを無批判的な大衆として扱った。このばかげた有害な流派にたいして、マルクスとエンゲルスは断固として反対した。現実の人間的人格である労働者、支配階級と国家によってふみにじられている労働者のために、彼らは観照ではなく、よりよい社会組織のための闘争を要求した。このような闘争をおこなう能力があり、それに利益をもつ勢力であると彼らが考えたのは、もちろん、プロレタリアートである。すでに『聖家族』[六五]のまえにもエンゲルスは、マルクスとルーゲの『独仏年誌』に『国民経済学批判大綱』を発表して、そのなかで、社会主義の立場から、近代経済制度の基本的諸現象を私的所有の支配の必然的な結果として考察していた。マルクスが経済学——彼の労作によって完全な変革をこうむった科学——を研究する決心をきめるのに、エンゲルスとの交際が力をそえたことは、議論の余地がない。

一八四五年から一八四七年までの期間、エンゲルスはブリュッセルとパリで暮らし、科学的研究をブリュッセルとパリに在住するドイツ人労働者のあいだでの実践活動に結びつけた。ここでエンゲルスとマルクスは、秘密のドイツ「共産主義者同盟」[六六]と関係を結んだが、同盟は、彼らに、彼ら二人がつくりあげた社会主義の基本原則を叙述することを委託した。こうして、一八四八年に刊行されたマルクスとエンゲルスの有名な『共産党宣言』が生まれたのである。このささやかな一小冊子は、何巻もの書物に匹敵する。

今日にいたるまで、文明世界の組織された、たたかうプロレタリアート全体が、この小冊子の精神によって生き、また進んでいるのである。

一八四八年の革命は、はじめフランスに起こり、ついで西ヨーロッパのその他の国々にも波及したが、この革命はマルクスとエンゲルスを祖国につれもどした。ここプロシア領ライン州で、彼らはケルンで発行された民主主義的な新聞『新ライン新聞』[32]の先頭に立った。二人の友は、プロシア領ライン州におけるあらゆる革命的・民主主義的志向の精神的中心であった。彼らは反動勢力にたいして、人民の利益と自由の事業とを力の及ぶかぎり最後まで守った。周知のように、反動勢力が勝利した。『新ライン新聞』は禁止された。亡命生活のあいだにプロシアの国籍を失っていたマルクスは追放され、他方エンゲルスは、人民の武装蜂起に参加し、三つの戦闘において自由のために戦い、決起した人々が敗北したあと、スイスを経由してロンドンに逃がれた。

マルクスもまたロンドンに居を定めた。まもなくエンゲルスは、彼が四〇年代に勤めていた同じマンチェスターの商館にもう一度店員としてはいり、のちにはその共同出資者ともなった。一八七〇年まで彼はマンチェスターに住み、他方マルクスはロンドンに住んでいたが、そのことは、彼らがきわめて活発な思想的交通をたもつ妨げにはならなかった。彼らはほとんど毎日のように文通した。この文通をつうじて、二人の友は、その意見と知識を交換し、共同して科学的社会主義をつくりあげる仕事をつづけた。一八七〇年にエンゲルスはロンドンに移った。そして、マルクスが亡くなる一八八三年まで、緊張した活動にみちた彼らの共同の思想生活がつづけられたのである。その成果は、マルクスにあっては今世紀最大の経済学的著作である『資本論』であり、エンゲルスにあっては大小の数多くの著作であった。マルクスは、資本主義経済の複雑な諸現象の分析に従事した。エンゲルスは、きわめて平易に書かれ、しばしば論戦のかたちをとった諸労作のなかで、最も一般的な科学上の問題や、過去および現在の各種の現象を、唯物史観とマルクスの経済理論との精神に則して説きあかした。これらのエンゲルスの労作のうちで、われわれは次のものをあげよう。――デューリングにたいする論戦的著作（このなかでは、哲学、自然科学、社会科学の分野における最も重要な諸問題が検討されている）*、『家族、私有財産および国家の起原』（ロシア語訳はサンクト・ペテルブルグ発行。第三版、一八九五年）、『ルードヴィヒ・フォイエルバッハ』（ゲ・プレハーノフの注解つきロシア語訳、ジュネーヴ、一八九二年）、ロシア政府の対外政策にかんする

論文[六〇]（ロシア語訳はジュネーヴの『ソツィアリーデモクラート』誌、第一、二号所載）、住宅問題にかんする注目すべき連続論文。[六九]最後に、ロシアの経済的発達についての小さな、しかし、きわめて貴重な二論文[七〇]（『フリードリヒ・エンゲルスのロシア論』、ヴェ・イ・ザスーリチによるロシア語訳、ジュネーヴ、一八九四年）。マルクスは、資本についてのその巨大な労作を、ついに最後的に仕上げることができずに亡くなった。しかしその大綱はすでに完成していたので、エンゲルスは、その友の死後に『資本論』の第二巻と第三巻を仕上げて出版するという難事業に着手した。彼は、一八八五年に第二巻を、そして一八九四年に第三巻を刊行した（第四巻[七一]を彼は仕上げることができなかった）。この二つの巻の仕事は非常な労力を要した。オーストリアの社会民主主義者アドラーが、エンゲルスは『資本論』第二巻と第三巻の刊行によって、その天才的な友のために壮大な記念碑を建立したが、それは、はからずもその記念碑に彼自身の名まえを消えることのない文字できざみこむことになった、と述べたのは、正しい。実際に、『資本論』のこの二つの巻は、マルクスとエンゲルス両人の労作である。いにしえの伝説は、人を感動させる友情のいろいろな実例を語り伝えている。ヨーロッパのプロレタリアートは、自分たちの科学は二人の学者であり闘士である人によってつくりだされたが、この二人のあいだの交遊は、人間の友情について古人の語っている最も人を感動させる物語のすべてを凌駕（りょうが）するものである、と言ってよい。エンゲルスは、つねに——そして、大体において、それはまったく正しかったが——自分をマルクスのうしろにおいた。彼はある旧友への手紙に書いた。「マルクスがいたあいだは私は第二ヴァイオリンをひいた[七二]」。生前のマルクスにたいする彼の愛情と、死後のマルクスの追憶にたいする彼の崇敬とは、かぎりないものであった。この峻厳な闘士であり厳格な思想家であった人の胸には、深く愛する心がやどっていた。

* これは、驚くべく内容の豊かな、教えるところの多い書物である。遺憾なことには、ロシア語には、同書のうちで、社会主義の発展の歴史的概説をふくむ小部分が翻訳されているにすぎない（『科学的社会主義の発展』、第二版、ジュネーヴ、一八九二年）。

一八四八—一八四九年の運動ののちも、マルクスとエンゲルスは、追放の身で学問だけにたずさわっていたわけではなかった。マルクスは、一八六四年に「国際労働者協会」[七三]を創立し、まる一〇年にわたってこの協会を指導した。エンゲルスもまた、この協会の事業に活発に参加した。マルクスの思想にしたがって万国のプロレタリアを団結させ

たこの「国際協会」の活動は、労働運動の発展にとって巨大な意義をもっていた。しかし、七〇年代に「国際協会」が解散されてからも、マルクスとエンゲルスの統合的な役割はやみはしなかった。かえって、労働運動の精神的指導者としての彼らの重要性は絶えず高まっていったといえる。というのは、運動そのものもまた不断に成長したからである。マルクスの死後は、エンゲルスはひとりで、ひきつづきヨーロッパの社会主義者の相談役であり指導者であった。政府の迫害にもかかわらずその勢力を急速に、また不断に増大させたドイツの社会主義者も、自分たちの踏みだす第一歩を熟考し考量しなければならなかったおくれた国々の代表者たち――たとえばスペイン人、ルーマニア人、ロシア人――も、みな一様にエンゲルスに助言と指示を求めた。彼らのすべてが、老エンゲルスの豊かな知識と経験の宝庫から汲みとったのである。

　マルクスとエンゲルスは、二人ともロシア語を知っており、ロシアの書物を読んでいて、ロシアについては活発な関心をいだいており、ロシアの革命運動を同情をもって見まもり、ロシアの革命家たちと連絡を保っていた。彼らは二人とも民主主義者から社会主義者になったので、政治的専横を憎悪する民主主義的な感情は、彼らの心中にきわめて強かった。この本能的な政治的感情は、政治的専横と経済的抑圧との関連についての深い理論上の理解や、さらに豊富な生活上の経験とあいまって、マルクスとエンゲルスを、ほかならぬ政治上の点ではなはだしく敏感にした。だから、わずかにひとにぎりのロシアの革命家が強大なツァーリ政府にたいしておこなった英雄的闘争は、この試練を経た革命家の心に最も同情ある反響を呼びおこしたのである。これに反して、仮想的な経済的利益のために、ロシアの社会主義者の最も直接的で重要な任務――政治的自由の獲得の任務――からわきへそれようとする意向は、当然のこととして、彼らの目にはいかがわしいものとうつり、また、直接に社会革命の大事業にたいする裏切りとさえ思われた。「プロレタリアートの解放はプロレタリアート自身の事業でなければならない」[33]――これこそマルクスとエンゲルスがつねに教えたところである。しかし、自分の経済的解放に向かってたたかうためには、プロレタリアートは、一定の政治的権利をたたかいとらなければならない。そのうえ、マルクスもエンゲルスも、ロシアに政治革命が起これば、西ヨーロッパの労働運動にとっても巨大な意義をもつであろうということを、はっきり理解していた。専制ロシア[34]はつねに全ヨーロッパ反動の砦であった。一八七〇年の戦争は、ドイツとフランスのあいだに長年にわたる不和の種をまいて、ロシアをきわめて有利な国際的地位におい

たが、これはもちろん、反動勢力としての専制ロシアの意義を高めるものでしかなかった。ポーランド人、フィン人、ドイツ人、アルメニア人、その他の小民族を抑圧しておくことをも、またフランスとドイツをたえずいがみあわせておくことをも必要としない、自由なロシアだけが、現代ヨーロッパから戦争の重荷をとりのぞいて自由に息づかせ、ヨーロッパのあらゆる反動分子を弱め、ヨーロッパの労働者階級の力を増大させるであろう。だからこそエンゲルスは、西欧の労働運動の成功のためにも、ロシアに政治的自由がうちたてられることを熱望したのである。ロシアの革命家は、彼を失うことによってその最良の友を失った。

プロレタリアートの偉大な戦士にして教師、フリードリヒ・エンゲルスに永遠の追憶あれ！

一八九五年秋に執筆
一八九六年にはじめて論集『ラボートニク』第一―二号に発表
全集、第五版、第二巻、一―一五ページ所収
邦訳全集、第二巻、三―一二ページ所収

社会民主党綱領草案と解説[3]

綱領草案

A 一　ロシアでは大工場がますます急速に発達して、小さなクスターリ[10]と農民を零落させ、彼らを無産の労働者に転化させ、ますます多くの人民を都市に、また工場的・工業的な村や町に追いやっている。

二　資本主義のこの成長は、ひとにぎりの工場主、商人、地主のあいだに富と贅沢が途方もなく増大し、また労働者の貧窮と抑圧がさらにいっそう急速に増大していることを意味する。大工場で採用される生産上の改良と機械は、社会的労働の生産性の向上を促進しながらも、労働者にたいする資本家の権力を強め、失業を増加させ、それとともにまた労働者を無防備の状態におくことに役だっている。

三　だが、労働にたいする資本の抑圧を最高度にまで高めることによって、大工場は労働者たちの特殊な階級をつくりだしている。この階級は資本と闘争する可能性をもつようになる。なぜなら、この階級の生活条件そのものが彼らと彼ら自身の経営とのいっさいの結びつきを破壊しており、また共同の労働によって労働者を結合し、彼らを工場から工場へ転々とさせることによって、働く人間の大衆を打って一丸としているからである。労働者は資本家にたいする闘争を始めており、彼らのあいだには団結への強い志向が現われている。労働者の個々の暴動から、ロシア労働者階級の闘争が成長しつつある。

四　資本家階級との労働者階級のこの闘争は、他人の労働によって生活しているすべての階級にたいする、またあらゆる搾取にたいする闘争である。この闘争は、政治権力が労働者階級の手にうつり、すべての土地、道具、工場、機械、鉱山が、社会主義的生産を組織するために全社会の手に引き渡されるときに、はじめて終わることができる。社会主義的生産のもとでは、労働によって生産されるすべてのものと生産上のすべての改良とは、当然、勤労者自身の利益に使われることになるのである。

五　ロシア労働者階級の運動は、その性格と目的から見て、万国の労働者階級の国際的（社会民主主義的）運動の一部となる。

六　自分の解放のためのロシア労働者階級の闘争における主要な障害は、無制限な専制政府と、責任を負わないその官吏とである。この政府は、地主と資本家の特権にもとづき、また彼らの利益に奉仕することにもとづいて、下層の諸身分を完全な無権利の状態におしとどめ、そうすることによって労働者の運動を束縛し、全人民の発展を阻止している。だから、自分の解放のためのロシア労働者階級の闘争は、必然的に専制政府の無制限の権力にたいする闘争を呼びおこすのである。

B一　ロシア社会民主党は、労働者の階級的自覚を発達させ、彼らの組織化に助力し、闘争の任務と目標とを指示することによって、ロシア労働者階級のこの闘争を援助することを、自己の任務として宣言する。

二　自分の解放のためのロシア労働者階級の闘争は政治闘争であって、その第一の任務は政治的自由を獲得することである。

三　だからロシア社会民主党は、労働運動から離れることなく、専制政府の無制限の権力に反対し、特権的な地主貴族の階級に反対し、また競争の自由を拘束する農奴制と身分制のすべての残存物に反対する、あらゆる社会運動を支持するであろう。

四　これに反して、ロシア社会民主労働党は、無制限の政府とその官吏との後見によって勤労階級に恩恵をほどこそうとか、資本主義の発展を、したがってまた労働者階級の発展を阻止しようとかする、あらゆる志向とたたかうであろう。

五　労働者の解放は労働者自身の事業でなければならない。

六　ロシアの人民にとって必要なのは、無制限の政府とその官吏からの援助ではなく、この政府の圧制からの解放である。

C　これらの見解から出発して、ロシア社会民主党は、なによりもまず、次のことを要求する。

一　憲法の作成のために、すべての市民の代表者からなるゼムスキー・ソボール(三)の招集。

二　信教と民族のいかんをとわず、二一歳にたっしたすべてのロシア市民にたいする普通・直接選挙権。

三　集会、結社およびストライキの自由。

四　出版の自由。

五　身分制の撤廃と、法のまえでのすべての市民の完全な平等。

六　信教の自由とすべての民族の同権。戸籍登録の仕事を警察とは無関係な、独立した文官の手にうつすこと。

七　長官に訴願することなしに、あらゆる官吏を裁判所に告訴する権利をすべての市民にあたえること。

八　旅券の廃止、完全な移動と移住の自由。

九　営業および職業の自由、同職組合の廃止。

D　労働者のために、ロシア社会民主党は次のことを要求する。

一　すべての工業部門に、資本家と労働者から同数えらばれた裁判官で構成する工業裁判所を設置すること。

二　法律によって労働日を一昼夜八時間に制限すること。

三　法律による夜間作業と交替制の禁止。一五歳未満の児童労働の禁止。

四　法律による休日の制定。

五　工場法および工場監督制度をロシア全土のすべての工業部門と官営工場に、さらに家内仕事に従事するクスターリに適用すること。

六　工場監督官は独立の地位をもつべきであって、大蔵省の管轄下におかれてはならない。工業裁判所の裁判官は、工場法の履行の監視については工場監督官と同等の権利をあたえられる。

七　どこででも商品による賃金の支払を無条件に禁止すること。

八　労働者の選出代表が、賃金率の適正な設定、製品の

検査、罰金の支出、労働者の工場社宅を監視すること。
労働者の賃金からのすべての控除は、どういう名目のためになされるかを問わず（罰金、不合格品、その他）合計して一ルーブリにつき一〇コペイカを超えてはならないという法律。
九　労働者の傷害にたいして工場主に責任をとらせ、労働者側に過失があることを挙証する義務を工場主に課する法律。
一〇　学校を経営し、労働者に医療上の援助をあたえることを工場主に義務づける法律。
E　農民のために、ロシア社会民主党は次のことを要求する。
一　土地買取賦金(七)を廃止し、支払ずみの買取金を農民に補償すること。国庫に余分に払いこまれた金額を農民に返還すること。
二　一八六一年に農民から切り取られた土地(八)を彼らに返還すること。
三　農民地と地主地にたいする課税の完全な平等。
四　連帯保証制(九)の廃止と、農民が自分の土地を処分するのを拘束しているすべての法律の廃止。

綱領の解説

綱領は三つの主要な部分に分かれている。第一の部分では、綱領の他の部分の根拠となっている見解がみな述べられている。この部分では、労働者階級が現代社会でどんな地位を占めているか、工場主との労働者階級の闘争がどんな意味と意義をもっているか、またロシア国家における労働者階級の政治的地位がどんなものであるかということが、示されている。
第二の部分では、党の任務が説明され、党がロシアにおける他の政治的諸流派にたいしてどんな関係にあるかということが、示されている。ここでは、党と自分の階級利害を自覚しているすべての労働者との活動はどんなものでなければならないか、また彼らはロシア社会の他の階級の利害および志向にたいしてどんな態度をとるべきか、ということについて、述べてある。
第三の部分は、党の実践的要求をふくんでいる。この部分は、さらに三つの部門に分かれている。第一の部門は一般的な国家改造の要求をふくんでいる。第二の部門は労働者階級の要求と綱領をふくんでいる。第三の部門は農民のための要求をふくんでいる。綱領の実践的部分にうつるに

さきだって、これらの部門にたいする若干の予備的説明があたえられている。

A一　綱領は、なによりもまず、大工場の急速な成長について述べている。なぜなら、これは現代ロシアにおける主要な現象であって、すべての古い生活条件、とくに勤労者階級の生活条件をまったく変化させつつあるからである。古い条件のもとでは、富のほとんど全量が、住民の大多数をなしていた小経営主によって生産されていた。住民は農村に定着していて、生産物の大部分を、自家消費にあてるためか、あるいは、他の隣接市場とわずか結びついている、近傍の諸村落の小さな市場めあてに生産していた。この同じ小経営主は地主のためにも働いていたが、地主は主として自家消費にあてるために彼らに生産物を生産させていた。自家生産物は加工のために手工業者に渡されたか、彼らもやはり農村に住んでいたか、または仕事あつめに近傍をまわっていた。

ところが農民解放のときから、人民大衆のこういう生活条件はまったく一変した。すなわち、小さな手工業経営に代わって大工場が出現しはじめ、それは異常な速度で増加した。大工場は小経営主を駆逐し、彼らを賃金労働者に転化させ、幾百、幾千の労働者をいっしょに労働させ、ロシア全土で売りさばかれる膨大な量の商品を生産した。

農民解放は住民の定着性を廃棄し、そして、農民に残された一片の土地ではもう食ってゆけないような状態に彼らをおとしいれた。人民大衆は賃仕事をもとめて歩きまわり、工場に行ったり、鉄道の建設工事に行ったりしたが、この鉄道はロシアのすみずみをむすびあわせ、大工場の商品をいたるところに輸送した。人民大衆は賃仕事のために都市に行き、工場や商店の建物の建築や、工場への燃料の配達や、工場用の材料の調達に従事した。最後に、数多くの人人は、経営の拡張がまにあわない商人や工場主から下請にだされる家内仕事に従事した。同じ変化は農業にも起こって、地主は販売めあてに穀物を生産するようになり、農民や商人のうちから大きな土地作付者が現われ、幾億プードの穀物が外国に売られるようになった。生産のために賃金労働者が必要となり、幾十万、幾百万の農民がひとかけらほどの自分の分与地をすてて、雇農や日雇労働者となって、販売めあてに穀物を生産する新しい経営主のところへ行った。綱領が、大工場は小さなクスターリと農民を零落させ、彼らを賃金労働者に転化させていると言っているのは、まさに古い生活条件のこういう変化を描いたものである。小規模生産はいたるところで大規模生産にとって代わられている。そして、この大規模生産では、労働者大衆はもはや賃金めあてに資本家のために働くたんなる雇人にすぎない。

資本家は巨額の資本をもち、巨大な仕事場を建て、大量の材料を買いつけ、結合された労働者によってなされるこの大量生産の全利潤を自分のポケットにねじこんでいる。生産は資本主義的生産となった。そしてそれは、すべての小経営主を無慈悲に容赦なく圧迫して、農村での彼らの定着生活を破壊し、彼らを駆ってたんなる雑役夫として自分の労働力を資本に売りつつ全国のはてからはてを歩きまわらせている。住民のますます大きな部分が、農村と農業から最終的に引きはなされ、都市や工場的・工業的な村や町に集まって、なんの財産ももたない人々の特別な階級、自分の労働力を売ることによってのみ生活する賃金労働者＝プロレタリアの階級を形成している。

大工場が国の生活のうちに引きおこした巨大な変化は、まさにここにこそある。小規模生産に代わって大規模生産が現われ、小経営主が賃金労働者に転化されるのである。では、この変化は全勤労人民にとってなにを意味し、そしてどういう結果をもたらすであろうか？　綱領はつづいてこの点について述べている。

Ａ二　小規模生産に代わって大規模生産が現われるのにともなって、個々の経営主の手にある小額の貨幣資金に代わって巨額な資本が現われ、小さな、とるにたりない儲けに代わって幾百万の儲けが現われる。だから、資本主義の成長はいたるところで贅沢と富を増大させる。ロシアには大きな金持、工場主、鉄道業者、商人、銀行家の一階級がつくりだされ、工業家に利息貸しした貨幣資本からの所得で生活する人々の一階級がつくりだされた。また大地主は、農民から多額の土地買取金を受け取り、農民の土地欠乏を利用して小作料を引き上げ、自分の領地内に大きな甜菜糖工場や酒醸造所をつくって、富裕となった。すべてこれらの金持階級の贅沢と浪費はいまだかつてない規模にたっし、大都市の大通りには、彼らの王侯のような宮殿と贅沢な邸宅がいっぱいに建てられた。ところが労働者の状態は、資本主義の成長につれてますます悪化した。手間仕事は、農民解放ののちにどこかで増加したとしても、それはきわめてわずかで、つかのまのことであった。なぜなら、農村からながれこんでくる飢えた人民大衆は値段が下がったのに、食糧品と生活必需品の値段はますます騰貴していったので、賃金が増加した場合でさえ、労働者の手にはいる生活手段は少なくなったからである。手間仕事を見つけることはますます困難となり、金持の贅沢な宮殿とならんで（または都市の場末に）、労働者のあばら屋が増加した。労働者は穴倉や、すしづめのじめじめした冷たい住居や、さもなければ新しい工業経営のまわりの土小屋にさえ、住まわなければならなくなった。資本はますます大きくなって、労働

者をいっそう強く圧迫し、彼らを乞食に変え、その時間全部を工場にささげることを余儀なくさせ、労働者の妻や子供を労働に駆りたてた。こうして、資本主義の成長によって生じた第一の変化は、まさにここにこそある。巨額の富がわずかひとにぎりの資本家の手に蓄積され、人民大衆が乞食に変えられてゆくのである。

第二の変化は、小規模生産に代わって大規模生産が現われた結果、生産上に多くの改良がおこなわれたことにある。なによりもまず、おのおの小さな仕事場で、おのおのの小経営主のところで、単独に、はなればなれに、個別的になされる労働に代わって、一つの工場で、一人の地主、一人の請負人のもとでいっしょに勤労する、結合された労働者の労働が現われた。共同労働は単独の労働よりもずっと効果的(生産的)であり、ずっとたやすく速やかに商品を生産する可能性をあたえる。だが、こういう改良のすべてを利用するものは、ひとり資本家だけであり、彼は、労働者にはほんのはした金を支払い、労働者の結合労働から生じる全利益をただで着服するのである。労働者がなにか一つの作業に慣れると、他の仕事にうつったり職業をかえることは彼にとってより困難になるため、資本家はいっそう強くなり、労働者はいっそう弱くなる。

生産上のもう一つの、ずっと重要な改良は、資本家の採用している機械である。労働の効率は機械の使用によって幾倍にも増大する。だが、資本家はこの利益のすべてを、労働者にたいして逆用する。資本家は、機械がより少ない肉体労働しか必要としない点を利用して、婦人や子供を機械につかせ、しかも彼らにはより低い賃金を支払うのである。機械を使えば労働者はずっとすこししかいらないことを利用して、資本家は、労働者を大量に工場からほうりだし、この失業を利用して、いっそう強く労働者を奴隷化し、労働日を延長し、労働者から夜の休息をうばいとり、彼らを機械のたんなる付属物に変える。機械によってつくりだされ、たえず増加してゆく失業は、いまや労働者を完全に無防備の状態においている。彼らの技能は値うちを失い、彼らはただの雑役夫にたやすくとって代わられる。後者は、すぐ機械に慣れ、少ない賃金でよろこんで働きにゆくのである。ますますくわわる資本の圧迫から自分を守ろうとするあらゆる試みは、解雇をまねく。労働者は単独では資本家にたいしてまったく無力であり、機械はいまにも彼らをおしつぶそうとする。

A三　われわれは前項の説明のなかで、機械を採用する資本家にたいして、労働者は単独では無力であり無防備であることを、示した。労働者は、自分を守るために、なんとしてでも資本家に反撃をくわえる手段を見いださなければ

ばならない。そしてそういう手段を彼らは団結のうちに見いだすのである。単独では無力な労働者も、自分の同志と団結すれば一つの勢力となり、資本家にたいして闘争し、資本家に反撃をくわえることができるようになる。

団結は、すでに大資本に対立する労働者にとって一つの必要事となっている。だが、たとえ同じ一つの工場で働いていても、たがいに他人であり、偶然に寄せあつめられた人民大衆を、団結させることができるだろうか？　綱領は、労働者を団結にたいして準備し、彼らのうちに団結の能力と才能を発展させる諸条件を示している。これらの諸条件とは次のとおりである。（一）一年をつうじて恒常的な労働を必要とする機械制生産の大工場は、労働者と土地との、また自分自身の経営との結びつきをまったく断ちきって、彼らを完全なプロレタリアにする。ところで、ひとかけらの土地で自身の経営をいとなんでいたことは、労働者を分裂させ、仲間の利害からはなれた若干の特殊な利害を彼らのおのおのにあたえ、それにより彼らの団結に障害をあたえていた。労働者が土地から断ちきられることは、これらの障害を断ちきることになる。（二）つぎに、幾百、幾千の労働者の共同労働は、全労働者大衆の地位と利害が同一であることを明瞭に示すことによって、おのずから、自分の必要を共同で討議し、共同で行動することに労働者を慣れさせる。（三）最後に、労働者が工場から工場へとたえず転々と移ることは、いろいろな工場における条件と制度を対照し、それらを比較し、すべての工場で搾取が同一であることを確信させ、資本家との衝突にさいして他の労働者の経験を借りることに労働者を慣れさせ、そうすることによって労働者の結束、連帯性を強める。まさにこれらの諸条件があわさった結果として、大工場の出現が労働者の団結を呼びおこしたのである。ロシアの労働者のあいだで団結は、この団結は、最もしばしば、また最も強く、ストライキのうちに現われている（なぜわが国の労働者にとっては、組合もしくは基金というかたちでの団結が近づきにくいのかについては、あとで述べよう）。大工場がいっそう強力に発展すればするほど、労働者のストライキはいっそう頻繁に、いっそう強力に、いっそうねばりづよくなる。なぜなら、資本主義の抑圧が強まれば強まるほど、労働者の共同の反撃がますます必要となるからである。労働者のストライキや個々の暴動は、綱領に述べているように、現在ロシアの工場で最もひろくゆきわたった現象である。だが、資本主義がさらに成長し、ストライキが頻繁となるにつれて、そういうものでは不十分となる。工場主はそれらにたいして共同の対策をとる。すなわち、彼らはたがいに同盟をむすび、労働者を他の場所から呼びよせる。彼らは国家

権力に助力を求め、後者は彼らが労働者の抵抗を鎮圧するのを助ける。労働者に対立しているのはもはや個々の工場の個々の工場主だけではない。彼らに対立しているのは全資本家階級とそれを援助する政府とである。全資本家階級が、全労働者階級と闘争をはじめ、共同のストライキ対策をさがしもとめ、政府から反労働者的な法律をかちとり、工場をいっそうへんぴな地方にうつし、また家内仕事を下請にだすとか、その他幾千ものあらゆる反労働者的な術策や奸策に訴える。個々の工場、いな個々の工業部門の労働者の団結さえも、全資本家階級にたいする反撃のためには不十分となり、全労働者階級の共同の行動が無条件に必要となる。このようにして、労働者の個々の暴動から全労働者階級の闘争が成長してくる。工場主にたいする労働者の闘争は階級闘争に転化する。すべての工場主を団結させるのは、労働者を従属のうちに引きとどめ、彼らにできるだけ少なく賃金を支払うという、一つの利益である。そして工場主たちは、全工場主階級が共同の行動をとる以外には、また国家権力にたいして影響力を獲得する以外には、自分たちの利益を守れないことをさとる。それとまったく同じように、労働者をむすびつけるものは、資本に自分たちをおしつぶさせず、自分たちの生活権と人間的生存の権利を守るという、一つの共通の利益である。そして労働者もまったく同じように、全階級——労働者階級——が団結し、共同で行動することが必要であるということ、また、このためには国家権力にたいして影響力をかちとることが必要であるということ、を確信するようになる。

A四　われわれは、どのようにして、また、なぜ工場労働者と工場主との闘争が階級闘争になり、労働者階級——プロレタリア——と資本家階級——ブルジョアジー——との闘争になるかを説明した。そこで問題となるのは、この闘争は全人民と全勤労者にとってどんな意義をもつか、ということである。われわれがすでに第一項についての説明のなかで述べたような現代の条件のもとでは、賃金労働者を使っての生産は、ますます小経営を駆逐してゆく。賃労働によって生活する人々の数が急速に増加し、恒常的な工場労働者の数が増加するばかりでなく、食うためにやはり賃仕事をさがさなければならない農民の数は、さらにいっそう増加する。現在では賃仕事、資本家のための仕事はすでに最も普及した労働形態となっている。労働にたいする資本の支配は、工業においてばかりでなく、農業においても住民大衆をとらえた。まさに現代社会の基礎にある賃労働のこの搾取を、大工場は最高度にまで高めている。すべての工業部門ですべての資本家によって用いられて、ロシアの労働住民の全大衆をくるしめているあらゆる搾取方

法が、ここ工場で一つに集められ、強められ、日常的な規則に変えられ、労働者の労働や生活のすべての面におしおよぼされ、資本家による労働者の膏血の搾りとりの一体制、一体系ともいうべきものをつくりだしている。これを実例で明らかにしよう。賃仕事に雇われた者はだれでも、どこでも、またいつでも、近所で休日とされる祭日には、自分も休息し、仕事をやめる。だが工場では事態はまったく異なる。工場が労働者を雇うときには、もはや彼らを工場のおもうままに自由に使用して、労働者の習慣や、慣習的な生活様式や、彼の家庭の状態や、知的要求にはなんの注意もはらわない。工場は工場にとって必要なときに労働者を仕事に駆りたて、労働者の全生活を工場の要求に適合させ、彼らの休息時間を寸断し、交替作業の場合には夜も休日も働かせる。工場は、労働時間についておよそ考えられるかぎりのあらゆる濫用行為をおこなうと同時に、すべての労働者を拘束する工場自身の「規則」、工場自身の「制度」を設ける。そこでわかるのは、工場の秩序は、雇いいれた労働者から彼らがあたえうるだけの全労働量を搾りだし、できるだけ早く搾りだし、そのあとで彼らを放りだすのに適当したように、ことさらに調節されていることである！　もう一つの例。賃仕事に雇われた者はだれでも、雇主に服従し、命令されたことを遂行する義務を負わされることは、いうまでもない。だが、雇われた者は、一時的な仕事を遂行する義務を負わされるが、自分の意志を放棄することはけっしてない。雇主の要求が不当であるか、あるいは法外なものであるとおもえば、彼は雇主のもとから立ちさる。ところが工場は、労働者にまったく自分の意志を放棄するように要求する。工場は自分の規律を設け、鐘の合図ひとつで労働者を作業につけたり、それをやめさせたりする。工場は、労働者を処罰する権利を自分のものとし、自分でつくった規則にたいして違反がなされるごとに、労働者に罰金もしくは控除金を課する。労働者は巨大な機械装置の一部分となる。彼は、機械そのものと同じように、なんの文句も言えない、奴隷化された、自分の意志をうばわれたものとならなければならない。

さらに第三の例。賃仕事に雇われた者はだれでも、雇主にたいしてたえず不満をもっており、裁判所または当局者にたいして雇主を訴える。当局者も裁判所も普通には雇主に有利に紛争を解決し、雇主に味方するが、このように雇主の利益にたいして寛大なのは、一般的な規則または法律にもとづくのではなく、個々の官吏の忠義だてにもとづくのであって、これらの官吏はときには多く、ときには少なく〔雇主の利益を〕擁護し、また、雇主と知合いであるか、または作業条件を知らないか、労働者を理解する力がない

かするために、問題を不公平に、雇主に有利に解決するのである。こういう不公平のそれぞれの場合は、労働者と雇主とのそれぞれの衝突が、それぞれの官吏にかかっている。ところが工場は、こういう労働者大衆をいっしょに結合して、圧迫をはなはだしく高めるので、一つひとつの場合を別個に検討することは不可能になる。一般的な規則がつくりだされ、労働者と工場主との関係にかんする法律、全員にとって拘束力をもつ法律が制定される。そしてこの法律では、雇主の利益にたいする寛大さがすでに国家権力によって認証されている。個々の官吏の不公平に法律そのものの不公平がとって代わる。たとえば、労働者は欠勤すれば賃金を失うばかりでなく、さらに罰金をも支払うのに、雇主は労働者をほうりだしてぶらぶらさせておいて、労働者になにも支払わないとか、雇主は粗暴を理由に労働者を解雇できるのに、労働者は同じ理由で雇主のもとから去ることはできないとか、雇主はかってに罰金や控除金を課し、または時間外労働を要求する権利がある、などというような規則が現われるのである。

これらすべての例は、どのようにして工場が労働者の搾取を強め、この搾取を普遍的なものにし、この搾取を一つの「秩序」ともいうべきものにまでつくりあげるかを、われわれに示している。労働者は、いまではすでにいやおうなしに個々の雇主やその意志や圧迫を問題としないで、雇主の階級全体の専横や圧迫を問題にしなければならなくなる。労働者は、自分を抑圧する者はある一人の資本家ではなく、資本家の全階級であることをさとる。なぜなら、すべての経営に搾取の同一の秩序があるからである。個々の資本家は、この秩序にそむくことさえできない。たとえば、もし個々の資本家が労働時間を短縮しようと思い立ったとすれば、同じ賃金で労働者をいっそう長時間働かせている彼の隣人たる他の工場主よりも、彼の商品は高くつくことになろう。労働者は、自分の地位の改善をかちとるためには、いまや、資本による労働の搾取を目標とする全社会組織を問題にしなければならない。労働者に対立しているのは、もはや、ある一人の官吏の個々の不公平ではなく、全資本家階級を自分の保護下におき、この階級の利益のために万人にとって拘束力をもつ法律を発布する国家権力そのものの不公平である。このようにして、工場主にたいする工場労働者の闘争は不可避的に、資本家階級全体にたいする闘争に、資本による労働の搾取にもとづく社会組織全体にたいする闘争に、転化する。だからこそ、労働者の闘争は社会的意義を獲得し、他人の労働によって生活するすべての階級にたいする、全勤労者の名における闘争となるのである。だからこそ、労働者の闘争はロシア史の新しい

時代をひらくものであり、労働者の解放の朝明けなのである。

では、働く人々の全大衆にたいする資本家階級の支配はなににもとづいて維持されているのであろうか？　すべての工場、鉱山、機械、労働用具が資本家の手にあり、彼らの私的所有となっていることに、広大な土地が彼らの手にあること（ヨーロッパ・ロシアの土地全体のうち、三分の一以上は五〇万たらずの地主に属している）に、もとづいている。労働者は自分ではなんの労働用具も材料ももたないので、自分の労働力を資本家に売らなければならない。資本家は労働者に、労働者の生命の維持に必要なだけを支払い、労働によって生産される全余剰を自分のポケットにねじこんでいる。資本家は、このようにして、労働者が仕事に費やした時間の一部分だけに支払い、その残りの部分をわがものにしている。労働者大衆の結合労働、もしくは生産上の改良から生じる富の増加分は、すべて資本家階級の手にはいり、労働者は親子代々労苦しながら、あいかわらずこのような無産のプロレタリアにとどまっている。だから、資本による労働の搾取を終わらせるには一つの手段しかない。すなわち、労働用具にたいする私的所有を廃止し、すべての工場、鉱山、ならびにすべての大領地、等々を全社会の手に引き渡して、労働者自身によって舵をとられる共同の社会主義的生産をいとなむことである。そのときには、共同の労働によって生産される生産物は勤労者自身のために使われ、彼らが彼らの生活費をこえて生産した剰余生産物は、労働者自身の要求をみたすために、また、彼らの全能力を完全に発展させ、科学と芸術のあらゆる成果を平等に享受するために、役だつであろう。だから綱領では、資本家にたいする労働者階級の闘争はこのときにはじめて終わることができる、と指摘されているのである。だがこのためには、政治権力、すなわち国家統治の権力が、資本家と地主の影響のもとにある政府の手から、または直接に資本家の選出代表で成りたっている政府の手から、労働者階級の手にうつることが必要である。

これが労働者階級の闘争の終局目標であり、これが労働者階級の完全な解放の条件である。自覚し、団結した労働者は、この終局目標をめざして努力しなければならない。だが、わがロシアでは、彼らはなお、彼らが自分を解放するための闘争を遂行するのを妨げている巨大な障害につきあたっている。

A五　現在ではすでに全ヨーロッパ諸国の労働者も、アメリカやオーストラリアの労働者も、資本家階級の支配にたいする闘争をおこなっている。労働者階級の団結と結束は、一国または一民族の範囲に限られていない。さまざま

な国家の労働者党は、全世界の労働者の利害および目標の完全な同一性（連帯性）を声たかく声明している。これらの党は共同の大会にいっしょに集まり、あらゆる国の資本家階級にたいして共通の要求を提出しており、自分の解放のために努力している団結したプロレタリアート全体の国際的祭日（メーデー）をさだめ、すべての民族およびすべての国の労働者階級を一つの偉大な労働者軍に結集している。万国の労働者のこの団結は、労働者を支配する資本家階級がその支配を一国に限っていないということによって、必然的に呼びおこされるものである。異なる国家のあいだの商業上の連絡は、ますます緊密に、ますます幅ひろいものとなっている。資本はたえず一国から他国へ移動している。銀行、すなわち、資本をいたるところから集めて、それを貸付金として資本家に配分するこの巨大な資本倉庫は、一国的なものから国際的なものとなり、あらゆる国から資本を寄せ集め、それをヨーロッパやアメリカの資本家に配分している。すでに、一国だけでなく、一度に数ヵ国において資本主義的企業を経営するために、巨大な株式会社が設立されている。資本家の国際的団体が出現している。資本の支配は国際的である。まさにこのために、万国の労働者の解放闘争は、労働者が国際資本にたいして共同して闘争するときにはじめて成功しうるのである。まさにこのために、ドイツの労働者も、ポーランドの労働者も、フランスの労働者も、資本家階級にたいする闘争でロシアの労働者の同志なのである。それはちょうど、ロシアの資本家も、ポーランドの資本家も、フランスの資本家も、ロシアの労働者の敵であるのと同様である。たとえば、最近では外国の資本家はとくにこのんで、ロシアにその資本を移し、ロシアに自分の工場の支所をたて、ロシアに新しい企業をおこすための会社を創立している。その国の政府が他のどこにもないほどに資本にたいして好意的で親切であり、労働者が西欧にくらべて団結に乏しく、反撃の能力で劣り、労働者の生活水準が、したがってまたその賃金がはるかに低いため、外国の資本家が自分の故国では聞いたこともない膨大な儲けを手にいれることのできる、この若い国にむかって、彼らは貪欲におそいかかっている。国際資本はすでにロシアにもその手をのばしつつある。そしてロシアの労働者は国際労働運動に手をさしのべるのである。

A六　われわれは、どのようにして大工場が労働にたいする資本の圧制を最高度にまで高めるか、どのようにして大工場が搾取方法の一体系ともいうべきものをつくりだすか、どのようにして労働者が資本と抗争しつつ、不可避的にすべての労働者の団結の必要を、全労働者階級の共同闘争の必要を認めるようになるかについて、すでに述べた。

資本家階級にたいするこの闘争で、労働者は資本家と彼らの利益とを保護する一般的な国法にぶつかる。

だが、もし労働者がともに団結するときには資本家に譲歩を余儀なくさせ、資本家に反撃をくわえる力をもつようになるとすれば、それとまったく同じように、労働者は自分の団結によって国家の法律に影響をあたえ、それの変更をかちとることができはしないだろうか。じっさい、他のすべての国の労働者もそういうふうに行動している。しかしロシアの労働者は国家にたいして直接影響をあたえることはできない。ロシアでは労働者は、もっともありふれた市民的権利でさえもうばわれているような条件下におかれている。彼らは、集会をひらくことも、自分たちの問題を共同で討議することも、結社を組織することも、自分たちの声明書を印刷することも、あえてなしえない。いいかえれば、国家の法律が資本家階級の利益をはかって制定されているばかりでない。それは、これらの法律に影響をあたえ、それの変更をかちとるあらゆる可能性を労働者から直接にうばっているのである。こういうふうになっているのは、ロシアでは（しかも、すべてのヨーロッパ国家のうちでロシアでだけ）いまにいたるまで専制政府の無制限な権力が、すなわち、次のような国家組織が存続しているからである。この国家組織のもとでは、全国民にとって拘束力をもつ法律をその意のままに発布できるのはツァーリだけであり、またこれらの法律を執行できるのはツァーリに任命された官吏だけである。市民は、法律を提案したり、法律を発布したり、そ れを審議したり、新しい法律を提案したり、古い法律の廃止を要求したりすることに、全然参加させられない。彼らは、官吏に報告を要求し、官吏の行動を点検し、裁判所に彼らを告訴する権利を、まったくうばわれている。市民は、国政を討議する権利さえうばわれている。つまり、彼らは、これらの官吏の許可をうけないでは、集会をひらいたり、結社を組織することを、あえてなしえないのである。このようなわけで、官吏は完全な意味で責任を負っていない。彼らは、市民のうえに位する、いわば特別なカーストをなしている。官吏が、責任を負わず、専横であり、住民そのものに完全に発言権のないことが、ヨーロッパのどの国でもとうていありえないような官吏のひどい権力濫用や庶民の権利の侵害を生んでいる。

このように、法律上ロシアの政府はまったく無制限である。それは、人民からまったく独立し、すべての身分および階級を超越しているかのようにみなされている。だが、もし実際にそうなら、どうして法律も政府も、労働者と資本家とのあらゆる衝突のさいに資本家の側に味方するのだろうか？　どうして資本家は、彼らの数がまし、彼らの富

が増大するにつれてますます多くの支持をうけるようになったのに、労働者はますます多くの抵抗と拘束をうけるようになったのか？

実際には、政府は階級を超越しているのではなく、他の階級にたいして一つの階級を擁護し、無産階級にたいして有産階級を、労働者にたいして資本家を擁護しているのである。もし無制限の政府が有産階級にあらゆる特典と黙認をあたえなかったとしたら、この政府はこのような巨大な国家を統治することはできなかったであろう。

法律上政府は無制限で独立の権力であるけれども、実際には資本家と地主は政府や国政に影響をあたえる幾千もの方法をもっている。彼らは法律で認められた自分たちの身分的諸機関、貴族団体や商人団体、商工委員会、等々をもっている。彼らの選出代表たちは、あるいは直接に官吏となって国家統治に参加するか（たとえば貴族団長）、あるいは、すべての政府諸機関にその成員として招請されている。たとえば、工場主は、法律上、工場審議会（これは工場監督部の上級官庁である）に席をもっており、そこへ自分の代表を選出している。だが彼らは、こうして国家統治へ直接に参加しているだけにとどまらない。彼らは自分たちの団体のなかで国家の法律を審議し、原案を作成している。そして政府は、ことあるごとに彼らの意見をきくのが普通であり、なにかの原案を彼らに提示し、それにたいする意見を求めている。

資本家と地主は全ロシア的な大会をひらき、その席上で自分たちの問題を討議し、自分たちの階級のためになるいろいろな方策をさがしもとめ、全地主貴族の名で、「全ロシア商業界」の名で、新しい法律の発布と古い法律の変更にかんする請願を提出している。彼らは自分たちの問題を新聞紙上で討議することができる。なぜなら、どんなに政府がその検閲によって出版物を拘束しようと、有産階級から彼ら自身の問題を討議する権利を取り上げることは、政府にとっておもいもよらないことだからである。彼らは、国家権力の高級代表者たちに近づくありとあらゆる伝手をもっており、下級官吏の専横をより容易に討議することができ、とくに拘束的な法律や規則の廃止を容易にかちとることができる。そして、世界中のどの国にもこれほど多くの法律や規則はなく、あらゆるこまごました事柄を規定し、あらゆる生きた問題を非個性化する、政府のこのような類例のない警察的後見はないのだが、他方ではまた、世界中のどの国でも、これらのブルジョア的規則がこれほどたやすく破られることはないし、これらの警察的法律が上級官庁の寛大な認可ひとつで、これほどたやすくくぐられることもない。そしてこの寛大な認可は、けっして

拒否されることはないのである。

Ｂ一　綱領のこの項目は最も重要な、最も主要なものである。なぜなら、それは、労働者階級の利益を守る党の活動とすべての自覚した労働者の活動とが、どんなものでなければならないかを、指示しているからである。それは、社会主義の志向、大昔からつづいている人間による人間の搾取を除去しようとする志向が、大工場によってつくりだされた生活条件から生まれる人民運動と、どのようにして結びつかなければならないかを、指示している。

党の活動は、労働者の階級闘争に助力することでなければならない。党の任務は、なにかの当世流行の、労働者援助の手段を頭のなかからあみだすことではなく、労働者の運動にくわわり、その運動のなかに光明をもちこみ、労働者がすでに自分でやりはじめているこの闘争において、彼らを援助することである。党の任務は、労働者の利益をまもり、労働者運動全体の利益を代表することである。では、労働者をその闘争において援助するということは、どういうことに現われなければならないだろうか？

綱領は、この援助は、第一に、労働者の階級的自覚を発達させることでなければならない、と言っている。われわれはすでに、工場主との労働者の闘争がどのようにしてブルジョアジーとのプロレタリアートの階級闘争になるかについて、述べた。

そのさいわれわれが述べたことからして、なにを労働者の階級的自覚と解すべきかについて、結論が出てくる。労働者の階級的自覚とは、自分の地位を改善し自分の解放をかちとる唯一の手段は、大工場によってつくりだされた資本家や工場主の階級との闘争にあるということを、労働者が、理解することである。さらに、労働者の自覚とは、ある一国の全労働者の利害は同一で一致しており、彼らの全体は社会の他のすべての階級と別個の一つの階級をなすということを、理解することを意味する。最後に、労働者の階級的自覚とは、自分の目的を達成するためには、労働者は、地主と資本家が国政にたいする影響力をかちとったし、いまなおひきつづきかちとっているのと同じように、自分たちもまた国政にたいする影響力をかちとらなければならないということを、労働者が理解することを意味する。

では、労働者はどういう道によって、これらすべての理解を獲得するようになるか？　労働者は、彼らが工場主にたいして開始している闘争そのもの、大工場の発展につれてますます発展し、激化し、ますます多数の労働者をひきこんでゆく闘争そのもののなかから、たえずそうした理解をくみとることによって、それを理解するようになるのである。資本にたいする労働者の敵意が、自分たちの搾取者

にたいする漠然とした憎悪感や、自分たちの抑圧や奴隷状態の漠然とした意識や、資本家に復讐しようとする願望にしか、表現されなかった時代があった。その当時には闘争は、建物を破壊し、機械をうちこわし、工場の上役をなぐりなどした労働者の個々の暴動に表現されていた。これは、労働運動の最初の、端初的形態であった。しかもこの形態は必然的であった。なぜなら、いつどこででも、資本家にたいする憎悪が労働者に自己防衛の志向をめざめさせる最初の動機であったからである。だがロシアの労働運動は、すでにこうした端初的形態からぬけだすまでに成長した。労働者は、資本家にたいする漠然とした憎悪のかわりに、労働者階級と資本家階級との利害の敵対性をすでに理解するようになった。彼らは、不明瞭な抑圧感のかわりに、資本がまさになににによって、またまさにどのようにして彼らを圧迫しているかを、すでに検討するようになった。そして彼らは、あれこれの抑圧形態に反対し、資本の圧迫に制限をくわえ、資本家の貪欲にたいして自分を防衛している。彼らはいまでは、資本家に復讐するかわりに、譲歩を獲得するための闘争にうつっている。彼らは資本家階級にたいしてつぎつぎと要求を提出しはじめ、作業条件の改善や、賃金の引上げや、労働日の短縮を要求している。どのストライキも、労働者の全注意といっさいの努力とを、労働者階級がおかれている条件のうちの、ときにはこの点、ときにはあの点に集中させる。どのストライキも、これらの条件の討議を呼びおこし、労働者がこれらの条件を評価し、ここでは資本の圧迫はどの点にあるか、どんな手段でこの圧迫にたいしてたたかうことができるかを、解明するのを助ける。どのストライキも、労働者階級全体の経験を豊富にする。ストライキが成功すれば、それは労働者階級に労働者の団結の力を示し、他の者を刺激して、仲間の成功を利用するようにさせる。ストライキが失敗すれば、それは失敗の原因の討議を呼びおこし、よりよい闘争方法を探求させる。いまロシアのいたるところで、労働者がこのように、自分の緊切な必要のためのたゆみない闘争、譲歩をかちとる闘争、生活条件、賃金、労働日の改善をかちとる闘争にうつりはじめているところに、ロシアの労働者がなしとげた巨大な前進がある。だから、社会民主党とすべての自覚した労働者の主要な注意は、この闘争に、この闘争への協力に、むけられなければならない。労働者にたいする援助は、その充足のために闘争しなければならない最も緊切な必要を指示すること、あれこれの労働者の状態をとくに悪化させている諸原因を検討すること、それにたいする違反（と資本家の欺瞞的な策略）のために労働者が二重の略奪をこうむることがしばしばある工場法や工場規則を説

明することでなければならない。援助は、労働者の要求をいっそう正確に、いっそう明確に表現し、それらの要求を公然と提出すること、抵抗のための最良の時機をえらぶこと、闘争方法を選択すること、あいたたかう敵味方双方の状態と力を考量すること、よりよい闘争方式（もし直接ストライキにうつるべきでないとすれば、おそらくは、事情におうじて、工場主にあてて手紙をだすとか、監督官または医師に申しでるとかする、などというような方法）をえらぶことはできないかどうかを検討すること、でなければならない。

ロシアの労働者がこういう闘争へうつっているのは、彼らが巨大な前進をなしとげたことを示している、とわれわれは言った。この闘争は、労働運動を大道に立たせ（引き出し）、労働運動の今後の成功の確実な保障として役だっている。この闘争で、働く人々の大衆は、第一に、資本主義的搾取の方法をつぎつぎと見わけて、検討することを学び、これらの搾取方法を、法律とも、自分たちの生活条件とも、資本家階級の利害とも比較考量することを学んでいる。搾取の個々の形態や場合を検討することによって、労働者は全体としての搾取の意義と本質を理解することを学び、資本による労働の搾取にもとづく社会体制を理解することを学んでいる。第二に、この闘争で、労働者は自分の力をためし、団結することを学び、団結の必要と意義とを理解することを学んでいる。この闘争の拡大と、衝突の頻発とは、不可避的に闘争を拡大させ、はじめはある地方の労働者のあいだに、ついで全国の労働者のあいだ、全労働者階級のあいだに、統一の感情、自分たちの連帯性の感情を発達させている。第三に、この闘争は、労働者の政治的意識を発達させている。働く人々の大衆は、なんらかの国家的問題について熟考するひまも可能性ももたない（もちえない）ような状態に、生活そのものの条件によっておかれている。だが、日常の必要のために労働者が工場主にたいしておこなう闘争は、おのずから、また不可避的に労働者を国家的、政治的問題に、すなわち、ロシア国家はどのようにして統治されているか、法律や規則はどのようにして発布され、それらはだれの利益に奉仕しているかという問題に、つきあたらせる。工場内のどの衝突も、必然的に、労働者を法律および国家権力の代表者と衝突させる。労働者はそこではじめて「政治演説」に耳をかたむける。たとえはじめには工場監督官の口からであろうとも。工場監督官は労働者にこう説明する。工場主が労働者を搾りぬくのに用いた策略は、所轄の官庁の認可を経た規則——労働者を搾りぬくことを工場主の勝手のままにしているところの——の正確な趣旨にもとづくものである。あるいは、工

場主はただ自分の権利を行使しているにすぎず、国家権力によって認可され、それによって保護されている、これこれの法律をよりどころとしているのだから、工場主の圧迫はまったく適法なものである、と。ときには、監督官諸氏の政治的説明に、さらにいっそう有益な大臣の「政治的説明」がつけくわえられる。彼は、労働者の労働によって工場主が幾百万もの金をもうけていることにたいして、労働者は工場主に「キリスト教的愛」の感情をささげる義務がある、ということを労働者に注意する。そのあとで、国家権力の代表者たちのこういう説明のうえに、また、この権力はだれの利益のために働いているかということを労働者が直接に知ったうえに、さらに社会主義者のリーフレットや、その他の説明がつけくわわる。そこで労働者は、こういうストライキによって、もはや完全に政治的教育をうけるのである。彼らは労働者階級の特殊の利害だけでなく、労働者階級が国家のなかで占める特殊な地位をも理解することを学ぶ。このようにして社会民主党が労働者の階級闘争にあたえることのできる援助は、まさに次の点になければならない。すなわち、労働者の最も緊切な必要の充足のための闘争で労働者に助力することによって、労働者の階級的自覚を発達させることである。

第二の援助は、綱領のなかで述べられているように、労働者の組織化に助力することでなければならない。われわれがいま記述した闘争は、必然的に労働者の組織化を必要とする。ストライキのためにも、それをいっそう成功裏におこなうためにも、ストライキ参加者の応援資金を集めるためにも、労働者共済基金を組織するためにも、労働者のあいだで扇動をおこなったり、彼らのあいだにリーフレットまたは声明書、檄文を配布する等々、のためにも、組織化が必要となる。警察や憲兵の追及から自分の身を守り、労働者のすべての団結、そのすべての連絡を警察や憲兵にかくし、労働者への書籍や小冊子や新聞の送達を組織する等々のためには、組織化はさらにいっそう必要である。すべてこういう点での援助——これが党の第二の任務である。

第三の援助は、闘争の真の目標を指示すること、すなわち資本による労働の搾取はどういう点にあるか、この搾取はなににもとづいて維持されているか、土地および労働用具の私的所有はどのようにして労働者大衆を貧窮におとしいれており、彼らに、自分の労働を資本家に売ること、労働者の労働によってその生活費をこえて生産される全剰余をただで資本家にあたえることを余儀なくさせるかを、労働者に説明すること、さらに、どのようにしてこの搾取は不可避的に資本家にたいする労働者の階級闘争にみちびくか、この闘争の条件と終局の目標はどういうものであるか

を、労働者に説明することである。一言でいえば、この綱領のなかで簡潔に指示されている点を説明することである。

B二　労働者階級の闘争は政治闘争であるというのは、なにを意味するか？　それは、労働者階級は国政や、国家統治や、法律の発布にたいする影響力をかちとらなくては、自分を解放するための闘争をおこなうことができない、ということを意味する。ロシアの資本家たちはすでにずっと以前からこういう影響力の必要なことを理解していた。そしてわれわれは、警察法のありとあらゆる禁止にもかかわらず、資本家たちがどんなふうにして国家権力に影響をあたえる幾千もの方法を発見することができたか、また、この権力がどのように資本家階級の利益に奉仕しているかを、示した。このことからおのずから、労働者階級にとっても、国家権力に影響をあたえることをほかにしては自分の闘争をおこなうことは不可能であり、自分の運命の恒久的な改善をかちとることにいたってはなおさら不可能である、という結論が出てくる。

われわれがすでに述べたとおり、資本家にたいする労働者の闘争は不可避的に労働者を政府と衝突させるが、労働者は闘争し団結して抵抗するときにはじめて国家権力に影響をあたえうるのだということを、政府自身が労働者に証明してみせることに懸命である。一八八五―一八八六年にロシアに起こった大ストライキは、とくに明瞭にこの点を示している。政府はただちに労働者にかんする新しい法律の作成にしたがい、ただちに工場内制度にかんする新しい法律を発布して、労働者の執拗な要求に譲歩した（たとえば罰金の制限や賃金の正規の支払にかんする規則が実施された）。それとちょうど同様に、現在（一八九六年）のストライキもやはりすぐさま政府の関与を呼びおこした。そして政府は、検挙や追放をするだけにとどめるわけにゆかないこと、工場主の高潔さについてのばかげた訓戒を労働者にふるまうのが笑止千万なことを、すでに理解している（工場監督官にたいする大蔵大臣ヴィッテの通達、一八九六年春、を見よ）。「団結した労働者は、考慮にいれなければならない一つの勢力である」ことを、政府は知った。そこで政府はすでに工場法の改正をくわだてており、労働日の短縮や、その他の労働者にたいするやむをえない譲歩の問題を審議するために、サンクト・ペテルブルグに上席工場監督官の会議を召集している。

こうして、われわれは、資本家階級にたいする労働者階級の闘争が必然的に政治闘争でなければならないことを見るのである。実際にこの闘争は、今日すでに国家権力にたいして影響をおよぼしており、政治的意義を獲得している。だが、労働運動がさらに発展すればするほど、われわれが

さきに述べたように労働者が完全に政治的に無権利であることと、国家権力にたいして公然かつ直接的に影響をあたえることは労働者にとっては完全に不可能であることとが、いっそうはっきりと、またいっそう鮮明に現われ、また感じられてくる。だから、政治的自由を獲得すること、すなわち、すべての市民が法律（憲法）に保障されて直接に国家の統治に参加すること、すべての市民に、自由に集会をひらき、自分の問題を討議し、結社と出版物によって国政に影響をあたえる権利を保障することが、労働者の最も緊切な要求であり、労働者階級が国政に影響をあたえる点での第一の任務でなければならない。政治的自由の獲得は、「労働者の緊急な問題」となっている。なぜなら、政治的自由がなくては、労働者は国政にたいしてなんの影響力ももたないし、また、もつことができず、そのために不可避的に無権利な、侮辱された、発言権のない階級としてとどまるほかはないからである。そして、もし労働者の闘争とその結束とがようやく始まったばかりの現在でさえ、すでに政府は、運動のいっそうの成長を阻止するために、急いで労働者に譲歩しようとしているとすれば、労働者が一つの政党の指導のもとに結束し団結するときには、彼らは政府を屈服させることができ、自分および全ロシア人民のために政治的自由をたたかいとることができるであろうことは、疑いない！

綱領のこれまでの部分では、労働者階級が現代社会と現代国家とでどんな地位を占めているか、労働者階級の闘争目標はどんなものであるか、また労働者の利益を代表する党の任務はなんであるかが、指摘された。ロシアの政府の無制限の権力のもとでは、公然の政党はないし、また、ありえないが、他の諸階級の利益を代表し、世論と政府とに影響をあたえている政治的流派は存在している。だから、社会民主党の地位を明らかにするためには、こんどは、ロシア社会における他の政治的流派にたいする社会民主党の関係を指示し、それによって、だれが労働者の同盟者となることができるか、それはどの限度までか、まただれが彼らの敵であるかを、労働者に決定させなければならない。この点は、綱領の次の二つの項目のうちに示されている。

B三　綱領は、労働者の同盟者は、第一に、専制政府の無制限の権力に反対して行動するすべての社会層である、と宣言している。この無制限の権力は自分の解放のための労働者の闘争上の主要な障害であるから、このことからおのずから、労働者の直接の利益は、絶対主義（絶対とは無制限という意味であり、絶対主義とは政府の無制限の権力という意味である）に反対するあらゆる社会運動を支持することを要求する、という結論が出てくる。資本主義がい

っそう強力に発展すればするほど、これらの官吏の統治と有産階級自身の利益、ブルジョアジーの利益とのあいだの矛盾は、いっそう深刻となる。そこで社会民主党は、無制限の政府に反対して行動するブルジョアジーのあらゆる層と部類を支持することを、宣言する。

労働者にとっては、ブルジョアジーが国政に直接の影響をあたえることのほうが、今日のように、ブルジョアジーが賄賂とりの、乱暴狼藉な官吏の群れを媒介として影響をあたえるのよりは、かぎりなく有利である。労働者にとっては、ブルジョアジーが政治に公然と影響をあたえることのほうが、今日のように、ブルジョアジーが、「神寵による」政府と称して、苦しみなやむ勤勉な地主や、困窮し抑圧されている工場主に「自身の恩寵」をわかちほどこしている、一見全能で「独立的」であるかのような政府によって隠蔽されながら、影響をあたえてのよりは、はるかに有利である。労働者にとっては、どんな利害のために労働者が闘争をおこなうのかをロシアのプロレタリアート全体が知ることができるためにも、どんなふうに闘争をおこなうべきかを彼らが学ぶことができるためにも、ブルジョアジーの策謀と志向が大公の控室や、元老院議官と大臣の客間や、衆人にたいして閉ざされた諸省の官房のなかに隠されないためにも、これらの策謀と志向が明るみに出て、だれが実際に政府の政策を吹きこんでいるのか、資本家や地主はなにを得ようと努力しているのかということにすべての人々の目をひらかせるためにも、資本家階級との公然たる闘争が必要である。だから、資本家階級が今日あたえている影響を隠蔽しているあらゆる事物を一掃すべきなのだ！　だから官僚と官僚統治に反対し、無制限の政府に反対して行動するブルジョアジーのあらゆる代表者を支持すべきなのだ！　しかし、絶対主義に反対するあらゆる社会運動を支持することを宣言しながらも、社会民主党は、自分が労働運動から分離しないことを確認する。なぜなら、労働者階級には、他のすべての階級の利害と対立した、自分の特殊な利害があるからである。政治的自由のための闘争でブルジョアジーのすべての代表者を支持しながらも、労働者は、有産階級が一時的にしか彼らの同盟者となりえないこと、労働者と資本家との利害が融和できないこと、政府の無制限の権力を排除することが労働者にとって必要なのは、資本家階級にたいする自己の闘争を公然と広範におこなうためにすぎないことを、銘記しなければならない。

さらに、社会民主党は、特権的な地主貴族の階級に反対するすべての人々に支持をあたえることを、宣言する。地主貴族はロシアでは、国家における第一の身分とみなされている。農民にたいする彼らの農奴制的権力の残存物は、

いまにいたるまで人民大衆を抑圧している。農民は地主の権力からの解放のための買取金を支払いつづけている。農民は、地主諸君が安価で従順な雇農に不足を感じないですむように、いまでもまだ土地にしばりつけられたままである。農民は、今日まで無権利者および未成熟者として、官吏の専横にゆだねられている。これらの官吏は、官吏としての財布を大事に守って、農民が土地買取賦金もしくは年貢を農奴主的地主に「きちんと」支払うよう、彼らが地主のための仕事をあえて「避け」ないよう、また、たとえば農民があえて移住してしまい、おかげでおそらく地主がやむをえずに、そんなに安くない、またそれほど困窮におしつぶされていない労働者をよそから雇いいれるようなことにならないように、農民の生活に干渉している。地主諸君は、幾百万、幾千万の農民を隷属させて自分に奉仕させ、彼らの無権利の状態を維持しながら、こういう善行のゆえに最高の国家的特権を享有している。最高の国家的官職は主として地主貴族によって補充される（それに、法律上からしても貴族身分は国家の職務にたいする最大の権利を享有している）。名門出の地主は、宮廷に最も近い関係にあり、だれよりも直接的に、また容易に政府の政策をうごかして自分に味方させている。彼らは政府にたいする自分の近い関係を利用して、国庫をかすめ、ときには勤務にたいして分けあたえられる大領地の形で、ときには〔土地の〕「払下げ」の形で、幾百万ルーブリの贈物や施し物を人民の金のうちから受けとっている。(10)

一八九五—一八九六年に獄中で執筆
一九二四年にはじめて印刷
全集、第五版、第二巻、八一—一一〇ページ
邦訳全集、第二巻、七七—一〇三ページ

ロシア社会民主主義者の任務(一)

九〇年代後半の特徴は、ロシア革命のいろいろな問題を提起し解決するうえで、すばらしい活気を呈していることである。「人民の権利」(二)派という新しい革命党が出現したこと、社会民主主義者が影響力を増大させ成功をおさめていること、「人民の意志」(三)派が内部的な進化をとげたこと――これらすべては、インテリゲンツィアや労働者の社会主義者のサークルのなかでも、非合法文書のなかでも、綱領問題についての活発な討議を呼びおこした。非合法文書のなかであげる価値のあるものは、「人民の権利」党の『緊急問題』(四)と『宣言』(一八九四年)、『「人民の意志派グループ」(五)リーフレット』、「在外ロシア社会民主主義者同盟」(六)が外国で出版した『ラボートニク』、ロシア国内での主として労働者むけの革命的小冊子の強化した出版活動、一八九六年のペテルブルグの有名なストライキに関連してサンクトーペテルブルグで社会民主主義的な「労働者階級解放闘争同盟」(七)がおこなった扇動活動、などである。

現在(一八九七年の末)、われわれから見て最も急を要する問題は、社会民主主義者の実践活動の問題である。われわれが社会民主主義の実践的な面を強調するのは、社会民主主義の理論的な面については、一方では反対者がかたくなに理解をこばんで、新しい流派をその出ばなで押しつぶそうと懸命に努力し、他方では社会民主主義の諸原則が熱心に擁護された、最も鋭い時期は、明らかにすでに過ぎ去ったと思われるからである。いまでは社会民主主義者の理論的見解は、その主要で基本的な点では十分に明らかにされていると考えられる。社会民主主義の実践的な面、その政治綱領、その活動方法、その戦術については、そうは言えない。まさにこの分野でこそ、誤解と相互の無理解がなによりも多く支配しているように、われわれには思われるが、この相互の無理解が、次のような革命家たちが社会民主主義に完全に接近してくるのを妨げているのである。その革命家たちは、理論上では「人民の意志」主義から完全に離脱しており、実践上では、あるいは時勢の力そのものにせまられて労働者のあいだで宣伝、扇動をはじめ、さらにすすんでは、労働者のあいだでの自分の活動を階級闘争の基盤のうえにおこうとしているか、あるいは、民主主

義的任務をとりだして綱領全体と革命的活動全体の基礎におこうと努力しているような革命家たちである。われわれの思いちがいでなければ、このあとのほうの特徴づけは、現在社会民主主義者とならんでロシアで活動している二つの革命的グループ、すなわち「人民の意志」派と「人民の権利」派にあてはまる。

だから、社会民主主義者の実践的任務を説明し、現在ある三つの綱領のうちで社会民主主義者の綱領がいちばん合理的なもので、この綱領にたいする反論は大概は誤解にもとづくものだとわれわれが考える根拠を述べることは、とくに時宜に適した試みであると思われる。

周知のように、社会民主主義者の実践活動は、プロレタリアートの階級闘争を指導し、この闘争をそれの二つの現われ、すなわち、社会主義的な現われ（階級的体制をうちこわして、社会主義社会を組織することを目標とする、反資本家階級の闘争）と民主主義的な現われ（ロシアで政治的自由をたたかいとり、ロシアの政治体制と社会体制を民主化することを目標とする、反絶対主義の闘争）とにおいて組織することを、任務としている。われわれは、周知のように、と言った。実際に、ロシア社会民主主義者は、独立の社会革命的流派として出現したそもそものはじめから、自分の活動のこういう任務をいつもきわめて明確に指摘し、プロレタリアートの階級闘争の二重の現われと内容をいつも強調し、自分の社会主義的な任務と民主主義的な任務との不可分の結びつき——この結びつきは、彼らの採用した名称に一目瞭然と表現されている——をいつも主張してきた。それにもかかわらず、今日にいたるまで、社会民主主義者についてきわめてゆがめられた観念をもち、彼らは政治闘争を無視している等々といって非難している社会主義者をしばしば見かけるのである。そこで、ロシア社会民主党の実践活動の二つの面の特徴づけに、いくらか立ちいることにしよう。

社会主義的立場から始めよう。サンクト－ペテルブルグの社会民主主義的な「労働者階級解放闘争同盟」がペテルブルグの労働者のあいだで活動を始めてから、この面での社会民主主義的活動の性格はまったく明らかなはずである。ロシア社会民主主義者の社会主義的な活動は、科学的社会主義の学説を宣伝し、現代の社会＝経済体制、その原則とその発展について、ロシア社会の種々な階級について、それらの階級の相互関係について、それらの階級相互の闘争について、この闘争における労働者階級の役割について、没落しつつある階級と発展しつつある階級にたいする、また資本主義の過去と未来にたいする労働者階級の関係について、国際的社会民主主義とロシア労働者階級との歴史的

な任務について、正しい理解を労働者のあいだにひろめることにある。宣伝と不可分に結びついているのは、労働者のあいだでの扇動であって、これは、ロシアの現在の政治的条件と労働者大衆の発達水準のもとでは、当然、まず第一に重要なものとなっている。労働者のあいだでの扇動は、社会民主主義者が労働者階級の闘争のすべての自然発生的な現われに、労働日、労働賃金、労働条件、等々をめぐる労働者と資本家のすべての衝突に、参加することにある。われわれの任務は、自分の活動を労働者の生活の実際的な、日常の問題と結びつけ、労働者を助けてこれらの問題を理解させ、最も重大な虐待や酷使の行為に労働者の注意をむけさせ、労働者を助けて雇主にたいするその要求をもっと正確に、もっと実際的に定式化させ、労働者のうちに自分たちの連帯性の意識を発達させ、プロレタリアートの全世界的軍隊の一部をなす単一の労働者階級としての、ロシアの全労働者の共通の利害と共同の事業にたいする意識を発展させることとである。労働者のあいだでサークルを組織し、これらのサークルと社会民主主義者の中央グループとのあいだに規則だった秘密の連絡を組織し、労働者むけの文献を出版して配布し、労働運動のあらゆる中心地からの通信を組織し、扇動リーフレットや檄文を発行してそれを配布し、熟練した扇動者の部隊を養成すること——ロシア社会民主党の社会主義的活動の現われは、おおまかにいって、以上のようなものである。

われわれの活動は、なによりもまず、またなににもまして、都市の工場労働者にむけられる。ロシア社会民主党は、自分の勢力を分散させてはならない。党は、社会民主主義思想を最も受けいれやすく、知的にも政治的にも最も発達しており、人数からいっても、また国内の政治的大中心地に集中されている点からいっても、最も重要なこの工業プロレタリアートのあいだでの活動に集中しなければならない。だから都市の工場労働者のあいだに強固な革命的組織をつくりだすことは社会民主党の第一の緊急任務であって、現在この任務からそれることは極度に愚かなことであろう。だが自分の勢力を工場労働者に集中する必要を認め、勢力の分散を非難しながらも、われわれは、ロシア社会民主党はロシアのプロレタリアートと労働者階級の他の諸層を無視するつもりはまったくない。けっしてそんなことはない。ロシアの工場労働者は、その生活条件そのものによって、ごく頻繁にクスターリ——都市や農村で工場外にちらばっていて、ずっと悪い条件におかれているこの工業プロレタリアート——と最も密接な関係に立たないわけにはいかないのである。ロシアの工場労働者はまた農村の住民とも直接に接触しており（工場労働者が農村に家族

をもっていることはめずらしくない）、したがって、農村プロレタリアート、すなわち、職業的な雇農や日雇いの幾百万の大衆にも、またみじめなひとかけらの土地にしがみついて、雇役やあらゆる種類の臨時の「手間仕事」、つまり同じ賃仕事をしている零落農民にも、近づかないわけにはいかない。ロシアの社会民主主義者は、自分の勢力をクスターリや農村労働者のなかへ差しむけるのは適切でないと考えているが、しかし、この層に注意をはらわずに放置するつもりはまったくなく、クスターリや農村労働者の日常生活の問題についても先進的な労働者を啓蒙することに努める。こうして、これらの労働者が、プロレタリアートのより遅れた諸層と接触するさいに、彼らのなかにも階級闘争や、社会主義や、一般的にはロシア民主主義の、とくにはロシア・プロレタリアートの政治的任務の思想を、もちこむことができるようにするであろう。都市の工場労働者のあいだにこれほどたくさんの仕事が残っているうちは、クスターリや農村労働者のところに扇動者をおくるのは実際的でないが、しかし社会主義的労働者は、多くの機会におもいがけなくこういう層に接触することがあるのであって、そこで彼らは、これらの機会を利用する道を心得ていなければならず、ロシアにおける社会民主党の一般的任務を理解していなければならないのである。だから、ロシア社会民主党は見識が狭く、工場労働者だけを見て勤労住民の大衆を無視しようと努めているといって非難する人は、ひどい考えちがいをしているのである。それどころか、プロレタリアートの先進的な諸層のあいだでの扇動は、ロシアのプロレタリアートの全体をめざめさせる（運動が拡大するにつれて）ための最も正しい唯一の道である。都市労働者のあいだに社会主義と階級闘争の思想とがひろがれば、もっと小さな、もっと細分された水路へも、かならずこれらの思想がそそぎこまれることとなるであろう。そのためには、上述の思想が、よりよく準備のできた環境のなかにもっと深く根をおろして、ロシア労働運動とロシア革命とのこの前衛のあいだに十分にしみとおることが必要である。ロシア社会民主党は、工場労働者のあいだでの活動に自分の全力をそそぐとともに、実践面で社会主義的活動をプロレタリアートの階級闘争の基盤のうえにおこうとするところまできたロシアの革命家たちを支持する用意がある。ただし、この場合、革命家の他の諸流派とどんな実践上の同盟を結んでも、それは、理論、綱領、旗印における妥協や譲歩をもたらすことはできないし、またもたらしてはならないということを、われわれはすこしも隠さない。革命運動の旗印となりうる革命理論は、現在では科学的社会主義と階級闘争との学説だけであることを確信する

ロシアの社会民主主義者は、全力をつくしてこの学説をひろめ、これを誤った解釈からまもり、まだ年若いロシアの労働運動をあまり明確でない諸学説と結びつけようとするあらゆる試みに反対するであろう。ロシアにおける社会主義者はすべて社会民主主義者となるべきだということは、理論的な考察が論証し、また社会民主主義者の実践活動が実証している。

社会民主主義者の民主主義的任務と民主主義的活動にうつろう。もう一度くりかえすが、この活動は、社会主義的活動と不可分に結びついている。社会民主主義者は労働者のあいだで宣伝するにあたって政治的な問題を回避することはできないのであって、それを回避しようとしたり、それどころか、脇へおしやろうとするどんな試みでもひどい誤りであり、世界社会民主主義の基本的命題からの背反である、と考える。ロシアの社会民主主義者は、科学的社会主義の宣伝とならんで、労働者大衆のなかで民主主義思想をも宣伝することを、その任務としている。彼らは、活動のいっさいの現われをつうじて見た絶対主義について、絶対主義の階級的内容について、これを転覆する必要について、政治的自由を達成し、ロシアの政治体制と社会体制を民主化しないかぎり労働者の事業のための闘争の成功は不可能だということについて、理解をひろめるように努めている。社会民主主義者は、当面の経済的要求を基礎として労働者のあいだで扇動するとともに、それに、労働者階級の当面の政治的な必要や困苦や要求を基盤とする扇動――どのストライキのさいにも、労働者と資本家のどの衝突のさいにも現われてくる、警察の抑圧に反対する扇動、一般的にはロシア市民としての、とくには最も抑圧された、最も無権利な階級としての労働者の権利の制限に反対する扇動、労働者に直接接触していて、労働者階級にその政治的奴隷状態をはっきりと見せつけている絶対主義の有力な代表者や下僕の一人ひとりに反対する扇動――を不可分に結びつける。経済の分野で経済的扇動のために利用できないような労働者の生活上の問題は一つもないが、それとまったく同じように、政治の分野でも政治的扇動の対象にならないような問題は一つもない。これら二つの種類の扇動は、社会民主主義者の活動のなかでは、一つのメダルの両面のように不可分に結びついている。経済的扇動も政治的扇動もプロレタリアートの階級的自覚の発達のためには同様に必要であり、また、あらゆる階級闘争は政治闘争であるから、経済的扇動も政治的扇動もロシアの労働者の階級闘争の指針として同様に必要である。どちらの扇動も、労働者の意識をめざめさせ、彼らを組織し、訓練し、連帯行動や社会民主主義の理想をめざす闘争をおこなうように彼らを教育する

ことによって、労働者に当面の問題、当面の必要によって自分の力をためす可能性をあたえるであろう。またこれらの扇動は、資本をして組織された労働者の勢力を考慮にいれることを余儀なくさせ、政府をして労働者の権利を拡張し、労働者の要求に耳を傾けることを余儀なくさせ、そして政府に強固な社会民主主義組織に指導される、敵意ある労働者大衆にたいする恐れをつねにいだかせておくことによって、労働者に、その敵から部分的な譲歩をかちとって、自分たちの経済状態を改善する可能性をあたえるであろう。

われわれは、社会主義的な宣伝および扇動と民主主義的な宣伝および扇動とが切り離せない密接な関係にあること、革命的活動はこの双方の領域で完全に平行しておこなわれるべきことを指摘した。しかし、活動と闘争のこの二つの種類のあいだには大きな相違もある。この相違は、経済闘争の場合にはプロレタリアートはまったく単独であって、地主貴族をもブルジョアジーをも敵としており、ただ小ブルジョアジー中のプロレタリアートに心をひかれる分子の援助をうけるにすぎない（それもけっしていつもそうだというわけではない）、という点にある。ところが、民主主義的闘争、政治闘争では、ロシアの労働者階級は単独ではない。すべての政治上の反政府的な分子、住民層、階級は、絶対主義に敵意をいだき、それにたいしてあれこれの形で闘争をおこなっているかぎりで、労働者階級と肩をならべている。ここでは、ブルジョアジー、または教養のある諸階級、または小ブルジョアジー、または絶対主義に迫害されている諸民族や宗教や宗派その他、等々、のうちの反政府分子も、プロレタリアートとならんで立っている。そこで当然次のような問題が起こる。労働者階級はこれらの分子にたいしてどういう関係に立つべきか？　次に、労働者階級は、絶対主義にたいする共同闘争のために彼らと提携すべきではないだろうか？　すべての社会民主主義者が、ロシアでは政治革命が社会主義革命に先行しなければならないことを承認しているのだ。絶対主義にたいする闘争のためにすべての政治上の反政府分子と提携して、しばらくのあいだ社会主義をわきにのけておくべきではないだろうか？　絶対主義にたいする闘争を強めるために、ぜひともそうすべきではないだろうか？

この二つの問題を検討しよう。

絶対主義にたいする戦士としての労働者階級と、他のすべての政治上の反政府的な社会階級やグループとの関係についていえば、この関係は、有名な『共産党宣言』のなかで述べられている社会民主主義の基本原則によって、十分正確に規定されている。[20] 社会民主主義者は、反動的な社会階級に反対して進歩的な社会階級を支持し、特権的な身分

制的土地所有の代表者や官僚に反対してブルジョアジーを支持し、小ブルジョアジーの反動的熱望に反対して大ブルジョアジーを支持する。この支持は、非社会民主主義的な綱領や原則とのどんな妥協をも前提しないし、また必要としない。それは当面の敵にたいする同盟者への支持である。この場合社会民主主義者は、共同の敵の没落をはやめるためにこの支持をあたえるが、これらの一時的な同盟者たちからは自分のためになにも期待しないし、また彼らになにも譲歩しない。社会民主主義者は、現代の社会体制に反対するあらゆる革命運動を支持し、同権のために闘争するあらゆる被抑圧民族、迫害されている宗教、侮辱されている身分、等々を支持する。

すべての政治上の反政府分子にたいする支持は、社会民主主義者の宣伝では、次の点に表現される。すなわち、社会民主主義者は、労働者の事業にたいして絶対主義が敵意をいだいていることを証明するとともに、あれこれの社会的グループにたいして絶対主義が敵意をいだいていることをも示し、あれこれの問題、あれこれの任務、等々における労働者階級とこれらのグループとの連帯性を示す。扇動では、この支持は次の点に表現される。すなわち、社会民主主義者は絶対主義の警察的抑圧のあらゆる現われを利用して、この抑圧がどのように一般にすべてのロシア市民に、とくにことさらに抑圧されている身分や民族や宗教や宗派、等々の代表者にくわえられているか、どのようにこの抑圧がとくに労働者階級のうえに反映しているかを、労働者に示す。最後に、実践のうえでは、この支持は、ロシア社会民主主義者はあれこれの部分的目標を達成するために他の諸流派の革命家と同盟を結ぶ用意がある、ということに表現される。そしてこの用意は、実際に一度ならず証明されたのである。

ここでわれわれは第二の問題にも近づく。社会民主主義者は、労働者とあれこれの反政府的なグループとの連帯性を指摘するとともに、つねに労働者を他から区別し、つねにこの連帯性の一時的で条件的な性格を説明し、きょうの同盟者にたいしてあすは反対するかもしれないプロレタリアートの階級的独自性をつねに力説する。われわれにむかってこう言うものがあるかもしれない。「そういう指摘は、現在政治的自由のために戦っているすべての戦士を弱めることになろう」と。そういう指摘は、政治的自由のために戦うすべての戦士を強めるだろう、とわれわれは答えよう。強いのは、一定の階級の意識された現実の利害に立脚する戦士だけである。したがって、現代社会ですでに支配的な役割を果たしているこれらの階級利害をあいまいにすることはすべて、戦士を弱めるだけである。これが第一。

第二に、絶対主義にたいする闘争で労働者階級が自分を他から区別しなければならないのは、労働者階級だけが絶対主義の最後まで一貫した無条件的な敵であり、労働者階級と絶対主義とのあいだにだけは妥協はありえないし、民主主義は労働者階級のうちにだけ、留保条件なしの、ためらうことのない、うしろをふりかえることのない支持者を見いだすことができるからである。その他のすべての階級、グループ、住民層にあっては、絶対主義にたいする敵意は無条件的ではなく、彼らの民主主義はつねにうしろをふりかえる。ブルジョアジーは、絶対主義によって工業や社会の発展が阻止されていることを意識しないわけにはゆかないが、しかし彼らは政治体制と社会体制の完全な民主化をおそれ、いつなんどきでもプロレタリアートに反対して絶対主義と同盟しかねない。小ブルジョアジーは、その本性そのものからして二重人格的で、一方ではプロレタリアートおよび民主主義に心をひかれながら、他方では反動階級に心をひかれ、歴史を阻止しようと試みるのであって、絶対主義の実験や媚態(たとえアレクサンドル三世の「人民の政治」(七)のような形のものであろうとも)にのせられかねず、小所有者としての自分の地位を強固にするために、プロレタリアートに反対して支配階級と同盟を結びかねないのである。教養ある人々、一般に「インテリゲンツィア」は、思想と知識を迫害する絶対主義の野蛮な警察的抑圧にたいして反抗せざるをえないが、このインテリゲンツィアの物質的迫害は、彼らを絶対主義およびブルジョアジーにしばりつけ、彼らを一貫性を欠くものにし、妥協をさせ、その反政府的で革命的な情熱を、官庁の俸給やら、利潤や配当金への割りこみやらと引きかえに売りわたさせるのである。被抑圧民族や、迫害されている宗派のなかの民主主義的分子についていえば、だれでも知っており見ているように、住民中のこれらの部類の内部における階級矛盾は、絶対主義に反対し、民主的制度に味方する点での、そういう部類のなかの全階級の連帯性よりも、はるかに深く、また強い。最後まで一貫した民主主義者、どんな譲歩にも妥協にも応じる恐れがなく、絶対主義の決定的な敵となることができ、しかもその階級的地位によってそうならざるをえないのは、ひとりプロレタリアートだけである。政治的自由と民主的制度のための先進闘士となりうるものは、ひとりプロレタリアートだけである。というのは、第一に、最高権力に近づく手づるもなければ、役人に近づく手づるさえなく、世論にたいする影響力ももたないこの階級の地位はどうにも矯正しようがないので、政治的抑圧が最も強くプロレタリアートに反映するからである。第二に、プロレタリアートだけが政治体制と社会体制の民主化を最後ま

で遂行する能力をもっている。というのは、そういう民主化は、この体制を労働者の手にゆだねることになるからである。まさにこのために、労働者階級の民主主義的活動と他の階級やグループの民主主義とを融合させると、民主主義運動の力を弱め、政治闘争を弱め、それを煮えきらない、不徹底的な、妥協しやすいものにすることになろう。これに反して、民主的制度のための先進闘士としての労働者階級を他から区別すると、民主主義運動を強め、政治的自由のための闘争を強める。なぜなら、労働者階級は、他のすべての民主主義的な、政治上の反政府的な分子を前方へ駆りたてるし、自由主義者を政治的急進主義者のほうへ駆りたて、急進主義者を、現代社会の政治体制と社会体制全体との決定的絶縁のほうへ駆りたてるからである。さきにわれわれは、ロシアにおける社会主義者はすべて社会民主主義者となるべきだ、と言った。われわれはいまつけくわえて言う。ロシアにおける真正の、一貫した民主主義者はすべて社会民主主義者となるべきだ、と。

実例で、われわれの思想を明らかにしよう。統治を専門の仕事とし、人民にたいして特権的な地位におかれている人々の特殊な層としての、官吏、官僚の制度をとってみよう。絶対主義的、半アジア的なロシアから、文化的な、自由な、文明的なイギリスにいたるまで、どこにも、ブルジョア社会の必要な機関となっているこの制度が見られる。ロシアの後進性とその絶対主義には、官吏にたいして人民がまったく無権利で、特権的な官僚がまったく統制されていない状態が照応している。イギリスでは、行政にたいする人民の強力な統制があるが、しかし、そこでもこの統制はけっして完全ではなく、そこでも官僚は少なからぬ特権を保持しており、人民の公僕ではなくて主人であることがまれでない。イギリスでも、いろいろの有力な社会的グループが官僚の特権的な地位を支持して、この制度の完全な民主化を妨げているのが、見られる。どうしてそうなのか？　それは、官僚制度の完全な民主化がプロレタリアートだけにしか利益でないからである。ブルジョアジーの最もすすんだ層ですら、官吏のなにがしかの特権を擁護し、いっさいの官吏の選挙制や、検閲制度の全廃や、人民にたいする官吏の直接の責任制、等々に反対している。というのは、プロレタリアートがこのような終局的な民主化を、ブルジョアジーにたいして逆用するだろうと、これらの層は感じているからである。ロシアでもそうである。全権をもち、責任を負わず、買収されやすく、野蛮で、無知で、寄生的なロシアの官吏にたいして、ロシア人民のきわめて多人数の、多種多様な層が反対している。だが、プロレタリアートを除けば、これらの層の一つとして官吏制度の完

全な民主化を容認しないであろう。それは、他のすべての層（ブルジョアジー、小ブルジョアジー、「インテリゲンツィア」一般）には、彼らを官吏制度と結びつける糸であるからであり、すべてこれらの層は、ロシアの官僚の親類だからである。聖なるルーシ〔ロシアの古名〕では、急進主義的インテリゲンツィアや社会主義的インテリゲンツィアが、皇帝政府の官吏に——役所の旧慣の限界内で「世のため」をはかることでみずからをなぐさめ、自分の政治的無関心主義や、鞭と革紐の政府にたいする自分の奴僕根性を、この「世のため」で弁護する官吏に——どんなにやすやすとなりかわっているか、だれか知らないものがあろうか？　絶対主義とロシアの官吏とにたいして無条件に敵対的なのはプロレタリアートだけである。プロレタリアートだけには、貴族＝ブルジョア社会のこれらの機関と彼らを結びつけるなんの糸もない。プロレタリアートだけが、これらの機関にたいして和解しえない敵意をもつこと、断固として闘争することができるのである。

その階級闘争において社会民主党に指導されるプロレタリアートがロシア民主主義の先進闘士であることを証明するにあたって、われわれはここで、非常に広く流布しているきわめて奇妙な意見、すなわち、ロシア社会民主党は政治的任務や政治闘争を背面におしやっているかのようにいう意見にぶつかる。われわれが知っているとおり、この意見は真実と正反対である。社会民主党の諸原則は何回となく述べられてきたし、またすでに（八）ロシア社会民主党の初期の出版物——「労働解放」団が外国で出版した小冊子や書物のなかで述べられているのに、この原則にたいするこのような驚くべき無理解は、どういう理由によるのであろうか？　この驚くべき事実の説明は、次の三つの事情のうちにふくまれていると思われる。

第一に、古い革命理論の代表者たちが、一般に社会民主主義の諸原則を理解していないこと。この人々は、この国で行動し、歴史によってある相互関係におかれている現実の諸階級を考慮することにもとづかずに、抽象的な観念にもとづいて綱領や活動計画を立てることに慣れている。いろいろな利害関係からロシアの民主主義を支持している諸集団について現実的な考察がなされていないからこそ、ロシア社会民主党はロシアの革命家の民主主義的任務をかげにおいているかのようにいう意見が、起こらざるをえなかったのである。

第二に、経済問題と政治問題とを、社会主義的活動と民主主義的活動とを結びつけて、一つの全体に、プロレタリアートの単一の階級闘争にすることは、政治闘争を人民大衆の現実の利害に近づけ、政治問題を「インテリゲンツィ

アの狭い書斎」のなかから街頭に、労働者や勤労諸階級のただなかに引きだし、政治的抑圧という抽象的観念をこの抑圧の現実の現われ――だれよりも多くプロレタリアートを苦しめており、社会民主主義がその扇動をおこなう基盤としているもの――におきかえるものである点で、民主主義運動と政治闘争とを弱めずにかえって強めるものだということを理解していないこと。ロシアの急進主義者はしばしば次のように思っている。すなわち、社会民主主義者は、先進的な労働者をじかに、直接に政治闘争へ呼びかけることはしないで、そのかわりに、労働運動を発展させ、プロレタリアートの階級闘争を組織するという任務を指示しているが、そうすることによって社会民主主義者は自分の民主主義から後退し、政治闘争をうしろへひっこめている、と。しかし、もしここに後退があるとすれば、それは、フランスのことわざに《il faut reculer pour mieux sauter !》(より遠く跳ぶためにはうしろへ下がらなければならない)と言うときの、そういう後退である。

第三に、この誤解は、「政治闘争」という概念そのものが、一方では「人民の意志」派と「人民の権利」派にとって、他方では社会民主主義者にとって、違った意味をもっていることから起こっている。社会民主主義者は、政治闘争を古い革命理論の代表者とは違ったふうに理解しており、それを彼らよりもはるかに広く理解している。逆説だと思われるかもしれないこの命題にたいして明瞭な例証をあたえるのは、一八九五年一二月九日付の『「人民の意志派グループ」リーフレット』第四号である。われわれは、現代の「人民の意志」派のあいだにおこなわれている深い、実り多い思想活動を証拠だてているこの出版物を衷心から歓迎するとともに、旧派の「人民の意志」派が政治闘争を違ったふうに理解していることを鮮やかに示しているペ・エル・ラヴロフの『綱領問題について』という論文(一九一二ページ)を、指摘せずにはいられない。*ラヴロフは、「人民の意志」派の綱領と社会民主党の綱領との関係を論じて、次のように書いている。「……ここで肝心なのは、一つ、ただ一つのことだけである。すなわち、絶対主義に反対する革命党の組織のほかにも、絶対主義のもとで強力な労働者党を組織することができるか、ということである」(二一ページ、第二段)。そのいくらかまえのところ(第一段)でも同じことを言っている。「……絶対主義の支配するところで、この絶対主義に反対する革命党を同時に組織することなしにロシア労働者党を組織すること……」。ペ・エル・ラヴロフにとっては非常に重大なこの差異が、われわれにはまったく理解できない。これはどういうことか？「絶対主義に反対する革命党をほかにしての労働者

党」?? いったい、労働者党そのものが革命党ではないのか? 労働者党は、絶対主義に反対してはいないのか? ペ・エリ・ラヴロフの論文の次の箇所は、この奇妙な考えを説明している。「ロシアの労働者党の組織は、絶対主義がそのあらゆる美点とともに存在している条件のもとでつくりださなければならない。もし社会民主主義者が、絶対主義にたいする政治的陰謀**をそういう陰謀のあらゆる条件ともども同時に組織しないでも、労働者党を組織できるものなら、むろん、彼らの政治綱領はロシアの社会主義者として当然の綱領だと言ってよい。というのは、労働者自身の力による労働者の解放がなしとげられるであろうから。しかし、それは不可能でないとしても、きわめて疑わしい」(二一ページ、第一段)。ここに問題の核心があるのだ! 「人民の意志」派にとっては、政治闘争という概念は政治的陰謀という概念と同一なのだ! われわれは、右の文句のなかでペ・エリ・ラヴロフが、「人民の意志」派の政治闘争の戦術と社会民主主義者の政治闘争の戦術との根本的な差異を実際にまったくあざやかに示すことに成功したことを、認めなければ(六八)ならない。「人民の意志」派のあいだでは、ブランキ主義、陰謀主義の伝統がおそろしく強い。それは、彼らには政治的陰謀の形よりほかには政治闘争が考えられないくらいに強いのである。だが、社会民主主義者はそういう狭い見解はあずかり知らない。彼らは陰謀を信じない。彼らは、陰謀の時代はとうに過ぎさったと考え、また、政治闘争を陰謀に帰着させることは、一方では政治闘争を法外にせばめることを意味し、他方では最もまずい闘争方法をえらぶことを意味する、と考えている。だれでも理解しているように、「ロシアの社会民主主義者は西欧の活動を無条件の模範としている」(二一ページ、第一段)かのように言う、ペ・エリ・ラヴロフのことばは、論戦上の激語以上のものではないのであって、実際には、ロシアの社会民主主義者たちはわが国の政治的条件を忘れたことはけっしてなく、ロシアで公然と労働者党をつくることが可能だと空想したこともけっしてなく、社会主義のための闘争の任務を政治的自由のための闘争の任務から切りはなしたこともけっしてなかった。彼らは、陰謀家ではなく労働運動に立脚する革命党が、この闘争をおこなわなければならないと、つねに考えてきたし、いまもそう考えている。彼らの考えでは、絶対主義にたいする闘争とは、陰謀をたくらむことではなく、プロレタリアートを教育し、訓練し、組織することであり、絶対主義のあらゆる現われに罪の刻印をおし、警察政府のあらゆる騎士どもをさらし台に釘づけにし、この政府に譲歩をやむなくさせるような政治的扇動を、労働者のあいだでおこなうことである。

サンクト－ペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」の活動こそは、まさにそういうものではないか？　まさにこの組織こそは、労働運動に立脚し、どんな陰謀をたくらむことなしにプロレタリアートの階級闘争、すなわち、資本および絶対主義政府にたいする闘争を指導し、社会主義的闘争と民主主義的闘争とをペテルブルグ－プロレタリアートの切り離せない一つの階級闘争に結合すること自体から自分の力をくみだしている、革命党の萌芽ではないだろうか？　「同盟」の活動は非常に短期のものであるにもかかわらず、それは、社会民主党に指導されるプロレタリアートが大きな政治勢力であって、政府もすでにこれを考慮に入れることを余儀なくされており、これに急いで譲歩しているということを、すでに証明したではないか？　一八九七年六月二日の法律は、その実施のあわて方から見ても、その内容から見ても、プロレタリアートにたいする余儀ない譲歩としての、ロシア人民が敵からたたかいとった陣地としての意義をもつものであることを、一目瞭然と示している。この譲歩はごく微細なものであり、その陣地はきわめてささやかなものであるが、しかしこの譲歩をしいることに成功した労働者階級の組織もまた、広範な、強固なものではなく、長期にわたって存在し、豊富な経験や資金をもつものではなかったではないか。周知のように、「闘争同盟」はやっと一八九五－九六年に創立されたものであり、労働者にむかって出されたその檄文はこんにゃく版か石版刷りのリーフレットにすぎなかった。このような組織が、すくなくともロシアにおける労働運動の最大の中心地（サンクト－ペテルブルグ地方、モスクワ＝ヴラヂーミル地方、南部地方、オデッサやキエフやサラトフなどのような最重要の都市）を結合し、革命的機関紙をもち、サンクト－ペテルブルグの労働者のあいだで「闘争同盟」がえているような権威をロシアの労働者のあいだでもつようになるなら、そういう組織が、現代ロシアにおける最大の政治的要因、政府がその全内外政策で考慮しないわけにはいかない要因となるであろうということを、否定できようか？　プロレタリアートの階級闘争を指導し、労働者のあいだに組織と規律を発達させ、労働者がその当面の経済的必要のために戦って、資本からつぎつぎに陣地を戦いとるのを助け、労働者を政治的に教育し、絶対主義を系統的に、たゆまず追及し、警察政府の強い爪をプロレタリアートに感じさせているツァーリのバシバズーク[2]の一人ひとりを追及することのような組織は、わが国の事情に適合した労働者党の組織であると同時に、絶対主義に反対する強力な革命党でもあるだろう。そういう組織が絶対主義に断固たる打撃をくわえるためにどういう手段に訴えるだろうか、たとえば蜂起

をえらぶか、それとも大衆的な政治的ストライキまたはその他の攻撃方法をえらぶか、ということをまえもって論議し、いまからこの問題を解決しておくことは、無益な空論だろう。それは、将軍たちが軍隊を召集し、動員し、敵にむかって出撃させる以前に軍事会議をひらくようなものである。だが、プロレタリアートの軍隊が強固な社会民主主義組織の指導のもとに確固として自分の経済的・政治的解放のために戦うときには、この軍隊はみずから将軍たちに行動の仕方と手段を教えるであろう。そのときには、そしてそのときにはじめて、絶対主義にたいして終局的な打撃をくわえる問題を解決することができるであろう。なぜなら、この問題の解決は、まさに労働運動の状態に、その幅に、運動によってつくりあげられた闘争方法に、運動を指導する革命的組織の特性に、プロレタリアートと絶対主義とにたいする他の社会層の態度に、内外政治の状況に、一言でいえばまえもって予知することは不可能でもあり無益でもあるような幾千の条件に、依存するからである。

* 『「人民の意志派」リーフレット』第四号に掲載されたペ・エリ・ラヴロフの論文は、『資料』として予定されていた彼の長大な手紙からの「抜粋」にすぎない。この夏（一八九七年）外国でペ・エリ・ラヴロフのこの手紙の全文とプレハーノフの回答とが出版されたと聞いたが、われわれはそのどちらも見ることができなかった。同様に、編集部がペ・エリ・ラヴロフの手紙についての編集部の論説をのせると約束した『「人民の意志派」リーフレット』第五号が出版されたかどうかも、われわれにはわからない。（第四号、二二ページ、第一段の注を見よ。）

** 傍点はわれわれのもの。

だから、ペ・エリ・ラヴロフの次のような判断も、やはり、はなはだ不当なのである。

「もし彼ら（社会民主主義者）が、資本との闘争のために労働者の勢力を結集するだけでなく、なんらかの仕方で絶対主義との闘争のために革命的な個人やグループを結束させなければならなくなるなら、ロシアの社会民主主義者は、どう自称しようと、事実上（傍点は原筆者のもの）自分の反対者である『人民の意志派』の綱領を採用するであろう。共同体にかんする、ロシアにおける資本主義の運命にかんする、経済的唯物論にかんする見解の相違は、実際問題にとってはまったく重要でない部分問題であって、基本的諸目的の達成を準備する部分的な任務や部分的な方法の解決を促進したり妨げたりはするが、それ以上のものではない。」（二一ページ、第一段）

ロシアの生活とロシア社会の発展との根本問題にかんする、歴史観の根本問題にかんする見解の相違が「部分問

題」でしかありえないというこの後段の命題は、問題にすることとさえおかしいくらいだ！　革命的理論なしには革命的運動もありえないということは、すでにずっと昔に言われたことで、現在では、この真理を証明する必要はほとんどない。階級闘争の理論、ロシアの歴史の唯物論的な理解とロシアの現代の経済・政治状態の唯物論的な評価、さらに、他の諸階級にたいする特定の階級の関係を分析することにより、革命闘争をこの特定の階級の特定の利害に帰着させる必要の承認——これらの最大の革命的諸問題を「部分問題」とよぶことは、きわめて大きなまちがいであり、革命理論のベテランからこういうことを聞くのはまったくおもいがけないことなので、われわれはこの箇所を単純に lapsus〔書きまちがい〕と考えたいほどである。抜粋した長談義の前半についていえば、その不当なことはさらに驚くべきものである。ロシアの社会民主主義者は、資本との闘争のために（すなわち、ただ経済闘争のために！）労働者の勢力を結集するだけであって、絶対主義との闘争のためにに革命的な個人やグループを結束させていないと印刷物のうえで言明すること——これは、ロシアの社会民主主義者の活動について一般に知れわたっている事実を知らないか、または知ろうと望まないかの、どちらかである。それとも、ペ・エリ・ラヴロフは、ロシアで実際に活動している社会民主主義者を「革命的な個人」や「革命的なグループ」とは考えていないのだろうか?!　それとも（このほうがおそらく真実だろうが）彼は、絶対主義との「闘争」を絶対主義にたいする陰謀としか理解していないのではなかろうか？（二一ページ、第二段の次の句を参照せよ、「……問題になるのは……革命的陰謀の組織……である」。傍点はわれわれのもの。）たぶん、ペ・エリ・ラヴロフの意見によれば、政治的陰謀をたくらまないものは政治闘争もやっていないことになるのだろうか？　もう一度繰りかえしていうが、このような見解は、昔の「人民の意志」派の昔の伝統には完全に一致するが、しかし、政治闘争についての現代の観念にも、現代の現実にもまったく一致しないのである。

なお残っているのは、「人民の権利」派についてすこしばかり述べることである。ペ・エリ・ラヴロフが、社会民主主義者は『人民の権利』派をより率直なものとして推薦しており、これと合流こそしないが、彼らを支持する用意がある」（一九ページ、第二段）と言っているのは、われわれの意見では、まったく正しい。ただ、「より率直な民主主義者として、また『人民の権利』派が一貫した民主主義者として行動するかぎりで」、とつけくわえなければなるまい。残念なことに、この条件は現在の実状というよ

りは、むしろ未来の期待である。「人民の権利」派は、民主主義的任務をナロードニキ主義から、また一般に「ロシア社会主義」の古くさくなった諸形態との結びつきから解放したいと希望した。しかし、彼らが、もっぱら政治的改革の党である自分の党を「社会（?!）革命」党とよび（一八九四年二月一九日付の彼らの『宣言』を見よ）、その『宣言』のなかで、「人民の権利という概念には、人民的生産の組織ということがはいる」（われわれは、記憶にたよって引用しなければならない）と言明し、こうしてナロードニキ主義の同じ偏見をこっそり引きいれたとき、彼ら自身古い偏見からけっして解放されておらず、またけっして首尾一貫してもいないことが、わかったのである。だから、ペ・エリ・ラヴロフが彼らを「仮面の政治家」（二〇ページ、第二段）とよんだことは、おそらくはまったく不当なわけではなかったのだ。だが、「人民の権利」主義を過渡的な学説と見るほうが、おそらくより公正であろう。そしてこの主義が、ナロードニキ学説の独自性に赤面して、警察的、階級的な絶対主義に直面しながら政治的改革でなく経済的改革が望ましいなどと臆面もなく語るナロードニキ主義の最も嫌悪すべき反動家たちと公然と論戦を始めたことは、この主義の功績と認めないわけにはいかない（「人民の権利」党の出版物『緊急問題』を見よ）。もし「人民の権利」党には、戦術上の考慮から自分の社会主義的な旗印を隠し、非社会主義的政治家の仮面をつけているだけの往年の社会主義者のほかには実際にだれもいないのなら（ペ・エリ・ラヴロフが予想しているように、二〇ページ、第二欄）、それならば、もちろん、この党にはなんの将来性もない。しかし、もしこの党に仮面をかぶらない、ほんとうの非社会主義的政治家、非社会主義的民主主義者もいるのなら、それならば、この党は、わが国のブルジョアジーのうちの政治上の反政府分子に近づくようにつとめ、わが国の小ブルジョアジー、小商人、小手工業者などの階級――これは、西ヨーロッパのどこでも、民主主義運動でその役割を果たした階級であり、わがロシアでは改革後の時期に文化その他の面でとくに急速な進歩をなしとげた階級であり、そして大工場主や独占的大金融家や産業家を破廉恥に支持する警察政府の抑圧を感じざるをえない階級である――の政治的自覚を呼びさますようにつとめることによって、少なからぬ利益をもたらすことができる。このために必要なことは、「人民の権利」派がまさに種々の住民層に近づくことを自分の任務とし、いつも対象を「インテリゲンツィア」だけに限定しないことである。大衆の現実的な利益から分離している場合のインテリゲンツィアの無力さは、『緊急問題』も認めているところである。このた

めに必要なことは、「人民の権利」派が、いろいろの異質的な社会的分子を合流させようとか、政治的任務のために社会主義を排除しようとかいうあらゆる野望をすてさり、人民のなかのブルジョア的諸層への接近を妨げている見当ちがいの羞恥心をすてさること、すなわち、非社会主義的政治家の綱領を論じるだけでなく、またこの綱領に応じて行動して、社会主義などすこしも必要としていないが、時とともに絶対主義の抑圧と政治的自由の必要性とをますます強く感じている社会的グループや階級の階級的自覚を呼びさまし、発達させることである。

ロシアの社会民主党はまだたいへん若い。それは、理論問題が優勢な地位を占めていた萌芽状態からやっと脱けだして、実践活動を発展させはじめたばかりである。他の諸流派の革命家は、社会民主主義の理論と綱領を批判するかわりに、必要にせまられて、ロシア社会民主主義者の実践活動の批判を始めるにちがいない。そして、認めなければならないのは、このあとのほうの批判は理論的批判とはきわめて鋭く異なっており、しかもサンクト－ペテルブルグの「闘争同盟」は社会民主主義的な組織ではないかのような、こっけいなうわさをでっちあげることさえも可能だったほどに鋭く異なっている、ということである。このようなうわさが起こりうるということ自体がすでに、社会民主主義者は政治闘争を無視しているという、いま流行の非難の正しくないことを示している。このようなうわさが起こりうること自体がすでに、社会民主主義者の理論には納得できなかった多くの革命家が、社会民主主義者の実践には納得しはじめていることを証明している。

ロシアの社会民主党のまえにはさらに、ようやく着手されたばかりの巨大な活動分野がひかえている。ロシア労働者階級のめざめ、知識、団結、社会主義、および搾取者と抑圧者にたいする闘争への労働者階級の自然発生的な熱望は、日ごとにますますはっきりと、広く現われている。ロシア資本主義の最近の巨大な成果は、労働運動がたえず幅ひろく、また深く成長してゆくことを保障している。現在は明らかに、産業が「繁栄」し、商業が活発におこなわれ、工場が全力をあげて操業し、新しい工場、新しい企業、新しい株式会社、新しい鉄道等々が雨後の竹の子のように数かぎりなく発生する資本主義の周期にあたっている。予言者でなくとも、産業のこの「繁栄」につづくにちがいない破局（多かれ少なかれ急激な）の不可避性を予言することができる。このような破局は、多数の小経営者を零落させ、労働者大衆を失業者の列になげこみ、すでにずっとまえか

らすべての意識的な労働者、ものを考える労働者のまえに提起されていた社会主義と民主主義の諸問題を鋭い形で全労働者大衆のまえに提起するであろう。この破局がいよいよおそってきたとき、ロシアのプロレタリアートが、いっそう自覚し、いっそう団結したものになっており、ロシアの労働者階級の任務を理解しており、また今日巨大な利潤をあげながらその損失を労働者に転嫁しようとつねにつとめている資本家階級に反撃をくわえる能力をもち、ロシア労働者と全ロシア人民の手足をしばっている警察的絶対主義にたいしてロシア民主主義の先頭に立って断固たる闘争を始める能力をもつものとなっているように、ロシアの社会民主主義者は配慮しなければならない。

だから、仕事にとりかかりたまえ、同志諸君！　貴重な時間を失うまい！　ロシアの社会民主主義者のまえには、めざめつつあるプロレタリアートの要請を満足させ、労働運動を組織し、革命的諸グループとそれらの相互の結合を強化し、労働者に宣伝・扇動文書を供給し、ロシアの全土に散在している労働者サークルや社会民主主義的グループを単一の社会民主労働党に統合するための多くの仕事がひかえているのだ！

「闘争同盟」からペテルブルグの労働者と社会主義者へ

ペテルブルグの革命家は困難な時期にさしかかっている。政府は、近ごろ発生して、非常な力を発揮している労働運動をおしつぶすために、まさにその全力をあつめた。逮捕は非常に大きな規模にひろがり、刑務所は超満員になった。男女のインテリゲンツィアがとらえられ、労働者もとらえられて大量に追放されている。自分の敵に狂暴におそいかかった警察政府の新たな、さらに新たな犠牲が報道されない日はほとんどない。政府は、ロシアの革命運動の新しい潮流が強まってひとり立ちするのを阻止することを自分の任務として課した。検事や憲兵は早くも、「闘争同盟」をうまく壊滅させたと、自慢している。

だが、この豪語はうそだ。「闘争同盟」はあらゆる追及にもかかわらず無傷である。われわれは十分の満足をもって次のことを確認する。大量の逮捕は、労働者や社会主義的インテリゲンツィアのあいだでの扇動の強力な道具となることで、その役目を果たしている。倒れた革命家の席は、ロシアのプロレタリアートと全ロシア人民のための戦士の列に新鋭の力をもってくわわる決意をもった、新しい革命

家によって占められている。犠牲なしには闘争はありえない。そして、ツァーリのバシバズークの残忍な迫害にたいして、われわれは平然としてこう答える。革命家は倒れた、――革命万歳！

追及の強化は、今日まで、ただ「闘争同盟」の個々の機能の一時的な弱まり、協力者と扇動家の一時的な不足を引きおこしたにすぎない。このような不足がいま感じられているからこそ、われわれは革命の事業に自分の力をささげようと念願するすべての意識的な労働者とすべてのインテリゲンツィアに訴えるのである。「闘争同盟」は協力者を必要としている。革命的活動のどんな分野においても、たとえどんなに狭い分野においても活動したいと望むすべてのサークルとすべての個人は、「闘争同盟」と連絡のある人にそのむねを申し出てもらいたい（もしどれかのグループがそういう人物を見いだすことができない場合――そういうことはめったにないはずだが――には、そのグループは在外「ロシア社会民主主義者同盟」をつうじて申しこむことができる）。あらゆる種類の仕事に働き手が必要である。そして革命家が革命的活動の個々の機能へと厳密に専門化されればされるほど、また彼らが秘密活動の方法や自分の仕事の秘匿の仕方について厳密に考えをめぐらせばめぐらすほど、また小さな、めだたない、部分的な活動に献身的にとじこもればとじこもるほど、万事はそれだけいっそう確実になり、憲兵やスパイが革命家を発見することは、それだけいっそう困難になるだろう。政府は、反政府分子の現在の根拠地ばかりでなく、将来のそういう根拠地になるかもしれないところまでも、すでにまえもってその密偵網にとらえている。政府は、革命家を迫害する自分の召使どもの活動を広く深く着々と発展させており、新しいやり方を発明し、新しい挑発者を配置し、おどかしや、虚偽の証言や、にせの署名や、偽造記録をこっそり挿入することや、そのほかこれに似た手段を用いて、逮捕された人々に圧力をくわえようとつとめている。革命的な規律、組織、秘密活動を強化し発展させないでは、政府との闘争は不可能である。ところで秘密活動をおこなうためには、まず第一に、それぞれのサークルや人物を仕事の個々の機能に専門化し、ごく少数の成員からなる「闘争同盟」の中央の中核体に統合的役割を委任することが必要である。革命的活動の個々の機能は無限に多様である。そのことで裁判にかけるわけにいかないようなたくみなやり方で労働者のあいだで話をすることができ、ただイだけを語って、ロやハを語るのは他人にまかせることのできる合法的な扇動家が必要である。文書やビラの配布者が必要である。労働者のサークルやグループの組織者が必要である。あらゆる

工場からあらゆる出来事について報道をよせる通信員が必要である。スパイや挑発者を監視する人が必要である。秘密の住居を組織する人が必要である。文書の伝達、委託の伝達、あらゆる種類の連絡のための人が必要である。金を集める人が必要である。労働者や、工場生活や、行政機関（警察、工場監督部、など）に接触をもった協力者が、インテリゲンツィアや官吏のあいだに必要である。ロシアや外国のいろいろな都市と連絡するための人が必要である。いろいろな機械によるあらゆる文書の複製を組織するための人が必要である。文書その他のものを保管するための人が必要である、等々。個人もしくは個々のグループが引きうける仕事が細分され、こまかになればなるほど、この仕事を熟慮をもって組織し、それを破壊から最もよく守り、憲兵の警戒心をあざむいて彼らをまよわせるありとあらゆる方法を応用しながら秘密活動上のあらゆる細目を検討することに成功する見込みは、それだけいっそう多くなり、仕事の成功はそれだけいっそう確かになり、警察や憲兵が革命家を探査し、革命家と組織とのつながりを探査することはそれだけいっそう困難になり、革命党が倒れた協力者や党員を、事業全体に損害をおよぼさずに他のものでおきかえることは、それだけいっそう容易になるであろう。われわれは、このような専門化が非常に困難な事柄であるのを知っている。困難だというのは、それが人々に最大の忍耐と最大の献身を要求し、単調な、同志たちとの連絡のない、革命家の全生活を無味乾燥で厳格な規律に服従させる、めだたない活動に全力をささげることを要求するからである。しかし、ただこういう条件のもとでのみ、ロシアにおける革命的実践の巨匠たち(二)は、事業の全面的な準備に幾年もの年月を費やしながら、すばらしい壮挙を実行することに成功してきたのである。社会民主主義者が従前の数世代の革命家たちにもおとらない献身ぶりを示すであろうことを、われわれは深く確信する。またわれわれは、われわれの提案している方式によれば、「闘争同盟」が、協力を申し出ている人物またはグループについての確かな情報をあつめ、個々の委託に耐えうるかどうかの能力をためすまでの準備期間は、革命的活動にその力をそそぎたいと熱望する多くの人物にとって非常に苦しいものであろうということを、知っている。しかし、このような予備試験なしには現代のロシアでは革命的活動は不可能なのである。

われわれは新しい同志諸君にこのような活動方式を提唱して、われわれはここに、長期にわたる経験によって到達した命題を表記するわけであるが、われわれはまた、この方式のもとでこそ革命活動の成功が最もよく保障されることを深く確信するものである。

一八九七年末に流刑地で執筆
一八九八年にジュネーヴで単行の小冊子としてはじめて印刷
全集、第五版、第二巻、四四五―四七〇ページ所収
邦訳全集、第二巻、三二二―三四五ページ所収

農業における資本主義(六七)

(カウツキーの著書とブルガコフ氏の論文について)

第一論文

『ナチャーロ』(六八)の第一―二号(第二部、一―二二ページ)に、農業問題にかんするカウツキーの著作の批判にあてたエス・ブルガコフ氏の論文『農業の資本主義的進化の問題によせて』が掲載されている。ブルガコフ氏は、まったく正当に、「カウツキーの著書は一つのまとまった世界観をあらわしている」と言い、また、この著書には理論的にも実践的にも大きな意義があると言っている。この著書は、共通の見解で結びつき、マルクス主義者を自任している著述家たちのあいだでさえ、激しい論争をあらゆる国で呼びおこしてきたし、いまなお呼びおこしつづけている問題についての、おそらく最初の、体系的で科学的な研究であろう。ブルガコフ氏は、「カウツキーの著書の個々の命題」の批判、それも「消極的な批判にとどめている」(この著書を彼は「簡単に」――われわれがこれから見るように、あまりにも簡単に、そしてはなはだ不正確に、『ナチャーロ』の読者に説明している)。ブルガコフ氏は、「いずれそのうちに」「農業の資本主義的進化の問題を体系的に叙述し」、こうして「おなじく一つのまとまった世界観」をカウツキーに対置したい、と望んでいる。

ロシアにおいてもカウツキーの著書がマルクス主義者のあいだですくなからず論争を呼びおこすであろうこと、また、ロシアにおいても彼らのうちのあるものはカウツキーに反対し、他のものは賛成するであろうということを、われわれは疑わない。すくなくとも筆者は、ブルガコフ氏とはまさに決定的に異なる意見をもち、カウツキーの著書にたいする評価でも彼と見解を異にする。ブルガコフ氏の評価は――彼が『農業問題』を「注目すべき著述」と認めているにもかかわらず――その烈しさと、傾向の似ている著述家のあいだの論争では通常見られない口調とで、人を驚かせる。次はブルガコフ氏の表現の見本である――「なみはずれて浅薄に」……「真の農学も、真の経済学も、同様

に少なく」……「重要な科学的諸問題をカウツキーは空文句で回避している」（傍点――ブルガコフ氏!!）等々。そこでわれわれは、このきびしい批判者の表現をとくと熟視しながら、それと同時にカウツキーの著書を読者に紹介することにしよう。

一

ブルガコフ氏は、カウツキーにたどりつくまえに、通りすがりにマルクスを非難している。いうまでもなく、ブルガコフ氏はこの偉大な経済学者の巨大な功績を強調してはいる。だが、彼はこう注釈をつけている――マルクスには「歴史がすでに十分に論破してしまった……まちがった考え」さえ、「部分的には」見うけられる。「そのような考えの一つに、たとえば、農業では、加工工業と同様に、可変資本が不変資本にたいしてやはり相対的に減少し、そのため農業資本の有機的構成はますます高度化する、という考えがある」。この場合まちがっているのはだれなのか、マルクスか、それともブルガコフ氏か？　ブルガコフ氏が念頭においているのは、農業では技術の進歩と経営の集約性の増大とが、一定面積の土地の耕作に必要な労働量を増加させることがしばしばある、という事実である。これは争う余地がない。だがこのことから、可変資本が不変資本にたいして相対的に、すなわち不変資本にたいする比率の点で減少するという理論の否定にいたるまでには、まだまだ距離がある。マルクスの理論が主張しているのは、たとえ単位面積あたりのvが増大するとしても、v/c（vは可変資本、cは不変資本）は小さくなる一般的傾向がある、ということだけである――もしそのさいcがもっと急速に増大するとすれば、はたしてそれはマルクスの理論を論破することになるであろうか？　資本主義諸国の農業については、だいたいにおいて、vの減少とcの増大が見られる。農村人口と農村労働者数は、ドイツでも、フランスでも、イギリスでも減少している。ところが、農業で使用される機械の数は増大しているのである。たとえばドイツでは、農村人口は一八八二年から一八九五年にかけて一九二〇万人から一八五〇万人に（農村賃金労働者の数は五九〇万人から五六〇万人に）減少した。ところが、農業で使用される機械の数は四五八、三六九台から九一三、三九一台に増大*し、農業で使用される蒸気力機械の数は二、七三一台（一八七九年）から一二、八五六台（一八九七年）に増加し、しかも蒸気力機械の馬力数はそれよりも大幅に増大した。牛の頭数は（一八八三年から一八九二年のあいだに）一五八〇万頭から一七五〇万頭に、豚の頭数は九二〇万頭から一二二〇万頭に、増加した。フランスでは、農村人口は一

八八二年の六九〇万人（「独立農民」）から一八九二年の六六〇万人に減少したが、農業機械の数は一八六二年――一三二、七八四台、一八八二年――二七八、八九六台、一八九二年――三五五、七九五台というふうに増加し、牛の頭数は一二〇〇万頭――一三〇〇万頭――一三七〇万頭と増加し、馬の頭数は二九一万頭――二八四万頭――二七九万頭と減少している。（一八八二年――一八九二年のあいだの馬の頭数の減少は、農村人口の減少ほど顕著ではない）。このように、だいたいにおいて、現代の資本主義諸国については、歴史はマルクスの法則が農業に適用されうることを確証したのであって、けっしてその法則を論破しはしなかったのである。ブルガコフ氏の誤りは、彼が農業上の個個の事実の意義をよく見つめずに、あまりにも急いでそれらの事実を一般的な経済法則にまで高めた点にある。われわれは「一般的」ということばを強調する。なぜなら、マルクスも彼の弟子たちも、ある法則をつねに資本主義の一般的傾向の法則としてよりほかには見なかったのであって、それをあらゆる個々の場合にあてはまる法則だとはけっして見なかったからである。工業にかんしてさえ、マルクス自身、技術的改造の時期（このときv/cの割合は小さくなる）にとって代わって、その技術的基礎のうえでの進歩の時期（このときv/cの割合は不変であり、個々の場合に大きくなることもありうる）が現われることを、指摘している。われわれは、資本主義諸国の工業史において、工業の数多くの部門についてこの法則が破られる場合があることを知っている。たとえば大規模な資本主義的作業場（不正確にも工場とよばれている）が分解して資本主義的家内労働に席を譲る場合が、そうである。農業についていえば、資本主義の発展過程が農業では測りしれないほど複雑であり、比較にならないほど多様な形態をとることは、なんら疑いの余地がない。

* 各種の機械を合計した数字。とくに指摘しないかぎり、数字はすべてカウツキーの著書からとってある。

カウツキーにうつろう。カウツキーは封建時代の農業の概観から始めているが、それは「非常に浅薄にまとめられており、よけいなものである」そうである。このような判決を下した動機は、理解しがたい。もしブルガコフ氏が自分の計画を実行し、農業の資本主義的進化の問題の体系的な叙述をすることができるとすれば、そのとき彼はどうしても農業の前資本主義的経済の基本的諸特徴を描きださなければなるまいと、われわれは確信する。そうしなければ、資本主義経済の性格も、資本主義経済と封建制経済とをつなぐ過渡的諸形態の性格も、理解することができない。ブルガコフ氏自身も、「農業がその資本主義的躍進の端緒に

おいて（傍点――ブルガコフ氏）とった形態」のもつ強大な意義を認めている。カウツキーは「ヨーロッパ農業の、ほかならぬ「資本主義的躍進の端緒」から始めているのである。カウツキーのまとめた封建的農業の概観は、われわれの考えでは、みごとなできばえである。それはすばらしく明確であり、また、第二義的な細部に迷いこむことなく、主要で本質的なものを選びだす手腕をみせているが、それらのことは総じてこの著者の持ちまえである。カウツキーは、まずはじめに序論で、いちじるしく正確に、かつ正しく問題提起をしている。彼はまったくきっぱりと、次のように言明している。「疑いもなく――そしてわれわれはこのことを最初から（von vornherein）立証されたものとして受けいれよう――農業は工業と同一の型にしたがって発展するものではなく、独自の法則にしたがう」（五―六ページ）〔邦訳、岩波文庫版、上巻、二六ページ〕。課題は、「資本が農業をとらえているかどうか、どのようにとらえているか、また――どのようにそれを変革しており、どのようにして古い生産形態と所有形態を存続できないようにし、新しい生産形態の必然性を生みだしているかを、研究する」（六ページ）〔二七ページ〕ことにある。このような問題提起が、そしてそれだけが、「資本主義社会における農業の発展」（カウツキーの著書の理論的な第一篇の標題）の満足のゆく解明にみちびくことができるのである。

「資本主義的躍進」の端初においては、農業は、封建的社会経済体制に原則として従属している農民の手中にあった。そこでカウツキーはまずはじめに、農民経済の構造、農業と家内工業との結合を特徴づけ、つぎに、小ブルジョア的で保守的な著述家たち（シスモンディ流の）のいう、この楽園を崩壊させた諸要素、高利貸付の意義を、また「旧来の調和と利益の共通性とを破壊する階級対立の、農村人の、農民経済そのものの内部への」漸次的な「浸透」（一三ページ）〔三八ページ〕を、特徴づけている。この過程はすでに中世に始まったが、現在でもまだ最終的に完了してはいない。われわれはこの言明を強調する。なぜなら、それは、カウツキーは農業における技術的進歩の担い手がだれであったかという問題を提起さえしなかったというブルガコフ氏の主張がまったく偽りであることを、たちどころに示すものだからである。カウツキーは、この問題をまったく明確に提起し、解明したのである。そして、彼の著書を念入りに読了したものならだれでも、近代的農業における技術的進歩の担い手が大小の農村ブルジョアジーであり、大ブルジョアジーは（カウツキーが示したように）この点では小ブルジョアジーよりも重要な役割を演じているという真理（ナロードニキや農学者やその他多くの人がしばし

ば忘れているところのもの）を、会得することであろう。

二

カウツキーは、つぎに（第三章で）封建的農業の基本的諸特徴――最も保守的な農耕方式である三圃農法の支配、大きな土地貴族による農民の抑圧と収奪、前者による封建的－資本主義的経済の組織化、一七および一八世紀における農民の飢えた貧民（Hungerleider）への転化、古い形態の農村関係と土地所有とが適しなくなったブルジョア的農民層（雇農と日雇を雇わずにはやってゆけないGross-bauern〔大農〕）の発展、工業と都市との内部で発展したブルジョア階級の力による、これらの古い諸形態の転覆、「資本主義的集約農業」（二六ページ〔六〇ページ〕）のための道の清掃――を描いたのちに、「近代的（moderne）農業」（第四章）の特徴づけに移っている。

この章は、資本主義が農業で引きおこしたあの巨大な革命の、すばらしく正確で、簡潔で、明瞭な概観をあたえている。この革命は、窮乏によって打ちのめされ無知によって押しつぶされていた農民の、千年一日のような手仕事を、農学の科学的応用に転化させ、半世紀にもわたる農業の停滞を打破し、社会的労働の生産力の急速な発展に刺激をあたえた（そして、いまもひきつづきあたえている）。三圃農法には輪作農法がとって代わり、家畜の飼育や土地の耕作が改善され、収穫は高まり、農耕の専門化と個々の経営のあいだの分業が大いに発展した。前資本主義的な一様性には、農業のあらゆる部門の技術的進歩にともなってますます強められてゆく多様性がとって代わった。農業への機械の応用、蒸気力の応用が生じ、急速に発展しだした。また電力の応用も始まっているが、これは――専門家が指摘するように――この生産部門では蒸気力よりももっと大きな役割を演じると考えられる。農場軌道の敷設や土地改良が発展し、植物生理学の資料にしたがっての人造肥料の使用が発展し、細菌学が農業に応用されはじめた。カウツキーが「これらの知識*に経済学的分析をともなわせていない」かのようにいうブルガコフ氏の見解は、まったく根拠がない。カウツキーは、この変革と市場の発達（とくには都市の発達）との関連を、また、この変革と、農業の改造およびその専門化を強制した競争に農業が従属してゆく過程との関連を、正確に指摘している。「都市の資本に源を発するこの変革は、市場への農業経営者の依存を強め、そのうえ、彼にとって切実な市場条件をたえず変化させている。街道だけが最も近い市場と世界市場とを結びつけていたあいだは利益のあった生産部門が、その地方に鉄道が貫通するようになると利益がないものとなり、他の生産部門

によってとって代わられなければならなくなる。たとえば、鉄道はより安い穀物を運んできて、そのため穀物生産は儲からなくなるが、同時にミルクを販売する可能性がひらけてくる。商品流通の発達はたえず、新しいあるいは改良された作物を国内にもたらすことを可能にする」うんぬん（三七―三八ページ）〔七六ページ〕。また、カウツキーは言っている――「封建時代には、小規模農業以外の農業は存在しなかった。なぜなら、地主は自分の畑を農民の同じ農具で耕作していたからである。資本主義がはじめて、農業において小経営よりも技術的に合理的な大経営を可能にした」。カウツキーは、農業機械について述べるさいに（ついでながらいえば、彼はこの点での農業の特殊性を正確に指摘している）、機械使用の資本主義的性格、機械の労働者にたいする影響、進歩の要因としての機械の意義、農業機械の使用を制限しようとする企画の「反動的な空想性」を明らかにしている。「農業機械はその変革的な働きをしつづけてゆくであろう。それは農村労働者を都市に追いやり、そのことによってそれは、一方では農村における賃金を高め、他方では農業への機械の使用をさらに発展させる、強力な手段となるであろう」（四一ページ）〔八二ページ〕。つけくわえていえば、カウツキーは特別の諸章で、近代的農業の資本主義的性格をも、大経営と小経営との関係をも、農民のプロレタリア化をも、くわしく説明している。カウツキーは「これらすべての奇蹟的変化がなぜ必然的であったかという問題を提起していない」とするブルガコフ氏の主張は、われわれが見るとおり、まったくまちがいである。

* 「これらすべての知識は、農業経済学のあらゆる（原文のまま！）入門書から汲みとることができる」とブルガコフ氏は考えている。われわれは、「入門書」についてのブルガコフ氏のこのばら色の見解に同意しない。「あらゆる」書物のなかから、ロシアのスクヴォルツォフ氏の著書（『蒸気力運輸』）とエヌ・カブルーコフ氏の著書（『講義』――これの半分は、『ロシアにおける農民経営の発展の条件について』という「新」著に再録されている）とを、とってみよう。そのどちらからも、読者は、資本主義が農業でおこなった変革の情景を汲みとることはできないであろう。なぜなら、彼らはいずれも、封建制経済から資本主義経済への移行の一般的情景を描きだそうという目標を立ててさえいないからである。

第五章（「近代的農業の資本主義的性格」）で、カウツキーはマルクスの価値論、利潤論、地代論を叙述している。「貨幣なしには近代的農業経営は不可能である。あるいは、同じことだが、資本なしにはそれは不可能である。実際に、今日の生産様式のもとでは、個人的消費の目的に使用されないいっさいの貨幣額

は、資本に、すなわち、剰余価値を生む価値になりうるのであり、そしてそうなるのが通例である。したがって、近代的農業経営は資本主義的経営である」（五六ページ）〔一〇三ページ〕。ちなみに、この箇所はわれわれに、ブルガコフ氏の次のような言明を評価する可能性をあたえてくれる。「私はこの術語（資本主義農業）を普通の意味で（カウツキーも使っているのと同じ意味で）、すなわち、農業における大経営という意味で使う。だが実際には（原文のまま！）、全国民経済が資本主義的に組織されているもとでは、総じて非資本主義的な農業は存在しない。農業はすべて生産組織の一般的諸条件によって規定されるのであり、この限界内でのみ、大規模な、企業家的な農業と小規模な農業とが区別されるべきなのである。明瞭を期するためには、ここでも新しい術語が必要である」。ブルガコフ氏はカウツキーを訂正した、ということになるようだ……。「だが実際には」、読者が見られるように、カウツキーは「資本主義農業」という術語を、ブルガコフ氏が使っているような「普通の」、不正確な意味ではけっして使っていない。カウツキーは、資本主義的生産様式のもとではあらゆる農業生産が「通例として」資本主義的なものであることを非常によく理解しており、そしてきわめて正確かつ明瞭にそのことを語っている。この見解の根拠として、近代的農業にとっては貨幣が不可欠であり、個人的消費に向けられない貨幣は近代社会においては資本となる、という単純な事実があげられている。このほうがブルガコフ氏の「訂正」よりもいくらか明快であるし、またカウツキーは「新しい術語」なしでやってゆける可能性を十分に示した、とわれわれには思われる。

カウツキーはその著書の第五章の一部で、イギリスで十全な発展をとげた借地農業制度も、ヨーロッパ大陸でめざましい速度で発展しつつある不動産抵当制度も、本質においては同一の過程、すなわち農業経営者が土地から分離する過程をあらわしていることを、確認している。資本主義的借地農業制度では、この分離は白日のように明瞭である。不動産抵当制度のもとでは、この分離は「それほどに明瞭でなく、ことはそれほど単純でないが、本質においては同じことになる」（八六ページ）〔一五三ページ〕。実際に、土地を抵当に入れることが、地代を抵当に入れること、あるいは地代を売却することであるのは、明白である。したがって、不動産抵当制度のもとでも、借地農業制度のもとでと同様に、地代の受領者（＝土地所有者）は企業者利潤の受領者（＝農業経営者、農業企業家）から分離している。ブルガコフ氏にとっては、「カウツキーのこの主張の意義は、総じて明らかでない」。「不動産抵当は農業経営者か

らの土地の分離をあらわしているということを、立証されたこととはとても考えられない」。「第一に、負債が地代を全部呑みこんでしまうということは立証できない。それは例外としてのみありうることである……」。われわれはこれにたいしてこう答える。不動産抵当債務の利子が全地代を呑みこんでしまうことを立証する必要がないことは、現実の借地料が地代と一致することを立証する必要がなんらないことと、まったく同じである。不動産抵当債務がものすごい速度で増加していること、土地所有者が自分の土地を全部抵当に入れ、全地代を売却しようと努めていることを立証すれば、それで十分である。この傾向が存在すること——理論経済学的分析が総じて取り扱いうるのは傾向だけである——は、疑うことができない。したがって、農業経営者からの土地の分離の過程も、疑いない。地代の受領者と企業者利潤の受領者とが一身に結合していることは、「歴史的観点からすれば例外である」(ist historisch eine Ausnahme, 九一ページ)〔一六一ページ〕。……「第二に、債務の意義を理解するためには、債務の原因と源泉を個々の場合のそれぞれについて分析することが必要である」。これはおそらく誤植かあるいは言いまちがいであろう。経済学者(しかも「資本主義社会における農業の発展」一般を論じるところの)は、債務の原因を「個々の場合のそれぞれについて」研究すべきであるとか、あるいは研究できるはずのものだとかと、ブルガコフ氏は要求することはできない。もしブルガコフ氏がさまざまな時期のさまざまな国における債務の原因を分析することが必要だと言いたかったのなら、われわれは彼に同意することはできない。カウツキーが、農業問題にかんする専攻論文はあまりにもたくさんありすぎると言い、現在の理論の緊急課題はけっして新しい専攻論文をつけくわえることではなく、「農業の資本主義的進化の基本的諸傾向を全体として研究すること」(序文、六ページ)〔一五ページ〕であると言っているのは、まったく正しい。不動産抵当債務の増大という形での農業経営者からの土地の分離もまた、疑いもなく、こういう基本的諸傾向の一つである。カウツキーは、不動産抵当の真の意義、それの進歩的な歴史的性格(農業経営者からの土地の分離は農業の社会化の条件の一つである、八八ページ)〔一五五ページ〕、農業の資本主義的進化におけるそれの必然的な役割[**]を、正確かつ明瞭に規定した。この問題にかんするカウツキーの考察はすべて、理論的にもきわめて貴重なものであって、債務の「災厄」や「救済策」についての広範にひろめられている(とくに、「農業経済学のあらゆる入門書」のなかで)ブルジョア的おしゃべりに対抗する強力な武器を提供している。……「第三に

――とブルガコフ氏は結論をくだしている――賃貸しされている土地が、こんどはまた抵当に入れられるかもしれず、その意味では賃貸しされえない土地という状態になるかもしれない」。奇妙な論拠である！　ブルガコフ氏は、経済現象なり経済的範疇なりで、他のものとからみあっていないようなものを、せめて一つでも示してみるがいい。債務と不動産抵当とが並存している事例は、農業経営者からの土地の分離の過程が二つの形態で、すなわち借地農業制度と不動産抵当債務とにおいて現われているとの理論的命題を、論破するものではないし、それを弱めるものですらないのである。

* マルクスは『資本論』第三巻でこの過程を（さまざまな国における種々異なる形態を分析してはいないが）指摘し、この「土地所有および土地所有者からの、労働条件としての土地の分離」は「資本主義的生産様式の大きな功績」であると特記した（第三巻第二冊一五六―一五七ページ、ロシア語訳、五〇九―五一〇ページ）(九七)。

** 不動産抵当債務の増大は、かならずしも農業の抑圧された状態を示すものではけっしてない……。農業の進歩と繁栄も（その衰退と）同様に、「不動産抵当負債の増加となって現われざるをえない。第一に、進歩してゆく農業が発展させる資本需要のいっそうの増加のため、つぎに農業信用の拡大を可能にする地代の高騰のために」（八七ページ）（一五四ページ）。

ブルガコフ氏はまた、「借地農業制度が発展している国は、大土地所有が優勢な国でもある」（八八ページ）（一五六ページ）というカウツキーの命題を、「ますますもって意外」であり、「まったくまちがった」ものと明言している。カウツキーはここでは、土地所有の集中（借地農業制度の場合）と不動産抵当の集中（土地所有者がみずから経営する制度の場合）を、私的土地所有の廃止を容易にする条件として述べているのである。カウツキーはつづけてこう言っている。――土地所有の集中の問題については、「さまざまな私有地が一人の手中に結合されてゆくのを跡づけうるような」統計はないけれども、借地件数と借地面積との増加が土地所有の集中とならんで進行していることは「一般的に認めることができる」。「借地農業制度が発展している国は、大土地所有が優勢な国でもある」。カウツキーのこの議論全体が借地農業制度の発展している諸国だけについてのものであることは、明らかであるが、ブルガコフ氏は東プロシアを引合いに出している。彼は、そこでは借地件数の増加が大土地所有の細分化と並行していることを「示したいと望み」、そしてこれらの個々の実例によってカウツキーを論破しようと思っているのである！　カウツキー自身はオストー・エルベにおける大領地の細分化と

農民借地の増加とを指摘しており、そのさい、われわれがのちに見るように、これらの過程の真の意義を解明しているのであるが、ブルガコフ氏は、不当にも、そのことを読者に知らせるのを忘れているだけなのである。

カウツキーは、不動産抵当債務の多い国々における土地所有の集中を、不動産信用機関の集中によって証明している。ブルガコフ氏はそれを、証明されないものと考える。彼の考えでは、「資本の分散（株式による）が信用機関の集中とならんで生ずるということも、容易にありうる」。だがこの問題にかんしては、われわれはもうこれ以上ブルガコフ氏と論争しないことにしよう。

三

カウツキーは、封建的農業と資本主義的農業との基本的諸特徴を検討したのち、農業における「大経営と小経営」（第六章）の問題に移っている。この章は、カウツキーのこの著書のなかで最良の章の一つである。彼はここでまず、「大経営の技術的優越性」を究明している。カウツキーは、この問題で大経営に軍配をあげているが、けっして（ブルガコフ氏が極度に根拠なしに考えているようには）農業諸関係のいちじるしい多様性を無視した抽象的な公式をあたえてはいない。むしろ反対に、理論の法則を実際に適用するためにはこの多様性を考慮に入れる必要があることを、彼は明瞭かつ正確に指摘している。農業における大経営の小経営にたいする優越性は、「い
う
ま
で
も
な
く」「他の条件が等しい場合」にだけ（一〇〇ページ、傍点は私のもの）〔一七六ページ〕——不可避なのである。これが第一。工業においても、大経営の優越性の法則は、けっして、ときどき考えられているほど絶対的でもなければ単純でもない。そしてここでも、「他の条件」が等しい場合（それは現実にはめったにあることではないが）にのみ、この法則は完全に適用されうるのである。ところで、諸関係が比較にならないほどずっと複雑で多様であることを特徴とする農業においては、大経営の優越性の法則が完全に適用されうるには、もっといちじるしく厳格な条件がそなわっている必要がある。たとえば、カウツキーが非常に的確に指摘しているることだが、農民的所有地と小地主的所有地との境目では「量から質への転化」が起こるのであって、農民的大経営は地主的小経営よりも、「技術的にではないとしても、経済的にはよりすぐれている」ことがありうる。科学的教養のある管理者を雇うこと（それは大経営の重要な長所の一つであるが）は、地主的小経営にとってはあまりにも過重な負担である。そして経営者自身がみずから管理する場合には、往々にしてその管理は「ユンカー的」にすぎず、

けっして科学的なものではない。第二に、農業における大経営の優越性が現われるのは、一定の限界内においてだけである。カウツキーは、そのあとの叙述でこの限界をくわしく研究している。またこの限界は、異なる農業部門にとって、また社会・経済条件を異にする場合に、同一であるわけでないことは、いうまでもない。第三に、カウツキーは、たとえば野菜栽培、ぶどう栽培、商業作物栽培などのように、専門家が小経営にも競争能力を認めている農業部門も「さしあたり」存在することを、すこしも無視していない（一一五ページ）〔二〇一ページ〕。しかしそのような作物は、農業の主要な（entscheidende）部門、すなわち粒穀生産や畜産にたいしてはまったく従属的な意義しかもっていない。そのうえ、「野菜栽培やぶどう栽培の領域においても、すでに十分に成功をおさめている大経営がある」（一一五ページ）〔二〇二ページ〕。だから、「一般に（im allgemeinen）農業について言うならば、小経営が大経営に優越している部門はほとんど考慮に値いしないのであって、大経営は決定的に小経営に優越していると、十分に語ることができる」（一一六ページ）〔二〇三ページ〕。

カウツキーは、農業における大経営の技術的優越性を立証したのち（われわれはのちにブルガコフ氏の異論を検討するさいに、カウツキーの論拠をもっとくわしく叙述しよう）、「小経営はなにをもって大経営の利点に対抗しようとするのか？」という問題を出して、こう答えている。「それは、賃金労働者とは異なり自分自身のために働く者の、より多くの勤勉さとより多くの入念さであり、また、農村労働者のそれをさらに上まわる、小独立農業経営主のつましさである」（一〇六ページ）〔一八五―一八六ページ〕。――さらにカウツキーは、フランス、イギリス、ドイツの農民の状態にかんする数多の際だった資料によって、「小経営における過度労働と過少消費」という事実を、まったく疑問の余地がないまでに明らかにしている。最後に、カウツキーは、協同組合を設立しようとする農業経営主の努力のうちにもまた大経営の優越性が表現されていることを、指摘している。「協同組合経営は大経営である」。一般には小市民的俗物のイデオローグたち、とくにはロシアのナロードニキ（さきに引用したカブルーコフ氏の著書だけでもあげておこう）が、小農耕者たちの協同組合にどんな態度をとっているかは、周知のところである。だからそれだけに、カウツキーがあたえた協同組合の役割のすばらしい分析は、一段と大きな意義をもつことになる。小農業経営主たちの協同組合は、もちろん、経済的進歩の一環をなすものではあるが、しかし、それが表現しているのは資本主義への前進（Fortschritt zum Kapitalismus）であって、し

ばしば考えられ主張されているような、集産主義への前進ではけっしてない（一一八ページ）〔二〇六ページ〕。協同組合は、農業における大経営の小経営にたいする優越性（Vorsprung）を弱めるものではなく、強めるものである。なぜなら、大経営主は協同組合を設立する可能性をより多くもち、この可能性をより多く利用するからである。共同的な、集産主義的大経営が資本主義的大経営よりもすぐれていること、このことを——いうまでもなく——カウツキーはまったく断固として認めている。彼は、オーエンの後継者たちがイギリスでおこなった集産主義的な農業経営の試み*や、北アメリカ合衆国における同様な共同団体について、くわしく論じている。カウツキーはこう言っている、——これらすべての実験は、近代的大規模農業を働き手たちが集産主義的に経営することがまったく可能であること、しかしこの可能性が現実となるためには「一連の一定の経済的、政治的、知的な条件」〔二一四ページ〕が必要であることを、反論の余地なく実証している。小生産者（手工業者も、農民も）が集産主義的経営に移行するのを妨げているものは、団結心と規律との極度に微弱な発達、彼らの孤立性、彼らの「所有者としての狂信」である。この狂信は、たんに西ヨーロッパの農民のあいだで確認されるばかりでなく——私がつけくわえて言えば——ロシアの「共同体的」農民のあいだでも確認されるのである（ア・エヌ・エンゲリガルトやゲ・ウスペンスキーを思いおこされたい）。「農民が今日の社会において協同組合的生産に移行すると期待するのは、ばかげている」（一二九ページ）〔二二五ページ〕と、カウツキーは断定的に言明している。

* カウツキーはララハイン（Ralahine）の農業協同組合のことを、一二四—一二六ページ〔二一五—二二〇ページ〕で記述している。ちなみに、ヂオネオ氏も今年の『ルースコエ・ボガートストヴォ』第二号で、これについてロシアの読者に語っている。

以上が、カウツキーの著書の第六章の格別に豊富な内容である。ブルガコフ氏はこの章にとくに不満である。われわれはこう聞かされる、——カウツキーは異なる概念の混同という「根本的過失」を犯している。「技術的優越性と経済的優越性とが混同されている」。カウツキーは、「技術的により完成された生産様式は経済的にもより完成されたもの、すなわち、生活能力のより高いものであるという、まちがった前提から出発している」。ブルガコフ氏のこの決然たる判定がまったく根拠のないものであることは、われわれがおこなったカウツキーの論議のすすめ方の説明から、読者はすでに納得されたことと思う。カウツキーは、技術と経済をすこしも混同せず*、資本主義経済という環

境のもとで他の条件が等しい場合に農業における大経営と小経営との相互関係はどうであるかという問題を研究するという、完全に正しい態度をとっている。第六章の第一節の冒頭でカウツキーは、資本主義の発展の高さと大規模農業の優越性の法則が一般に適用されうる程度との関連を、正確に指摘している。「農業が資本主義的になればなるほど、大経営と小経営とのあいだの技術の質的相違はますます大きくなる」（九二ページ）〔一六二ページ〕。前資本主義的な農業では、この質的相違は存在しなかった。ブルガコフ氏はカウツキーにきびしい教訓をたれて、「実際には、問題は次のように提起されるべきである。すなわち、一定の社会・経済的条件のもとで大経営と小経営が競争する場合に、これらの生産形態のそれぞれの持つあれこれの特質はどのような意義を持ちうるか？」と言っているが、こういう教訓についてどう言ったらよいであろうか。これは、われわれがさきに考察したのとまったく同じ性質の「訂正」である。

* ブルガコフ氏が依拠することができるかもしれない唯一のものは、カウツキーが第六章第一節につけた表題である。その節では、大経営の技術的優越性についても経済的優越性についても語られているのに、表題は「(a) 大経営の技術的優越性」となっている。だが、このことははたして、カウツキーが技術と経済とを混同していることを証明するものだろうか？ さらにまた、カウツキーの表題のつけ方に不正確さがあるとすることが、そもそも疑問である。つまりこうである――カウツキーは第六章の第一節と第二節の内容を対比することを目的としていた。第一節(a)では資本主義的農業における大経営の技術的優越性が述べられ、ここでは、機械その他とならんで、たとえば信用が登場している。ブルガコフ氏は、「珍奇な技術的優越性だ」と皮肉を言っている。だが rira bien qui rira le dernier！〔最後に笑う者は最もよく笑う！〕カウツキーの著書にざっと眼をとおすだけで、みなさんは、カウツキーが念頭においているのは、主として、大経営者にだけ利用できる信用業の技術における（さらに商業の技術における）進歩のことだということが、おわかりであろう。これに反して第二節(b)で問題とされているのは、大経営と小経営とにおける労働の量と働き手の消費水準の比較である。したがって、ここでは大経営と小経営とのあいだの純経済的相違点が検討されているのである。信用と商業との経済は両者にとって同一であるが、技術は相違している。

こんどは、農業における大経営の技術的優越性を認めるカウツキーの議論を、ブルガコフ氏がどのように反駁しているかを見よう。カウツキーは言う。「工業と農業とのあいだの最も重要な相違点の一つは、後者にあっては本来の経営（Wirtschaftsbetrieb）と家計（Haushalt）とがいまなおかたく結びついているのにたいして、工業ではそうでない」ことである。そして、大きな家計が小さな家計よ

りも労働力や資材の節約の点でまさっていることは、証明する必要があるまい。……前者は「灯油、チコリー・コーヒー、マーガリンを卸で、後者は小売で」（九三ページ）〔一六四ページ〕買う（このことに注意！　ヴェ・イ〔・レーニン〕）等々。だがブルガコフ氏は「訂正」する。「カウツキーが言いたかったのは、そのほうが技術的に有利だということではなく、そのほうが安くつくということである」！……この場合にも（他のすべての場合と同様に）、カウツキーを「訂正」しようとするブルガコフ氏の試みが不首尾以上のものであることは、明白ではなかろうか？

このきびしい批判家はつづけて言う。「この議論そのものが、やはりはなはだ疑わしい。なぜなら、ばらばらな百姓小屋の価値は、一定の条件のもとでは、生産物の価値に全然はいらないことがありうるが、共同の百姓小屋の価値は、しかも利子とともにはいるからである。これもまた社会・経済的条件に依存している。そしてこれらの条件こそが――小経営にたいする大経営の想像上の技術的優越性ではなく――研究されるべきであろう……」。第一に、ブルガコフ氏は、カウツキーがまずはじめに他の条件が等しい場合の大経営と小経営との意義を比較研究し、以後の叙述でこれらの条件をもくわしく分析しているという、小さなことを忘れている。したがってブルガコフ氏は、異なる問題をいっしょくたにしようとしているわけである。第二に、どういうわけで、百姓小屋の価値が生産物価値にはいらないことがありうるのか？　それは、農民が小屋を建てたり修理したりするさいに自分の木材や自分の労働の価値を「計算しない」からにすぎない。農民がいまだに現物経済をいとなんでいるかぎり、彼はもちろん自分の労働を「計算しない」でいることもできる。そしてブルガコフ氏は、カウツキーがその著書の（第八章「農民のプロレタリア化」）（一六五―一六七ページ）〔二六七―二七一ページ〕でそのことを完全に明瞭かつ正確に指摘していることを、読者に告げるのを不当にも忘れているのである。だが、いま問題になっているのは資本主義の「社会・経済的条件」であって、現物経済や単純商品経済のそれではない。そして、資本主義的社会環境のもとで自分の労働を「計算しない」ことは、自分の労働をただで（商人あるいは他の資本家に）あたえることを意味し、労働力にたいして完全な支払を受けずに働くことを意味し、欲求の水準を標準以下に引き下げることを意味する。われわれがさきに見たように、カウツキーは小経営のこの特徴を完全に認識し、正しく評価していた。ブルガコフ氏は、カウツキーに異議をとなえるにあたって、ブルジョア経済学者や小ブルジョア経済学者の通例の態度と通例の誤りをくりかえしている。これら

の経済学者は、小農民は自分の労働を計算しないでもよく、利潤や地代などを追求しないでもよいという、小農民の「生活能力」を耳にたこができるほどほめたたえてきた。このお人好したちは、そのような議論は現物経済と単純商品生産と資本主義との「社会・経済的条件」を混同するものだということを、忘れているだけである。カウツキーは、これらの誤りを全部みごとに説明し、社会・経済的諸関係のあれこれの体制を厳密に区別している。彼はこう言っている。「もし小農民の農業経営が商品生産の領域にひきこまれておらず、もしそれがたんに家計の一部をなすにすぎないなら、それはまた、近代的生産様式の集中化傾向の領域の外部にとどまっているわけである。小農民の零細経営がどれほど非合理的であり、どれほど労力濫費的であろうとも、彼はそれにしがみつく。それはちょうど、彼の妻がそのみじめな家計にしがみつくのとまったく同じである。この家計もまた同様に、あらんかぎりの労働力を支出しても限りなく貧しい結果しかもたらさないのであるが、しかしそこは彼女が他人の意志に従属することを安んぜず、搾取から解放されている唯一の領域をなしているのである」(一六五ページ)〔二八四ページ〕。現物経済が商品経済によって駆逐されると、事態は一変する。農民は、生産物を販売し、農具を購入し、土地を購入しなければならない。農民が単純商品生産者にとどまっているあいだは、彼は賃金労働者の生活水準で満足することができる。彼には利潤も地代も必要でなく、彼は土地にたいして資本家的企業家が支払いうるよりも高い価格を支払うことができる(一六六ページ)〔二八七ページ〕。しかし、単純商品生産は資本主義的生産によって駆逐される。たとえば、もし農民が自分の土地を抵当に入れるならば、もはや彼は、債権者に売り渡された地代をも手に入れなければならない。この発展段階では、農民はたんに形式上、単純商品生産者とみなされるにすぎない。De facto〔実際には〕、彼はもはや通常は資本家――債権者、商人、工業企業家――と関係をもち、彼のところで「副業」を探すこと、すなわち彼に自分の労働力を売ることを余儀なくされている。この段階では――くりかえして言うが、カウツキーは資本主義社会における大規模農業と小規模農業を比較しているのである――、「自分の労働を計算しない」ですませるということは、農民にとってはただ一つのことを、すなわち、身を粉にして働き、自分の欲望を限りなく切りつめることを、意味するにすぎない。

ブルガコフ氏のその他の異議もまた同様に根拠がない。小経営のほうが、機械を使用できる範囲は限られているし、小経営者のほうが、信用を手に入れるのは困難であり、高

くつく、——カウツキーはこう言っている。ブルガコフ氏は、これらの議論はまちがっていると考え、そして農民の協同組合……を引合いに出している！　そのさい、この協同組合とその意義とについてわれわれがさきに引用した評価をくだしているカウツキーの論証は、完全に黙殺されている。機械の問題については、ブルガコフ氏はまたもやカウツキーを叱責して、彼は「より一般的な経済問題、すなわち、農業における機械の経済的役割は一般にどのようなものであるか」（ブルガコフ氏はもはやカウツキーの著書の第四章を忘れてしまっている！）、「そして機械は農業では、製造工業におけると同様に不可欠の道具であるかという問題を」提起しなかった、と言っている。カウツキーは、近代農業における機械使用の資本主義的性格をはっきり指摘し（三九ページ、および四〇ページ以下）〔七七ページ以下〕、農業における機械使用を「技術的および経済的に困難」にする農業の特殊性を強調し（三八ページ以下）〔七六ページ以下〕、機械使用の増大にかんする資料（四〇ページ）〔七九ページ〕、機械の技術的意義にかんする資料（四二ページ以下）〔八二ページ以下〕、蒸気と電気との役割にかんする資料をあげている。カウツキーは、各種の機械を完全に利用するためには、農学の資料によればどの程度の経営規模が必要であるかを示し（九四ページ）〔一六七ページ〕、また、一八九五年のドイツのセンサスの資料によれば、機械を使用する経営のパーセントが、小経営から大経営にすすむにつれて規則正しく、かつ急速に高まっていることを示している（二ヘクタール未満の経営では一・八％、二—五ヘクタールの経営では一三・八％、五—二〇ヘクタールの経営では四五・八％、二〇—一〇〇ヘクタールの経営では七八・八％、一〇〇ヘクタール以上の経営では九四・二％）。ブルガコフ氏は、これらの資料のかわりに、機械は「どうしても使わなくてはならないもの」なのか、あるいはまた使わなくてもすむものなのかということについての、「一般的な」考察を見たく思ったのである！……

「小経営のほうが一ヘクタールあたりの役畜頭数が多いという指摘は……納得できない……なぜなら、そのさい経営の家畜集約度が……研究されていないからである」。——ブルガコフ氏はこう言っている。この指摘がなされているカウツキーの著書のページをひらくと、こう書いてある、——「……小経営に牝牛の頭数が多いこと」（一〇〇〇ヘクタールあたりの計算で）「は、農民は大経営よりも多く畜産をいとなむが、耕種農業はより少なくしかいとなまないということにも、すくなからず起因している。だが、馬の飼育における差異は、これによっては説明できない」（九六ページ〔一六九ページ〕）、ここでは一八六〇年のザクセン、

一八八三年のドイツ全体、一八八〇年のイギリスの資料が引用されている)。ロシアでもゼムストヴォ統計が、小規模農業にたいする大規模農業の優越性を表現する同じ法則、すなわち、大規模な農民経営は単位面積あたりではより少ない数の家畜と農具でやってゆけるということを、明らかにしたことを思いおこそう。*

* ヴェ・イェ・ポストニコフ『南ロシアの農民経済』を参照。(六六)
ヴェ・イリイン『資本主義の発展』、第二章第一節を参照。

資本主義的農業における大経営の小経営にたいする優越性にかんするカウツキーの議論を、ブルガコフ氏はきわめて不十分にしか叙述していない。大規模農業の優越性は、たんに、耕作面積の無駄がより少ないこと、役畜と農具が節約されること、それらがより完全に利用されること、機械使用の可能性がより広範なこと、信用を受けるのがより容易なことにあるばかりでなく、さらに、大経営が商業上の優越性をもつことや、大経営が科学教育を受けた経営指導者を使用することにもある(カウツキー、一〇四ページ)〔一七五ページ〕。大規模農業は、労働者の協業と分業をより大規模に利用する。カウツキーがとくに重要な意義を付与しているのは、農業経営者の科学的農学教育である。「完全に科学的教育を受けた農業経営者を活用できるのは、経営の指導と監督で一人の労働力が手一杯になるほどに大きな経営だけである」(九八ページ〔一七二ページ〕、「この大きさは」ぶどう栽培の場合の三ヘクタールから粗放経営の場合の五〇〇ヘクタールにいたるまで「経営の種類によって変化する」)。そのさいカウツキーは、下級および中級の農学校の普及によって利益を得るのは農民ではなくて、使用人の供給を受ける大規模経営者であるという(これと同じことはロシアでも見うけられる)、興味ぶかい、そしてきわめて特徴的な事実を指摘している。「完全に合理的な経営が必要とするあの高等教育は、農民の今日の生存条件とあいいれない。こういったからといって、もちろん、非難されるのは高等教育ではなく、農民の生活条件である。それが意味するのは、農民経営が大経営に対抗してやってゆけるのは、その能率が高いからではなくて、欲求が小さいことにもとづく、ということにほかならない」(九九ページ)〔一七五ページ〕。大経営は、たんに農民の労働力ばかりでなく、欲望の水準が比較にならないほど高い都市労働力をも雇わなければならないのである。

カウツキーが「小経営における過度労働と過少消費」を立証するものとしてもちだしている、最高度に興味ぶかくて重要な資料を、ブルガコフ氏は「若干の(!)手あたりしだいの(??)引用文」とよんでいる。ブルガコフ氏は、それと同じだけの数の「正反対の性格の引用文」をあげる

ことに「とりかかっている」。だが彼は、次のことを言うことだけは忘れている。それは、彼もまた正反対の主張を開陳し、それをこの「正反対の性格の引用文」によって立証しようとしているのではないのか、という点である。そここそがまさに肝心な点なのだ！　ブルガコフ氏は、資本主義社会における大経営が農民経営と異なる点は働き手の過度労働と切りつめた消費とにある、と主張しようとしかかっているのではないのか？　ブルガコフ氏は十分に慎重だから、そのようなこっけいな主張を開陳したりはしない。彼は農民の過度労働と消費切りつめの事実を、「ある地方では農民は裕福な暮しをしており、他の地方では貧しい暮しをしている!!」と指摘することで、避けてとおることができる、と考えているのである。小経営と大経営との状態にかんする資料を一般化するかわりに、あれこれの「地方」の住民の「裕福さ」の差の研究に着手するような経済学者のことを、諸君はどう言うであろうか？　工場労働者とくらべての家内工業者の過度労働と消費切りつめの事実を、「ある地方では家内工業者は裕福な暮しをしており、他の地方では貧しい暮しをしている」と指摘をすることで、避けて通る経済学者のことを、諸君はどう言うであろうか？ついでながら、家内手工業者について述べておこう。ブルガコフ氏はこう書いている。「どうやら、カウツキーの胸中には、過度労働が」（農業のように）「技術的限界をもたないHausindustrie〔家内工業〕との相似が思いうかんだのだろう。だが、この相似は、ここでは役に立たない」。これにたいしてわれわれはこう答えよう、――どうやらブルガコフ氏は、自分が批判している書物にたいして驚くほど不注意だったようだ。なぜなら、Hausindustrieとの相似は、「カウツキーの胸中に思いうかんだ」のではなくて、過度労働の問題をあつかった節の最初のページ（第六章、第二節、一〇六ページ）〔一八六ページ〕で彼によって直接かつ正確に次のように指摘されているからである。「家内工業（Hausindustrie）におけると同様に、小農民経営においても、児童の家族労働は、他人のもとでの賃労働よりもっと有害である」。ブルガコフ氏が、この相似はここでは役に立たないとどんなに決然と断言しようとも、それでもやはり彼の見解は完全にまちがっている。工業では過度労働に技術的限界はないが、農民にとっては過度労働は「農業の技術的条件によって制限されている」、――ブルガコフ氏はこう論じている。実際に技術と経済とを混同しているのは、いったいだれだろうか、カウツキーなのか、それともブルガコフ氏なのか？　諸事実は、小生産者が、農業でも工業でも、より年少のころから児童を労働に駆りたて、自身一日により長時間働き、「より質素に」暮らし、

文明国のなかでまったくの「野蛮人」（マルクスの表現）として他と区別されるほどに自分の欲求を切りつめていることをものがたっているときに、農業なり家内手工業なりの技術がなんの関係があるのか？　農業には多くの特殊性があること（カウツキーはそのことをいささかも忘れてはいない）を根拠にして、農業と工業における似かよった現象が経済学的に同種のものであることを否定することが、はたして可能であろうか？　「小農は、たとえ働きたいと思っても、自分の耕地が要求する以上に働くことはできない」——ブルガコフ氏はこう言っている。だが小農は、一日に一二時間はおろか一四時間ずつも働けるし、現に働いており、また、正常な場合よりもはるかに急速にその神経や筋肉を疲れはてさせてしまうほどの異常な緊張度で働けるし、現に働いている。さらにまた、農民のすべての仕事を畑仕事だけに帰着させるとは、なんというまちがった、誇張された抽象であろう！　カウツキーには、そのようなことはすこしも見あたらない。農民は家事のためにも働くし、百姓小屋や家畜小屋や農具などの建造と修理のためにも働いていて、しかも大経営の賃金労働者ならば通常の支払を要求するこの追加労働をいっさい「計算しない」ことを、カウツキーは非常によく知っている。農民——小農耕者——にとっては、小工業者——工業者でありさえすればどんな小工業者であろうと——にとってよりも、過度労働は比べものにならないほど限界の広いものであることは、偏見のない者ならだれにでも明白ではなかろうか？　すべてのブルジョア著述家が口をそろえて、労働者の「怠惰」と「無駄使い」を非難しながら、農民の「勤勉」と「倹約」を証明していることからも、小農耕者の過度労働は普遍的な事実として明瞭に立証されている。

カウツキーが引用している、ヴェストファーレンの農村住民の生活の一調査者はこう言っている、——小農は、自分の子供たちに法外に多くの労働を負わせ、その結果子供たちの肉体的発達がはばまれるが、そうしたいまわしい側面は賃労働にはない、と。イギリスの農村生活を調査した（一八九七年）議会委員会にたいして、リンカーンの一小農はこう言明した。「私は家族全員を養育し、半死半生になるほど彼らを酷使した」。また他の者は「私は子供たちといっしょに一八時間働く、平均すれば一〇—一二時間働く」と言い、さらに他の者は「われわれは日雇いよりも激しく働く、われわれは奴隷のように働く」と言っている。リード（Read）氏はこの同じ委員会で、狭義の農業が優勢な地方の小農の状態を次のように特徴づけている。「彼がもちこたえるための唯一の方法は、日雇いの二人分働いて一人分しか支出しないことである。彼の子供たちは、

日雇いの子供よりもこきつかわれ、彼らよりもわずかしか養育を受けない」(『王立農業委員会最終報告書』、三四および三五七ページ。カウッキーがその著書の一〇九ページ〔一九二ページ〕に引用)。ブルガコフ氏は、日雇いはそれにおとらずしばしば農民二人分働く、と主張しようとしているのではなかろうか。だが、カウツキーが引用した、「農民の節食術(Hungerkunst)が小経営の経済的優越をもたらしうる」ことを示す次の事実は、とくに特徴的である。バーデンの二つの農民経営の収益性を対比すると、一方の、大きな経営では九三三マルクの赤字で、他方の、その半分の大きさの経営では一九一マルクの黒字になっている。しかし、もっぱら賃金労働者を使って営まれている第一の経営は、当然のことながら、彼らを養わなければならず、一人あたり一日ほぼ一マルク(約四五コペイカ)を支出していた。ところが小経営では、もっぱら家族員(妻と、六人の成長した子供)が働き、その生活費は前者の半分の貧弱さで、一人あたり一日四八ペンニヒであった。もし小農の家族が大経営の賃金労働者と同じだけよい食事をとっていたとすれば、小経営は一二五〇マルクの赤字を出していたであろう!「その黒字は、ぎっしりつまった穀倉から出てきたのではなく、空っぽの胃袋から出てきたものである」。農業における大経営と小経営との「収益性」の対比を、農民と賃金労働者との消費および労働の内容の仕訳とあわせておこなうならば、このような実例をどんなに多く発見できることであろう。* もう一つ、大経営(二六・五ヘクタール)とくらべて小経営(四・六ヘクタール)のほうが高い収益性をもつことを示す計算がある。それは専門誌の一つのなかでおこなわれている計算である。だがどのようにしてより高い収益が得られるのか?――カウツキーはたずねる。それは、小農耕者の場合は子供たちが手助けする、歩きはじめたばかりのころから手助けするのに、大農耕者の場合には子供たちのために支出をしなければならない(小学校、中学校)からである。また小農耕者のところでは、七〇歳以上の老人も「いまなお、完全な労働力のかわりをつとめている」。「普通の日雇いは、ことに大経営では、働きながら、いつになったら仕事じまいになるかな、と考える。ところが小農は、すくなくとも急ぎの仕事の場合には、一日がもう二時間ほど長ければなあ、と考える」。農業雑誌の論文のこの筆者は、われわれに次のように教えている。小生産者は、急ぎの仕事のときには、時間をよりよく利用する。「より早く起き、よりおそく床にはいり、よりすばやく仕事をするが、大経営者では、労働者は、そういうときでも、他の日よりも早く起き、おそく床にはいり、緊張して働こうとは思わない」。農民が純所

得を得ることができるのは、彼の「粗末な」生活のおかげである。彼は、主として家族の労働によって建てられた粘土小屋に住んでおり、細君は一七歳で嫁いできたが、それ以来たった一足の靴を履き古しており、たいていのときははだしか木靴で歩いており、家族の衣服も彼女自身が縫ってやる。食物はジャガイモとミルク、そしてまれに、ニシンである。夫は、日曜日にだけタバコを一服する。「これらの人は、彼らがとくに粗末な暮しをしているのだとは思わず、自分たちの状態に不満を表明しない……。これらの人は、このような粗末な生活様式によって、ほとんど毎年その経営からわずかばかりの剰余を手に入れるのである」。

＊ ヴェ・イリイン『ロシアにおける資本主義の発展』、一一二、一七五、二〇一ページを参照。(三〇)

四

資本主義的農業における大経営と小経営との相互関係の分析を終えたのち、カウツキーは「資本主義的農業の限界」（第七章）の特別な解明に移っている。カウツキーは言う、――大規模農業の優越性の理論にたいしては、主として、ブルジョアジーの隊列のなかの「人類の友」（もうすこしで――人民の友と言うところだった……）や、生粋の自由貿易論者や、農本主義者が反対して立ちあがっている。最近では、多くの経済学者が小規模農業の肩をもった発言をしている。通常、大経営による小経営の駆逐が生じてはいないことを示す統計が引合いに出される。そこでカウツキーも統計資料をあげている。ドイツでは、一八八二年から一八九五年までのあいだに中規模経営の占める面積が最も多く増大し、フランスでは、一八八二年から一八九二年までのあいだに最小規模と最大規模の経営の占める面積が最も多く増大し、中規模経営の占める面積は減少した。イギリスでは、一八八五年から一八九五年までのあいだに最小規模と最大規模の経営の占める面積が減少し、四〇―一二〇ヘクタール（一〇〇―三〇〇エーカー）の規模の経営、すなわち小規模経営には入れられない経営の占める面積が最も多く増加した。アメリカでは、農場の平均面積は、一八五〇年――二〇三エーカー、一八六〇年――一九九エーカー、一八七〇年――一五三エーカー、一八八〇年――一三四エーカー、一八九〇年――一三七エーカーと、低下している。カウツキーはアメリカの統計資料をさらに立ちいって考察しているが、彼の分析は、ブルガコフ氏の意見とは反対に、重要な原則的意義をもっている。農場の平均規模の縮小の主要な原因は、黒人解放後における南部の巨大な植栽農場（プランテーション）の細分化であって、南部諸州では農場の平均

規模は半分以下に縮小した。「事物に精通した人ならだれ一人として、これらの数字を近代的」（＝資本主義的）「大経営にたいする小経営の勝利とは見ないだろう」。一般に、アメリカの統計資料を個々の地方別に検討すると、多くの多種多様な関係が見いだされる。中央北部地帯、すなわち主要な「小麦諸州」では、農場の平均規模は一二二エーカから一三三エーカーに増大した。「農業が衰微しているか、あるいは前資本主義的大経営が農民的経営との競争にはいっているところでだけ、小経営は優勢を保持している」（一三五ページ）（一三五ページ）。カウツキーのこの結論は、非常に重要である。なぜなら、彼は、それなくしては統計の使用がそれの濫用にしかなりかねない条件を、指示しているからである。すなわち、資本主義的大経営を前資本主義的なそれから区別しなければならないということである。農業の形態の点でも、農業発展の歴史的条件の点でも、本質的な特殊性を異にしている個々の地方について、細部にわたって調査しなければならない。「数字が証明する」！と人は言う。だが、いったいなにを数字が証明するのかを、まさに解明する必要がある。数字は、それが直接に語ることしか証明しない。数字が直接に語っているのは、生産の規模ではなくて、経営の面積である。ところが、「集約的に経営されている小さな所有地が、広大な粗放的に経営されている所有地よりも大きな経営でありうる」ことは可能であるし、また実際にもそういうことがある。「経営の面積についてしか情報をあたえない統計は、経営面積のときおりの縮小が、経営の実際の縮小にもとづくものか、あるいは経営の集約化にもとづくものかという問題について、まったくなにも明らかにしない」（一四六ページ）（二五三ページ）。森林経営と放牧経営、すなわち資本主義的大経営のこれらの最初の形態では、どれほど大きな所有地面積があってもいい。ところが耕種農業となると、それはもはやより小さな経営面積しか必要としない。さらに、耕種農業でもその方式が異なれば、必要な経営面積がそれぞれ異なる。略奪的な、粗放な経営方式（これは今日にいたるまでアメリカで優勢であった）は、巨大農場であってもよい（ダーリンプル氏やグレン氏などの bonanza farms[80]（大穀作農場）のように、一万ヘクタールにもおよぶものがある。わが国のステップ地帯においても、農民の作付地は――商人の作付地はなおのこと――このような規模にたっしている）。施肥その他をおこなうようになると、経営面積は必然的に小さくなる。たとえば、ヨーロッパでは経営面積はアメリカにおけるよりも狭い。耕種を主とする経営方式から畜産を主とする経営方式に移ると、経営面積の縮小がさらに必要になる。一八八〇年のイギリスでは、畜産

経営の平均規模は五二・三エーカーであったが、耕種の穀作経営のそれは七四・二エーカーであった。だから、イギリスでいまおこなわれつつある農耕から畜産への移行は、経営面積が縮小する傾向を生みださずにはおかない。「だが、このことから大経営の衰退という結論をくだそうとするならば、それはきわめて皮相な判断だといえよう」(一四九ページ)(二五八ページ)。オストーエルベ(ブルガコフ氏はこの地方の研究によって、そのうちにカウツキーを論破しようと期している)では、まさに集約的経営への移行が生じている。カウツキーが引用しているゼーリングは次のように言っている、——大きな農耕者は、所有地のうちの遠隔な部分を農民に売却または賃貸することによって、自分の土地の生産性を高めている。というのは、集約的な経営のもとではこれらの遠隔な部分を有効に利用することは困難だからである。「こうして、オストーエルベの大所有地は縮小され、それとならんで小さな農民的経営がつくりだされている。それは、小経営が大経営よりもすぐれているからではなくて、従来の所有地の規模が粗放経営に適するものだったからである」(一五〇ページ)(二五九ページ)。これらすべての場合における経営面積の縮小は、普通、生産物量の増加(単位面積あたりの)をもたらし、またしばしば、そこで働く労働者数の増加、すなわち生産規模の実際上の拡大をもたらしている。

経営面積にかんする農業統計の一般的資料がどれほどわずかな証明力しかないか、またこの資料を利用するにはどれほどの慎重さがなければならないかは、以上述べたことから明瞭である。工業統計の場合には、われわれは生産規模の直接の諸指標(商品の量、総生産額、労働者数)をとりあつかって、それで個々の生産部門を容易に区別することができる。農業統計は、証明に必要なこれらの条件をきわめてまれにしか満たしていない。

次に、土地所有の独占が農業資本主義にたいして限界をおいている。工業では資本は蓄積によって、剰余価値の資本への転化によって、増大する。集中、すなわち、いくつかの小資本の一つの大資本への統合は、それよりも小さな役割しか演じない。農業ではそうではない。土地はすべて(文明諸国では)占有されており、経営面積の拡張は、いくつかの地片の集中によらなければ、しかもそれらの地片が一つのまとまった地所となるようでなければ、可能でない。もちろん、周囲の地所の買占めによって所有地を拡張することは、非常に困難なことであり、ことに、それらの小さな地所は、一部分は(大経営者にとって必要な)農業労働者が占有しているし、一部分は、異常で信じがたいほどの欲望の切りつめによって生活してゆく技術を身につけ

ている小農が占有しているため、なおさらである。この、農業資本主義の限界を示す、単純で白日のように明らかな事実の確認が、なぜかブルガコフ氏には「空文句」(??!!)と思われて、「このように(!)、大経営の優越性は最初の障害物にあたってうちくだかれる(!)」という、まったく根拠のない歓呼の声をあげる機縁となったのである。ブルガコフ氏は、はじめに、大経営の優越性の法則をまちがって理解し、この法則はあまりにも抽象的であるとした。カウツキーはそのような抽象性からは遠くかけはなれているのだが、いまでは、氏は自分の無理解をカウツキーに反対する論拠にしているのだ! アイルランド(大土地所有はあるが、大経営はない)を引合いに出すことによってカウツキーを論破できるとしているブルガコフ氏の見解は、極度に奇妙である。大土地所有は大経営の条件の一つであるということからは、それが十分な条件であるということにはけっしてならない。農業における資本主義一般にかんするこの著作では、カウツキーは、もちろん、アイルランドまたはその他の国の特殊性の歴史的原因やその他の原因を考察することはできなかった。マルクスが工業における資本主義の一般的法則を分析するさいに、彼にたいして、なぜフランスでは小工業がより長期間存続しているのかとか、なぜイタリアでは工業の発展が微弱であるのか、等々の説明を求めようとは、だれひとり思わないであろう。それとまったく同様に、集積は徐々に進行する「かもしれない」というブルガコフ氏の指摘も、根拠がない。隣人の地所を買い足すことによって所有地を拡張するということは、追加の工作機などのために工場に新しい建物を増築するように簡単なことではないのである。

大経営の形成のための集積あるいは借地が徐々にすすむという、この純粋に仮空な可能性を持ちだすブルガコフ氏は、集積過程における農業の現実の特殊性――カウツキーが指摘した特殊性――に、ほとんど注意を払わなかった。その特殊性とは巨大私有農地であり、数個の所有地が一人の手中に集められることである。統計は、普通、個々の所有地をかぞえあげるだけで、別々の所有地が大土地所有者の手に集中される過程については、なんらの情報もあたえない。カウツキーは、ドイツとオーストリアについて、そのような集中のきわめてはっきりした実例をつたえているが、この集中は資本主義的大農業の独特な最高の形態をもたらし、いくつかの大所有地が、一つの中央機関によって管理される一つのまとまった経営に一体化するようになっている。このような巨大な農業企業は、きわめてさまざまな農業部門を結合して、大経営の利点を最大限に利用することを可能にする。

読者が見られるように、カウツキーはけっして彼が信奉している「マルクスの理論」を抽象的に理解したり紋切型に理解したりはしていない。カウツキーは、こうした紋切型の理解をしないように注意して、いまわれわれが考察している章のなかに、工業における小経営の没落にかんする特別の一節さえ挿入している。彼は、大経営の勝利は、工業においても、マルクスの理論を農業に適用することはできないと言う人々が通常考えているほど簡単なものでも、それほど一様な形態で進行するものでも、けっしてないことを、非常に正しく指摘している。ここでは、資本主義的家内労働を指摘すれば十分であり、工場制度の勝利をあいまいにしている過渡的形態と混合形態との極度の雑多さについていてすでにマルクスがあたえている注意を思いだせば、十分である。農業では事態はその何倍も複雑である！　たとえば、富とぜいたくが増大すると、百万長者たちは広大な土地を買い占めて、これを自分の娯楽のための森林に変える、ということにもなる。オーストリアのザルツブルグでは、牛の頭数が一八六九年以降減少している。その原因は、アルプス〔の放牧地〕が富豪の狩猟愛好家たちに売られたからである。カウツキーがすこぶる適切に言っているように、もし農業統計の資料を大ざっぱに無批判にとりあげるなら、資本主義的生産様式は近代的国民を狩猟種族に転化させる傾向をもつことを発見するのに、なんの苦労もいらないだろう！

最後に、カウツキーは、資本主義的農業に限界をおく条件の一つとして、次の事情をも指摘している。すなわち、労働者の不足——住民の離村の結果として——が大経営者に、労働者への土地の分与や、地主に労働力を提供する小農の創設に努めることを余儀なくさせる、という事情である。完全に無所有な農村労働者というものは、まれにしかいない。なぜなら、農業では、厳密な意味での農業経営が家計と結びついているからである。あらゆる範疇の農業賃金労働者が、土地を所有しているか、あるいは用益している。小経営があまりにはげしく駆逐されるときには、大経営者は、土地の売却または賃貸によって小経営を強化あるいは復興させようと努力する。カウツキーが引用しているゼーリングはこう言っている。「ヨーロッパのすべての国で……農村労働者に土地を分与することによって彼らを定住させようとする運動が最近台頭している」。このように、資本主義的生産様式の限界内では、農業における小経営の完全な駆逐は予期できない。なぜなら、農民層の零落があまりにもすすむときは、資本家や大地主自身が小経営を復興させようと努力するからである。マルクスはすでに一八五〇年に『新ライン新聞』で、資本主義社会における土地

の集中と細分化とのこの循環を指摘している。(九九)

ブルガコフ氏は、カウツキーのこの試論には「一片の真理もあるが、それ以上に誤解がある」と見ている。ブルガコフ氏のそのほかのすべての宣告と同様に、これも理由づけがきわめて薄弱で、きわめて漠然としている。ブルガコフ氏は、カウツキーは「プロレタリア的小経営の理論をつくりあげた」と見、この理論ははなはだ限られた地域についてだけ正しいと見ている。われわれは、それとは違う意見をもつ。小農耕者の農業賃労働（あるいは、同じことだが、分与地を持つ雇農と日雇いの型）は、程度の差こそあれ、すべての資本主義に固有の現象である。農業における資本主義を描写しようと望む著述家ならだれでも、真理にそむくことなしにこの現象をあいまいにしておくことはできないであろう。*とくにドイツではプロレタリア的小経営は普遍的な事実である。このことをカウツキーは、その著書の第八章「農民のプロレタリア化」でくわしく立証したのである。「労働者の不足」については、カブルーコフ氏をもふくめた他の著述家たちも語っていたというブルガコフ氏の指摘は、最も重要なことを、すなわち、カブルーコフ氏の理論とカウツキーの理論とのあいだの絶大な原則的差異を、あいまいにするものである。カブルーコフ氏は、彼特有の Kleinbürger 的〔小ブルジョア的〕観点の結果、労働者の不足ということから、大経営は根拠が弱く小経営は生活能力があるという理論を「つくりあげている」。カウツキーは、事実を正確に特徴づけ、近代の階級社会においてそれらの事実がもつ真の意義を指摘している。すなわち、土地所有者の階級的利害が彼らに、労働者への土地の分与に努めることを余儀なくさせているのである。分与地をもつ農業賃金労働者の階級的立場は、彼らを小ブルジョアジーとプロレタリアートとの中間に、だが後者にいっそう近い立場におく。言いかえると、カブルーコフ氏は、複雑な過程の一側面を、大経営は根拠が弱いという理論に高めてしまうのであるが、カウツキーは、大経営の一定の発展段階で、また一定の歴史的状況のもとで、大経営の利害がつくりだす社会・経済的諸関係の特殊な諸形態を分析しているのである。

* 『ロシアにおける資本主義の発展』、第二章第一二節一二〇ページを参照。(一〇〇)フランスでは農村労働者の約七五％が自分の土地を持つと考えられている。この章には他の実例もある。

五

カウツキーの著書の次の章にうつろう。その章の標題はたったいま引用したばかりである。カウツキーはここで、第一に、「土地の細分化の傾向」を、第二に、「農民の副業

の諸形態」を研究している。このように、この章では、大多数の資本主義諸国に特有な、農業資本主義のきわめて重要な傾向が描かれている。カウツキーは言う、――土地の細分化は小さな地所にたいする小農の需要を強め、彼らは大経営者よりも高い値段で土地を買う。こののちの事実は、若干の著述家によって、小規模農業が大規模農業よりすぐれていることの確証としてあげられるところである。カウツキーはこれにたいして、土地価格を住宅価格になぞらえて、非常に適切にこう答えている。すなわち、周知のように、小さくて安い住宅は、容積一単位あたり(一立方サージェンなど)で計算すると、大きくて高価な住宅よりも高くつく。小さな地所の価格が高いのは、小規模農業が優越しているからではなくて、農民がとくに抑圧された状態にあるからである。資本主義がどれほど大量の極小経営を出現させたかは、次の数字で明らかである。ドイツでは(一八九五年)、五五〇〇万の農業企業のうち四二二五万は、すなわち四分の三以上は、五ヘクタール未満の土地しかもっていない(五八%は二ヘクタール未満である)。ベルギーでは〔一八八〇年〕、七八%(九〇・九万のうち七〇・九五万)が二ヘクタール未満である。イギリスでは(一八九五年)、五二万のうち一一・八万が二ヘクタール未満である。フランスでは(一八九二年)二二〇万(五七〇万のうち)が一ヘクタール未満であり、四〇〇万が五ヘクタール未満である。ブルガコフ氏は、これらの極小経営は極度に非合理的である(家畜・農具・貨幣の不足、兼業の手間かせぎのため引き抜かれることからくる労働力の不足)という カウツキーの主張を論駁しようとして、たとえ……「労働力の支出は極度に非合理的で」あっても……土地は「非常にしばしば」(??)犂によって「信じられないほどの集約度をもって」耕されている、ということを引合いに出している。言うまでもなく、この反論はまったくなりたたない。小経営のほうが収益性が高いことを示す前述の実例が、大経営の優越という命題を論破するものではないのと同様に、小農民のほうが土地耕作がすぐれていることを示す個個の実例は、カウツキーがあたえたこの型の経営の一般的特徴づけを論破することはできない。これらの経営は大体において「プロレタリア的経営であるとしたカウツキーが完全に正しいことは、一八九五年のドイツのセンサスが明るみに出した次の事実、すなわち、多数の小経営は兼業の手間かせぎなしではやってゆけないという事実から、はっきりわかる。農業で自活している者の総数四七〇万人のうち、二七〇万人すなわち五七%が、副業の手間かせぎをもっている。二ヘクタール未満の土地を持つ三二〇万の経営のうち兼業の手間かせぎを持たないのはわずかに四〇万すなわ

ち一三％である！　ドイツ全体で五五〇万の農業経営のうち一五〇万は、農工業の賃金労働者に属している（これに七〇・四万の手工業者がくわわる）。これでもなおブルガコフ氏は、プロレタリア的小土地所有の理論はカウツキーが「つくりあげた」ものだとあえて主張するのである！＊＊農民のプロレタリア化の諸形態（農民の副業の諸形態）を、カウツキーはきわめて詳細に研究している（一七四—一九三ページ）〔三〇一—三三二ページ〕。残念ながら紙面が許さないので、これらの形態（農業賃労働、家内工業——Hausindustrie——すなわち「資本主義的搾取の最も醜悪な制度」、工場や鉱山での労働、その他）の特徴づけに、くわしく立ちいることはできない。ただ、カウツキーが出稼ぎにたいしてあたえている評価は、ロシアの学者があたえているのとまったく同じであることを、特筆するだけにしておこう。都市の労働者よりも未発達で欲望も低い出稼ぎ労働者は、都市労働者の生活条件に有害な影響をあたえることがまれではない。「しかし、彼らがそこから出てきて、ふたたび戻ってゆくところでは、彼らは進歩の〔……〕先駆者となる。……彼らは新しい欲求、新しい思想を受けいれる」（一九二ページ）〔三三一ページ〕。彼らは、人里はなれて住む農民層のあいだに、人間の価値についての自覚と感覚をめざめさせ、自分の力にたいする自信をめざめさせるのである。

＊　われわれは、「大体において」ということを強調しておく。なぜなら、個々の場合には、わずかばかりの面積の土地しか持たないこれらの経営が多くの生産物と収入をあげることもあるということは、もちろん、否定できないからである（ぶどう園、菜園、など）。しかし、たとえば、馬がなくてもときとして合理的で儲けのある農業を営んでいるモスクワ近郊の野菜栽培者を例にとって、ロシアの農民の馬の喪失の例証を論破しようとするような経済学者のことを、諸君はどう言うであろうか？

＊＊　ブルガコフ氏は一五ページの注で、カウツキーは、穀物価格にかんする書物の著者たちの誤り〔一〇一〕を繰りかえして、大多数の農村住民は穀物関税に関心がないと考えている、と言っている。この意見にもわれわれは同意できない。穀物価格にかんする書物の著者たちは多くの誤りをおかしているが（それについて私は前掲書のなかで再三指摘している）、多くの住民が高い穀物価格に関心を持たないという事実を認める点では、なにも誤りはない。誤っているのは、大衆のこの関心から社会発展全体の利益を直接に結論することにある。トゥガン－バラノフスキーとストルーヴェの両氏が、穀物価格を評価する基準は、その価格が資本主義による雇役の駆逐を多少とも急速に進行させるかどうか、その価格が社会の発展を促進するかどうかという点になければならない、と指摘したのは正しい。これは事実の問題であって、私はこの問題をストルーヴェとは違う仕方で解決する。私は、農業で資本主義の

発展が遅れているという事実は低価格の結果だということは、けっして立証されないと考える。反対に、農業機械製作のとくに急速な発展と、穀物価格の低落が農業の専門化にあたえる刺激とは、低価格がロシア農業における資本主義の発展を推進するものであることを示している（『ロシアにおける資本主義の発展』、一四七ページ、第三章第五節の注二を参照）[101]。穀物価格の低落は、農業におけるその他すべての関係に深刻な変革的影響をあたえるのである。

ブルガコフ氏は、「耕作の集約化の重要な条件の一つは穀物価格の引上げである」と言っている（ペ・エス〔・ストルーヴェ〕氏も、同じ『ナチャーロ』誌の二九九ページの『国内展望』で、同じことを言っている）。これは不正確である。マルクスが『資本論』第三巻第六篇で示したように、土地に投下される追加資本の生産性は低下することがありうるが、向上することもありうるし、また、穀物価格が低下して地代も下落することがありうるが、上昇することもありうるのである。したがって、集約化は——さまざまな歴史的時代にいろいろな国で——穀物価格の高さとはかかわりなく、まったくさまざまな条件によって引きおこされうるのである。

最後に、カウツキーにたいするブルガコフ氏の最後の、とくに激しい攻撃について立ちいって論じよう。カウツキーは、ドイツでは一八八二年から一八九五年までに、数のうえで最も急激に増加したのは最小の（面積の点で）経営と最大の経営であった（土地の零細化が中経営を犠牲として進行するため）、と言っている。そして実際に、一ヘクタール未満の経営数は八・八％、五ヘクタール以上二〇ヘクタール未満の経営の数は七・八％増加し、他方、一〇〇〇ヘクタール以上の経営の数は一一％増加した（中間の部類はほとんど変化せず、農業経営の総数は五・三％増加した）。ブルガコフ氏は、とるにたりない数の最大規模の経営（上記の両年に五一五と五七二）の百分率がとりあげられていることに、ひどく憤慨している。ブルガコフ氏の憤慨は、まったく根拠がない。彼は、数のうえではとるにたりないこれらの企業が最も大規模なものであること、それらは二三〇万—二五〇万の極小経営（一ヘクタール未満）とほとんど同じだけの土地を占めていることを、忘れている。もし私が、ある国で工場の総数の増加は五・三％であったのにたいして、一〇〇〇人以上の労働者をもつ最大規模の工場の数は、たとえば、五一から五七へ一一％がた増加したと言うとすれば、それは、最大規模の工場の数は工場総数とくらべればとるにたりないにもかかわらず、やはり大経営の成長を示すものではないだろうか？　それが占める面積の割合からすれば、最も増大したのは五ヘクタール以上二〇ヘクタール未満の農民経営であったという事実（ブルガコフ氏、一八ページ）を、カウツキーはよく知っていて、次の章でそれを考察しているのである。

カウツキーはさらに、一八八二年と一八九五年におけるさまざまな部類についても、それが占める面積の変化をとりあげている。最大の増加を見せたのは五―二〇ヘクタールの農民経営であり（五六三、四七七ヘクタールの増加）、次は一〇〇〇ヘクタール以上の最大規模の経営であり（九四、〇一四ヘクタールの増加）、他方、二〇―一〇〇〇ヘクタールの経営の占める面積は八六、八〇九ヘクタール減少した。一ヘクタール未満の経営はその占める面積を三二、六八三ヘクタールだけ、一―五ヘクタールの経営は四五、六〇四ヘクタールだけ増加させた。

そしてカウツキーは次のように結論している。二〇ヘクタール以上一〇〇〇ヘクタール未満の経営の占める面積の減少（一〇〇〇ヘクタール以上の経営の占める面積の増加によって、この減少はつぐなわれてあまりがある）は、大経営の衰退によるものではなくて、その集約化によるものである、と。この集約化がドイツでなお進行中であること、そしてこの集約化がしばしば経営面積の縮小を要求することは、われわれがすでに見たところである。大経営の集約化が生じていることは、蒸気力機械の使用が増加していることからわかるが、また、ドイツでは大経営だけが使用する農業事務員の数がおびただしく増加していることからもわかる。農場支配人（管理人）、監督、簿記係その他の数は、一八八二年から一八九五年までに四七、四六五人から七六、九七八人へと、六二％増加した。これらの事務員のうち婦人のパーセントは、一二％から二三・四％へ増大した。

「これらすべてのことは、大規模農業経営が八〇年代のはじめ以来どれほど集約的で資本主義的なものとなったかを、明白に示している。なぜ、このこととならんで、ほかならぬ中農経営が面積をあれほども増加させたのかということの説明は、次の章でなされるであろう」（一七四ページ）〔三〇〇ページ〕。

ブルガコフ氏はこの描写のなかに「現実との驚くべき矛盾」を見いだしているが、彼の論拠は今度もまた、このような断固とした大胆な判決をすこしも正当化するものではないのであって、カウツキーの結論をいささかもゆるがせはしない。「なによりもまず、経営の集約化は、もしそれがおこなわれたとしても、それ自身まだ耕地の相対的減少をも絶対的減少をも説明しはしないし、二〇―一〇〇〇ヘクタールの経営のグループの比重全体の減少を説明しはしない。耕地の規模は経営数の増大と同時に増大することもありうる。後者はいくらかより急速に増大するだけ（原文のまま！）にちがいない。そこで、それぞれの経営の面積の規模はより小さくなるであろう*」。

* ブルガコフ氏はさらにもっと詳細な資料をあげているが、それらはカウツキーの資料にまったくなにもつけくわえるところはないのであって、やはり、大所有者の一グループでは経営数が増加した土地面積が減少していることを、示している。

われわれは、ブルガコフ氏が「集約性向上の影響を受けて企業の規模が縮小するというのは、純然たる空想である」（原文のまま！）という結論を引きだすもとになった議論を、ことさら全文書きぬいた。なぜなら、この議論は、カウツキーがあれほど切にいましめていた、「統計資料」の乱用というあの誤りそのものを、くっきりとわれわれに示しているからである。ブルガコフ氏は、経営面積の統計にたいしてこっけいなほどきびしい要求をつきつけ、この統計に、それがけっしてもちえないような意義を付与している。実際、なぜ耕地面積は「いくらか」増大するはずであったのか？ なぜ経営の集約化が（それはときとして、われわれが見たように、中心地からへだたった小さな所有地が農民に売却されたり賃貸されたりする結果をもたらす）、一定数の経営を上級の部類から下級の部類に移す「はず」はなかったのか？ なぜそれが二〇―一〇〇〇ヘクタールの経営の耕地面積を減少させる「はず」がなかったのか？* 工業統計の場合には、最大規模の工場の生産額の減少は大経営の衰退をものがたるであろう。だが、大所有地の面積の一・二％の減少は、生産規模についてはまったくなにごともものがたらないし、またものがたりうるものでもない。生産規模は、経営面積の減少をともないながら増大することもめずらしくないのである。われわれは、ヨーロッパでは一般に畜産経営による穀作経営の駆逐がおこなわれつつあること、それはイギリスでとくに激しいことを、知っている。われわれは、この移行がときには経営面積の縮小を必要とすることを知っている。だが、経営面積の縮小から大経営の衰退を結論することは、奇妙ではなかろうか？ だから、ついでながら言えば、ブルガコフ氏が二〇〇ページに引用しており、大経営と小経営の数の減少と、畑仕事のための家畜を持つ中位の経営（五―二〇ヘクタール）の数の増大を示している「雄弁な表」は、まだまったくなにごとをも証明していない。それは、経営方式の変更によるものであったかもしれないのである。

* 減少は、この部類では一六、九八六、一〇一ヘクタールから一六、八〇二、一一五ヘクタールへ、すなわち、なんと……一・二％である！ これはブルガコフ氏の看取する大経営の「断末魔の苦しみ」を、納得のゆくようにものがたっているのではなかろうか？

** ドイツでは大規模農業経営がより集約的に、またより資

経営規模別	蒸気犂をもつ経営の％	蒸気脱穀機をもつ経営の％
2ヘクタール未満	0.00	1.08
2ヘクタール以上 5ヘクタール未満	0.00	5.20
5ヘクタール以上 20ヘクタール未満	0.01	10.95
20ヘクタール以上 100ヘクタール未満	0.10	16.60
100ヘクタール以上	5.29	16.22

本主義的となったことは、第一に、農業用の蒸気力機械の台数の増加から明らかである。すなわち、それは一八七九年から一八九七年までに五倍に増大した。ブルガコフ氏は彼の反論のなかで、小経営〔二〇ヘクタール未満〕におけるあらゆる機械（だが蒸気力機械ではない）一般の絶対数が大経営におけるよりもはるかに多いこと、ならびに、アメリカでは機械は粗放経営のもとで用いられていることを引合いに出しているが、それはまったく無駄である。いま問題とされているのは、アメリカではなくてドイツであり、ここには bonanza farm〔大穀作農場〕はないのである。ここにかかげるのは、ドイツで蒸気犂と蒸気脱穀機をもつ経営が占めるパーセントにかんする資料（一八九五年）である。

そしていま、ドイツの農業における蒸気力機械の総数が五倍になったとすれば、これは大経営の集約性の増進を立証するものではないだろうか？　ただ、ブルガコフ氏がその著書の二一ページでまたもややっているように、農業における企業の規模の増大はかならずしもつねに経営面積の増大と同じではないということを忘れることだけは、してはならない。

第二に、大経営がいっそう資本主義的なものになったという事実は、農業事務員の数の増加から明らかである。ブルガコフは根拠なしに、カウツキーのこの論証を「珍妙なこと」とよんでいる。「軍隊は縮小しているのに」――農業賃金労働者の数は減少しているのに――「士官の数が増加する」というのである。われわれはもう一度言おう、rira bien qui rira le dernier !*〔最後に笑う者が最もよく笑う！〕農業労働者数の減少のことは、カウツキーは忘れていないばかりか、幾多の国々についてこのことをくわしく示している。だがこの事実だけでは、けっしてここで事に決着がつくものではない。なぜなら、農村人口全体は

減少しているが、プロレタリア的小土地所有者の数は増加しているからである。大地主が穀物の生産から甜菜の生産とそれの砂糖への加工に転換したとしよう（ドイツでは、一八七一／七二年に二二〇万トン、一八八一／八二年に六三〇万トン、一八九一／九二年に九五〇万トン、一八九六／九七年に一三七〇万トンの甜菜が加工された）。彼は、その所有地のうちの遠隔の部分を小農民に売却あるいは貸与したりするかもしれない。彼にとって農民の妻や子供たちが甜菜農場の日雇いとして必要な場合には、とくにそうである。また、大地主が蒸気犂を導入し、これが旧来の犂を駆逐するとしよう（ザクセンの甜菜栽培経営――それは「集約耕作の模範経営」**である――では、蒸気犂がいまでは一般に使用されるようになった）。そうすると、賃金労働者の数は減少するだろう。高級事務員（簿記係、管理人、技師、その他）の数は必然的に増加するだろう。大経営における集約性の増進と資本主義の成長とがここに見られることを、ブルガコフ氏は否定しようとするのであろうか？　彼は、そのようなことはドイツではなにも起こっていないと断言しようとするのであろうか？

* 事務員数の増加は、もしかすると農産物加工業の成長を証明するかもしれないが、大経営の集約性の増進だけは証明しない（！）というブルガコフ氏の意見は、まさしく珍妙である。われわれはこれまで、農業的工業経営の成長（カウツキーはそれを第一〇章でくわしく記述し、評価している）を集約性の増進の最も重要な形態の一つであると考えてきた。

** カウツキーが四五ページ〔八七ページ〕に引用している、ケルガーのことば。

農民のプロレタリア化にかんする、カウツキーの著書の第八章の説明を終えるために、次の箇所を引用しなければならない。カウツキーは、さきにわれわれが引用し、ブルガコフ氏もあげている箇所につづけて、次のように言っている。「ここでわれわれが興味を感じるのは、ドイツでは、中規模の所有地の零細化傾向が作用しなくなったにもかかわらず、農村住民のプロレタリア化は他国でと同様に進行しているという事実である。一八八二年から一八九五年までのあいだに、農業経営の総数は二八一、〇〇〇だけ増加した。しかしそのうちの圧倒的大部分は一ヘクタール未満のプロレタリア的経営の増加である。これらは二〇六、〇〇〇だけ増加した。

「人の知るように、農業の運動はまったく独特のものであって、工業資本や商業資本の運動とはまったく異なっている。前章でわれわれが指摘したことであるが、農業では経営の集中化の傾向は小経営の完全な絶滅にはみちびかず、かえって、あまりにもすすみすぎると、それは反対の傾向

を生みだし、集中化の傾向と零細化の傾向とがたがいに交替しあうようになる。いまやわれわれは、この両傾向があいならんでも作用しうることを見る。小経営の数は増加し、その所有者はプロレタリアとして、労働力の売り手としてより商品市場に現われる……。労働力商品の売り手としては、これら小農業経営主は、商品市場ではすべての決定的利害を工業プロレタリアートとともにしており、彼らの土地所有によって工業プロレタリアートと対立状態におちいることはない。過小農の土地所有は、彼を多少とも生活手段の商人から解放しはするが、しかしそれは、資本主義的企業家――工業企業家であろうと農業企業家であろうと――による搾取から彼を解放しはしない」（一七四ページ）〔三〇〇―三〇一ページ〕。

次の論文でわれわれは、カウツキーの著書の残りの部分を叙述し、ブルガコフ氏がその後の論文でおこなっている反論をついでに考察しながら、カウツキーの著書の全般的な評価をおこなうことにしよう。

第二論文

一

カウツキーは、その著書の第九章（『商業的農業の困難の増大』）で、資本主義的農業に特有の諸矛盾の分析にうつっている。ブルガコフ氏がこの章にたいしておこなっている反論――それをこれからわれわれは考察するのであるが――から見て、この批判者がこれらの「困難」の一般的意義を十分に正しくは理解していないことがわかる。合理的な農業の完全な発展にとっての「障害」を成すと同時に、資本主義的農業の発展に刺激をあたえる、というような「困難」がある。たとえば、そういう「困難」の一つとして、カウツキーは農村の人口減少を指摘している。最も優秀で最も知的な働き手たちの離村が、合理的な農業の完全な発展にとっての「障害」であることは疑いないが、農業経営主が技術を発展させることによって、たとえば機械の導入によって、これらの障害とたたかうことも、同様に疑いないところである。

カウツキーは、次のような「困難」を研究している。（イ）地代、（ロ）相続権、（ハ）相続権の制限、長子相続

制（信託遺贈、Anerbenrecht〔一子相続権〕）、（ニ）都市による農村の搾取、（ホ）農村の人口減少、がそれである。[103]

地代は、剰余価値のうち、経営に投下された資本にたいする平均利潤を控除したのちに残る部分である。土地所有の独占は、この剰余を自分のものにする可能性を土地所有者にあたえる。そのさい土地価格（＝資本化された地代）は、ひとたび到達された地代の高さを固定させる。地代が農業の完全な合理化を「困難にする」ことは、明らかである。すなわち、借地農業制度のもとでは改良その他への刺激が弱められるし、不動産抵当制度のもとでは資本のより大きな部分を、生産にではなく、土地の購入に投下しなければならなくなる。ブルガコフ氏は彼の反論のなかで、第一に、不動産抵当債務の増大は「なんらおそるべきこと」ではない、と指摘している。彼は、カウツキーがすでに、「ほかの意味で」ではなく、まさにこの意味で、農業が繁栄している場合でも不動産抵当の増大が必然であると指摘していることだけは、忘れているのである（前出、第一論文第二節を参照）。いまカウツキーが問題を提起しているのは、不動産抵当の増大が「おそるべきこと」であるかないかという点についてではけっしてなくて、どのような困難が資本主義にその使命を完全に果たすことを許さないのかという点についてである。第二に、ブルガコフ氏の意見によれば、「地代の増大をたんに障害とのみ見ることは正しくあるまい。……地代の増大、その上昇の可能性は、農業にとっては、技術的進歩やその他いっさいの進歩を促進する独自な刺激である」（過程（プロツェス）とあるのは、明らかに進歩（プログレス）の誤植である）。資本主義的農業の進歩への刺激は、人口の増加、競争の増大、工業の成長であって、地代はといえば、これは社会の発展から、また技術の発達から、土地所有が徴収する貢物である。だから、地代の増大を進歩への「独自な刺激」と宣告するのは、正しくない。理論的には、資本主義的生産が私的土地所有の欠如すなわち土地国有と両立することは、完全に可能である（カウツキー、二〇七ページ）〔三五五ページ〕。そのときには、絶対地代はまったく存在しないであろうが、差額地代は国家の手にはいるであろう。農業の進歩への刺激はそのさい弱まるどころか、かえっていちじるしく強まるであろう。

カウツキーは次のように言っている。「土地価格をつりあげ（in die Höhe treiben）たり、それを人為的に高く維持することが、農業の利益になると考えることほど、まちがったことはない。それは現在の（augenblicklichen）土地所有者、不動産抵当銀行および土地投機者たちの利益にはなるが、けっして農業の利益にはならないし、また農業の将来の、農業経営者の次の世代の利益にはいっそうな

らない」(一九九ページ)〔三四一ページ〕。土地価格は資本化された地代なのである。

商業的農業の第二の困難は、それが必然的に土地の私有を要求することにある。だがその結果、相続による移転にさいして、土地は、細分されるか(そして土地のこの零細化は、あちこちで技術的退歩さえもたらす)、あるいは不動産抵当の重荷を負わされる(土地を入手した相続人が土地を抵当に入れて貨幣資本を借り、それを他の共同相続人に支払う場合)こととなる。ブルガコフ氏は、カウツキーが土地の動員の「積極的側面をその叙述のなかで見のがしている」として、彼を非難している。この非難は絶対に根拠がない。なぜなら、カウツキーは、その著書の歴史部分(とりわけ、封建的農業と、それに資本主義的農業がとって代わる原因とをあつかっている、第一篇第三章)によっても、政策の部分によっても、*土地私有の、競争への農業の従属の、したがってまた土地の動員の、肯定的な側面と歴史的必然性とを、はっきり読者に示しているからである。カウツキーにたいするブルガコフ氏のもう一つの非難、すなわち、「さまざまな地方で人口増加の程度が異なるということに存する」問題を、カウツキーは研究していないという非難についていえば、われわれにはこの非難はまったく理解できない。いったい、ブルガコフ氏は、カウツキーの著書のなかで人口論にかんする試論に出会うことを期待していたのであろうか?

* カウツキーは、土地の動員にたいするいっさいの中世的な束縛にたいし、長子相続制(信託遺贈とAnerbenrecht〔一子相続制〕)にたいし、中世的な農民共同体の維持(三三二ページ)〔下巻、一七五ページ〕その他にたいして、断固として反対意見を述べている。

長子相続制の問題は(以上述べたあとでは)なんら新しいものはないから、これには立ちいらないで、都市による農村の搾取の問題にうつろう。カウツキーにあっては「否定的側面にたいして肯定的側面が、そしてなによりも、農業にとっての市場としての都市の意義が、対置されていない」とするブルガコフ氏の主張は、実際とまっこうから矛盾している。カウツキーは、「近代的農業」を研究している章(三〇ページ以下)〔六四ページ以下〕の冒頭のページでまったく明確に指摘している。またカウツキーは、農業の改造、合理化、その他等々における基本的な役割を、ほかならぬ「都市の工業」が果たすとしている*(二九二ページ〔下巻、一〇九ページ〕)。

* カウツキーが、農業の合理化における都市資本の役割を述べている二一四ページ〔三六七ページ〕をも参照。

だから、ブルガコフ氏がどうしてその論文のなかで（『ナチャーロ』、第三号、三二ページ）、カウツキーに反対するかのようにしてあの同じ思想を繰りかえすことができたのか、われわれはまったく理解できない！　これは、このきびしい批判者がその批判する書物をいかにまちがって説明しているかを示す、とくに明瞭な実例である。「価値」（都市に流出する）「の一部は農村にかえってくることを、忘れてはならない」と、ブルガコフ氏はカウツキーに教えをたれる。だれでも、カウツキーはこの初歩的な真理を忘れているのだ、と思うであろう。ところが実際には、カウツキーは（農村から都市への）等価物なしの価値の流出と等価物と引換えの価値の流出とを区別しており、しかもブルガコフ氏がやろうと試みているよりもはるかに明瞭に区別している。カウツキーは、まずはじめに、「農村から都市への、等価物（Gegenleistung）なしの商品価値の流出」（二一〇ページ）〔三六一ページ〕（都市で消費される地代、税金、都市銀行での借入金の利子）を考察し、まったく正当にもこれを都市による農村の経済的搾取と見ている。ついでカウツキーは、等価物と引換えの価値流出の問題、すなわち農業生産物と工業生産物との交換の問題を提起している。カウツキーはこう言っている。「価値法則の観点からすれば、この流出は農業の搾取を意味しない*が、実際には、これは、上記の他の諸要因とならんで、農業の素材的（stoffl-ichen）搾取、すなわち土地の栄養分の減退にみちびく」（二一一ページ）〔三六一―三六二ページ〕。

* 読者は、本文に引用したカウツキーの明確な言明を、ブルガコフ氏の次のような「批判的」意見と比較してみるがよい。「もしカウツキーが、穀物の直接的生産者が非農業人口に穀物を引き渡すことを、一般に搾取と考えているのなら」、うんぬん。いくらかでも注意ぶかくカウツキーの著書を読んだ批判者が、この「もし」ということばを書けるなどとは、信じられないことだ！

この、都市による農村の素材的搾取についていえば、カウツキーはこの点でもマルクスとエンゲルスの理論の基本的命題の一つと同意見である。それは、都市と農村との対立は農業と工業とのあいだの不可欠の適応関係と相互依存性を破壊し、それゆえ、資本主義がより高度の形態に転化するとともに、この対立は消滅するにちがいない、という命題である。*ブルガコフ氏は、都市による農村の素材的搾取についてのカウツキーの意見を「奇妙な」ものと考え、「いずれにせよ、カウツキーはここではまったくの空想の地に踏みこんでいる」（原文のまま!!!）と考えている。ブルガコフ氏が、この場合、彼の批判しているカウツキーの意見とマルクスおよびエンゲルスの基本的思想の一つとが同一であることを無視しているありさまは、われわれを驚

かせる。都市と農村との対立がなくなるという思想をブルガコフ氏は「まったくの空想」とみなしている、と読者が考えることは、しごくもっともなことである。もしこの批判者の意見がほんとうにそのようなものであるなら、われわれは断固として彼に異議をとなえ、「空想」（すなわち、実際には空想ではなくて、むしろ深遠な資本主義批判である）の側に立つであろう。都市と農村との対立がなくなるという思想は空想だとする見解は、けっして新しいものではない。それはブルジョア経済学者のありきたりの見解である。もっと深く観察している若干の著述家も、この見解を見ならっている。たとえばデューリングは、都市と農村とのあいだの敵対関係は「ことの本性からして不可避」だと考えたのである。

＊　いうまでもないことだが、結合された生産者たちの社会では都市と農村との対立が必然的になくなるというこの意見は、農業から工業への人口の流出に歴史的に進歩的な役割を認めることと、いささかも矛盾するものではない。私はある機会に、他の箇所[104]でこのことについて述べておいた（『試論』、八一ページ、注六九）。

さらに、ブルガコフ氏は、頻発する動植物伝染病をカウツキーが商業的農業と資本主義との困難の一つとして指摘していることに「驚かされる」（！）。ブルガコフ氏は質問する。「いったいこの場合資本主義になんの関係があるのか……？　はたして、なんらかのより高級な社会組織は、家畜の品種を改良する必要をなくすことができるのか？」。こんどはわれわれのほうが、どうしてブルガコフ氏はカウツキーのまったく明瞭な思想を理解しないでいられるのかと、驚かされる。自然淘汰でつくりだされた動植物の古い品種に、人為淘汰でつくりだされる「改良」品種がとって代わる。動植物は一段と弱くなり、いっそう手がかかるものになる。伝染病は、近代的な交通手段のもとでは、驚くべき速さでひろがる。ところが経営管理は依然として個人的であり、細分されており、小規模（農民的）で知識と手段を欠いていることもまれでない。都市の資本主義は近代科学のあらゆる手段を提供しようと努力するが、生産者の社会的地位は従来どおりみじめなままに残しておく。それはまた、都市文化を系統的かつ計画的に農村に移入することはしない。いかなるより高度な社会組織も、家畜の品種を改良する必要をなくしはしない（なくすというようなばかげたことを、もちろん、カウツキーは言おうとは考えもしなかった）。だが現代の資本主義的社会組織は、技術が進歩すればするほど、また家畜や植物の品種が弱くなればなるほど、ますます、社会的統制の欠如と農民および労働者の状態の低下とに苦しむ

のである。*

* だからカウツキーは、その著書の政策の部分で、家畜とその飼育状態との衛生検査を勧告している（三九七ページ）（下巻、二八二ページ）。

商業的農業の「困難」の最後のものとして、カウツキーは「農村の人口減少」を、すなわち、最も精力的で最も知的なすぐれた労働力が都市に吸収されることを、考えている。ブルガコフ氏は、一般的なかたちでは、この命題は「どんな場合にも正しくない」とし、「現在の、農村人口の減少による都市人口の発展は、けっして資本主義的農業の発展の法則を表現するものではなく」、工業的な輸出国の農業人口の海外への、植民地への移住こそがそれを表現する、と考えている。私は、ブルガコフ氏はまちがっていると思う。農村人口の減少による都市人口（より一般的には、工業人口）の増大は、現今だけの現象ではなくて、資本主義のほかならぬ法則を表現する一般的現象である。この法則の理論的根拠は、私が他の箇所*で指摘しておいたように、第一に、社会的分業の発達がますます多くの工業部門を原始的な農業からひきはなすこと、**第二に、一定の地所の耕作に必要な可変資本がだいたいにおいて減少すること（『資本論』[105]、第三巻第二部一七七ページ、ロシア語訳、五二六ページを参照。私の『ロシアにおける資本主義の発展』で、四ページと四四四ページ[106]に引用してある）にある。さきにわれわれがもはや指摘したことであるが、個々の場合や個個の時期には、一定の地所の耕作に必要な可変資本の増大が見うけられるが、そのことは一般的法則の正しさをゆるがしはしない。農業人口の相対的減少は、かならずしもあらゆる個々の場合にその絶対的減少に転化するわけではないこと、この絶対的減少の規模は資本主義的植民地の発展にも依存することを、もちろん、カウツキーは否定しようとは思わなかったであろう。カウツキーは彼の著書のしかるべき箇所で、ヨーロッパに安い穀物をあふれさせた資本主義的植民地のこの成長を、まったく明瞭に指摘している（「ヨーロッパの農村の人口減少をもたらす農民の逃散（Landflucht）そのものが、都市にたいしてばかりでなく植民地にたいしても、強健な農民の新しい群れをたえず送りこむ……」二四二ページ）（下巻、二二ページ）。農業から、最も強健で、精力的で、知的な労働者を工業が奪いさることは、工業国ばかりでなく農業国でも見られ、また西ヨーロッパばかりでなくアメリカでもロシアでも見られる、一般的な現象である。資本主義が生みだした、都市の文化と農村の未開状態とのあいだの矛盾が、不可避的にこうしたことをもたらすのである。ブルガコフ氏は、「人口が全体的に増加しているのに農業人口が減少するということは、

大量の穀物輸入なしにはありえない」という「判断」を、「わかりきったこと」と考えている。私の考えでは、この判断は、わかりきったことでないばかりか、まったくのまちがいである。人口が全体的に増加している（都市が成長している）のに農業人口が減少するということは、穀物が輸入されなくても十分にありうることである（農業労働の生産性が向上して、そのため、以前より少数の労働者で従来どおりの、あるいはそれ以上の量の生産物をすら生産できるようになる）。同様にまた、人口の全体的な増加が、農業人口の減少ならびに農業生産物の量の減少（あるいは、総人口の増加につりあわない程度の増大）のもとで起こることも、ありうる――資本主義が国民の栄養を悪化させる結果として「ありうる」――ことである。

* 『ロシアにおける資本主義の発展』、第一章第二節と第八章第二節。

** ブルガコフ氏はこの事情を指摘して、次のように言っている。「農業人口は、農業が繁栄状態にある場合にも、相対的に（傍点――ブルガコフ）減少することがありうる」と。だが、資本主義社会では、たんに「ありうる」ばかりでなく、かならずそうなるにきまっている……。「（農業人口の）相対的減少は、ここではたんに（原文のまま！）、国民的労働の新しい部門の成長を示すだけである」――ブルガコフ氏はこう結論をくだしている。この「たんに」というのが、すこぶる珍妙である。工業の新しい諸部門こそが、農業から「最も精力的で最も知的な労働力」を引きはなすのである。このように、カウツキーの一般的命題が完全に正しいことを認めるためには、もはやこの単純な判断だけで十分である。すなわち、この一般的な命題（資本主義は農業から最も精力的で最も知的な労働力を奪いさるという）の正しさにとっては、農村人口の相対的減少だけでまったく十分なのである。

ブルガコフ氏は、ドイツで一八八二年から一八九五年までのあいだに中位の農民経営が増加した事実――これは、カウツキーが確かめている事実であり、これらの経営は労働者の不足によって苦しむことが最も少ないということと関連して、彼があげている事実であるが――は、カウツキーの「構成全体をゆりうごかすことができる」と主張している。では、カウツキーの主張をもうすこしくわしく見てみよう。

農業統計の資料によれば、一八八二年から一八九五年までのあいだに最も増加したのは、五―二〇ヘクタールの経営の占める面積であった。この面積は、一八八二年には総面積の二八・八％を占めていたが、一八九五年には二九・九％になった。中農経営のこの増加は大農経営の面積の減少をともなっていた（二〇―一〇〇ヘクタールの経営の占める面積は一八八二年――三一・一％、一八九五年――三〇・三％であった）。カウツキーは言う。「これらの数字は、

農民層を現存秩序の最も堅固なとりでと考えているすべての善良な市民を喜ばせる。彼らは歓喜してこう叫ぶ、――農業は動いていないぞ、農業にはマルクスのドグマはあてはまらないぞ、と」。中農経営の成長が、農民層の新しい繁栄の始まりと解釈されるのである。

この善良な市民たちにたいしてカウツキーは答える。「だがこの繁栄は泥沼に根づいている。この繁栄は、農民層の幸福からではなく、全農業の窮迫から生じているのだ」(二三〇ページ)〔三九三ページ〕。カウツキーはこのすこしまえでこう言っている。「いっさいの技術的進歩にもかかわらず、あちこちで(傍点はカウツキーのもの)農業の衰退が始まったことは疑う余地がない」(二二八ページ)〔三九〇ページ〕。この衰退は、たとえば、封建制の復活――労働者を土地に緊縛して、彼らに一定の義務を負わせようとする試み――をもたらす。もしこの「抑圧」の土壌のうえにもろもろの遅れた経営形態がよみがえるとしても、なんの不思議があろうか? 欲望の水準がより低く、食を節したり、身を粉にして働いたりする能力がよりすぐれていることで、一般に大経営の働き手たちから区別される農民が、恐慌のさいにより長いこともちこたえるとしても、なんの不思議があろうか?* 「農業恐慌は、農業のすべての商品生産者階級にひろがる。それは中農のまえで立ちどまりはしない」(二三一ページ)〔三九五ページ〕。

* カウツキーは、ほかの箇所でこう言っている。「小経営は、絶望的状態にあっても、よりねばりづよくもちこたえる。このことが小経営の長所であるかどうかは、疑問にされてしかるべきである」(一三四ページ)〔二三四ページ〕。

ついでに、カウツキーの見解を完全に確認しているケーニヒの資料をあげておこう。彼はその著書(F・ケーニヒ博士『イギリス農業の状態……』、イェナ、一八九六年)のなかで、いくつかの最も典型的な州におけるイギリス農業の状態をくわしく記述している。賃金労働者とくらべて小土地所有者の労働が過度で消費が不十分だという指摘を、われわれはここでたくさん見うけるが、その反対の指摘は見うけない。たとえば、次のように書いてある。小経営の黒字は「とほうもない(ungeheuer)勤勉と節約によって」つくりだされる(八八ページ)。小農耕者の建物は劣っている(一〇七ページ)。小土地所有者(yeoman farmer)は借地農よりも悪い条件にある(一四九ページ)。「小土地所有者の状態はまったくみじめである(リンカーンシァで)。彼らの住居は大農場の労働者の住居よりも悪く、なかにはまったくひどいものもある。彼らは普通の労働者よりも激しく、また長時間働くが、稼ぎはより少ない。彼らの生活はより劣悪で、食べる肉の量はより少ない……彼らの子女は報酬なしで働き、悪いものを着ている」(一五七ページ)。「小農は奴隷のように働く。夏にはしばしば朝の三時から夜の九時まで働く」(ボストンの農業会議所の報告。一五八ページ)。ある大農は言っている。「疑い

もなく、わずかな資本しか持たず、家族員がすべての作業をおこなっている小農 (der kleine Mann) は、まったく容易に家計費を削減できるのに、大農は、彼の作男に豊年でも凶年でも同じようによい食事をあたえなければならない』(二一八ページ)。(アイアシァの) 小農は「なみはずれて (ungeheuer) 勤勉である。彼らの妻や子供たちは日雇いなみに働き、しばしばそれ以上に働く。彼らは一日に二人で、賃金労働者三人分の仕事をするといわれている」(二三一ページ)。「自分の家族を使って働かなければならない小さな借地農の生活は、まったくの奴隷生活である」(二五三ページ)。「だいたいにおいて……小農は大農よりも、見たところ、恐慌によく耐えたようである。だがそのことは、小農場のほうが収益性が高いということをものがたるものではない。原因は、われわれの考えでは、小経営主 (der kleine Mann) は自分の家族の無償の援助を受けるということである。……通常、……小農の家族は全員がその経営で働く。……子供たちは養ってもらうが、一定の日給の支払を受けることはまれにしかない」(二七七―二七八ページ) その他、等々。

カウツキーのこれらすべての命題は、理解しないではいられないほどに明白だ、と思われるであろう。それにもかかわらず、明らかに、この批判者はそれを理解しなかったのである。ブルガコフ氏は自分の意見を告げることをしていない。氏は中農経営のこの成長をあれこれと説明しているが、氏はカウツキーに「資本主義的生産様式の発展は農業の破滅をもたらす」という見解をなすりつけるのである。そしてブルガコフ氏は爆発をする。「農業が崩壊するというカウツキーの主張は、正しくなく、勝手なもので、立証されておらず、現実の最も基本的な諸事実に矛盾している」、等々。

これにたいしてわれわれは、ブルガコフ氏はカウツキーの思想をまったく誤って伝えている、と指摘しよう。カウツキーはけっして、資本主義の発展は農業の破滅をもたらすとは主張してはおらず、その反対の主張をしている。農業の圧迫 (=恐慌) とか、あちこち (これに注意せよ) での技術的退歩の到来とかいうカウツキーのことばから、カウツキーは農業の「崩壊」、「破滅」を語っていると結論をくだすのは、カウツキーの著作に不注意きわまる接し方をするのでなければ、できないことである。海外の競争の問題 (すなわち、農業恐慌の基本的条件の問題) に特別にあてられた第一〇章で、カウツキーは次のように言っている。「近づきつつある恐慌は、もちろん (natürlich)、それがおそう工業をかならずしも破壊するとはかぎらない (braucht nicht)。そういうことになるのは、きわめてまれな場合だけである。通常は、恐慌は、資本主義の意味での現存の所有関係の変革をもたらすにすぎない」(二七三―二七四ページ) (下巻、七七ページ)。農産物加工部門

の恐慌にかんして語られたこの意見は、恐慌の意義についてのカウツキーの一般的見解を明白に示すものである。この同じ章のなかでカウツキーは、農業全体についてもこの見解を繰りかえしている。「だからといって、まだ農業の破滅をうんぬんすべきではない (Man braucht deswegen noch lange nicht von einem Untergang der Landwirtschaft zu sprechen)。だが、近代的生産様式が確立されたところでは、農業の保守的性格は永遠に消えさった。古いものに固執していれば (Das Verharren beim Alten) 農業経営主はまちがいなく破滅にひんする。彼はたえず技術の発展のあとを追い、たえず自分の経営を新しい諸条件に適応させなければならない。……農村においても、従来は永久不変の軌道のなかできわめて単調に動いてきた経済生活は、資本主義的生産様式の特徴をなす不断の革命化の状態におちいる」(二八九ページ)〔下巻、一〇四ページ〕。

ブルガコフ氏には、農業の生産力が発展する傾向と商業的農業の諸困難が強まる傾向とがどのように両立するかが「わからない」のである。いったいここになんのわからないことがあるだろうか?? 資本主義は農業においても工業においても生産力の発展に巨大な刺激をあたえるが、ほかならぬこの発展がすすめばすすむほど、資本主義の諸矛盾はますます鋭くなり、新しい「諸困難」を資本主義に提起するのである。カウツキーはマルクスの基本的思想の一つを発展させている。彼マルクスは農業資本主義の進歩的な歴史的役割(農業の合理化、農業経営主からの土地の分離、支配と隷従の関係からの農村住民の解放、等々)を断定的に強調すると同時に、直接的生産者が貧困化し、抑圧されることや、資本主義が合理的農業の諸要求と両立しないことを、それに劣らず断定的に指摘したのである。自分の「一般的な社会=哲学的世界観はカウツキーのものと同じである」ことを認めているブルガコフ氏が、* カウツキーはここでマルクスの基本的思想を発展させているのに気づかないことは、きわめて奇妙である。『ナチャーロ』の読者諸君は、ブルガコフ氏がこれらの基本的思想にたいしてどういう態度をとっているか、また一般的な世界観は同一であるのに、彼がどうして《De principiis non est disputandum》〔「原則にはなにも論争することはない」〕!!? などと言ったりするのかについて、かならずや疑惑をいだくにちがいない。われわれはブルガコフ氏のこの言明を信じる気にならない。これらの《principia》〔原則〕が共通しているからこそ、彼と他のマルクス主義者とのあいだに論争が可能なのだ、とわれわれは考える。ブルガコフ氏が、資本主義は農業を合理化するとか、農業のための技術を工業があたえるとか等々と言うとき、彼はそうした《principia》

の一つを繰りかえしているにすぎない。それなのに彼は、いわれもなく「まったく反対だ」としか言わないのである。カウツキーは違う見解をもっているのだ、と読者は考えるかもしれない。ところがカウツキーは、その著書のなかでまったく断固としてはっきりと、ほかならぬマルクスのこれらの基本的思想を展開しているのである。彼はこう言っている。「新しい合理的な農業の技術的および科学的条件をつくりだしたのはほかならぬ工業であり、工業が機械と人造肥料によって、顕微鏡と化学実験室によって、農業を革命化し、そうすることによって農民的小経営にたいする資本主義的大経営の技術的優越をもたらしたのである」（二九二ページ）〔下巻、一〇九ページ〕。このようにカウツキーは、われわれがブルガコフ氏の場合に見うけるような矛盾におちいってはいない。ブルガコフ氏は、一方では「資本主義」（すなわち、賃労働による生産、すなわち、農民経営ではなくて大規模経営ではないのか？）が「農業を合理化する」ことを認めるが、他方では「この技術的進歩の担い手は、ここではけっして大経営ではない」と認定するのである！

＊ 哲学的世界観にかんしては、ブルガコフ氏のこのことばが正しいかどうかを、われわれは知らない。カウツキーは、どうやら、ブルガコフ氏のように批判哲学の味方ではないようである。

二

カウツキーの著書の第一〇章は、海外の競争と農業の工業化という問題にあてられている。ブルガコフ氏はこの章をきわめて見くだして、「なんらとりたてて新しいことも独創的なこともなく、多かれ少なかれ周知の基本的事実だ」うんぬんと批評し、農業恐慌、その本質と意義をどう理解するかという基本的な問題をあいまいなままにしている。ところがこの問題は巨大な理論的重要性をもつのである。

マルクスがあたえカウツキーがくわしく展開した、農業の進化についての一般的な理解から、農業恐慌についての理解も必然的に出てくる。カウツキーは農業恐慌の核心を、ヨーロッパの農業が、穀物をきわめて安く生産する諸国の競争の結果、土地の私有と資本主義的商品生産とが農業に負わせている重荷を消費者大衆に転嫁させることができなくなったという点に、見ている。今後はヨーロッパの農業は「それら（それらの重荷）をみずからで負わなければならず、そしてこの点に今日の農業恐慌がある」（二三九ページ）〔下巻、一七ページ〕。それらの重荷のうちの主要なものは、地代である。ヨーロッパ

では、地代は、これまでの歴史的発展によってぎりぎりの限界まで吊り上げられ（差額地代も絶対地代も）、土地価格に固定されている。* 植民地（アメリカ、アルゼンティンその他）では、それが依然として植民地であるかぎり、そこには反対に自由な土地がある。それらの土地は、あるいはまったく無償で、あるいはとるにたりない価格で、新しい移住者によって占められ、そのうえそれらは、処女地としての肥沃さによって生産費を最低にまで引き下げる土地である。まったく当然のことだが、これまでヨーロッパの資本主義的農業は、法外にふくれあがった地代を（高い穀物価格というかたちで）消費者に転嫁させてきたのであるが、いまやこの地代の重荷は農業経営主と土地所有者自身に落ちかかり、彼らを破滅させつつある。** こうして農業恐慌は、資本主義的土地所有と資本主義的農業とのかつての平安を破壊したし、ひきつづき破壊しつつある。資本主義的土地所有は、これまで、ますます大きくなる貢物を社会的発展から取り立てて、この貢物の高さを土地価格に固定させてきた。いまや資本主義的土地所有はこの貢物を譲りわたさなければならないのである。*** 資本主義農業は、いまや、資本主義工業に固有なあの不安定状態に投げこまれ、市場の新しい条件に適応することを強いられている。農業恐慌は、あらゆる恐慌と同様に、多数の経営主を破滅させ、確立された所有関係の大規模な破壊を引きおこし、あちこちで技術的退歩をもたらし、中世的な経済関係と経済形態を活気づかせているが、しかし大体においては、農業恐慌は社会的進化を促進し、家父長制的な停滞をその最後の隠れ家から追いだし、農業のいっそうの専門化（資本主義社会における農業の進歩の基本的要因の一つ）、機械のいっそうの使用、等々を余儀なくさせる。大体において——これはカウツキーがその著書の第四章で、いくつかの国々の資料によって示したことであるが——西ヨーロッパにおいてすら一八八〇—一八九〇年代には農業の停滞は見られず、技術的進歩が見られる。西ヨーロッパにおいてすら、とわれわれは言う。なぜなら、たとえばアメリカでは、この進歩はもっと明白だからである。

* 地代が高騰し固定化するこの過程については、パルヴス『世界市場と農業恐慌』の的確な指摘を参照されたい。パルヴスは、恐慌や農業問題一般にたいする基本的見解では、カウツキーと一致している。

** パルヴス、前掲書、一四一ページ。パルヴスの著書の書評、『ナチャーロ』第三号、一一七ページに引用。[100] つけくわえておけば、ヨーロッパの重荷となっている、商業的農業のその他の「諸困難」も、それが植民地を苦しめる程度はくらべものにならないほど弱い。

*** 絶対地代は独占の結果である。「幸いにも、絶対地代の

高騰には限界がある。……最近まで絶対地代は、差額地代と同様、ヨーロッパでは一貫して上昇してきた。ところが海外の競争はこの独占をいちじるしく打ちこわした。ヨーロッパでは、イギリスのいくつかの地方を除けば、差額地代が海外の競争によって打撃をうけたと考えるべき根拠は、なにもない。……だが絶対地代は低下した。そしてこのことは、なによりも労働者階級に利益をもたらした（zu gute gekommen）のである」（八〇ページ）〔一四二ページ〕。なお三二八ページ〔下巻、一六六―一六七ページ〕をも参照）。

一言でいえば、農業恐慌を、資本主義ならびに資本主義的発展を阻止する現象と見るべき根拠は、なにもないのである。

一八九九年四―五月に執筆
一九〇〇年一―二月に雑誌『ジーズニ』に発表
署名――ヴラヂーミル・イリイン
全集、第五版、第四巻、九五―一五二ページ所収
邦訳全集、第四巻、一一一―一七二ページ所収

われわれの綱領（一〇二）

いま国際社会民主主義は、思想上の動揺を経験している。これまで、マルクスとエンゲルスの学説は、革命的理論の堅固な基礎とみなされてきたが、この学説は不十分で古くさくなったという声が、いまあらゆる方面からあがっている。社会民主主義者と名乗り、社会民主主義的な機関紙を出そうと企図するものは、ひとりドイツの社会民主主義者をさわがすだけにとどまらないこの問題にたいして、自分の態度を正確にきめなければならない。

われわれは完全にマルクスの理論の基盤に立っている。この理論は、はじめて社会主義を空想から科学に変え、この科学の確固たる原理を打ち立てたのであり、そして、この科学をさらに発展させてすべての細目にわたって仕上げるにあたってすすむべき道を示したのである。それは、労働者の雇用、労働力の購売が、どのようにして、ひとにぎりの資本家たち、土地・工場・鉱山などの所有者たちへの、幾百万の無産人民の隷属を隠蔽しているかを説明して、近代資本主義経済の本質を暴露した。それは、近代資本主義の全発展が、どのように大規模生産による小規模生産の駆逐にむかってすすんでいるか、社会主義的な社会制度を可能とし必然とする諸条件をつくりだしつつあるかを、示した。それは、根をおろした慣習や、政治的陰謀や、錯雑した法律や、たくみに編まれた学説のかげに、階級闘争を、あらゆる種類の有産階級と無産大衆との、すべての無産者の先頭に立つプロレタリアートとの、闘争をみることを、教えた。それは革命的社会主義政党の真実の任務を明らかにした。その任務とは、社会の改造計画を編みだすことでも、資本家やその取りまきどもに労働者の状態の改善を説くことでも、陰謀をたくらむことでもなく、プロレタリアートの階級闘争を組織し、そして、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会の組織化とを終局目標とするこの闘争を指導することである。

そこでわれわれは質問しよう。当節ドイツの社会主義者ベルンシュタインのまわりに集まって、あのようにさわぎたてている、声の大きなマルクス主義理論「改新者たち」は、どういう新しいものをこの理論にもたらしただろうか？　全然なにももたらさなかったのである。彼らは、マ

ルクスとエンゲルスがそれを発展させるようにとわれわれに言いのこした科学を、ただの一歩も前進させなかった。彼らはプロレタリアートになに一つ新しい闘争方法を教えなかった。彼らは、おくれた諸理論の断片を借りうけ、闘争の理論ではなく、譲歩の理論――プロレタリアートの最悪の敵にたいする、すなわち、社会主義者追及のための新しい手段をあくことなくさがしもとめている政府とブルジョア政党とにたいする譲歩の――を、プロレタリアートに説教することで、後退しただけである。ロシア社会民主主義の創始者また指導者のひとりであるプレハーノフが、ベルンシュタインの最新の「批判」に仮借ない批判をくわえたのは、まったく正しかった。(二〇) ベルンシュタインの見解は、いまやドイツの労働者の代表者たちからも拒否された（ハノーヴァ大会で）。(二一)

このようにいうと非難が雨あられのようにわれわれにあびせられるということを、われわれは知っている。君たちは、「教条」にたいする背反やあらゆる独自の意見、等々のために「異端者」を迫害する「正教派」の教団に、社会主義政党を変えようと望んでいるのだ、と大声で叫ぶ人もいるだろう。われわれは、すべてそういう流行の痛烈な文句を知っている。ただそれらの文句には、ひとかけらの真理もひとかけらの意味もないのである。革命的理論がないならば、強固な社会主義政党はありえない。革命的理論はすべての社会主義者を統合するものであり、この理論から社会主義者は自分の確信のすべてを汲みとり、この理論を自分の闘争方法と活動方式とに応用するのである。自分の理解のおよぶかぎり真理と考えられる理論を、いわれのない攻撃や、この理論を改悪しようとする試みから擁護することは、あらゆる批判の敵となることをまだけっして意味しない。われわれはマルクスの理論を、けっしてなにか完成された、不可侵のものとは考えない。反対に、この理論は、社会主義者が生活に立ちおくれたくないならば今後さらにあらゆる方向で前進させなければならない一つの科学のかなめ石をおいたにすぎないと、われわれは確信している。われわれは、ロシアの社会主義者にとってマルクスの理論を自主的に仕上げることがとくに必要である、と考える。というのは、この理論は、一般的な指導的諸命題を提供しているだけで、それらの原理は個別的には、イギリスにはフランスと違ったふうに、フランスにはドイツと違ったふうに、ドイツにはロシアと違ったふうに、適用されるからである。だからわれわれは、理論問題をあつかった論文に喜んでわれわれの新聞の紙面を割こうし、すべての同志諸君に、論争点を公然と討議するようすすめるものである。

それでは、すべての社会民主主義者に共通な綱領をロシアに適用する場合に生じてくる主要な諸問題は、どういうものだろうか？　すでに述べたように、この綱領の核心は、プロレタリアートの階級闘争を組織し、そして、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会の組織化とを終局目標とするこの闘争を指導することにある。プロレタリアートの階級闘争は、経済闘争（労働者の状態の改善のために、個々の資本家または個々の資本家グループにたいしておこなう闘争）と政治闘争（人民の権利の拡大のために、すなわち民主主義のために、またプロレタリアートの政治権力の拡大のために、政府にたいしておこなう闘争）とに分かれる。ロシアの一部の社会民主主義者は（見うけるところ、新聞『ラボーチャヤ・ムィスリ』[三三]の発行にあたっている人々は、この部類にはいるようである）、経済闘争のほうがくらべものにならないほど重要であると考えて、政治闘争を多かれ少なかれ遠い将来に延期しているようにみえる。このような意見はまったく正しくない。労働者階級の経済闘争を組織することが必要だということ、これを基礎として労働者のあいだで扇動をおこなうこと、すなわち、雇主にたいする労働者の日々の闘争を援助し、圧迫のあらゆる種類と場合にたいして労働者の注意をうながし、こうして団結の必要を彼らに説明することが必要だということには、すべての社会民主主義者が同意している。けれども、経済闘争のために政治闘争を忘れることは、世界社会民主主義の基本命題にそむくことを意味し、労働運動の全歴史の教えを忘れることを意味するであろう。ブルジョアジーとブルジョアジーに奉仕する政府との熱心な支持者たちが、労働者の純経済的な結社を組織し、それによって労働者を「政治」から、社会主義からそらせようとさえ試みたことは、一度や二度でない。ロシアの政府にもまたなにか同様のことを企てる能力があることは、大いにありうることである。というのは、人民を彼ら自身の無権利や抑圧について考えることからそらせるためでありさえすれば、ロシア政府は、目くされ金の施し物、もっと正確にいえばにせの施し物を人民になげあたえようと、つねに努めてきたからである。もし労働者が、ドイツその他すべてのヨーロッパ諸国（トルコとロシアを除いて）の労働者がやっているように、自由に集会を開き、結社を組織し、自分自身の新聞をもち、人民議会に自分自身の代表をおくる権利をもたないなら、どんな経済闘争も恒久的な改善を労働者にもたらすことはできないし、経済闘争を大規模におこなうことさえできない。ところで、これらの権利をかちとるためには、政治闘争をおこなうことが必要である。ロシアでは、労働者ばかりか、すべての市民が政治的権利を

うばわれている。ロシアは無制限の専制君主国である。ツァーリひとりが法律を発布し、官吏を任命し監督する。これで見ると、ロシアではツァーリとツァーリ政府は、どんな階級にも依存せずに、すべての階級のために一様に配慮しているかのように見える。しかし実際には、官吏はみなもっぱら有産階級の出身であり、みな大資本家の影響に従属している。大資本家は大臣を意のままにうごかし、なんでも望むものを獲得している。ロシアの労働者階級には二重の圧制がのしかかっている。彼らは資本家と地主によってはぎとられ、略奪されているが、労働者階級が資本家と地主に反対してたたかうことができないように、警察が彼らの手足をしばりあげ、口をふさぎ、人民の権利を守りぬこうとするあらゆる試みを迫害している。資本家にたいしてストライキがおこなわれるたびに、軍隊と警察が労働者にさしむけられる。あらゆる経済闘争は必然的に政治闘争に転化する。そして社会民主主義は、この両者を、プロレタリアートの単一の階級闘争のうちに切りはなせないように結びつけなければならない。このような闘争の第一の主要な目的は、政治的権利の獲得、政治的自由の獲得でなければならない。もしペテルブルグの労働者だけが、社会主義者のささやかな援助を受けて、政府から急速に譲歩〔三〕——労働日の短縮にかんする法律の発布——をかちとることができたとすれば、単一の「ロシア社会民主労働党」に指導されるロシアの全労働者階級は、頑強な闘争によって、くらべものにならないほどいっそう重要な譲歩をもかちとることができるであろう。

ロシアの労働者階級は、他のどんな階級の援助を受けないでさえ、単独でもその経済闘争と政治闘争を遂行できるであろう。しかし、政治闘争では労働者はひとりぼっちではない。人民の完全な無権利とバシバズーク的官吏の野蛮な専横とは、あらゆる自由な言論と自由な思想とにくわえられる迫害にあまんじることのできない、多少とも誠実で教養ある人々をもすべて憤激させ、迫害を受けているポーランド人、フィンランド人、ユダヤ人や、ロシアの異宗派を憤激させ、官吏や警察の圧迫にたいしてどこに保護をもとめるというあてもない小商人、工業家、農民を憤激させている。これらすべての住民群は、各自別々には、頑強な政治闘争をおこなう能力はないが、労働者階級がこのような闘争の旗をかかげるときには、あらゆる方面からこの階級に援助の手を差しのべるであろう。ロシアの社会民主主義派は、人民の権利のためのすべての闘士、民主主義のためのすべての闘士の先頭に立つであろう。そしてそのときにはそれは不敗のものとなるであろう！

以上がわれわれの基本的な見解であって、われわれはこ

の見解をわれわれの新聞紙上で系統的に全面的に展開するであろう。こうしてわれわれは「ロシア社会民主労働党」の発行した『宣言』(三)にしめされた道に沿って前進するであろうことを、われわれは確信する。

一八九八年一〇月以降に執筆
一九二五年に『レーニンスキー・ズボールニク』第三巻にはじめて発表
全集、第五版、第四巻、一八二―一八六ページ所収
邦訳全集、第四巻、二二四―二二九ページ所収

われわれの当面の任務

ロシアの労働運動はげんざい過渡期にある。西部辺区、ペテルブルグ、モスクワ、キエフその他の都市の労働者の社会民主主義組織が示した輝かしい発足は、「ロシア社会民主労働党」の成立(一八九八年春)として実をむすんだ。ロシア社会民主主義は、この一大躍進を遂げたとき、一時全力をつかいはたして、個々の地方組織のそれまでの細分された活動へ逆もどりしたかのようにみえた。だが、党は存在をやめたのではない。党は、力をあつめるため、ロシアのすべての社会民主主義者を統合する事業を確固たる基盤のうえにすえるために、考えこんだにすぎない。この統合を実現し、それに適した形態をつくりあげ、狭い地方的な細分状態から終局的に脱けでること、――これがロシア社会民主主義者の当面の最も緊要な任務である。

プロレタリアートの階級闘争を組織することがわれわれ

の任務であるという点では、われわれはみな意見が一致している。だが、階級闘争とはなにか？ 個々の工場、個々の職種の労働者が自分の雇主もしくは自分の雇主たちと闘争をはじめるなら、それは階級闘争であろうか？ いや、それは階級闘争の弱い萌芽にすぎない。全国の全労働者階級のすべての先進的な代表者たちが、単一の労働者階級であることを自覚し、個々の雇主にたいしてではなく資本家階級全体にたいして、またこの階級を支持する政府にたいして、闘争を開始するときにはじめて、労働者の闘争は階級闘争になる。個々の労働者が全労働者階級の一員であることを自覚するとき、また、個々の雇主や個々の役人にたいするその日常の小さな闘争を、ブルジョアジー全体と政府全体にたいする闘争と考えるようになるとき、そのときにはじめて彼の闘争は階級闘争となる。「あらゆる階級闘争は政治闘争である」(三)――マルクスのこの有名なことばを、雇主と労働者の闘争はみなつねに政治闘争であるという意味にとるなら、それは誤りであろう。資本家にたいする労働者の闘争は、それが階級闘争となるのにおうじて、必然的に政治闘争となるという意味に、このことばを理解しなければならない。社会民主主義の任務は、労働者の組織化を手段とし、労働者のあいだでの宣伝と扇動を手段として、抑圧者にたいする彼らの自然発生的な闘争を全階級の闘争に、特定の政治的理想と社会主義的理想とのための特定の政党の闘争に、転化させることである。地方的な活動だけでは、こういう任務を達成することはできない。

地方の社会民主主義的活動はわが国ではすでにかなり高度の発展を遂げている。社会民主主義思想の種子は、すでにロシアのいたるところにばらまかれている。社会民主主義的文書の最初の形態である労働者向けリーフレットは、ペテルブルグからクラスノヤルスクにいたる、カフカーズからウラルにいたる、ロシアのあらゆる労働者がすでに知っている。いまわれわれに欠けているのは、まさに、この地方的活動全体を結集して一つの党の活動とすることである。われわれが全力をあげて除去すべきわれわれの主要な欠陥は、地方の活動の狭い「手工業的」性格である。この手工業性のため、ロシアにおける労働運動の数多くの現れは、純地方的な事件にとどまり、ロシア社会民主主義全体にとっての手本としての、またロシアの労働運動全体の一段階としてのその意義は大いに失われている。この手工業性のため、労働者は、自分たちの利害がロシア全土にわたって共通だという自覚に十分にはつらぬかれず、ロシア社会主義とロシア民主主義にかんする思想を、自分たちの闘争と十分には結びつけていない。この手工業性のため、理論上・実践上の諸問題にたいする同志たちのいろいろな

見解は、中央機関紙で公然と討議されず、党の共通の綱領と共通の戦術作成に役だたず、狭いサークル的活動のなかで消えうせるか、地方の偶然の特殊性を法外に誇張する結果になっている。こうした手工業性はわれわれにはもうたくさんだ！　われわれはすでに、共同の活動へ、党の共通の綱領の作成へ、わが党の戦術と組織の共同の討議へ移るのに、十分に成熟している。

ロシア社会民主主義は、古い革命的理論と社会主義理論の批判のために、多くの仕事をした。だがそれは、批判と抽象理論だけに終始したのではなかった。それは、その綱領が宙に浮いたものではなくて、人民のあいだの、とくに工場プロレタリアートのあいだの広範な自然発生的運動に呼応するものであることを証明した。いまやそれに残された仕事は、わが国の条件に適応したかたちでこの運動の組織をつくりあげるという、特別困難ではあるが、そのかわり特別重要な次の一歩を踏みだすことである。社会民主主義は労働運動に奉仕するだけのものではない。それは（『共産党宣言』の基本思想を再現しているK・カウツキーの定義を借用すれば）「社会主義と労働運動との結合」である。それの任務は、自然発生的な労働運動のなかに明確な社会主義的な理想をもちこみ、この運動を社会主義的信念――それは、現代の科学の水準に立つものでなければならない――と結びつけ、またそれを、社会主義実現の手段としての、民主主義をめざす系統的な政治闘争と結びつけることである。一言でいえば、この自然発生的な運動を革命党の活動と一つの切りはなせない全一体に融合させることである。西ヨーロッパにおける社会主義と民主主義の歴史、ロシアの革命運動の歴史、わが国の労働運動の経験、――これこそ、われわれがわが党の適切な組織と戦術をつくりあげるために摂取しなければならない材料である。しかしこの材料の「加工」は、自主的なものでなければならない。なぜなら、われわれはどこにもできあいの手本を探しもとめるわけにはゆかないからである。一方では、ロシアの労働運動は西ヨーロッパのそれとは全然異なる条件のもとにおかれている。これについてなにかの幻想におちいることは、非常に危険であろう。ところが、他方では、ロシア社会民主主義は、ロシアの以前のいろいろな革命党とは、最も本質的な点で異なっている。だから、昔のロシアの革命的活動と秘密活動との技術の巨匠たちから学ぶ必要（われわれはいささかも躊躇せずにこの必要を認める）があるということは、彼らにたいして批判的な態度をとって、自分の組織を自主的につくりあげる義務を、われわれにまぬかれさせるものではけっしてない。

このような任務を提起する場合、二つの主要な問題が、

とくにつよく現われてくる。(一) 地方の社会民主主義的活動を完全に自由におこなわせる必要と、単一の――したがって中央集権的な――党を結成する必要とを、どう両立させるか? 社会民主主義は、その力のすべてを、いろいろな工業中心地で、いろいろな仕方で、別々のときに現われてくる自然発生的な労働運動のなかから、汲みとる。しかし、これが孤立した「手工業者」の活動であるときには、厳密にいえば、それを社会民主主義的活動とよぶことさえできない。なぜなら、それは、プロレタリアートの階級闘争を組織するものでも、指導するものでもないだろうからである。(二) 社会民主主義は政治的陰謀をたくらむことを断固として拒否し、また、「労働者にバリケードにつけと呼びかけ」(ペ・ペ・アクセリロードの正しい表現によれば)たり、一般に、革命家の一団のつくったあれこれの政府襲撃「計画」を労働者に押しつけたりすることを、断固として拒否するということと、政治的自由をめざす闘争を主要目的とする革命党になろうとする社会民主党の志向とを、どう両立させるか?

ロシア社会民主主義は、自分がこれらの問題を理論的に解決したと考えてよい十分な根拠をもっている。この点を立ちいって論ずるなら、論文『われわれの綱領』のなかで述べたことを繰りかえすことになろう。ここでの問題は、これらの問題の実践的な解決である。個々人あるいは個々のグループがそういう解決をあたえることはできない。それをあたえることができるのは、社会民主主義全体の組織的な活動だけである。われわれの考えるところでは、現在、最も緊要な任務は、これらの問題の解決にとりかかることであり、そのためにわれわれは、規則的に発行され、すべての地方グループと緊密にむすびついた党機関紙を創立することを、自分の当面の目的として立てなければならない。われわれの考えるところでは、社会民主主義者の全活動は、近い将来の全期間をつうじて、この仕事を組織することに向けられなければならない。このような機関紙なしには、地方の活動はいつまでも狭い「手工業性」を脱しないであろう。党の結成は、――一定の新聞によってこの党を正しく代表させる仕事が組織されなければ――大体においてたんなるかけ声に終わるであろう。中央機関紙によって統合されない経済闘争は、ロシアの全プロレタリアートの階級闘争となることはできない。闘争の個々の現われの方向を決定しなければ、政治闘争をおこなうことは不可能である。革命勢力の組織化、それらの勢力の訓練、革命的活動の技術の発展は、これらすべての問題を中央機関紙で討議し、仕事の運

営の一定の形態と規則を集団的につくりあげ、全党にたいする各党員の責任制を――中央機関紙を媒介として――確立することなしには、不可能である。

全党の機関紙を創刊してそれをただしく運用することに、党の全勢力、すなわち、いっさいの文筆家勢力、いっさいの組織者的才幹、いっさいの物質的資材、その他を集中しなければならないといっても、われわれは、他の種類の活動、たとえば、地方的扇動、示威行動、ボイコット、スパイ追及、ブルジョアと政府の個々の代表者の追及、示威的ストライキ等々を軽視しようとは、すこしも考えていない。反対に、われわれの確信するところでは、これらの種類の活動はみな、党の活動の基礎をなすものである。しかし、これらの活動を全党の機関紙において統合することなしには、革命闘争のこれらの形態はすべてその意義の十分の九を失い、党の共通の経験をつくりだすこともなく、党の伝統と継承性をつくりだすことにもならない。党機関紙は、このような活動と競合するものでないばかりか、反対に、この活動の普及と確立と体系化とに非常に大きな影響をおよぼすであろう。

規則ただしく発行され配達される党機関紙を組織することに全勢力を集中する必要は、他のヨーロッパ諸国の社会民主主義や、ロシアのこれまでの革命党とは異なった、ロシア社会民主主義の独特の地位にもとづくものである。ドイツ、フランスその他の国の労働者は、新聞のほかにも、自分の活動を公けに発揮する他の方法、運動を組織する他の方法を、数多くもっている。すなわち、議会活動をも、選挙運動をも、人民の集会をも、地方の公共機関（ゼムストヴォや都市の）への参加をも、職人（労働、同職）組合の公然の運営、等々をも、もっているのである。わが国では、革命的な新聞が――われわれが政治的自由をたたかいとるまでは――このすべての、まさにこのすべてのかわりをつとめなければならないのである。わが国では、こういう新聞なしには、労働運動全体のどんな広範な組織化も不可能である。われわれは陰謀を信奉しない。われわれは、政府を破壊しようとする個々ばらばらの革命的な企てを拒否する。われわれの活動の実践的スローガンとなるものは、ドイツ社会民主党のベテランであるリープクネヒトのことば、《Studieren, propagandieren, organisieren》――学び、宣伝し、組織する――である。そして党機関紙だけがこの活動の中心点となることができるし、またならなければならない。

しかし、このような機関紙の規則的な、いくぶんでも恒常的な発行は可能であろうか、またどんな条件のもとでなら可能であろうか？　このことについては、次回に述べよ

う。(二〇)

ストライキについて(二一)

一八九九年に一〇月以降に執筆
一九二五年に『レーニンスキー・ズボールニク』第三巻にはじめて発表
全集、第五版、第四巻、一八七―一九二ページ所収
邦訳全集、第四巻、二三〇―二三五ページ所収

ロシアでは最近数年間、労働者のストライキが非常に頻繁になった。工業県でいくつかのストライキが起こらなかったような県は、一つも残っていない。また、大都市ではまったくストライキの絶えまがない。だから自覚した労働者も社会主義者も、ストライキの意義、ストライキのやり方、ストライキへの社会主義者の参加の諸課題という問題を、ますます頻繁にとりあげているのは当然である。

われわれは、これらの問題について、われわれの考えをいくつか述べてみたいと思う。第一論文では、全体としての労働運動におけるストライキの意義について、第二論文では、ロシアのストライキ取締法について、第三論文では、ロシアでストライキがどういうふうにおこなわれてきたか、またおこなわれているか、自覚した労働者はストライキにたいしてどういう態度をとるべきか、ということについて

述べようと思う。

一

まず第一に、ストライキの発生とひろがりはなにによるものか、という問題を出さなければならない。自分の体験や、他人の話や、あるいは新聞で知っているストライキのあらゆる場合を思いだしてみれば、だれでも、大工場が発生しひろがっているところでストライキも発生しひろがっていることが、すぐにわかるであろう。数百人（ときには数千人）の労働者を雇っている巨大工場で、労働者のストライキが起こらなかったような工場は、まず一つもあるまい。ロシアに大工場が少なかったころにはストライキも少なかったが、古い工場地方でも新しい都市や村でも大工場が急速に成長するようになってからは、ストライキもますます頻繁になる一方である。

どうして、大規模工場制生産がいつもストライキを呼びおこすようになるのだろうか？　それは、資本主義は必然的に労働者と雇主との闘争をもたらし、そして生産が大規模になればこの闘争は必然的にストライキ闘争になるからである。

これを説明しよう。

資本主義とは、土地、工場、道具などが少数の地主と資本家のものであって、人民大衆は、まったく、あるいはほとんどまったくなにも所有せず、そのため労働者として雇われるほかないような社会制度のことである。地主と工場主は、労働者を雇い、彼らにあれこれの生産物を生産させて、それを市場で販売する。そのさい工場主は、労働者が家族といっしょにやっと生きてゆけるだけの賃金しか支払わず、それに必要な生産物の量をこえて労働者が生産するものは、全部工場主が自分のポケットに入れてしまい、それが彼の利潤を構成する。このように、資本主義経済のもとでは、人民大衆は他人に雇われて働く。自分のためにではなく、賃金をもらって雇主のために働くのである。雇主がいつも賃金を引き下げようと努めるのは、あたりまえである。彼らが労働者に渡すものが少なければ少ないだけ、それだけ多くの利潤が彼らの手もとに残るからである。ところが、労働者は、滋養のある衛生的な食べもので家族の全員を養い、良い住宅に住み、乞食のような着物でなく、みなが着ているような着物を着ることができるように、なるべく多くの賃金を得ようと努める。こうして、雇主と労働者とのあいだには、賃金のことで絶えまない闘争がおこなわれる。雇主はだれでもすきな労働者を雇う自由がある。だから、雇主は最も安い労働者をさがす。労働者はだれで

もすきな雇主に雇われる自由があり、なるべく高く支払ってくれるような、最も高値の雇主をさがす。労働者の働くところが農村であろうと都市であろうと、彼の雇われる先が地主であろうと、富裕な百姓であろうと、請負業者であろうと、工場主であろうと、――ともかく彼は、いつでも雇主と取引し、賃金のことで彼らとたたかうのである。

だが、労働者はひとりぼっちでこの闘争をおこなうことができるだろうか？　働く人民の数はますます多くなる。農民は零落して、農村から都市へ、工場へと逃げてくる。地主と工場主は機械を導入するが、この機械は労働者から仕事をうばう。都市では失業者がふえる一方だし、農村ではこじきがふえる一方である。飢えた人民は賃金をますます切り下げる。労働者はひとりぼっちで雇主と闘争することが不可能になる。労働者が良い賃金を要求したり賃金の引下げに同意しなかったりしようものなら、雇主はこうこたえるだろう、――出てうせろ、門のそとには腹のへった連中がたくさんいるのだ、あの連中は低い賃金でも大喜びで働くのだぞ、と。

人民の零落がひどくなって、都市にも農村にもいつも失業した人々が群れをなすようになり、工場主が巨万の富を積み、小経営主が百万長者に駆逐されるようになると、個個の労働者では資本家にたいしてまったく無力となる。資本家は、労働者を完全におしつぶして、彼を、いや彼ひとりだけでなく彼の妻子をも、苦役に死ぬほどこきつかうことができるようになる。そして実際に、労働者がまだ法律の保護をかちとっていないで、資本家に反抗することのできないような営業部門をみるがよい。――諸君は、一七時間から一九時間にもおよぶ法外に長い労働日を見いだすだろう。作業に疲れきった五―六歳からの子供たちを見いだすだろう。いつも飢えていて、飢えのために徐々に死んでゆく労働者の世代を見いだすだろう。たとえば、資本家のために家内労働をしている労働者がそれである。いや、労働者はだれでも、ほかの実例をもっともっとたくさん思いだすだろう！　労働者が資本家に反抗することができず、雇主の横暴を制限する法律をたたかいとることができない場合に資本家があえてやっているほどの、働く人民にたいする恐ろしい抑圧は、奴隷制や農奴制度のもとでさえかつて一度もなかったのである。

そこで、こういうぎりぎりの状態までおしつめられまいとして、労働者は死物ぐるいの闘争を始める。労働者は、自分たちのだれもが、一人ひとりではまったく無力で、資本の圧制のもとに破滅してしまう恐れがあるのをみて、自分たちの雇主にたいして共同して決起しはじめる。労働者のストライキが始まる。はじめは労働者は、自分たちがな

にをかちとろうとしているのかさえ理解せず、なぜそうするのかさえ意識しない場合が多い。彼らはただ、機械をこわし、工場を破壊する。彼らはただ、工場主に自分たちの憤りを思いしらせたいだけである。彼らは、その耐えられない状態から脱けだすために自分たちの共同の力をためしてみるが、まさになぜ彼らの状態はこんなに絶望的なのか、彼らはなにをめざして努力しなければならないのかを、まだ知らない。

すべての国で、労働者の憤激はまず個々の決起――わが国で警察や工場主のよんでいるところでは暴動――から始まった。すべての国で、これらの個々の決起は、一方では多少とも平和的な罷業を、他方では自分の解放をめざす労働者階級の全面的闘争を生みだした。

労働者階級の闘争において、罷業（またはストライキ）は、いったいどういう意義をもっているか？　この質問に答えるためには、われわれはここで、まず罷業のことにややくわしく立ち入らなければならない。もし労働者の賃金が――まえにみたように――雇主と労働者の契約によってきまり、そのさい個々の労働者はまったく無力だということであれば、労働者は必然的に自分たちの要求を共同して守りぬかなければならないし、雇主が賃金を引き下げるのを妨げ、あるいはもっと高い賃金をかちとるために、必然的にストライキを組織しなければならないことは明らかである。実際にも、資本主義的機構をもつ国で、労働者のストライキが起こっていないような国は一つもない。ヨーロッパのすべての国家とアメリカで、労働者は、どこででも、ひとりぼっちでは無力だということを感じており、あるいはストライキを組織することで、あるいはストライキをやると威嚇することで、ただ共同してのみ雇主に抵抗を示すことができている。そして、資本主義が発展すればするほど、大工場が急速に増加すればするほど、小資本家が大資本家に駆逐されればされるほど、労働者が共同して抵抗する必要はますます緊急なものとなる。なぜなら、失業はそれだけ激しくなり、できるだけ安く商品を生産しようと努める資本家が（だがそのためには、労働者にたいする支払もできるだけ安くする必要がある）相互におこなう競争はそれだけ強まり、産業の変動と恐慌*はそれだけ強まるからである。産業が繁栄するときには工場主は大きな利潤を手に入れるが、それを労働者と分けあおうとは考えない。ところが、恐慌時には工場主は損失を労働者に転嫁しようと努める。資本主義社会におけるストライキの必然性はヨーロッパ諸国では万人によく認められているので、そこでは法律はストライキを組織することを禁止してはいない。ただロシアにだけ野蛮なストライキ取締法が残っているので

ある（これらの法律とその適用については、またこんど述べよう）。

＊産業における恐慌と労働者にとってのその意義については、こんどいつかもっとくわしく述べるつもりである。いまはただ、最近数年間、ロシアでは工業事業はすばらしく順調で、工業が「繁栄した」が、いま（一八九九年末）は、この「繁栄」が恐慌に終わるという、すなわち、商品の販路のゆきづまり、工場主の破産、小経営主の零落、労働者の恐るべき惨苦（失業、賃金引下げなど）に終わるという、明らかな徴候がすでに認められることだけを、注意しておこう。

しかし、資本主義社会の本質そのものから生じてくるストライキは、この社会組織にたいする労働者階級の闘争の始まりを意味する。金持の資本家に個々の無産の労働者が対立するとき、それは労働者の完全な隷属を意味する。しかしこの無産の労働者が団結するとき、事態は変わってくる。資本家の道具と材料に自分の労働を付加して新しい富を生産することに同意する労働者が見つからないかぎり、どういう富も資本家になんの利益ももたらさないであろう。労働者が一人ひとりで雇主を相手にしているかぎり、彼らはいつまでもほんとうの奴隷のままであり、永久に一片のパンと引きかえに他人のために働き、永久に従順な、黙々とした雇人にとどまらなければならない。しかし、労働者が共同して自分たちの要求を表明し、ふくれあがった財布の持主に服従することを拒絶するとき、労働者は奴隷ではなくなり、人間になる。彼らは、彼らの労働がひとにぎりの寄生虫を富ませるためだけに使われないで、働くものに人間らしい生活をする可能性をあたえるものとなることを、要求しはじめる。奴隷が主人になりたいという要求を、――地主と資本家が欲するようにではなく、勤労者自身が欲するように働き生活したいという要求を、表明しはじめる。ストライキは、いつも資本家に非常な恐怖を起こさせるが、それは、ストライキが彼らの支配をゆるがしはじめるからである。「君の力づよい腕がそれを欲するなら、いっさいの車輪は止まるだろう」と、あるドイツの労働歌は労働者階級について言っている。じっさい、工場、地主経営、機械、鉄道、等々、これらはすべて一つの巨大な機械装置の車輪のようなものである。この機械装置は、いろいろな生産物を採取し、それに加工し、必要なところに送りとどける。この機械装置全体を動かしているのは労働者であって、労働者は、土地を開墾し、鉱石を採掘し、工場で商品を製造し、家屋、作業場、鉄道を建設する。労働者が働くことを拒絶すれば、この機械装置全体は停止する危険にさらされる。どのストライキも、ほんとうの主人は資本家ではなくて、ますます声たかく自分の権利を主張している労働者であるということを、そのつど資本家に思いださ

せる。どのストライキも、労働者の状態は絶望的ではなく、彼らはひとりぼっちではないということを、そのつど労働者に思いださせる。ストライキが、ストライキ参加者にも、また隣り近所の工場や同じ産業部門に属するいろいろな工場の労働者にも、どんなに巨大な影響をあたえるかを、考えてみたまえ。普通の平穏なときには、労働者はだまって自分の苦役を耐えしのんでおり、雇主にさからいもせず、自分たちの状態についていろいろ論議することもない。ストライキのときには、労働者は声たかくその要求を表明し、雇主に彼らの圧迫のすべてを思いださせ、自分の権利を主張する。彼らはまた、自分ひとりや自分の給料のことだけを考えるのではなく、自分といっしょに作業を放棄し困窮を恐れずに労働者の事業を守っている、同僚たち全部のことをも考える。あらゆるストライキは、労働者に多くの困窮をもたらす。しかもそれは、戦争の惨苦とにだけ比較できるような恐ろしい困窮である。――家族は飢え、賃金はもらえず、しばしば逮捕され、自分の職をもっている住みなれた町からは追放される。そして、これらすべての苦難にもかかわらず、労働者は、同僚全体にそむいて雇主と取引するものを軽蔑する。ストライキの苦難にもかかわらず、近隣の工場の労働者は、自分たちの同僚が闘争を始めたのをみると、いつも士気の高まりを覚える。「ただ一人のブルジョアを屈服させるためにこれほども耐えしのぶ人々は、全ブルジョアジーの力を打ちくだくこともできるであろう」[20]と、社会主義の偉大な教師のひとりエンゲルスは、イギリス労働者のストライキについて語った。一つの工場で罷業が起こりさえすれば、たちまち非常に多数の工場で一連のストライキが始まるという場合が、しばしばある。ストライキの精神的影響力はそれほど偉大であり、一時的にもせよ奴隷たることをやめて金持と平等の権利をもった人間となっている自分の同僚たちの姿は、それほど労働者に伝染的に作用するのだ！　あらゆるストライキは、巨大な力で労働者を社会主義の思想に――資本の圧制から自分自身を解放するための全労働者階級の闘争という思想に――みちびく。なにかある工場または産業部門の、またなにかある都市の労働者が、大きなストライキが起こるまでは、社会主義のことなどほとんど知らず、考えてみたこともなかったのに、ストライキのあとでは、彼らのあいだにサークルや組合がどんどん普及し、ますます多くの労働者が社会主義者になるという場合が、非常にしばしばあった。

　ストライキは、雇主の力はなににあり労働者の力はなににあるかを理解することを、労働者に教える。ただ自分の雇主のことだけ、自分の身近な同僚のことだけを考えるのでなく、すべての雇主のこと、資本家階級全体と労働者階

級全体のことを考えることを、教える。幾世代の労働者の労働によって幾百万金を儲けた工場主が、ごくひかえめな賃金の増額にも同意せず、あるいは、賃金をもっと引き下げようとさえ試み、労働者が反抗すると幾千の飢えた家族を街頭にほうりだすとき、――そのとき労働者は、資本家階級全体が労働者階級全体の敵であり、労働者がたよりにできるのはただ自分と自分たちの団結だけであることを、はっきりとさとるのである。非常によくあることだが、工場主は、なにかつまらない施し物、なにか偽りの約束で労働者をごまかし、自分を彼らの恩人のように見せかけ、労働者にたいする自分の搾取をおおいかくそうと、全力をつくす。あらゆるストライキは、労働者に、彼らの「恩人」が羊の皮をかぶった狼だということを示すことにより、この欺瞞の全体を一撃のもとに打ちこわすのが常である。

しかしストライキは、資本家にたいして労働者の目をひらかせるだけでなく、政府にたいしても、法律にたいしても、同様に労働者の目をひらかせる。工場主が自分を労働者の恩人のように見せかけようと努めるのとちょうど同じように、役人とその取りまきどもは、ツァーリやツァーリ政府が、工場主のことも労働者のことも公平に一視同仁に心をくばっているのだと、労働者に信じこませようと努力する。労働者は法律などは知らないし、役人、とくに高級役人とは交渉がないので、しばしばこういうことをすっかり信じてしまう。だが、そこへストライキが起こったとする。工場には、検事や、工場監督官や、警官隊や、しばしば軍隊までが現われる。労働者は、自分たちが法律に違反したのだということを知らされる。法律は、工場主には、集会をもつことも、またどうしたら労働者の賃金を引き下げられるかについて公然と論じることも、許しているのに、労働者が共同で申合せをすれば、犯罪人だと宣告される！労働者はその住宅から追いたてられ、警察は労働者が品物を掛けで買える小店を閉鎖し、兵士を労働者にけしかけようと努める。兵士には、労働者を射撃せよ、という命令さえあたえられる。そして、兵士が、逃げてゆくものをうしろから射撃して素手の労働者を殺せば、ツァーリ自身が軍隊に感謝をおくる（ツァーリは、一八九五年にヤロスラヴリで罷業労働者を殺した兵士に、このように感謝した[二七]）。ツァーリ政府は、資本家を守り労働者の手足をしばる最も凶悪な労働者の敵だということが、すべての労働者に明瞭となる。法律はただ金持の利益のためだけに出されていること、役人も金持の利益だけを守っていること、働く人民は口をふさがれ、自分の必要について述べる可能性をあたえられていないこと、労働者階級はストライキの権利、労働者新

聞を発行する権利、法律の発布やその履行の監督にあたるべき人民代表機関に参加する権利を、どうしてもかちとらなければならないということを、労働者は理解しはじめる。また政府自身も、ストライキが労働者の目をひらかせることを、非常によく理解している。だからこそ政府は、ストライキをあれほど恐れ、なんとしてでもできるだけはやくストライキを消しとめようと努力するのである。社会主義者および自覚した労働者を全力をあげて迫害したことでとくに名を売ったドイツのある内務大臣が、かつて国民代表をまえにして、「あらゆるストライキのかげから革命のヒドラ（怪物）が顔を出す」と述べたのも、無理からぬことである。政府は労働者の敵であり、労働者階級は人民の権利のために政府との闘争にそなえなければならないという意識が、ストライキのたびに労働者のうちに強まり発達してゆく。

こうして、ストライキは労働者を団結に慣れさせる。ストライキは、労働者が共同してこそはじめて資本家にたいする闘争をおこなうことができるということを、労働者に示してくれる。ストライキは、工場主の全階級と専権的・警察的政府とにたいする全労働者階級の闘争について考えることを、労働者に教える。それだからこそ、社会主義者はストライキを「戦争の学校」とよぶのである。それは、労働者が、役人の圧制と資本の圧制とから全人民と全勤労者を解放するために自分たちの敵にたいする戦争をおこなう道を学ぶ学校である。

しかし、「戦争の学校」はまだ戦争そのものではない。労働者のあいだにストライキが広くひろがると、一部の労働者は（一部の社会主義者も）次のように考えはじめる。労働者階級はただストライキおよびストライキ基金あるいはストライキ団体だけに局限してよい、ストライキだけを手段として、労働者階級は、自分たちの状態の重大な改善や自分たちの解放をさえもかちとることができる、と。労働者の団結や、彼らの小さなストライキでさえもが、どれほど大きな力であるかをみて、一部のものはこう考える。労働者が全国にわたってゼネラル・ストライキを組織しさえすれば、資本家と政府から自分たちのほしいものをなんでもかちとることができる、と。労働運動が始まりかけたばかりで、労働者がまだ非常に未経験であったころは、他の国々でも労働者はこういう意見を表明した。しかしこの意見はまちがっている。ストライキは労働者階級の自己解放のための闘争手段の一つにすぎないのであって、それの唯一の手段ではない。もし労働者が他の闘争手段に注意を向けないなら、彼らはそれによって労働者階級の成長と成功を遅らせてしまうだろう。じっさい、ストライキが成功

するには、ストライキの期間中労働者の生活を維持するための基金が必要である。こうした基金組合をも、労働者は（ふつう個々の業種、個々の職種または同職の労働者で）すべての国で組織している。しかしわがロシアでは、警察がそれをさぐりだして金を没収し、労働者を逮捕してしまうので、これはとくに困難である。もちろん、労働者は警察から隠れるすべも知っている。こういう基金組合を設けることは、もちろん有益だし、われわれも労働者がそういうことにたずさわるのをとめようとは思わない。しかし、法律が労働者の基金組合を禁止している状態では、それが多数の加入者を引きつけうると期待するわけにはいかない。だが加入者数が少なければ、労働者基金組合はたいした利益をもたらさないであろう。次に、労働組合が自由に存在していて、組合が巨額の基金をもっている国においてさえ、労働者階級は彼らの闘争をストライキだけに限定することはけっしてできない。産業経営にゆきづまり（たとえばロシアでもいま近づきつつある恐慌）が起これば、工場主はわざとストライキをおこさせることさえある。ときには一時操業を中止するほうが工場主に有利であり、また労働者基金を破綻させるのが彼らに有利だからである。だから、労働者はけっしてストライキとストライキ団体だけに局限するわけにはゆかない。第二に、ストライキは、労働者がすでにかなりの意識をもっていて、ストライキの時機をえらぶことを知っており、要求をかかげることを知っており、リーフレットや小冊子を手に入れるために社会主義者との結びつきをもっているところでだけ、成功裏におこなわれる。だが、そういう労働者はロシアにはまだ少ない。そこで、そういう労働者の数をふやし、労働者大衆に労働者の事業を知らせ、社会主義と労働者の闘争とを彼らに知らせることに、全力をむける必要がある。この任務は、社会主義者と自覚した労働者とがいっしょになって引きうけなければならないものであって、そのために社会主義的な労働者党をつくらなければならない。第三に、ストライキは、まえにみてきたように、政府が労働者の敵であり、政府と闘争しなければならないことを、労働者に示してくれる。そしてすべての国で、ストライキは実際に、労働者の権利と全人民の権利のために政府と闘争することを、しだいに労働者階級に教えた。こうした闘争をおこなうことができるのは、すでにいま述べたように、政府と労働者の事業とについての正しい考えを労働者のあいだにひろめる社会主義的労働者党だけである。わがロシアでストライキがどのようにおこなわれているか、また自覚した労働者はストライキをどう利用すべきか、ということについては、こんどまた別個に述べることにする。いまはわれわれは、ストラ

イキは、すでにまえのほうで注意しておいたように、「戦争の学校」ではあるが戦争そのものではないということ、ストライキは闘争の一手段にすぎず、労働運動の一形態にすぎないということを、指摘しておかなければならない。労働者は、個々のストライキから、全勤労者の解放をめざす全労働者階級の闘争にうつることができるし、うつらなければならないし、また、すべての国で実際にうつっている。すべての自覚した労働者が社会主義者に、すなわち、そうした解放をめざして努力する人になるとき、彼らが、労働者のあいだに社会主義をひろめ、労働者に彼らの敵にたいする闘争のあらゆる手段を教えるために、たがいに全国的に団結するとき、また彼らが、政府の圧制から全人民を解放し、資本の圧制から全勤労者を解放するためにたたかう社会主義的労働者党をつくるとき、――そのときにはじめて労働者階級は、すべての労働者を統合して「万国のプロレタリア、団結せよ！」としるされた赤旗をかかげる、万国の労働者のあの偉大な運動に完全にくわわるのである。

一八九九年末に執筆
雑誌『プロレタールスカヤ・レヴォリューツィヤ』一九二四年第八―九号にはじめて発表
全集、第五版、第四巻、二八八―二九八ページ所収
邦訳全集、第四巻、三三五―三四六ページ所収

『イスクラ』編集局の声明

編集局から

政治新聞『イスクラ』[三〇]の刊行を企画するにあたって、われわれは、われわれがなにを志向しており、また自分たちの任務をどのように理解しているかについてひとこと述べておく必要があると考える。

われわれは、ロシアの労働運動とロシア社会民主主義の歴史上きわめて重要な時機に当面している。最近数年間の特徴は、わが国のインテリゲンツィアのあいだに社会民主主義思想が驚くほどすみやかに普及したことである。そして、この社会思想の潮流に呼応して自主的に発生した工業プロレタリアートの運動がすすんでいる。彼らは、抑圧者に対抗して団結し闘争しはじめ、熱烈に社会主義を志向しはじめている。労働者と社会民主主義的インテリゲンツィアのサークルがいたるところに出現し、地方的な扇動リー

フレットがまかれ、社会民主主義の文献にたいする需要は供給をはるかにこえてふえており、政府の迫害の強化もこの運動をおさえる力はない。刑務所はいっぱいにつまり、流刑地は人であふれており、また、ロシアのすみずみで「一斉検挙」がなされたとか、輸送中に文書が押収されたとか、文書や印刷所が没収されたとかいう話を耳にしない月はほとんどないが、しかし運動はますます成長し、ますます大きな地域をとらえ、ますます深く労働者階級のなかに浸透し、ますます公衆の注意を引くようになっている。そして、ロシアの経済的発展のすべて、ロシアの社会思想とロシアの革命運動の全歴史は、社会民主主義的労働運動が、あらゆる障害を排して成長し、結局はそれらの障害を克服するであろうということを、保証している。

しかしその半面、最近とくに目につくわれわれの運動の主要な特徴は、その分散性であり、そのいわば手工業的な性格である。すなわち、各地方サークルはたがいに無関係に発生し活動しており、それどころか（これがとくに重要なことだが）同じ中心地で活動してきたしまた現に活動しているいろいろのサークルとさえ、無関係に活動している。伝統は確立されず、継承性がない。そして地方的文書は、運動が分散しており、ロシア社会民主主義によってすでにつくりだされたものとの結びつきが欠けていることを、そのまま反映している。

この分散性と、運動の力とひろがりによって生みだされている要請とのあいだの不一致をどうするかが、われわれの考えでは、運動の発展の分かれ道となっている。運動そのもののうちには、自分の地歩をかためて、明確な形態と組織をつくりあげようとする要求が、押えがたい力で現われているが、他方、実践活動をしている社会民主主義者のあいだでは、このようにより高度の運動形態にうつる必要性がどこでも意識されているというわけではけっしてない。反対に、かなり広範なサークルのなかに、思想の動揺、流行の「マルクス主義批判」と「ベルンシュタイン主義」[三]への心酔、いわゆる「経済主義的」[三]傾向をもった見解の普及、そしてそれと切りはなせないように結びついて、運動を最も低い段階に引きとめておこうとする志向、全人民の先頭に立って闘争する革命党を結成する任務を背面に押しやろうとする志向が、見られる。ロシア社会民主主義者のあいだにこの種の思想の動揺が見られること、全体としての運動の理論的解明から切りはなされた狭隘な実践主義が運動をまちがった道にそらす恐れがあること――これが事実であり、われわれの組織の実態を直接に知っている大多数のものには、このことは疑う余地がない。また、これを確証する著作もある。たとえば、すでにまったく正当な抗議を

呼びおこした『クレード』（三三）や、新聞『ラボーチャヤ・ムィスリ』の全体をつらぬいている傾向をきわめてくっきりと表現した『「ラボーチャヤ・ムィスリ」別冊付録』（一八九九年九月）や、また最後に、同じ「経済主義」（三四）の精神で書かれたペテルブルグ「労働者階級自己解放団」の檄をあげるだけで十分である。『クレード』は個々人の意見以上のものではなく、『ラボーチャヤ・ムィスリ』の傾向は同紙編集局の混乱と不器用さを表現するにすぎず、ロシアの労働運動の歩みそのものにおける特別の一傾向を表現するものではないという『ラボーチェエ・デーロ』（三五）の主張は、完全に事実に反する。

だが、これとならんで、読書界が今日まで多少とも根拠をもって「合法」マルクス主義の有力な代表者と考えてきた著述家たちの著作のうちには、ブルジョア弁護論に接近する見解への転向がますますあらわになっている。すべてこうしたことの結果は運動の混乱と無政府性であって、そのおかげで、かつてのマルクス主義者、より正しくいえばかつての社会主義者ベルンシュタインは、自分の成功をかぞえたてて、ロシアで活動している社会民主主義者の大多数が彼の追随者から成っているかのように印刷物で言明し、なんの反論もうけずにすんだのである。

われわれは事態の危険性を誇張するつもりはないが、この危険性に眼をふさぐほうがはかりしれないほど有害だろう。だからわれわれは、その文筆活動を再開し、社会民主主義の曲解と卑俗化の試みにたいする系統的な闘争を開始するという「労働解放」団の決定を、心から歓迎するのである。

すべてこうしたことから生じる実践的結論は、われわれロシアの社会民主主義者は結束して、革命的社会民主主義の単一の旗印のもとにたたかう強固な党の結成に全力をそそがなければならない、ということである。この任務こそ、ロシア社会民主労働党を結成し、党の『宣言』を発表した一八九八年の大会によってすでに示されたものである。

われわれは自分自身をこの党の党員と認め、『宣言』の基本思想と完全に意見を同じくし、党の目標の公然たる声明としてこの『宣言』に重要な意義を認める。それゆえ、党員としてのわれわれにとって、われわれが当面する直接の任務は、党をできるだけ堅固に再興するためにはどのような活動計画を採用しなければならないか、という問題を解決することである。

この問題にたいするありきたりの解答は、中央機関をあらためて選出し、この中央機関に党機関紙の再刊を委託しよう、ということである。だが、われわれがいま際会しているこの混乱の時期には、このような簡単な方法がはたし

て目的にかなうものかどうか、疑わしい。

党を創造して堅固なものにすることは、すべてのロシアの社会民主主義者を統合し、この統合を堅固なものにすることにほかならない。だが、右にあげたいろいろな理由からして、このような統合は、一片の指令でつくりだされるものではなく、たとえばなにかの代表者会議の一片の決定だけで実現できるものではない。それは、まさにつくりあげられなければならないのである。第一に――率直に言おう！――、現在ロシアの社会民主主義者のあいだにひろがっている不一致と混乱を排除する堅固な思想的統合がつくりあげられなければならない。この思想的統合を党綱領によって打ちかためることが必要である。第二には、すべての運動中心地のあいだの連絡をとり、運動にかんする完全な情報を適時に送達し、ロシアのすみずみまで定期刊行物を規則ただしく供給する仕事に専念する組織が、つくりあげられなければならない。このような組織がつくりあげられ、ロシアの社会主義的郵便組織がつくりだされたときにはじめて、党は強固な存在となり、現実の事実となり、したがってまた威力ある政治勢力となるであろう。われわれは、この任務の前半、すなわち、革命的社会民主主義派を思想的に統合することのできる全般的な、原則上一貫した文書をつくりあげることこそ、現在の運動にとって緊急に必要であり、党活動の復興のために欠くことのできない準備の一歩であると考えるので、これに自分たちの努力をささげようとするものである。

すでに述べたように、ロシア社会民主主義者の思想的統合はまだこれからつくりあげなければならないのであるが、そのためには、われわれの考えでは、今日の「経済主義者」や、ベルンシュタイン主義者や、「批判家」がもちだしている原則上および戦術上の基本的諸問題を、公然と全面的に討議することが必要である。統合するまえに、また統合するために、われわれはまず決定的にまた明確に分界線を引かなければならない。そうしないと、われわれの統合は、現在ある混乱をおおいかくし、それの徹底的な除去を妨げる架空のものにすぎなくなる。だから、われわれがわれわれの機関紙を多様な見解のたんなる寄せあつめにするつもりのないことは、言うまでもない。反対に、われわれは厳密に特定の傾向の精神において機関紙を運営するであろう。この傾向はマルクス主義ということばで表現することができる。そしてわれわれが、マルクスとエンゲルスの思想を一貫して発展させることを主張し、E・ベルンシュタイン、ペ・ストルーヴェ、その他多くの人のおかげで今日やすやすと大流行になりおおせた中途半端で散漫な日和見主義的修正を断固として排撃するということは、いま

さらつけくわえるまでもあるまい。しかしわれわれは、あらゆる問題を自分たちの特定の見地から検討しながらも、けっして、われわれの機関紙の紙上で同志のあいだに論戦がおこなわれることを拒否するものではない。すべてのロシア社会民主主義者と自覚した労働者のまえで公然と論戦することは、現在ある意見の相違の深さをはっきりさせるため、論争問題をあらゆる側面から審議するため、また、さまざまな見解の代表者ばかりか、さまざまな地方または革命運動のさまざまな「職種」の代表者さえもが不可避的に陥る極端な考えとたたかうために、必要で望ましいことである。すでにまえに述べたように、われわれは、明らかに食いちがっている見解のあいだに公然たる論戦が欠けていること、きわめて重大な問題にかんする意見の相違をおしかくそうとする志向のあることを、現在の運動の欠陥の一つとさえ考えている。

われわれは、われわれの機関紙の綱領にはいってくる問題や主題をくわしく数えあげることはやめよう。というのは、この綱領は、現在の諸条件のもとで刊行される政治新聞はどのようなものでなければならないかということについての一般的理解から、おのずから生まれてくるからである。

われわれは、すべてのロシアの同志たちがわれわれの出版物を自分自身の機関紙とみなし、あらゆるグループが運動にかんするいっさいの情報をそれに知らせ、自分たちの経験、自分たちの見解、文書にたいする自分たちの要望、社会民主主義的出版物にたいする自分たちの評価、一口にいえば、各グループが運動にもたらしまた運動から引きだすすべてのものを、この機関紙とともに分かちあうようになることを目標として、力のかぎり努力するであろう。ただこのような条件のもとでのみ、真に全国的な社会民主主義的機関紙の創設が可能となるであろう。ただこのような機関紙だけが、運動を政治闘争の大道に引きだすことができる。「われわれの宣伝・扇動活動と組織活動の枠をひろげ、内容を拡充せよ」——このペ・ペ・アクセリロードのことばは、近い将来におけるロシア社会民主主義者の活動を規定するスローガンとならなければならない。そこでわれわれはこのスローガンを自分たちの機関紙の綱領にとりいれる。

われわれは、自分たちの呼びかけを社会主義者および自覚した労働者だけに向けるのではない。われわれは、現在の政治体制によって抑圧され圧迫されているすべての人々にも呼びかけるのである。われわれは、ロシアの専制のあらゆる醜行を暴露するために、われわれの新聞の紙面を彼らに提供する。

社会民主主義派を、もっぱらプロレタリアートの自然発生的闘争に奉仕する組織のことと理解する人々は、地方的扇動や「純労働者向け」文書だけで満足するかもしれない。われわれは、社会民主主義派をそういうふうには理解しない。われわれはそれを、労働運動と不可分に結びついた、絶対主義に反対する革命的政党と理解する。このような党に組織されたプロレタリアート、この現代ロシアの最も革命的な階級だけが、自己に課せられた歴史的任務――その旗のもとに国内のいっさいの民主主義的分子を統合し、たおれた幾世代の人々の頑強な闘争を、憎むべき制度にたいする最後の勝利をもって完了する任務――を果たすことができるであろう。

***

新聞は、各号およそ印刷全紙一―二枚の大きさで発行されるであろう。

ロシアの非合法出版物がおかれている事情からみて、発行の期日はまえもってさだめない。

われわれにたいして、国際社会民主主義の若干のすぐれた代表者たちの寄稿、「労働解放」団（ゲ・ヴェ・プレハーノフ、ペ・ペ・アクセリロード、ヴェ・イ・ザスーリチ）のきわめて密接な参加、さらに、ロシア社会民主労働党の若干の組織とロシア社会民主主義者の個々のグループの支持が約束されている。

一九〇〇年九月に執筆

一九〇〇年に『イスクラ』出版部の単行リーフレットとして発表

全集、第五版、第四巻、三五四―三六〇ページ所収

邦訳全集、第四巻、三八四―三九〇ページ所収

なにから始めるべきか？(一〇)

「なにをなすべきか？」という問題は、近年とくにつよくロシアの社会民主主義者のまえに打ちだされている。この場合問題になっているのは、（八〇年代の終りと九〇年代の初めにそうであったように）どの道をえらぶかという ことではなく、一定の道に沿ってわれわれはどういう実践的な歩みを、まさにどのようにすすめるべきか、ということである。問題になっているのは実践活動の方式と計画のことである。そして、闘争の性格と方法という、実践的な党にとってのこの基本的な問題が、われわれのあいだではいまなお未解決のままになっていて、いまでも重大な意見の相違を引きおこしており、それによって悲しむべき思想の不安定と動揺が現われていることを、認めなければならない。一方では、政治的な組織と扇動の活動を切りちぢめ狭めようと努める「経済主義的(一一)」傾向は、まだけっして死滅していない。他方では、新しい「風潮」の一つひとつを模倣し、その瞬間の必要を全体としての運動の基本的任務と恒常的な必要から区別することのできない無原則的な折衷主義の傾向が、あいかわらず大手を振って歩いている。よく知られているように、このような傾向が『ラボーチェエ・デーロ』に巣をつくった。同誌の最近の「綱領的」な声明——『歴史的転換』という大げさな標題をもった大げさな論文（『「ラボーチェエ・デーロ」リーフレット(一二)』第六号）——は、この特徴づけをとくに一目瞭然と裏書きしている。まだきのうまでは、「経済主義」に媚態を示し、『ラボーチャヤ・ムィスリ』にたいする断固たる非難に憤慨し、専制との闘争についてのプレハーノフ流の問題提起を「緩和していた」のだが、きょうはすでに「もし情勢が二四時間以内に変化するなら、戦術もまた二四時間以内に変更しなければならない」というリープクネヒトのことばを引用しており、すでに専制にたいする直接の攻撃のため、突撃のための「強固な戦闘組織」のことを、「大衆のあいだでの広範な革命的・政治的（見よ、こんなにも精力的なのだ、革命的でもあれば、政治的でもある！）扇動」のことを、「街頭抗議への倦むことのない呼びかけ」のことを、「激しい（原文のまま！）政治的性格をおびた街頭示威行動を組織すること」その他等々を、論じているのだ。

個々の譲歩をたたかいとるだけでなく、専制の要塞そのものをもたたかいとることを目標とする、強固な、組織された政党をつくりだすという、すでに『イスクラ』第一号にわれわれがかかげた綱領を、[30]『ラボーチェエ・デーロ』がこんなにも急速にわがものとしたということについて、おそらくわれわれは満足を表明してよいであろう。だが、それをわがものにした人々に確固たる観点がまったく欠けていることは、この満足をすっかり台なしにしてしまう恐れがある。

もちろん、『ラボーチェエ・デーロ』は、いわれもなくリープクネヒトの名を受けいれているのである。なんらかの特殊な問題についての扇動の戦術や、党を組織するうえでのなんらかの細目を実行するための戦術なら、二四時間以内に変更するということもできるが、戦闘組織や大衆のあいだでの政治的扇動が、一般に、いつでも、無条件に必要かどうかについての自分の見解を、二四時間以内はおろか、二四ヵ月以内にでも変更するというのは、なんの原則ももたない人でなければできないことである。情勢の相違や時期の交替を言いたてるのは、笑うべきことである。戦闘組織をつくりだし、政治的扇動をおこなうために活動することは、どんなに「平凡な、平和な」情勢のもとでも、どんなに「革命的精神の衰退」の時期にでも、ぜひやらなければならないことである。それだけでない。こうした情勢、こうした時期にこそ、右のような活動がとくに必要なのである。なぜなら、爆発と燃えあがりの瞬間に組織をつくりだすのではもう遅いからである。組織は、ただちにその活動を展開できるように待機していなければならない。「二四時間以内に戦術を変更する」! だが、戦術を変更するためには、まえもって戦術をもっていなければならない。ところで、もしあらゆる情勢のもとでの、またあらゆる時期における政治闘争の試練を経た強固な組織がないなら、堅固な原理に照らしだされ、確固として実行される系統的な活動計画などは、問題にさえなりえない。そしてそういう活動計画だけが戦術とよばれるに値するのである。じっさい、見たまえ。すでにわれわれにむかって、「歴史的瞬間」がわが党に「まったく新しい」問題――テロルの問題――を提起した、という人がいる。きのうまでは政治的な組織と扇動の問題が「まったく新しい」問題であったのだが、きょうはテロルの問題がそれだというのだ。これほどまでに自分の素性をおぼえていない人々が戦術の根本的変更を論じるのを聞くのは、奇妙なことではないだろうか?

さいわい、『ラボーチェエ・デーロ』はまちがっている。テロルの問題は新しい問題ではけっしてない。そのことは、

ロシア社会民主主義の確立された見解を簡単に思いだしてみるだけで十分にわかる。

われわれはけっして原則上テロルを拒否しなかったし、また拒否することはできない。テロルは、戦闘の一定の諸条件のもとでは、まったく有用なものでありうるし、また必要なものでさえありうる軍事行動の一つである。だが、ことの核心はまさに次の点にある。それは、現在ではテロルはけっして、闘争の全体系と密接に結びつき、それに適合させられた、野戦軍の作戦の一つとして提起されているのではなく、どの軍隊からも独立している自主的な単独攻撃の手段として提起されているという点である。そして、中央の革命組織が存在せず、地方的な革命組織が弱い場合には、テロルはこれ以外ではありえない。だからこそ、われわれは、現在の情勢のもとでは、このような闘争手段は時宜に適せず、目的にかなわないものであって、最も活動的な闘士たちを、運動全体の利益にとって最も重要な、彼らのほんとうの任務からそらせるものであり、政府の勢力ではなく革命の勢力を解体させるものであると、きっぱり宣言するのである。最近のいろいろの事件を思いだしてみたまえ。われわれの面前で都市労働者と都市の「庶民」の広範な大衆が闘争へ突きすすんでいるのに、革命家は指導者と組織者の参謀本部をもたないのである。こういう事情のもとで最も精力的な革命家たちがテロルにはしることは、真剣な期待をかけることのできる唯一の戦闘部隊を弱める恐れがないだろうか？　またそれは、革命組織と、不満をいだき、抗議に立ち、闘争の心がまえをもっている人々の分散した大衆――まさに分散しているためにこそ弱体であるその大衆――とのあいだの結びつきを、断ちきる恐れがないだろうか？　だが、まさにこの結びつきにこそ、われわれの成功の唯一の保証があるのだ。われわれは、個々ばらばらの英雄的打撃の意義をいっさい否定しようとはけっして思わないが、現在、きわめて多数の人々があのように強く心をひかれているテロルへの心酔にたいし、テロルを主要で基本的な闘争手段と認めることにたいして、全力をあげて警告することが、われわれの責務である。テロルはけっして通常の軍事行動となることはできない。それは、最良の場合でも、決定的突撃の一つの方法として役だつだけである。そこで、問題はこうである。われわれは現在の瞬間にこのような突撃へと呼びかけることができるだろうか？　みたところ、『ラボーチェエ・デーロ』は、しかり、と考えているようである。すくなくとも同誌は、「突撃隊を編成せよ！」と叫んでいる。だが、これはまたしても無分別な熱中である。われわれの軍隊の主力は、義勇兵と蜂起者であ

る。われわれには、常備軍としてはいくらかの小部隊があるだけである。しかも、それらは動員されておらず、たがいに結びつきがなく、突撃隊はおろか、総じて戦闘部隊を編成することにさえ慣れていない。このような事情のもとでは、現在の瞬間におけるわれわれのスローガンが、「突撃せよ」ではありえず、「敵の要塞の規則だった包囲を組織せよ」であるべきだということは、われわれの闘争の一般的諸条件を概観する能力をもち、諸事件の歴史的経過のいかなる「転換」にさいしてもこの一般的諸条件を忘れないすべての人々にとって、明らかでなければならない。言いかえれば、わが党の直接の任務は、現存の全勢力をいますぐ攻撃に呼びかけることではありえないのであって、すべての勢力を統合して、名目上だけでなく実際にも運動を指導する能力のある革命的組織、すなわち、つねにあらゆる抗議やあらゆる燃えあがりを支持する用意があり、それらを利用して決戦に役だつ兵力を増大させ強化する能力のある革命的組織をつくりあげるように、呼びかけることでなければならない。

　二月と三月の事件(二九)の教訓はきわめて感銘深いものであるので、いまではこういう結論にたいする原則上の反論に出会うことは、ほとんどありえないくらいである。しかし現在われわれに必要なことは、問題の原則上の解決ではなく、実践上の解決である。まさにどういう組織が、まさにどういう活動のために必要であるかを、会得することが要求されているだけでない。すべての方面から組織の建設に着手することができるように、一定の組織計画をつくりあげることが、要求されているのである。われわれは、この問題の緊急の重要性を考えて、われわれとしてもこの計画の下書きを提出して、同志諸君の参考に供することに決めた。(三〇)なお、この下書きは、われわれが目下印刷準備中の小冊子のなかで、さらにくわしく展開されている。

　われわれの意見では、活動の出発点となり、望ましい組織をつくりだすための実践的な第一歩となり、最後に、われわれがこの組織をたゆみなく発展させ、ふかめ、拡大することができるために掌握すべき基本的な糸口は、全国的政治新聞の発行でなければならない。われわれにはなによりもまず新聞が必要である。原則のうえで一貫した、全面的な宣伝扇動を系統的におこなうことは、一般に社会民主主義の恒常的な主要任務であり、政治や社会主義の諸問題にたいする関心が最も広範な住民層のあいだに呼びおこされている現在の瞬間ではとくに緊要な任務であるが、それをおこなうことは新聞なしには不可能である。そして、個人的な働きかけや、地方的なリーフレットや、小冊子などによるばらばらの扇動を、一般化された規則ただしい扇動

――それは定期刊行物の助けを借りてのみおこなうことができる――によって補う必要が、いまほどつよく感じられたことは、かつてなかった。新聞発行の回数と規則ただしさ（と普及）の度合いは、われわれの戦闘活動のこの最も始原的で最も緊要な部門が、われわれのもとでどれほどしっかり組織されているかをはかる、最も正確な測定器となりうる、といってもおそらく誇張ではあるまい。さらに、われわれに必要なのは、まさしく全国的な新聞である。もしわれわれが、人民と政府にたいして印刷物上の言論によっておこなうわれわれの働きかけを統一することができないなら、またそれができないあいだは、ほかの、もっと複雑で困難な、しかしもっと断固たる働きかけの方法を統一するなどという考えは、空想でしかないだろう。われわれの運動の欠陥は、思想上でも、実践上、組織上でも、なによりもその分散性にあり、圧倒的多数の社会民主主義者が純然たる地方的活動にほとんどまったく没頭しきっており、この地方的活動が彼らの視界をも、彼らの活動の規模をも、彼らの秘密活動の熟練と訓練をも、せばめていることにある。まさにこの分散性のうちにこそ、われわれがまえに述べた不安定と動揺の最も深い根源を求めなければならない。そして、この欠陥からの解放をめざす途上での、多くの地方的運動を単一の全国的運動に転化する途上での第一歩は、全国的新聞の発行でなければならない。最後に、われわれにぜひとも必要なのは政治的な新聞である。現代ヨーロッパでは、政治的機関紙なしには政治運動の名に値する運動は考えられない。それなしには、政治的不満と抗議のいっさいの要素を集積して、それらによってプロレタリアートの革命運動をみのらせるというわれわれの任務は、絶対に果たすことができない。われわれはすでに第一歩を踏みだした。われわれは、労働者階級のうちに、「経済的」暴露、工場内の状態の暴露にたいする熱情を呼びさました。われわれは次の一歩を踏みださなければならない。それは、いくらかでも自覚したあらゆる人民層のなかに、政治的暴露の熱情を呼びさますことである。政治的暴露の声が現在このように弱々しく、まれであり、おずおずしているからといって、心を悩ませるにはおよばない。そのことの原因は、だれもかれもが警察の専横にあまんじているためではけっしてない。それは、暴露をおこなう能力と覚悟をもっている人々にとって、人に語りかけることのできる演壇がなく、弁士のことばに熱情をもって耳を傾け激励をおくる聴衆がいないためであり、また彼らが、「全能の」ロシア政府にたいする苦情を訴えかけるだけの骨おりに値する勢力を、人民のなかのどこにも見ないためである。だが、いまではこのすべてのことが、非常な速さで変化しつつある。この

ような勢力は存在している。それは、革命的プロレタリアートである。彼らは、政治闘争への呼びかけに耳を傾けてそれを支持するだけでなく、勇敢に闘争に身を投ずる覚悟があることを、すでに立証した。いまではわれわれは、ツァーリ政府の全人民的暴露をおこなうための演壇をつくりだすことができるし、またつくりだす義務がある。社会民主主義新聞こそ、そのような演壇でなければならない。ロシアの労働者階級は、ロシア社会の他の階級や階層と違って、政治的知識にたいする不断の関心を示しており、非合法文献にたいして不断に（特別な激動の時期ばかりでなく）巨大な需要を示している。このような大量の需要が存在し、経験ある革命的指導者の養成がすでに始まっており、労働者階級が大都市の労働者街や工場町で事実上の主人となるほどに集積されているもとでは、政治新聞の発行は、まったくプロレタリアートの力に相応した仕事である。そして新聞は、プロレタリアートを仲介として、都市の小市民や、村のクスターリや、農民のあいだに浸透してゆき、真の人民の政治新聞となるであろう。

けれども新聞の役割は、ただ思想をひろめることだけに、政治教育をおこない政治的同盟者を引きつけることだけに、限られるものではない。新聞は、集団的宣伝者および集団的扇動者であるだけでなく、集団的組織者でもある。この最後の点では、新聞を建築中の建物のまわりに組まれる足場にたとえることができる。それは、建物の輪郭をしるし、個々の建築工のあいだの連絡を容易にし、彼らが仕事の割りふりをおこない、組織的な労働によってなしとげる共同の成果を概観するのを助ける。新聞に助けられ、また新聞と結びついて、地方的活動だけでなく規則ただしい共同の活動にも従事する恒常的な組織が、おのずから形づくられてくるであろう。そういう規則ただしい共同の活動は、自己の成員たちに、政治的諸事件を注意ぶかく観察し、それらの意義やいろいろの住民層にたいするそれらの影響を評価し、革命党がこれらの事件に働きかけるための適切な方法をつくりあげる習慣をつけさせる。新聞にたいする材料の規則ただしい供給と、新聞の規則ただしい配布とを確保するという技術的任務ひとつのためにも、単一の党の地方的受任者たち——たがいに生きいきとした連絡をたもち、全般的な事態に通じており、全国的活動の細分された諸機能を規則ただしく遂行することに慣れており、あれこれの革命的行動を組織することで自分の力をためす協力者たち*——の網をつくりださなければならなくなる。この受任者網は、まさにわれわれに必要な組織の骨組みとなるであろう。それは、全国を包括するほど十分に大きく、厳密で細部にわたる分業をおこなうほど十分に広範かつ多面的で

あり、どういう事情のもとでも、どういう「転換」や突発事件にさいしても終始一貫着実に独自の活動をおこなうことのできるほど十分にしっかりしており、一方では、兵力において圧倒的に優勢な敵が全兵力を一地点に集結したときにはこの敵との野戦を避け、他方では、この敵の不敏活さを利用して敵が最も攻撃を予期しない場所と時機をえらんでこれを攻撃することのできるほど、十分に屈伸性のある組織である。きょうわれわれが当面しているのは、大都市の街頭でデモンストレーションをおこなう学生を支持するという比較的たやすい任務である。あすは、おそらくもっと困難な任務、たとえば、ある地方での失業者の運動を支持するという任務がもちあがるであろう。あさってはわれわれは、農民一揆に革命的なやり方で参加するため、自分の部署につかなければならないかもしれない。きょうは、われわれは、政府のゼムストヴォ征伐によってつくりだされた政治情勢の激化を利用しなければならない。あすはわれわれは、馬脚をあらわしたあれこれのツァーリのバシバズークにたいする住民の憤激を支持し、ボイコットや、攻撃カンパニアや、示威行動、等々の手段でこれをこらしめるのを助け、バシバズークが公然と退却するほかないようにさせなければならない。これほどまでの戦闘準備は、常備軍の恒常的な活動にもとづいてはじめてつくりあげることができるのである。そして、もしわれわれが共同の新聞の運営に力をあわせるなら、そのような活動は、最も有能な宣伝者だけでなく、必要な瞬間に決定的戦闘のスローガンをあたえ、その戦闘を指導する能力のある、最も巧妙な組織者、最も才能のある政治的党指導者をも、養成し押しだしてゆくであろう。

* このような受任者が、わが党の各地の地方委員会（グループ、サークル）と完全に密接な関係をたもっていなければ、うまく活動できないことは、わかりきっている。そのうえ一般にわれわれがここに略述している計画全体は、もちろん、各地の委員会の最も積極的な支持があってはじめて実現できるのである。これらの委員会は、これまで、一度ならず党の統合のための措置をとったし、また――われわれの確信するところでは――この統合を、きょうでなければあす、この形でなければ別の形で、達成するであろう。

最後に、起こりうる誤解を避けるために、ひとこと述べておこう。われわれは終始、系統的、計画的な準備のことだけを論じてきた。しかし、そのことによってわれわれはけっして、専制はもっぱら正規の包囲または組織された突撃によらなければ倒れるものでない、などと言おうとしたのではない。そういう見解はばかげた空論である。反対に、あらゆる方面から不断に起こりかねない自然発生的な爆発、または予見しえない政治的紛糾のどれか一つの圧力のもと

に、専制が倒れるということは、まったくありうることであるし、歴史的にはそのほうがはるかにありそうなことである。だが、どのような政党も、冒険主義におちいることなしには、そのような爆発や紛糾をあてにして自分の活動を立てることはできない。われわれは独自の道をすすみ、たゆみなく独自の系統的活動をおこなわなければならない。突発事件をあてにすることがすくなければすくないほど、われわれはそれだけ、どんな「歴史的転換」にも不意討ちをくわないですむのである。

一九〇一年五月執筆
一九〇一年五月『イスクラ』第四号に発表
全集、第五版、第五巻、一―一三ページ所収
邦訳全集、第五巻、三―一一ページ所収

ロシア社会民主党の農業綱領(三)

一

ロシア社会民主党にとって「農業綱領」が必要なことを詳しく証明する必要は、おそらくないであろう。われわれは農業綱領を、農業問題における、すなわち、農業にたいする、また農村住民の種々の階級、層、群にたいする、社会民主党の政策の指導原理を規定するものと、解する。ロシアのような「農業」国では、当然、社会主義者の農業綱領は、もっぱらとはいえないにしても、主として「農民綱領」であり、農民問題にたいする態度を規定する綱領である。大土地所有者、農業賃金労働者、「農民」――これが、ロシアをふくめてあらゆる資本主義国における農村住民の三つの主要な構成部分である。そして、上述の三つの構成

部分のうちの前二者（土地所有者と労働者）にたいする社会民主主義者の態度は、すでにおのずから明確で明白であるとしても、「農民」については概念そのものがすでに不明確であり、まして農民の生活様式とか農民の進化とかいう根本問題にたいするわれわれの政策にいたっては、なおさらそうである。西欧で、社会民主主義者の農業綱領の全核心をなすのがほかならぬ「農民問題」だとするならば、ロシアではまだまだそうでなければならない。われわれの流派はロシアではまだまったく若く、また古いロシア社会主義全体は結局のところ「農民」社会主義であっただけに、われわれロシアの社会民主主義者にとっては、農民問題におけるわれわれの政策をきわめて明確に規定することがいっそう必要である。なるほど、わが国のあらゆる色合いのナロードニキ的社会主義者の残した遺産の守護者をもって自任している数多くのロシア「急進主義者」には、社会主義的なものはもはやほとんどまったく残っていない。だが、「労働者」問題がすでにロシアの社会＝政治生活の前景に押しだされているという事実、そしてこの問題については彼らはなんら確固たる原理を持たず、彼らの十分の九はこの問題では実質上最も月なみなブルジョア的社会改良主義者であるという事実を塗りかくすことが、彼らにとって快適であればあるほど、それだけに彼らはすべて、「農民問題」にかんするわれわれとの意見の相違をこのんで前面に押しだしている。最後に、この労働者問題にかんしてはほとんどすっかりロシア急進主義者と（あるいは自由主義者と？）合流してしまった多数の「マルクス主義批判家」もまた、ほかならぬ農民問題を強調しようと努めている。彼らによると、「正統マルクス主義」は、この農民問題ではベルンシュタイン、ブルガコフ、ダヴィドフ、ヘルツのたぐい、さらには……チェルノフのたぐいの「最新の労作」によって、他のどこでよりも面目を失わせられているというのだ！

次に、「進歩的」な諸流派の理論的混迷や理論上のたたかいとはべつに、運動そのものの純実践的な要請が、最近では農村における宣伝と扇動という任務を提起している。だが、この仕事をいくらかでも真剣かつ広範に組織してゆくことは、原則の点で一貫し政治的に適切な綱領がなければ不可能である。そしてロシアの社会民主主義者は、それが特別な一流派としてこの世に現われたそもそもの初めから、「農民問題」の全重要性を認めていた。「労働解放」団が作成して一八八五年に出版したロシア社会民主主義派の綱領草案には、「土地関係（農民の土地の買取りと分与の条件）の抜本的改訂」の要求がかかげられていることを、思いおこそう。*ゲ・ヴェ・プレハーノフもまた小冊子『ロシ

アの飢饉との闘争における社会主義者の任務について』（一八九二年）のなかで、農民問題における社会民主主義的政策について述べている。

＊ ペ・ベ・アクセリロードの小冊子『ロシア社会民主主義者の今日の任務と戦術の問題によせて』、ジュネーヴ、一八九八年、付録を見よ。

だから、『イスクラ』がその初期のある号（一九〇一年四月、第三号）の『労働者党と農民』（三三）という論文のなかで、ロシア社会民主主義者の農業政策の諸原則にたいする態度を規定して、農業綱領の大要をあたえたのは、まったく当然のことであった。この論文は、ロシア社会民主主義者の非常に多くのものを当惑させた。われわれはこの論文について、編集局あてに意見や手紙を多数受けとった（二）。主要な反対意見を呼びおこしたのは、切取地の返還にかんする条項であった。そこでわれわれは、この問題について『ザリャー』（三三）誌上で討論を開始するつもりであったが、そのとき、『イスクラ』の農業綱領をことのついでに考究したマルトィノフの論文をのせた『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号が発行された。『ラボーチェエ・デーロ』は、通常聞かれる反対意見の多くのものの総括をおこなっているので、われわれは、さしあたりマルトィノフひとりにたいする回答にとどめても、わが通信員諸君がわれわれに苦情を言わないように、希望する。

私がさしあたりと強調するのは、次のような事情のためである。『イスクラ』紙上の論文は編集局員のひとりが書いたものであって、その他の編集局員は、問題の一般的な立て方については筆者と同意見であっても、細目の点では、個々の点については、もちろん、意見を異にしているかもしれなかった。ところが、われわれの編集局全体（すなわち、「労働解放」団をもふくめて）は、わが党の綱領の編集局共同草案の作成に忙殺されていた。この作成は長びいて（一部は種々の党務と秘密活動上の若干の事情のため、一部は綱領の全面的な審議には特別の会議を必要とするため）、ようやくごく最近になって完了したのである。切取地の返還にかんする条項が私の個人的意見にとどまっていたあいだは、私はこの意見を弁護することを急がなかった。というのは、われわれの共同草案のなかでなお拒否されるか、あるいは根本的に修正されるかもしれないこの個別的条項よりも、われわれの農業政策にかんする問題の一般的な立て方のほうが、私にとってははるかに重要だったからである。いまではもう私はこの共同草案を擁護するであろう。ところで、われわれの農業綱領にたいする批判をわれわれに知らせる労を惜しまなかった「紙友諸君」にたいしては、われわれは、こんどはわれわれの共同草案の批判に

とりくむようにお願いする。

二

この草案の「農業」の部を全文引用しよう。

「古い農奴制度の残存物の除去を目的とし、また農村における階級闘争の自由な発展のために、ロシア社会民主労働党は、次のことを達成するよう努力するであろう。

一 土地買取賦金と年貢支払金の廃止、さらに人頭税負担身分としての農民に現在課せられているあらゆる義務負担の廃止。

二 連帯保証制の廃止と、農民各自が自分の土地を処分するのを拘束しているいっさいの法律の廃止。

三 土地買取賦金および年貢支払金の形で人民から取りたてられた金額の人民への返還。この目的で、修道院財産と帝室領地の没収、ならびに買取金前貸を利用した巨大な土地所有貴族の土地にたいする特別税の賦課。この方法で得られた金額を、村落共同団体の文化的および慈善的必要を満たすための特別の人民基金に充当すること。

四 次の目的のための農民委員会の設置。

（イ） 農奴制度の廃止のさいに農民から切り取られ、地主の手にあって農民を債務奴隷化する道具となっている土地を、村落共同団体に返還するため（収奪、あるいは——土地が手から手にうつっている場合には——買取り、等々によって）。

（ロ） ウラル、アルタイ、西部辺区その他の国内諸地方にそのまま残っている農奴制度の残存物を除去するため。

五 法外に高い小作料を引き下げ、債務奴隷的性格をもつ契約を無効と宣告する権能を、裁判所にあたえること（三）」

読者は、ひょっとすると、「農業綱領」のなかに農村賃金労働者のための要求がなにもないことを不思議に思うかもしれない。このことについては、われわれは次のことを指摘しよう。そういう要求は綱領の一つまえの部にはいっており、そこには、「労働者階級を肉体的および精神的退化から保護するために、また自己の解放をめざす彼らの闘争能力をたかめるために、」わが党が提出する諸要求がふくまれている。傍点を打ったことばは、農村労働者をふくむいっさいの賃金労働者を包含するものであり、綱領のこの部の全一六ヵ条は農村労働者にもあてはまるものである。このように工業労働者と農村労働者を一つの部にいっしょにし、綱領の「農業」の部には「農民」の要求しか残さないことは、たしかに、農村労働者のための諸要求が眼につかず、ちょっと見たのでは気づかれないという不便さを持ってはいる。綱領を表面的に読むと、農村賃金労働者の

ための要求をわれわれが故意にぼかしたという、まったく誤った観念さえあたえられるかもしれない。こういう観念が根本から誤っていることは、あらためて言うまでもない。右に述べた不便さは、実をいうと、まったく外面的なものである。その不便さは、綱領をもっと注意ぶかく読むことによっても、また綱領にたいする注解によっても、たやすく除去することができる（そして、われわれの党綱領は、もちろん、印刷物による注解のほかに、——このほうがはるかに重要であるが——口頭での注解をともなわずに「人民のなかへゆく」ことはないであろう）。なんらかのグループがとくに農村労働者に呼びかけようと思う場合には、そのグループは、労働者のためのあらゆる要求のなかから雇農や日雇いなどにとって最も重要なものだけをとくに抜きだし、それらの要求を特別のパンフレット、リーフレット、あるいは数々の口頭の伝達で説明しなければならないであろう。

原則の点からすれば、綱領のいま論じている二つの部の唯一の正しいまとめ方は、まさに次のような仕方である。すなわち、国民経済のあらゆる部門における賃金労働者のための諸要求をひとまとめにし、「農民」のための諸要求は厳密に分離して別の部に入れるという仕方である。なぜなら、前者の場合と後者の場合とでは、われわれが要求できき、また要求しなければならない事柄の基本的な基準が、全然異なるからである。綱領のいま検討している二つの部の原則的な区別は、草案では、それぞれの部の前文で述べられている。

賃金労働者のためには、われわれは「彼らを肉体的および精神的退化から守り、彼らの闘争能力をたかめる」ような改良を要求している。これに反して、農民のためにわれわれがかちえようとしているのは、「古い農奴制度の残存物の除去と農村における階級闘争の自由な発展」とを促進するような改革にすぎない。ここからして明らかなように、農民のためのわれわれの要求ははるかに狭く、またそれははるかにひかえ目な条件を付けており、より狭い枠内に閉じこめられている。賃金労働者にかんしては、われわれは、近代社会の一階級としての彼らの利益を擁護することを引きうける。われわれがそうするのは、われわれが彼らの階級運動を唯一の真に革命的な運動と考え（綱領の原則的部分にある、他の諸階級にたいする労働者階級の態度についてのことばを参照せよ）、ほかならぬこの運動を社会主義的意識の光によって組織し、方向づけ、啓発しようと努めるからである。ところが農民にかんしては、われわれはけっして、近代社会における小土地所有者および小農耕者の階級としての彼らの利益を擁護することを引きうけはしな

い。全然そうではない。「労働者階級の解放は労働者階級自身の事業でしかありえない」。だから、社会民主党は——直接また全面的には——ひとりプロレタリアートだけの利益を代表し、プロレタリアートの階級運動だけと不可分の一体に融合しようと努めるのである。ところが近代社会のその他の階級はすべて、現存の経済体制の基礎を維持する立場に立っている。だから社会民主党は、一定の事情のもとでしか、また一定の、正確に規定された条件にもとづいてしか、これらの階級の利益の擁護を引きうけることはできない。たとえば、小農耕者をもふくめて、小生産者の階級は、ブルジョアジーにたいするその闘争では反動的階級であり、だから「小経営と小所有を資本主義の攻撃から守ることによって農民を救おうと試みるのは、社会の発展を阻止しようとむだ骨をおること、資本主義のもとでも幸福は可能であるという幻想で農民をあざむくこと、多数者を犠牲にして少数者のために特権的地位をつくりだすことによって勤労諸階級を分裂させることを、意味するであろう」（『イスクラ』第三号[一三]）。これが、われわれの綱領草案のなかの「農民」の諸要求の提起に、二つのきわめて狭い条件がつけられている理由なのである。われわれは社会民主党の綱領における「農民の要求」の正当性を、第一に、これらの要求が農奴制度の残存物の除去にみちびき、第二に、それらが農村における階級闘争の自由な発展を促進する、という条件に従属させているのである。

すでに『イスクラ』第三号で簡単に概説されたこれらの条件のそれぞれを、もっとくわしく立ちいって検討しよう。

「古い農奴制度の残存物」は、わが国の農村ではまだ恐ろしく大きい。これは周知の事実である。雇役と債務奴隷制、農民の身分上および市民的な権利の制限、笞をもった特権的土地所有者にたいする農民の従属、農民を本当の未開人にしている屈辱的な日常生活、——これらすべては、ロシアの農村では例外ではなくて通則であり、またこれらすべては、究極においては農奴制度の直接の遺物である。こういう制度がまだ支配している場合や諸関係において、またこういう制度がまだ支配しているかぎりで、その制度の敵として現われるのは全体としての全農民である。農奴制にたいして、また農奴主的地主および彼らに奉仕する国家にたいして、農民はなお依然として階級であり、しかも資本主義社会の階級ではなく、農奴制社会の階級、すなわち身分的階級である。そして農奴制社会に固有な、「農民」と特権的土地所有者とのこの階級敵対がわが国の農村に存続しているかぎり、そのかぎりで、労働者党は、疑いもなく、「農民」に味方しなければならず、農奴制のあらゆる残存物にたいする彼らの闘争を支持し、その闘争に彼らを

押しやらなければならないのである。

＊　周知のとおり、奴隷制社会と封建社会では、諸階級の差異は住民の身分的区分のうちに固定されており、それにともなって、各階級にとって国家のなかでの特別の法的地位が確定されていた。だから、奴隷制社会と封建社会（そして農奴制社会もまた）の諸階級はまた特別の身分でもあった。これに反して、資本主義社会、ブルジョア社会では、法的にはすべての市民は同権であり、身分的区分は（すくなくとも原則上は）廃止されており、だから階級は身分ではなくなっている。諸階級への社会の分裂は、奴隷制社会にも封建社会にもブルジョア社会にも共通するが、前二者で存在していたのは身分的階級であったのにたいし、後者に存在しているのは身分的でない階級である。

われわれが農民ということばを括弧に入れているのは、この場合なんの疑いもいれない矛盾が存在することを強調するためである。近代社会では農民は、もちろん、もはや単一の階級ではない。だがこの矛盾に困惑するものは、この矛盾が叙述や学説の矛盾ではなくて、生活そのものの矛盾であることを、忘れているのである。それは頭のなかで考えだされた矛盾ではなく、生きた弁証法的矛盾である。わが国の農村で農奴制社会が「近代」（ブルジョア）社会によって駆逐されてゆくかぎり、そのかぎりで農民は階級でなくなり、農村プロレタリアートと農村ブルジョアジー（大、中、小、極小の）とへ分解してゆく。農奴制的関係がなお存続しているかぎり、そのかぎりで「農民」は引きつづき階級である——すなわち、くりかえしていうが、ブルジョア社会の階級ではなく、農奴制社会の階級である。この「……するかぎり——そのかぎりで」という関係は、現代のロシア農村には、農奴制的諸関係とブルジョア的諸関係との極度に複雑な絡みあいの形で、実際に存在している。マルクスの用語でいえば、労働地代、現物地代、貨幣地代および資本主義的地代が、わが国ではきわめて奇妙な仕方で絡みあっている。ロシアのあらゆる経済調査によって確定されたこの事情をわれわれが強調するのは、とくに次の理由からである。すなわち、この事情こそが、一見しただけでは多くの人をひどく驚かせる、われわれの若干の「土地にかんする」諸要求のあの複雑さ、錯雑性、またもしそういいたければ、人為性の、必然的、不可避的な源泉であるからである。提案されている解決策のこの複雑さと「狡猾さ」について一般的な不満を述べるだけに自分の反論をとどめているものは、これほど錯雑した問題の簡単な解決策などはありえないことを忘れているのである。われわれには、農奴制的諸関係のいっさいの残存物に反対してたたかう義務がある。——このことは、社会民主主義者にとってはなんら疑いをいれないところである。だが、これ

らの関係はきわめて複雑な仕方でブルジョア的諸関係と絡みあっているので、われわれは、任務の複雑さを恐れずに、この糸のもつれのいわば芯にはいりこまなければならない。この任務の「簡単な」解決策はたった一つしかありえないだろう。それは、身を避けて、よけてとおり、このごたごたをすっかりかたづける仕事を「自然発生性のありとあらゆるものにまかせるというのである。だが、自然発生性のありとあらゆるブルジョア的および「経済主義的」崇拝者の愛好するこういう「単純さ」は、社会民主主義者にはふさわしくない。プロレタリアートの党は、農奴制のいっさいの残存物との闘争で農民を支持するだけでなく、彼らを前方に押しやらなければならない。そして彼らを前方に押しやるためには、一般的な願望にとどまっているのでは不十分である。明確な革命的指針をあたえることが必要であり、土地関係のもつれを解きほごすのを助けるようにすることが必要である。

三

農業問題の複雑な解決策が避けられないことを、読者がもっと明瞭に頭に描けるように、われわれは読者に、この点について綱領の労働者の部と農民の部を比較してみるようお願いする。前者では、解決策はすべてはなはだ単純で、ほとんど学問のない、ほとんどものを考えたことのない人にさえわかりやすく、「当然」で、身近で、容易に実現できるものである。これに反して、後者では、大多数の解決策ははなはだ複雑で、一見したところ「わかりにくく」、人為的で、あまりありそうになく、なかなか実現できそうもないものである。この違いはどういう理由によるものだろうか？　それは、綱領の作成者が、前者の場合はまじめに実務的に熟考したのに、後者の場合は道にまよい、混乱し、ロマン主義と修辞作文におちいったからであろうか？このような説明は、まったくのところ、はなはだ「単純」であり、子供っぽいほど単純であって、マルトィノフがこれにすがりついたのも、われわれには不思議でない。経済的発展そのものが労働者の小さな諸問題の実際の解決を極度に容易にし単純にしたということを、彼は考えてみなかったのである。資本主義的大規模生産の分野では社会＝経済関係がいちじるしく透明かつ明瞭となり、単純化された（そしてますますそうなりつつある）ので、次にとるべき前進方策はおのずからさだまり、即座に、一見しただけで、頭に浮んでくる。これに反して、農村における資本主義による農奴制の駆逐は、社会＝経済関係をいちじるしく錯雑にし複雑にしたので、当面の実践上の諸問題の解決（革命的社会民主主義の精神での）について大いに思案す

る必要があるのであって、「単純な」解決を案出することは――まえもって完全な確信をもって言えるが――できはしないであろう。

ついでながら、すでに綱領の労働者の部と農民の部との比較をはじめたからには、われわれはさらに両者のあいだの一つの原則的な相違をも指摘しておこう。簡単にいえば、この相違は次のように定式化することができよう。すなわち、われわれは、労働者の部では社会改良的要求の範囲を出てはならないが、農民の部では社会革命的要求をさえかかげるのをためらってはならないのである。あるいは、いいかえれば、労働者の部ではわれわれは無条件に最小限綱領の枠に限定されるが、農民の部ではわれわれは最大限綱領をあたえることができるし、またあたえなければならないのである。* このことを説明しよう。

* 切取地の返還という要求は、農民のためのわれわれの当面の要求（あるいは、われわれの土地要求一般）の最大限ではけっしてなく、だからこの要求は論理的に一貫しない、という反論については、のちに、ここで擁護している綱領の具体的な諸点を論じるさいに、考究することにしよう。「切取地の返還」という要求は、われわれがいますぐわれわれの農業綱領のなかにかかげうる最大限であると、われわれは主張するし、そしてそのことを証明するよう努めるであろう。

どちらの部でも、われわれが述べているのは、われわれの終局目標ではなく、われわれの当面の要求である。だから、われわれはどちらの部でも、近代（＝ブルジョア）社会の基盤のうえにとどまらなければならない。ここに二つの部の相似点がある。しかしこの二つの部の根本的な区別は、労働者の部がブルジョアジーに矛先を向けた諸要求をふくむのにたいして、農民の部は、農奴主的地主に矛先を向けた諸要求をふくんでいるという点にある。（もし封建領主という術語をわが国の領地所有貴族に適用できるかどうかという問題がこれほどの論争問題でなかったなら、私は、封建領主に矛先を向けた、と言いたいところである）。* 労働者の部では、われわれは現存のブルジョア制度の部分的な改善にとどまらなければならない。しかし農民の部では、われわれは、この現存の制度から農奴制のいっさいの残存物を完全に清掃することを、目標としなければならない。労働者の部では、ブルジョアジーの支配の最終的破砕に等しい意義を持つような要求をかかげることはできない。綱領の他の箇所で十分に強調され、当面の要求のための闘争のさいにもわれわれが「一瞬時も」忘れることのないこのわれわれの終局目標を、われわれが達成したあかつきには、われわれプロレタリアートの党は、もはや企業家の責任制とか、工場住宅とかいう問題にとどまらないで、全社会的生産の、したがってまた分配の、管理と処理とをみず

からの手ににぎるであろう。これに反して、農民の部では、われわれは、農奴主的地主の支配を最後的に破砕し、わが国の農村から農奴制のいっさいの痕跡を完全に清掃してしまうのに等しい意義を持つような要求を、提出することができるし、また提出しなければならない。当面の要求の労働者の部では、われわれは社会革命的要求をかかげることはできない。なぜなら、ブルジョアジーの支配を打倒するプロレタリア革命は、もはやわれわれの終局目標を実現するプロレタリア革命だからである。農民の部では、われわれは社会革命的要求をもかかげる。なぜなら、農奴主的地主の支配を打倒する社会革命（フランス大革命がそうであったような、ブルジョアジーの社会革命）は、現存のブルジョア制度の土台のうえでも可能だからである。われわれは、労働者の部では、社会改良の基盤のうえにとどまっている（これはさしあたりのことで、条件つきであり、みずからの独自の意向と意図とをもってではあるが、とにかくそこにとどまっている）。なぜなら、われわれはここでは、ブルジョアジーが（原則上）まだその支配を失うことなしにわれわれにあたえることのできるもの（だからまた、ゾンバルト、ブルガコフ、ストルーヴェ、プロコポーヴィチらの一味が、ブルジョアジーにむかって、分別ぶかく誠意をもってあたえるように、まえもって忠告しているところのもの）だけを、要求しているからである。だが農民の部では、われわれは、社会改良家とは違って、農奴主的地主がわれわれに（あるいは農民に）けっしてあたえず、またあたえることのできないものをも、——すなわち、農民の革命運動が実力をもってでなければ獲得できないものをも、要求しなければならないのである。

＊ 私個人としてはこの問題に肯定的な解答をあたえたいところだが、いまの場合は、いうまでもなく、この解答を基礎づけること、いやそれを提出することでさえ、当を得たことでもなければ、時宜にかなったことでもない。なぜなら、いま問題にしているのは、農業綱領の集団的な、編集局共同草案を擁護することだからである。

四

マルトィノフがわれわれの農業綱領をいとも「やすやす」「粉砕した」さいに用いた、「実現可能性」という「簡単な」基準が不十分で役に立たない理由は、まさにここにある。直接の、近い将来の「実現可能性」というこの基準は、一般に、われわれの綱領のはっきり改良的な部や条項だけに適用しうるものであって、革命党の綱領一般に適用することはけっしてできない。ことばをかえていえば、こ

の基準は、例外としてしかわれわれの綱領に適用できず、通則としてはけっして適用できないのである。われわれの綱領が実現可能なものでなければならないというのは、綱領の一字でも社会＝経済的進化全体の方向に矛盾しないということ、広い、哲学的な意味においてにすぎない。ところで、われわれがこの方向を（一般的にも細目においても）正しく規定したからには、われわれはつねにまたかならず全力をあげて、われわれの要求の最大限の獲得をめざしてたたかわなければならない、――われわれの革命的原則および革命的義務の名においてそうしなければならない。闘争が最終的に結着する以前に、闘争が進行しているそのときに、われわれはおそらく最大限全体を達成できないだろうなどとあらかじめ決めてかかることは、まったくの俗物根性におちいることを意味する。この種の考えは、たとえこういう考えをとった人々がそうなることを欲しないとしても、つねに日和見主義にみちびくものである。

実際、『イスクラ』の農業綱領のうちに「ロマン主義」を見てとったマルトィノフの議論――「なぜなら、現在の条件のもとで、われわれの運動に農民大衆が参加してくることは、はなはだ疑わしいからである」（『ラボーチェエ・デーロ』第一〇号、五八ページ、傍点は私のもの）――は、俗物根性ではないだろうか？　これは、ロシアの社会民主主義を「経済主義」にまで単純化した、あの非常に「もっともらしい」、非常に安直な議論のよい見本である。ところで、この「もっともらしい」議論をよく見きわめてみると、それがしゃぼん玉であることがわかるだろう。「われわれの運動」とは、社会民主主義的労働運動のことである。これに農民大衆が「参加する」などということは、まったくできないことである。それは疑わしいのではなくて、不可能なのだ。またそんなことが問題になったことはけっしてないのである。しかし、農奴制のいっさいの残存物（専制をもふくめて）に反対する「運動」には、農民大衆は参加しないわけにはいかない。マルトィノフは、ブルジョアジーに反対する運動と農奴制に反対する運動との本質的に異なる性格をよく考えてみずに、「われわれの運動」という表現によって問題を混乱させてしまったのである。*

* マルトィノフが、執筆にとりかかったこの問題にたいしてどれほどわずかしか考えてみなかったかは、彼の論文の次の文句からとくに明瞭にわかる。「われわれの綱領の農業の部は、こんごまだ非常に長いあいだ比較的小さな実践的意義しか持たないであろうという事情のため、この部分は革命的修辞作文に広範な活動舞台をひらいている」。傍点をつけたことばは、まさしく私が指摘した混乱をふくんでいる。彼は、西欧では農業綱領をかかげて行動しているのは労働運動が非常に発展しているところに限られている、ということを耳に

した。だがロシアでは、この運動はやっと始まったばかりである。したがって、「こんごまだ非常に長いあいだ」！——と、わが政論家は推理を急ぐのだ。だが、彼は一つの小さなことに気がつかなかった。それは、西欧では、農業綱領は、半農民＝半労働者をブルジョアジーに反対する社会民主主義的運動に引きいれるために書かれているのにたいして、わが国では、農民大衆を農奴制の残存物に反対する民主主義的運動に引きいれるために書かれている、ということである。だから、西欧では、農業資本主義の発展がすすめばすすむほど、農業綱領はますます大きな意義を持つようになるであろう。だがわれわれの農業綱領は、その要求の主要な部分においては、農業資本主義の発展がすすめばすすむほど、ますます小さな実践的意義しか持たないようになるであろう。なぜなら、この綱領が矛先を向けている農奴制度の残存物は、ひとりでにも、また政府の政策の影響によっても、死滅してゆくからである。われわれの農業綱領は、だから、実践的には主として直接の近い将来を、専制の没落までの期間を、目あてとするのである。ロシアにおける政治的変革は、いずれにせよ、きわめて遅れたわが国の農業制度の根本的改革を不可避的に伴うであろうから、そのときにはかならずわれわれは、われわれの農業綱領を改訂しなければならなくなるであろう。ところが、マルティノフがはっきり知っているのは次の一つのことだけである。すなわち、カウツキーの著書[156]はすぐれている（このことは正しい）、そこで農業綱領の点でのロシアの根本的な差異を考えずに、カウツキーをくりかえし書きうつすだけで十分である（これはまったくばかげている）、と。

疑わしいと言えるのは、けっして農奴制の残存物に反対する運動に農民大衆が参加することではなく、この参加の度合いだけである。農村における農奴制的諸関係はブルジョア的諸関係とおそろしく絡みあっており、ブルジョア社会の階級としては、農民（小農耕者）は、革命的要素であるよりも、むしろはるかに保守的要素である（とくに、わが国では農業関係のブルジョア的進化がまだやっと始まったばかりなので）。だから政府にとっては、政治的改革の時期には、比較的数の少ない小所有者に小さくて重要でない譲歩をおこなうことによって農民を分裂させることは、（たとえば労働者の場合とくらべて）はるかに容易であろうし、彼らの革命性を弱めることも（あるいは、最悪の場合には、麻痺させることさえ）、はるかに容易であろう。

これはすべてそのとおりである。では、ここからいったいどういう結論が出てくるだろうか？　政府にとって農民の保守的分子と協調することが容易であればあるほど、われわれは農民の革命的分子と協調することに、ますます多くの努力をますます速かにはらわなければならない。われわれの義務は、まさにどういう方向でこれらの分子を支持しなければならないかを、できるかぎりの科学的正確さで規定し、ついで、彼らを農奴制のいっさいの残存物との断固とした無条件的な闘争へおしすすめること、いついかな

る事情のもとでも、あらゆる利用可能な手段を用いてこれをおしすすめること、である。ところで、われわれのこの推進の成功の度合いをあらかじめ「きめておこう」とする試みは、俗物的な試みではなかろうか？　そんなことはのちになって生活が決定し歴史が記録するのであって、今日のわれわれの仕事は、あらゆる場合にたたかい、最後までたたかうことである。すでに攻撃にうつった兵士が、われわれは敵の全軍団ではなくその五分の三しか絶滅できないかもしれないなどと、論議したりするだろうか？　たとえば共和制の要求というような要求も、マルトィノフのいうような意味では「疑わしく」はないだろうか？　たしかに、政府にとっては、この約束手形については、農奴制のいっさいの痕跡の一掃という農民の要求の約束手形よりも、その一小部分の支払でごまかすことがより容易であろう。だが、それがわれわれにとってなんの関係があろうか？　一小部分の支払を、われわれはもちろん自分のポケットにおさめるであろうが、それにもかかわらず、われわれは、全額の支払をかちとるための必死の闘争をけっしてやめはしない。共和制のもとでのみプロレタリアートとブルジョアジーのあいだに決定的な戦闘がおこなわれうるという思想を、われわれはもっと広範にひろめなければならない。われわれは、ロシアのすべての革命家のなかに、またできるかぎり広範なロシアの労働者の大衆のなかに、共和主義的伝統を創造し、* これを堅固なものにしてゆかなければならない。われわれは「共和制」というこのスローガンで、次のことを表現しなければならない。――国家体制の民主化のための闘争において、われわれはうしろをふりむくことなしに最後まですすむであろう。――そのときわれわれがこの支払のどれだけの部分を、まさにいつ、まさにどのようにしてたたかいとることに成功するかは、もはや闘争そのものが決定するであろう。われわれがわれわれの打撃の全力を敵に思いしらせもせず、また敵の打撃の全力を自分の身に経験しもしないうちに、この部分を計算しようと試みるのは、ばかげたことであろう。これと同様に、農民の要求においても、われわれの仕事は、科学的資料にもとづいて、これらの要求の最大限を規定し、同志たちがこの最大限を獲得するためにたたかうのを助けることである。そのときに、分別ある合法的批判家たちや、成果が目に見えることに惚れこんだ非合法的「追随主義者たち」が、この最大限の「疑わしさ」について嘲笑するなら、そうさせておくがよい！**

* われわれは「創造する」と言う。なぜなら、旧来のロシアの革命家は共和制の問題に真剣な関心をはらったことはけっしてなく、また、共和制を「実践的な」問題とみなしたこと

はけっしてなかったからである。――ナロードニキ、ブンターリ(一三七)その他は、無政府主義者流の蔑視をもって政治にのぞんだからであり、また「人民の意志」派は、専制からいきなり社会主義革命に飛躍しようと望んだからである。大衆のなかに共和制の要求を普及させ、ロシアの革命家のなかに共和主義的伝統を創造することは、(一三八)われわれの役割(すでに久しく忘れられているデカブリストの共和主義的思想を別にすれば)、すなわち社会民主主義者の役割となったのである。

** 社会民主主義的綱領の諸要求の「実現可能性」の問題については、一八九六年におこなわれたK・カウツキーのR・ルクセンブルクにたいする論戦を思いおこすことも、おそらく無益でないであろう。R・ルクセンブルクは、ポーランドの再興という要求をポーランドの社会民主主義者の実践的綱領のなかにかかげるのは適当ではない、なぜならこの要求は今日の社会では実現不可能だからだ、と書いた。K・カウツキーは彼女を反駁して、次のように言った。この論拠は「社会主義的綱領の本質についての奇妙な誤解にもとづいている。われわれの実践的要求は、それが綱領中に明示的に定式化されていようが、暗黙のうちに受けいれられている『公準』であろうが、いずれにせよ、現存の勢力関係のもとでそれらの要求を達成しうるかどうかということによって測られる(werden……darnach bemessen)のではなく、それらの要求が現存の社会制度とあいいれるものであるかどうか、そしてそれらの要求の実施がプロレタリアートの階級闘争を促進し(fördern)、プロレタリアートのために政治的支配への道をならす(ebnen)のに適しているかどうかということによって、測られなければならない。そのさい、われわれは当面の瞬間の勢力関係をすこしも考慮しない。社会民主主義的綱領は、その《(den)》瞬間のために書かれるのでなく、できるかぎり今日の社会におけるあらゆる場合に間にあう(ausreichen)ものでなければならない。それは行動(der Aktion)に役だつだけでなく、宣伝にも役だつものでなければならず、また、われわれが進んでゆこうとおもっている方向を、具体的な要求の形で、抽象的な論述がなしうるよりもいっそう一目瞭然と、指示しなければならない。その場合、われわれが空想的思弁におちいることなく、われわれの実践的目標をなるべく遠くにおくことができればできるほど、それだけよい。われわれが追っている方向は、大衆にとって――われわれの理論的基礎づけを理解(erfassen)できない大衆にとってさえ――それだけ明瞭になるであろう。綱領が示すべきことは、われわれが今日の社会または今日の国家に要求するものであって、今日の社会に期待するものであってはならない。たとえば、ドイツ社会民主党の綱領をとってみよう。この綱領は人民による官庁の選挙を要求している。ルクセンブルグ嬢の尺度で測るなら、この要求も、ポーランドの民族国家の樹立という要求と同じくらいに空想的である。現存の政治関係のもとで、ドイツ帝国において国家の官吏を人民が選挙するというようなことが達成できるという幻想におちいるものは、だれひとりないだろう。ポーランド民族国家はプロレタリアートが政治権力を獲得した場合にはじめて実現できる、と考えてよいのと同じ権利をもって、前記の要求についても同じことが言えるであろう。だがこれは、この要求をわ

れわれの実践的綱領にとりいれない根拠となるだろうか？」『ノイエ・ツァイト』第一四年度、第二巻、五一三および五一四ページ。傍点はK・カウツキーのもの。

五

農民にかんするわれわれのあらゆる要求の性格を規定している第二の一般的命題にうつろう。これは、「農村における階級闘争の自由な発展のために……」という句に表現されている。

右の句は、一般に農業問題の原則的な提起にとっても、またとくには個々の土地要求の評価にとっても、きわめて重要である。農奴制度の残存物を一掃するという要求は、われわれと、首尾一貫した自由主義者、ナロードニキ、社会改良家、農業問題におけるマルクス主義批判家、その他等々とに、共通している。そういう要求をかかげる場合、われわれは、これらすべての諸氏と原則的に異なるのではなく、程度の差異があるだけである。彼らはこの点でも不可避的につねに改良の限界内にとどまるであろうが、われわれは社会革命的要求をかかげるのをためらわない（上述の意味において）であろう。これに反して、「農村における階級闘争の自由な発展」を保障することを要求する場合には、われわれは、これらすべての諸氏と、さらにはまた社会民主主義者でない革命家や社会主義者のすべてとさえ、原則的に対立することになる。これらの人々もまた、農業問題における社会革命的要求をかかげるのをためらわないであろうが、しかし彼らは、これらの要求を農村における階級闘争の自由な発展という条件に従属させようとは思わないであろう。この条件は農業問題の分野における革命的マルクス主義理論の基本的な中心点である。* この条件を承認することは、次のことを承認することを意味する。すなわち、農業の進化はきわめて錯雑しており複雑であるにもかかわらず、またこの進化の形態は種々さまざまであるにもかかわらず、この進化もやはり資本主義的進化であるということ、それは（工業の進化と同様に）、やはりブルジョアジーにたいするプロレタリアートの階級闘争を生みだすということ、この階級闘争こそ、われわれの第一の根本的な関心事でなければならず、われわれが原則的問題をも、政治的任務をも、宣伝、扇動、組織の方法をも、それにかけて検査する試金石でなければならないということ、である。また、この条件を承認することは、小農民を社会民主主義運動に参加させるという、とくに焦眉の難問題においても確固たる階級的立場に立つ義務を負い、いかなる点でも小ブルジョアジーの利益のためにプロレタリアートの立

場をゆずることなく、反対に、近代資本主義全体によって零落させられ抑圧されている小農民に、自己の階級的立場を捨ててプロレタリアートの立場に立つように要求する義務を負うことを、意味する。

＊ 実質上、農業問題におけるマルクス主義「批判家」の思い違いと混乱のすべては、ほかならぬこの点の無理解に帰着する。そして、彼らのうちで最も勇敢で最も一貫した（そのかぎりでまた最も誠実な）ブルガコフ氏は、彼の「研究」のなかで、階級闘争の学説は農業関係の分野には全然適用されえないと、あからさまに言明している（『資本主義と農業』第二巻、二八九ページ）。

この条件を提起することによって、われわれは、とりもなおさず、自分たちの敵（すなわち、農奴制度の残存物に反対する闘争で、われわれの一時的で部分的な同盟者でありながら、ブルジョアジーを直接あるいは間接に、意識的あるいは無意識的に支持する人々）からだけでなく、農業問題の提起におけるその中途半端なやり方によってプロレタリアートの革命運動に多くの害悪をもたらす恐れのある（そして実際にもたらしている）頼りにならない友人たちからも、一線を画するのである。

この条件を提起することによって、われわれは、導きの糸――それをつかんでさえいれば、社会民主主義者は、どんなへんぴな農村にほうりだされても、また一般民主主義的任務を前面に押しだすきわめて錯雑した農業関係に直面させられても、これらの任務を解決するにあたって自己のプロレタリア的立場をつらぬき強調することができるような、そういう導きの糸を、引くのである。それは、われわれが一般民主主義的な政治的任務を解決する場合にもつねに社会民主主義者であるのと、まったく同じことである。

この条件を提起することによって、われわれは、とりもなおさず、多くの人がわれわれの農業綱領の具体的要求を走り読みしたときにいだく、次のような反対論に答えるのである。……「土地買取賦金と切取地の農村共同団体への返還」!?――それでは、われわれプロレタリアートの特殊性とわれわれプロレタリアートの自主性はいったいどこにあるのか？　これは、実質上、農村ブルジョアジーへの贈り物になりはしないか??

たしかに、そのとおりである。だがそれは、農奴制度の没落そのものもまた「ブルジョアジーへの贈り物」であり、すなわち、他のいかなる発展でもなく、ほかならぬブルジョア的発展の、農奴制的な足かせと拘束からの解放であったのと、同じ意味においてにすぎない。プロレタリアートが、ブルジョアジーに抑圧されブルジョアジーと対立している他の諸階級と異なる点は、プロレタリアートがブルジョア的発展の阻止に、階級闘争の隠蔽あるいは緩和に、望

みをかけるのではなく、反対に、階級闘争の最も完全で自由な発展に、ブルジョア的進歩の促進に、望みをかけることにある。*発展しつつある資本主義社会では、その発展を拘束している農奴制の残存物の一掃を、そのことによってブルジョアジーを強め堅固にせずにはおかないような仕方でおこなうことはできない。このことで「困惑する」のは、政治的自由はブルジョアジーの支配を強め堅固にするからわれわれにはなんにもならないと言った社会主義者たちの誤りを繰りかえすことを意味する。

＊ いうまでもなく、プロレタリアートは、ブルジョア的進歩を促進する方策ならなんでも擁護するのではなく、それらのうちで、自己の解放をめざす労働者階級の闘争能力を強めるのに直接影響するものだけを擁護するのである。ところで、「雇役」と債務奴隷制は、富裕な農民部分よりも、プロレタリアートに近い無産の農民部分にはるかに強くのしかかっている。

六

われわれの綱領の「一般的部分」を検討したので、綱領の個々の要求の分析に移ろう。われわれはこの場合、第一項からでなく、第四項（切取地にかんする）から始めることにしたい。なぜなら、第四項こそは、この農業綱領に特殊な性格を付与する、最も重要な、中心的な条項であると同時に、最も議論の余地のある（すくなくとも、『イスクラ』第三号所載の論文について見解を述べた人々の大多数の意見によれば）条項だからである。この条項の内容は次の構成部分からなることを想起しよう。（一）これは、農奴制の直接の遺物であるような土地関係を規整しなおす権能をもつ、農民委員会の設置を要求している。「農民委員会」という表現は、——貴族委員会(一五)による一八六一年の「改革」に対立して——新規の規整は地主の手にではなく農民の手ににぎられるべきであるということを、明瞭に指示するためにえらばれたものである。いいかえれば、農奴制的関係の最後的な絶滅は、抑圧者にではなくて、これらの関係によって抑圧されている部分の住民にゆだねられるのであり、当事者のうちの少数者にではなくて、多数者にゆだねられるのである。実質上は、これは農民改革の民主主義的改訂（すなわち、まさに「労働解放」団の作成した最初の綱領草案が要求していたところのもの）にほかならない。われわれがこの最後にあげた表現をえらばなかったのは、この表現があまり明確でなく、この改訂の真の性格と具体的な内容をあまり印象づよく示さないからにすぎない。だから、たとえばマルトィノフが本当に農業問題についてなにか自分の意見を持っているなら、彼は、農民改革の民

主主義的改訂という思想そのものを否認するのかどうか、もし否認しないのなら、彼はその思想をいったいどのように考えているのかを、明確に言明すべきであっただろう。*

* ナデージヂンの一貫性の欠如（あるいは言いおとし？）を指摘しておこう。彼は、彼自身の農業綱領大要のなかで、農民委員会にかんする『イスクラ』の思想を受けいれているようにみえるが、この思想を極端に不手際に定式化して、次のように言っている。『解放』にともなったいっさいの操作にかんする農民の告訴と申立を審理するための、人民代表から成る特別裁判所の設立」（『革命の前夜』六五ページ。傍点は引用者のもの）。告訴できるのは、法律違反にたいしてだけである。二月一九日の「解放」とそのいっさいの「操作」は、それ自体法律である。ある法律の不正にたいする告訴を審理する特別裁判所の設立は、この法律が廃止されないかぎり、この法律のかわりに（またはそれを部分的に廃止して）新しい法的基準があたえられないかぎり、なんの意味も持たない。この「裁判所」に、放牧地の切取りにたいする「告訴」を受理する権能だけでなく、この放牧地を返還する（あるいは買い取る等々の）権能をもあたえる必要がある。――だが、そのときには、第一に、法律を制定する権能をもつ「裁判所」はもはや裁判所ではないであろう。そして第二に、このような「裁判所」は収奪、買取り、等々、まさにどんな権能を持つかを、正確に指示しなければならない。だが、ナデージヂンの定式化がどれほど不手際であるとしても、農民改革の民主主義的改訂の必要を、彼はマルトィノフよりもはるかに正しく理解したのである。

次に、(二) 農民委員会には、地主の土地を収奪し、買取り、土地の交換その他を実施する権能があたえられる（第四項ロ）〔「イ」の誤りか――訳者〕。この場合、この権能は、農奴制的関係が直接に生きながらえている場合に限られる。すなわち、(三) 収奪および買取りの権能は、次のような土地にかんしてだけあたえられる。第一に、「農奴制度の廃止のさいに農民から切り取られ」（したがって、これらの土地は、大昔から農民経営の欠くことのできない所属物となっており、この経営の総体のなかにその部分としてはいっていたものであって、偉大な農民改革という合法化された略奪によって、農民経営から人為的に奪いとられたものである）、第二に、「地主の手にあって農民を債務奴隷化する道具となっている」土地である。

この第二の条件は、買取りと収奪の権能をさらにいっそう狭く限定するものであって、その権能はすべての「切取地」にはおよばず、現在も依然として債務奴隷化の道具となっており、――『イスクラ』の定式化したところによれば――「非随意的、債務奴隷的、賦役的な労働、すなわち、実際上同じく農奴制的な労働をひきつづき維持する手段となっている」[20]「切取地」にしかおよばないのである。言いかえれば、わが国の農民改革が中途半端だったため、農民

から切り取られた土地を手段とする農奴制的な経営形態が現在にいたるまでそのまま残っているところでは、農民には、農奴制のこれらの残存物を収奪の方法によってさえ、一挙に最終的にかたづける権利があたえられ、「切取地を取りかえす」権利があたえられるのである。

だからわれわれは、「地主の手にあるか、それらを買い取ったラズノチーネツ(三三)の手にあるかして、現在、模範的な資本主義的方法で用益されている切取地は、どうなるのか？」と、あれほど不安そうに質問したわが善良なマルトィノフを、安心させることができる。いとも尊敬すべき友よ、ここで問題となっているのは、そういう個々の切取地ではなく、ひきつづき存在している農奴制経済の残存物の土台にいまにいたるまでなっているような、そういう典型的な（そしてきわめて多数の）切取地なのである。

最後に、（四）――第四項ロは、国内の個々の地方にそのまま残っている農奴制度の残存物（地役権(三四)、まだ完了しない土地分与と境界画定、その他）をも除去する権能を、農民委員会にあたえている。

このように、第四項の全内容は、簡単化のために、「切取地の返還」という一語で言いあらわすことができる。では、このような要求の思想はどのようにして生じたのか？それは、われわれは農民を助けて、農奴制のいっさいの残存物のできるだけ完全な一掃にむかって農民をおしすすめなければならないという、あの一般的な基本的命題から引きだされる直接の結論としてである。このことには「だれもが同意している」のではなかろうか？　だがさて、もしこの道に立つことに同意するなら、もはやこの道を自主的に前進するように努力し、他人に引きずられないようにし、この道の「尋常でない」外観に臆せず、数多くの地方では踏みならされた道などまったく見いだしえないことに狼狽したまうな。いや、諸君は断崖の端をはい、密林をくぐりぬけ、穴を跳びこさなければならないだろう。道のけわしいことに泣き言をいいたまうな。このような泣き言は無益なすすり泣きであろう。なぜなら、諸君はあらかじめ次のことを知っていたはずだからである。それは、諸君は、社会的進歩のいっさいの力によってまっすぐにされ、平らにならされた、里程標のある大道にいるのではなく、出口はあるにはあるが、諸君も、われわれも、またその他のだれにしても、素直で、簡単で、容易な出口などはけっして見つけだせないような、そういう片隅や人里はなれた土地の小路にいるのだ、ということである。「けっして」というのは、死滅しつつある、苦痛なほど長い時間をかけて死滅しつつある、そういう人里はなれた土地や暗い裏通りが総じて存在するあいだは、ということである。

だが、もしこういう裏通りにはいりこむことを望まないなら、空文句で言いのがれしたりせずに、それを望まない、とはっきり言いたまえ。*

* たとえばマルトィノフは、農業政策の一般的原理（「農村への階級闘争の持ちこみ」）と具体的な綱領上の要求にかんする問題の実践的な解決とを彼に示した『イスクラ』を、「修辞作文」をやっていると言って非難している。マルトィノフは、右の一般的原理をなんらかの他の原理でおきかえることもせず、右の原理についてよく考えてみることもまったくせず、明確な綱領の作成に従事しようと試みもせずに、次のような壮大な空文句で言いのがれをしたのである。「……われわれは、さまざまなおくれた経済的債務奴隷制の形態から……彼ら（小所有者としての農民）を守護することを、要求しなければならない……」。まったく安直ではなかろうか？ 貴下は、せめてただ一つにもせよ（「さまざまな」でないまでも！）遅れた債務奴隷制の形態（おそらく、遅れていない「債務奴隷制の形態」というものもあるのだろう!!）からの、せめてただ一つの守護をでも、われわれに示そうと試みないのか？ 小口信用も、牛乳集荷組合も、貸付・貯蓄組合も、小経営主の組合も、農民銀行も、ゼムストヴォ農業技師も、――これらすべてではやはり「さまざまな遅れた経済的債務奴隷制の形態からの守護」ではないか。つまり、貴下は、これらすべてを「われわれは要求しなければならない」と考えるのか?? 友よ、はじめによく考え、それからはじめて綱領について語ることが必要である！

諸君は農奴制の残存物を一掃するためにたたかうことに同意するか？――よろしい。それなら、これらの残存物を表現または条件づけるような単一の法的制度はなにも存在しないことを、記憶しておいてほしい。――私が言うのは、もちろん、われわれがいま論じている土地関係の分野における農奴制の残存物に限っており、身分的、財政的その他の立法の分野におけるそれではない。ロシアのあらゆる経済調査によってかぞえきれないほどたびたび確認されている賦役経済の直接の遺物は、とくにそれを守護するなんらかの法律によって維持されているのではなく、実際に存在する土地関係の力によって維持されているのである。それは、有名なヴァルーエフ委員会（一四）にたいする証人たちが、法律によって直接禁止されなければ農奴制はきっとふたたび復活するだろう、と明言したくらいである。つまり、二つに一つである。すなわち、農民と地主との土地関係に全然手をふれないか――そのときには、他の問題はすべてきわめて「あっさり」解決される。だが、そのときには、農村における農奴制経済のいっさいの遺物の主要な根源にも手をふれないことになるだろうし、またそのときには、農奴主と債務奴隷化された農民との最も深刻な利害にかかわる非常に焦眉の問題から、すなわち、あすかあさってにはロシアの最もさしせまった社会的・政治的問題の一つに容易

になりうる問題から、「あっさり」逃避することになるだろう。それとも、「経済的債務奴隷制の遅れた諸形態」の根源（土地関係はそうなのだが）にも手をふれようと望むか――そのときには、容易で簡単な解決をけっして許さないほどこれらの関係は複雑で錯雑なものであることを、考慮に入れなければならない。そのときには、もし諸君が、錯雑した問題についてわれわれの提案した具体的解決策に不満であるなら、錯雑なことにたいする一般的な「泣き言」で言いのがれすることはもはや許されず、この錯雑性を自主的に解明しようと試み、別の具体的解決策を提案しなければならない。

今日の農民経営において切取地はどんな意義を持っているか――これは事実の問題である。ロシアの経済制度と経済的進化の評価の点でナロードニキ主義（広義の）とマルクス主義とのあいだの溝がどれほど深かろうが、右の問題ではこれら二つの学説のあいだになんらの意見の不一致がないことは、意味ぶかいことである。二つの思潮の代表者たちは、ロシアの農村には農奴制の残存物が無数に存在すること、そして（これに注意）ロシアの中央諸県で支配的な私有地経営の方法（「雇役経営方式」）は農奴制の直接の遺制であるということで、意見が一致している。さらに彼らは、地主のための農民の土地の切取り――すなわち、真の、直接の意味における切取りにせよ、放牧権や、森林、水飼場、放牧地、その他等々の用益権の農民からの剝奪にせよ――が雇役制度の最も主要な土台の一つである（たとえ最も主要なものではないとしても）という点でも、意見が一致している。最新の資料によれば、地主経営の雇役方式はヨーロッパ・ロシアのすくなくとも一七県で優勢であると認められているということを、思いおこすだけで十分であろう。切取地にかんする条項を、まったく人為的な、「作為的な」、ずるがしこい考案物であると見るものは、この事実の論駁を試みるがよい！

雇役経営方式が意味するところは、次のとおりである。事実上は、すなわち、所有権の点からではなく、経営上の用益の点からみれば、地主と農民の土地および用益地は、最終的に分かれてはおらず、ひきつづき融合したままになっている。たとえば、農民の土地の一部分は、農民の土地の耕作にとってではなく、地主の土地の耕作にとって必要な家畜を飼養するのに役だっており、他方、この制度のもとでは、地主の土地の一部分は近隣の農民経営にとって無条件に必要である（水飼場、放牧地、等々）。そして、土地利用のこういう実際上の絡みあいは、農奴制度のもとでの百姓と旦那の関係と同じ関係を不可避的に生みだしている（より正確には、数千年の歴史によって生みだされたも

のを保持している)。百姓は事実上は依然として農奴であり、古来の自分の農具と家畜を用い、古来の慣習どおりの三圃農法によって、古来の自分の「殿様」のために、従前どおり働いている。農民自身がこれらの賦役をしばしばパンシチナ[13]とか「賦役」とよんでいるのに、——また地主自身が、自分の経営のことを記述して、「私の以前の……」(以前の、だけでなく、現在の、でもあるのだ!)「農民」が私から放牧地を借りる代償として彼ら自身の農具と家畜を用いて私の土地を耕してくれる、と言っているのに、これ以上さらになにが必要なのか?

なんらかの複雑で錯雑した社会=経済問題を解決するときには、初歩的な原則として、まずはじめに、事態を複雑にするいっさいの副次的な影響や事情から最もまぬかれている、最も典型的な場合をとりあげ、それを解決してからはじめて先にすすんで、事態を複雑にするこれらの副次的な事情をつぎつぎに考慮に入れてゆくことが必要である。ここでも、最も「典型的な」場合をとってみたまえ。すなわち、かつての農奴の子どもたちがかつての旦那の息子から放牧地を借りる代償として、後者のために働く場合である。賦役は、技術の停滞と農村におけるすべての社会=経済関係の停滞とを条件づけている。なぜなら、この賦役は、貨幣経済の発展と農民層の分解とを妨げ、競争の推進的影響から地主を(比較的に)まぬかれさせ(技術を向上させるかわりに、彼は分益小作農の分け前を引き下げる。ついでながらいえば、この引下げは、農民改革後の時期の長い年月のあいだに数多くの地方で確認されている)、農民を土地に緊縛し、そのことによって移住や出稼ぎ等々の発展を阻止しているからである。

そこでたずねるが、この「純粋な」場合に、地主の土地のこの部分を農民のために収奪することが、まったく当然で、望ましく、そして実現可能であることを、社会民主主義者でだれか疑うものがあるだろうか? この収奪はオブローモフ[14]をふるいたたせ、より小さくなった彼の土地でもっと改良された経営に移るよう強制するだろう。またこの収奪は、賦役制度を爆破し(私は、一掃するとは言わず、まさに爆破すると言う)、農民のなかに自主性と民主主義的精神を高揚させ、農民の生活水準を引き上げ、貨幣経済のいっそうの発展と農業のいっそうの資本主義的進歩とに強力な刺激をあたえるであろう。

そして、一般的にいえば次のようになる。切取地が賦役制度の最も主要な根源の一つであり、そしてこの制度は、資本主義の発展を阻止する農奴制の直接の遺制であることがいったん一般に承認されるならば、切取地の返還が賦役を爆破し、社会=経済的発展を促進するということを、ど

うして疑うことができようか？

七

　ところが、非常に多くの人がこのことに疑いをもったのである。そこでわれわれはこれから、疑いをもった人々がもちだした論拠の検討にうつろう。これらの論拠はすべて次のような項目にまとめることができる。（イ）切取地の返還という要求は、マルクス主義の理論的基本原則および社会民主党の綱領上の原則と一致するだろうか？（ロ）歴史的不正だとしても経済的発展の一歩ごとにその意義が弱まっているような、ものの是正という要求をもちだすことは、政治的適切性の見地からして賢明であろうか？（ハ）この要求は実際に実現可能であろうか？（ニ）たとえわれわれがこの種の要求をかかげ、そしてわれわれの農業綱領のなかでは最小限要求でなく最大限要求をかかげることができるし、またかかげなければならないということを認めるとしても、切取地の返還という要求は、この観点からみて首尾一貫しているだろうか？　このような要求は実際に最大限要求だろうか？

　私の判断しうるかぎりでは、「切取地に反対する」いっさいの反論は、右の四項目のどれかにはいる。しかも反対論を述べた人の大多数は（マルトィノフをもふくめて）、右の四つの質問の全部にたいして否定的に答えたのであって、切取地の返還の要求を、原則的には誤りであり、政治的には適切でなく、実践的には実現不能であり、理論的には首尾一貫しないものと、認めている。

　これらの問題の全部について、重要性の順序にしたがって考察しよう。

　（イ）切取地の返還という要求を原則的に誤りとみなす人は、二つの論拠によっている。第一に、それは資本主義的農業を「侵害」することになろう、すなわち、資本主義の発展を停止させるか阻止することになろう。第二に、それは小所有を強化するばかりか、直接にその数をふやすことになろう、と。これらの論拠の第一のもの（とくにマルトィノフが強調しているもの）は、全然根拠がない。なぜなら、典型的な切取地は、反対に、資本主義の発展を阻止しており、その返還はこの発展を強化することになるからである。典型的でない事例については（例外はいつでもいたるところにありうるし、それは通則を確認するだけのことであるということはべつとしても）、『イスクラ』紙上でも綱領のなかでも、留保条件がつけられている（「……切り取られて……債務奴隷化する道具となっている土地……」）。この反対論は、単純に、ロシア農村の経済におけ

る切取地と雇役との実際上の意義をよく知らないことに、もとづいているのである。[24]

第二の論拠（いくつかの私信のなかでとくに詳細に展開されているもの）は、はるかに重大であって、一般には、いま擁護している綱領に反対する最も有力な論拠である。一般的にいえば、小経営と小所有を発展させ、支持し、強化すること、ましてその数をふやすことは、けっして社会民主主義の任務ではない。このことはまったく正しい。しかし、実のところ、ここでわれわれが問題にしているのは、小経営の、まさしく「一般的な」事例ではなく、ほかならぬその例外的な事例なのである。この例外性は、われわれの農業綱領の前文で次のようにはっきり言いあらわされている。「農奴制度の残存物の一掃と農村における階級闘争の自由な発展」。一般的にいえば、小所有を支持することは反動的である。なぜなら、そういう支持は資本主義的大経営に矛先を向けており、したがって、社会の発展を阻止し、階級闘争をぼかし、緩和させるからである。だがいまの場合は、われわれが小所有を支持しようと思うのは、まさに資本主義に反対してではなく、農奴制に反対してである。——この場合、われわれは、小農民を支持することによって階級闘争の発展に巨大な刺激をあたえるのである。じっさい、一方では、われわれは、このことによって、農奴主的地主にたいする農民の階級的（身分的）な敵意の残存物を燃えあがらせる最後の試みをするのである。他方では、われわれは、農村におけるブルジョア的階級敵対が発展するための道を清めるのである。なぜなら、この敵対は、現在では、農奴制の残存物によって全農民が総体的に、一様に圧迫されているように見えることによって、隠蔽されているからである。

地上のあらゆるものには両面がある。西欧の自作農民は民主主義運動における自己の役割をすでに果たしおえて、プロレタリアートにくらべての自己の特権的地位を固執している。だが、ロシアの自作農民はまだ決定的な全人民的な民主主義運動の前夜にあり、彼らはこの運動に共鳴しないではいられない。彼らはいまなお後方よりも、より多く前方をみつめている。彼らはいまなお、自己の特権的地位を固執するよりもはるかに多く、ロシアにまだきわめて強力に残っている身分的＝農奴制的な諸特権に反対してたたかっている。このような歴史的時機には、農民を支持して、彼らのまだ不明瞭でぼんやりとした不満を彼らの本当の敵に向けさせるように努めることは、われわれの直接の義務である。たとえ次の歴史的時期に、すなわち、現在の社会＝政治的「局面」の特殊性が過ぎさり、農民が、たとえばごく小部分の所有者へのとるにたりない施し物に満足し

て、もはやはっきりプロレタリアートに反対してがみがみ言いだすようになったときに、われわれが自分たちの綱領から農奴制の残存物との闘争を捨てさるにしても、いささかも自己矛盾することにならないだろう。そのときには、おそらく、われわれは綱領から専制との闘争をも捨てるべきであろう。なぜなら、政治的自由の獲得以前に、農民が最もいまわしく、最も重苦しい農奴制的抑圧から解放されるなどということは、まったく考えられないからである。

資本主義的経営が支配しているもとでは、小所有は、働き手を小さな土地片にしばりつけ、旧態依然たる技術を常則化し、土地を商取引に引き入れることを困難にして、生産力の発展を阻止する。雇役制経営が支配しているもとでは、小土地所有は、雇役から解放されれば、まさにそのことによって生産力の発展を押しすすめ、農民を一つの場所にしばりつけていた債務奴隷制から農民を解放し、地主を「無料の」召使から解きはなし、技術的改善を「家父長的」搾取の無制限な強化でもっておきかえる可能性をうばいさり、土地が商取引に引き入れられるのを容易にする。要するに、農奴制経営と資本主義経営との境目にある小農民の矛盾した立場は、社会民主主義がこのように例外的におよび一時的に小所有を支持することを、完全に正当化するのである。もう一度繰りかえして言うが、これは、われわれの綱領のまとめ方または定式化における矛盾ではなくて、生きた生活上の矛盾である。

われわれにむかって次のように反論する人もいるであろう。「雇役制経営が資本主義の襲撃にどんなに徐々にしか屈伏しないにしても、やはりそれは屈服してゆく。そればかりでなく、それは完全に消滅する運命にある。大規模の雇役制経営は直接に資本主義的大経営に地位を譲り渡しつつあるし、今後とも譲り渡してゆくであろう。だが君たちは、農奴制を絶滅する過程を、実質上は大規模経営を細分化するような（部分的なものだが、それでもやはり細分化である）方策によって促進しようと望んでいる。君たちはこのことによって、将来の利益を現在の利益の犠牲にしているのではないのか？　近い将来に農民が農奴制に反対して決起するという疑わしい可能性のために、君たちは、多少とも遠い将来に農村プロレタリアートが決起するのを困難にするのだ！」

このような議論は、一見どのように説得的に見えても、ひどく一面的だという欠陥をもっている。第一に、小農民もまた資本主義の襲撃に徐々にではあるがやはり屈服してゆくし、それはまた、結局は不可避的に駆逐される運命にある。第二に、雇役制大経営はかならずしもつねに「直接に」資本主義的大経営に地位を譲り渡すのではなくて、半

従属者、半雇農、半所有者の層をたえずつくりだしながら、地位を譲り渡してゆくのである。これにたいして、切取地の返還というような革命的方策は、まさに、農奴制的従属からブルジョア的従属へ漸次に、目だたないように転化してゆく「方法」を、せめて一度だけでも公然たる革命的な転化の「方法」でおきかえることによって、巨大な役目を果たすであろう。このことは、すべての農村勤労住民における抗議と自主的闘争の精神に、最も深い影響をおよぼさずにはおかないであろう。第三に、われわれロシアの社会民主主義者もヨーロッパの経験を利用することにつとめており、政治的自由を獲得したのちになお長いあいだ「手さぐりで」工業労働者の運動のための道を探求してきたわが西欧の同志たちがなしえたよりも、はるかに早く、はるかに熱心に、「田舎者」を社会主義的労働運動へ引き入れることに取りかかるであろう。社会主義的労働運動の分野では、われわれは「ドイツ人から」多くのものを出来あがった形でとりいれるであろうが、農業問題の分野では、おそらく、なにか新しいものをもつくりあげてゆくのである。のちにわが国の雇農や半雇農が社会主義へ移行するのを容易にするためにも、社会主義政党が、いますぐ、小農民を「支援し」はじめ、党として「できるかぎりのこと」を小農民のためにおこない、焦眉の、錯雑した「他人の」(非プロレタリアの)問題の解決に参加することを拒否せず、全勤労被搾取大衆が党を自分たちの首領および代表者と見ることに慣れさせるようにすることが、極度に重要である。

つぎにすすもう。(ロ)切取地の返還という要求は政治的に適切でない、と考える人がいる。すなわち、もはや現代的意義を失いつつあるあらゆる歴史的不正を是正することに党の関心をそらすこと、——プロレタリアートとブルジョアジーとの闘争という基本的な、ますます切迫しつつある問題から関心をそらすことは、力の浪費である、というのである。「四〇年もおくれて農民を解放しなおす」ことを考えだした——と、マルトィノフは皮肉っている。

この議論も、なかなかもっともらしく見えるのは、一見したときだけである。歴史的不正にもいろいろある。歴史の主流のいわば脇にとりのこされていて、その流れをせきとめず、その進行を妨げず、プロレタリアートの階級闘争の深化と拡大を妨害しないようなものもある。こういう歴史的不正を是正しようとかかることは、実際に愚かしいことであろう。例として、ドイツによるアルサス=ロレーヌの併合をあげよう。この不正にたいして抗議し、またこのことについて支配階級全体を非難するという、自己の責務を回避するような社会民主党は一つもないであろうが、それと同時に、このような不公正の是正を自己の綱領に入れ

ようと考えるものも一つとしてないであろう。ところで、もしわれわれが切取地の返還という要求を、ここで不正がおこなわれた、ではそれを是正しよう、ということで、ただそのことだけで理由づけたとすれば、それは空虚な民主主義的文句であろう。しかしわれわれはわれわれの要求を、歴史的不正についての泣き言で理由づけているのではなく、農奴制の残存物を廃止し、農村における階級闘争のための道を清める必要によって、すなわち、プロレタリアートにとって非常に「実践的」で非常に緊急な必要によって、理由づけているのである。

われわれはここに、これとは違う歴史的不正の例を見る。それは、社会の発展と階級闘争を直接に阻止しつづけるような歴史的不正である。このような歴史的不正を是正しようという試みを拒否することは、「歴史的な咎だということを理由に咎を弁護する」[247]ことを意味するだろう。わが国の農村を「旧制度」の残存物の圧迫から解放するという問題は、すべての流派および党（農奴主たちの党を除いて）が提起している、現代の最も焦眉の問題の一つである。だから、一般に時期おくれであるということを拠りどころにするのは適当でなく、しかもそれがマルトィノフの口から出たとなるとまったくこっけいである。ロシアのブルジョアジーは、本来からいえば彼らの任務である、旧制度のいっさいの残存物の一掃という任務の解決に「遅れた」のである。――そこでわれわれは、この欠陥が是正されないあいだは、わが国に政治的自由がないあいだは、農民の状態が、教養あるブルジョア社会のほとんど全員に不満をいだかせ（ロシアに見られるように）こそすれ、この人々に、社会主義に対抗しての最も強力であるかに見える防砦の「難攻不落性」についての保守的な自己満足の感情をいだかせるようにならないあいだは（西欧ではいだかせている、――西欧では、こういう自己満足は、大農業地主や pur sang〔生粋〕の保守派の党をはじめとして、自由主義的な、自由思想をもったブルジョアを経て、……怒らないでほしいが、チェルノフ一派の諸氏や『ヴェーストニク・ルースコイ・レヴォリューツィイ』[248]にさえいたるまでの！……農業問題における当世流行の「マルクス主義批判家」にさえいたるまでの、あらゆる体制党に認められるのだが）、――それまでは、われわれはこの欠陥を是正してゆかなければならないし、そして是正してゆくであろう。さて、次にまた、原則にもとづいて運動の後尾にくっついてゆき、「目に見える成果を約束する」問題だけにたずさわっているロシアの社会民主主義者たちも、もちろん、「時期に遅れた」。これらの「追随主義者たち」は、農業問題においても明確な指令をあたえることに遅れたため、最も強力で

最も確かな武器を社会民主主義的でない革命派の手にゆだねているだけなのである。

(八) 切取地の返還という要求が実践的に「実現不能」であるということについていえば、この反対論(マルトィノフがとくに強調しているところ)は、いろいろの反対論のうちで最も薄弱なものの一つである。政治的自由が獲得されていれば、農民委員会は、まさにどのような場合に、まさにどのようにして、収穫、買取り、交換、境界画定、等々を実行するかという問題を、少数者の代表によって構成され少数者の利益のために行動した貴族委員会よりも、十倍も容易に解決できるであろう。この反対論に意義を認めるようなものは、大衆の革命的積極性をあまりに低く評価することに慣れた人だけである。

ここで、第四の、最後の反対論が出てくる。農民の革命的積極性に期待し、農民のために最小限綱領ではなく最大限綱領を提起するからには、首尾一貫することが必要であり、農民的な「黒い割替」か、さもなければブルジョア的土地国有化を要求すべきである! と。マルトィノフは書いている。「もしわれわれが土地の少ない農民大衆のための真の(原文のまま!)階級的スローガンを見つけたいと思うなら、われわれはもっと先にすすまなければならないであろう。——われわれは『黒い割替』の要求を提出しなければならないだろう。だがそうなれば、われわれは、社会民主主義的綱領と手を切らなければならなくなるだろう」。

この議論は、「経済主義者」の本性を目だってくっきりとあらわしており、神への祈りを強制されると額を地にすりつけて祈る人々についての諺を思いおこさせる。

君たちは、小生産者の一定の層の一定の利益を実現する諸要求の一つに賛成した。したがって、君たちは自分の見解を捨てて、その層の見解にうつらなければならない!!——これはけっして、したがってではない。そのように判断するのは、ある階級のひろく解された利益に合致する綱領の作成ということを、この階級にたいするご機嫌とりと混同する「追随主義者」だけである。われわれはプロレタリアートの代表者であるが、それにもかかわらず、もっぱら「目に見える成果を約束する」要求のためにたたかわなければならないようにいう、未熟なプロレタリアの偏見を、率直に非難する。われわれは、農民の進歩的な利益と要求を支持しながらも、農民の反動的な要求は断固として拒否する。ところで、「黒い割替」であるが、古いナロードニキ主義の最もきわだったスローガンの一つであるこのスローガンは、まさに革命的契機と反動的契機とを絡みあわせてふくんでいる。そして社会民主主義者は、自分たちがば

かの一つ覚え式にナロードニキ主義全体を捨てさせるのではけっしてなく、ナロードニキ主義からその革命的要素、一般民主主義的要素をとりだして、これを自分たちのものとして承認するということを、数十回もくりかえし述べてきた。黒い割替という要求においては、小農民生産を普遍化し永久化しようという空想は反動的であるが、しかしこの要求のなかには（「農民」が社会主義的変革の担い手でありうるかのようにいう空想のほかに）革命的な側面もある。農民の蜂起によって農奴制度のいっさいの残存物を一掃しようという願望が、それである。われわれの考えによれば、切取地の返還という要求は、農民のいっさいの二面的で矛盾した要求のなかから、まさにもっぱら社会発展全体の方向にそって革命的に作用することができ、そのうえプロレタリアートが支持するに値するものを、抜きだしているのである。「先にすすもう」というマルトィノフの勧誘は、実際には、われわれが農民の「真の」階級的スローガンを、真に正しく理解されたプロレタリアートの利益の見地からではなく、農民の真の偏見の見地から決定するという、ナンセンスにみちびくにすぎない。

土地国有化はこれとは異なる。この要求は（もしそれを、社会主義的な意味にではなく、ブルジョア的意味に解するなら）、実際に切取地の返還という要求より「先にすすんで」おり、そして原則的にはわれわれもこの要求に完全に同意する。いうまでもなく、ある革命的時期には、われわれはこの要求を提起することを拒否しないであろう。しかしわれわれは、現在のわれわれの綱領を、革命的蜂起の時代のためにのみ作成するのではなく、いやその時代のためにというよりは、むしろ、政治的奴隷状態の時代のために、すなわち政治的自由に先だつ時代のために、作成しているのである。だがこういう時代には、土地国有化の要求は、農奴制との闘争という意味での民主主義運動の直接の任務を表現する点では、はるかに弱い。農民委員会の設置と切取地の返還という要求は、農村における現在の階級闘争を直接に燃えあがらせるものであり、それゆえこの要求は、なにか国家社会主義の精神での実験に論拠をあたえることはありえない。反対に、土地国有化の要求は、農奴制の最も鮮明な現われと最も強力な遺制から、ある程度注意をそらせることになる。だからわれわれの農業綱領は、農民のなかの民主主義運動をおしすすめる手段の一つとして、いますぐ提出されうるしまた提出されなければならないのである。だが、専制のもとだけでなく半立憲君主制のもとでさえ、国有化の要求を提出することは、まったく誤りであろう。なぜなら、すでに完全に堅固となり、深く根を張った民主主義的政治機関が欠如しているもとでは、この要求

は、「農村における階級闘争の自由な発展」*に刺激をあたえるよりも、むしろはるかに、国家社会主義のばかげた実験のほうに考えをそらせるであろうからである。

* カウツキーは、フォルマールに反対して書いた論文の一つで、非常に正しくこう指摘している。「イギリスの先進的労働者は土地国有化を要求してさしつかえない。だが、ドイツのような軍事＝警察国家のすべての土地が国有地（eine Domäne）にされたら、いったいどんなことになるだろうか？この種の国家社会主義の実現は、すくなくとも相当程度にメクレンブルグで見いだされる」（『フォルマールと国家社会主義』、『ノイエ・ツァイト』[一三]一八九一—一八九二年、第一〇年度、第二巻、七一〇ページ）。

だからこそわれわれは、現代の社会制度を土台とするわれわれの農業綱領の最大限は農民改革の民主主義的改訂以上に先にすすんではならない、と考えるのである。土地国有化の要求は、原則的見地からみればまったく正しく、ある時機にはまったく適当なものであるが、現時機においては政治的に適切でないのである。

ナデージヂンが、まさに土地国有化のような最大限にまでゆきつこうとつとめるあまり、道に迷ってしまったこと（部分的には、彼が綱領では「百姓にわかりやすくて必要な要求」に限定しようと決心したおかげで）に注意するのは、興味がある。ナデージヂンは、国有化の要求を次のように定式化している。「国有地、すなわち、帝室領地、教会所有地、地主の土地を人民の財産に、きわめて特恵的な条件で勤労農民に長期賃貸しするための人民的フォンドに変えること」。疑いもなく、「百姓には」この要求はわかりやすいであろうが、社会民主主義には、たしかに、そうではない。土地国有化の要求が社会民主主義的綱領の原則的に正しい要求であるといっても、それは、社会主義的方策としてではなく、ブルジョア的方策としてにすぎない。なぜなら、社会主義という意味では、われわれはすべての生産手段の国有化を要求するものだからである。われわれがブルジョア社会の土台のうえにとどまりながら要求できるのは、地代を国家に移譲することだけである。そしてこの移譲は、それ自体として、農業の資本主義的進化を阻止しないばかりか、反対に、それを促進さえするであろう。だから、社会民主主義者は、ブルジョア的土地国有化を支持する場合、第一に、ナデージヂンがしたのとは違い、けっして農民の土地を除外してはならないであろう。もしわれわれが私的土地経営を保存して、私的土地所有だけを廃絶するのなら、その点で小所有者のために除外規定をもうけるのはまったく反動的であろう。第二に、このような国有化の場合、社会民主主義者は国有地を資本家——農業における企業家——よりも「勤労農民」に優先的に賃貸しする

ということには、断固として反対するであろう。このような優遇は、資本主義的生産様式が支配しているか存続している条件のもとでは、これまた反動的であろう。ブルジョア的土地国有化を企てるような民主主義国があったとすれば、この国のプロレタリアートは、大きな賃借者と小さな賃借者のどちらにも優先権をあたえることなく、あらゆる賃借者が法律できめられた労働保護の規則（労働日の最大限、衛生規定の順守、その他等々）ならびに土地と家畜との合理的な取扱いにかんする規則を順守するように、無条件に要求しなければならないであろう。ブルジョア的国有化がおこなわれた場合のプロレタリアートのこのような振舞は、小規模生産にたいする大規模生産の勝利を促進するに等しいであろう（工業における工場立法がこの勝利を促進しているように）。

　なにがなんでも「百姓にわかりやすい」ものにしようとする志向は、ここでナデージヂンを反動的な小ブルジョア的空想の密林にみちびいてしまったのである。*

＊　ナデージヂンについていえば、彼は彼の農業綱領要綱のなかで、われわれの見るところでは、ひどく首尾一貫性を失って、農民の土地以外のありとあらゆる土地を「人民の所有」に変え、「国民的（土地）フォンド」を「勤労農民に長期賃貸」に出すよう要求している。社会民主主義者は、土地の全般的国有化から農民の土地を除外するわけにいかないであろう。これが第一。第二に、社会民主主義者は土地国有化を、小規模な個人経営への移行ではなく、大規模な共産主義的経営への移行としてのみ宣伝しはじめるだろう。ナデージヂンの誤りは、おそらく、綱領では「百姓にわかりやすく（傍点は私のもの）て必要な要求」に限定しようと決心したことによって、引きおこされたものと思われる。[三]

　このように、切取地の返還という要求にたいする反対論の検討は、これらの反対論が成りたたないものであることをわれわれに確信させる。われわれは、農民改革の民主主義的改訂、しかもそれの土地関係の改革という要求をかかげなければならない。ところで、この改訂の性格と限界と実行方法を正確に規定するためには、われわれは、農奴制経済の遺制を維持する手段となっている「切取地」の収奪、買取り、交換、その他をおこなう権限をもつ農民委員会の設置を、提案しなければならないのである。

八

　われわれの農業綱領草案の第四項と密接に関連するものとして第五項があるが、この項は、「法外に高い小作料を引き下げ、債務奴隷制的性格をもつ契約を無効と宣言する

権能を、裁判所にあたえること」を要求している。第四項と同じく、この項も債務奴隷制に矛先を向けている。しかし第四項とは異なり、この項の要求するところは、土地制度の改訂と改造を一時におこなうことではなく、民法的関係をたえず改訂していくことである。この改訂は「裁判所」にゆだねられるが、ここで考えられている裁判所は、もちろん、農民司政長の「役所」がそうであるような（あるいは、有産階級によって有産者のなかから選出される治安判事でさえそうなのだが）、あわれな擬似裁判所ではなく、われわれの綱領草案の前の部の第一六項が言っているような裁判所である。この第一六項は、「国民経済のすべての部門に……」（つまり農業にも）「……労働者代表と企業家代表各半数ずつからなる営業裁判所の設置」を要求している。裁判所のこのような構成は、裁判所の民主主義をも、また農村住民の種々の層の相異なる階級利益の自由な表現をも、保障するであろう。階級敵対は、腐敗した官僚主義——人民の自由の遺骸をおさめるこの飾られた棺——のいちじくの葉によっておおわれることなく、すべての人の面前に公然かつ明白に現われ、そのことによって、農村の住民をその家父長制的な十年一日のような生活からゆりおこすであろう。判事がその地方の住民のなかから選出されることによって、農業生活一般と、とくにそれの地方的特殊性とにたいする完全な知識が保障されるであろう。たんなる「労働者」の部類あるいはたんなる「企業家」の部類に入れることのできないような農民大衆については、当然、農村住民のあらゆる要素による平等の代表選出を保障する特別の規則が制定されるであろう。そのさい、われわれ社会民主主義者は、あらゆる場合に次のことを無条件に固執するであろう。すなわち、第一に、たとえ農業賃金労働者がどんなに少数であっても、彼らの別個の代表を出すこと、第二に、できることなら、微力な農民と富裕な農民とが別々に代表を出すこと（なぜなら、これらの部類をまぜこぜにすると、統計上の虚偽が生ずるばかりでなく、生活の全分野で、第一の部類が第二の部類によって抑圧され駆逐されるようになるから）である。

これらの裁判所の権限として、二つのことが予想されている。第一に、裁判所は、小作料が「法外に高い」場合にはそれを引き下げる権能をもつであろう。綱領のこの句そのものがすでに、この現象が広範に普及していることを間接に承認しているわけである。小作料の高さの問題が裁判所において公開で争訟の形で審理されることは、裁判所の決定のいかんにかかわらず、大きな利益をもたらすであろう。小作料の引下げは（この引下げがたとえ頻繁でなくても）、農奴制の残存物を除去するという事業でそれ相当の

役割を果たすであろう。周知のように、わが国の農村では、借地はブルジョア的性格よりもむしろ農奴制的性格をもっていることが多く、借地料は資本主義的地代（すなわち、企業家の利潤にたいする超過分）であるよりもはるかに、「貨幣」地代（すなわち、転形した封建地代）である。したがって小作料の引下げは、資本主義的経営形態が農奴制的経営形態にとって代わるのを直接に促進するであろう。

第二に、裁判所は「債務奴隷制的性格をもつ契約を無効と宣告する」権能をもつであろう。ここでは「債務奴隷制」という概念は規定されていない。なぜなら、この条項の適用においては、選出された判事たちを拘束することはまったく望ましくないだろうからである。債務奴隷制とはなにか――ロシアの百姓は知りすぎるほどよく知っている！　ところで科学的見地からすれば、この概念は、高利貸付の要素（冬期の雇用、など）または農奴制の要素（家畜による畑地の踏害の賠償としての雇役、など）をふくむすべての契約を包含している。

土地買取賦金を人民に返還するという第三項は、いくらか違った性格をおびている。ここでは、第四項が引きおこすような、小所有についての疑念は起こらない。しかしそのかわりに、反論者たちは、この要求が実践的に実現不能であることと、この要求とわれわれの農業綱領の一般的な部分（すなわち「農奴制度の残存物の除去と農村における階級闘争の自由な発展」）とのあいだに論理的な関連が欠如していることを、指摘している。しかし、農奴制度の残存物が総体として幾百万の農民のあの不断の飢餓の条件となっていることは、だれひとり否定しようとはしないであろう。こういう飢餓はロシアを他の文明諸国民からたちまち区別するものである。だから、専制ですら、「農村共同団体の文化的および慈善的必要のための」特別の（いうまでもなくまったく貧弱で、飢えた人々のためにつかわれるよりも、官金私消者や官僚によって浪費されるほうが多いのだが）「基金」を、ますます頻繁に設けることを余儀なくされているのである。われわれも、他の民主主義的諸改革のなかにふくめて、このような基金の創設を要求しないわけにはゆかない。このことはとても反駁できまい。

そこで問題となるのは、この基金を形成するための資金をどんな源泉に求めるべきか、ということである。われわれが判断できるかぎりでは、ここでは人々はわれわれにむかって累進所得税を指摘するかもしれない。すなわち、富裕な人々の所得にたいする賦課額を特別に引き上げ、この金額を上記の基金にあてるべきである。一国の最も財産のある人々が飢えた人々の扶養と、飢餓からくる困苦をできるかぎり軽減するための支出とにおいて、だれよりも多く

負担することは、まったく公正なことであろう、と。――われわれは、このような方策にたいしてなにも反対はないが、このような方策について綱領のなかでとくに述べる必要はない。なぜなら、それは綱領のなかでとくに述べてある累進所得税の要求のうちに、そっくりはいっているからである。だが、なぜこの源泉に限定するのか？　この源泉のほかに、なぜ、きのうの奴隷所有者たちが警察国家の助けをかりて農民から取りたてたし、またいまでも取りたてている貢納のせめて一部分なりとも人民に返還するように、試みないのか？　この貢納は今日の飢餓と非常に密接な関連がないだろうか？　また、この貢納を返せという要求は、すべての農奴主およびあらゆる種類の農奴制にたいする農民の革命的激昂を拡大させ深化させるうえで、われわれに非常に貢献しはしないだろうか？

しかし、この貢納をことごとく取りもどすことはできないではないか――われわれにこう反論するものがある。そのとおりである（切取地もことごとくは取りもどすことができないように）。だが、負債の全額をもはや要求できないとしても、いったいどうしてその一部なりとも取り返さないのか？　買取金前貸を利用した巨大な土地所有貴族の土地にたいする特別税にたいして、どういう反対がありうるのか？　（ときには世襲領地にさえ転化している）巨大所有地のこのような所有者の数は、ロシアでは非常に多く、彼らに農民の飢餓にたいする特別の責任を負わせるのは公正であろう。そして、最も多く農奴制の伝統がしみこんでおり、最も反動的で、社会にとって最も有害な寄生者たちを富ませるのに役だっており、それと同時に少なからぬ面積の土地を民法上および商業上の取引から除外しているような所有である、修道院所有地と帝室領地の完全な没収は、さらにいっそう公正であろう。したがって、このような領地の没収は、まったく社会の発展全体のためになるであろう。* それは、「国家社会主義」という奇術には絶対にみちびきえないような、そういう種類の部分的なブルジョア的土地国有化にほかならないであろう。それは、新しいロシアの民主主義的制度を強化するうえで直接で巨大な政治的意義をもつであろう。それとともに、それはまた飢えた人人の救援のための追加資金をあたえるであろう。

* 没収されたこれらの領地を賃貸しするにあたっては、社会民主党は、いまでもすでに固有の意味の農民的政策ではなく、さきにわれわれがナデージヂンに反対したさいに略述したような政策をこそ、実施しなくてはならないであろう。

九

最後に、われわれの農業綱領のはじめの二つの項についていえば、これらについてはながながと詳論する必要はない。「土地買取賦金と年貢支払金の廃止、さらに人頭税負担身分としての農民に現在課せられているあらゆる義務負担の廃止」（第一項）は、あらゆる社会民主主義者にとって自明な事柄である。この方策の実践上の実行についてもまた、われわれが判断しうるかぎりでは、なんの疑念も生じない。第二項は、「連帯保証制と、農民各自……」（「農民たち」ではなく、「農民各自」であることに注意）「……が自分の土地を処分するのを拘束しているいっさいの法律の廃止」を要求している。ここで、あの悪名高い、永久に記念すべき「共同体」についてすこしばかり述べておく必要がある。いうまでもなく、実際には、連帯保証制の廃止（この改革なら、ヴィッテ氏はおそらく革命前にでも実行できるだろう）、身分的区分の撤廃、移動の自由、各個の農民にとっての土地処分の自由は、今日の土地共同体が四分の三かたそうである課税団体的・農奴制的な重荷を不可避的に急速に一掃するだろう。しかしこのような結果は、共同体にたいするわれわれの見解の正しさを証明するだけであろうし、また共同体が資本主義の社会的＝経済的発展全体と両立しえないことを証明するものであろう。このような結果は、けっしてわれわれが勧告するなんらかの「反共同体」方策によって引きおこされるのではないだろう。なぜなら、われわれは、農民の土地管理のあれこれの制度に直接反対するただひとつの方策も、けっして擁護したことがなかったし、これからも擁護することはないだろうからである。それどころか、民主主義的な地方行政組織としての、また協同組合または隣保組合としての共同体なら、われわれはそれを、官僚のいっさいの侵害行為──『モスコーフスキエ・ヴェードモスチ』(一三)の陣営に属する共同体の敵がとくにこのんでやっている侵害行為──から、無条件に擁護するであろう。われわれは、だれであろうと人々が「共同体を破壊する」のを、いかなるときにも助けないであろう。だがわれわれは、民主主義に矛盾するいっさいの制度の廃止のためには、無条件に努力するであろう。この廃止が土地の根本的および部分的な割替等々にどんな影響をあたえようとも、そうするであろう。この点、われわれとナロードニキ──公然のであろうと隠然のであろうと、首尾一貫したものであろうと首尾一貫しないものであろうと小心のであろうと大胆なのであろうと──との、根本的な区別がある。彼らは、一方では、「もちろん」民主主義

者でありながら、他方では、移動の完全な自由、農民共同体の身分団体的性質の完全な一掃、したがってまた連帯保証制の完全な廃止、農民各自が自分の土地を処分するのを拘束しているいっさいの法律の廃止というような、基本的な民主主義的要求にたいする自分の態度を、断固として明確に規定するのを恐れているのである。*

* この問題で二股をかけようとする傾きのある、ロシアの数多くの急進主義者たちを（さらに革命家たち――『ヴェーストニク・ルースコイ・レヴォリューツィイ』の――をさえ）、ほかならぬこの試金石によって試験しなければならない。

われわれにたいして次のように反論するものがある。――個々の農民の個人的な意志を神聖化する最後の方策は、割替の体系としての共同体ばかりでなく、協同組合的隣保組合としてのそれをさえをも、直接破壊する。個々の農民は、多数者の意志に反して、その土地を独立の地所として分与するよう要求する権利をもつことになろう。これは、個人にたいする集団の権利の縮減をではなくその拡大を助長しようとする、あらゆる社会主義者の一般的傾向に矛盾しないだろうか？

これにたいして、われわれは次のように答えよう。――われわれの定式からは、各農民が土地をかならず独立の地所として分与することを要求する権利をもつということには、まだならない。われわれの定式から出てくるのは、土地を売却する自由だけである。そのさい、同一共同体員が売却される土地を優先的に購入する権利をもつことは、この自由と矛盾するものではない。連帯保証制の廃止は、農民共同体の現在のあらゆる成員を一定の地所の自由な共同所有者に変えるにちがいない。ついで彼らがこの地所をどう処分するかは彼らの問題であって、それは一般民法と当事者間の特別の契約とに依存するであろう。個人にたいする集団の権利の拡大についていえば、社会主義者がそれを擁護するのは、この拡大が技術的および社会的進歩のためになるときだけである。*もちろんそういう形でなら、われわれもまたこれに関係するあらゆる法律を擁護するであろうが、ただその場合、この法律が小所有者だけでなく、農民だけでなく、すべての土地所有者一般に関連するものであることを条件としてである。

* たとえばカウツキーは、「(一) 耕地の境界画定、混在耕地の一掃、(二) 農耕の向上、(三) 伝染病の予防のために、土地の私有権の制限」を要求することを、正当なものとみている（『農業問題』、四三七ページ）[一三四]。この種のまったく正当な要求は、けっして農民共同体と結びつくものではないし、また結びつけられてはならない。

一〇

最後に、われわれの農業綱領の根底にある基本的な諸命題を要約しよう。たまたま綱領の作成にあたるか、他国での綱領の作成の詳細を知る機会をもった人ならだれでも、同一の思想を多種多様な仕方で定式化できることを知っている。われわれにとって重要なことは、いまわれわれの草案をその判断にゆだねるすべての同志諸君が、なによりもさきに、またなにもまして、基本的な諸原則にかんして完全な同意に達することである。その場合には、定式化の仕方のあれこれの部分的特殊性は決定的な意義をもつものでない。

われわれは、ロシアの農業制度の分野でも中心的な事実は階級闘争であると認める。われわれは、この事実とそれから派生するいっさいの結果との確固たる承認にもとづいて、われわれの全農業政策（したがってまた農業綱領）を立てている。われわれの当面の主要目標は、農村における階級闘争の自由な発展のための道を清めること、全世界の社会民主主義の終局目標の実現をめざす、すなわちプロレタリアートによる政治権力の獲得および社会主義社会の基礎の創造をめざす、プロレタリアートの階級闘争の自由な発展のための道を清めること、である。階級闘争をすべての「農業問題」における自分たちの導きの糸と宣言するわれわれは、まさにそのことによって、中途半端であいまいな諸理論――「ナロードニキ的」、「倫理社会学派的」、「批判家的」、社会改良的、その他どういう名称でよばれようとも――のロシアにおけるきわめて多数の支持者たちから、自分を断固として峻別するのである！

農村における階級闘争の自由な発展のための道を清めるには、げんざい農村住民の内部で資本主義的敵対の萌芽を隠蔽し、それが発展しないようにさせている農奴制度のいっさいの残存物を除去することが不可欠である。そしてわれわれは、農民がこれらのいっさいの残存物を決定的な一撃で一掃するのを援助する最後の試みをおこなうのである。――「最後の」というのは、発展しつつあるロシア資本主義そのものも、自然発生的にこれと同じ働きをおこなっており、同じ目標にむかってすすんでいるからである。ただそれは、暴力と抑圧、零落と餓死という、資本主義に固有の道によってすすんでいるのである。農奴制的搾取から資本主義的搾取への移行は不可避である。そして、この移行を阻止したり、または「回避し」たりしようと試みることは、有害な反動的幻想であろう。しかしこの移行は、「貨幣の権力」に依拠してでなく、以前の奴隷所有者の権力の

伝統に依拠して家父長制的農民からいまやその体液の最後の一滴までも吸いとりつつある農奴主たちの子孫を、暴力的に転覆するという形でも、考えられる。現物経済制度のもとで自分の手の労働によって生きているこの家父長制的農民は、消滅すべき運命にある。だが彼らはけっして、「公租の絞りとり」と笞との責苦、長期にわたる恐ろしいほどの餓死の苦しみを受けるべき運命を、「必然的に」、社会経済的進化の「内在的」法則によって、負わされているのではない。

そこでわれわれは、資本主義社会（ロシアはますますそうなりつつある）で小生産者が繁栄できるという幻想はおろか、あるいはまずまずの生活ができるという幻想すら抱くことなく、農奴制の遺物の完全で無条件の、改良主義的ではなく革命的な、廃止と一掃を要求する。われわれは、貴族政府によって農民から切り取られ、いまにいたるまでひきつづき農民を事実上の奴隷状態に引きとどめている土地を、農民のものと認める。こうしてわれわれは――例外として、また特別の歴史的事情のために――小所有の擁護者となるのであるが、しかしわれわれは、「旧制度」からそのまま残っている事物に反対して小所有が闘争する場合にのみ、また、不動の、うちのめされ、見すてられた状態のままに凝固してしまった家父長制的なオブローモフ的農村の改造を阻止している諸制度の廃止を条件としてのみ、また移動の完全な自由と土地取引の自由とをつくりだし、身分的区分を完全に廃絶することを条件としてのみ、それを擁護するのである。われわれは、ロシアの公法および民法の民主主義的改訂を、悪名高い「農民改革」の民主主義的・革命的改訂によって補足しようと欲するのである。

農業政策のこういう原則を指針とするロシアの社会民主主義者は、農村にはいって、そこにある諸関係の複雑な網を解きほぐすことができ、自分の厳格に一貫した革命的な宣伝と扇動をそれらの関係に「適応させる」ことができるであろう。そのときには彼は、ありうべき農民運動（どこかでもう始まりつつあるように見える）に不意をおそわれるようなことはないであろう。彼は、われわれの綱領のなかの「労働者」の当面の要求の部でくわしく叙述されている、農業賃金労働者の擁護のための諸要求を、もちろん、いつどこででも提出するであろうが、彼はそれらの要求に限定しはしないであろう。彼は、農民のなかでも一般民主主義的運動を推進することができるであろう。そしてこの運動は（わが国の農村で萌芽状態の範囲を越えてすすむ運命にあるとすれば）、農村の農奴主との闘争から始まって、――ツァーリ専制とよばれる、農奴制のあの最も強力で最もいまわしい残存物にたいする蜂起に終わるであろう。

＊＊

追記。この論文は、今年の春の南ロシアにおける農民蜂起(一五〇)以前に書かれた。論文の原則的な諸命題はこの事件によって完全に確証された。だが、わが党の「農村」活動でいまや党にたいして特別の力をこめて提起されている戦術上の任務については、次回に述べることにしたい。

一九〇二年二―三月前半に執筆
一九〇二年八月に雑誌『ザリャー』第四号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第六巻、三〇三―三四八ページ所収
邦訳全集、第六巻、九七―一四五ページ所収

貧農に訴える

社会民主主義者はなにを望んでいるか、農民のための説明(一)

一 都市の労働者のたたかい

おそらく農民のなかには、すでに都市の労働者の騒動のことを聞いたことのあるものがたくさんいるだろう。両首都〔ペトログラードとモスクワ〕や工場にいたことがあって、そこに起こった、警察が暴動とよんでいるものを、たびたび目撃したものもいるだろう。騒動に参加して、当局のために農村に追放されてきた労働者を知っているものもいるだろう。労働者のたたかいについて述べた労働者むけのリーフレットや本を手にいれたものもいるだろう。世間のことをよく知っている人が、都市で起こっている事柄を話すのを聞いただけのものもいるだろう。

以前には、暴動をおこすのは学生だけだったが、いまでは、どの大都市でも幾千、幾万という労働者が立ちあがっている。いちばん多いのは、労働者が自分たちの雇主、工場主、資本家とたたかう場合である。労働者はストライキをおこし、工場の作業をいっせいにやめ、賃上げを要求し、日に一一時間も一〇時間も働かせないで、八時間だけ働かせるようにしろと、要求している。労働者は、そのほかにも、働く人の生活を楽にするいろいろのことを要求している。彼らは、仕事場の設備を改善してほしい、機械に特別の装置をつけて安全にしてほしい、自分たちの子供が学校に行けるようにしてほしい、病人が病院で必要な手当を受けられるようにしてほしい、労働者の住居を犬小屋でなく人間の家らしくしてほしい、と望んでいる。

警察は労働者のたたかいに干渉している。警察は労働者をつかまえ、監獄にほうりこみ、裁判もしないで生れ故郷やシベリアにすら追放している。政府は法律でストライキや労働者の集会を禁止している。だが労働者は、警察とも、政府とも、たたかっている。労働者はこう言っている。おれたち幾百万の働く人民は、腰をかがめてへいへいするのには、もうあきあきした! 金持のために働いて、自分ではいつまでも乞食暮しをするのには、もうあきあきした!

おれたちは、ひとに略奪されるままになっているのには、もうあきあきした！　おれたちは団結して団体をつくり、労働者をのこらず一つの大きな労働者団体（労働者政党）に団結させて、力を合わせてもっともっとよい生活をかちとろうと思う。おれたちは、新しい、もっとよい社会制度をかちとろうと思う。この新しい、もっとよい社会には、金持も貧乏人もいてはならない。みなが労働に参加しなければならない。ひとにぎりの金持ではなく、勤労者がみな、共同の労働の成果をたのしむようにならなければならない。機械やその他のいろいろの改良は、みなの労働を楽にすべきもので、幾百万、幾千万の人民を犠牲にして、少数の人間を富ませることになってはならない。この新しい、もっとよい社会は社会主義社会とよばれる。この社会のことを教える学説は社会主義とよばれる。このもっとよい社会制度をめざすたたかいのための労働者の団体は、社会民主主義者の党とよばれる。このような党はほとんどどの国でも（ロシアとトルコを除いて）公然と存在している。わが国の労働者もまた、教育のある人々のなかから出てきた社会主義者といっしょに、そういう党を組織した。ロシア社会民主労働党がそれである。(三)

政府はこの党を迫害しているが、党は、どんな禁止にも屈しないで秘密に存在しており、自分の新聞や本を発行し、いろいろな秘密の団体を組織している。また、労働者は、秘密の集会に集まるだけではなく、一団となって街頭にも出ていって、「八時間労働日万歳、自由万歳、社会主義万歳！」と書きしるした旗をひるがえしている。政府は、このために労働者を狂暴に迫害している。政府は、軍隊まで繰りだして、労働者に発砲させている。ロシアの兵士は、これまでにヤロスラヴリやペテルブルグで、リガで、ドン河畔ロストフで、ズラトウストで、ロシアの労働者を殺した。(三)

しかし労働者は屈服しはしない。彼らはたたかいをつづけている。彼らはこう言っている。――どんな迫害も、監獄も、流刑も、懲役も、死も、われわれは恐れない。われわれの事業は正しい。われわれは、働く人々みなの自由と幸福のためにたたかっているのだ。われわれは、幾千万、幾億の人民を、暴力や抑圧や貧困から救いだすためにたたかっているのだ。労働者はますます自覚をもつようになっている。社会民主主義者の数は、どの国でも急速にふえている。どんなに迫害されようと、われわれはやがて勝つだろう、と。

この社会民主主義者とはどういうものか、彼らはいったいなにを望んでいるのか、彼らが人民のために幸福をたたかいとろうとしているのを手助けするには、農村ではどう行動したらよいのか、貧農はこれらのことをはっきり理解

する必要がある。

二　社会民主主義者はなにを望んでいるか？

ロシアの社会民主主義者は、なによりもまず政治的自由をかちとろうとしている。そして、この自由が社会民主主義者に必要なのは、新しい、もっとよい、社会主義的な社会制度のためのたたかいに、ロシアの労働者の全部を公然と団結させるためである。

政治的自由とはなにか？

このことを理解するためには、農民は、はじめに、自分たちがいまもっている自由と農奴制度とをくらべてみなければならない。農奴制度のころには、農民は、地主の許可がなければあえて結婚しなかった。いまでは、農民には、許可などぜんぜん受けないで結婚する自由がある。農奴制度のころには、農民は、差配人の指定する日にはかならず旦那のために働かなければならなかった。いまでは、農民には、どの雇主のために、いつ、どのくらいの賃金で働くかを、自分でえらぶ自由がある。農奴制度のころには、農民は、旦那の許可がなければあえて部落[二九]からどこかへ出かけなかった。いまでは、農民には、ミールが彼を行かせてくれれば、滞納金がなければ、旅券をもらえれば、知事または郡警察長が移住を禁止しなければ、どこへでも好きなところへ行く自由がある。ということは、農民は、どこへでも好きなところへ行く完全な自由、移転の完全な自由をいまでももっておらず、農民はまだ半農奴のままであることになる。なぜロシアの農民はいまでも半農奴のままなのか、この状態からぬけだすには農民はどうしたらよいかということは、あとでくわしく述べることにする。

農奴制度のころには、農民は、旦那の許可がなければあえて財産を獲得しようとはしなかったし、土地を買おうともしなかった。いまでは、農民は、どんな財産を獲得するのも自由である（ミールから脱退する完全な自由、自分の土地を自分の好きなように処分する完全な自由は、いまでも農民はもっていない）。農奴制度のころには、農民が地主から体罰を受ける場合もあった。農民はいまでも体罰を免除されたわけではないが、農民が自分の地主から罰せられるということは、もうありえない。

こういう自由は市民的自由とよばれる。それは、家庭の問題、一身上の問題、財産上の問題での自由である。農民と労働者は、自分の家庭生活や、自分の一身上の問題を処理し、自分の労働を処分し（自分の雇主をえらび）、自分の財産を処分する自由を（完全にではないが）もっている。

しかしロシアの労働者も、ロシアの全人民も、自分たちの全国民的問題を処理する自由を、いまでももっていない。農民が地主の農奴であったのと同様に、全人民は、いまでもそっくり役人の農奴である。ロシアの人民は、役人をえらぶ権利をもっていないし、国家全体のために法律をつくる代表を選挙する権利ももっていない。ロシアの人民は、国家の事務を討議するために寄合いをひらく権利さえもっていない。むかし旦那が農民の同意なしに差配人を任命したのと同様に、われわれの同意なしに任命されてわれわれのうえにおかれている役人、この役人の許可がなければ、われわれは新聞や本を印刷することとさえしないし、国家全体にかかわる問題について、みなのまえで、みなに代わって話すこともしないのである！

農民が地主の奴隷であったのと同様に、ロシアの人民は、いまでも役人の奴隷である。農奴制度のころに農民が市民的自由をもっていなかったのと同様に、ロシアの人民はいまなお政治的自由をもっていない。政治的自由というのは、人民が自分たちの全国民的な業務、国家的な業務を処理する自由のことである。政治的自由というのは、人民が国会（議会）に自分たちの代表（代議士）を選出する権利のことである。人民が自分でえらんだこういう国会(一〇)（議会）だけが、すべての法律を審議し、公布し、すべての租税や公租をきめるのが、ほんとうである。政治的自由というのは、人民が自分ですべての役人をえらび、あらゆる国家の業務を審議するためにあらゆる種類の寄合いをひらき、許可などになにもなしに、どんな本でも新聞でも発行する権利のことである。

ヨーロッパのほかの国民はみな、すでにずっと以前に政治的自由をたたかいとった。ただトルコとロシアでだけ、人民はいまなおサルタンの政府やツァーリの専制政府の政治的奴隷になっている。ツァーリの専制というのは、ツァーリの無制限の権力のことである。人民は、国家の構成や国家の統治にはすこしもあずからない。ひとりツァーリだけが、その個人的な、無制限の専制権力によって、すべての法律を公布し、あらゆる役人を任命している。だがいうまでもなく、ツァーリがロシアのすべての法律やロシアの役人全員を、知るといういうだけでも不可能である。ツァーリは、国内でどういうことがおこなわれているかさえ、知ることができない。ツァーリは、数十人の、最も有力な、最も身分の高い役人の意志を確認するだけである。どんなに自分でそうしたいと思ったところで、一人の人間がロシアのような広大な国をおさめることはできるものではない。ロシアをおさめているのはツァーリではない――そういうことは、一人の人間の専制の場合にしかいえないことである！

——ロシアをおさめているのは、ひとにぎりの、最も富んだ、身分の高い役人たちである。ツァーリは、この一団が彼に知らせてもよいと思うことしか知っていない。ツァーリがこのひとにぎりの高官の貴族の意志にさからうことは、まったく不可能である。彼は、ごく幼いときからこういう身分の高い人間である。彼は、ごく幼いときからこういう身分の高い人間のあいだでだけ暮らしてきた。この同じ連中が、ツァーリをそだて、学問を教えてきたのである。ロシアの全人民についてツァーリが知っていることは、これらの身分の高い貴族や、富んだ地主や、ツァーリの宮廷に出入りを許されている最も富んだ少数の商人が知っていることに、限られる。

どの郷役場に行っても、次のような絵がかかっているのを見ることができる。その絵にはツァーリ（現ツァーリの父のアレクサンドル三世）が描かれている。ツァーリが、彼の戴冠式にやってきた郷長たちにむかって演説しているところである。ツァーリは彼らに命令してこう言っている。「おまえたちの貴族会長の言うことにしたがえ！」そして、いまのツァーリ、ニコライ二世も、これと同じことを繰りかえして述べた。つまり、ツァーリたちは、貴族の助けを借り、貴族をなかだちとしなければ、国家をおさめることができないということを、自分でも認めているのである。農民は貴族に服従せよ、というこのツァーリの演説は、しっかりおぼえておく必要がある。ツァーリの政府をいちばんよい政府のように見せかけようとしている連中は、人民にひどいうそをついているのだということを、はっきり理解しなければならない。この連中は言っている。ほかの国では選挙された政府がある。そこでは金持が選出されるが、金持は不公平な政治をおこない、貧乏人を圧迫している。ところがロシアには、選挙された政府がない。専制のツァーリが万事をすべておさめている。ツァーリはすべての者のうえに、貧乏人のうえにも金持のうえにも、立っている。ツァーリは、貧乏人にも金持にも、すべての者にたいして同じように公平である、と。

このような談義はまったくの偽善である。わが国の政府の公平というものがどんなものかということは、ロシア人ならだれでも知っている。わが国で、普通の労働者や雇農が参議院に出るようなことができるかどうかは、だれでも知っている。ところが、ヨーロッパのほかの国ではどこでも、工場の労働者も、犂をつかう雇農も、国会（議会）に出ている。そして、彼らは、全人民のまえで自由に労働者のみじめな暮しのことを話し、労働者にむかって、団結して、よりよい生活のためにたたかえ、と呼びかけてきた。それでも、人民の代表たちのこのような演説をやめさせせよ

うとはだれもしなかったし、警察官も一人として、彼らに指一本ふれはしなかった。

ロシアには選挙された政府はないけれども、統治しているのは金持や身分の高い人間であるばかりか、彼らのうちでもいちばん悪い連中である。統治しているのは、ツァーリの宮廷でだれよりも陰口のうまい連中、だれよりもたくみに他人をおとしいれる連中、うそをつき、ツァーリにむかって他人のことを中傷し、おべっかをつかい、取りいっている連中である。政治は秘密におこなわれていて、どういう法律を出す準備をしているのか、どういう戦争をやろうともくろんでいるのか、どういう新しい税金をかけようとしているのか、どういう役人にどういう理由で褒美をやり、またどういう役人をやめさせようとしているのかを、人民は知らないし、知ることもできない。[22] ロシアのように、役人がこんなにたくさんいる国は、どこにもない。そしてこの役人たちは、声のない人民のうえに暗い森のようにのしかかっている。――普通の働く人は、この森を通りぬけることはけっしてできないし、正しい言い分を通すことはけっしてできない。賄賂をとったり、略奪や暴行をはたらいたかどで役人を訴えても、ただの一度でも明るみに出ることはない。役所のだらだらした仕事のために、どんな訴えも立ち消えになってしまう。ひとりぼっちの人の声は、全人民のところまではけっしてとどかないで、この暗い茂みのなかで消えてしまい、警察の拷問部屋のなかで窒息させられてしまう。人民によってえらばれたのでなく、人民にたいして責任を負わない役人たち、この役人たちの大群が目のつんだクモの巣を張りめぐらしていて、人々はこのクモの巣にかかってハエのようにもがいている。[23]

ツァーリの専制は役人たちの専制である。ツァーリの専制とは、人民が役人に、なかでも警察に農奴のように隷属することである。ツァーリの専制は警察の専制である。

労働者が街頭に出ていって、自分たちの旗に「専制を倒せ！」、「政治的自由万歳！」と書くのは、このためである。だから、幾千万の貧農も、都市の労働者のこのたたかいの叫びを支持し、それと声をあわせなければならない。都市の労働者と同じように、農村の労働者や無産の農民も、迫害に屈せず、敵のどんなおどかしや暴行も恐れずに、はじめのうち失敗したからといってあわてないで、ロシアの全人民の自由のための断固たるたたかいにすすみ、なによりも人民代表の招集を要求しなければならない。ロシア全国で、人民自身が自分たちの議員（代議士）をえらぶようにするのだ。そしてこの議員たちが最高会議を構成して、この会議がルーシに選挙された政府をつくり、人民を役人と警察にたいする農奴的隷属から解放し、人民に自由な寄合

い、自由な言論、自由な出版の権利を保障するようにするのだ！

これこそ、社会民主主義者がなによりも第一に望んでいることである。これが、彼らの第一の要求――政治的自由の要求である。(二〇)

政治的自由、すなわち国会（議会）へ代表を選挙する自由、寄合いの自由、出版の自由が、それだけですぐさま勤労人民を貧困と抑圧から救いだすものでないことを、われわれは知っている。都市と農村の貧乏人を金持のための労働からすぐさま救いだしてくれるような手段は、この世には存在しない。働く人民は、自分自身のほかにはだれをたよっても、だれをあてにしてもならない。働く人々が自分で自分を解放しなければ、彼らを貧困から解放してくれるものはだれもいないだろう。ところで、自分を解放するためには、労働者は、全国にわたって、ロシア全土で、一つの団体に、一つの党に団結しなければならない。しかし、専制的な警察政府があらゆる寄合い、あらゆる労働者新聞、あらゆる労働者代表の選挙を禁止しているかぎり、幾百万の労働者がいっしょに団結することはできない。団結するためには、どんな団体でも組織できる権利をもたなければならず、結社の自由をもたなければならず、政治的自由をもたなければならない。

政治的自由は、働く人民をすぐさま貧困から救いだしはしないが、しかし、貧困とたたかう武器を労働者にあたえるであろう。労働者自身の団結以外には、貧困とたたかう手段はなにもないし、またありえない。政治的自由がなければ、幾百万の人民が団結することはできない。

人民が政治的自由をたたかいとったヨーロッパの国々では、どこでも、労働者はすでにずっとまえから団結しはじめている。土地も、仕事場ももたず、一生涯他人に雇われて働く労働者――そういう労働者は、ヨーロッパのどこでも、プロレタリアとよばれている。五〇年以上もまえに、働く人民を団結させる呼びかけの声が鳴りひびいた。「万国のプロレタリア、団結せよ！」――このことばは、この五〇年のあいだに全世界にゆきわたった。このことばは、幾万、幾十万という労働者集会で繰りかえされた。このことばを、諸君は、ありとあらゆる言語で書かれた幾百万部という社会民主主義の本や新聞のなかで読むことだろう。

いうまでもなく、幾百万の労働者を一つの団体に、一つの党に団結させるということは、時間と根気とねばりづよさと勇気を必要とする、たいへん困難な、ほんとうに困難な仕事である。労働者は、困窮と貧困に押しひしがれ、資本家や地主のためのはてしない苦役によって愚鈍にされている。労働者は、なぜ自分たちはいつまでも乞食のままで

いるのか、この状態からぬけだすにはどうしたらよいかということを、考える時間さえないことが多い。労働者の団結をじゃまするため、あらゆる方法がとられている。ロシアのように政治的自由のない国ではむきだしの狂暴な弾圧がおこなわれるし、あるいは、社会主義の学説を説きひろめるような労働者の雇入れをことわることもある。さらにごまかしや、買収に訴えたりすることもあれば、しかし、どんな弾圧も、どんな迫害も、働く人民全体を貧困と抑圧から解放するという偉大な事業のためにたたかう労働者＝プロレタリアを押しとどめることはできない。社会民主主義者である労働者の人数は、たえずふえている。たとえば、隣国のドイツには選挙された政府がある。以前には、ドイツにもやはり無制限の専制的な国王の政府があった。だがドイツ人民は、すでにずっとまえに、いまから五〇年以上もまえに、専制政治を打ち破り、力ずくで政治的自由を奪いとったのである。ドイツでは、法律は、ロシアのようにひとにぎりの役人が公布するのでなく、人民代表の会議、すなわち議会、この議会の代議士は、ドイツ人のいう帝国議会が公布している。この議会の代議士は、成年男子の全員が選挙する。だから、社会民主主義者にどれだけの票が投じられたかを計算することができる。一八八七年には、総投票の一〇分の一が社会民主主義者に投じられた。一八九八年（ドイツ帝国議会のこのまえの選挙がおこなわれた年）までに、社会民主主義者の得票数はほとんど三倍にふえた。じつに総投票の四分の一以上が社会民主主義者に投じられたのである。二〇〇万人以上の成年男子が社会民主主義者の代議士を議会に選出した。［注］ドイツでは、農村労働者のあいだでは社会主義はまだあまりひろまっていなかったが、いまでは彼らのあいだで社会主義がとくに急速に前進している。そして、雇農や、日雇いや、貧乏になった無産の農民の大多数が、都市の兄弟たちと合流するとき、ドイツの労働者は勝利をおさめ、勤労者の貧困や抑圧のない制度を打ちたてるであろう。

ところで、社会民主主義者である労働者は、いったいどのようにして人民を貧困から救いだそうと思っているのだろうか？

このことを知るためには、今日の社会制度のもとで人民の大多数が貧乏なのはどういう理由によるのかということを、はっきり理解しなければならない。富んだ都市が発達し、贅沢な商店や邸宅が建ち、鉄道が敷かれ、工業でも農業でも各種の機械や改良が採用されている。――それなのに、幾千万の人民は、なお貧困からぬけだせないでいる。いや、そればかりでない。失業者はますますふえてゆく。農村でも

都市でも、どんな仕事もまったく見つけられない人間がますますふえている。農村では彼らは飢えており、都市では彼らは浮浪人の部隊やルンペンの群をふくれあがらせ、都市の場末の土小屋や、モスクワのヒトロフ市場にあるような恐ろしい貧民窟や穴倉で、けもののようにかたまって暮らしている。

どうしてこんなことが起こるのだろうか？ 富と贅沢はますます増大しているのに、自分の労働ですべての富をつくりだす幾百万、幾千万の人々は、いつまでたっても貧乏で、乞食暮しをしているというのは？ 農民は飢えのために死んでゆき、労働者は仕事がなくてうろついているのに、商人はロシアから幾百万プードの穀物を外国に輸出し、工場は商品をもてあまし、売りさばき先がないために休止しているというのは？

こういうことが起こるのは、なによりもまず、土地の大部分や、工場、仕事場、機械、建物、汽船が、少数の金持の所有になっているためである。これらの土地、これらの工場や仕事場では、幾千万の人民が働いている。しかし、それらは数千、数万の金持、地主、商人、工場主の持ち物である。人民はこれらの金持のために、賃金とひきかえに、一片のパンとひきかえに、雇われて働いている。労働者の食うや食わずの生活費以上につくりだされたものは、みな金持の手にはいる。それらはみな、金持の儲け、彼らの「所得」となる。機械や作業の改善から生じる利益はみな、地主と資本家のものとなる。彼らは幾百万という富をたくわえてゆくが、働く人の手にはこの富のうちのほんのひとかけらしかはいらない。働く人は、作業のためにいっしょにまとめられる。大領地や大工場では、何百人、ときには何千人もの労働者が働いている。種々さまざまな機械が使用されていて、このように労働が結合されるため、労働はますますうまくゆくようになる。現在一人の労働者がつくりだすものは、以前に機械を全然使わずに一人ひとりで働いていたころに数十人の労働者がつくりだしていたものよりも、ずっと多い。だが、労働がこのようにうまくゆき、生産的になったことから利益を受けるのは、勤労者全体ではなく、とるにたりない数の大地主、商人、工場主だけである。

地主や商人が人民に「仕事をあたえる」とか、貧しい人に手間かせぎの仕事を「あたえる」とかいう言い方を、よく耳にすることがある。たとえば、近所の工場やら近所の地主農場が地元の農民を「養っている」、などと言われる。だがほんとうは、労働者が、その労働によって、自分自身のほかに、自分では働かない人々の全部を養っているのである。それなのに労働者は、地主の土地や、工場や、

鉄道で働かしてもらうかわりに、つくりだしたものはみな、有産者にただで引き渡しており、自分はやっと生きてゆけるだけの食い扶持しかもらっていない。つまり、ほんとうは、地主や商人が労働者に仕事をあたえているのではなく、労働者がその労働の大部分をただで引き渡して、その労働でみなを養っているのである。

つぎに、すべての近代国家で人民が貧乏なのは、働く人が製造するあらゆる品物が、売るためのもの、市場めあてのものであるからである。工場主や手工業者、地主や富んだ農民は、売るために、金を手に入れるために、あれこれの製品をつくり、家畜をそだて、穀物を作付し、とりいれる。いまでは、どこでも金がおもな力となっている。人間労働のありとあらゆる生産物が、金と換えられる。金で、なんでも好きなものを買うことができる。人間でさえ金で買うことができる。つまり、無産の人間を強制して、金をもっている人のために働かせることができるのである。以前には、おもな力は土地であった。農奴制度のころにはそうであった。土地をもっているものが、力も権力ももっていた。ところが今日では、金が、資本が、おもな力となった。金で、いくらでも土地を買うことができる。金がなければ、土地をもっていたところで、たいして役に立たない。税金の支払はいうまでもなく、プラウその他の農具を買うにも、家畜や、衣類や、そのほか町でできるいろいろな商品を買うにも、金がなければどうしようもない。金のために、ほとんどすべての地主が、その所有地を銀行に抵当に入れている。金を手に入れるために、政府は全世界の金持や銀行家から借金しており、この借金の利子として年に幾億ルーブリも支払っている。

いまでは、みなが金のために激しくたたかいあっている。だれもが、安く買おう、高く売ろうと努めており、だれもが、他人を追いこそう、できるだけたくさんの商品を売ろう、値切ろう、有利な売り先あるいは仕入先を他人に隠しておこう、と努めている。つまり、小前の者、小手工業者や小農は、金ゆえのこのおしなべてのつかみあいで、だれよりも苦しい目にあわされている。彼らはいつも、富んだ商人や富んだ農民のうしろにとりのこされている。彼らはいつも、なんの貯えももたず、その日暮しの生活をおくっており、すこしでも困難にぶつかったり不運にあったりすると、最後の家財までも質に入れるか、役畜を捨て値で売らなければならなくなる。いったんクラーク〔富農〕なり高利貸なりの手に落ちたがさいご、この足かせからぬけだす力のあるものはごくまれで、たいていはとことんまで落ちぶれてしまう。年々、幾万、幾十万の小農や小手工業者が自分の小屋を閉めて、分与地を共同団体にただで引き渡

して、賃金労働者、雇農、雑役夫、プロレタリアになってゆく。ところが金持は、この金のためのたたかいでますます儲けるばかりである。金持は、幾百万ルーブリ、幾億ルーブリの金を銀行にかきあつめ、自分の金ばかりか、銀行にあずけられる他人の金までつかって、儲けてゆく。小前の者は、銀行や貯蓄金庫にあずけるその数十ルーブリまたは数百ルーブリにたいして、一ルーブリあたり三ないし四コペイカの利子を受けとるのだが、金持は、これらの数十ルーブリをよせあつめて数百万ルーブリとし、この数百万をつかって自分の売上げをふやし、一ルーブリあたり一〇コペイカも二〇コペイカも儲けている。

だからこそ、社会民主主義者である労働者はこう言っているのだ。人民の貧困をなくすただ一つの手段は、全国にわたって、現在の制度を下から上までつくりかえ、社会主義制度を打ちたてることである。すなわち、大地主からその所有地を、工場主からその工場を、銀行家からその貨幣資本を取り上げ、彼らの私的所有を廃止して、それを全国の働く人民全体の手に引き渡すことである、と。そうなれば、労働者の労働を処分するのは、他人の労働で生活する金持ではなく、労働者自身とその代表とであろう。そうなれば、共同の労働の成果と、あらゆる改善や機械から生まれる利益とは、全勤労者、全労働者のものとなるであろう。

そうなれば、富はいまよりももっと早くふえるであろう。なぜなら、労働者は、自分自身のために働くときには、資本家のために働くときよりももっとよく働くだろうからである。そして、労働日は短くなり、労働者の暮しはよくなり、彼らの生活全体がまったく一変するであろう。

しかし、全国にわたってすべての制度をつくりかえることは、なまやさしい仕事ではない。そのためには、非常な努力が必要だし、長年にわたる多くのねばりづよいたたかいが必要である。金持はみな、有産者はみな、ブルジョアジー*はみな、全力をあげて自分たちの富を守るであろう。金持階級全体を守るために、役人と軍隊が立ちあがるであろう。なぜなら、この政府そのものが、金持階級の手ににぎられているからである。労働者は、他人の労働で生活している人々のすべてとたたかうために、一体となって結束しなければならない。労働者はみずから団結するとともに、すべての無産者を団結させて、一つの労働者階級に、一つのプロレタリアートの階級にしなければならない。このたたかいは、労働者階級にとってなまやさしいものではないであろうが、しかし、このたたかいはかならず労働者の勝利に終わるであろう。なぜなら、ブルジョアジー、すなわち他人の労働で生活している人々は、国民のとるにたりない小部分にすぎないからである。これに反して、労働者階

級は国民の大多数を占めている。労働者対有産者——これは、数百万人対数千人を意味する。

＊ブルジョアとは、有産者のことである。ブルジョアジーとは、有産者を全部あわせたものである。大ブルジョアとは大きな有産者のことである。小ブルジョアとは小さな有産者のことである。ブルジョアジーとプロレタリアートというのは、有産者と労働者、金持と無産者、他人の労働で生活している人々と賃金めあてに他人のために働く人々というのと、まったく同じである。

ロシアの労働者も、すでにこの偉大な闘争のために、一つの社会民主労働党に団結しはじめている。警察に隠れて秘密に団結することがどんなに困難であっても、それでも団結は強まり、成長しつつある。しかし、ロシアの人民が政治的自由をたたかいとるときには、労働者階級を団結させる事業、社会主義の事業は、はるかに急速にすすむであろうし、ドイツの労働者のあいだで現在すすんでいるよりも、もっと急速にすすむであろう。

三　農村における富と貧困、有産者と労働者

われわれはいまや、社会民主主義者がなにを望んでいるかを知った。彼らは、人民を貧困から解放するために金持階級全体とたたかおうと望んでいるのである。ところで、わが国の農村の貧困は都市に劣らないし、おそらくはそれ以上でさえある。農村の貧困がどんなにひどいものかということは、ここでは述べないことにしよう。農村にいたことのあるどの労働者も、どの農民も、農村の困窮、飢え、寒さ、零落のことを、十分に知りぬいている。

しかし農民は、なぜ自分が貧乏し、飢えて、落ちぶれてゆくのか、この困窮からぬけだすにはどうしたらよいのかということを、知っていない。それを知ろうというなら、なによりもまず、都市といわず農村といわず、およそ困窮がどうして起こるかを理解しなければならない。われわれはこのことについてはすでに簡単に述べたし、無産の農民と農村の労働者とが都市の労働者と団結しなければならないことを見てきた。しかしこれだけではまだたりない。さらに、農村ではどういう人々が金持の、有産者のあとについてゆき、どういう人々が労働者の、社会民主主義者のあとについてゆくかということも、知らなければならない。地主にも負けないほど資本をため、他人の労働で生活してゆくことのできるような農民がたくさんいるかどうかも、知らなければならない。このことを十分明らかに知らなければ、どれほど貧困についておしゃべりしてもなんにもならないし、また、農村ではいったいだれとだれがたがいに団

結し、そして都市の労働者と団結しなければならないか、これが確固とした同盟となるには、つまり農民が、地主ばかりか、自分の兄弟分である金持の百姓にまでだまされることのないようにするには、いったいどうしたらよいかということを、貧農は理解できないであろう。

このことを明らかにするために、われわれは、次に、農村の地主がどれだけの力をもち、また富農がどれだけの力をもっているかを、見ることにしよう。

地主から始めよう。地主の力は、なによりもまず、彼らの私有になっている土地の大きさで判断することができる。農民分与地と私有の土地(三三)との両方をあわせて、ヨーロッパ・ロシア(三四)における土地の総面積は、約二億四〇〇〇万デシャチーナと見られていた*(官有地を除く。官有地のことはべつに述べることにしよう)。この二億四〇〇〇万デシャチーナのうち、農民の手に、すなわち一〇〇〇万戸をこえる世帯の手に、一億三一〇〇万デシャチーナの分与地がある。これにたいして、私的所有者の手に、すなわち五〇万にみたない家族の手に、一億〇九〇〇万デシャチーナの土地がある。つまり、平均をとってさえ、農民のほうは一家族あたり一三デシャチーナにしかならないのに、私的所有者のほうは一家族あたり二一八デシャチーナになる! だが、いますぐわかるように、土地配分の不平等はもっとはるかにひどいのである。

* 土地面積についてのこれらの数字も、このあとに出てくる数字も、もうひどく古いものばかりである。それらは、一八七七―一八七八年にかんする数字である。しかし、これより新しい数字はない。ロシア政府は暗闇のなかでなければもちこたえることができないので、わが国では、人民の生活についての完全な、真実の情報が全国的に集められることは、これほどもまれなのである。

私有者の手にある一億〇九〇〇万デシャチーナの土地のうち、七〇〇万デシャチーナは帝室領地である。すなわち、ツァーリの家族員の私有財産である。ツァーリとその家族はルーシ第一の地主、最大の地主である。一家族のもっている土地が五〇〇万の農民家族のもっている土地よりも大きいのだ! 次に、教会と修道院が約六〇〇万デシャチーナの土地をもっている。わが国の坊主は、農民には無欲と節欲を説教しながら、自分は、手段をえらばず広大な土地をかきあつめたのである。

次に、約二〇〇万デシャチーナが市や町の所有地になっており、またそれと同じだけの土地がいろいろの商工団体や会社の所有地になっている、と見られている。九二〇〇万デシャチーナの土地(正確な数字は九一、六〇五、八四五デシャチーナであるが、簡単のため概数をつかうことにする)は、五〇万弱(四八一、三五八)の私的所有者の家族

のものである。この家族数の半分は、まったくの小所有者である。彼らはそれぞれ一〇デシャチーナ以下の土地しかもっていない。そして彼ら全員をあわせても、一〇〇万デシャチーナ以下しかもっていない。これにたいして、一万六千の家族がそれぞれ一〇〇〇デシャチーナ以上の土地をもっており、全部で六五〇〇万デシャチーナをもっている。どんなに広大な土地が大土地所有者の手に集められているかということは、一〇〇〇にすこしたりない家族（九二四）がそれぞれ一万デシャチーナ以上の土地をもち、全部で二七〇〇〇万デシャチーナをもっている、ということを見ただけでも、明らかである！　一千家族が二〇〇〇万の農民家族と同じだけの土地をもっているのである。

　数千人の金持の手にこのような広大な土地がにぎられているかぎり、幾百万、幾千万の人民は貧乏し、飢えるほかないこと、またいつでも貧乏し、飢えるであろうことは、わかりきったはなしである。そういうことがつづくかぎり、国家権力、政府そのものも（たとえツァーリの政府であろうと）、これらの大土地所有者の言いなりほうだいになることは、わかりきったはなしである。貧農自身が、この地主階級にたいしてねばりづよい、必死のたたかいをするために団結し、一つの階級に結束しないかぎり、彼らはだれからも、またどこからも援助を期待できないことは、わかりきったはなしである。

　ここで注意しておかなければならないのは、わが国には、「国家」のほうがずっと多くの土地をもっていると言って、地主階級の力についてまったくまちがった見方をしている人々が非常に多い（しかも、教育のある人々のうちにさえ多い）、ということである。農民のこういう悪い助言者たちは言う。「いまでも、ロシアの領域（すなわち土地全体）の大部分は国家のものになっている」（このことばは、新聞『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』[20]第八号、八ページからとってきたものである）。この人々のまちがいは次のことから起こったものである。彼らは、わがヨーロッパ・ロシアでは一億五〇〇〇万デシャチーナの土地が官有地となっているということを耳にはさんだ。これはじっさいそのとおりである。しかし彼らは、この一億五〇〇〇万デシャチーナが、ほとんどまったく極北の、アルハンゲリスク、ヴォログダ、オローネツ、ヴャトカ、ペルミの諸県にある、耕作に適しない土地と森林であることを、忘れているのである。つまり、官有地のままに残されているのは、これまで農業をいとなむのにまったく適しなかった土地ばかりである。これに反して、耕作に適する官有地は四〇〇万デシャチーナにみたない。しかも、これらの耕作に適する官有地は（たとえば、そういう官有地がとくに多いサマラ県で

は)、安く、捨て値で金持に賃貸しされている。金持は、こういう土地を幾千、幾万デシャチーナずつも手に入れ、そのあとで、それをとほうもなく高い値で農民に又貸ししているのである。

いや、たくさんの官有地があると言っている人々は、農民にとってまったく悪い助言者である。実際には、よい土地をたくさんもっているのは大土地私有者である(そして、ツァーリ個人もその一人である)。それらの大地主はまた、国庫そのものをもその手ににぎっている。そして、貧農が団結し、その団結によって威嚇的な力となることができないうちは、「国家」はいつでも地主階級の従順な下僕となっているだろう。ところで、もう一つ忘れてならないことは、以前にはほとんど貴族だけが地主だったことである。貴族はいまでもたくさんの土地をもっている(一八七七—一八七八年には、一一万五千人の貴族が七三〇〇万デシャチーナをもっていると見られていた)。しかし、いまでは金が、資本が、おもな力となった。非常に非常に多くの土地が、商人や富裕な農民に買い占められた。貴族は、三〇年のあいだに(一八六三年から一八九二年までに)六億ルーブリあまりの値段の土地をなくした(すなわち、買ったよりも売ったほうが多かった)[一六]、と見られている。これにたいして、商人と名誉市民は二億五〇〇〇万ルーブリの値段の土地を手に入れた。農民、カザックおよび「その他の農村平民」(わが国の政府は、「生まれのよい」「上流の人人」と区別して、庶民の身分の人々をこうよんでいる)は、三億ルーブリの値段の土地を手に入れた。つまり、ロシア全国では、農民は毎年平均一〇〇〇万ルーブリの値段の土地を、私有財産として買いこんでいるのである。

こういうわけで、農民にもいろいろあるということになる。あるものは貧乏して飢えており、あるものは富んでゆく。したがって、地主のほうに心をひかれ、労働者を敵として金持に味方するような富んだ農民が、ますますふえているのである。そして都市の労働者と団結しようと望む貧農は、このことについてよく考えてみなければならない。そういう富んだ農民がたくさんいるかどうか、彼らの力はどういうものか、そしてこの力とたたかうのにわれわれはどういう団体を必要とするかを、見わけるようにしなければならない。ついさきほどわれわれは、農民にたいする悪い助言者のことを述べた。これらの悪い助言者はこのんで言う。農民はすでに団体をもっている。その団体というのはミールである、共同団体である。ミールは大きな力である。ミールは農民を固く団結させている。ミール農民の組織(すなわち、会、団体)は巨大な(すなわち、大きな、広大な)ものである、と。

これは正しくない。これはおとぎ話である。たとえ善良な人々が考えだしたものだとしても、やはりおとぎ話である。おとぎ話に耳をかすと、われわれは自分の事業、貧農と都市の労働者との同盟という事業を、だいなしにするだけであろう。農村に住んでいる人はみな、自分のまわりをよく見まわすがよい。ミールの団結、農民の共同団体が、金持全体、他人の労働で生活している人間全体とたたかうための貧乏人の団体らしく見えるかどうか？　いや、そんなものには見えないし、また見えるはずもない。どの部落にも、どの共同団体にも、たくさんの雇農、たくさんの貧しくなった農民がおり、また、自分で雇農をやとい、土地を「永久的に」買いこんでいる金持がいる。これらの金持もやはり共同団体員であり、物力があるので共同団体のなかで牛耳っている。ところで、われわれに必要なのは、金持がはいっているような、金持が牛耳っているような団体であろうか？　けっしてそうではない。われわれに必要なのは、金持とたたかうための団体である。つまり、ミール団体はわれわれにはまったく役に立たないのである。

　われわれに必要なのは、自発的な団体であり、都市の労働者と団結しなければならないということを理解した人々だけの団体である。ところが共同団体は、自発的な団体ではなく、官製の団体である。共同団体にはいるのは、金持のために働いていて、いっしょになって金持とたたかおうと望んでいる人々ではない。共同団体にはどんな人でもはいるし、それも自分ですすんではいるのではなく、その親たちがこの土地に住んでいて、この地主のために働いていたという理由で、また当局が彼らをその共同団体に登録したという理由で、はいるのである。貧農は共同団体から自由に脱退することはできない。彼らはまた、警察の手で他の郷に登録されているけれども、われわれにとって、われわれの団体のために必要であり、おそらくここでこそ必要であるような、よその人々を、共同団体に自由に迎え入れることもできない。いや、われわれに必要なのは、まったく別の団体である。他人の労働で生活している人々全体とたたかうために、労働者と貧農だけがはいる、自発的な団体である。

　ミールが一つの力であった時代は、もうとうの昔に過ぎさっている。そして、この時代は二度とかえってこないであろう。雇農や手間かせぎをしてロシア中を渡りあるく労働者が、まだ農民のあいだにほとんどいなかったころ、金持もほとんどいなかったころ、農奴主の旦那にみなが同じように圧迫されていたころには、ミールは一つの力であった。しかし、いまでは、金がおもな力となった。金のために、同じ共同団体員どうしが、猛獣も顔負けするようにた

たかいあっている。金をもっている百姓は、一部の地主よりも思いきったやり方で、自分と同じ共同団体員を締めつけ、略奪している。いまわれわれに必要なのは、ミール団体ではなく、金の権力に反対する、資本の権力に反対する団体、いろいろな共同団体に属するあらゆる農村労働者と無産農民の団体、地主とだけでなく富農とも同じようにたたかうための、貧農全体と都市労働者との同盟である。

われわれは、地主がどれだけの力をもっているかを見てきた。こんどは、富農はたくさんいるかどうか、彼らはどれだけの力をもっているかを、見なければならない。

地主の力を見るのに、われわれは、彼らの所有地の広さ、彼らのもつ土地の大きさによって判断した。地主は、自分の土地を自由に処分しており、それを自由に売買している。だから、彼らの力は、彼らのもっている土地の大きさによって、きわめて正確に判断することができる。ところが農民は、わが国では、いまでも自分の土地を自由に処分する権利をもっていない。いまでも彼らは、自分の共同団体にしばりつけられている半農奴である。だから、富農の力を判断するには、彼らのもっている分与地の大きさによるわけにはいかない。富農は、その分与地によって儲けるのではない。彼らはたくさんの土地を買っている。「永久的に」(すなわち、自分の私有財産として)も、また「年ぎめで」(すなわち、賃借りして)も、土地を買っている。地主からも、自分の兄弟分の農民で土地を放棄するもの、困窮のために分与地を貸しだすものからも、買っている。だから、いちばん正確なのは、富農、中農、および無産の農民を、彼らのもっている馬の頭数で区分することであろう。馬をたくさんもっている農民は、ほとんどいつでも富農である。馬をたくさんもっており、金もためているということになる。そ付地もたくさんもっており、分与地だけでなく、ほかにも土地をもっており、農民がたくさんの役畜を飼っていれば、それはつまり、作のうえわれわれは、馬をたくさんもつ農民がロシア全体(ヨーロッパ・ロシアだけ、シベリアもカフカーズもいれずに)でどのくらいいるかを知る手だてをもっている。いうまでもないことながら、われわれがロシア全体について述べることができるのは平均の数字でしかないことを、忘れてはならない。個々の郡や県によって非常な違いがある。たとえば、都市の周辺には、金持の耕作農民で、ごくわずかな馬しかもっていないものがよくある。あるものは利益の多い園芸に従事しており、あるものは馬こそあまり飼っていないが、牝牛をたくさん飼っていて、牛乳を売っている。土地でではなく、商売で儲けたり、搾油工場や、挽割工場や、その他の工場を建てている農民は、ロシア中どこにもいる。農村に住んでいるものならだれでも、自分の村

や近在の富農のことをよく知っている。しかしわれわれに必要なのは、ロシア全体で富農がどのくらいいるか、彼らの力がどれほどのものであるかを、知ることである。これは、貧農がゆきあたりばったりに、めくらめっぽうにすすむのでなく、自分の味方がどういうもので、自分の敵がどういうものであるかを正確に知るために、必要なのである。

そこでわれわれは、馬をたくさんもつ農民と、馬をすこししかもたない農民とが、数多くいるかどうかを、見ることにしよう。すでに述べたように、ロシアには全部で約一〇〇〇万戸の農家があると見られている。今日彼らがもっている馬の総数は、おそらく一五〇〇万頭内外であろう（一四年まえには一七〇〇万頭であったが、いまは減っている）。つまり、平均して農家一〇戸につき馬一五頭の割合である。しかし、肝心なことは、ある者、つまり少数の者がたくさんの馬をもっているのに、他の者、おまけに非常に多数の者が、馬をちっともたないか、あるいはわずかしかもっていないという点にある。馬をもたない農民は三〇〇万人をくだらないし、馬一頭の農民は約三五〇万人いる。これらの農民はみな、まったく落ちぶれきった農民か無産の農民である。われわれは彼らのことを貧農とよぶ。彼らの数は、農民総数一〇〇〇万のうち六五〇万、すなわち、ほとんど三分の二である！　そのつぎにくるのは、役畜二頭をもつ中農である。こういう農民は約二〇〇万戸ほどあって、約四〇〇万頭の馬をもっている。そのつぎにくるのが、役畜三頭以上をもつ富農である。こういう農民は一五〇万戸あり、彼らの手に七五〇万頭の馬がある。*つまり、およそ六分の一の農家が馬の総数の半分をもっているわけである。

* もう一度くりかえしていうが、われわれがここにあげているのは、平均数、近似数である。あるいは、富農は一五〇万人ちょうどではなく、一二五万人かもしれず、一七五万人かもしれず、二〇〇万人でさえあるかもしれない。しかし、これはまったくたいした違いでない。ここでたいせつなことは、何千とか、何十万とかを正確に計算することではなく、富農がどれだけの力をもっているか、彼らの状態がどのようなものかをはっきり理解すること、自分の敵と自分の味方を見さだめる能力をもつこと、あらゆるおしゃべりや空語にだまされないで、貧農の状態や、とりわけ富農の状態を、正確に知ることである。

農村労働者はみな、自分の郷やとなりの郷をよく観察して見てほしい。そうすれば、われわれの計算が正しいものであって、平均をとればどこでも、戸数一〇〇戸につき富農は一〇戸か、せいぜい二〇戸、中農が二〇戸ぐらい、残りはみな貧農というふうになっていることが、わかるであろう。

こういうことがわかったので、いまやわれわれは富農の力をかなり正確に判断することができる。数のうえでは、

彼らはごく少数である。すなわち、いろいろな共同団体、いろいろな郷で、彼らは農家一〇〇戸につき一〇戸から二〇戸であろう。しかし、この少数の農家は最も富んだ農家である。だから、ロシア全体についてみて、彼らはほかの農民全部をあわせたのとほぼ同数の馬をもっているのである。つまり、彼らの作付地もまた、農民の作付地全体のほとんど半分だということになる。こういう農民は、彼らの家族に必要なよりもずっと多くの穀物をとりいれる。彼らはたくさんの穀物を売る。彼らにとっては、穀物は、食糧として役だっているだけでなく、なによりも、販売のために、金儲けのために役だっている。こういう農民は金をためることができる。彼らはその金を貯蓄金庫や銀行にあずける。彼らは土地を自分の財産として買う。われわれはすでに、ロシア全体で毎年農民がどれだけの土地を買うかについて述べた。それらの土地はほとんど全部、これらの少数の富農の手にはいるのである。貧農は、土地を買うことを考えるどころでなく、どうして食べてゆくかを考えなければならない。彼らは、土地を買う金はおろか、パンを買う金にさえこと欠くことがしばしばである。だから、およそどの銀行も、またとくに農民銀行は、すべての農民が土地を手に入れるのを援助する（百姓をだます連中や、ひどい薄のろどもが、ときおり断言しているように）のではけっしてなく、わずかな数の農民だけを、金持だけを援助するのである。だから、まえに述べたような、農民にたいする悪い助言者が、農民の土地購入について、この土地が資本の手から労働の手にうつってゆくように言っているのは、でたらめなのである。土地が労働の手へ、すなわち、無産の働く人々の手へうつってゆくことは、けっしてありえない。なぜなら、土地とひきかえに金を支払うのだからである。ところで、貧農には余分の金などあったためしはない。土地は、富んだ、金をもった農民の手にだけ、資本の手にだけ、すなわち、貧農が都市の労働者と同盟してたたかわなければならない当の相手の手にだけ、うつってゆくのである。

富農は、土地を永久的に買うだけでなく、年ぎめで土地を借りている場合が、つまり借地をしている場合が、最も多い。彼らは、大きな地所を借りることで、貧農から土地を横どりする。たとえば、ポルタヴァ県のある郡（コンスタンチノグラード郡）で、富農がどれだけの土地を賃借りしているかが計算された。その結果、いったいどういうことがわかっただろうか？　一戸あたり三〇デシャチーナ以上を賃借りしていたものはごく少数で、一五戸につき二戸の割合でしかなかった。しかし、これらの富農は、借入地全体の半分をその手ににぎっており、富農一戸あたりの借

地面積は七五デシャチーナであった！　あるいはまた、タヴリーダ県で、農民がミール、共同団体をつうじて借りいれた官有地のうち、どれだけを富農がとりこんだかが計算された。その結果わかったところでは、数のうえで農家戸数の五分の一にしかあたらない富農が、借入地全体の四分の三をとりこんでいた。土地はどこででも金におうじて分けられるのであるが、金をもっているのは、ふつう少数の富農だけである。

さらに、今日では農民自身もたくさんの土地を貸しだしている。彼らは、家畜もなく、種子もなく、経営をいとなむ手だてがないので、分与地を放棄しているのである。当節では、金がなければ、土地をもっていてもどうしようもない。たとえば、サマラ県のノヴォウゼンスク郡では、富農の三戸につき一戸、ときには二戸までが、自分の共同団体かよその共同団体で分与地を借りいれている。ところで、分与地を貸しだすのは、馬をもたない農民と馬一頭の農民である。タヴリーダ県では、農家戸数のまるまる三分の一が、分与地を貸しだしている。農民分与地全体の四分の一にあたる二五万デシャチーナが貸しだされている。そして、この二五万デシャチーナのうち一五万デシャチーナ（五分の三）は、富農の手にはいっている！　ミール団体、共同団体が貧農の役に立つかどうかは、このことでもわかる。農村共同団体では、金のあるものが力もある。そこで、われわれに必要なのは、どの共同団体に属するものでもはいれる貧農の団体である。

土地の購入についてのむだばなしと同じように、プラウ、刈取機、その他各種の改良農具の安値購入についてのむだばなしも、農民をだますものである。ゼムストヴォ倉庫やアルテリが組織されている。そして、改良農具は農民の状態をよくするだろう、などと言っている人がある。――これはまったくのごまかしである。これらの上等の農具はみな金持の手にはいるだけで、貧農にはほとんどまったく手がとどかない。貧農は、プラウや刈取機どころの話でなく、どうにか生きてゆけさえすればよいのだ！　このような「農民にたいする援助」はみな、富農にたいする援助であって、それ以上のものではない。ところで、土地も家畜も貯えもない多数の貧農には、上等の農具が安くなったところでなんの足しにもならないであろう。たとえばサマラ県のある郡で、富農と貧農のもっている改良農具を全部集計してみた。その結果わかったところでは、農家戸数の五分の一、すなわち、最も富裕な農家が、改良農具総数のほとんど四分の三をもっており、これにたいして、農家の半数にあたる貧農は、全部で三〇分の一をもっているにすぎなかった。この郡では、馬をもたない農家と馬一頭の農家が、

農家総戸数二万八千のうち一万戸を占めている。そして、この一万戸のもっている改良農具の数は、郡全体の全農家のもっている改良農具総数五七二四のうち、わずか七つにすぎない。五七二四の農具中の七つ――これが、これらすべての経営改善に、「全農民」を援助するといわれるプラウや刈取機の普及に、貧農があずかる割合である！　これが、「農民経営の改善」を説く人々から貧農が期待すべきものなのである！

最後に、富農のいちばんおもな特徴の一つは、彼らが雇農や日雇いを雇っていることである。地主と同じように、富農もまた他人の労働で生活している。地主と同じように富農らが富んでゆくのは、農民大衆が落ちぶれ、貧しくなってゆくからである。地主と同じように、富農も、自分たちの雇農からできるだけ多くの労働をしぼりだし、これにたいする支払はできるだけ少なくしようと努めている。もし幾百万の農民がとことんまで落ちぶれて、やむをえず他人のところに働きにゆき、雇い人になり、自分の労働力を売るようにならないとすれば、富農は存在する余地がなく、その経営をいとなんでゆくことができないであろう。そのときには、彼らは、「没落した」分与地をかきあつめてくるさきも、労働者を見つけてくるさきもないであろう。ところがロシア全体で、一五〇万の富農の全部を合わせると、まちがいなく一〇〇万人をくだらない雇農や日雇いを雇っている。有産階級と無産階級のあいだの、雇主と労働者のあいだの、ブルジョアジーとプロレタリアートのあいだの偉大なたたかいでは、もちろん、富農は、労働者階級に反対して有産者に味方するであろう。

以上で、われわれは、富農の状態と力を知った。こんどは、貧農はどういう暮しをしているかを見ることにしよう。

すでに述べたように、大多数の農家は貧農に属し、ロシア全体について見れば、農家総数のほとんど三分の二がこれにはいる。まず第一に、馬をもたない農家の数はどうみても三〇〇万をくだらず、おそらくはそれ以上で、現在では三五〇万に近いと思われる。飢饉の年ごとに、凶作のたびごとに、数万の経営が落ちぶれてゆく。人口がふえて、ますます人がたてこんでくるが、上等の土地はみなすでに地主や富農の手に占められている。そこで、毎年ますます多くの人が落ちぶれて、都市に出て工場にはいり、雇農となり、雑役夫となる。馬をもたない農民というのは、まったくの無産者になった農民である。これはプロレタリアである。彼らは土地で、経営で生活するのではなく、賃仕事で生活している（生きているというかぎりでは生活しているのだが、正確にいえば、その日その日をしのいでいるのであって、生活しているのではない）。これは都市の労働

者の肉親の兄弟である。馬をもたない農民には、土地があってもなんの役にも立たない。馬をもたない農家の半分は、土地を耕作する力がないので、自分の分与地を貸しだすか、ときにはただで共同団体に引き渡してさえいる（ときには、そのうえ自分のほうから〔土地収入と土地にたいする賦課金との〕差額まで支払って！）。馬をもたない農民が作付するのは、一デシャチーナである。彼らはいつも穀物を買いたさなければならない（買う金がありさえすれば）。自分の穀物ではどうしても命をつないでゆくことができないのだ。馬一頭の農民は、ロシア全体で約三五〇万戸あるが、馬をもたない農民にくらべてたいしてましでない。もちろん、これには例外があって、すでに述べたように、ところによっては馬一頭の農民で、中位の暮しをしているものや、金持のものさえいる。しかしわれわれは、例外について、個々の地方について述べているのではなく、ロシア全体について述べているのである。馬一頭の農民の全大衆をとってみれば、これが貧農、貧窮者の大衆であることは、疑いをいれない。馬一頭の農民は、農業県においてさえ、三―四デシャチーナ、また五デシャチーナほどを作付しているにすぎない。彼らもやはり自分の穀物ではやってゆけない。豊年でさえ、彼らのたべものは、馬をもたない農民よりましではない。つまり、彼らはいつも十分食べておらず、いつも空腹をかかえている。経営はまったく衰微しており、家畜の質は悪く、その飼料は乏しく、畑をしかるべく見まわる力もない。馬一頭の農民が自分の経営全体に支出できる金は（家畜の飼料を除いて）、――たとえばヴォローネジ県では――一年に二〇ルーブリをこえない（富んだ百姓はその一〇倍も支出している）！　一年に二〇ルーブリ――借地料も、家畜の購入費も、鋤その他の農具の修繕費も、家畜番人の費用も、その他いっさいがっさいふくめて！　いったいこれが経営といえるだろうか？　これはただあくせくするということであり、まったくの苦役、永遠につづく苦しい仕事である。馬一頭の農民のなかにもやはり自分の分与地を貸しだすものがおり、しかもそれが少なくないのも、まったく当然である。乞食には、土地があってもあまり役に立たない。金がなければ、土地から金をかせぎだすことはおろか、食うだけのものさえ得られないであろう。ところが、食うにも、着るにも、経営をいとなむにも、税金をおさめるにも、なににつけても金が必要である。ヴォローネジ県では、馬一頭の農民は税金だけでふつう一年に約一八ルーブリをはらっているが、彼が一年間にすべての諸がかりにあてることのできる金は、なにからなにまであわせて七五ルーブリをこえない。こんなふうなのに、土地の購入がどうの、改良

農具がどうのどうのというのは、人をばかにするものというほかはない。それらは、貧農のために考えだされたものではまったくないのである。

いったいどこから金をもってくればいいのか？　そのためには「手間かせぎの仕事」をさがさなければならない。馬一頭の農民も、馬をもたない農民と同じように、やはり「手間かせぎ」によって、やっとその日をしのいでいるのである。ところで「手間かせぎ」というのは、いったいどういうことか？　それは、他人のところで働くこと、やとわれて働くことである。つまり、馬一頭の農民は、半分は経営主ではなくなって、雇人に、プロレタリアになってしまったのである。だから、こういう農民のことを半プロレタリアとよぶのである。彼らもまた、都市の労働者の肉親の兄弟である。なぜなら、彼らもまた、いろいろの雇主からあらゆる方法で剝ぎとられているからである。彼らにとってもやはり、金持全体と、有産者全体とたたかうため、社会民主主義者といっしょに団結する以外には活路はなく、救われる道はない。だれが鉄道の建設で働いているか？　だれを請負業者たちは略奪しているか？　だれが木を伐り、それを筏で流してゆくか？　だれが雇農として働いているか？　だれが日雇いとして雇われているか？　だれが都市や波止場で雑役仕事をやっているか？　それはみな貧農である。それはみな、馬をもたない農民と馬一頭の農民である。それはみな、農村プロレタリアと半プロレタリアである。そして、ルーシにはこういう人々がなんとたくさんいることだろう！　ロシア全体（カフカーズとシベリアを除いて）で毎年八〇〇万通、ときには九〇〇万通もの旅券が発行されている、と計算されていた。これはみな出かせぎ労働者である。これは、名だけは農民だが、そのじつ雇人、労働者である。彼らはみな、都市労働者と一つの同盟に団結しなければならない。そして、農村にさしこむ光明と知識の光の一すじごとに、この同盟は強まり、強固になってゆくであろう。

なお「手間かせぎ」について、もう一つわすれてならないことがある。役人や役人ふうのものの考え方をする人々はみな、このんで次のように説く。農民、百姓に「必要な」ものが二つある。土地と（ただしあまりたくさんでなく、——いや、金持がもはやとりこんでしまったので、たくさんの土地を手に入れてくるさきはどこにもない！）、「手間かせぎ」とがそれである。だから、人民を助けるためには、農村になるべくたくさんの営業をおこさなければならない、もっとたくさん「手間仕事」を「あたえ」なければならない、と。こういう談義はまったくの偽善である。貧農にとって、手間仕事というのは賃労働のことである。

農民に「手間仕事をあたえる」というのは、農民を賃金労働者に変えるということである。まったく、なんというけっこうな援助であろう！　富農には、資本を必要とする別の「手間かせぎの」がある。——たとえば、製粉所その他の設備をつくったり、脱穀機を買ったり、商売をしたり、そういうふうのことである。こういう金持の手間かせぎと貧乏人の賃労働とを混同するのは、貧農をだますことを意味する。もちろん、こういうごまかしは金持に有利である。すべての「手間かせぎ」が、すべての農民の荷にかない、ふところにかなっているように見せかけることは、金持には有利である。だが、ほんとうに貧農のためを願うものは、彼らにありのままの真実を、そして真実だけを告げるのである。

あと残っているのは、中農のことである。すでに見たように、ロシア全国を平均すれば、役畜二頭をもっているものは中農とみなしてよいのだが、そういう農家は農家総数一〇〇〇万戸のうちの約二〇〇万戸である。中農は富農とプロレタリアの中間にいる。だからこそ、彼らは中農とよばれるのである。彼らの暮しもまた中位である。豊年には、なんとかその経営の収支のつじつまを合わせるが、困窮はいつもそのうしろについてまわっている。彼らには、貯蓄はまったくないか、あってもごくわずかである。だから、彼らの経営はぐらぐらしている。金はなかなか手にはいらない。入用なだけの金を自分の経営からかせぎだすことはごくごくまれで、そういう場合でも、ぎりぎりいっぱいである。しかし、手間かせぎに出るのは経営を放棄することであって、経営はがたがたになってしまうだろう。それでも多くの中農は、手間かせぎなしにはとうていやってゆけない。彼らは雇われにゆき、困窮にせまられて地主の債務奴隷となり、借金にはまりこむ。しかし、中農は、借金のかたをつけることはほとんどできない。彼らには、金持の百姓のような固定収入がないからである。そこで、いったん借金をしたがさいご、自分の首になわをかけたも同然である。すっかり落ちぶれるまでは、どうしても借金からぬけだすことができない。地主の債務奴隷になるのは、だれよりも中農が多い。なぜなら、地主にとっては、出来高払いの仕事をさせるために、落ちぶれきっていない百姓が必要であり、その百姓が馬二頭をもち、経営に入用なものは一とおりもちあわせていることが必要だからである。中農はなかなか出かせぎに出られない。——そこで彼らは、穀物を借りたり、放牧地を使わせてもらったり、切取地を賃借したり、冬のあいだに金を借りたりしたおかえしに、地主の債務奴隷となるのである。地主とクラークのほかに、金持の隣人も中農を締めつける。彼らはいつも中農の土地

を横取りし、どんな手段であろうと中農を締めつける機会があれば、けっしてのがさない。これが中農の暮しである。彼らは、魚でもなければ、鳥でもない。ほんとうの、本式の経営者にもなれなければ、労働者にもなれない。中農はみな経営者に心をひかれて、有産者になりたがっているが、なれるものはごくごく少数である。雇農や日雇いさえ雇っていて、自分でも他人の労働で儲けようと努め、他人を踏み台にして金持の仲間にはいろうと努めているものは、ごく少ない。中農の大多数は、人を雇う金などもっておらず、自分自身が雇われなければならないのである。

金持と貧乏人、有産者と労働者のあいだにたたかいが始まっているところではどこでも、中農は中間にたたずんで、どっちへ行ったらいいかわからずにいる。金持は中農に、自分のほうにくるように呼びかける。君たちもやはり経営者だ、有産者だ、索寒貧の労働者などは、君たちになんの関係もない、と。しかし、労働者は言う。金持は君たちをぺてんにかけて、剝ぎとるだろう。金持全体に反対するわれわれのたたかいを助ける以外に、君たちの救われる道はない、と。中位の百姓をとりあいするこの争いは、どこでもおこなわれている。社会民主主義者である労働者が働く人民の解放のためにたたかっているすべての国で、おこなわれている。ロシアでは、この争いはちょうどいま始まろうとしている。だから、われわれはこの問題を特別よく調べて、金持がどういうごまかしにたよって中位の百姓をさそいこもうとしているか、このごまかしをあばきだすにはわれわれはどうしたらよいか、中農がその真の友を見いだすように援助するにはどうしたらよいかを、はっきり理解しなければならない。社会民主主義者であるロシアの労働者がいますぐ正しい道をすすむなら、われわれは、ドイツの労働者の同志たちよりもずっと早く、農村の働く人民と都市の労働者とのしっかりした同盟を組織して、勤労者のあらゆる敵にたいして速やかに勝利をおさめることができるであろう。

四　中農はどこに行くべきか？　有産者と金持の側へか、それとも労働者と無産者の側へか？

有産者はみな、ブルジョアジーはみな、経営改善の各種の方策（安いプラウ、農村銀行、牧草栽培の採用、家畜や肥料の安値販売、等々）を中農に約束したり、農民を各種の農業団体（書物でつかわれているよび方でいうと、協同組合）に、すなわち経営改善を目的とするあらゆる経営者たちの団体に加入させたりして、中農を自分の味方に引き

いれようと努めている。こういうやり方でブルジョアジーは、中農ばかりか、小農までも、半プロレタリアまでも、労働者との同盟から引きはなそうと努め、労働者、プロレタリアートとのたたかいで、これらの農民を金持に、ブルジョアジーに味方させようと努めている。

社会民主主義者である労働者は、これにたいして次のように答える。経営の改善はけっこうなことである。プラウがもっと安く買えることも、なにも悪いことではない。当節は、頭のはたらく商人はみな、買い手をさそうために、売り値を下げようと努めている。しかし、貧農や中農にむかって、経営が改善され、プラウが安くなれば、金持には指一本ふれないでも、諸君はみな困窮からぬけだして、一本立ちになれるだろう、と言うものがあれば、それはごまかしである。そういう改善策や、安値販売や、協同組合（商品の販売と購買のための組合）からだれよりもずっと多くの利益を得るのは、金持である。金持はますます強くなって、貧農をも中農をもますますひどく締めつけるようになる。金持が金持でいるあいだは、彼らが、土地も、家畜も、農具も、金も、その大部分を自分の手ににぎっているあいだは、貧農はもちろん、中農も、困窮からぬけだすことはけっしてできないであろう。中位の百姓のひとりふたりは、こうした改善策や協同組合の助けをかりて金持の仲間にはいりこむこともあるだろうが、人民全体と中位の百姓全体とは、いっそう深く困窮のなかに沈んでゆくであろう。中位の百姓がみな金持の仲間入りをするには、金持そのものを追いはらわなければいけない。だが、金持を追いはらうことができるのは、都市の労働者と貧農との同盟だけである。

ブルジョアジーは中農にむかって（そして、小農にむかってさえも）言う。われわれは、君たちに土地を安く売り、プラウを安く売ることにしよう。そのかわり、君たちはわれわれに自分の魂を売れ、金持全体とたたかうのを思いきれ、と。

社会民主主義者である労働者は次のように言う。もし彼らがほんとうに安く売るのなら、金さえあったら、君たちは買ったらいいだろう。それは商売の問題である。だが、自分の魂はけっして売ってはならない。都市の労働者といっしょにブルジョアジー全体とたたかうのを思いきるのは、いつまでも貧困と困窮のうちに暮らすことを意味する。商品が安くなれば、金持はいっそう大きな利益をあげ、その儲けはふえるだろう。しかし、金をもったことのないものには、ブルジョアジーから金をうばってこないかぎり、いくら商品が安くなっても、なんの助けにもならないであろう、と。

例をあげよう。ブルジョアジーの味方は、各種の協同組合（安く買い有利に売るための組合）をかつぎまわっている。「社会革命党」[二六〇]と自称しながら、ブルジョアジーの尻馬に乗って、農民になによりも必要なのは協同組合である、と同じように叫びたてている連中さえいる。わがロシアでも各種の協同組合がつくられはじめているが、わが国ではその数はまだ非常に少なく、また政治的自由がないあいだは、あまりふえないであろう。ところが、ドイツでは、農民のあいだに各種の協同組合が非常にたくさんできている。そこで、これらの協同組合がいちばんだれの役に立っているかを見てみたまえ。ドイツ全体で一四万人の農業経営者が牛乳や乳製品の販売組合に加入しているが、この一四万の経営者（ここでもやはり、簡単にするため概数をつかうことにする）が一一〇万頭の牝牛をもっている。貧農の数はドイツ全体で四〇〇万人と見られている。このうち、組合に加入しているのは四万人にすぎない。つまり、貧農一〇〇人につきたった一人がこれらの協同組合を利用しているだけである。この四万人の貧農がもっている牝牛の頭数は、全部でわずか一〇万頭である。さらに、中位の経営者、中農が一〇〇万人いるが、そのうち五万人が協同組合に加入しており（つまり一〇〇人につき五人の割合）、彼らのもっている牝牛は二〇万頭である。最後に、金持の経営者（すなわち、地主も富農もあわせて）は三〇万人であり、そのうち協同組合に加入しているのは五万人で（つまり一〇〇人につき一七人の割合！）、そのもっている牝牛の頭数は八〇万頭である！

協同組合のおかげをだれよりも多くこうむっているのは、まさにこういう人々である。安く買い有利に売るためのこの種のあらゆる組合によって中農を救うことを叫びたてている連中は、こんなにまで百姓を愚弄しているのである。社会民主主義者が貧農をも中農をも自分の味方につけようとして呼びかけているときに、ブルジョアジーは、まったくひどい安値で百姓を社会民主主義者から「買いとる」つもりでいるのだ。

わが国にもやはり、いろいろなチーズ製造アルテリや、総合酪農アルテリがつくられている。アルテリやミール団体や組合、これこそ百姓に必要なものだ、と叫びたてている連中が、わが国にいくらでもいる。しかし、こういうアルテリや組合やミールの借地がだれの利益になっているかを見てほしい。わが国では、農家一〇〇戸につきすくなくとも二〇戸は、牝牛をまったくもっていない。三〇戸はそれぞれ牝牛一頭をもっているが、これらの農家は、ひどい困窮のために牛乳を売りに出し、子供たちは牛乳をもらえないで、飢えて、ハエのように死んでいっている。ところ

が、金持の百姓は、三頭も、四頭も、それ以上もの牝牛をもっており、農民の所有する牝牛総数の半分はこれらの金持の百姓のものである。では、チーズ製造アルテリはいったいだれの利益になっているか？　だれよりも地主と農民ブルジョアジーの利益になっていることは、明らかである。また、中農と貧農が彼らのうしろについてゆき、ブルジョアジー全体にたいする労働者全体のたたかいではなく、自分の現状からぬけだして金持の仲間にはいりこもうとする個々の小経営者の願いこそ、困窮から救われる手段だと考えるようになれば、それが地主と農民ブルジョアジーに有利なことは、明らかである。

　ブルジョアジーの味方はみな、自分こそ小農の味方であり友人であるというようなふりをして、あらゆる方法でこういう願いを支持し、奨励している。そして、羊の皮をかぶった狼に気がつかずに、自分では小農や中農のためになることをしているつもりで、ブルジョアのごまかしをおうむがえしにしているおめでたい連中が、たくさんいるのである。たとえば、本や演説のなかで次のように説明している者がいる。小経営はいちばん有利で、いちばん収益のある経営である。小経営は栄えている。だから、農業ではどこでもこんなにたくさんの小経営主がいるのだ。彼らがこんなにしっかりと土地にしがみついているのも、このためである（上等の土地がみなブルジョアジーの手ににぎられており、金もみなブルジョアジーの手ににぎられていて、貧農は一生涯ひとかけらの土地のうえでひしめきあい、へとへとに働いているためではない、というのだ！）。小農にはたくさんの金はいらない、とこれらの口先のうまい連中は言う。小農や中農は大農よりも倹約家で努力家だし、そのうえもっと質素に暮らすことができる。家畜のために干草を買いこむかわりに、彼は藁でまにあわせるだろう。高価な機械を買うかわりに、彼らは早起きして、もっと長い時間仕事をし、機械に負けずにはげむだろう。いろいろな修繕のために他人に金を渡すかわりに、彼らは休日に自分で斧をとって大工仕事をするので、大経営者よりずっと安くあがるだろう。高価な馬や牡牛を飼うかわりに、彼らは鋤きおこしも牝牛でまにあわせるだろう――ドイツ人のところでは貧農はみな牝牛で鋤きおこしをしている。わが国では、人民はひどく落ちぶれてしまったので、牝牛どころか、人力で鋤きおこしをやりはじめているくらいだ！　これはまたなんと有利なことだ！　なんと安あがりなことだ。中農や小農がこうも勤勉で、こうも仕事にはげみ、こうも質素に暮らし、悪い道楽もせず、社会主義のことなど考えずに、自分の経営のことばかり考えているというのは、なんと感心なことだろう！　ブルジョアジーに刃むかって

ストライキをおこすような労働者のうしろについてゆかないで、金持のうしろについてゆき、りっぱな人々の仲間いりをしようと心がけるというのは、なんと感心なことだろう！ もしみながこのように仕事にはげみ、勤勉で、質素に暮らし、大酒を飲まず、すこしでもよぶんに貯金し、いろいろなプリント木綿などに金を使うのはなるべく少なくし、なるべく子供を生まないようにするなら、みなよい暮しをするようになり、どんな貧困も困窮もなくなるであろうに！

こういう甘ったるいことばをブルジョアジーは中農に言ってきかせている。ところが、こういうことばを信じて、自分でもそれをおうむがえしにしているうすのろどもがいるのだ！* 実際には、この甘ったるいことばはまったくのごまかしであり、農民にたいするまったくの嘲弄である。中農や小農を朝から晩まで働かせ、一切れのパンも節約させ、びた一文の支出も思いとどまらせている困窮、この苦しい困窮を、これらの口先のうまい連中は、安あがりで有利な経営とよんでいるのだ。たしかに、一つのズボン下を三年もはき、夏には木靴もはかずに歩き、鋤をなわでくくりつけ、屋根からとってきた腐った藁で牝牛を飼うくらい「安あがり」で「有利なこと」が、またとあるだろうか！ だれかブルジョアか富農をこういう「安あがり」で「有利な」経営の座にすわらせてみるがよい。そうすれば、彼らはたちまち自分の甘ったるいことばを忘れてしまうのは必定だ！

* わがロシアでは、百姓のためを願いながら、ときどきこういう甘ったるいことばに迷わされるうすのろのことを、「ナロードニキ(六)」とよんでおり、「小経営論者」ともよんでいる。「社会革命党」もやはり、愚かなために彼らの尻にくっついている。ドイツ人のあいだでも、やはり口先のうまい連中は、少なくない。その一人であるエドワルド・ダーヴィットは、さいきん部厚な本『社会主義と農業』、ベルリン、一九〇三年』を書いた。この本のなかで彼はこう言っている。小経営は大経営よりもずっと有利である。なぜなら、小農はよけいな支出をせず、鋤きおこしのために馬を飼わずに、乳をしぼるのと同じ牝牛でまにあわせるからだ、と。

小経営をほめそやしている人々は、農民のためになることをしたいと、ときには思っているのだが、じっさいには、農民に害毒をもたらしているだけである。富くじが人民をだますのと同じように、彼らは甘ったるいことばで百姓をだますのである。ここで、富くじとはどういうものかを話しておこう。たとえば、私が牝牛を一頭もっていて、それが五〇ルーブリの値うちがあるとする。私はこの牝牛を富くじにかけようと思いたち、みなに一ルーブリずつのくじをすすめる。一ルーブリで牝牛が手にはいるのだ！ 人々

は心をひかれ、一ループリ紙幣がどんどん舞いこんでくる。くじにあたったものは一ループリで牝牛を手に入れたが、ほかのものは手ぶらで立ち去っていく。この牝牛は、人々にとって「安あがり」についたであろうか？　いや、非常に高くついたのだ。というのは、値段の二倍の額が支払われたからであり、また、二人の人間（富くじを売りだしたものと牝牛を手に入れたもの）がすこしも働かずに儲けそれも九九人の人間の負担で儲けたのに、その九九人は自分の金をなくしたからである。つまり、富くじは人民に有利だと言うものは、人民をだましているだけの話である。これとちょうど同じように、各種の協同組合（有利に売り安く買うための組合）や、各種の経営改善策や、各種の銀行や、そういうふうのもので貧困と困窮からぬけださせようと約束するものは、農民をだましているのである。富くじで、一人のものが儲け、のこりのものが損をしたのと同じようなことが、ここでもおきる。一人の中農がうまくやりくりして金持になりあがったとしても、九九人の彼の仲間は、困窮からぬけだせないで、かえってますます落ちぶれさえして、一生涯腰をかがめてへいへいして暮らすのである。農村に住んでいる人はみな、自分の共同団体や自分のまわりの地方全体をよく調べてみるがよい。金持の仲間入りをして困窮を忘れるような中農がたくさんいるかどうか？他方、一生涯困窮からぬけだすことのできないものがどれくらいいるか？　落ちぶれて部落を出てゆくものがどれくらいいるか？　さきに見たように、わがロシア全体で中農経営は二〇〇万戸をこえないと見られている。かりに、安く買い有利に売るための各種の組合の数が、いまの一〇倍になったと仮定しよう。そうするとどういうことになるだろうか？　一〇万の中農が金持になりあがれば、よくよくのことである。だが、これはどういうことを意味するだろうか？　これは、一〇〇人の中農のうち五人が金持になった、ということを意味する。では、のこりの九五人はどうなったか？　彼らの暮しはあいかわらず苦しく、多くの者にとって暮しはまえよりもずっと苦しくなった！　そして、貧農はいっそう落ちぶれたのである！

もちろん、ブルジョアジーには、ただ次のことが必要なだけである。すなわち、できるだけ多くの中農と小農が金持のうしろについてくること、彼らが、ブルジョアジーとたたかわないでも困窮からぬけだせると信じこむこと、彼らが、農村や都市の労働者との同盟に望みをかけないで、自分の勤勉さに、自分のけちさかげんに、自分が金持になることに、望みをかけることである。ブルジョアジーは全力をあげて、百姓にこうしたいつわりの信念と希望をもち

つづけさせようと努め、あらゆる甘ったるいことばで百姓をねむりこませようと努めるのである。

すべてこういう口先のうまい連中のごまかしを暴露するには、彼らに三つの質問を出すだけで十分である。

第一の質問。ロシアでは、二億四〇〇〇万デシャチーナの耕作適地のうち、一億デシャチーナが土地私有者のものとなっているのに、働く人民が困窮と貧困からぬけだすことができるものだろうか？　また、一万六〇〇〇人の最大級の土地所有者の手に六五〇〇万デシャチーナの土地があるというのに？

第二の質問。一五〇万戸の金持の農家（農家総数一〇〇〇万戸のうちで）が、農民の作付地の総面積の半分、農民の馬の総頭数の半分、農民の家畜の総頭数の半分、農民の貯蔵穀物の総量と農民の貯金総額との半分よりずっと大きな部分を、その手にかきあつめているのに、働く人民が困窮と貧困からぬけだすことができるものだろうか？　また、この農民ブルジョアジーが貧農と中農を圧迫し、雇農や日雇いの他人の労働で儲けながら、ひきつづきますます金持になっているというのに？　さらに、六五〇万戸の農家が年中空腹をかかえた、落ちぶれた貧農であって、あらゆる種類の仕事に雇われて、わずか一切れのパンをかせいでいるというのに？

第三の質問。金がおもな力となっていて、金で工場でも土地でもなんでも買え、人間でさえ、賃金労働者として、賃金奴隷として買えるのに、働く人民が困窮と貧困からぬけだすことができるものだろうか？　金がなければ生きてゆくことも、経営をすることもできないというのに？　また、小経営主、貧農は、金をかせぐために大経営者とたたかわなければならないというのに？　さらに、数千の地主、商人、工場主、銀行家が幾億ルーブリという金をかきあつめており、おまけに幾十億ルーブリという金をあつめた銀行のすべてを思うままに支配しているというのに？

小経営や協同組合が有利だという甘ったるいことばでごまかして、これらの質問を逃げることは許されない。これらの質問にたいしては、答えはただ一つしかありえない。それはこうである。働く人民を救うことのできるほんとうの「協同組合」は、ブルジョアジー全体とたたかうための、貧農と都市の社会民主主義的労働者との同盟である。このような同盟がひろがり強まることが早ければ早いほど、それだけ早く中農は、ブルジョアの約束のうそをすっかり理解して、それだけ早くわれわれの味方になるであろう。

ブルジョアジーはこのことを知っている。だから、彼らは、甘ったるいことばをふりまくほかに、社会民主主義者についてあらゆるうそをひろめているのである。彼らは言

っている。社会民主主義者は中農や小農の財産を取り上げようと思っている、と。これはうそである。社会民主主義者が取り上げようと思っているのは、大経営者の財産だけであり、他人の労働で生活している人間の財産だけである。社会民主主義者は、労働者を雇っていない中小経営主の財産を取り上げることはけっしてない。社会民主主義者は働く人民全体の利益を擁護し、守護する。だれよりも自覚があり、だれよりも団結している都市の労働者の利益だけでなく、農村の労働者の利益をも、それからまた、小手工業者や小農が労働者を雇わず、金持のうしろについてゆかず、ブルジョアジーの味方とならないかぎり、それらの小手工業者や小農の利益をも、擁護し守護する。社会民主主義者は、労働者と農民の生活の改善になることで、われわれがブルジョアジーの支配をまだ打ちやぶらない今日でもすぐとりかかることができ、ブルジョアジーにたいするこのたたかいをやりやすくするものでさえあれば、すべてのそういう改善のためにたたかう。だが社会民主主義者は農民をだますことはしない。社会民主主義者はありのままの真実を農民に告げる。ブルジョアジーが支配しているかぎり、どんな改善も人民を困窮と貧困から救いだせはしないことを、社会民主主義者はまえもって率直に告げる。社会民主主義者とはどういうもので、なにを望んでいるかということを、全人民が知ることのできるように、社会民主主義者は自分の綱領をつくった。綱領というのは、ある党がかちとろうとしているもの、たたかいの目標としているものをのこらず、簡単に、明瞭に、正確に述べたものである。社会民主党は、明瞭で正確な綱領をかかげているただ一つの党であるが、これは、全人民が党の綱領を知り、見ることができるようにするためであり、また、働く人民全体をブルジョアジーの圧制から解放するためにたたかいたいと真に願っている人々だけが、しかも、このようなたたかいのためにだれがたがいに団結しなければならないか、またこのたたかいをどういうふうにおこなわなければならないかを、ただしく理解している人々だけが、党にはいれるようにするためである。このほか、社会民主主義者は、働く人民の困窮と貧困がどうして起こるのか、またなぜ労働者の団体がますますひろまり、ますます強まってゆくのかを、綱領で率直に、あからさまに、正確に説明しなければならないと考えている。ひどい暮しだと言って、暴動を呼びかけるだけでは足りない。そういうことならどんな空騒ぎ屋でもやれるが、それはあまり意味のないことである。必要なことは、なぜ自分たちは貧乏するのか、困窮からの解放をめざしてたたかうには自分たちはだれと団結しなければならないかを、働く人民がはっきり理解することである。

社会民主主義者はなにを望んでいるかということを、われわれはすでに述べた。働く人民の困窮と貧困がどうして起こるのかということも、すでに述べた。また、貧農はだれとたたかわなければならず、そしてこのたたかいのためにだれと団結しなければならないかということも、述べた。そこでこんどは、われわれのたたかいによって、われわれは、労働者の生活においても、農民の生活においても、いますぐどういう改善をたたかいとることができるかということについて、述べよう。

五　社会民主主義者は全人民と労働者とのためにどういう改善をかちとろうとしているか？

社会民主主義者は、あらゆる略奪、あらゆる抑圧、あらゆる不正から、働く人民全体を解放するために、たたかっている。自分を解放するためには、労働者階級は、なによりもまず団結しなければならない。しかし、団結するためには、団結する自由を、団結する権利をもっていなければならない。すなわち、政治的自由をもっていなければならない。すでに述べたように、専制政治とは、人民が役人と警察に農奴のように隷属することである。だから政治的自由は、ひとにぎりの廷臣や宮廷に出入りを許されたお偉方や高官連を除く、すべての人民に必要なものである。しかし、だれよりも政治的自由を必要としているのは、労働者と農民である。金持たちは、役人や警察の専横や横車に出あっても、金で目こぼしをしてもらうことができる。金持たちはまた、自分の苦情を上のほうまでもちこむことができる。だから、警察や役人が金持たちに言いがかりをつけるようなことは、貧乏人の場合よりずっとまれであろう。労働者や農民には、警察や役人から目こぼしをしてもらうにも金がないし、苦情をもってゆくさきもないし、訴訟をおこす力もない。国内に選挙された政府ができるまでは、人民代表議会ができるまでは、労働者と農民は、警察と役人のきびしい取りたてや横車や侮辱を、けっしてまぬかれることができないであろう。そういう人民代表議会だけが、役人にたいする農奴的隷属から人民を解放することができるのである。自覚した農民はみな、(二三)なによりもさきに、なによりもだいじなこととして、人民代表会議の召集をツァーリ政府に要求している社会民主主義者に、味方しなければならない。身分の違いにかかわりなく、金持か貧乏人かにかかわりなく、すべての人が代議士を選挙しなければならない。選挙は、役人からすこしもじゃまされずに、自由におこなわれなければならない。選挙手続の監視には、地

方警部や地方司政長があたるのでなく、人民の世話人たちがあたらなければならない。そうなれば、全人民の代表が人民のあらゆる必要を審議することができ、ルーシ[二七]にもっとよい制度を打ちたてることができるであろう。

社会民主主義者は、警察がだれであろうと裁判にかけずに監獄にほうりこむことのないようにしろと、要求している。勝手な逮捕をおこなった役人は、厳罰に処されなければならない。役人の勝手気ままなふるまいをやめさせるには、人民が自分で役人を選挙するようにしなければならず、また、みながどんな役人でも直接に裁判所に訴える権利をもつようにしなければならない。そうでなければ、地方警部のことを地方司政長に訴えたり、地方司政長のことを県知事に訴えたりしても、なんの意味があろうか？　もちろん、地方司政長は地方警部をかばいだてし、県知事は地方司政長をかばいだてするだけであり、おまけに、訴えたものは仕返しを受けることだろう。つまり、監獄に入れられるか、シベリアに流されることだろう。わがロシアでも（他のすべての国と同様に）、だれでも人民会議や選挙された裁判所に訴えでることができ、自分の必要としているものについて自由に話し、または新聞に書くことができるようになったときにはじめて、役人もちぢこまるであろう。

ロシアの人民は、いまでも役人に農奴的に隷属している。役人の許可がなければ、人民はあえて寄合いをひらかないし、本や新聞を印刷しない！　これは農奴的隷属でないだろうか？　もし自由に寄合いをひらいたり、自由に本を印刷したりすることができないとすれば、いったいどうやって役人や金持をおさえるのか？　いうまでもなく、役人は、真実を述べた本はみな禁止し、人民の困窮について真実を語る言論はみな禁止している。だから社会民主党は、この本も秘密に印刷して、秘密にひろめなければならないのである。この本をもっているところを見つけられたものはみな、裁判所から裁判所、監獄から監獄へとひっぱりまわされるであろう。しかし社会民主主義者である労働者は、そんなことは恐れない。彼らは、真実を書いた本をますますたくさん印刷して、ますますたくさん人民にくばって読ませている。こうして、どんな監獄も、どんな迫害も、人民の自由のためのたたかいを押しとどめることはできないであろう！

社会民主主義者は、身分が廃止され、国家の市民がみな完全な同権であるように、要求している。いまわが国には、人頭税を払う身分と払わない身分とがあり、特権をもつ身分と特権をもたない身分とがあり、白い〔尊い〕血筋と黒い〔いやしい〕血筋とがある。いやしい人民のため

には笞刑さえまだ残されている。労働者や農民がこのようにいやしめられている国は、どこにもない。身分別に違った法律があるような国は、ロシアのほかにどこにもない。ロシアの人民としても、どの百姓も貴族のもっている権利のすべてをもたなければならないと、要求すべき時である。農奴制度が廃止されてから四〇年以上もたっているのに、いまでも笞刑が残されており、いまでも人頭税負担身分というものがあるのは、恥ずかしいことではないだろうか？

社会民主主義者は、人民のために完全な移転の自由と営業の自由を要求している。移転の自由というのはどういうことか？　それはつまり、農民がどこへでも行きたいところに行き、どこへでも好きなところへ移住し、だれの許可も願わないで、どこの部落にでも、都市にでも住んでよい権利をもつ、ということである。それはつまり、ロシアでも旅券制度がなくなるということ（ほかの国では旅券制度はとうの昔になくなっている）、農民が自分の好きなところに住みついて働くのを、地方警部も、地方司政長も、だれもけっしてじゃましてはならないということである。ロシアの百姓は、いまなお役人にたいしてひどい隷属状態にあるので、自由に都市に移転することもできなければ、自由に新開地へ出てゆくこともできない。自分勝手な移住を許さないように、大臣が県知事に命令しているのである！　県知事のほうが百姓よりもどこへ行ったらいいかよく心得ているというわけだ！　百姓は小さい子供も同然で、目上の言いつけなしには動いてはならないというわけだ！　これは農奴的隷属でないだろうか？　財産を使いはたした貴族の小僧っ子などがおとなの農耕者に指図するというのは、人民を侮辱するものではないだろうか？

現「農務大臣」エルモロフ氏の書いた『凶作と人民の災害』（飢饉）という本がある。この本には、地主様が地元で働き手を必要としているときには、百姓は移住してはならないと、あからさまに述べている。大臣はあけすけにものを言って、すこしもはばからない。百姓がこういう話を聞くことはなかろうし、聞いてもわからないだろうと、彼は考えているのだ。地主様に安い働き手が必要なのに、なんだって人民を出てゆかせるのか？　人がたてこんでくればくるほど、地主にとってはそれだけ有利であり、困窮はそれだけひどくなり、それだけ安い賃金で人を雇えるようになり、人々はそれだけおとなしくどんな圧迫でも耐えしのぶであろう。以前には差配人が旦那のために見張ったものだが、いまでは地方司政長や県知事が見張っている。以前には差配人が馬小舎で罰をくらわせるように命令したも

るように命令している。

社会民主主義者は、常備軍を廃止して、そのかわりに民兵制度をもうけ、全人民を武装させるように、要求している。常備軍というのは、人民から切りはなされ、人民にむかって鉄砲を撃つ訓練を受けた軍隊のことである。もし兵士を何年ものあいだ兵営のなかに閉じこめて、そこで非人間的な訓練をほどこさなかったなら、兵士は、自分の兄弟分の労働者や農民めがけて鉄砲を撃つようなことをやれるだろうか？　兵士は、飢えた百姓めがけて突撃するようなことをやれるだろうか？　敵の攻撃から国家を守るためには、常備軍はまったく必要でない。それには民兵で十分である。国家の市民がみな武装されるなら、ロシアはどんな敵も恐ろしくない。そのうえ、人民は軍閥の圧制から救われるであろう。軍閥には、年に数億ルーブリの金がつかわれている。この金はみな人民から徴収されるのである。そのために税金がこんなに高く、暮しはますます苦しくなってゆくのだ。軍閥は、人民にたいする役人と警察の権力をさらに強めている。軍閥などが必要なのは、よその国民を略奪するため、たとえば中国人から土地を奪いとるためである。そういう土地を奪ったからといって、人民の負担が軽くなるわけではなく、新しい税金のため、かえって重くなるのである。常備軍をやめて全人民の武装と代えれば、すべての労働者、すべての農民にとって、非常な負担の軽減となるであろう。

社会民主主義者は間接税の廃止をかちとろうと努めているが、これが廃止されれば、労働者と農民の負担はやはり非常に軽減されるであろう。間接税とよばれるのは、土地や経営に直接かけられるのでなく、商品の代金を高くするというかたちで、人民が間接に支払う税金のことである。国庫は、砂糖や、ウォトカや、マッチや、燈油や、その他あらゆる日用品に税金をかけている。この税金は、商人か工場主かが国庫におさめるのであるが、もちろん自分の金のうちからおさめるのではなく、買い手が彼らに支払う金のうちからおさめるのである。ウォトカや、砂糖や、燈油や、マッチの値段を高くして、ウォトカ一瓶、砂糖一ポンドごとに、買い手の一人ひとりが、その商品の値段ばかりでなく、それにかけられた税金をも支払うのである。たとえば、諸君が砂糖一ポンドの代金として一四コペイカを支払うとすれば、そのうち（およそ）四コペイカは税金である。製糖業者は、すでにこの税金を国庫に納付ずみなので、こんどは、支払っただけの金額を買い手の一人ひとりから徴収するのである。このように、間接税は、日用品にかけられた税金であり、商品の値段の割増しというかたちで買

い手が支払う税金である。買った額におうじて支払うのだから間接税は最も公平な税金である、などと言う人間がときどきいる。しかし、これはうそである。間接税は最も不公平な税金である。なぜなら、この税金を支払うのは、金持よりも貧乏人にとってずっとつらいことだからである。金持には、農民や労働者の十倍も多くの所得があり、それどころか百倍も多いことさえある。しかし、いったい金持には、砂糖が百倍も必要だろうか？　ウォトカやマッチが、燈油が、十倍も必要だろうか？　もちろん、そんなことはない。金持の家庭でも、燈油やウォトカや砂糖を、貧しい家庭の二倍か、せいぜい三倍しか買わないであろう。これはつまり、金持がその所得のうちから税金として支払う割合は、貧乏人よりも少ないということである。いま、貧農の所得が年二〇〇ルーブリだとしよう。また、税金のかかっている、したがって値段を割増しされた商品を、六〇ルーブリだけ買うとしよう（砂糖、マッチ、燈油には物品税がかけられている。つまり、商品がまだ市場に出されないうちに、工場主が税金をおさめるのである。国家専売品であるウォトカについては、国家はあからさまに値段を引き上げた。プリント木綿、鉄、その他の商品については、値段が割増しされている。なぜなら、安い外国商品は、高い関税を払わなければ、ロシアに輸入を許されないからである）。この六〇ルーブリのうちで税金は二〇ルーブリにのぼるであろう。つまり、貧農は、その所得一ルーブリにつき一〇コペイカずつを、間接税のかたちで引き渡すことになる（いろいろの直接税、すなわち、土地買収賦金、年貢支払金、地租、ゼムストヴォ税、郷税、ミール税を入れないで）。他方、富農の所得は一〇〇〇ルーブリであり、彼は、税金のかかった商品を一五〇ルーブリだけ買うものとしよう。すると、税金として支払うのは（この一五〇ルーブリのうち）五〇ルーブリということになるだろう。つまり、富農は、その所得一ルーブリにつきわずか五コペイカを間接税のかたちで引き渡すわけである。金持であればあるほど、その所得のうちから支払う間接税はそれだけ少なくなる。だから、間接税は最も不公平な税金である。間接税というのは、貧乏人にかけられる税金である。農民と労働者はあわせて全人口の一〇分の九を占めているので、間接税総額の一〇分の九ないし一〇分の八をおさめていることになる。ところが、所得総額のうちで農民と労働者が受け取る分は、きっと一〇分の四をこえない！　だからこそ社会民主主義者は、間接税を廃止して、累進的な所得税と相続税を設けるように要求しているのである。累進税というのは、つまり、所得が多ければ多いほど、税金もそれだけ高くなければならない、というものである。所得一〇〇

〇ルーブリのものには、一ルーブリにつき一コペイカずつおさめさせ、といったぐあいにおさめさせるがよい。最低所得者（たとえば、所得四〇〇ルーブリ以下のもの）は一文もおさめない。いちばんの大金持がいちばん多くの税金をおさめる。このような税金、すなわち所得税、もっと正確にいえば、累進所得税は、間接税よりもずっと公平であろう。だから社会民主主義者は、間接税の廃止と累進所得税の制定とをかちとろうと努めているのである。しかしすべての有産者、すべてのブルジョアジーが、これを望まず、これに反対することは、わかりきったことである。ただ貧農と都市の労働者との強固な同盟だけが、ブルジョアジーからこの改善をたたかいとることができるのである。

最後に、全人民にとって、だがとくに貧農にとって非常に重要な改善は、社会民主主義者の要求している子供の無料教育である。現在、農村では、学校が都市よりずっと少なく、そのうえ子供に良い教育をほどこすことができるのは、どこでも金持階級だけ、ブルジョアジーだけである。すべての子供にたいする無料の義務教育だけが、いくぶんでも、今日の無知から人民を救いだすことができる。そして、とりわけ無知に悩み、とりわけ教育を必要としているのは、貧農である。しかし、もちろん、われわれに必要なのは、ほんとうの、自由な教育であって、役人や坊主たちが望んでいるような教育ではない。

さらに、社会民主主義者は、だれでも自分の好きな宗教をまったく自由に信じる完全な権利を要求している。ヨーロッパの諸国家のうちで、正教以外の宗教を信じる人々にたいする、分離派[三]や異宗派やユダヤ人にたいする、恥ずべき法律がまだ残っているのは、ロシアとトルコだけである。これらの法律は、ある宗教をまったく禁止しているか、あるいはその布教を禁止しているか、あるいはまた、ある宗教を信じる人々からある種の権利を奪っている。これらの法律はみな、最も不当な、最も暴力的な、最も恥ずべきものである。人はだれでも、自分の好きな宗教を信じるばかりでなく、どんな宗教でもひろめ、また宗教を変える完全な自由をもたなければならない。どんな役人も、だれにたいしてであろうと、信仰のことをたずねる権利さえもってはならない。これは良心の問題であって、だれもこれに干渉してはならないのである。どういう「支配的な」宗教も教会も、あってはならない。あらゆる宗教、あらゆる教会が、法律のまえでは平等でなければならない。各宗教の聖職者にその宗教に属する人々が生活費をあたえるのはさしつかえないが、国家はどの宗教をも国庫の金で補助してはならず、正教派であろうと、分離派であろうと、異宗派で

あろうと、そのほかのなんであろうと、どういう聖職者にも生活費をあたえてはならない。これが、社会民主主義者のたたかいとろうとしている目標であって、これらの方策が、どういう留保も、どういう抜け道もなく実行されるまでは、人民は、信仰にたいする警察の恥ずべき迫害や、それにおとらず恥ずべき、ある一つの宗教にたいする警察の施し物から、解放されないであろう。

＊＊＊

以上にわれわれは、社会民主主義者が全人民のために、とくに貧乏人のために、どういう改善をかちとろうとしているかを究明した。そこでこんどは、彼らが労働者のために、工場や都市の労働者だけでなく、農村の労働者のためにも、どういう改善をかちとろうとしているかを、見ることにしよう。工場労働者は、もっとたてこんで密集して生活している。彼らは大きな仕事場で働いている。彼らは、教養のある人々のうちの社会民主主義者の援助をもっと利用しやすい立場にある。これらすべての理由から、都市の労働者は、他のだれよりもずっと早くから雇主とのたたかいを始め、だれよりも大きな改善をかちとり、工場法の公布をもかちとった。しかし、社会民主主義者は、これと同じ改善をすべての労働者のために、すなわち、都市と農村とを問わず、雇主のために家内労働をしているクスターリ[10]のためにも、小親方や小手工業者のところで働いている賃金労働者のためにも、建築労働者（大工、石工、その他）のためにも、林業労働者のためにも、雑役夫のためにも、同様にまた農村の労働者のためにも、獲得しようとして、たたかっている。いまではこれらの労働者のすべてが、ロシア全国で、工場労働者につづいて、そして工場労働者の援助を受けて、団結しはじめており、生活状態をよくし、労働日を短くし、賃金を引き上げさせるたたかいのために、団結しはじめている。そこで、社会民主党が自分の任務としているのは、生活をよくするためのすべての労働者のたたかいを支持すること、彼らのすべてが、最もしっかりした、信頼できる労働者を強固な団体に組織する（結合する）のを助けること、本やリーフレットをくばったり、新規の人々のところへ経験のある労働者をおくったりして、彼らを助けること、総じてなんでもできるだけのことをして彼らを助けることである。われわれが政治的自由をかちとったときには、人民代表議会のなかにもわれわれの仲間、労働者の代議士、社会民主主義者がいるようになるだろうし、彼らは、ほかの国々の同志たちと同じように、労働者のためになる法律の公布を要求するであろう。

社会民主党が労働者のためにかちとろうとしている改善

をのこらずここにならべたてることはやめよう。それらの改善は綱領のなかに書かれているし、『ロシアにおける労働者の事業』（一三）という本のなかにくわしく説明されている。ここでは、それらの改善のうちのおもなものをあげるだけで、われわれには十分であろう。労働日は一昼夜に八時間をこえてはならない。週に一日はかならず休息のために仕事休みとされなければならない。時間外作業は完全に禁止されなければならない。夜間作業も同じである。子供は一六歳までは無料の教育を受けなければならないので、この年齢に達するまでは賃労働につかせてはならない。健康に有害な産業部門で婦人を働かせてはならない。作業中に受けた身体障害、たとえば、脱穀機や唐箕などをつかって仕事をしている労働者が受けた身体障害にたいしては、すべて雇主が労働者につぐなわなければならない。賃金は、すべての賃金労働者にいつも毎週一度支払われなければならず、農村の仕事に雇われる場合によくあるように、二ヵ月か三ヵ月に一度支払うのであってはならない。労働者にとっては、毎週きちんと、そのうえ品物でではなく、かならず現金で賃金をもらうことが、非常に重要である。雇主たちは、賃金のかわりに、あらゆる種類の粗悪な品物をとほうもなく高い値段で労働者におしつけるのが大好きである。この無法なやり方をやめさせるために、品物で賃金を支払うのを法律で絶対に禁止しなければならない。次に、年寄りの労働者は国家から年金をもらわなければならない。労働者は、その労働によって金持階級全体と国家全体を養っている。だから労働者は、現に年金をもらっている役人たちにおとらず、年金をもらう権利がある。労働者のために決めた規則を、雇主がその地位を濫用してやぶることのないよう、工場だけでなく、地主の大経営にたいしても、およそ賃金労働者を使っているあらゆる企業にたいして、監督官を任命しなければならない。しかし、この監督官は役人であってはならず、大臣や県知事が任命したり、警察の御用をつとめるものであってはならない。監督官は労働者が選挙したものでなければならない。国家は、労働者が自分で自由に選んだ労働者の世話人に、給料を払わなければならない。そして、こういう選ばれた労働者の代表は、労働者の住宅がよく手入れをされているよう、雇主が労働者を犬小屋みたいなところや土小屋に（農村での仕事の場合によくあるように）住まわせたりしないよう、労働者の休息についての規則が守られるよう、そのほかのことのために、監視しなければならない。この場合に忘れてならないことは、政治的自由がないあいだは、警察が全能の権力をもち、人民にたいして責任を負わないあいだは、労働者の選んだ代表もなんの役にも立たないであろう、ということ

である。だれでも知っているように、今日警察は、労働者の代表ばかりか、あえてみなに代わってものを言い、法律違反をあばきだし、労働者にむかって団結を呼びかける労働者をだれかれとなく、裁判にかけずにつかまえている。しかし、われわれが政治的自由をもったときには、労働者の代表は非常に役に立つであろう。

すべて雇主（工場主、地主、請負業者、富農）が、労働者の賃金からなんであろうと勝手に天引すること、たとえば仕損品にたいする天引、罰金のかたちでの天引などをやることは、絶対に禁止しなければならない。雇主が勝手に賃金から天引するのは、違法行為であり、暴行である。雇主は、どういう口実ででも、またどういう種類の天引によってでも、労働者に支払う賃金をけずってはならない。雇主は、自分で裁判をやって、罰をくわえるのでなく（労働者から天引した金を自分のふところにねじこむとは、なんとりっぱな裁判官だろう！）、本式の裁判所に申し立てなければならない。そしてこの裁判所は、労働者の代表と雇主の代表から同数選ばれなければならない。このような裁判所だけが、労働者にたいする雇主のあらゆる不満と、雇主にたいする労働者のあらゆる不満を、公平に審理することができるのである。

以上が、社会民主主義者が労働者階級全体のためにかちとろうとしている改善である。それぞれの所有地、それぞれの地主農場、それぞれの請負業者のところで働いている労働者は、信頼できる人々といっしょに、自分たちにはどういう改善をかちとることが必要か、自分たちはどういう要求をかかげるべきか（工場が違い、地主農場が違い、請負業者が違えば、もちろん、そこで働く労働者の要求も違う）を討議するように、努めなければならない。

社会民主党の各委員会は、ロシア全土で労働者が自分たちの要求を正確にはっきり決めるのを援助しており、また労働者の要求を、すべての労働者が、また雇主や当局者が知るようにと、それらの要求を説明した印刷のリーフレットを発行するのを援助している。労働者が心をあわせ、一体となって、自分たちの要求を主張するなら、雇主は譲歩して、これに同意するほかはない。都市では労働者はこういうふうにして、すでにたくさんの改善をかちとったし、いまではクスターリや、手工業の労働者も、やはり団結し（組織をつくり）はじめ、自分たちの要求のためにたたかいはじめている。われわれが政治的自由をもたないあいだは、われわれは、警察に隠れて、秘密にこのたたかいをおこなう。警察は、あらゆるリーフレットとあらゆる労働者の団体を禁止しているからである。しかし、われわれが政治的自由をたたかいとったときには、われわれは、全ロシ

アの働く人民全体が団結し、いっそう心をあわせて圧迫から自分を守ってゆくことができるように、いっそう幅広く、万人のまえで公然とこのたたかいをおこなうであろう。ますます多くの労働者が社会民主労働党に団結すればするほど、彼らの力はそれだけ強くなって、あらゆる抑圧、あらゆる賃仕事、ブルジョアジーのためのあらゆる労働からの労働者階級の完全な解放をも、それだけ早くかちとるであろう。

＊＊＊

われわれはすでに、社会民主労働党は労働者のためだけでなく、すべての農民のためにも改善をかちとろうとしているということについて話した。そこでこんどは、党が全農民のためにどういう改善をかちとろうとしているかを、見ることにしよう。

六　社会民主主義者は全農民のためにどういう改善をかちとろうとしているか？

勤労者をのこらず完全に解放するためには、貧農は、都市の労働者と同盟して、富農をもふくめたブルジョアジー全体とたたかわなければならない。富農は、自分の雇農にできるだけ安い賃金を払い、できるだけ長い時間、できるだけ激しく働かせようと努めるであろうし、他方、都市と農村の労働者は、雇農が富農からもっとよい賃金をもらい、休息をとりながら、もっと楽に働けるようにしようと努力するであろう。つまり、貧農は、富農をいれずに、自分たちの別個の団体をつくらなければならないということになる。このことについては、われわれはすでに話したし、またこれからもいつも繰りかえし話すであろう。

しかし、ロシアでは、農民は、富農も貧農もひっくるめて、いまなお多くの点で昔のままの農奴である。彼らはみな、下層の、いやしい、人頭税を払う身分である。彼らはみな、警察官や地方司政長に農奴的に隷属している。彼らはみな、切取地や家畜の水飼場や放牧地や採草地を使わせてもらうおかえしに、昔のとおり旦那のために働いている場合が、非常に多い――農奴制度のころに旦那のために働いていたのとまったく同じである。農民はみな、この新しい農奴的状態から解放されたいと望んでおり、みな、完全な権利の持主になりたいと望んでおり、みな、いまなお賦役に出る――土地、放牧地、家畜の水飼場、採草地を使わせてもらうおかえしに貴族様のために「雇役」を果したり、「家畜の畑地踏みあらしの弁償のために」働いたり、

女たちを「ごあいさつに」刈りいれに出したりするようなーーのを農民に強制している地主を憎んでいる。貧農は、こうした各種の雇役のために、金持の百姓よりもっと苦しんでいる。金持の百姓は、ときには金で旦那のための労働を免除してもらうこともあるが、それでも金持の百姓もたいていは地主にひどく圧迫されている。つまり、貧農は、富農といっしょになって、自分たちの無権利に反対し、あらゆる賦役に反対し、あらゆる雇役に反対して、たたかわなければならない、ということになる。われわれは、ブルジョアジー全体（富農をもふくめて）に打ちかったときにはじめて、いっさいの債務奴隷制、あらゆる貧困をまぬかれることができるであろう。しかし、それよりもまえにまぬかれることのできる債務奴隷制もあるのだ。というのは、その債務奴隷制は、金持の百姓にとってもつらいものだからである。わがルーシには、すべての農民がこぞって、いまなお農奴そのままの状態におかれている地方や管区が、まだたくさんにある。だから、ロシアの労働者と貧農はみな、両手で、二つの方向にむかってたたかわなければならない。すなわち、一方の手で、すべての労働者と同盟してすべてのブルジョアとたたかい、もう一方の手で、すべての農民と同盟して農村の役人と、農奴主的地主とたたかわなければならないのである。もし貧農が、富農から分かれて自分たちの別個の団体をつくらないなら、富農は貧農をぺてんにかけ、だまして、自分で地主になりあがり、彼らに百姓はやはり水呑百姓のままにしておくばかりか、水呑百姓は団結する自由さえあたえないであろう。またもし貧農が富農といっしょになって農奴的債務奴隷制とたたかわないなら、貧農はあいかわらず束縛され、その場所にしばりつけられたままであり、都市の労働者と団結する完全な自由をやはりもたないであろう。

貧農は、はじめに地主に打撃をあたえて、最も悪性の、最も有害な、旦那への債務奴隷制だけでも、自分のからだから振りおとさなければならない。この点では、富農やブルジョアジーの味方でも、やはり貧農の味方をするものが多いであろう。なぜなら、地主が横柄なのにはみながうんざりしているからである。しかし、われわれが地主の権力を制限するがはやいか、富農はたちまち正体をあらわして、あらゆるものにその爪をのばすであろう。そして、その爪は、熊手のような爪であって、いまでももうたくさんのものをかきあつめている。つまり、油断をせずに、都市の働く人々と強固な、破りえない同盟を結ばなければならない、ということになる。都市の労働者は、地主からその古い旦那ふうのやり方をたたきだす助けをしてくれるだろうし、また富農をもいくらかおとなしくさせてくれるだろう（彼

らが、自分の雇主である工場主たちを、すでにいくらかおとなしくさせたように)。都市の労働者と同盟しないでは、貧農は、いっさいの債務奴隷制から、いっさいの困窮や貧困からぬけだすことが、けっしてできないであろう。この点では、都市の労働者以外にだれひとり貧農を助けてくれるものはいないであろうし、貧農は、自分自身のほかには、だれをもあてにすることができない。しかし、われわれがそれよりもまえにかちとることのできるような、いますぐ、この偉大なたたかいのそもそものはじめに獲得できるような、そういう改善もある。ロシアには、ほかの国ではもうずっとまえになくなっているような種類の債務奴隷制が、たくさんにある。そういう役人への隷属、そういう旦那への債務奴隷制、農奴的債務奴隷制からは、ロシアの農民全体がいますぐぬけだすことができるのである。

そこでこんどは、社会民主労働党が、最も悪性の農奴的債務奴隷制だけからでもロシアの農民全体を救いだすために、またロシアのブルジョアジー全体とのたたかいで貧農の手を自由にするために、なによりも、第一番に、どういう改善をかちとろうとしているかを、調べてみよう。

社会民主労働党の第一の要求は、あらゆる買取賦金、あらゆる年貢支払金、「人頭税を払う身分としての」農民にかけられたあらゆる義務負担を、いますぐ全廃することである。各地の貴族委員会とロシアのツァーリの貴族政府が、農民を農奴的隷属から「解放した」とき、農民は自分自身の土地を買い取らされた、農民が大昔から耕してきた土地を買い取らされた！　これは略奪であった。貴族委員会は、ツァーリ政府の援助を受けて、農民をあからさまに略奪した。ツァーリ政府は、農民約定証文(三三)を力ずくで押しつけるため、切り取った残りの「乞食(こじき)」分与地(三四)を受けとろうとしない農民に軍事的懲罰をくわえるために、多くの地方に軍隊をさしむけた。もし軍隊の援助がなく、拷問と銃殺をやらなかったなら、貴族委員会は、農奴的隷属からの解放のさいにやったようなあつかましいやり方で、農民を略奪することはけっしてできなかったであろう。農民は、地主の貴族委員会がどんなに彼らをぺてんにかけ、略奪したかを、いつまでもおぼえていなければならない。なぜなら、いまでもツァーリ政府は、農民のための新しい法律が問題になると、いつでも貴族または役人の委員会を任命しているからである。最近ツァーリは一つの詔書を出した（一九〇三年二月二六日付）。そのなかで彼は、農民にかんする諸法律を改訂し改善すると約束している。だれが改訂するのだろうか？　だれが改善するのだろうか？――またしても貴族である、またしても役人である！　農民の生活をよくするための農民の委員会がつくられるまでは、農民はいつも

だまされるであろう。地主や、地方司政長や、いろいろの役人が農民に指図するのは、もうたくさんだ！　村の警部のだれかれに、また地方司政長とか、郡警察長とか、県知事とかよばれる、身代を呑みつぶした貴族ののら息子のだれかれに、このように農奴的に隷属しているのは、もうたくさんだ！　農民は、自分で自分の問題を処理し、自分で新しい法律を考え、指示し、実施する自由を、要求しなければならない。農民は、自由な、選挙による農民委員会を要求しなければならない。この要求をかちとるまでは、彼らはいつまでも貴族や役人のためにだまされ、略奪されるであろう。百姓が自分で自分を解放しないかぎり、自分の運命を自分自身の手ににぎるために団結しないかぎり、百姓を役人の蛭どもから解放してくれるものはだれもいないであろう。

社会民主主義者は、買取賦金や、年貢支払金や、あらゆる義務負担をただちに全廃するように要求するほか、さらに、人民から取りたてた買取代金を人民に返還するように要求している。百姓は、貴族委員会の手で農奴制度から解放されたとき、ロシア全体で幾億ルーブリもよけいに支払っている。農民はこの金を返すように要求しなければならない。政府は、大地主貴族に特別の税金をかけるのだ。修道院の所有地と帝室領地管理庁の土地（すなわち、ツァーリの家族の所有地）とを没収するのだ。人民代表議会が農民の利益になるようにこの金を処分するのだ。ロシアほど農民がいやしめられ、貧乏であるところ、幾百万の農民が恐ろしい飢えのために死にたえかけているところは、この世界のどこにもない。わが国で農民が飢え死にするまでになったわけは、農民がすでに貴族委員会によって略奪されたうえ、それ以来年々、昔の農奴主のあとつぎにおさめる昔どおりの貢物を搾りとられ、買取賦金や年貢支払金を搾りとられて、略奪されているからである。略奪者にこの責任をとらせるのだ。飢えた人々に真剣な援助をあたえるために、大地主貴族から金をとってくるのだ。飢えた百姓には施しは必要でなく、びた銭の恵みは必要でない。百姓は、彼らが年々地主と国家に支払ってきた金を返せと要求すべきである。そうすれば、人民代表議会と農民委員会は、飢えた人々にほんとうの、真剣な援助をあたえることができるであろう。

次に、社会民主労働党は、連帯保証制と、農民が自分の土地を処分するのを制限しているあらゆる法律とを、すぐさま全廃するように要求している。一九〇三年二月二六日付のツァーリの詔書は、連帯保証制を廃止すると約束している。いまではもう、それを廃止するという法律も出されている。だが、それだけでは足りない。そのほかに、農民

が自分の土地を処分するのを制限しているあらゆる法律を、ただちに廃止しなければならない。そうしなければ、農民は、連帯保証制がなくなっても、やはり完全に自由にはならず、やはり半農奴のままであろう。農民は、自分の土地を処分する完全な自由、すなわち、土地を手ばなし、だれにも伺いをたてずに自分の好む人に土地を売る完全な自由を、獲得しなければならない。ツァーリの勅命は、まさにこのことを許していない。貴族や商人や町人はみな、自由に土地を処分できるのに、農民はそうすることができない。百姓は小さな子供だ。百姓には地方司政長をつけてやって、乳母のように見まもらせなければならない。百姓が自分の分与地を売るのを禁止しなければならない。そうでないと、百姓は金をむだづかいするだろうから！――農奴主たちはこんなふうに論じている。そして、彼らの言うことを信じて、百姓のためを願いながら、百姓が土地を売るのは禁止しなければならない、と言う薄のろどもがいるのである。ナロードニキ（彼らのことは、まえに述べておいた）や、「社会革命党」と自称している人々でさえ、やはりこれにのせられて、わが国の百姓はいましばらく農奴のままでおくほうがよいし、土地を売らせないほうがよい、と考えている。

社会民主主義者は次のように言う。それはまったくの偽善だ、まったくの旦那の考えだ、まったくの甘いだけのことばだ！　われわれが社会主義をかちとったときには、労働者階級がブルジョアジーに打ちかったときには、土地はみな共有になるだろうし、だれひとり土地を売る権利をもたないようになるであろう。だが、それまではどうするのか？　貴族と商人は売ることができても、農民は売ることができないということにするのか!?　貴族と商人は自由でも、農民はあいかわらず半農奴のままということにするのか!?　農民はあいかわらず当局に許可を願いでなければならないということにするのか!?

これはまったくのごまかしである。甘いことばでつつまれているものの、やはりごまかしである。

貴族と商人が土地を売ることを許されているあいだは、農民もまた、貴族や商人とまったく同じように、自分の土地を売り、それを完全に自由に処分する完全な権利をもたなければならない。

労働者階級は、ブルジョアジー全体に打ちかったときには、大経営者から土地を取り上げるであろう。そうなれば、労働者階級は、大きな地主農場に協同組合経営を組織して、労働者たちが、自由に世話人をえらんで管理人とし、労働を楽にする各種の機械を使い、一日八時間（さらには六時間）以内の交替作業で、いっしょに、共同で土地を耕すよ

うにするだろう。そうなれば、まだこれまでどおりひとりで経営をやってゆきたいと考えている小農も、市場めあてではなく、ゆきあたりばったりに売るためではなく、労働者の協同組合めあてに経営をいとなむようになるであろう。小農は労働者の協同組合に穀物や肉や野菜を供給し、労働者は、金をとらずに、機械や家畜や肥料や衣類や、小農に必要なものをなんでも提供するであろう。そうなれば、金ゆえの大経営者と小経営主のたたかいはなくなるであろうし、雇われて他人のために働くこともなくなり、働き手はみな自分のために働くようになり、あらゆる作業上の改善や機械は、労働者自身の利益になり、労働者の労働を楽にし、彼らの生活をよくすることに役だつであろう。

しかし分別のある人間ならだれでも、理解している。社会主義を一気にかちとるわけにはいかないことを、そのためにはものぐるいのたたかいをおこなわなければならない。そのためには、ブルジョアジー全体と、ありとあらゆる政府と、死にものぐるいのたたかいをおこなわなければならない。そのためには、ロシア全国にわたってすべての都市労働者と貧農とをあわせて、強固な、破りえない同盟に団結させなければならない。これは偉大な事業であって、こういう事業のためなら全生涯をささげても惜しくはない。しかしわれわれがまだ社会主義をかちとらないあいだは、大経営者は、いつでも金ゆえに小経営主とたたかうであろう。ほんとうに、大農は土地を自由に売れるが、小農はそうできない、ということにするのか？　われわれは、繰りかえして言う。農民は小さな子供ではないのであって、だれかほかのものの指図など受けはしないであろう。農民は、貴族や商人がもっている権利のすべてを、なんの制限もなくのこらずもたなければならない。

また、こんなことを言う者もいる。農民の土地は自分のものではなく、共同団体の土地である。共同団体の土地をめいめいが売るようなことを許すわけにはゆかない、と。――だが、これもまったくのごまかしである。貴族や商人もやはりこういう共同団体をもってはいないだろうか？　貴族や商人もやはりいっしょになって会社をつくり、土地や工場や、なんでも好きなものをいっしょに買ってはいないだろうか？　いったいどうして、貴族の共同団体のためにはなんの制限も考えださないのに、百姓のためには、警察のあらゆる悪党どもが一生懸命に制限やら禁制やらを考えだすのか？　農民は、役人の手からろくなものにありついたためしはなく、彼らがありついたものといえば、笞打ちときびしい取りたてと侮辱だけである。農民は、自分にかんすることをすべて自分の手ににぎらないあいだは、完全な同権と完全な自由をかちとらないあいだは、けっしてろくなものにありつけないであろう。農民が彼らの土地を

共同団体のものにしておきたいと思うなら、だれも彼らがそうするのをあえて妨げてはならない。そして彼らは、自発的な申合せにもとづいて、そうしたいと思う者が集まって、好きなように共同団体をつくり、なんでも思うとおりの共同団体契約を完全に自由に書くであろう。役人などが、農民の共同団体の仕事に鼻をつっこんではならないのである。また、だれであろうと、農民について利口ぶった口をきき、百姓のために制限やら禁制やらを考えだしてはならないのである。

最後に、社会民主主義者が農民のためにかちとろうとしている重要な改善が、もう一つある。社会民主主義者は、旦那への債務奴隷制、百姓の農奴的債務奴隷制を、いますぐ、ただちに制限したいと望んでいる。もちろん、この世に困窮というものがあるあいだは、われわれはいっさいの債務奴隷制からぬけだすことはできないし、また、土地と工場がブルジョアの手ににぎられているあいだは、金がこの世のおもな力であるあいだは、社会主義社会が樹立されないあいだは、困窮からぬけだすことはできない。しかし、ほかの国でも社会主義はまだ樹立されていないにもかかわらず、それらの国には見られない特別ひどい債務奴隷制が、ロシアの農村にはまだたくさん残っている。ロシアには、地主ならだれにでも有利だが、農民ならだれにでも圧迫となっているような農奴的債務奴隷制が、まだたくさんある。それは、いますぐ、ただちに、まっさきになくすことができるし、またなくさなければならないものなのである。

われわれがどういう債務奴隷制のことを農奴的債務奴隷制とよんでいるかを、説明しよう。

農村に住んでいるものはだれでも、次のような場合を知っている。地主の土地と農民の土地が隣りあわせになっている。解放のさい農民は、彼らに必要な土地を地主に切り取られ、放牧地、牧場を切り取られ、森林を切り取られ、家畜の水飼場を切り取られた。これらの切り取られた土地がなければ、放牧地や水飼場がなければ、農民はどうしようもない。いやでもおうでも地主のところにいって、水ぎわまで家畜を通らせてくれとか、放牧地、その他を使わせてくれとか、頼まないわけにはいかない。ところで地主は、自分では経営をいとなんでおらず、おそらく金は一文ももっていなくても、ただ農民を債務奴隷にすることで生活しているのである。農民は切取地を使わせてもらうかわりに、金をもらわずに地主のために働き、自分の馬で地主の土地を耕し、地主の穀物や採草地を刈り入れ、地主のために脱穀し、ところによっては旦那の土地に自分の、農民自身の肥料まで施し、旦那の屋敷に麻布や卵やいろいろの家禽をとどける。農奴制度のころとまったく同じである！　その

ころには、農民は、だれかの世襲領地に住んでいて、その人のためにただで働いたものだが、いまでは農民は、貴族委員会の手で解放されたさいに取り上げられたその同じ土地を使わせてもらうおかえしに、ただで旦那のために働く場合が非常に多いのである。これは、以前に変わらぬ賦役である。いくつかの県では、農民は自分でもこの労働のことを賦役あるいはパンシチナとよんでいる。われわれが農奴的債務奴隷制とよぶのは、このことである。農奴制度から解放するさい、地主の貴族委員会は、農民をいままでどおりの債務奴隷としておくことができるようにわざわざ仕組み、わざわざ百姓の分与地を切り取って、百姓がどこにも牝鶏をはなす場所のないように地主の土地をくさび形に打ちこみ、わざわざ悪い土地に農民を移らせ、水飼場に行く道をわざわざ地主の土地でふさぎ、——ひとことでいえば、農民がわなに落ちこむように、農民をいままでどおりにやすやすとりこにすることができるように、仕組んだのである。農民が隣りの地主のとりこに、農奴制度のころと同じようなとりこになっている部落が、わが国にまだどれくらいあるか、かぞえきれないほどである。そういう部落では、金持の百姓も貧乏な百姓も、みな手も足もしばりあげられて、地主の思うままにされている。貧乏な百姓がこのために苦しんでいるのは、金持の百姓どころのはなしではない。金持の百姓は、ときには自分の土地ももっているし、自分の代理として雇農を賦役に行かせているが、貧乏な百姓はまったくどうすることもできず、地主の好きなようにされている。こういう債務奴隷制のもとにおかれた貧農は、息つくひまもないことがしばしばで、旦那のために働かなければならないので出かせぎにゆくこともできず、貧農全体や都市の労働者といっしょに一つの団体、一つの党に自由に団結するなどということは、考えてみることもできないのである。

では、こういう債務奴隷制をいますぐ、ただちに、一気になくす手段が、なにかないであろうか？　社会民主労働党は、この目標に達する二つの手段を農民に提案する。しかし、いま一度繰りかえして言っておくが、貧乏人全体をありとあらゆる債務奴隷制からぬけださせるものは、ただひとつ社会主義だけである。というのは、金持が力をもっているあいだは、彼らはいつでもあれこれの仕方で貧乏人を圧迫するからである。債務奴隷制全体を一気に完全になくすことはできないが、しかし、貧農にも中農にも、さらに富農にとってさえ圧迫となっている最も悪性の、最も忌まわしい農奴的債務奴隷制を大きく制限することはできるし、農民の負担を軽くすることはいますぐできるのである。

そのための手段は二つある。

第一の手段は、農村の雇農や貧農の世話人と、それから富農や地主の世話人とからなる、自由に選挙された裁判所である。

第二の手段は、自由に選挙された農民委員会である。この農民委員会は、賦役をなくし農奴制度の残存物をなくすための、あらゆる方策を審議し採用する権限をもつだけでなく、さらに切取地を取り上げて農民に返す権限も、もたなければならない。

この二つの手段をもうすこしくわしく調べてみよう。世話人たちからなる自由に選挙された裁判所は、債務奴隷制についての農民の告訴事件のすべてを調べることになるだろう。こういう裁判所は、地主が農民の困窮を利用してあまりにも高い借地料をきめている場合には、その借地料を引き下げる権限をもつことになるだろう。こういう裁判所は、農民に法外な支払金を免除する権限をもつことになるであろう。——たとえば、地主が冬に半分の賃金で夏仕事のために百姓を雇ったとすれば、裁判所はこの事件を調べて公正な賃金をきめるであろう。こういう裁判所は、もちろん、役人からなるのではなく、自由に選挙された世話人たちからなりたたなければならないし、またこれには農村の雇農と貧農がかならず自分の選出代表をだし、その人数も、富農や地主の代表の人数より少なくないようにしなければならない。こういう裁判所は、さらに労働者と雇主とのあいだの係争事件のすべてを審理することになるだろう。こういう裁判所があれば、労働者やすべての貧農は、自分たちの権利を主張することが容易になるだろうし、たがいに団結することが容易になるだろうし、また、貧農や労働者の信頼できる忠実な味方になることができるのはだれかということを、正確に見きわめることも、容易になるであろう。

もう一つの手段は、もっと重要なものである。それは、郡ごとに雇農、貧農、中農、富農の世話人のなかから選挙される自由な農民委員会である（あるいは、農民が必要と思うなら、一つの郡にいくつもの委員会があってもよい。たぶん農民は、郷ごとに、また大きな村ごとに、農民委員会をつくるようにさえ、するかもしれない）。どういう債務奴隷制が農民を圧迫しているかを、当の農民以上によく知っているものはない。いまでも農奴的債務奴隷制によって生活している地主を摘発することにかけては、当の農民にまさるものはないであろう。農民委員会は、どういう切取地、または採草地、または放牧地、その他が、不当に農民から取り上げられたかを審議し、これらの土地をただで取りかえすべきか、それとも、そういう土地を買った人に

大貴族の負担でつぐないをあたえるべきかを、審議するであろう。すくなくとも、農民委員会は、きわめて多くの貴族的地主委員会が農民を追いこんだわなから、農民を救いだすことであろう。農民委員会は、農民が自分の問題は自分で解きはなすであろうし、また、農民を役人の干渉から処理したいと望んでおり、またそうする力をもっていることを、明らかにするであろう。農民委員会は、農民が自分たちの困窮について話しあい、だれが貧農の忠実な味方となり、都市の労働者との同盟の忠実な味方となることができるかということを、しっかりと見わける助けとなるであろう。農民委員会は、片田舎の部落においてさえ、農民がひとりだちとなり、自分の運命を自分の手ににぎる第一歩である。

だから、社会民主主義者である労働者は、農民に次のように警告する。

貴族の委員会や役人の委員会を、いっさい信用してはならない。

全人民代表会議を要求せよ。

農民委員会をつくるように要求せよ。

どんな本でも新聞でも発行できる完全な自由を要求せよ。

全人民代表会議の席上であろうと、農民委員会の席上であろうと、また新聞紙上であろうと、みなが、だれをも恐れないで、自由に自分の意見や希望を述べる権利をもつようになったならば、だれが労働者階級の味方で、だれがブルジョアジーの味方かということは、すぐにわかるであろう。いまは、大多数の人々はそういうことをちっとも考えていない。いまは、あるものは自分のほんとうの意見を隠し、あるものは自分でもまだわかっておらず、あるものはわざとごまかしている。

しかし、いま言ったようになったなら、みながこのことを考えはじめるだろうし、なにも隠しだてする理由はなくなり、万事がすぐに明らかになるであろう。すでに述べたように、ブルジョアジーは富農を自分の味方に引きよせるであろう。農奴的債務奴隷制をなくすことに速やかに、また完全に成功すればするほど、農民がほんとうの自由を獲得すればするほど、それだけ早く貧農は団結するであろうし、また富農もそれだけ早くブルジョアジー全体と手を結ぶであろう。だが、彼らが手を結ぶなら結ぶがよい。われわれは、富農がこの結合によって強くなることをよく知っているが、しかしそれを恐れはしない。われわれもまた団結するのだ。そして、われわれの同盟――貧農と都市労働者との同盟――は、はるかに人数が多いし、相手方の数十万人の同盟にたいして、数千万人の同盟となるであろう。われわれはまた、ブルジョアジーが中農や小農をさえ自分

の味方にしようと努めるだろうこと（ブルジョアジーは、いまでもすでにそうしようと努めている！）、彼らをだまそうと努め、彼らを誘惑し、分裂させ、彼らの一人ひとりに、おまえも金持の仲間にしてやると約束しようと努めるだろうということを、知っている。ブルジョアジーがどういう手段で、どういうごまかしにたよって中農を誘惑しているかを、われわれはすでに見た。だからわれわれは、まえもって貧農の目をあけるようにし、ブルジョアジー全体に反対する貧農と都市労働者との別個の同盟を、まえもって強化しなければならない。

農村に住んでいる人はだれも、自分のまわりをよく見まわすがよい。金持の百姓は、なんと口ぐせのように、旦那を、地主を攻撃していることだろう！　彼らは、人民が圧迫されていると言って、旦那の土地が荒れほうだいになっていると言って、なんと愚痴をこぼしていることだろう！　彼らは、土地を百姓の手に取り上げたらいいと言って、なんと（内緒話で）しゃべりたてるのが好きなことだろう！

富農の言うことを信じることができるだろうか？　できはしない。彼らが土地をほしがっているのは、人民のためではなく、自分のためである。彼らは、いまでももう土地を買ったり賃借りしたりして、かきあつめているのだが、それでもまだ足りないのである。つまり、貧農が地主に反対して富農といっしょにすすむのは、長いあいだのことではない、ということになる。われわれが富農といっしょに歩をすすめることができるのは最初の一歩だけであって、そのあとは離ればなれに行かなければならないであろう。

だからこそ、この最初の一歩は、そのあとの歩みから、そしてわれわれの最後の、肝心な一歩から、はっきり区別しなければならないのである。農村における最初の一歩は、農民を完全に解放すること、彼らに完全な権利をあたえること、切取地を取りかえすために農民委員会をつくること（註）である。しかし、われわれの最後の一歩（註）は、都市でも農村でも同じであろう。すなわち、われわれは、地主からも、ブルジョアジーからも、すべての土地、すべての工場を取り上げて、社会主義社会を打ちたてるであろう。最初の一歩から最後の一歩までに、われわれはまだ少なからぬたたかいをとおらなければならないであろう。だから、最初の一歩と最後の一歩を混同するものは、このたたかいを妨げるものであり、自分では気がつかずに、貧農に目かくしをするものである。

貧農は、最初の一歩を全農民といっしょにすすめるであろう。たぶん、クラークの一部は列を離れるであろう。たぶん、百姓の百人に一人ぐらいは、どんな債務奴隷制もいやとは思わないであろう。しかしこのときにはまだ、大多

数のものは一丸となってすすむであろう。平等の権利はすべての農民に必要だからである。地主の債務奴隷制はみなの手足をしばっているのだ。だが、最後の一歩をすべての農民がいっしょにすすめることは、けっしてないであろう。そのときには、富農はみな雇農に反対して立ちあがるであろう。そのときには、われわれには、貧農と都市の社会民主主義的労働者との強固な同盟が必要である。農民は最初の一歩と最後の一歩を一気にすすめることができる、と農民にむかって言うものは、百姓をだますものである。農民そのもののあいだの偉大なたたかい、貧農と富農の偉大なたたかいを、忘れるものである。

だから社会民主主義者は農民にむかって、一気に楽土がくるとは約束しない。だから社会民主主義者は、なによりもまず、たたかいのための、ブルジョアジー全体にたいする労働者階級全体の偉大な、幅広い、全人民的なたたかいのための、完全な自由を要求するのである。だから社会民主主義者は、ささやかだが、確実な第一歩を示すのである。

債務奴隷制を制限し、切取地を返還するために農民委員会をつくれ、というわれわれの要求は、垣のようなもの、柵のようなものだと考えている人がいる。ここで止まれ、これからさきに行ってはならない、というわけである。こんなことを言う人は、社会民主主義者がなにを望んでいるかを、ろくろく考えてみたことがないのだ。債務奴隷制を制限するため、切取地を返還するために農民委員会をつくれという要求は、柵ではない。それは扉である。もっとさきのほうへすすむためには、ひろびろとした大道を通って、終点まで、ルーシの勤労し働く人民全体の完全な解放まですすむためには、まずはじめにこの扉を通りぬけなければならない。この扉を通りぬけないあいだは、農民は、無知のままであり、債務奴隷のままであり、完全な権利をもたず、完全な、ほんとうの自由をもたないままである。彼らは、自分たちのあいだでだれが働く人の味方で、だれが敵かということさえ、きっぱり見わけることができない。だから社会民主主義者はこの扉を示して、このように言う。まずはじめにミール全体の力で、人民全体の力で、この扉を押して、それを徹底的にたたきやぶらなければならない、と。ところが、ここにナロードニキとか社会革命党とかと自称する人々がいて、彼らもやはり百姓のためを願いながら、騒ぎ、叫び、手をふりまわし、農民の手助けをしたいと思っているのだが、しかしこの扉が見えないのである！この連中は、百姓には自分の土地を自由に処分する権利をあたえる必要はなにもないと言いだすほど、ときには農奴主たちなのだ！　百姓のためを願いながら、ひどいめくらとまったく同じような議論をするのだ！　こういう友人か

らは、たいした援助は得られないであろう。最初にたたきやぶらなければならない扉さえはっきり見えないとすれば、諸君がどれほど百姓のためを願っていようと、それがなんになろうか？　都市だけでなく農村でも、また地主に反対するだけでなく、共同団体内部、ミール内部の金持にも反対して、社会主義をめざす自由な人民闘争の道にすすむには、どうしたらよいかがわからないとすれば、諸君もやはり社会主義を目標としているにしても、それがなんになろうか？

だから社会民主主義者は、この手近な最初の扉をこのように根気づよく示すのである。いま困難なことは、さまざまなけっこうな願いをしゃべりたてることではなく、正しい道を示し、どのように最初の一歩をすすめるべきかを、はっきりと理解することである。ロシアの百姓が債務奴隷制に押しつぶされていること、ロシアの百姓がいまでもなかば農奴の状態にあること、このことについては、すでに四〇年ものあいだ、あらゆる百姓の友が言ったり書いたりしている。地主があらゆる種類の切取地を手段として、どんなに無法なやり方で百姓を略奪し、債務奴隷としているかということについては、ルーシに社会民主主義者が姿をあらわすずっとまえから、あらゆる百姓の友がたくさんの本を書いている。百姓をいますぐ、ただちに助けてやらなければならないということ、百姓をいくらかでも債務奴隷制から解放してやらなければならないということ、このことは、いまではもう正直な人ならだれでも認めていることであり、わが警察政府の役人でさえ、それについて語りはじめている。肝心なことは、どのようにして仕事にとりかかったらよいか、どのようにして第一歩をすすめたらよいか、まずはじめにどの扉をたたきやぶったらよいか、ということである。

この問題には、いろいろの人（百姓のためを願っている人々のなかの）が二とおりの違った答えをあたえている。農村プロレタリアはみな、この二つの答えをもっとはっきり理解し、自分自身の明確でしっかりした意見をつくるように、努めなければならない。一つの答えは、ナロードニキと社会革命党があたえている。彼らは言う。まずはじめに、農民のあいだに各種の組合（協同組合）を発達させなければならない。ミール団体を強めなければならない。それぞれの農民に自分の土地を自由に処分する権利をあたえてはならない。ミール共同団体にもっと大きな権限をもたせて、ロシアの土地全体をしだいにミールの土地とするがよい〔一三〕。土地が資本の手から労働の手にうつるのを容易にするために、農民の土地購入にあらゆる便宜をはかってやらなければならない、と。

もう一つの答えは、社会民主主義者があたえている。農民は、まずはじめに、貴族と商人がもっている権利のすべてを、のこらずかちとらなければならない。農民は、自分の土地を自由に処分する完全な権利をもたなければならない。最も忌わしい債務奴隷制をなくすために、切取地返還のための農民委員会をつくらなければならない。(一七)われわれに必要なのは、ミール団体ではなく、ロシア全国のさまざまな農村共同団体に属する貧農をまとめた団体であり、農村プロレタリアと都市プロレタリアとの同盟である。各種の組合(協同組合)や、ミールによる土地購入は、つねに富農により多くの利益をもたらすであろうし、中農をだますであろう、と。

ロシア政府は、農民の負担を軽くしなければならないことをさとってはいるが、わずかばかりのもので済ましたいと思っており、万事役人の手でやってゆきたいと思っている。農民は用心しなければならない。なぜなら、役人の委員会も、まえに貴族委員会がだましたのと同じように、農民をだますだろうからである。農民は、自由な農民委員会の選挙を要求しなければならない。肝心なことは、役人が負担を軽くしてくれるのを待つのでなく、農民が自分で自分の運命をその手ににぎることである。農民が自分の力を感じさえすれば、彼らが自由に話しあい団結しさえすれば、はじめは一歩をすすめるだけでよい。はじめは、最も悪性の債務奴隷制から自分を解放するだけでよい。切取地がしばしば最も無法な農奴的債務奴隷制の道具になっていることは、良心的な人間ならだれも否定することはできない。あらゆる農奴的債務奴隷制をなくすために、農民に彼ら自身の委員会を、役人ぬきのものを、自由に選挙させよ、というわれわれの要求が、第一番の、最も公正な要求であることは、良心的な人間ならだれも否定することはできない。

自由な農民委員会のなかで(自由な全ロシア代表会議でもまったく同じであるが)、社会民主主義者は、いますぐ全力をあげて、農村プロレタリアと都市プロレタリアとの別個の同盟を打ちかためるであろう。社会民主主義者は、農村プロレタリアの利益になるあらゆる方策を主張し、農村プロレタリアが、第一歩につづいて、できるだけ早く、またできるだけ心をあわせて、第二歩、第三歩、等々をすすめ、こうして最後まで、プロレタリアートの完全な勝利まで、すすんでゆくのを助けるであろう。しかし第二歩をすすめるために、あすはどういう要求が日程にのぼってくるかを、もうきょうから言うことができるだろうか? いや、それは言えない。なぜなら、富農が、また、各種の協同組合のことや、土地を資本の手から労働の手にうつす各種の方策のことに熱中しているたくさんの教育のある連中

が、あすどういう態度をとるかが、われわれにはわからないからである。

あるいは、彼らは、あすはまだ地主といっしょになるところまではゆかず、地主の権力を徹底的に打ちくだくことを望むかもしれない。けっこうなことである。社会民主主義者にとって、これは非常に望ましいことであり、社会民主主義者は、地主からすべての土地を取り上げて、自由な人民国家に引き渡すことを要求するよう、農村プロレタリアと都市プロレタリアに助言するであろう。社会民主主義者は、そのさい農村プロレタリアがだまされないよう、プロレタリアートの完全な解放をめざす最後のたたかいのために彼らの力がいっそう強まるよう、油断なく見まもるであろう。

だが、あるいは、そのときの状態は、これとはまったく違うものになるかもしれない。そして、違うものになるほうが、ありそうでさえある。富農と数多くの教育のある連中とは、最も悪性の債務奴隷制が制限され縮小されるがはやいか、あすにははやくも地主と手を結ぶかもしれない。そうなれば、農村ブルジョアジー全体が農村プロレタリアート全体に反対して立ちあがるであろう。そうなれば、われわれが地主だけとたたかうのはこっけいであろう。そうなれば、われわれは、ブルジョアジー全体とたたかわなければならないし、そしてなによりもまず、こういうたたかいをおこなうためのできるだけ大きな自由と活動の余地とを要求し、また労働者のたたかいをやりやすくするために労働者の生活を楽にするよう要求しなければならない。

どちらになろうが、とにかく、われわれの第一の仕事、どうしてもしなければならないわれわれの主要な仕事は、農村のプロレタリアおよび半プロレタリアと都市のプロレタリアとの同盟を打ちかためることである。こういう同盟をつくるためにわれわれにいますぐただちに必要なのは、人民の完全な政治的自由であり、農民の完全な同権であり、農奴的債務奴隷制をなくすことである。そしてこの同盟がつくりだされ、打ちかためられれば、ブルジョアジーが中農を誘惑するのにつかっているあらゆるごまかしを暴露するのは、われわれにとってたやすいことであろう。そのときには、われわれは、ブルジョアジー全体に反対し、政府の全勢力に反対して、容易にまた速やかに、第二歩をも、第三歩をも、最後の一歩をも、すすめるであろう。そのときにはわれわれは、勝利にむかってたゆみなく前進し、働く人民全体の完全な解放を速やかにたたかいとるであろう。

七 農村の階級闘争

階級闘争とはなにか？　それは、人民の一部分が他の部分にたいしておこなうたたかいであり、無権利の圧迫された勤労者の大衆が、特権をもった圧迫者、寄生者にたいしておこなうたたかいであり、賃金労働者すなわちプロレタリアが、有産者すなわちブルジョアジーにたいしておこなうたたかいである。みながそれに気づいているわけではなく、みながその意義を理解しているわけではないが、このような偉大なたたかいは、ロシアの農村でも、いつもおこなわれてきたし、いまもおこなわれている。農奴制度があったころには、農民の全大衆が、自分たちの抑圧者である地主階級とたたかっていた。地主階級は、ツァーリ政府に守られ、擁護され、支持されていた。農民は団結することができなかった。そのころには、農民は、無知にまったくおしひしがれていた。農民は、都市の労働者という援助者、兄弟をもっていなかった。しかしそれでも農民は、力のかぎり、根かぎりたたかった。農民は、政府の狂暴な迫害も恐れず、体罰や銃弾も恐れなかった。坊主たちは、農奴制度が聖書で是認され、神によって承認されたものだ（そのころ、首都大主教フィラレートは、あからさまにこう言った！）ということを、大骨をおって証明しようとしたが、農民は彼らの言うことを信じなかった。農民はあちこちで立ちあがった。そこで政府は、全農民の全般的蜂起が起こるのを恐れて、とうとう譲歩した。

農奴制度は廃止されたが、完全に廃止されたのではなかった。農民は、あいかわらず無権利であり、あいかわらず下層の、人頭税を払う、いやしい身分であり、あいかわらず農奴的債務奴隷制の爪にかけられていた。そして農民は、いまなお騒ぎをやめず、いまなお完全な、ほんとうの自由を求めている。ところが、農奴制度が廃止されてから、新しい階級闘争が、プロレタリアとブルジョアジーのたたかいが起こってきた。富はふえ、鉄道や大工場が建てられ、都市はもっと人が住むようになり、いっそうぜいたくになったが、この富のすべてはまったく少数の人間の手に占められ、人民はますます貧乏になり、落ちぶれ、飢えて、他人のところでの賃仕事に出ていった。都市の労働者は、すべての金持にたいするすべての貧乏人の新しい、偉大なたたかいを始めた。都市の労働者は、団結して社会民主党をつくり、一歩一歩前進しながら、偉大な、最後のたたかいを準備しながら、全人民のために政治的自由を要求しながら、ねばりづよく、しっかりと、心をあわせてたたかっている。

ついに、農民もがまんしきれなくなった。昨年、一九〇二年の春に、ポルタヴァ、ハリコフ、その他の県の農民が立ちあがって、地主のところに押しかけ、地主の倉をこじ

あけ、地主の持ち物を分けあい、百姓が播いて取りいれたのに地主が自分のものにした穀物を、飢えた人々にあたえ、土地の分けなおしを要求した。農民は、法外な抑圧に辛抱しきれないで、よりよい運命を求めはじめたのである。農民は、たたかわないで餓死するよりも、抑圧者とたたかって死ぬほうがましだ、と心を決めたのだ。――そして、これはまったく正しい決心だった。しかし、農民はよりよい運命をかちとることができなかった。ツァーリ政府は、これらの農民はたんなる暴徒で強盗だと宣言した(農民が自分で播いて取りいれた穀物を、略奪者である地主から取り上げたという理由で!)。ツァーリ政府は、農民を敵として、これに軍隊をさしむけた。農民は打ちやぶられた。農民に向けて発砲され、多くの者が殺された。農民はむごたらしく笞打たれ、打ちころされ、トルコ人でもその敵のキリスト教徒をけっしてこうは扱いはしないほど、ひどく責めさいなまれた。ツァーリの勅使である県知事たちは、ほんとうの死刑執行人として、だれよりもひどく拷問をした。兵士は農民の女房や娘を手ごめにした。あげくのはて、農民は役人たちの裁判所でさばかれた。農民は地主に八〇万ルーブリを支払わせられた。この裁判、この恥ずべき、非公開の暗黒裁判では、ツァーリの勅使である知事オボレンスキーや、その他のツァーリの召使どもがどんなに農民を拷問にかけ責めさいなんだかを、弁護人はものがたることさえ許されなかった。

農民は正しい大義のためにたたかったのである。ロシアの労働者階級は、ツァーリの召使どもによって銃殺され、笞で打ちころされたこれらの受難者たちを、いつまでも追慕するであろう。これらの受難者は、働く人民の自由と幸福のための闘士であった。農民は打ちやぶられたが、彼らはなんどでも繰りかえし立ちあがるであろう。彼らは、はじめに敗けたからといって、がっかりすることはないであろう。自覚した労働者は、都市と農村のできるだけ多くの働く人民が、農民のたたかいのことを知って、新しい、もっと大きな成功をもたらすたたかいを準備するようにするため、全力をそそぐであろう。自覚した労働者は、最初の農民蜂起(一九〇二年)はなぜ鎮圧されたのか、またツァーリの召使どもでなく、農民と労働者が勝利者となるにはどうしなければならないかを、農民がはっきり理解するように、全力をあげて農民を援助することに努力するであろう。

農民の蜂起が鎮圧されたのは、それが無知な、無自覚な大衆の蜂起であって、明確な、明瞭な政治的要求、すなわち国家制度の変更の要求をもたない蜂起だったからである。農民の蜂起が鎮圧されたのは、それが無準備だったからで

ある。農民の蜂起が鎮圧されたのは、農村のプロレタリアがまだ都市のプロレタリアと同盟していなかったからである。この三つが、農民の最初の失敗の原因である。蜂起が成功するためには、その蜂起は自覚され準備されたものでなければならず、またそれはロシア全国をまきこみ、都市労働者との同盟のなかでおこなわれなければならない。そして、都市における労働者のたたかいの一歩一歩、社会民主主義の本や新聞の一部一部、農村プロレタリアに話しかける自覚した労働者の演説の一つひとつが、蜂起が再燃し、それが勝利に終わる時を近づけるのである。

農民が自覚せずに立ちあがったのは、彼らががまんしきれなくなり、なにも言わず反抗もせずに死んでゆきたくなかったからにほかならない。農民は、あらゆる略奪、抑圧、虐待にひどく苦しめられてきたので、ツァーリの仁慈についてのぼんやりしたうわさを、たとえ一瞬間にせよ信ぜずにはいられなかった。飢えた人々のあいだに、すなわち、一生涯他人のために働いて、穀物を播いて取りいれてきたのに、いま「旦那がた」の穀倉のわきで飢え死にしかけている人々のあいだに、穀物を分配するのは、道理のわかった人ならだれでも正しいことと認めてくれるだろうと、信ぜずにはいられなかった。上等の土地や、すべての工場を金持がにぎっているのは、地主とブルジョアジーがにぎっているのは、まさに飢えた人民を彼らのために働かせることが目的なのだということを、農民は忘れたようであった。坊主が金持階級を守って説教しているだけでなく、役人や兵士の大群を従えたツァーリ政府全体もまた金持階級を守って立ちあがっているということを、農民は忘れていた。ツァーリ政府は農民にこのことを思いださせた。ツァーリ政府は、国家権力とはなにか、それはだれに奉仕し、だれを守るものかということを、狂暴な、残忍なやり方で農民に思いしらせた。われわれは、農民にこの教訓をできるだけしばしば思いださせさえすればよい。そうすれば、農民は、なぜ国家制度を変えなければならないか、なぜ政治的自由が必要であるかを、たやすく理解するであろう。ますます多くの人民がこのことを理解するようになったときには、読み書きができ、ものを考える百姓がみな、なによりもさきにたたかいとらなければならない三つの主要な要求を知ったときには、農民の蜂起は無自覚なものではなくなるであろう。その第一の要求は、ルーシに専制政府でなく、人民の選挙された政府をつくるために、全人民代表会議を召集せよ、ということである。第二の要求は、だれにでも好きな本や新聞を発行できる自由をあたえよ、ということである。第三の要求は、農民と他の諸身分との完全な同権を法律で認めよ、そして、なによりもまず、あらゆる農奴

的債務奴隷制をなくすために、選挙による農民委員会を招集せよ、ということである。以上が、社会民主主義者の主要な根本的要求である。そして今日では、農民が、これらの要求を理解し、人民の自由のためのたたかいをなにから始めるべきかということを理解するのは、きわめてたやすいことであろう。そして農民がこれらの要求を理解するようになったときには、彼らはまた、たたかいを、まえもって、長期にわたって、ねばりづよく、しっかりと準備しなければならないということ、しかも、ひとりぼっちではなく、都市の社会民主主義的労働者といっしょにこれを準備しなければならないということをも、理解するであろう。

自覚した労働者と農民はみな、最も考えぶかい、信頼できる、勇敢な同志たちを、自分のまわりに集めるべきである。社会民主主義者がなにを望んでいるのかを、これらの同志に説明して、どういうたたかいをおこなわなければならないか、またなにを要求しなければならないかを、みなにわからせるよう努めるべきである。自覚した社会民主主義者は、すこしずつ、慎重に、だが、たゆみなく、自分の学説を農民に教え、社会民主主義の本を読ませ、しっかりした人々の小さな寄合いでこれらの本を説明すべきである。

しかし社会民主主義の学説は、本によって説明するだけでなく、われわれの周囲に見られる抑圧と不正の実例の一つひとつ、その事例の一つひとつにもとづいて、説明しなければならない。社会民主主義の学説は、あらゆる圧制、あらゆる略奪、あらゆる不正にたいするたたかいの学説である。抑圧の原因を知っていて、抑圧の事例の一つひとつと全生涯をつうじてたたかってゆく人だけが、ほんとうの社会民主主義者である。そうするにはどうしたらよいか？自覚した社会民主主義者は、自分の都市や、自分の農村でいっしょに寄りあつまって、労働者階級全体にもっと多くの利益をもたらすにはどうしたらよいかを、自分たちで決めなければならない。例として一つ二つをあげよう。社会民主主義者である労働者が、休暇で郷里の部落に帰ってきたとしよう。あるいはまた、だれか社会民主主義者である都市の労働者が、自分の郷里でない部落にたまたま立ちよったとしよう。この部落全体は、クモの巣にかかったハエのように、近所のある地主にすっかり押えられていて、一生涯債務奴隷制からぬけだすことができず、この債務奴隷制をどうやってまぬかれたらいいのか、わからずにいる。そこで、正義を求めていて、警察の犬に会ってもびくびくしない、最もものわかりよい、考えぶかい、信頼できる農民たちをすぐさまえらびだして、それらの農民に、彼らのぬきさしならない債務奴隷状態がどうして起こったのかを

説明し、地主が貴族委員会でどんなやり方で農民をぺてんにかけ、農民を剝ぎとったかを話し、金持がどれだけの力をもっているか、ツァーリ政府が金持をどのように支持しているかを話し、社会民主主義者である労働者の要求のことを話さなければならない。農民がこの簡単なからくりをすっかり理解したなら、この地主にたいして心をあわせて反抗することができないかどうか、農民が彼らの第一の、主要な諸要求を（都市で労働者が工場主に自分たちの要求を提出しているのと同じように）提出することができないかどうか、いっしょによく考えてみなければならない。もし、一つの大きな村またはいくつかの部落がこの地主の債務奴隷にされているようなら、世話人たちを仲介として、近くの社会民主党委員会からリーフレットを手に入れるのが、いちばんよいであろう。社会民主党委員会は、そのリーフレットに、農民がどういう債務奴隷制に苦しめられているかということ、農民はまっさきになにを要求しているかということ（借地料をもっと安くしろとか、冬季の雇入れにたいして、半額の賃金でなくちゃんとした賃金を支払えとか、家畜が畑地を踏みあらすことであまりきびしく責めたり締めつけたりしないようにとか、その他いろいろの要求）を、ことのはじめから説きおこして、適切に書くことであろう。読み書きのできる農民はみな、こういうリーフレットを読んで、どこに問題があるかをよく理解し、さらに、読み書きのできない農民に説明してきかせるであろう。そのときには社会民主主義者は農民の味方であること、社会民主主義者はあらゆる略奪を非難していることが、農民にはっきりわかるであろう。そのときには、農民は、もし心をあわせてがんばるなら、いますぐ、ただちに、どういう負担の軽減を、たとえごくささやかなものであっても、とにかく軽減をかちとることができるかを理解しはじめるであろうし、また、社会民主主義者である都市の労働者といっしょに偉大なたたかいをおこなうことによって、全国でどんな大きな改善をかちとらなければならないかを、理解しはじめるであろう。そのときには、農民は、ますますこの偉大なたたかいの準備をととのえるようになり、どのようにして信頼できる人々を見つけるべきか、どのようにして自分たちの要求を共同で主張すべきかを、学びとるようになるであろう。ときには、都市の労働者がやっているような、ストライキをおこすことができるかもしれない。なるほどこれは農村では都市よりも困難であるが、それでもときにはおこせるのであって、ほかの国でも、たとえば、ストライキをやって成功している例がしばしばある。もし貧農や富農がぜひとも労働者を必要とする農繁期に、地主がストライキの準備をととのえており、まえもって共通の

要求についてみなの意見が一致しており、これらの要求がリーフレットで説明されるか、そうでないまでも、寄合いの席上でよく説明されていさえすれば、みな心をあわせてがんばるであろうし、地主は譲歩するか、略奪をいくらかひかえなければならなくなるであろう。もし心をあわせたストライキが、それも農繁期におこなわれるなら、地主や、軍隊を従えた当局でさえ、どうしたらよいか、なかなか考えつかないであろう。時はどんどんたってゆく。地主は破産するよりほかはない。こうなれば、地主はじきに話合いに応じるようになるだろう。もちろん、これは新しい仕事である。新しい仕事は、はじめはうまくゆかないことが多い。都市の労働者もやはり、はじめは心をあわせてたたかうことができず、どういう要求を共同で提出したらよいかがわからずに、ただ機械を破壊し、工場を打ちこわしにかかったのである。ところがいまでは、労働者は心をあわせてたたかうことを学びとっている。新しい仕事というものは、なんでもはじめは学びとらなければならない。いまでは労働者は、心をあわせて立ちあがれば、困苦の軽減だけでもすぐさまかちとることができるということを、理解している。そしてその一方で、人民は、心をあわせて反抗することに慣れてゆき、偉大な決定的なたたかいの準備をますますととのえてゆく。これと同じように農民も、どのようにして最も残酷な略奪者たちに反抗したらよいか、どのようにして心をあわせて困苦を軽減するように要求したらよいか、どのようにして自由のための偉大な戦闘の準備をすこしずつ、しっかりと、いたるところで、ととのえなければならないかを、知ることを学ぶであろう。自覚した労働者と農民の数はますますふえ、農村の社会民主主義者の団体はますます強くなり、地主の債務奴隷制や、坊主の取りたて、警察の残虐行為、当局の圧迫の事例の一つひとつが、ますます人民の目をひらかせ、心をあわせて反抗することに彼らを慣らし、力ずくで国家制度の変更をかちとることが必要だという思想に、彼らを慣らすであろう。

すでにこの本の最初に述べたように、都市の働く人民は、いまでは街頭や広場に出ていって、みなのまえで公然と自由を要求しており、「専制を倒せ！」とその旗に書き、叫んでいる。都市の働く人民が、叫びながら街頭を行進するためだけに立ちあがるのでなく、偉大な最後のたたかいのために立ちあがる日、労働者が一体となって「たたかって死ぬか、自由をかちとるか！」と言う日、幾百の殺されたん人々、たたかいで倒れた人々に代わって、幾千の新しいいっそう勇敢な闘士が立ちあがる日が、まもなくくるであろう。そのときには、農民も立ちあがるであろう。ロシア全国で立ちあがり、都市の労働者を助けにゆくであろう。

彼らは、農民と労働者の自由のために最後までたたかいぬくであろう。そのときには、ツァーリのどのような軍勢ももちこたえることができないであろう。勝利は働く人民のものであろう。そして労働者階級は、あらゆる圧制からすべての勤労者を救いだす目標にむかって、ひろびろとした大道を進むであろう。労働者階級はこの自由を、社会主義のためのたたかいに利用するであろう！

八　新聞『イスクラ』が雑誌『ザリャー』と共同で提案したロシア社会民主労働党の綱領

綱領とはなにか、なぜそれは必要か、なぜ社会民主党だけが明確な、明瞭な綱領をかかげているのか、ということについては、われわれはすでに述べた。綱領を最後的に採用することができるのは、わが党の大会、すなわち、党活動家全部の代表者の会議だけである。いま組織委員会によってそういう大会が準備中である。(一〇〇) しかし、すでにわが党の非常に多くの委員会が『イスクラ』に同意すること、『イスクラ』を指導的新聞と認めることを、公然と声明している。だから大会までは、われわれの綱領草案（提案）は、社会民主主義者がなにを望んでいるかを正確に知らせるのに十分役だつことができるのであって、そこでわれわれは、この草案の全文を本書の付録にのせることが必要だと考える。(一〇一)

もちろん、どの労働者でも、綱領に述べられていることの全部を、説明なしに理解するというわけにはいかないであろう。多くの偉大な社会主義者が社会民主主義の学説をつくりだす仕事をしてきたが、マルクスとエンゲルスがこの学説を完成した。われわれが利用したいと思い、われわれの綱領の基礎におきたいと思っている経験を獲得するために、すべての国の労働者が多くのたたかいを経てきたのである。だから労働者は、綱領、自分たちの綱領、自分たちのたたかいの旗の一つひとつのことばを理解するために、社会民主主義の学説を学ばなければならない。そして労働者は、とくにたやすく社会民主主義の綱領を理解し会得している。というのは、この綱領は、ものを考える労働者の一人ひとりがその目で見、その身に体験してきた事柄を述べたものであるからである。この綱領をいっぺんに理解することが「困難」だからといって、だれもおそれをなしてはならない。労働者はだれでも、綱領をよく読めば読むほど、考えれば考えるほど、彼の闘争の経験がふえればふえるほど、綱領をますます完全に理解するようになるであろう。だがすべての人が、社会民主主義者の綱領の全体について

考え、討議するようにしよう。社会民主主義者が望んでいること、また彼らが働く人民全体の解放について考えていることのすべてを、すべての人がいつも記憶しておくようにしよう。すべての人が、社会民主党とはなにかということについて、ありのままの真実を、徹底的に、明瞭に、正確に知ってくれることを、社会民主主義者は望んでいる。

　われわれはここで綱領全体をくわしく説明することはできない。そうするにはべつに一冊の本が必要である。われわれは、綱領が述べている事柄を簡単に示すだけにとどめて、読者に、次の二冊の本を参考書として手に入れるようおすすめする。その一つは、ドイツの社会民主主義者カール・カウツキーの書いた『エルフルト綱領』[20]という標題の本であって、ロシア語訳がある。もう一つは、ロシアの社会民主主義者エリ・マルトフの書いた『ロシアにおける労働者の事業』という本である。これらの本は、われわれの綱領全体を理解する助けとなるであろう。

　次にわれわれは、われわれの綱領の各部に別々の文字をつけて（あとに出てくる綱領を参照）、そのそれぞれの部で述べてある事柄を示すことにしよう。

　（A）まず最初に、全世界のプロレタリアートが自分の解放のためにたたかっていること、そして、ロシアのプロレタリアートは万国の労働者階級の世界的軍隊の一部隊にすぎないことが、述べてある。

　（B）さらに、ロシアをふくめて、世界のほとんどすべての国にあるブルジョア制度とはどういうものか、どのように住民の大多数が地主と資本家のために働きながら、乞食のような暮しをおくり、貧乏をしているか、どのように小手工業者と農民が落ちぶれてゆく一方で、大工場が発達してゆくか、どのように資本は労働者自身をも彼らの妻子をも圧迫しているか、どのように労働者階級の状態が悪化し、失業と困窮が増大してゆくかということが、述べてある。

　（C）次に、労働者の団体のこと、彼らのたたかいのこと、このたたかいの偉大な目標——すべての抑圧されている人々を解放し、貧乏人にたいする金持のあらゆる圧制を完全になくすこと——のことが、述べてある。ここでまた、なぜ労働者階級はますます強力になってゆくのか、なぜ労働者階級はそのすべての敵にたいし、ブルジョアジーのあらゆる擁護者にたいして、かならず打ちかつのか、その理由が説明してある。

　（D）その次には、すべての国で社会民主党はどういう目的のためにつくられているのか、社会民主党は労働者階級のたたかいをどのように助け、どのように労働者を団結させ、みちびき、教育し、偉大な闘争の準備をととのえさ

せているかが、述べてある。

(E) さらに、なぜロシアでは人民はほかの国よりさらにひどい暮しをしているのか、ツァーリの専制はどんなに大きな害悪であるか、なぜわれわれは、なによりもさきにこの専制を倒し、ルーシに人民の選挙された政府を打ちたてなければならないかが、述べてある。

(F) 選挙された政府は全人民にかならずどのような改善をもたらすか? これについては、われわれは本書で述べているが、綱領でもそれが述べてある。

(G) 次に綱領は、労働者階級の暮しをもっと楽にし、彼らがもっと自由に社会主義のためにたたかうことのできるようにするため、いますぐ労働者階級全体のためにどのような改善をかちとらなければならないかを、示している。

(H) 綱領には、貧農が、農村ブルジョアジーにたいしても、ロシア・ブルジョアジー全体にたいしても、もっと容易にもっと自由に階級闘争をおこなうことができるよう、まっさきにすべての農民のためにかちとらなければならないいろいろな改善が、特別に示されている。

(I) 最後に、社会民主党は、人民にむかって、警察と役人のどのような約束も甘ったるいことばも信じないで、自由な全人民代表会議をただちに召集させるため、しっかりとたたかうように、いましめている。

一九〇三年三月の前半に執筆
はじめ一九〇三年五月にジュネーヴで「ロシア革命的社会民主主義在外連盟」によって単行の小冊子として発行
全集、第五版、第七巻、一二九—二〇三ページ所収
邦訳全集、第六巻、三六九—四四六ページ所収

革命的青年の任務(一八一)

第一の手紙

われわれの記憶にまちがいがなければ、はじめ『オスヴォボジデーニエ(一八二)』第四（通巻二八）号に掲載され、同様に『イスクラ』も入手した新聞『ストゥデント(一八三)』編集部の声明は、われわれのみるところでは、『ストゥデント』第一号の発刊後に編集部の見解にいちじるしい一歩前進があったことを、立証している。ストルーヴェ氏が、声明のなかに述べられている見解に不同意であることを大いそぎで表明したのは、まちがっていなかった。じっさい、この見解は、自由主義ブルジョアジーの機関紙があれほど首尾一貫して、熱心に固守している日和見主義の傾向とは、根本的に反するものである。『ストゥデント』編集部が、「革命的感情だけでは学生の思想的統合をつくりだすことはできない」こと、「この目的のためには、なんらかの社会主義的世界観に」、しかも「明確で全一的な」世界観に「立脚した社会主義的理想が必要である」ことを認めたのは、すでに思想上の無関心や理論上の日和見主義と原則的に手をきって、学生を革命化する手段の問題を正しい基盤のうえにおいたものであった。

なるほど俗流的な「革命主義」のありきたりの見地からすれば、学生の思想的統合は、全一的な世界観を必要とせず、むしろそういうものを排除する。思想的統合は、異なる種類の革命思想にたいして「寛容な」態度をとることを意味し、ある特定の思想範域を断固として承認するのをさしひかえることを前提する。一言でいえば、これらの政治術策の賢人たちの見地からすれば、思想的統合は、ある種の無思想性（もちろん、これは、見解の広さとか、なにはともあれただちに統一することが重要であるとか、等々という、使い古された公式によって、多かれ少なかれ巧妙に隠蔽されてはいるが）を前提するのである。このような問題の立て方にとって、かなりもっともらしい、一見したところでは非常に説得的な論拠としていつも役だっているのは、次のような周知の、議論の余地のない事実を指摘することである。すなわち、学生のなかには政治的・社会的見

解の点で非常に種々さまざまなグループが存在しており、また存在せざるをえない。だから、世界観の全一性と明確性を要求すると、これらのグループの一部を不可避的におしのけることになり、したがって統合を妨げ、したがって心をあわせた活動のかわりに不和を呼びおこし、したがって共同の政治的攻撃力をよわめることになる、その他、等等。

では、このもっともらしい議論を調べてみよう。一例として、『ストゥデント』第一号から、いろいろなグループへの学生層の区分をとりあげてみよう。――この創刊号では、編集部はまだ明確で全一的な世界観の要求を提出していない。だから、編集部は社会民主主義的な「偏狭さ」をえこひいきしているのではないかという疑いは、かけにくいであろう。『ストゥデント』第一号の主張は、現代の学生層を四つの大きなグループに分けている。すなわち、(一)無関心なおおぜい――「学生運動にたいしてまったく冷淡な態度をとっている人々」、(二)「学園派」――もっぱら学園的な基盤のうえでの学生運動の支持者たち、(三)「学生運動一般の反対者たち――民族主義者、反ユダヤ主義者、その他」、(四)「政治家」――ツァーリ専制の転覆をめざす闘争の支持者たち。「このグループはそれ自身また、二つの対立する要素から、すなわち、革命的気分をもった純粋のブルジョア的な政治的反政府派と、最近の諸事件の」(たんに最近の諸事件だけのか？　エヌ・レーニン)「所産である社会主義的気分をもった革命的インテリ・プロレタリアートとから、なっている」。だれでも知っているように、この最後の亜グループがそれ自身また、エス・エル派[二〇〇]の学生と社会民主主義者の学生とに分かれていることを考慮するなら、現代の学生には、反動派、無関心な人々、学園派、自由主義者、エス・エル派、社会民主主義者の六つの政治的グループが存在していることがわかる。

では、このグループ分けは偶然のものではないのだろうか？　これは、いろいろな気分の一時的な区分ではないのだろうか？　この問題を率直に提起しさえすれば、多少とも事情に通じている人ならだれでも、ただちに、これにたいして否定的な回答をあたえるであろう。さよう、わが国の学生には、これ以外のグループ分けはありえないであろう。なぜなら、彼らはインテリゲンツィアのなかで最も敏感な部分だからであり、また、インテリゲンツィアがインテリゲンツィアとよばれるゆえんは、彼らがだれよりも意識的に、だれよりも決定的に、だれよりも正確に、社会全体における階級利害と政治的グループ分けとの発展を反映し表現する点にあるからである。もし学生の政治的グループ分けが、社会全体における政治的グループ分けに照応し

ているのでなかったなら、――学生グループと社会的グループとがその勢力と人数の点で完全な比例をたもっているという意味ではなく、社会に存在しているもろもろのグループが学生層のなかにも必然的かつ不可避的に存在するという意味で、「照応」しているのでなかったなら、学生は学生ではなくなるであろう。そして階級敵対の発展が萌芽的（比較的な意味で）で、政治的処女の状態にあり、膨大な、きわめて膨大な住民大衆が警察的暴政によって打ちのめされ、おしひしがれているこのロシア社会全体にとっては、ほかならぬこの六つのグループ――反動派、無関心派、文化主義者、自由主義者、エス・エル派、社会民主主義者――こそ、特徴的である。ここで私は「学園派」を「文化主義者」と、すなわち、政治闘争ぬきの合法的進歩の支持者、専制の基盤のうえでの進歩の支持者と、おきかえた。このような文化主義者はロシア社会のどの層にも存在しており、どこでも彼らは、学生の「学園派」と同様に、狭い範囲の職業的利益だけ、すなわち、国民経済または国家行政や地方行政のある部門の改善だけにとどめており、どこでも臆病に「政治」から遠ざかっているが、そのさい、さまざまな傾向の「政治家」を区別せずに（学園派がそれを区別しないのと同様に）、……統治形態に関係のあるものをなんでもかんでも政治とよんでいる。文化主義者の層はつねにわが国の自由主義の広範な基盤であったし、今日でもやはりそうである。すなわち、「平和な」時代（すなわち、「ロシア」語に移せば、政治的反動時代）には、文化主義者の概念と自由主義者の概念とはほとんどまったく融合するし、戦時、すなわち社会的気分の高揚の時代、専制にたいする攻撃が成長しつつある時代ですら、これらの概念の差異はやはりしばしば混沌としている。ロシアの自由主義者は、自由な国外の出版物で専制にたいする率直で公然たる抗議を公衆のまえに提出するときでさえ、やはり自分をなにによりもまして文化人と感ずることをやめず、奴隷的に、あるいは、そう言いたければ、合法主義的に、忠誠に、忠良な臣民ふうに議論しはじめる。『オスヴォボジデーニエ』を見たまえ。

文化人と自由主義者とのあいだに明確な、だれの眼にもはっきりとわかる境界線がないことは、一般にロシア社会の政治的グループ分け全体の特徴である。あるいはわれわれにむかって、前記の六グループへの区分は正しくない、なぜなら、この区分はロシア社会の階級区分に照応していないからだ、と言うものがあるかもしれない。だが、このような反論は成りたたないであろう。もちろん、階級区分は、政治的グループ分けの最も深い基底ではある。それは、究極においては、もちろん、つねにこのグループ分けを規

定している。しかし、この深い基底は、歴史的発展の進行につれて、またこの発展の参加者や創造者の意識性の程度におうじて、はじめて明らかにされるものである。この「究極」はただ政治闘争によってのみ到達されるのであって、それはしばしば長い、頑強な、幾年幾十年をもって測られる闘争の——あるときはいろいろな政治的危機となって嵐のように発現し、あるときは立ち消えて一時的に停止するかのように見える闘争の——結果である。たとえば、政治闘争がとくに鋭い形態をとっており、先進的階級——プロレタリアート——がとくに意識的に行動しているドイツに、自己の雑多な（だが、全体として無条件に反プロレタリア的な）階級的内容を信教上の標識によって隠蔽している中央党のような党（しかも強力な党）がまだ存在していることは、理由のないことではない。だから、ロシアにおける今日の政治的諸グループの階級的起原が、全人民の政治的無権利によって、また、いちじるしく組織され、思想的に結束し、伝統的に閉鎖的な官僚の人民支配によって、はなはだしくあいまいにされていることは、驚くにあたらない。むしろロシアのヨーロッパ的、資本主義的発展が、そのアジア的政治体制にもかかわらず、すでにいかに強い刻印を社会の政治的グループ分けに押すことができたかに、驚くべきである。

あらゆる資本主義国の先進的階級である産業プロレタリアートは、わが国でもすでに、社会民主党の指導のもとに、すでに早くから国際的な自覚したプロレタリアート全体の綱領となっている綱領の旗のもとに、大衆的・組織的運動の道にのりだしている。政治に無関心な人々の部類は、ロシアでは、もちろん、ヨーロッパのどの国よりもはるかに多数であるが、しかしわが国でも、この部類の初歩的で原始的な処女性などということはもはや問題とはなりえない。すなわち、無自覚な労働者——部分的には農民も——の無関心に代わって、政治的動揺や積極的抗議の燃えあがりがますます頻繁に現われており、この無関心が、満ちたりたブルジョアや小ブルジョアの無関心とはなんの共通点もないことが、明瞭に証明されつつある。資本主義の発展がまだ比較的に弱いロシアでとくに多数を占めている、最後にあげたこの小ブルジョア階級は、一方では、疑いもなく、すでに意識的な、一貫した反動主義者をも提供しはじめているが、他方では、彼らは、無知な、打ちのめされた「勤労人民」の大衆からまだわずかしか分離しておらず、ラズノチーネッ・インテリゲンツィア(三〇)——世界観を全然確立しておらず、民主主義思想と素朴な社会主義思想とを無意識的に混同しているところの——の広範な層のなかに自分の思想的代表者を見いだしていることが、はるかにしばしば

である。まさにこのイデオロギーこそが、その右翼である自由主義的ナロードニキ派の部分をも、その最左翼である「社会革命党」をもふくめて、古いロシアのインテリゲンツィアの特徴をなしている。

私は、「古い」ロシアのインテリゲンツィアの、と言った。わが国にはすでに新しいインテリゲンツィアも出現しており、彼らの自由主義は、素朴なナロードニキ主義やぼんやりした社会主義をほとんど完全にふりすてている（もちろん、これにはロシアのマルクス主義の助けもあった）。わが国では、ほんとうのブルジョア自由主義的インテリゲンツィアの形成は、とくにストルーヴェ、ベルヂャーエフ、ブルガコフ一派の諸氏のような、すこぶるすばしこい、日和見主義のあらゆる流行の風潮に敏感な人々がこの過程に参加したおかげで、一足七マイルの靴の速さですすんでいる。最後に、ロシア社会のうちインテリゲンツィアに所属しない自由主義的および反動的諸層についていえば、彼らとわが国のブルジョアジーや地主のあれこれのグループの階級利益との結びつきは、たとえばわがゼムストヴォ（㊇）、市会、取引所委員会、定期市委員会などの活動を多少とも知っているものならだれにでも十分に明らかである。

――――

こうしてわれわれは、わが国の学生の政治的グループ分けが、さきほどわれわれが新聞『ストゥデント』第一号として描きだしたようなものであるのは、偶然ではなくて、必然的で不可避的なことであるという、疑いのない結論に到達した。この事実を明確にすれば、もはやわれわれは、「学生の思想的統合」とかその「革命化」とかいうことを実際にどう解すべきかという点についての論争問題を、容易に解明することができる。一見したところでは、こういう簡単な問題がいったいどうして論争問題となりえたのか、すこぶる奇妙なくらいである。学生の政治的グループ分けが社会の政治的グループ分けに照応するとすれば、それはとりもなおさず、学生の「思想的統合」ということを次の二つのうちのどちらかに解するほかないことを、意味しないだろうか――すなわち、できるだけ多数の学生をまったく明確な社会＝政治的思想の仲間の側に引きよせるということか、あるいは、一定の政治的グループの学生と学生以外のこのグループの代表者たちとのあいだを、できるだけ緊密に接近させるということか？　学生の革命化については、この革命化の内容と性格にたいするまったく明確な見解の見地に立ってこそ、はじめて語ることができるということは、おのずから明らかではあるまいか？　たとえば、社会民主主義者にとっては、それは、第一に、学生の

あいだに社会民主主義的信念をひろめ、「社会革命党」とよばれてはいるが革命的社会主義とはなにひとつ共通点をもたない諸見解とたたかうことを意味し、第二に、学園的運動をもふくめて学生のあいだのあらゆる民主主義的運動を拡大し、それをより意識的な、より断固たるものにしようと努力することを意味する。

このような簡単明瞭な問題がどのようにもつれて論争問題になったかということは、きわめて興味ぶかい、きわめて特徴的なエピソードである。論争は、同郷人会や学生組織を統合したキエフ連合評議会の「公開状」(『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』第一三号と『ストゥデント』第一号に掲載された)を機縁として、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』(第一三号および第一七号)と『イスクラ』(第三一号および第三五号)とのあいだにおこなわれた。学生団体はロシア社会民主労働党の諸委員会と連絡をたもつべきだという一九〇二年の第二回全国学生大会の決定を、キエフ連合評議会は「偏狭」だと考えた。そのさい、ある地方の一部の学生が「社会革命党」に共鳴しているというまったく明白な事実が、「学生は、それとしては、社会革命党にも社会民主党にも全体的にくわわることはできない」という題目にかんするきわめて「公平な」、そしてきわめて根拠ない議論によって、体裁よく隠蔽された。『イスクラ』はこの議論が根拠ないものであることを指摘したが、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』は、当然のことながら、全力をあげてこの議論の擁護に立ちあがり、イスクラ派の「分離と分裂の狂言者たち」を、「分別がなく」、政治的に未熟だといって非難した。

さきに述べたことからみてすでに、このような議論が全然不合理であることは、あまりにも明らかである。ここで問題となっているのは、学生のあれこれの政治的役割のことである。ところがまず最初に、学生はのこりの社会から切りはなされておらず、だからまたつねに不可避的に社会の政治的グループ分け全体を反映するという事実にたいして、眼を閉じなければならない、というのだ。それから、眼を閉じたまま、学生そのもの、または学生一般についておしゃべりしにかかる。結論は……あれこれの政党に結合することとの結果としての分離と分裂の害悪ということになる。この奇妙な議論を究極までもってゆくためには、政治的基盤から職業的すなわち学業的基盤へ飛躍しなければならなかったことは、火をみるよりも明らかである。そこで『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』は論文『学生と革命』(第一七号)のなかで、第一には、全学生の利益、全学生の闘争を、第二には、学生の教育目的、将来の社会的活動への訓練の任務、意識的な政治的闘士の養成の任務を、引

合いにだすことによって、まさにこのような離れ業をやってのけている。ここに引合いにだされていることは、二つながらきわめて正当である。ただそれらは、ここでの問題に関係なく、問題を混乱させているにすぎない。ここで出されている問題は、政治活動の問題であり、この政治活動は、その本質そのものからいって、諸党派の闘争と切りはなしえないように結びついており、不可避的に、一つの特定の党を選択することを要求するものである。どうしてこの選択を、どんな政治活動のためにもきわめて真剣な科学的準備が必要であり、確固たる信念を「作りあげる」ことが必要であるとか、あるいはいっさいの政治活動はある一つの傾向の政治家のサークルだけに限定しうるものではなく、住民のますます広範な諸層に向けられなければならず、おのおのの層の職業的利益と結びつき、職業的運動と政治運動とを結合し、前者を後者にまで引き上げなければならないとかいうような口実によって、回避することができるだろうか⁇　人々が自分の立場を擁護するためにこのような口実にたよらなければならないということの事実がすでに、どの程度まで彼ら自身が明確な科学的信念にも確固たる政治的方針にも欠けているかを、まのあたりに示しているではないか！　どの側面から問題に近づこうが、諸君はそこに、科学的＝理論的な方面でも実践的＝政治的な方面でも、一方ではマルクス主義、他方では西ヨーロッパの「批判的」日和見主義、第三にはロシアの小ブルジョア的ナロードニキ主義とのあいだを綱わたりする社会革命党の軽業を追及しながら、社会民主主義者がずっと以前から説いてきた古い真理の新しい確証を、ますます見いだすであろう。*

* 社会革命党の綱領と戦術が首尾一貫性を欠いており内的に矛盾しているという命題は、特別にくわしく説明する必要があることは、いうまでもない。われわれは、つづいて書く手紙の一つで、この問題にくわしく立ちいりたいと思う。

じっさい、多少とも発展した政治的諸関係を頭に浮かべて、われわれの「論争問題」がどう実践的に提起されるかについて目を向けてみたまえ。いまかりに教権主義者と自由主義者と社会民主主義者の諸党がここにあるとしよう。これらの党はある地方で、たとえば学生の――あるいは労働者階級でもいいが――ある層のなかで活動している。党は、あれこれの層の最も有力な代表者のできるだけ多数を自分の側へ引きいれようと努力する。ではたずねるが、これらの党が、学生全体や労働者階級全体に共通な、ある種の学業上、職業上の利害が存在するという理由で、これらの代表者たちがどれか一つの特定の党を選択するのに反対するというような事態を、考えることができるであろうか？　それはちょうど、すべての党に無差別に非常に役だ

っている印刷の技術を引合いにだして、諸党の闘争の必要性を論駁するのと同様であろう。できるだけ広範な利益を理解しないような党は、文明諸国には一つもないが、どの党でも、これらの団体のなかで、ほかならぬ自党の影響力が優勢を占めるように努力しているのだ。ふつうあれこれの機関の無党派性を言いたてることは、現に存在している機関がすでに百中の九九まできわめてはっきりした政治的精神によって浸透されていることをごまかそうと望む支配階級の口にする偽善的文句以上のものでないことを、知らないものがあるだろうか？　しかもわが社会革命党の諸君は、実質上、まさに「無党派性」をたたえる賛歌をうたっているではないか。たとえば、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』（第一七号）の次のような感動的な長広舌をとってみよう。「革命的組織が、自分に従属しない他のあらゆる独立の組織を、かならず滅ぼさなければならない競争者、そのなかへかならず仲間割れ、分離、解体をもちこまなければならない競争者と見るのは、なんという近視眼的な戦術であろう？」これは、一八九六年にモスクワの社会民主主義組織がだした檄(一〇二)について言われているのである。同組織は、学生がここ数年間その学内的利害の狭い範囲に閉じこもってきたことを非難したのであるが、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』は同組織にたいして教えを垂れて言う。学生組織の存在は、「革命的関係においてはっきりと自分の立場を決めた」人々が労働者の事業に努力をささげることを、けっして妨げるものではない、と。

ここに、どれほどの混乱があるかを見たまえ。競争は、政治的組織とこれまた政治的な組織とのあいだにだけ、政治的志向とこれまた政治的な志向とのあいだにだけ、可能（そして不可避的）である。共済組合と革命的サークルとのあいだに競争はありえない。『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』が、共済組合をかならず滅ぼそうという願望を革命的サークルがもっているように言うのは、じつにくだらないことを述べているのだ。だが、もしこの同じ共済組合のなかにある種の政治的志向——たとえば革命家には援助をあたえないとか、図書室から非合法図書を追放するとかいう——が現われたならば、競争や直接の闘争をおこなうことが、あらゆる誠実な「政治家」にとって義務となる。もしサークルを狭い学内的利害のなかに閉じこめる人間がいれば（そして、疑いもなく、このような人間は現にいるし、一八九六年にはもっとはるかにたくさんいた！）、彼らと、利害を縮小するのではなく拡大するように説く人々とのあいだには、まったく同様に闘争が必要であり義務的である。ところで、『イスクラ』にたいする『レヴォリュ

ツィオンナヤ・ロシア』の論戦を呼びおこしたキエフ評議会の公開状では、学生組織と革命的組織とのうちどちらを選択するかということではなく、異なる傾向の革命的組織と革命的組織とのうちどちらを選択するかということが問題となっていたのではないのか。したがって、選択を始めたのは、ほかでもなく、すでに「革命的関係においてはっきりと自分の立場を決めている」人々である。ところが、わが「社会革命党」は、革命的組織と学生組織とのあいだで競争するのは近視眼的であるという口実で、彼らをうしろへ引きもどすのだ。……さっぱりつじつまが合わないではないか、諸君！

学生の革命的部分は、二つの革命党のうちの一つをえらびはじめた。すると彼らに次のように訓戒する人がいるのだ。「この影響」、すなわち、学生の社会主義的部分がその他の学生におよぼす影響が、「明確な」(もちろん、不明確なほうが望ましい……)「党のレッテル」(あるものにとってはレッテルだが、他のものにとっては旗じるしなのだ)の「押しつけによって」、「学生同志の知的良心の強制によって」(あらゆる国のすべてのブルジョア出版物は、社会民主党の成長をいつも、指導者や教唆者が平和的な同僚たちの良心にくわえた強制のためだと説明している……)「達成されてはならない」、と。ちゃんとした学生ならだれでも、レッテルの「押しつけ」だとか「良心の強制」だとかいう社会主義者へのこの非難を、しかるべく評価するだろうと思われる。そして、これらの無定見で、無気力で、無原則的なことばが語られているのは、党組織、党的志操と名誉、党の旗じるしという概念がまだ途方もなく弱いこのロシアにおいてなのだ！

革命的学生にたいして、わが「社会革命党」は、「革命的陣営の内部に存在する派閥的反目をまったく度外視して、一般的政治運動との連帯」を宣言した以前の学生諸大会を模範として示している。「一般的政治」運動とはなんであろうか？　社会主義運動プラス自由主義運動である。この差異を度外視することは、直接の最も手近な運動、すなわち、ほかならぬ自由主義運動の味方になることを意味する。そして、「社会革命党」はまさにそうせよと呼びかけている人々なのだ！　独自の党を自称している人々が、党的な闘争から遠ざかるように呼びかけているのだ！　このことは、この種の党が、自分の政治的商品を自分自身の旗のもとに輸送することができずに、密輸に訴えるほかなくなっていることを、証明するものではないだろうか？　このことから して、この党がそれ自身のなんらの明確な綱領的基盤ももたないことが、明らかになりはしないだろうか？　われわれはこんどはそれを見ることにしよう。

学生と革命についての社会革命党の議論における誤りは、われわれが以上に論証しようと努めてきた非論理性だけでは説明がつかない。ある意味では、その逆のことを主張することができる。すなわち、彼らの議論の非論理性は、彼らの基本的な誤りから生ずるものなのである。「党」としての彼らは、最初から、内的にひどく矛盾した、ひどくあやふやな立場をとってきた。それは、十分に誠実で、十分に政治的にものを考える能力のある人間には、たえずぐらついたりよろめいたりせずにはもちこたえられないような立場である。社会民主党は、「社会革命党」が社会主義の事業にもちこむ害悪を、あれこれの著作家やあれこれの活動家のさまざまな誤りによって説明するのではなく、反対に、これらすべての誤りを、虚偽をふくんだ綱領的・政治的立場の不可避な結果とみなすものであることを、つねに記憶しておく必要がある。学生問題のような問題では、この虚偽はとくにまざまざと現われており、ブルジョア民主主義的な見地と革命的社会主義のきらびやかな衣装とのあいだの矛盾が、一目瞭然となる。じっさい、『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』の綱領的論文、『学生と革命』の思想の道すじをよく見てみたまえ。この筆者は、「青年」の「志向の無私潔白」、その「理想的動機の力」を、第一位においている。まさに彼はこの点に青年の「革新的」な政治的志向の説明を求めているのであって、ロシアの社会生活の現実の諸条件に、すなわち、一方では、きわめて広範できわめて多種多様な住民諸層と専制とのあいだの和解しえない矛盾を生みだし、他方では、大学をつうずる以外の政治的不満の発現を非常に困難にしている（まもなく、困難にしていた、と言わなければならなくなるであろう）現実の諸条件に、求めてはいないのである。

次に筆者は、社会民主主義者が学生の内部のいろいろの政治的グループの差異にたいして自覚した態度をとり、同種の政治的グループをいっそう緊密に結束させ、政治的に異種のグループをたがいに分離させようと試みていることに、食ってかかっている。筆者がこれらの試みのうちのあれこれの試みの誤りを批判したというのではない。これらの試みのすべてが、あらゆる点でつねに成功したと主張するならば、それはこっけいであろう。そうではない。階級利害の相違は、不可避的に政治的グループ分けに反映せずにはおかないということ、学生はそのあらゆる無私、潔白、理想性、等々にもかかわらず、全社会の例外をなすものではないということ、この相違をぼかすのではなく、反対にそれをできるだけ広範な大衆に説明し、それを政治組織に

固定することが社会主義者の任務であるということ、こういう考えそのものはこの筆者にはまったく無縁なのである。筆者はものごとを社会民主主義者の唯物論的見地からではなく、ブルジョア民主主義者の観念論的見地から見ているのである。

だからあの筆者は、臆面もなく、革命的学生にむかって「一般的な政治運動」への呼びかけをかかげ、また繰りかえすのである。彼にあっては、重心はまさに一般的な政治運動に、すなわち、一般民主主義的な運動におかれており、これは単一のものでなければならない。「全学生の組織と並行して」形成されるべき「純然たる革命的サークル」は、この統一性を破壊してはならない。この広範で統一的な民主主義運動の利益という見地からすれば、党のレッテルの「押しつけ」や、同志の知的良心の強制は、もちろん、犯罪的である。ブルジョア民主主義は一八四八年にもまさにこういう見方をしていたのであって、当時ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級利害の矛盾を指摘しようとする試みは、「分離と分裂の狂信者」であるという「全般的な」非難を呼びおこした。ブルジョア民主主義の最新の変種――単一の大民主主義党を渇望し、改良の道、階級協調の道を平和的にすすもうとする日和見主義者と修正主義者も、またまさにこういう見方をしている。彼らはすべて、いつでも「派閥的」反目の敵、「一般的な政治」運動の賛成者であったし、またそうでないわけにはいかないのである。

みられるとおり、社会主義者の見地からみるとこっけいなまでに不合理で矛盾しているエス・エル派の議論は、ブルジョア民主主義的見地からすればまったく当然な、首尾一貫したものとなる。それというのも、社会革命党が本質上ブルジョア民主主義の一分派、すなわち、その構成からいえば主としてインテリゲンツィア的で、その見地からいえば主として小ブルジョア的で、その理論上の旗じるしからいえば――最新の日和見主義と旧時代のナロードニキ主義とを折衷的に結合した一分派にほかならないからである。

ブルジョア民主主義者の口にする統合という美辞麗句にたいする最良の反論となるものは、政治的発展および政治闘争の推移そのものである。ロシアでも現実の運動の成長は、すでにこのような反論にみちびいている。私が念頭においているのは、学生の特殊なグループとしての「学園派」の分離である。真の闘争がなかったあいだは、学園派は「全学生」大衆から分離せず、学生のうちの「ものを考える部分」全体の「統一」は、破壊しえないもののようにおもわれていた。行為に到達するやいなや――異種の分子のあいだの意見の相違は不可避となった。*

＊ 若干の報道を信ずるなら、最近、学生のなかの異種の分子のあいだの意見の相違がますます強まり、すすんでいることが、すなわち、社会主義のことなど聞こうともしない政治的革命家から社会主義者が分離しつつあることが、明らかにみられる。シベリアに流刑された学生のあいだでは、この傾向は非常にはっきりと現われていると言われる。これらの報道が確かかどうか、追って見ることにしよう。

政治運動と専制にたいする直接の攻撃との進歩は、すべての人を結合するというあらゆる空虚な言辞にもかかわらず、政治的グループ分けにおける明確さが前進したことによって、すぐさま表示された。学園派と政治家との分離が大きな一歩前進であるということ――このことを疑うものは、おそらく一人もないであろう。だが、この分離は、社会民主主義的学生が学園派と「手をきる」ことを意味するだろうか？『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』には、そう見えるのだ（第一七号、三ページを見よ）。

だが、同紙にそう見えるのは、われわれがさきに暴露した混乱の結果にすぎない。政治的諸傾向の完全な分界は、けっして労働組合や学生団体の「分断」を意味するものではない。学生のあいだにおける活動を任務とする社会民主主義者は、かならず自分でまたは自分の代理をつうじて、できるだけ多数の、できるだけ広範な「純学生」サークルや学習サークルのなかへはいってゆこうと努力し、たんに学園の自由だけを要求する人々の視野をひろげようと努力し、まだなんらかの綱領をさがしもとめている人々のあいだでほかならぬ社会民主主義の綱領を宣伝しようと努力するであろう。

要約しよう。学生の一部は、明確で全一的な社会主義的世界観を自分につくりあげようと望んでいる。この準備活動の終局目標となりうるものは――革命運動に実践的に参加することを望んでいる学生にとっては――、今日革命家のあいだに形成された二つの傾向のうちの一つを、意識的に、きっぱりと選択することだけである。学生の思想的統合を名として、彼らの革命化一般等々を名として、このような選択に抗議するものは、社会主義的意識をくもらすものであり、実際には無思想性を説くものにほかならない。学生の政治的グループ分けは、全社会の政治的グループ分けを反映しないわけにはいかないし、あらゆる社会主義者の義務は、政治的に異種の諸グループのあいだにできるだけ意識的な、首尾一貫した分界線をもうけるために努力することである。学生にむけられた社会革命党の呼びかけ――「一般的政治運動との連帯を宣言し、革命的陣営内における派閥的反目をまったく度外視せよ」という呼びかけは、その実質上、社会主義的見地からブルジョア民主主義的見地へ後退せよという呼びかけにほかならない。このこ

とにはなにも不思議はない。というのは、「社会革命党」は、たんにロシアにおけるブルジョア民主主義の一分派にすぎないからである。社会民主主義的学生が他のあらゆる傾向の革命家や政治家と手をきることとは、けっして全学生の組織や学習団体の分断を意味するものではない。それどころか、完全に明確な綱領の見地に立ってこそはじめて、きわめて広範な範囲の学生のなかで、学園的な視野をひろげるために、また科学的社会主義すなわちマルクス主義を宣伝するために、活動することができるし、活動しなければならないのである。

追記。こんごの手紙で私は、全一的な世界観をつくりあげるうえでのマルクス主義の意義について、社会民主党と社会革命党との原則上および戦術上の相違について、学生組織の諸問題について、労働者階級一般にたいする学生の関係について、『ストゥデント』の読者と語りあいたいと思う。

一九〇三年九月に新聞『ストゥデント』第二三号に発表
署名――エヌ・レーニン
全集、第五版、第七巻、三四一―三五六ページ所収
邦訳全集、第七巻、三三〇―四四四ページ所収

事項注

(一)　**論文『いわゆる市場問題について』**――レーニンがこれを書いたのは一八九三年秋であるが、彼は当時すでにペテルブルグのマルクス主義者サークル（『老人』という名称の）に所属しており、そのサークルのある会合でゲ・ペ・クラーシンが『市場問題』というテーマで、理論的にまちがった報告をしたので、その誤った理論にたいしてマルクス主義経済学理論を擁護するために、レーニンはこの研究報告をおこなったのである。

この労作の草稿は永久に失われたものと考えられていたが、やっと一九三七年にソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所が見つけだすことに成功した。九

(二)　クラーシンがペテルブルグのマルクス主義者サークルでおこなった研究報告をさす。九

(三)　クラーシンのこと。なおレーニンは、この論文のなかで彼を著者ともよんでいる。九

(四)　дはロシア文字のデ。ドポルネーニエ（追加）の頭文字。一四

(五)　第二〇章、第一〇節、邦訳、大月書店版、五三九ページ。旧ディーツ版、四四二―四四三ページ。以下では、簡単にするため、まず大月書店版の邦訳書のページを示し、ついで「旧（原）」と略記して旧ディーツ版のページを示すことにする。一七

(六)　**ナロードニキ**――一八六〇年代からロシアのインテリゲンツィアのあいだに現われた一つの傾向の社会思想の潮流の人々。「ヴ・ナロード」（「人民のなかへ」）ということを標語としていたので、この名称がある。本質的には農民に依拠する小ブルジョア的潮流に属する。

ロシアに資本主義が発展せず、農民が封建的地主とたたかう闘争がロシアにおける階級闘争の主要なものであった時代には、ナロードニキたちは革命的役割を果たしたが、八〇年代以降ロシアに資本主義が発達し、プロレタリアートが新しい時代の闘争の主要な担い手になると、この一派は、農民の立場を固執してプロレタリアートの解放闘争に同調しない、一種の反動勢力をなすようになった。

レーニンの著述活動は、一八九〇年代には、ロシアで最も有力な反マルクス主義潮流となるにいたったナロードニキ主義の批判に、大きな力がそそがれている。一九、三二

(七)　ここは、『資本論』では「それ」となっており、文脈上では「彼の生産物」、すなわち商品所有者の生産物であるが、レーニンはそこを簡単に「商品」と訳している。以下では翻訳上のこの種の細かなことは一々指摘しない。二七

(八)　第三章、第二節（a）、邦訳、一四一ページ、旧（原）一一一ページ。二七

(九)　**『ヴェーストニク・エヴロープィ』**（『ヨーロッパ通報』）――一八六六年にペテルブルグで創刊された月刊誌。大体においてロシアの自由主義的ブルジョアジーの見解を宣伝し、一八九〇年代の初めからはマルクス主義にたいして組織的な反対闘争をおこなった。二八

(一〇)　**クスターリ**――市場めあての家内生産に従事している手工業的小生産者のこと。クスターリは、西ヨーロッパの古い手工業者と同様、まだ農業から分化しきっていない。二九、二四、三三

(一一)　**プリュシキン**――ゴーゴリの小説『死せる魂』のなかに出

てくる極端なけちん坊の名まえ。三二

(一二) 第一六章、第三節、邦訳、三八七ページ、旧(原)三一六ページ。三三

(一三) ゼムストヴォ統計――ロシアで一八六一年の農民改革後につくられた地方自治機関であるゼムストヴォ(注一八四を参照)の参事会に属する統計機関のおこなった統計調査は、誤った理論に立脚していたとはいえ、科学的分析のために貴重な資料を提供した。レーニンはこれをさまざまな機会にひろく利用している。四七

(一四) 「フートル農民」――フートルとは、ハンガリア語の ba-tar に由来する語で、元来は、所有者の屋敷や庭や農業用建物をふくむ特別の土地のこと。これは、農村共同体が解体してゆくにしたがって形成された、個人的土地所有にもとづく私的所有地である。フートルをもつことができたのは富裕な農民にかぎられていた。四七

(一五) デシャチーナ――ロシア固有の面積の単位。一デシャチーナは一・〇九二ヘクタール。四七、四八

(一六) 著書『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか?』は、一八九四年に書かれた(第一分冊は四月に、第二、第三分冊は夏に脱稿)。レーニンはすでに一八九二―一八九三年に、サマラでこの著書の仕事にとりかかっていた。彼はサマラのマルクス主義者サークルでいろいろの研究報告をおこない、そのなかで、マルクス主義の反対者である自由主義的ナロードニキ――ヴェ・ヴェ・(ヴォロンツォフのこと)、ミハイロフスキー、ユジャコフ、クリヴェンコらにたいして、鋭い批判をくわえた。これらの研究報告は著書『「人民の友」とはなにか』の準備材料となった。

この著述は三分冊に分けて出版された。本選集に収録するのは、その第一分冊と第三分冊である。

第一分冊と第三分冊のこんにゃく版は、一九二三年初めにベルリンのドイツ社会民主党の文書保管所で発見され、またほとんどそれと時を同じくして、レニングラードの公衆図書館でも発見された。第二分冊では、レーニンは自由主義的ナロードニキのエス・エヌ・ユジャコフの経済学上の見解を批判しているが、この分冊はまだ発見されるにいたっていない。五〇

(一七) 『ルースコエ・ボガートストヴォ』(『ロシアの富』)――一八七六年から一九一八年のなかごろまでロシアで出版されていた合法月刊雑誌。一八九〇年代の初めから、自由主義的ナロードニキの機関誌となり、クリヴェンコとミハイロフスキーがその編集にあたった。五〇

(一八) マルクスの経済学説にかんするカウツキーの著書――わが国では『資本論解説』として知られているカウツキーの小著。五三

(一九) 「だれかクロプシュトックをほめたたえないものがあろう?……」ここにレーニンの引用した詩は、ドイツの詩人で批評家ゴットホルト・レッシング(一七二九―一七八一年)のもの。五三

(二〇) マルクス『資本論』、第一巻、第一版序文、邦訳、一〇ページ、旧(原)七―八ページ。五三

(二一) 前掲書、一〇―一一ページ、旧(原)八ページ。五三

(二二) マルクス『経済学批判』、序言、全集、第一三巻、六―七ページ。五六

(二三) 社会契約説――ジャン・ジャック・ルソーのとなえた理論で、一七六二年に刊行された彼の主著の一つ『社会契約論』にのべられている。これは、あらゆる社会体制を、人々のあいだの自由な合意、契約の結果と見る理論で、その根底において観念論的である

が、一八世紀のフランス革命の前夜には大きな革命的役割を果たした。この理論は、ブルジョア的平等の要求を表現するものであり、封建的な身分的特権の廃止とブルジョア共和制の樹立を呼びかけていた。五六

（二四）第一巻、第一三章、第一節、注八九、邦訳、四八七ページ、旧（原）三八九ページ。六二

（二五）『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』編集部へのマルクスの手紙——ミハイロフスキーの論文『ユ・ジュコフスキー氏の審判のまえに立つK・マルクス』に関連して、一八七七年末に書かれた。しかしマルクスはこの手紙を発送しなかった。マルクスの死後、エンゲルスがこの手紙を見つけ、写しをとって在ジュネーヴの労働解放団の一員ヴェラ・ザスーリチに送った。それのロシア語訳は一八八六年に『ヴェーストニク・ナロードノイ・ヴォーリ』第五号に発表された。マルクス＝エンゲルス全集、第一九巻、一一四—一一七ページ所収。六二

（二六）エンゲルス『反デューリング論』、第二篇、第一章、全集、第二〇巻、一五五ページ。六三

（二七）マルクスとエンゲルスが一八四五—一八四六年に書いた歴史哲学的著作——『ドイツ・イデオロギー』（全集、第三巻所収）のこと。ながいあいだドイツ社会民主党の文書保管所に死蔵されていたが、一九三二年にマルクス＝エンゲルス＝レーニン研究所によってはじめて完全な形で発表された。六三

（二八）エンゲルス『フォイエルバッハ論』、選集、第八分冊、四ページ。六三

（二九）選集、第七分冊、四ページ。六四

（三〇）「耳は額よりうえには伸びない」という意味になる mais——mais はフランス語で「しかし」の意味。ロシアの風刺作家シチェードリンの作品からとったことば。どれほどいろいろのことを許そうとも、ある確固たる限界があって、それを越えることは許されない、という意味。六五

（三一）有名な格言——「ロシア人を一皮はげば、ダッタン人が出てくる」という格言。六九

（三二）国際労働者協会（第一インタナショナル）——一八六四年九月にロンドンに創立された国際労働者組織。マルクスとエンゲルスの指導のもとに、諸国の労働者の経済闘争や政治闘争を指導し、彼らの国際連帯性を強化した。プルードン派の無政府主義者やバクーニン主義者、その他の反マルクス主義的潮流と闘争しながら、国際労働運動のなかにマルクス主義思想を普及していった。一八七一年のパリ・コミューンのあと一八七二年にその活動を停止し、七四年に正式に解散した。第一インタナショナルの歴史的意義は、それが「資本にたいする労働者の革命的襲撃の準備のための、労働者の国際組織の基礎をおいた」（レーニン）ことにある。七一、一三三

（三三）パリ・コミューン——一八七〇—七一年の普仏戦争におけるフランスの敗北と関連して武装蜂起したパリの労働者が、屈辱的な政府を倒して打ちたてた新しい自分たちの権力——コミューン（市自治委員会）——のこと。コミューンは二ヵ月あまりの戦いののち打倒されたが、このときコミューンの打ちたてた諸原則は、社会主義の基本原則として、マルクス、エンゲルス、レーニン（『国家と革命』を参照）によってきわめて高く評されている。七二

（三四）『ノーヴォエ・ヴレーミャ』（『新時代』）——一八六八年から一九一七年一〇月までペテルブルグで発行されていた新聞。その編集者はいろいろ変わり、その政治的傾向も幾度となく変わった。

はじめは穏健自由主義的であり、一八七六年からは反動的な貴族および官僚の仲間の機関紙になった。七四

（三五） エンゲルス『家族、私有財産および国家の起原』、序文、選集、第七分冊、二ページ。七六

（三六） 邦訳、一四ページ、旧（原）一一ページ。七七

（三七） 雑誌『独仏年誌』のことで、マルクスとルーゲの編集により、パリでドイツ語で出版された。一八四四年に最初の分冊が出ただけで終わったが、マルクス『ヘーゲル法哲学批判 序説』やエンゲルス『国民経済学批判大綱』その他の、マルクス、エンゲルスの初期の記念すべき労作が掲載された。七八

（三八） マルクス＝エンゲルス全集、第一巻、三八一—三八二ページ。七八

（三九） 『反デューリング論』、第一篇、第一三章「弁証法。否定の否定」のこと。マルクス＝エンゲルス全集、第二〇巻所収。七九

（四〇） 『カール・マルクスの経済学批判の見地』という論評——ペテルブルグ大学教授イ・イ・カウフマンの執筆になるもので、マルクスはこの論評を、弁証法的方法の最良の叙述の一つと評価している。この全文は、わが国の雑誌『経済』、一九六七年五月臨時増刊号（『資本論』発刊一〇〇年を記念して）の二六四—二七一ページに訳出されている。八一

（四一） 邦訳、一九ページ、旧（原）一五ページ。八一

（四二） 邦訳、二〇—二二ページ。旧（原）一五—一七ページ。八三

（四三） マルクスの原文では、「観念的なものは、人間の頭のなかで置きかえられ翻訳された物質的なものにほかならない」（邦訳、二二ページ、旧（原）一八ページ）となっている。八三

（四四） 以下八八ページにいたるまでのエンゲルスからの長い引用文のなかで〔……〕でかこまれている部分は、レーニンが説明のため挿入したものである。八四

（四五） マルクス『資本論』、第一巻、第二四章、第七節、邦訳、九九五ページ、旧（原）八〇三—八〇四ページ。八六

（四六） 第一巻、第一章、第四節、邦訳、一〇五ページ、旧（原）八四ページ。八六

（四七） 第一巻、第二四章、第七節、邦訳、九九三ページ、旧（原）八〇一ページ。八六

（四八） 『資本論』第二版までは、ここはこの訳どおり「集積」となっていた。第三版ではじめて「集中」とあらためられた。エンゲルスが『反デューリング論』を書いたときは、第二版までしか出ていなかったのである。だから、ここに出てくる「集積」はすべて「集中」と読みかえたほうがいい。このほかにも、現行の『資本論』と違う箇所があるが、重大な相違ではないのでいちいち指摘せず、ここでは、レーニンが利用したエンゲルスの文章にあるままに訳しておく。八七

（四九） 第一巻、邦訳、九九四—九九五ページ、旧（原）八〇三ページ。八七

（五〇） エンゲルス『反デューリング論』、全集、第二〇巻、一三五—一四〇ページ。八八

（五一） 『オテーチェストヴェンヌィエ・ザピースキ』（『祖国記録』）——一八二〇年創刊。ベリンスキー、ネクラーソフ、サルトィコフ—シチェードリン、エリセーエフなどがこの雑誌を指導して、その周囲に革命的民主主義的インテリゲンツィアを結集するのに大いに貢献した。九〇

（五二） ポストロンニー某氏——ミハイロフスキーの匿名。ポスト

ロンニーは「局外者」の意味。九〇

(五三) 『共産党宣言』が共産主義者の理論の基準について述べていること——ここでレーニンが念頭においているのは『宣言』のなかの次のことばである。

「共産主義者の理論的命題は、けっしてあれこれの世界改良家が発明または発見した理念や原理をもとにしてはいない。

それは、現におこなわれている階級闘争の、われわれの目前に起こっている歴史的運動の、現実の諸関係を一般的に表現したものにほかならない。」(全集、第四巻、四八八ページ) 九三

(五四) エンゲルス『反デューリング論』、第一篇、第九章、全集、第二〇巻、九六—九七ページを参照。九四

(五五) マルクスにたいするミハイロフスキーの歓迎のことば——ミハイロフスキーの論文『K・マルクスの著書のロシア語版について』(一八七二年)と『ユ・ジュコフスキー氏の審判のまえにたつK・マルクス』(一八七七年)のこと。九六

(五六) アルテリ——種々の経済活動を各人の平等の原則にもとづいておこなうことを目的とする、主として勤労者から成る共同団体=協同組合のこと。九六

(五七) 一八四三年九月、マルクスのルーゲあての手紙、全集、第一巻、三八二ページ。九九

(五八) レーニンはこの論文の第二分冊でこの批判をしたが、既述のように、第二分冊の原稿も印刷されたコピーもまだ発見されてない。一〇〇

(五九) 『ルースカヤ・ムィスリ』(『ロシアの思想』)——一八八〇年から出版されていた自由主義的ナロードニキ的傾向の月刊雑誌。一〇三

(六〇) プレハーノフとそのサークル——一八八三年にジュネーヴでプレハーノフが創設した「労働解放」団のこと。この団体は、ロシア人の最初のマルクス主義的団体で、ロシアにマルクス主義を普及するうえで大きな働きをした。くわしくは注八八を参照。一〇八

(六一) 「人民の意志」派——ナロードニキの一潮流。ロシアにおける初期のナロードニキの革命団体「土地と自由」の分裂によって一八七九年に結成された秘密革命団体。支配階級の個々人にたいするテロリズムを闘争の武器とし、一八八一年三月一日にツァーリ、アレクサンドル二世を暗殺し、その直後ツァーリズムによって破壊された。一一三、一四七

(六二) この題詞はエヌ・ア・ネクラーソフ(一八二一—一八八八年)の詩『ドブロリューボフを追憶して』からとったものである。一一六

(六三) レーニンのこのエンゲルス追悼の論文は、「労働解放」団の編集のもとに、「ロシア社会民主主義者同盟」によって一八九六—九九年に国外で発行された不定期刊行の論集『ラボートニク』(『勤労者』)の一八九六年第一—二号に発表された。一一七

(六四) エンゲルス『ドイツ農民戦争』、一八七〇年版の序文への追記、全集、第一八巻、五〇八ページ。一二〇

(六五) 『独仏年誌』——マルクスがパリでアーノルド・ルーゲと共同で創刊した雑誌で、一八四四年に一冊(合併号)出ただけで終わった。注三七を参照。一二〇

(六六) 「共産主義者同盟」——革命的プロレタリアートの最初の国際的組織で、一八四七年夏、ロンドンでひらかれた革命的プロレタリア諸組織の代表者大会で創立された。マルクスとエンゲルスはこの組織の依頼で『共産党宣言』を執筆した。「共産主義者同盟」

は一八五二年まで存続した。一三〇

(六七)『新ライン新聞』——一八四八年六月一日から一八四九年五月一九日までドイツのケルンで発行されていた。新聞の指導者はマルクスとエンゲルスで、マルクスが編集長であった。一三一

(六八)『ソツィアリ・デモクラート』(『社会民主主義者』)——「労働解放」団が一八九〇—九二年に国外で発行していた政治=文学評論誌。全部で四巻出た。レーニンがここで言っているエンゲルスの論文は、『ロシア・ツァーリズムの対外政策』(全集、第二二巻所収)のことである。一三一

(六九)住宅にかんする連続論文——三篇から成るエンゲルス『住宅問題』のこと。全集、第一八巻、二〇三—二八五ページ所収。一三一

(七〇)ロシアの経済的発達についての二つの小論文——エンゲルスの『亡命者文献』のうち、『五 ロシアの社会状態』と『「ロシアの社会状態」へのあとがき』のこと。全集、第一八巻、五五一—五六三ページ、六七六—六九〇ページ所収。一三一

(七一)『資本論』第四巻——『剰余価値学説史』という別名で知られる全三巻の大著のこと。マルクスは『資本論(経済学批判)』のなかの学説史にかんする部分を、その第四巻として出版する予定であった。一三一

(七二)一八八四年一月一五日付のJ・P・ベッカーあてのエンゲルスの手紙。全集、第三六巻、ドイツ語版、二一八ページ。一三一

(七三)マルクスとエンゲルスは数ヵ所でこの考えを定式化している。たとえば、マルクス『国際労働者協会暫定規約』(全集、第一六巻、一二ページ)、エンゲルス『「共産党宣言」の一八九〇年ドイツ語版への序文』(全集、第四巻、六〇三ページ)を参照。一三一

(七四)一八七〇年の戦争——プロシアとフランスとの戦争。この戦争はプロシアの勝利に帰し、そしてプロシアはこの戦勝の勢いを駆って、ドイツ統一をなしとげた。他方、フランスでは戦敗の結果、ルイ・ボナパルトの帝政が没落して、共和制が復活した。この戦争におけるフランスの敗戦と関連して、パリで労働者と市民の革命闘争が燃えあがり、短期ではあったが、コミューンの形でプロレタリアートの権力が樹立されたことは、有名である。エンゲルスは一八七〇年七月から翌年の二月までのあいだに、多くの戦況時評を書いた。全集、第一七巻所収。なお注三三を参照。一三一

(七五)小冊子『社会民主党綱領草案と解説』——レーニンはこれをペテルブルグの牢獄のなかで、一八九五年末から一八九六年夏にかけて書いた。モスクワのマルクス=レーニン主義研究所の文書保管所には『綱領草案』の三つの写本が保存されている。一九〇〇—一九〇四年の時期のレーニンの私文書のなかに発見された第一の写本は、雑誌『ナウーチノエ・オボズレーニエ』(『科学評論』)一九〇〇年第五号所載の一論文の行間に化学インキで、だれかわからない人の手で書かれている。この写本には標題がない。写本のページにはレーニンの筆跡で鉛筆で通し番号がつけられ、封筒に入れられ、その上にレーニンの手で『綱領旧(一八九五年)草案』と書かれている。第二の写本も同じく一九〇〇—一九〇四年の時期のレーニンの私文書のなかに発見されたものであって、巻タバコ用紙にタイプライターで印刷され、『社会民主党綱領旧(一八九五年)草案』という標題がついている。第三の写本は、こんにゃく版で印刷されたものであって、党の在ジューネーヴ文書保管所で発見された手帳である。この写本は、右の二つの写本とちがって、『綱領草案』だけでなく『綱領の解説』をふくんで、両者はあわさって一つのまとまった著作をなしている。本書に収めらているのは、第三の写本で

ある。一二四

（七六）ゼームスキー・ソボール——本来は、一六世紀中葉から、国政上の重要問題を議するためにツァーリがときおり召集した一種の国民集会のこと。ただしここでは、レーニンはこのロシアの歴史上著名な機関の名を借りて、憲法制定国民議会を意味させている。一三六

（七七）買取賦金——ツァーリは農民の要求におされて、一八六一年に農奴制度を廃止することを余儀なくされたが、しかしそのさい、「農奴制的従属から離脱した農民による買取りにかんする条令」を発布した。この規定により、農民は彼に分与される土地の買取代金として、現実価格よりも数倍高い代金を地主に支払うことをしいられた。土地代金は政府が地主に立替払いし、農民はその代金を四九年年賦で政府に支払うこととされた。しかし一九〇五年の第一次ロシア革命における農民のたたかいの結果、ツァーリ政府は一九〇七年一月から買取賦金を廃止することを余儀なくされた。一三七

（七八）一八六一年に農民から切り取られた土地（「切取地」）——この年の農民改革のさいに、農民に買いとらせた法定の分与地以上の土地は農民から取り上げられて、地主に割りあてられた。これらの土地は大部分いままで用益していたものなので、農民はこれらを「切り取られた土地」あるいは「切取地」とよんだ。一三七、二四七

（七九）連帯保証制——諸種の貨幣支払を期限内に完全に納付し、国家および地主のためのあらゆる種類の義務（租税、買取賦金、徴兵など）を遂行するための、各農村共同体の農民の強制的な集団責任制。農民の隷属化のこの形態は、ロシアでは農奴制度廃止後も維持され、一九〇六年にようやく廃止された。一三七

（八〇）ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所に保存されているこんにゃく版の原文は、ここでとぎれている。〔全集編集者注〕一四六

（八一）小冊子『ロシア社会民主主義者の任務』——一八九七年末にシベリアの流刑地で書かれ、一八九八年にジュネーヴで「労働解放」団によって出版された。一九〇二年に第二版が、一九〇五年に第三版が出た。レーニンはこの二つの版にも序文を書いた（本選集には収録しない）。また一九〇七年に出た論集、ヴラヂーミル・イリイン『一二年間』にもおさめられた。この小冊子はロシアの先進的労働者のあいだにひろく普及した。警察庁の資料によれば、一八九八——一九〇五年にペテルブルグ、モスクワ、スモレンスク、カザン、オリョール、キエフ、ヴィリノ、フェオドシア、イルクーツク、アルハンゲリスク、ソルモヴォ、コヴノ、その他の都市で家宅捜索や逮捕にさいしてこの小冊子が発見されたといわれる。一四七

（八二）「人民の権利」派（党）——一八九三年に旧「人民の意志」派のメンバー（アプテクマン、ボグダノヴィチ、ゲデオノフスキー、ナタンソン、チュッチェフら）が参加して創立した民主主義的インテリゲンツィアの非合法組織。この組織は、政治的改革をめざす闘争のためにすべての反政府勢力の統一をはかることを自己の任務とし、二つの綱領的文書——『緊急問題』と『宣言』——を出した。一八九四年の春にツァーリ政府によって壊滅させられた。「人民の権利」派の大多数はのちに社会革命党（エス・エル）——後出、注一六八を参照——に加入した。一四七

（八三）「人民の意志派グループ」——一八九一年にペテルブルグで成立、「人民の意志」主義から徐々に社会民主主義へ移行した。一八九五年一二月に出された同グループの機関紙『レトゥチー・リストーク』第四号は明らかに社会民主主義の影響をあらわしていた。

このグループはペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」と連絡を確立し、自分の印刷所で「同盟」の若干の出版物、たとえばレーニンの小冊子『工場で労働者から徴収される罰金にかんする法律の説明』を印刷した。また新聞『ラボーチェエ・デーロ』の共同発行について「同盟」と交渉した。一八九六年弾圧を受けて壊滅。グループの個々の成員（クデッリ、メシチェリャコフ、オリミンスキーら）は、のちにロシア社会民主労働党の積極的な活動家となった。一四七

(八四)「在外ロシア社会民主主義者同盟」は、一八九四年にジュネーヴで「労働解放」団の提唱によって創設された。この同盟は自分の印刷所をもち、そこで革命的文献を印刷し、不定期論集『ラボートニク』（『勤労者』）を発行した。一八九八年三月、ロシア社会民主労働党第一回大会は「同盟」を党の在外代表機関と認めた。はじめは「労働解放」団が「同盟」を指導し、その出版物を編集したりしたが、のちには日和見主義分子（「若手組」――「経済主義者」）が「同盟」を牛耳るようになった。一八九八年一一月の第一回「同盟」大会で、「労働解放」団は「同盟」の出版物の編集を拒絶した。一九〇〇年四月の第二回「同盟」大会では終局的な決裂に達し、「労働解放」団は「同盟」から脱退して、独自の組織「社会民主主義者」団を創設した。一九〇三年、ロシア社会民主労働党第二回大会は「同盟」の解散を決議した。一四七

(八五)「労働者階級解放闘争同盟」――一八九五年の秋、レーニンの積極的参加のもとに、ペテルブルグの約二〇のマルクス主義労働者サークルを統合して組織された。「闘争同盟」は中央集権的に組織され、中央グループ（ヴェ・イ・レーニン、ア・ア・ワネーエフ、ペ・カ・ザポロージェツ、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、エヌ・カ・クループスカヤ、エリ・マルトフ、エム・ア・シリヴィン、ヴェ・ヴェ・スタルコフら）の指導のもとに各地区グループに分かれていた。先進的労働者（イ・ヴェ・バーブシキン、ヴェ・ア・シェルグノフら）はこれらのグループを諸工場と結びつけた。工場には情報を収集し文書を配布するオルグがおり、大企業には労働者サークルがつくられた。

「闘争同盟」はロシアではじめて社会主義と労働運動との結合を実現し、先進的労働者の小さなサークルのあいだでのマルクス主義の宣伝から広範なプロレタリア大衆のなかでの政治的扇動へ移行した。「同盟」は労働運動を指導するにあたって経済的要求のための闘争をツァーリズムに反対する政治闘争と結びつけた。「同盟」は労働者向けリーフレットや小冊子を発行し、ストライキ闘争を指導した。「同盟」は影響を全国におよぼし、その提唱によってモスクワ、キエフ、エカテリノスラフその他の都市や州で労働者サークルの統合がおこなわれた。

一八九五年一二月八―九（二〇―二一）日、レーニンをはじめ「同盟」の幹部の大部分がいっせいに逮捕され、発行準備中の新聞『ラボーチェエ・デーロ』が押収された。「同盟」はこの弾圧にこたえて政治的要求を盛ったリーフレットを出し、そのなかで「同盟」の存在をはじめて声明した。レーニンは獄中にあっても「同盟」の指導をつづけ、暗号で書いた手紙を獄外に送って助言をあたえ、またいくつかのリーフレットや論文を書いた。

ペテルブルグ「労働者階級解放闘争同盟」は、労働運動に依拠し、プロレタリアートの解放闘争を指導する革命党の最初の重要な萌芽であった。一四七

(八六) マルクス＝エンゲルス全集、第四巻、五〇六―五〇七ページを参照。一五三

(八七)　アレクサンドル三世の「人民の政治」――アレクサンドル三世の政府の内務大臣エヌ・ペ・イグナチエフは一八八一―一八八二年に、土地買取賦金の引下げ、移住の規整、地方行政の改革などを審議するために、貴族の代表などから成るまやかしの「国民集会」を召集した。しかし失敗してイグナチエフは辞職し、その後ひどい反動の攻勢となった。一五四

(八八)　「労働解放」団――一八八三年にスイスのジュネーヴで創設された最初のロシア人のマルクス主義的グループ。同団の創設者はゲ・ヴェ・プレハーノフで、ほかにペ・ベ・アクセリロード、エリ・ゲ・デイチ、ヴェ・イ・ザスーリチ、ヴェ・エヌ・イグナートフらが参加した。同団はロシア社会民主労働党の第二回大会（一九〇三年）まで存続した。「労働解放」団はマルクス主義の創始者たちの諸著作――マルクス、エンゲルス『共産党宣言』、マルクス『賃労働と資本』、エンゲルス『空想から科学への社会主義の発展』その他――をロシア語に翻訳し、国外で印刷に付し、秘密にロシアにひろめ、ナロードニキ主義に大きな打撃をあたえた。しかし、「労働解放」団にはまたナロードニキ的見解の残存、農民の革命性の過小評価、自由主義ブルジョアジーの役割の過大評価などの重大な誤りもあり、それはプレハーノフその他の団員の後年のメンシェヴィキ的見解の萌芽であった。同団の活動は実践的には労働運動と結びつきがなかったとはいえ、ロシア労働者階級の革命的自覚の確立に大きな役割を果たした。労働解放団は国際労働運動との結びつきを確立し、一八八九年の第二インタナショナル第一回（パリ）大会以来、そのすべての大会でロシアの社会民主主義派を代表した。

労働解放団は一九〇三年のロシア社会民主労働党第二回大会で同団の解消を声明した。一五六

(八九)　ブランキ主義――フランスの革命家、ルイ・オーギュスト・ブランキ（一八〇五―一八八一）に率いられるフランス社会主義運動の一潮流。マルクス＝レーニン主義の創始者たちは、ブランキを疑うべくもない革命家、社会主義の熱烈な味方と見ると同時に、彼のセクト主義と陰謀的な活動方法とを断固として批判した。レーニンは、一九〇六年に論文『大会の決算によせて』のなかで書いている。「ブランキ主義は階級闘争を否認する理論である。ブランキ主義はプロレタリアートの階級闘争によらずに、インテリゲンツィアのわずかな少数者の陰謀によって、賃金奴隷制から人類を救いだそうと期待している。」一五六

(九〇)　バシバズーク――一八―一九世紀のトルコの不正規軍。転じて略奪者、悪党、無頼漢。一五九

(九一)　ロシアにおける革命的実践の巨匠たち――一八七〇年代の「土地と自由」団や一八八〇年代初頭の「人民の意志」団の指導者たちをさす。イ・エヌ・ムィシキン、ア・イ・ジェリャーボフ、エス・エリ・ペロフスカヤ、エス・ヴェ・ハルトゥーリン、ペ・ア・アレクセーエフ、その他。一六〇

(九二)　この労作を書くすこしまえに、レーニンはカウツキーの著書『農業問題』の書評を、雑誌『ナチャーロ』、一八九九年四月号に発表している。全集、第四巻、九九―一〇五ページを参照。一六八

(九三)　『ナチャーロ』（『始まり』）――合法マルクス主義者の月刊の文学・政治雑誌。一八九九年前半から、ストルーヴェ、トゥガン―バラノフスキーその他の編集のもとに、ペテルブルグで発行されていた。この雑誌には、プレハーノフやザスーリチなどの論文も掲載された。同年六月に発行禁止された。一六八

(九四)　以下では簡単を期するため、レーニンがあげたカウツキー

の原書のページのすぐあとに、〔 〕でつつんでこの邦訳のページを示すことにする。

なお特記しないかぎり上巻をさし、下巻にかぎってとくに記すことにする。

なお、レーニンがロシア語に翻訳するにあたってドイツ語で原文を書き入れた箇所は、本邦訳でもドイツ語を入れておく。一七一

(九五) 第三七章、邦訳、七九六ページ、旧(原)六六六ページ。一七六

(九六) レーニンは一八九三年に、ポストニコフの著書『南ロシアの農民経済』について、『農民生活における新しい経済的動向』(全集、第一巻所収)という論文を書いた。これは現在までに見つかっているレーニンの著述のなかで最も初期のものである。

ヴェ・イリインはレーニンが初期に使っていた筆名の一つ。彼の『ロシアにおける資本主義の発展』は、本選集、補巻Iとして発行される。一八四

(九七) レーニン全集、第三巻、一五九―一六一、二四〇―二四一、二七一―二七二ページ。一八八

(九八) **bonanza farms** (大穀物農場) ――北アメリカの(おもに小麦生産を営む)大規模な資本主義的経営で、粗放経営に最新の機械技術を結びつけて応用している。一八九

(九九) エミール・ド・ジラルダンの論文『社会主義と租税』にあてられたマルクスの書評(全集、第七巻、二九八―二九九ページ)を参照。この論文は『新ライン新聞政治経済評論』一八五〇年第四号にのせられたが、この雑誌は『新ライン新聞』の継続であって、一八五〇年にマルクスによって刊行されたものである。一九三

(一〇〇) レーニン全集、第三巻、一四六ページ。一九三

(一〇一) ア・イ・チュプロフやア・エス・ポストニコフの編集のもとに、自由主義的=ブルジョア的およびナロードニキ的傾向の著述家たちによって書かれた二巻本『ロシア国民経済の若干の側面にたいする収穫と穀物価格の影響』にみられる誤りのこと。レーニンは『ロシアにおける資本主義の発展』のなかで、この著書を批判している。一九五

(一〇二) 全集、第三巻、二〇四ページの注を参照。一九六

(一〇三) カウツキーの原文では「商品生産的農業」となっているが、レーニンはロシア語の慣用によって「商業的農業」と訳しているので、それにしたがって訳出した。二〇一

(一〇四) 信託遺贈――大土地所有制における相続制度の一つで、この制度のもとでは、土地所有は全部であると一部であるとをとわず、抵当にいれることも分割することも割譲(売却)することも許されず、被相続者の長男に譲渡される。

一子相続権――信託遺贈の変種で、農民のあいだにおこなわれるものであり、相続される土地所有者の処分について世襲財産制度とくらべてすこしばかりの自由があたえられていた。もっとも、相続権の分割は同じく禁止されていた。二〇三

(一〇五) 『経済学的ロマン主義の特徴づけによせて』、全集、第二巻、二二二ページの注を参照。二〇五

(一〇六) 第三七章、邦訳、八二二ページ、旧(原)六八七ページ。ただし、『資本論』では、「だいたいにおいて」ではなく、「絶対的に」となっている。二〇六

(一〇七) 全集、第三巻、一六ページと五九二ページ。二〇六

(一〇八) 全集、第四巻、六五ページを参照。二一三

(一〇九) レーニンはロシア社会民主労働党第一回大会で党の機関紙として承認された『ラボーチャヤ・ガゼータ』(『労働新聞』)に

発表することを予定して、流刑地で、『われわれの綱領』、『われわれの当面の任務』、『緊要な問題』という三つの論文を書いた。党大会後まもなく印刷所が破壊され中央委員も逮捕されたあと、一八九九年に復刊の計画がたてられたが成功せず、それらの論文は一九二五年になってやっと陽の目を見ることができた。なお本選集でははじめの二つの論文だけ収録してある。

『ラボーチャヤ・ガゼータ』は、はじめキエフの社会民主主義グループの機関誌として、一八九七年八月に創刊され、一二月に第二号が出た。二四

（二〇）ベルンシュタインにたいするプレハーノフの批判――一八九八年七月にドイツ社会民主党の雑誌『ノイエ・ツァイト』（『新時代』）第四四号に発表されたプレハーノフの論文『ベルンシュタインと唯物論』のこと。二五

（二一）ドイツ社会民主党のハノーヴァ大会――一八九九年一〇月九日から一四日にかけておこなわれた。大会は議事日程上の主要な問題――「党の基本的見解と戦術にたいする攻撃」――にかんして、ベルンシュタインの修正主義的見解に反対を表明したが、ベルンシュタイン主義の全面的な批判はおこなわなかった。二五

（二二）『ラボーチャヤ・ムィスリ』（『労働者の思想』）――「経済主義者」の新聞。一八九七年一〇月から一九〇〇年一二月まで、一六号が発行された。カ・エム・タフタリョーフらが編集にあたった。この新聞の傾向は、国際日和見主義のロシア的変種というべきものであった。二六

（二三）労働日の短縮にかんする法律――工業企業と鉄道工場における労働日を一一時間半とさだめた一八九七年六月二（一四）日の法律のこと。この法律が出るまでは、ロシアでは労働日の制限はなく、一労働日は一四時間から一五時間にたっしていた。ツァーリ政府は、ロシアの労働運動の圧力のもとに、この法律を発布したが、それは工場主にさまざまな脱け道を残していた。レーニンは小冊子『新工場法』（全集、第二巻、二六五―三一二ページ）のなかで、この法律のくわしい検討と批判をおこなった。二七

（二四）「ロシア社会民主労働党」の発行した『宣言』――一八九八年三月一―三（一三―一五）日に、ロシア社会民主労働党第一回大会が非合法裏にミンスクでひらかれた。もっとも、その当時、レーニンをはじめとするペテルブルグの「労働者階級解放闘争同盟」の指導者たちは逮捕され流刑されていたため、この第一回党大会は、真の労働者党の創立大会というべきものにはならなかった。集まった者も六組織からの九人にすぎなかった。

それでもなお、この大会の名で中央委員会が出した『ロシア社会民主労働党の宣言』は、政治的自由を獲得するための闘争を首位におき、絶対主義との闘争の必要を強調し、この闘争と、資本主義およびブルジョアジーにたいするその後の闘争とを結びつけて考えており、記念されるべき宣言である。

また大会は党の創立を宣言したが、大会終了後まもなく中央委員会は委員の逮捕によって潰滅した。そして党はレーニンの指導下にのちに一九〇三年に第二回大会で建設しなおされた。今日のソ連邦共産党はそのとき建設されたロシア社会民主労働党の後身である。二八

（二五）マルクス、エンゲルス『共産党宣言』、全集、第四巻、四八四ページ。二九

（二六）レーニンは一八九九年に『ラボーチャヤ・ガゼータ』のために書いた三つの論文の最後のもの――『緊要な問題』――のな

かで、この問題を論じている。全集、第四巻、二三六—二四二ページを参照。三三

(二七) 論文『ストライキについて』——レーニンが流刑地で新聞『ラボーチャヤ・ガゼータ』のために書いたものである。モスクワのマルクス＝レーニン主義研究所の文書保管所には、この論文の第一部しか保存されていない。第二、第三部が書かれたかどうかは不詳である。三三

(二八) エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』、全集、第二巻、四六〇ページ。三六

(二九) 一八九五年のヤロスラヴリのストライキ——その年の四—五月にボリショイ製造所で、新しい賃金表の導入をめぐって起こり、四千人以上の労働者がこれに参加した。ストライキは市に派遣された軍隊によって弾圧され、一人が殺され、一四名が負傷し、一一名が逮捕された。ツァーリ、ニコライ二世はこのことについて、派遣された軍隊に感謝のことばをおくった。三九

(三〇)『イスクラ』(『火花』)——一九〇〇年一二月にレーニンの指導下に創刊された最初の全ロシア的非合法マルクス主義新聞。レーニンはすでにシベリア流刑中に『イスクラ』発刊の構想を練っていたが、刑期を終えたあと、彼は一九〇〇年二月にペテルブルグで労働解放団の参加についてヴェ・イ・ザスーリチらと話し合い、仕事を軌道に乗せた。

『イスクラ』創刊号は一九〇〇年一二月ライプツィヒで、それにつづく諸号はミュンヘンで、一九〇二年四月からはロンドンで、一九〇三年三月からはジュネーヴで出された。編集局はレーニン、プレハーノフ、マルトフ、アクセリロード、ポトレソフ、ザスーリチから構成され、書記ははじめイ・ゲ・スミドーヴィチ-レマン、一九〇一年春からはエヌ・カ・クループスカヤであった。レーニンは事実上この新聞の編集長であり、指導者であった。

革命的マルクス主義者の戦闘的機関紙を発刊することは、当時のロシア社会民主主義者が直面していた最も基本的な課題であった。レーニンの計画にしたがって発刊された『イスクラ』は、社会民主主義派勢力の統合と幹部の教育の中心になった。また各地にイスクラ支持組織が生まれ、『イスクラ』はマルクス主義政党の確立のための闘争、「経済主義者」の粉砕、分散していた社会民主主義サークルの統合で決定的役割を果たした。

『イスクラ』は党綱領草案を作成し、ロシア社会民主労働党第二回大会(一九〇三年七—八月)を準備した。第二回大会当時、ロシア国内の地方の社会民主主義組織の大部分は『イスクラ』に同調し、その戦術、綱領、組織計画を承認し、大会は特別決定で『イスクラ』を党の中央機関紙と宣言した。第二回大会でプレハーノフ、レーニン、マルトフから成る編集局が確認されたが、マルトフは大会の決定に反して編集局入りを拒否し、第四六—五一号はレーニンとプレハーノフの編集のもとに発行された。のちにプレハーノフはメンシェヴィズムの立場に移り、『イスクラ』編集局に、大会で拒否されたメンシェヴィキの旧編集局員を全員復帰させることを要求した。レーニンはこれに同意せず、党中央委員会における自分の立場を強化し、そこからメンシェヴィキと闘争するために、一九〇三年一〇月一九日(一一月一日)『イスクラ』編集局から脱退した。こうして、第五二号以来、メンシェヴィキが『イスクラ』を自分の機関紙にしてしまった。メンシェヴィキの『イスクラ』は一九〇五年一〇月まで続刊されたが、レーニンが脱退したのちは、もはや以前のような人気を労働者階級のあいだで維持することはできなかった。三三、三六

（二一）「ベルンシュタイン主義」——一九世紀末ドイツに発生した、国際社会民主主義運動内の反マルクス主義的潮流。ドイツ社会民主党内の右翼日和見主義的傾向の代表者エドゥアルト・ベルンシュタインの名をもってよばれ、一八九五年のエンゲルスの死後とくにはっきりと現われてきた。同党の左翼はこれと闘争したが、中央委員会は彼とその主義に力づよい反撃をくわえなかった。ドイツ社会民主党の諸大会はベルンシュタイン主義をいちおう非難したが、大多数の幹部の調停主義的態度のために、党はベルンシュタインと手を切らず、彼はその修正主義思想を公然と宣伝しつづけた。レーニンは『ロシア社会民主主義者の抗議』（一八九九年）、『なにをなすべきか？』（一九〇二年）、『マルクス主義と修正主義』（一九〇八年）、『ヨーロッパの労働運動における意見の相違』（一九一〇年）などでベルンシュタインの修正主義をきびしく批判した。二二

（二二）「経済主義」——一九世紀末—二〇世紀初めにおけるロシア社会民主主義派内の日和見主義的潮流、国際日和見主義のロシア的変種。機関紙『ラボーチャヤ・ムィスリ』、機関誌『ラボーチェエ・デーロ』をもつ。「経済主義者」は労働者階級の課題を、賃金引上げ、労働条件改善等の経済闘争に限定し、政治闘争は自由主義的ブルジョアジーの事業であると主張し、労働者階級の政党の指導的役割を否認し、労働運動の自然成長性を賛美して、革命的理論と目的意識性の意義を軽視し、社会主義イデロギーは運動のなかから自然に発生すると主張し、労働運動のなかへ社会主義意識を注入する必要性を否認し、それによってブルジョア・イデオロギーのために道をひらいた。彼らはサークルの分散性と手工業性を擁護し、社会民主主義運動における混乱と動揺を支持し、中央集権的な労働者政党をつくることに反対し労働者階級を階級的・革命的な道からそらせ、彼らをブルジョアジーの政治的付属物に変えようとした。レーニン編集の『イスクラ』は「経済主義」との闘争で大きな役割を演じ、その著『なにをなすべきか？』は「経済主義」を完全に粉砕した。二三、二六

（二三）『クレード』（『信条』）——一八九九年に発表された「経済主義者」の宣言（イェ・デ・クスコヴァ起草）。レーニンは流刑地でこれを知り、『ロシア社会民主主義者の抗議』（全集、第四巻、一八〇—一九四ページ）で『クレード』の全文を引用して、きびしくこれを批判した。「経済主義者」は労働者階級の任務を経済闘争に限定し、政治闘争は自由主義的ブルジョアジーの事業であると主張した。二四

（二四）「労働者階級自己解放団」——「経済主義者」の小グループで、一八九八年秋にペテルブルグに成立し、数ヵ月存続した。同団は、自己の見解を述べた檄文および規約と、労働者にあてたいくつかの宣言を発表した。二四

（二五）『ラボーチェエ・デーロ』（『労働者の事業』）——「経済主義者」の雑誌、「在外ロシア社会民主主義者同盟」（注八四を参照）の不定期の機関誌。一八九九年四月から一九〇二年二月まで全部で一二号（九冊）ジュネーヴで発行された。編集局（クリチェフスキー、テプロフ、イワンシン、のちにマルティノフ）は「経済主義者」の在外センターとなった。ロシア社会民主労働党第二回大会で『ラボーチェエ・デーロ』派は党の日和見主義的最右翼を代表した。二四

（二六）論文『なにから始めるべきか？』——『イスクラ』第四号に論説として掲載され、全ロシア的マルクス主義政党の建設という、当時の最重要問題に答える綱領的文書であった。社会民主主義

派のいくつかの地方組織はこれを単行の小冊子として増刷し、広く配布した。

レーニンがこの論文で提起し、『なにをなすべきか？』（本選集、第二巻所収）で詳細に展開した組織論と戦術論は、ロシアにマルクス主義政党を創設するための日常的実践活動の指針となった。二六八

（二七）『「ラボーチェエ・デーロ」リーフレット』――雑誌『ラボーチェエ・デーロ」の不定期付録。ジュネーヴで、一九〇〇年六月から一九〇一年七月までに全部で八号出た。二六八

（二八）『イスクラ』第一号にわれわれがかかげた綱領――『イスクラ』第一号（一九〇〇年一二月）に論説として掲載されたレーニン自身の論文『われわれの運動の緊要な諸任務』（全集、第四巻、四〇〇―四〇六ページ）をさす。二六九

（二九）二月と三月の諸事件――ペテルブルグ、モスクワ、キエフ、ハリコフ、カザン、ヤロスラヴリ、トムスク、ワルシャワ、ベロストク、オデッサその他多くの都市を巻きこんだ、一九〇一年二―三月の学生と労働者の革命的大衆行動――集会、デモンストレーション、ストライキ――をさす。直接の動機は、キエフ大学の一八三人の学生を学生集会に参加したかどで兵籍に編入したことであった。政府は大衆行動に立ちあがった人々を容赦なく弾圧し、幾百人の学生を逮捕し、放校処分に付した。これらの事件はロシアにおける革命的気運の高まりを立証するものであった。とくに政治的スローガンのもとに労働者が大衆行動に参加したことは、大きな意義をもっていた。二四一

（三〇）印刷準備中の小冊子――『なにをなすべきか？　われわれの運動の焦眉の諸問題』のこと。同書は一九〇二年三月にシュトゥットガルトで出版された。二四一

（三一）論文『ロシア社会民主党の農業綱領』は、『イスクラ』編集局が作成した党綱領草案のうちの、レーニンの執筆にかかわる農業の部にたいする注解として書かれた。

レーニンのこの労作の審議にあたって、『イスクラ』編集局内で重大な意見の相違と論争が生じた。プレハーノフその他の編集局員たちは、レーニンの労作の最も重要な諸命題（プロレタリアートのヘゲモニー、土地国有化、等々）に反対し、マルクス主義の敵にたいする論戦を緩和するように要求した。長い論争ののち、『イスクラ』編集局は、土地国有化を論じていた部分とその他いくつかの箇所を削除した。この労作は一九〇二年八月に雑誌『ザリャー』第四号に、この省略された形で掲載された。レーニン全集では、彼の最初の手稿にしたがって印刷されている。

本論文の終りの追記は、手稿にはなく、『ザリャー』に掲載するさいにつけくわえられたものである。二四五

（三二）『労働者党と農民』――レーニンの執筆した論文で、全集、第四巻、四六〇―四六九ページに収録されている。二四七

（三三）『ザリャー』（『あかつき』）――マルクス主義的学術・政治雑誌。一九〇一―一九〇二年にドイツのシュトゥットガルトで『イスクラ』編集局によって発行された。全部で四号、三冊が発行されただけで終わった。レーニンは同誌に、『農業問題と「マルクス批判家」』の最初の四章（全集、第五巻所収）、『ロシア社会民主労働党の農業綱領』その他の論文を寄稿した。二四七

（三四）この農業綱領をふくむ「ロシア社会民主労働党綱領草案」は、レーニン全集、第六巻、一三―一九ページに収録されている。二四八

（三五）レーニン『労働者党と農民』、全集、第四巻、四六三ペー

ジ。二五〇

（二三六）　カウツキー『農業問題』（一八九九年）のこと。この著書の評価については、本巻所収のレーニンの論文『農業における資本主義』を参照。二五六

（二三七）　ブンターリ——一八七〇年代のロシアの革命団体「ブンターリ」（一揆派）の成員たち。これは、「人民の意志」派の先駆者であった。二五六

（二三八）　デカブリスト——一九世紀初頭の進歩的・革命的愛国主義者の団体で、貴族の子弟や上級の青年将校によって構成されていた。その目的はツァーリズムと農奴制度との暴力的転覆であり、一八二五年一二月一四日にニコライ一世即位の日を期して一揆をおこしたのでこの名がある。二五六

（二三九）　貴族委員会——一八六一年二月一九日の農民改革条令の原案作成のために、一八五七—一八五八年に各県にもうけられた県農民問題委員会のこと。二六一

（二四〇）　レーニン『労働者党と農民』、全集、第四巻、四六五ページ。二六二

（二四一）　ラズノチーネツ——一九世紀中葉のロシアにおける、聖職者、官吏、町人あるいは農民等の雑多な階層の出身者で、貴族には属しない、平民のインテリゲンツィアのこと。二六三、三三三

（二四二）　地役権（セルヴィトゥート）——他人の所有地を利用する権利。この場合レーニンが念頭においているのは、西部辺区における農奴制的関係の残存物である。一八六一年の改革後に、農民は共同の道路、草刈場、牧場、水飼場などを利用する権利の代償として、地主のための追加的な義務負担を負うことを強制された。二六三

（二四三）　ヴァルーエフ委員会——国有財産大臣ペ・ア・ヴァルーエフを長とする「ロシア農業状態調査委員会」。一八七二年から一八七三年のあいだに、この委員会は、農民改革後のロシアにおける農業の状態について膨大な資料を集めた。これらの資料は、『ロシア農業状態調査委員会報告』（ペテルブルグ、一八七三年）として発表された。二六四

（二四四）　パンシチナー——パンは、ポーランドおよび西南ロシア地方で地主とか旦那とかを意味する語。パンシチナは、地主のための賦役を意味する。二六六

（二四五）　オブローモフ——ゴンチャローフの同名の小説の主人公の名で、無為で優柔不断な夢想家の典型。二六六

（二四六）　このパラグラフの後半をレーニンは、『イスクラ』編集局のツューリヒ会議ののちに次のように訂正した。すなわち、最後の一句は削除され、そのまえの句は次のように変えられた。「典型的でない事例は、なんらかの単一の一般的法則によって規定することはできない。それらの解決は地方の委員会（土地の買取りをも交換その他をもおこないうる）の裁量にゆだねられなければならない」。『ザリャー』に掲載されたときにはこのようになっていたが、この訳が底本とした全集、第五版では、レーニンの初めの原稿によって印刷されている。二六八

（二四七）　これはおそらく、「圧制の笞（しもと）が年代を経た伝来の農奴の叫びをことごとく笞でありさえすれば、その笞にたいしてあげる農奴の叫びをことごとく反逆であると宣言する学派」というマルクスのことばを、言いかえたものであろう（『ヘーゲル法哲学批判』、全集、第一巻、四一六—四一七ページを参照）。三三七

（二四八）　『ヴェーストニク・ルースコイ・レヴォリユーツィイ』（『ロシア革命通報』）——一九〇一—一九〇五年に外国（パリージ

ュネーヴ）で発行されていた非合法雑誌で、全部で四号出た。第二号からはエス・エル（注一六八を参照）の理論的機関誌となった。三七二

（二四九）「黒い割替」——上からの地主的な土地改革にたいして、下からの、民衆自身、農民大衆自身による土地改革を意味する、ロシアの農民運動のスローガン。三七三

（二五〇）『ノイエ・ツァイト』（『新時代』）——ドイツ社会民主党の理論雑誌。一八八三年から一九二三年までシュトゥットガルトで発行されていた。一九一七年一〇月以前はカウツキーが、それ以後はクーノーが編集した。マルクス『ゴータ綱領批判』やエンゲルス『エルフルト綱領草案批判』が、彼らの死後に掲載されたりした。またエンゲルスは生前、カウツキーをつうじて編集局に指示をあたえたり誤りを指摘したりした。しかしエンゲルスの死後はしだいに修正主義者たちの論文が数多く掲載されはじめた。そして第一次世界大戦中には、この雑誌は中間派の立場をとり、事実上社会排外主義を支持するにいたった。三七四

（二五一）ナデージヂンの日和見主義的見解の批判にあてられている、本文中の以上の二つの段落は、ツューリヒ会議でこの論文が審議されたあと、『ザリャー』第四号に発表されたさいには、削除された。そのかわりにレーニンはこの注を書いたが、これも当時は発表されなかった。三七五

（二五二）農民司政長——農村地方の一郡を数地区にわけて、その各地区の司法・行政権力をその一身に掌握した官吏で、地元の貴族のうちから任命された。農民司政長制度は一八八九年に従来の治安判事制度に代わるものとして設けられたが、これは一八六一年の農民改革にたいする一連の地主的反動改革の頂点をなすものであって、事実上、農民にたいする地主の無制限の権力を復活したものであった。三七六

（二五三）『モスコフスキエ・ヴェードモスチ』（『モスクワ報知』）——一七五六年に創刊された新聞。一八六〇年代以降は、地主と聖職者の最も反動的な君主主義的層の見解を表現した。一九〇五年以降は黒百人組の主要な機関紙の一つ。一九一七年の十月革命まで出ていた。三七九

（二五四）前掲邦訳書、下巻、三四五ページ。三八〇

（二五五）一九〇二年三月末—四月初めにポルタワ県とハリコフ県で起こった農民運動のことで、これは二〇世紀初頭におけるロシア農民の最初の革命的進出であった。それのきっかけは一九〇一年の不作による農民のひどい困窮であって、主として地主経営の食糧貯蔵と飼糧貯蔵の略奪という形をとった。蜂起は発砲をともなう弾圧によっておしつぶされた。三八三

（二五六）小冊子『貧農に訴える』を準備するにあたってレーニンは、いくつかの異文をつくり、また第一の異文についての個々の注と、小冊子の個々の章のプランとをつくった。レーニンは、一九〇三年三月にプレハーノフにあてた手紙のなかで、小冊子『貧農に訴える』の目的について次のように知らせている。——自分は農民のために農業綱領を説明した大衆的な小冊子を書き、そのなかで農村住民の四つの層（地主、農民ブルジョアジー、中農、半プロレタリア、プロレタリア）にかんする具体的な資料にもとづいて、農村における階級闘争にかんするマルクス主義の思想を説明する、と。

この小冊子には、ロシア社会民主労働党綱領草案のテキストが、レーニンの書いたまえがきとともに付録としてつけられた。この小冊子は非常にひろく普及した。それは国外からロシアに非合法的に

送られ、いろいろの都市にはこばれ、そこからまた農村にひろめられた。一九〇三年五月から一九〇五年一二月までに、この小冊子は三九の都市と一五の県に供給された。それは、非合法の社会民主主義サークルや労働者のサークルで研究され、陸海軍や中等学校生徒および大学生のあいだにもはいっていった。

一九〇四年にこの小冊子は、ロシア社会民主労働党中央委員会によって国外で再版された。

一九〇五年にレーニンは本書を合法的に出版する計画をたて、それは同年末に『農民の要求（貧農に訴える）』という標題で、ペテルブルグの「モーロト」出版社から発行された。その当時すでに第一次ロシア革命が始まっていたので、レーニンはそういう新しい情勢におうじて、いくつかの訂正と追補をおこなった。それらのうち主要なものはレーニン全集、第五版では編集者注として指摘されているので、本訳書でもそれらを巻末の注で訳出することにした。二六四

（一五七）　**ロシア社会民主労働党**――一八九八年にミンスクでひらかれた第一回大会で結成が宣言された。くわしくは前出、注一一四を参照。二六五

（一五八）　一九〇五年の版では、このパラグラフは次のように改められた。「政府はこの党を迫害しているが、党は、あらゆる禁止にもかかわらず、秘密に存在している。いま政府は言論の自由、集会の自由、個人の不可侵を約束したが、この約束は欺瞞であることがわかった。警察はまたもや集会を中止させはじめた。労働者新聞はまたもや閉鎖された。社会民主主義者はまたもや捕えられて獄につながれはじめた。自由の戦士たちはクロンシュタットで、セヴァストーポリで、モスクワで、カフカーズで、南部で、ロシア全土で射撃された」。二六五

（一五九）　ミール――古くから存在したロシアの農村共同体で、農民はミールの内部で種々の制約を受けており、一時的でも村の外部に出るには村長の許可を得なければならなかった。一八六一年の農民改革は古い制約を弱めはしたが、なくしはしなかった。二六六

（一六〇）　レーニンは初版では「国の議会（ドゥーマ）」ということばを使っていたが、一九〇五年にツァーリが偽りの譲歩をして「諮問国会」を認めると言いだしたため、一九〇五年の版ではこの語は、「人民代表会議」とあらためられた。そういう箇所はあとにもいくつかある。二六七

（一六一）　一九〇五年の版では、この句のあとに次の文章が挿入された。

「日本との戦争を宣言したのはだれだったろうか？　それは政府である。人民は、満洲の土地のためにたたかうことを欲するか、と質問を受けたであろうか？　いや、質問を受けなかった。なぜなら、政府の首長は自分の役人をつうじて人民を治めているからである。そして人民は、政府の落度のため苦しい戦争によって零落したのである。何十万の若い兵士が死に、彼らの家族が零落し、ロシアの全艦隊が滅び、ロシア軍は満洲から追いだされた。戦争全体のために、二〇億ルーブリ（二〇億ルーブリ――これは、ロシアの二〇〇〇万家族にたいして一家族あたり一〇〇ルーブリとなる）以上が支出された。満洲の土地は人民には必要でない。人民は戦争を欲しない。だが役人たちの政府は自分の意のままに人民を治め、この恥ずべき、破滅的で破壊的な戦争をやることを強制したのである」。二六九

（一六二）　一九〇五年の版では、この箇所に次の脚注がつけられた。「役人のこのような絶対権は官僚政治とよばれる。役人全体は官

僚なのである」。二六九

（一六四）　一九〇五年の版では、このあとに次の二つのパラグラフが追加された。

「政府は人民の代表を国会に招集すると約束した。だが政府はこの約束によって、人民をもう一度あざむいた。国会という名称で、政府は、本当の人民代表ではなく、選ばれた役人や貴族や地主や商人を招集しようと思っているのである。人民代表は自由に選挙されなければならない。それなのに政府は、自由な選挙をおこなわせず、労働者新聞を閉鎖し、集会や寄合いを禁止し、農民同盟を迫害し、農民代表を捕えて獄につないでいる。警察と農民司政長がまえどおりに労働者と農民をあざけっているのに、どうして本当の自由な選挙がありえようか？

人民代表は、貴族や地主や商人が労働者と農民より有利にならないように、全人民から均等に選出されなければならない。貴族や地主は数千人だが、農民は数百万いる。だが政府は、国会という名称で、平等の選挙がないような集会を招集しているのである。政府がひどく巧妙な選挙をおこなったので、貴族と商人が国会でほとんど全議席を占め、労働者と農民には一〇〇のうちの一議席ですら手にはいらないようになっている。これは偽造された国会である。これは警察の国会である、これは役人と旦那の国会である。人民代表の本当の会議のためには、選挙の完全な自由が必要であり、全人民からの平等の選挙が必要である。労働者の社会民主主義者が、国会を抑制せよ！　偽造された国会を打倒せよ！　われわれに必要なのは、貴族や商人の代表ではなく、全人民の本当の、自由な会議なのだ！　われわれに必要なのは全人民の憲法制定議会であり、役人が人民にたいする権力を持つのではなく、人民が役人にたいする完全な権力をもつようになることだ！　と言明しているのも、このためである」。二七〇

（一六四）　一九〇五年の版では、このあとに次の一句が挿入されている。

「一九〇五年には三〇〇万人の青年男子が社会民主主義者に投票した」。二七一

（一六五）　**農民分与地と私有の土地**——農民分与地は、農民が一八六一年の農民改革によって分与された——高い値段で買い取らされた——土地で、私有の土地は、その後、地主と富農が「自由に」購入して私有にした土地。二七六

（一六六）『レヴォリュツィオンナヤ・ロシア』——エス・エル（注一六八を参照）の新聞。一九〇〇年の終りから一九〇三年まで発行されていた。一九〇二年一月からはエス・エル党の中央機関紙。二七七

（一六七）　**名誉市民**——帝制ロシアで、なにかの功績・学識・技能などにたいして非貴族身分の都市住民にあたえられた称号。世襲のものと終身のものとがあった。名誉市民は公租、身罰刑を免除され、都市の自治行政への参加を許された。二七八

（一六八）　**社会革命党**（エス・エル）——ロシアの小ブルジョア政党。一九〇一年末——一九〇二年初めに、種々のナロードニキ（注六を参照）的グループやサークルが統合して、結成された。エス・エル派は、プロレタリアートと農民との階級的相違がわからず、農民内部の矛盾と階層分化を見ず、革命におけるプロレタリアートの指導的役割を拒否した。

エス・エルは、一般的にいえば、農民社会主義の流派であって、その農業綱領は、土地私有を廃止して、平等の用益の原則にもとづいて共同体が土地を管理すること、および各種の協同組合を発展さ

せることを、予定していた。エス・エルが地主的土地所有の廃止を要求するかぎりでは、彼らはブルジョア民主主義革命で進歩的役割をになうこともできるが、土地の「社会化」と平等用益の主張は彼らの小ブルジョア性を如実に示すものであった。その二面性は一九一七年にブルジョア革命からプロレタリア革命に転化する過程と、十月革命後の社会主義建設の初期に、はっきり現われた。すなわち、一方ではエス・エル右派は臨時政府を構成してプロレタリアートの運動を弾圧する立場をとった。他方、エス・エル左派は、土地国有化と社会化のたたかいではボリシェヴィキと同調したが、社会主義革命が農村にも波及するようになると、露骨な反革命の立場に移行した。三一〇、三二〇

（二六九）　一九〇五年の版では、この箇所は簡単に次のように改められた。

「自覚した農民はみな、人民代表会議の即時の招集という要求に味方しなければならない」。三二六

（二七〇）　一九〇五年の版では、このあとに次の文章が挿入された。

「われわれがすでに述べたことだが、国会は真の人民代表の会議ではなく、官憲のまやかしである。なぜなら、国会への選挙は不平等であり（貴族や商人は農民や労働者より有利なようになっている）、国会への選挙は自由でなく、官憲の笞のもとでおこなわれるからである。国会は人民代表会議ではなく、貴族や商人の官憲に守られた集会である。国会は、人民の自由と選挙による統治を保障するためにではなく、労働者と農民をだまし、彼らをもっとひどく債務奴隷にするために、会合するのである。人民に必要なのは、お仕着せの国会ではなく、差別なくすべての市民によって自由に、そして平等に選挙された、憲法制定議会である」。三二七

（二七一）　分離派（ラスコーリニキ）――ラスコール派の人々。ラスコールは、一七世紀と一八世紀前半に教会改革に反対して正教教会から分離した諸宗派の総称である。なお、それ以後に分離した新しい諸宗派は、これと区別して、「異宗派」（セクタントストヴォ）とよばれる。三三一

（二七二）　小冊子『ロシアにおける労働者の事業』――エリ・マルトフの筆になり、一八九九年にジュネーヴで刊行された。一九〇三年には第二版が同じくジュネーヴで、革命的ロシア社会民主主義連盟によって刊行された。三三三

（二七三）　農民約定証文――一八六一年の農民改革にもとづく農民「解放」のさいに、地主が作成した書類。この文書には、改革以前に農民が用益していた土地の大きさと、「解放」によって農民の手に残される土地と補助用益地の大きさが指定されていた。またこのなかには農奴的農民が以前に地主のためにはたしていた義務負担が列挙されている。農民の買取賦金の額は農民約定証文にもとづいてさだめられた。三三七

（二七四）　「乞食」分与地（または四分の一分与地）――一八六一年の農民改革の実行にあたって、以前の農奴的農民の一部は、当該地方における農民分与地のいわゆる「最高」あるいは「法定」基準量とされた面積の四分の一をただで（買取りなしに）地主から受け取って、のこりの土地を放棄させられた。四分の一分与地はまた「贈与」分与地とよばれ、そういう分与地を受け取った農民は「贈与地農民」（ダールストヴェンニク）とよばれた。だが農民はこれを「乞食」分与地とよんだ。三三七

（二七五）　一九〇五年の版では、「切取地を取りかえすため」のあとに、「および地主からすべての土地を取り上げるため」という句が

追加された。三三五

(一七六) 一九〇五年の版では、このあとの一句が次のように改められた。

「土地と工場の私有の廃止と、社会主義社会の組織化」。三三五

(一七七) 一九〇五年の版では、このあとに次の一文が挿入された。

「すべての土地を地主から取り上げ、自分で耕す人にだけそれを均等に引き渡すのだ」。三三七

(一七八) 一九〇五年の版では、このあとに次の文章が挿入された。

「農民委員会はすべての土地を地主から取り上げる権利をもたなければならない。人民代表は、人民の土地をどうしたらよいかを定めるであろう。だがわれわれは社会主義社会を完全に実現するように努めなければならない。そして、貨幣の力、資本の力が保たれているあいだは、土地をどんなに均等に分配したところで、人民を貧困から解放しはしないことを、忘れないようにしなければならない」。三三八

(一七九) 本訳書には綱領草案は収録しない。三三八

(一八〇) 『エルフルト綱領』――ドイツ社会民主党が一八九一年にエルフルトでひらいた大会で採択した綱領。マルクスが徹底的に批判した一八七五年の『ゴータ綱領』に代わるものであって、起草者カウツキーはその草案をエンゲルスに見せて、批判をあおいだ。なお、レーニンが言っているのは、カウツキーが大会終了後に出版した同名の解説書のことである。三四七

(一八一) 『革命的青年の任務。第一の手紙』――新聞『ストゥデント』編集局の依頼によって書かれ、一九〇三年九月に同紙の第二―三号に発表された。これはまた、『学生に訴える。革命的青年の任務(社会民主主義とインテリゲンツィア)』という標題で、謄写版刷りのパンフレットとしても発行された。

レーニンはこの問題で一連の「手紙」を書く計画をもっていたが、「第一の手紙」以外のものは書かれなかったらしい。三四九

(一八二) 『オスヴォボジデーニエ』(『解放』)――自由主義的=君主主義的ブルジョアジーの隔週刊雑誌。一九〇二―一九〇五年のあいだ、ペ・ベ・ストルーヴェの編集で国外で発行されていた。この雑誌に結集していた一派は、のちにロシアにおける主要なブルジョア党――カデット党――の主要な中核となった。三四九

(一八三) 『ストゥデント』(『学生』)――革命的学生の新聞。三号だけ――第一号は一九〇三年四月に、第二―三合併号は九月に――出た。三四九

(一八四) ゼムストヴォ――一八六四年に設けられたロシアの地方自治体。郡および県の二段階がある。ゼムストヴォの設置は、クリミア戦争の敗北後の社会的憤激と革命的攻撃の圧力によってツァーリズムが余儀なくされたブルジョア的改革の一つであり、わずかな譲歩によって穏健な自由主義者を買収することを目的としていた。郡ゼムストヴォの選挙は各身分別におこなわれ、選挙人は一定の財産資格を必要とし、農民については間接選挙制となっていた。ゼムストヴォの執行機関はゼムストヴォ参事会で、その議長には郡または県の貴族会長が就任した。こうして、ゼムストヴォは圧倒的に地主貴族の影響下に立ち、勤労農民はなんの役割も演じていなかった。三五三

(一八五) モスクワにおける最初のマルクス主義組織であるモスクワ「労働同盟」が学生にあてた、(一八九六年一一月三(一五)日づけの呼びかけのこと。三五六

人名注

（括弧内でゴシック体になっているものは本名を示す）

アクセリロード、ペ・ペ（一八五〇―一九二八）――メンシェヴィキの指導者のひとり。一八七〇年代にはナロードニキ、一九〇〇年から『イスクラ』、『ザリャー』編集局員。ロシア社会民主労働党第二回大会のとき以来、一貫してレーニンに反対する立場をとった。

アードラー、ヴィクトル（一八五二―一九一八）――オーストリア社会民主党の創立者で指導者、修正主義者。オーストリア・マルクス主義の代表者。

アレクサンドル三世（一八四五―一八九四）――ツァーリ（在位一八八一―一八九四年）。

ヴィッテ、エス・ユ（一八四九―一九一五）――帝政ロシアの政治家。蔵相として財政改革（金本位制の採用、保護関税の強化、ウォトカの専売制）や鉄道敷設などによって資本主義の発展を促進した。一九〇五年に日露講和会議の全権、のち首相となり、若干の譲歩と国会の招集によって革命の終熄をはかった。

ヴェ・ヴェ　→ヴォロンツォフ、ヴェ・ペ

ヴォロンツォフ、ヴェ・ペ（ヴェ・ヴェ）（一八四七―一九一八）――一八八〇―九〇年代の自由主義的ナロードニキ主義の主要な理論家のひとり、マルクス主義の激しい敵。

ウスペンスキー、ゲ・イ（一八四〇―一九〇二年）――ナロードニキの作家、農民改革後の時代の風俗の描写に専念した。

エルモロフ、ア・エス（一八四六―一九一七）――農務大臣（一八九二―一九〇五）、一九〇五年に参議院議員。

エンゲリガルト、ア・エヌ（一八三二―一八九三）――ナロードニキ派の政論家。その社会的・農学者活動と、スモレンスク県バチシェヴォの自分の農場に合理的経営を組織しようとした実験とで有名。

エンゲルス、フリードリヒ（一八二〇―一八九五）

オーエン、ロバート（一七七一―一八五八）――イギリスの空想的社会主義者。イギリスの協同組合運動の父、労働日の法律的制限を提唱し、自分の工場で実践した。

オボレンスキー公、イ・エム――ヘルソンおよびハリコフの県知事。一九〇一年と一九〇二年に人民の運動を弾圧した。

カウツキー、カール（一八五四―一九三八）――第二インタナショナルおよびドイツ社会民主党の指導的理論家。一九世紀末―二〇世紀初めにベルンシュタインの修正主義にたいしてマルクス主義の「正統」を守ったが、のちに日和見主義者。第一次大戦中は中央派。十月革命後はソヴェト権力の激しい敵。

カブルーコフ、エヌ・ア（一八四九―一九一九）――ナロードニキの経済学者、ゼムストヴォ統計家。モスクワ大学教授。

ガルヴァーニ、ルイジ（一七三七―一七九八）――イタリアの解剖学者で生理学者。ガルヴァーニ現象の発見者。

クラーシン、ゲ・ペ――不詳。

クリヴェンコ、エス・エヌ（一八四七―一九〇七）――ナロードニキ派の政論家。『ルースコエ・ボガートストヴォ』の寄稿家。

ケーニヒ、F――ドイツの経済学者、『イギリス農業の状態』（一八九六―不詳）の著者。

ケルガー、カール――ドイツの経済学者。

ザスーリチ、ヴェ・イ（ヴェリカ）（一八四九―一九一九）――はじめナロードニキ、のちに社会民主主義運動の著名な活動家。一八八三年労働解放団に参加。マルクス、エンゲルスの著作のロシア語訳に従事。しかし政治的にはメンシェヴィキの線を歩んだ。

シクロフスキー、イ・ヴェ（一八六五―一九三五）――自由主義的ナロードニキ。シベリアに流刑され、のちイギリスに亡命。

ジュコフスキー、ユ・ゲ（一八二二―一九〇七）――俗流ブルジョア経済学者、政論家。マルクスにたいする誹謗的論文『カール・マルクスと彼の資本についての著書』の筆者。

スクヴォルツォフ、ア・イ（一八四八―一九一四）――ブルジョア経済学者。ノヴォ・アレクサンドル農業専門学校の教授。

ストルーヴェ、ペ・ベ（一八七〇―一九四四）――一八九〇年代には「合法マルクス主義」の著名な代表者。のちにブルジョア的な立憲民主党の指導者。

スペンサー、ハーバート（一八二〇―一九〇三）――イギリスの哲学者、社会学者、実証主義者。いわゆる社会有機体説の創始者。資本主義を弁護し、社会主義に反対した。

ゼーリング、マックス（一八五七―一九三九）――ドイツの経済学者。いわゆる「収穫逓減の法則」を唱え、大土地所有者と富農の利益を擁護した。

ゾンバルト、ヴェルナー（一八六三―一九四一）――ドイツの経済学者。近代資本主義の発生および発展の問題について多くの著作がある。最も典型的なブルジョア的マルクス批判家のひとり。

ダーヴィット、エドゥアルト（一八六三―一九三〇）――ドイツの経済学者、社会民主党員、国会議員、ベルンシュタイン主義者。第一次大戦中は社会排外主義者。一九一九―一九二〇年、内相。

ダーウィン、チャールズ（一八〇九―一八八二）――イギリスの自然科学者。その諸労作（主著『種の起原』一八五九年）において、自然淘汰と適者生存による動植物の種の発展の学説を基礎づけた。

ダニエルソン、エヌ・エフ（一八四四―一九一八）――経済学者。一八八〇―九〇年代の自由主義的ナロードニキの最も著名な代表者のひとり。しかしマルクスの『資本論』第一巻の最初のロシア語訳に努力した。

チェルノフ、ヴェ・エム（一八七六―一九五二）――エス・エル。一八九三年に「人民の権利」党員として政治活動を始め、のちにエス・エル党中央委員となる。マルクスの理論は農業に適用されないと主張した。

ヂオネオ　↓シクロフスキー・イ・ヴェ

デューリング、オイゲン（一八三三―一九〇二）――ドイツの経済学者、哲学者、マルクスと科学的社会主義の猛烈な反対者。独自の「社会共同体理論」をつくろうと試みた。

トヴェルスコイ、ペ・ア――ロシアの地主。アメリカに移住し、『ヴェーストニク・エヴローピィ』に寄稿した。

トゥガン－バラノフスキー、エム・イ（一八六五―一九一九）――はじめ「合法」マルクス主義者、のちにカデット党員。十月革命後はウクライナで反革命に従事、一時白系のウクライナ中央ラーダ政府の蔵相。

ナデージヂン、エリ（ゼーレンスキー、イェ・オ）（一八七七―一九〇五）――はじめナロードニキ、一八九八年以後社会民主主義者。一九〇一年にスイスで「スヴォボーダ」団を組織した。第二回党大会後はメンシェヴィキの雑誌に寄稿した。

ニコライ二世（ロマノフ）（一八六八―一九一八）――ロシア最

後のツァーリ（在位一八九四―一九一七）。

ニコライ―オン　→ダニエルソン、エヌ・エフ

バウアー、エドガー（一八二〇―一八八六）――ブルーノの弟。いくどか政治的立場を変えた。

バウアー、ブルーノ（一八〇九―一八八二）――青年ヘーゲル派のひとり、ブルジョア急進主義者。

パルヴス（ゲリファント、ア・エリ）（一八六九―一九二四）――一八九〇年代末からロシアおよびドイツの社会民主主義運動に参加、メンシェヴィキ。第一次大戦中は排外主義者、ドイツ帝国主義の手先。

フォイエルバッハ、ルードヴィヒ（一八〇四―一八七二）――ドイツ近代のすぐれた哲学者。急進的なヘーゲル派の立場から唯物論に到達し、マルクスとエンゲルスに大きな影響をあたえた。しかし弁証法を理解しなかった。

フォルマル、ゲオルク（一八五〇―一九二二）――ドイツの社会民主主義者、日和見主義者、党の右翼指導者のひとり。

ブルガコフ、エス・エヌ（一八七一―一九四四）――ブルジョア経済学者、観念論哲学者。一八九〇年代には「合法マルクス主義者」、のちカデット。一九二二年に反革命活動のため国外に追放された。

プルードン、ピエール－ジョゼフ（一八〇九―一八六五）――フランスの小ブルジョア社会主義者。無政府主義の理論的創始者のひとり。

プレーコン、ペ・ペ（一八四一―一九二六）――反動的政論家。社会思想のあらゆる進歩的潮流の代表者たちにたいする悪意ある中傷に従事した。

プレハーノフ、ゲ・ヴェ（ベリトフ、エヌ）（一八五六―一九一八）――ロシアにおける最初のマルクス主義宣伝家、レーニン以前におけるもっとも主要な理論家のひとり、「労働解放団」の創立者。『イスクラ』編集局員。一九〇三年の第二回大会後はメンシェヴィキ、第一次大戦中は祖国防衛派。十月革命には否定的であったが、反ソヴェト的な行動はとらなかった。

プロコポーヴィチ、エス・エヌ（一八七一―一九五五）――極右派の「経済主義者」。一九〇六年にはカデット党中央委員。二月革命後はブルジョア臨時政府の食糧相。十月革命後、国外に亡命。

ブロス、ヴィルヘルム（一八四九―一九二七）――ドイツの社会民主主義者、改良主義者、歴史家。

ヘーゲル、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ（一七七〇―一八三一）――ドイツの大哲学者、客観的観念論者。弁証法を深く研究し、全面的に仕上げた。

ベルヂャーエフ、エヌ・ア（一八七四―一九四八）――哲学評論家。はじめ自由主義の立場からナロードニキに反対し、ついでマルクス主義の攻撃に従事、神秘主義の立場に移った。

ヘルツ、フリードリヒ・オットー（一八七八―不詳）――オーストリアの経済学者、社会民主主義者、農業問題におけるマルクス「批判家」。

ベルンシュタイン、エドゥアルト（一八五〇―一九三二）――ドイツ社会民主党および第二インタナショナルの極端な日和見主義的一翼の指導者。一八九〇年代末にマルクス主義理論にたいする全面的な日和見主義的修正に乗りだした。

ポストニコフ、ヴェ・イェ（一八四四―一九〇八）――経済学者、統計家。著書『南部ロシアの農民経済』のなかで、農民の階層分化

の事実を指摘した。

マルクス、カール（一八一八—一八八三）

マルトィノフ、ア（ピケル、ア・エス）（一八六五—一九三五）——「経済主義者」、メンシェヴィキ、のち共産党員。第一次大戦中は中央派。二月革命後、国際派メンシェヴィキ。十月革命後、メンシェヴィキから離れた。一九二四年以後コミンテルンで活動した。

ミハイロフスキー、エヌ・カ（一八四二—一九〇四）——自由主義的ナロードニキ主義の理論家、実証論者、社会学の主観主義学派の代表者のひとり。マルクス主義の敵。

モルガン、ルイス・ヘンリー（一八一八—一八八一）——アメリカの人種学者、社会学者。アメリカ・インディアンの社会体制の研究に専心し、原始社会観に変革をもたらした諸労作を書いた。

ユジャコフ、エス・エヌ（一八四九—一九一〇）——スラヴ主義および民族主義の色合いをもつ、ナロードニキ主義の政論家。

ラヴローフ、ペ・エリ（ミルトフ）（一八二三—一九〇〇）——一八六〇—七〇年代の革命的ナロードニキの著名な代表者、第一インタナショナルの会員。長期にわたって社会主義思想の宣伝・教育をおこなうために「人民のなかへ」行く必要を主張し、即時蜂起を主張するバクーニン派と対立した。

リープクネヒト、ヴィルヘルム（一八二六—一九〇〇）——ドイツおよび国際労働運動の著名な活動家、ドイツ社会民主党の創立者で指導者。

ルクセンブルク、ローザ（一八七一—一九一九）——ポーランド生まれの婦人革命家、経済学者、ドイツ社会民主党左派の指導者。第一次大戦中は国際主義者、スパルタクス団を組織した。ドイツ共産党の創立者のひとり。ドイツ革命に活躍中、白色テロルに倒れた。

ルーゲ、アーノルド（一八〇二—一八八〇）——ドイツの急進主義者。左翼ヘーゲル主義者。一八四〇年代にマルクスとともに『独仏年誌』を発行。

ルソー、ジャン-ジャック（一七一二—一七七八）——フランスの哲学者。フランス大革命前の時期における革命的小ブルジョアジーの最も有力な思想的代表者。

（一六）ここには計算上の誤りが見いだされる。第三年度にまわされる第二部門の不変資本は 1602c ではなく 1600c でなければならず、したがって第二部門の資本家の個人的消費にあてられる剰余価値は 702m ではなく 704m となる。これに対応して、第三年度以降の数字にも訂正が加えられなければならない。しかし計算上の誤りは問題の本質になんの影響もない。一五

（一七）次ページの表にはいくつかの数字上の誤りがある。第一に、レーニンが「消費資料のための生産手段」としてあげている数値のなかには、第一部門で蓄積される生産手段がふくまれている。その欄の数値は、正しくは、第一年度から順次に、1500, 1550, 1602（レーニンの計算による——注（一六）を参照）、1634 でなければならず、したがって増加指数は、第一年度を 100 として、第二年度以下は 103.3, 106.8, 108.9 となる。

また、さきのレーニンの計算によると、第四年度の「消費資料」は $3,172\frac{1}{2}$,「社会的総生産物」は 10,830 でなければならない。一五

大月書店